

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第148集

市道遺跡Ⅲ
辻遺跡
儘田遺跡Ⅱ
西裏遺跡

沖積地に営まれた古墳時代から中世の集落址調査

2008.3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会

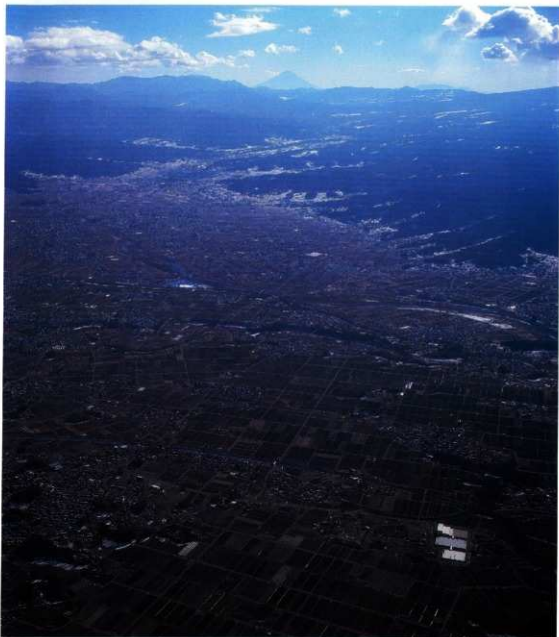
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第148集

市道遺跡Ⅲ
辻 遺 跡
儘田遺跡Ⅱ
西裏遺跡

沖積地に営まれた古墳時代から中世の集落址調査

2008.3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会



北方より佐久平を望む

中央部に流れるのが千曲川、写真上部中央にそびえるのが富士山である。右側からせり出しているのは蓼科山麓の山裾である。国道18号より分かれ佐久平を南北に貫き山梨に至るのが今回の調査対象道跡である国道141号である。近世には佐久甲州街道とも呼ばれた。



今回の調査においては古墳時代住居址を中心にカマドの残存状況が良い資料に恵まれた。特に煙道部が崩れずにトンネル状に検出された遺構があった。写真は煙道部の断ち割り写真であり、カマド火床部より水平に煙道が掘られ地表より垂直に掘られたピットと交わる。この垂直の穴は煙道部よりも深く掘り込まれており、煙道部への雨水流入防止などが考えられる。ピット内に落ち込んだ状態で出土した大型甕と円礫は煙り出し部の構築材であろう。

また、下の完備状態の写真からカマド火床部を除けば被熱し赤化しているのは燃焼部と煙道部の側面及び天井部のみで、特に煙道部は側面下部や底面はほとんど被熱の痕跡が確認できない。このことから煙道部底面の焼土は天井や側面の崩落土であり構築時の姿ではない事がわかる。





市道遺跡Ⅲ H54号住居址（南壁に張り出しピットを持つ）



市道遺跡Ⅲ H54号住居址カマド（煙道部が方形に掘り込まれている）



腰帯金具『丸鞆』 116-21



刀装具『鞘金具』 110-15



『袋伏鉄拵』 110-14



『袋伏鉄拵』 1119-5

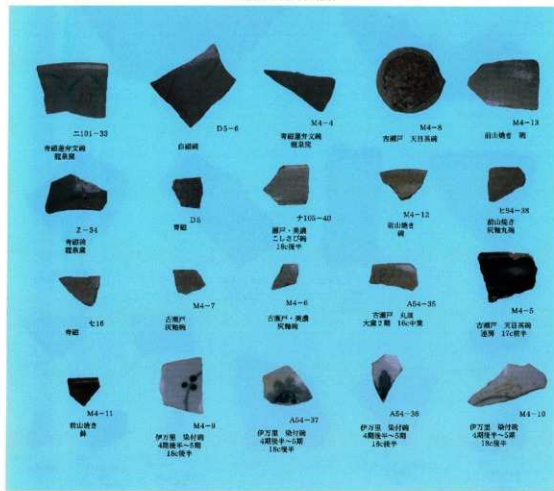


『二重の有規式円頭風字硯』 115-5

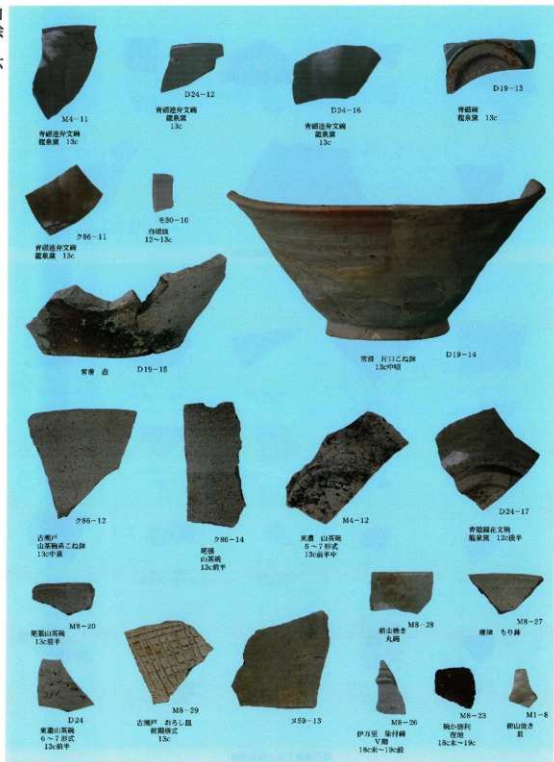
横田遺跡Ⅱ出土遺物



市道遺跡Ⅰ出土陶磁器類



市道遺跡Ⅱ出土陶磁器類



辻遺跡出土陶磁器類

例 言

1. 本書は、佐久建設事務所が行う国道141号改良工事に伴う市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・備田遺跡Ⅱ・西裏遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 佐久建設事務所
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び所在地

三千東遺跡群	市道遺跡Ⅲ	(I MⅢ) 佐久市勝部字市道
中道遺跡群	辻遺跡	(NT J) 佐久市野沢字辻
備田遺跡Ⅱ		(MaⅡ) 佐久市野沢字備田
西裏遺跡群	西裏遺跡	(HNU) 佐久市本新町字西浦
5. 調査期間及び面積

発掘調査	平成16年9月9日～平成17年12月1日
整理作業	平成17年12月2日～平成20年3月19日
開発面積	約38,000㎡
調査面積	11,081㎡
市道遺跡Ⅲ	5,195㎡
辻遺跡	2,911㎡
備田遺跡Ⅱ	2,319㎡
西裏遺跡	656㎡
6. 本遺跡の航空写真・出土遺物の鑑定・保存処理・実測等の委託は以下の通りである。

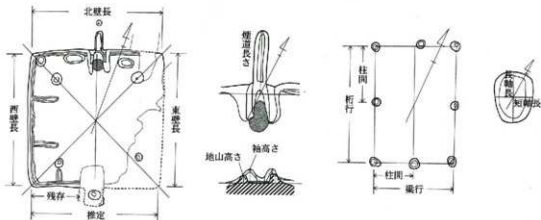
航空写真撮影	日本空間情報技術 株式会社
金属製品保存処理	株式会社 東都文化財研究所
樹種・種子鑑定	株式会社 バレオ・ラボ
獣骨鑑定	株式会社 バレオ・ラボ
7. 調査区と担当者は以下の通りである。

市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・備田遺跡Ⅱ	富沢一明	佐々木宗昭
西裏遺跡	出澤 力	
市道遺跡Ⅲ(平成17年度分)	富沢一明	出澤 力 佐々木宗昭
8. 本遺跡の整理作業は富沢と佐々木が行った。また、石材鑑定は羽毛田、縄文土器については小林が分類を行った。原稿は文頭か文末に文責を記載した。その他記載のないものは編集・執筆を富沢が行った。
 なお、陶磁器類は(財)長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に、石製模造品は(財)長野県埋蔵文化財センター 桜井秀雄氏に、縄文土器は北相木村考古博物館 藤森英二氏に、風字塚については國學院大学教授 吉田恵二氏にそれぞれご教示頂いた。記して感謝申し上げます。
9. 調査から報告書作成に至る過程で以下の方々並びに各機関のご指導・ご協力を頂いた。御芳名を記して厚く御礼申し上げます。(順不同・敬称略)
 (財)長野県埋蔵文化財センター 長野県考古学会 佐久考古学会 地元勝部・野沢・本新町区の皆さん
 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 巽 淳一郎 川越 俊一 小林 謙一 平野 修
 飯島 哲也 風間 栄一 内堀 団 直井 雅尚
10. 本書及び市道Ⅲ・辻・備田Ⅱ・西裏遺跡からの出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡例

4 遺跡は各章立てにより記載したが凡例は以下をもって共通とする。

1. 遺構の略記号は、住居址 (H)・孤立柱建物址 (F)・土坑 (D)・溝状遺構 (M)・竪穴状遺構 (Ta) 特殊遺構 (T) である。
2. 挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
 竪穴住居址・孤立柱建物址 1/80 カマド 1/40 土坑 1/80
 土器 1/4 石器 1/4・1/3 金属製品・土製品 1/2 石製模造品 1/1
3. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
4. 土厨・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
6. 調査区グリッドは各遺跡での区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
7. 住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、火床部は面積に含め計測してある。
8. 遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。
9. 各遺構の計測は下の凡例に従った。



10. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。その他の指定については本文中で個々に示す。



11. 出土遺物の観察表は下記項目で記載した。

土器・土製品

No.	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
		口径	底径	器高	外面	内面		

石器・鉄製品・石製模造品

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置

①Noは遺構平面図での出土位置及び写真版番号と一致する。

②出土位置の数値は床面より何cm浮いていたかを示す。Zは検出時の表探を示す。

③出土位置の区割りは住居址を四分割して北東角のマスよりI区で時計と逆周りでIV区までとする。

④器形の名称「ワン」については「輪」「埴」「碗」の各字があり、陶磁器種別により使い分けがあるが、本報告書では「碗」で統一使用する。

目次

巻頭カラー図版

例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	
第1節 自然的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 基本層序	7
第4節 検出遺構と遺物の概要	8
第Ⅲ章 市道遺跡Ⅲ	
第1節 竪穴住居址	11
第2節 掘立柱建物址	131
第3節 土坑	147
第4節 竪穴状遺構	161
第5節 溝状遺構	165
第6節 ビット群	167
第7節 遺構外出土遺物	178
写真図版	181
第Ⅳ章 辻遺跡	
第1節 竪穴住居址	285
第2節 掘立柱建物址	318
第3節 土坑	324
第4節 溝状遺構	331
第5節 特殊遺構	337
第6節 ビット群	341
第7節 遺構外出土遺物	347
写真図版	349
第Ⅴ章 儘田遺跡Ⅱ	
第1節 竪穴住居址	391
第2節 掘立柱建物址	422
第3節 土坑	428
第4節 特殊遺構	441
第5節 溝状遺構	441
第6節 ビット群	448
第7節 遺構外出土遺物	454
写真図版	457
第Ⅵ章 西裏遺跡	
第1節 竪穴住居址	449
第2節 掘立柱建物址	501
第3節 土坑	502
写真図版	503

付編 化学分析

1. 土器内面付着物の材質分析	509	4. 樹種同定	517
2. 種子鑑定	512	5. 放射性炭素年代測定	522
3. 獣骨鑑定	513		

挿図目次

第1図	市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・徳田遺跡Ⅱ・西裏遺跡位置図 (1:100,000)	1
第2図	周辺の遺跡位置図	6
第3図	基本層序模式図	7
第4図	市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・徳田遺跡Ⅱ・西裏遺跡調査全体図(折り込み) 《市道遺跡Ⅲ》	9・10
第5図	H1号住居址実測図	12
第6図	H1号住居址カマド及び出土遺物実測図	13
第7図	H1号住居址出土遺物実測図	14
第8図	H2号住居址実測図	15
第9図	H2号住居址カマド及び出土遺物実測図	16
第10図	H2号住居址出土遺物実測図	17
第11図	H3号住居址及び出土遺物実測図	18
第12図	H4号住居址及び出土遺物実測図	20
第13図	H5号住居址及び出土遺物実測図	21
第14図	H6号住居址及び出土遺物実測図	22
第15図	H7号住居址実測図	23
第16図	H7号出土遺物実測図	24
第17図	H8号住居址実測図	25
第18図	H8号住居址カマド及び出土遺物実測図	26
第19図	H8号住居址出土遺物実測図	28
第20図	H9号住居址実測図	29
第21図	H9号住居址カマド及び出土遺物実測図	30
第22図	H9号住居址出土遺物実測図	31
第23図	H10号住居址及び出土遺物実測図	33
第24図	H11号住居址及び出土遺物実測図	34
第25図	H12号住居址及び出土遺物実測図	36
第26図	H13号住居址実測図	36
第27図	H14号住居址及び出土遺物実測図	37
第28図	H15号住居址及び出土遺物実測図	38
第29図	H15号住居址出土遺物実測図	39
第30図	H16号住居址及び出土遺物実測図	41
第31図	H17号住居址及び出土遺物実測図	42
第32図	H18号住居址及び出土遺物実測図	43
第33図	H19号住居址実測図	45
第34図	H19号住居址出土遺物実測図	46
第35図	H19号住居址出土遺物実測図	47
第36図	H20号住居址及び出土遺物実測図	48
第37図	H21・22号住居址及び出土遺物実測図	49
第38図	H23号住居址及び出土遺物実測図	50
第39図	H24号住居址及び出土遺物実測図	51
第40図	H25号住居址及び出土遺物実測図	51
第41図	H26号住居址及び出土遺物実測図	52
第42図	H27号住居址実測図	54
第43図	H27号住居址出土遺物実測図	55
第44図	H28号住居址実測図	56
第45図	H29号住居址及び出土遺物実測図	57
第46図	H30号住居址及び出土遺物実測図	58
第47図	H31号住居址及び出土遺物実測図	60
第48図	H32号住居址実測図	61
第49図	H32号住居址出土遺物実測図	62
第50図	H33号住居址及び出土遺物実測図	63

第51図	H34号住居址及び出土遺物実測図	65
第52図	H35号住居址及び出土遺物実測図	66
第53図	H36号住居址及び出土遺物実測図	68
第54図	H37号住居址実測図	69
第55図	H37号住居址出土遺物実測図	70
第56図	H38号住居址及び出土遺物実測図	72
第57図	H39号住居址実測図	73
第58図	H39号住居址出土遺物実測図	74
第59図	H40号住居址実測図	75
第60図	H40号住居址出土遺物実測図	76
第61図	H41号住居址及び出土遺物実測図	78
第62図	H42号住居址実測図	78
第63図	H43号住居址出土遺物実測図	79
第64図	H43号住居址出土遺物実測図	80
第65図	H43号住居址実測図(折り込み)	81・82
第66図	H44号住居址及び出土遺物実測図	84
第67図	H45号住居址出土遺物実測図	85
第68図	H45号住居址実測図	86
第69図	H46号住居址実測図	88
第70図	H46号住居址出土遺物実測図	89
第71図	H47号住居址出土遺物実測図	90
第72図	H47号住居址実測図(折り込み)	91・92
第73図	H48号住居址及び出土遺物実測図	95
第74図	H49号住居址及び出土遺物実測図	96
第75図	H50号住居及び出土遺物実測図	98
第76図	H51号住居址カマド実測図	99
第77図	H51号住居址実測図	100
第78図	H51号住居址出土遺物実測図	101
第79図	H51号住居址出土遺物実測図	102
第80図	H52号住居址実測図	105
第81図	H52号住居址出土遺物実測図	106
第82図	H53号住居址カマド及び出土遺物実測図	107
第83図	H53号住居址実測図	108
第84図	H54号住居址実測図	110
第85図	H54号住居址カマド実測図	111
第86図	H54号住居址出土遺物実測図	112
第87図	H54号住居址出土遺物実測図	113
第88図	H55号住居址実測図	115
第89図	H55号住居址出土遺物実測図	116
第90図	H55号住居址出土遺物実測図	117
第91図	H56号住居址出土遺物実測図	118
第92図	H56号住居址実測図	119
第93図	H57号住居址実測図	121
第94図	H57号住居址出土遺物実測図	122
第95図	H57号住居址出土遺物実測図	123
第96図	H58号住居址実測図	126
第97図	H58号住居址カマド及び出土遺物実測図	127
第98図	H58号住居址出土遺物実測図	128
第99図	H59号住居址及び出土遺物実測図	129
第100図	H60号住居址及び出土遺物実測図	130
第101図	F 1号掘立柱建物址実測図	131
第102図	F 2・3号掘立柱建物址実測図	132
第103図	F 4号掘立柱建物址実測図	133
第104図	F 7号掘立柱建物址実測図	134
第105図	F 8号掘立柱建物址実測図	135
第106図	F 11・14号掘立柱建物址実測図	136
第107図	F 12号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	137
第108図	F 13号掘立柱建物址実測図	138

第109図	F15～17・19号掘立柱建物址実測図	140
第110図	F18・21・25・27号掘立柱建物址実測図	142
第111図	F22・23・24・26号掘立柱建物址実測図	144
第112図	1～3号柱列址及び出土遺物実測図	146
第113図	D1～15号土坑実測図	149
第114図	D16～25号土坑実測図	150
第115図	D26～40・42号土坑実測図	153
第116図	D41・43・45・47～57号土坑実測図	154
第117図	D1・8・9・15・24・31・37～39・41・48号土坑出土遺物実測図	158
第118図	D40・42号土坑出土遺物実測図	159
第119図	Ta1・20～23号竪穴状遺構実測図	161
第120図	Ta24・25号竪穴状遺構及び出土遺物実測図	163
第121図	M21～24号溝状遺構及びM23号溝状遺構出土遺物実測図	166
第122図	ピット実測図(1)	167
第123図	ピット実測図(2)	168
第124図	ピット実測図(3)	169
第125図	ピット実測図(4)	170
第126図	ピット実測図(5)及び出土遺物実測図	171
第127図	ピット実測図(6)	172
第128図	遺構外出土遺物実測図(1)	178
第129図	遺構外出土遺物実測図(2)	180
	《辻遺跡》	
第130図	H1号住居址及び出土遺物実測図	285
第131図	H2号住居址及び出土遺物実測図	287
第132図	H3号住居址実測図	288
第133図	H3号出土遺物実測図	289
第134図	H4号住居址及び出土遺物実測図	290
第135図	H5号住居址及び出土遺物実測図	291
第136図	H6号住居址及び出土遺物実測図	293
第137図	H7号住居址実測図	294
第138図	H7号住居址出土遺物実測図	295
第139図	H8号住居址及び出土遺物実測図	296
第140図	H9号住居址及び出土遺物実測図	297
第141図	H10号住居址及び出土遺物実測図	299
第142図	H11号住居址及び出土遺物実測図	300
第143図	H12号住居址及び出土遺物実測図	301
第144図	H13号住居址実測図	302
第145図	H14号住居址及び出土遺物実測図	303
第146図	H14号住居址出土遺物実測図	304
第147図	H15号住居址及び出土遺物実測図	305
第148図	H16号住居址及び出土遺物実測図	306
第149図	H17号住居址実測図	307
第150図	H18号住居址及び出土遺物実測図	308
第151図	H19号住居址及び出土遺物実測図	308
第152図	H20号住居址及び出土遺物実測図	309
第153図	H21号住居址及び出土遺物実測図	310
第154図	H22号住居址実測図	311
第155図	H23号住居址及び出土遺物	311
第156図	H24号住居址及び出土遺物実測図	313
第157図	H25号住居址及び出土遺物実測図	314
第158図	H26号住居址及び出土遺物実測図	315
第159図	H27号住居址及び出土遺物実測図	316
第160図	H28号住居址及び出土遺物実測図	317
第161図	F1～3号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	319
第162図	F4・5・7～9号掘立柱建物址実測図	321
第163図	F6・10～12号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	323
第164図	D2～11・13～15号土坑実測図	325
第165図	D16・17・19～21・23～27・31・32号土坑実測図	327

第166図	D28～30号土坑実測図及び出土遺物実測図	329
第167図	M1～3・6・7・9号溝状遺構実測図	332
第168図	M4・5・8号溝状遺構実測図	334
第169図	M1・3～6・8・9号溝状遺構出土遺物実測図	335
第170図	T1～3・5号特殊遺構及び出土遺物実測図	338
第171図	T4号特殊遺構及び出土遺物実測図	339
第172図	ビット実測図(1)	340
第173図	ビット実測図(2)	341
第174図	ビット実測図(3)	342
第175図	ビット実測図(4)	343
第176図	ビット実測図(5)	344
第177図	遺構外出土遺物実測図(1)	347
第178図	遺構外出土遺物実測図(2) 《盛田遺跡Ⅱ》	348
第179図	H1号住居址及び出土遺物実測図	391
第180図	H2号住居址及び出土遺物実測図	392
第181図	H3号住居址及び出土遺物実測図	393
第182図	H5号住居址及び出土遺物実測図	394
第183図	H6号住居址実測図	395
第184図	H6号住居址出土遺物実測図	396
第185図	H7・8号住居址及び出土遺物実測図	398
第186図	H9号住居址実測図	399
第187図	H9号住居址カマド実測図	400
第188図	H9号住居址出土遺物実測図	401
第189図	H10号住居址及び出土遺物実測図	402
第190図	H11号住居址及び出土遺物実測図	403
第191図	H12号住居址実測図	404
第192図	H12号住居址カマド及び出土遺物実測図	405
第193図	H13号住居址実測図(折り込み)	407・408
第194図	H13号住居址出土遺物実測図(1)	409
第195図	H13号住居址出土遺物実測図(2)	410
第196図	H14号住居址実測図	412
第197図	H14号住居址出土遺物実測図	413
第198図	H15号住居址実測図	414
第199図	H16号住居址及び出土遺物実測図	416
第200図	H17号住居址及び出土遺物実測図	417
第201図	H18号住居址実測図	418
第202図	H19号住居址及び出土遺物実測図	419
第203図	H20号住居址実測図	420
第204図	H20号住居址出土遺物実測図	421
第205図	F1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	422
第206図	F3・5号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	423
第207図	F4・6号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	424
第208図	F7・8号掘立柱建物址、1・2号柱列址及び出土遺物実測図	426
第209図	D1・2・4～6・8～15・17・19号土坑実測図	429
第210図	D16・20～31号土坑実測図	431
第211図	D33・36・39・42～53号土坑実測図	434
第212図	D54～63号土坑実測図	436
第213図	土坑出土遺物実測図(1)	437
第214図	土坑出土遺物実測図(2)	438
第215図	T1号特殊遺構及び出土遺物実測図	441
第216図	M1・2・6・7号溝状遺構実測図	442
第217図	M4号溝状遺構及び出土遺物実測図	444
第218図	M5号溝状遺構及び出土遺物実測図	445
第219図	M8号溝状遺構及び出土遺物実測図	446
第220図	ビット出土遺物実測図	447
第221図	ビット実測図(1)	448
第222図	ビット実測図(2)	449

第223図	ビット実測図(3)	450
第224図	ビット実測図(4)	451
第225図	遺構外出土遺物実測図(1)	454
第226図	遺構外出土遺物実測図(2) 《西裏遺跡》	455
第227図	H1号住居址及び出土遺物実測図	499
第228図	H2号住居址及び出土遺物実測図	500
第229図	F1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	501
第230図	土坑及び遺構外出土遺物実測図 《化学分析及び調査結果》	502
付編図1	赤外吸収スペクトル図(上段) および蛍光X線スペクトル図(下段)	511
付編図1	暦年校正結果	524

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	5		
第2表	検出土遺構一覧表 《市道遺跡Ⅲ》	8		
第3表	H1号住居址出土遺物観察表	11	第44表	H45号住居址出土遺物観察表 87
第4表	H2号住居址出土遺物観察表	17	第45表	H46号住居址出土遺物観察表 87
第5表	H3号住居址出土遺物観察表	19	第46表	H47号住居址出土遺物観察表 93
第6表	H4号住居址出土遺物観察表	19	第47表	H48号住居址出土遺物観察表 94
第7表	H5号住居址出土遺物観察表	19	第48表	H49号住居址出土遺物観察表 97
第8表	H6号住居址出土遺物観察表	21	第49表	H50号住居址出土遺物観察表 97
第9表	H7号住居址出土遺物観察表	25	第50表	H51号住居址出土遺物観察表 103
第10表	H8号住居址出土遺物観察表	27	第51表	H52号住居址出土遺物観察表 104
第11表	H9号住居址出土遺物観察表	32	第52表	H53号住居址出土遺物観察表 109
第12表	H10号住居址出土遺物観察表	32	第53表	H54号住居址出土遺物観察表 113
第13表	H11号住居址出土遺物観察表	35	第54表	H54号住居址出土遺物観察表 114
第14表	H12号住居址出土遺物観察表	37	第55表	H55号住居址出土遺物観察表 117
第15表	H14号住居址出土遺物観察表	38	第56表	H56号住居址出土遺物観察表 120
第16表	H15号住居址出土遺物観察表	39	第57表	H57号住居址出土遺物観察表 123
第17表	H16号住居址出土遺物観察表	40	第58表	H57号住居址出土遺物観察表 124
第18表	H17号住居址出土遺物観察表	42	第59表	H58号住居址出土遺物観察表 125
第19表	H18号住居址出土遺物観察表	44	第60表	H59号住居址出土遺物観察表 129
第20表	H19号住居址出土遺物観察表	46	第61表	H60号住居址出土遺物観察表 130
第21表	H20号住居址出土遺物観察表	48	第62表	掘立柱建物址及び 柱列出土遺物観察表 145
第22表	H21号住居址出土遺物観察表	49	第63表	土坑出土遺物観察表 160
第23表	H22号住居址出土遺物観察表	49	第64表	竪穴状遺構出土遺物観察表 162
第24表	H23号住居址出土遺物観察表	50	第65表	溝状遺構出土遺物観察表 165
第25表	H24号住居址出土遺物観察表	51	第66表	ビット出土遺物観察表 167
第26表	H25号住居址出土遺物観察表	52	第67表	ビット計測表(1) 173
第27表	H26号住居址出土遺物観察表	52	第68表	ビット計測表(2) 174
第28表	H27号住居址出土遺物観察表	53	第69表	ビット計測表(3) 175
第29表	H29号住居址出土遺物観察表	56	第70表	ビット計測表(4) 176
第30表	H30号住居址出土遺物観察表	59	第71表	ビット計測表(5) 177
第31表	H31号住居址出土遺物観察表	59	第72表	ビット計測表(6) 178
第32表	H32号住居址出土遺物観察表	61	第73表	遺構外出土遺物観察表 179
第33表	H33号住居址出土遺物観察表	64		《辻遺跡》
第34表	H34号住居址出土遺物観察表	66	第74表	H1号住居址出土遺物観察表 285
第35表	H35号住居址出土遺物観察表	67	第75表	H2号住居址出土遺物観察表 286
第36表	H36号住居址出土遺物観察表	67	第76表	H3号住居址出土遺物観察表 290
第37表	H37号住居址出土遺物観察表	71	第77表	H4号住居址出土遺物観察表 291
第38表	H38号住居址出土遺物観察表	71	第78表	H5号住居址出土遺物観察表 292
第39表	H39号住居址出土遺物観察表	73	第79表	H6号住居址出土遺物観察表 292
第40表	H40号住居址出土遺物観察表	77	第80表	H7号住居址出土遺物観察表 294
第41表	H41号住居址出土遺物観察表	77	第81表	H8号住居址出土遺物観察表 296
第42表	H43号住居址出土遺物観察表	83	第82表	H9号住居址出土遺物観察表 297
第43表	H44号住居址出土遺物観察表	85		

第83表	H10号住居址出土遺物観察表	298	第119表	H16号住居址出土遺物観察表	415
第84表	H11号住居址出土遺物観察表	300	第120表	H17号住居址出土遺物観察表	418
第85表	H12号住居址出土遺物観察表	302	第121表	H119号住居址出土遺物観察表	420
第86表	H14号住居址出土遺物観察表	304	第122表	H20号住居址出土遺物観察表	421
第87表	H15号住居址出土遺物観察表	305	第123表	掘立柱建物址及び 柱列出土遺物観察表	427
第88表	H16号住居址出土遺物観察表	307	第124表	十坑出土遺物観察表	440
第89表	H18号住居址出土遺物観察表	307	第125表	T1号特殊遺構出土遺物観察表	441
第90表	H19号住居址出土遺物観察表	309	第126表	M4号溝状遺構出土遺物観察表	443
第91表	H20号住居址出土遺物観察表	310	第127表	M5号溝状遺構出土遺物観察表	445
第92表	H21号住居址出土遺物観察表	310	第128表	M8号溝状遺構出土遺物観察表	447
第93表	H23号住居址出土遺物観察表	312	第129表	ビット出土遺物観察表	447
第94表	H24号住居址出土遺物観察表	312	第130表	ビット計測表(1)	452
第95表	H25号住居址出土遺物観察表	314	第131表	ビット計測表(2)	453
第96表	H26号住居址出土遺物観察表	315	第132表	ビット計測表(3)	454
第97表	H27号住居址出土遺物観察表	316	第133表	遺構外出土遺物観察表	456
第98表	H28号住居址出土遺物観察表	317		《西裏遺跡》	
第99表	掘立柱建物址出土遺物観察表	318	第134表	H1号住居址出土遺物観察表	499
第100表	十坑出土遺物観察表	330	第135表	H2号住居址出土遺物観察表	501
第101表	溝状遺構出土遺物観察表	336	第136表	F1号掘立柱建物址 出土遺物観察表	502
第102表	特殊遺構出土遺物観察表	340	第137表	土坑及び遺構外出土遺物観察表	502
第103表	ビット計測表(1)	345		《化学分析》	
第104表	ビット計測表(2)	346	付編表1	生漆の位置とその強度	509
第105表	遺構外出土遺物観察表(1)	347	付編表2	土器内面付着物の化学組成 (F P法による半定量分析結果)	510
第106表	遺構外出土遺物観察表(2)	348	付編表1	市道遺跡Ⅲ検出動物遺体	513
	《徳田遺跡Ⅱ》		付編表2	市道遺跡Ⅲ検出ウマの 全歯高計測値	513
第107表	H1号住居址出土遺物観察表	391	付編表1	市道遺跡Ⅲの竪六住居跡 出土炭化材樹種同定結果	519
第108表	H2号住居址出土遺物観察表	392	付編表2	住居跡ごとの検出樹種集計	520
第109表	H3号住居址出土遺物観察表	393	付編表1	測定資料及び処理	522
第110表	H5号住居址出土遺物観察表	394	付編表2	放射性炭素年代測定及び 暦年校正の結果	523
第111表	H6号住居址出土遺物観察表	397			
第112表	H7号住居址出土遺物観察表	397			
第113表	H9号住居址出土遺物観察表	399			
第114表	H10号住居址出土遺物観察表	402			
第115表	H11号住居址出土遺物観察表	403			
第116表	H12号住居址出土遺物観察表	406			
第117表	H13号住居址出土遺物観察表	411			
第118表	H14号住居址出土遺物観察表	414			

図版目次

	《市道遺跡Ⅲ》	181
図版一	航空写真	182
図版二	市道遺跡近景	183
図版三	H1号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	184
図版四	H2号住居址全景・掘り方全景	185
図版五	H2号住居址カマド及び遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方・遺物出土状況・カマド構築材	186
図版六	H3号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方	187
図版七	H4号住居址全景・掘り方全景・カマド全景 H5号住居址全景 H6号住居址全景	188
図版八	H7号住居址全景・掘り方・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方	189
図版九	H9号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方	190
図版十	H8号住居址遺物出土状況・住居址全景・掘り方・カマド脇遺物出土状況 市道遺跡Ⅲ調査風景（南から）	191
図版十一	H8号住居址カマド全景・カマド全景・カマド掘り方・カマド構築材・埋喪出土状況	192
図版十二	H10号住居址全景・掘り方全景・カマド全景 H12号住居址全景・掘り方全景	

図版十三	H11号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	193
	H13号住居址全景・遺物出土状況	
図版十四	H14号住居址全景・掘り方全景	194
図版十五	H14号住居址カマド全景・カマド掘り方	195
	H15号住居址掘り方全景・カマド全景・住居址全景	
図版十六	H16号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方全景	196
	H17号住居址全景	
	H18号住居址全景	
図版十七	H19号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	197
図版十八	H20号住居址全景・掘り方全景	198
	H21号住居址全景・掘り方全景	
図版十九	H22号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況	199
	H24号住居址遺物出土状況・住居址全景	
図版二十	H23号住居址全景・掘り方全景	200
図版二十一	H25号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	201
	H26号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	
図版二十二	H27号住居址全景・掘り方全景・炭化物出土状況・遺物出土状況	202
図版二十三	H27号住居址カマド全景・カマド掘り方全景 カマド煙道断ち割り状況（覆土堆積状況）	203
図版二十四	H29号住居址全景・掘り方全景・No.1・2カマド全景・No.2カマド掘り方全景	204
図版二十五	H30号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方・掘り方全景	205
	H28号住居址全景	
図版二十六	H31号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況	206
	H32号住居址遺物出土状況	
図版二十七	H32号住居址全景・掘り方全景	207
	H33号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況	
図版二十八	H34号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況	208
	H35号住居址全景	
	H36号住居址遺物出土状況	
図版二十九	H40号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	209
図版三十	H37号住居址全景・カマド全景	210
	H38号住居址全景	
	H39号住居址カマド全景・住居址全景	
図版三十一	H39号住居址掘り方全景・遺物出土状況	211
図版三十二	H41号住居址全景・遺物出土状況	212
	H42号住居址全景	
	H43号住居址全景	
図版三十三	H43号住居址No.1カマド全景・掘り方全景・No.2カマド全景	213
	H44号住居址カマド全景・カマド掘り方全景	
図版三十四	H45号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方全景・遺物出土状況	214
	H47号住居址遺物出土状況	
図版三十五	H47号住居址全景・掘り方	215
図版三十六	H46号住居址全景・掘り方全景	216
図版三十七	H46号住居址カマド全景・カマド煙道部・カマド煙道確認状況・カマド掘り方・ カマド断ち割り状況・礫出土状況・遺物出土状況	217
図版三十八	H48号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	218
	H49号住居址全景・カマド全景	
	H50号住居址全景・掘り方全景	
図版三十九	H52号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・カマド袖検出状況・カマド掘り方全景	219
図版四十	H51号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況・カマド掘り方全景	220
図版四十一	H51号住居址炭化材検出状況・炭化材堆積状況	221
図版四十二	H53号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況	222
図版四十三	H54号住居址全景・掘り方全景	223
図版四十四	H54号住居址カマド全景・遺物出土状況・焼土検出状況	224
図版四十五	H54号住居址カマド掘り方全景・カマド煙道完掘状況・入り口張り出しビット 遺物出土状況	225
図版四十六	H55号住居址全景・遺物出土状況・掘り方全景	226
図版四十七	H56号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	227

図版四十八	H57号住居址全景(拡張後)・住居址全景(拡張前)	228
図版四十九	H57号住居址掘り方全景・プラン確認状況・カマド全景・遺物出土状況 入り口張り出しビット	229
図版五十	H58号住居址全景・掘り方全景	230
図版五十一	H58号住居址カマド周辺遺物出土状況・カマド全景・カマド構築材検出状況 カマド掘り方全景・遺物出土状況	231
図版五十二	H59号住居址全景・掘り方検出状況 H60号住居址全景・掘り方全景 市道遺跡Ⅲ調査区全景(中央部から南部分を北より望む)	232
図版五十三	F1・2号掘立柱建物址全景	233
図版五十四	F3・4号掘立柱建物址全景	234
図版五十五	F7・8号掘立柱建物址全景	235
図版五十六	F12・13号掘立柱建物址全景	236
図版五十七	F12・13号掘立柱建物址全景(南より跡部交差点を望む) F14・15号掘立柱建物址全景 3号柱列址全景 F21号掘立柱建物址全景	237
図版五十八	F11・15号掘立柱建物址全景	238
図版五十九	D1・2・4・5・6・7・8・9号土坑	239
図版六十	D10・12・13・14・15・16・18号土坑 D15号土坑遺物出土状況	240
図版六十一	D20・21・22・23・24・25号土坑 D24号土坑セクション D25号土坑獣骨検出状況	241
図版六十二	D26・27・28・29・30・31・32・33号土坑	242
図版六十三	D34・35・36・39・40・41・43号土坑 D39号土坑遺物出土状況	243
図版六十四	D42・45・48・49・50・51・52号土坑 D42号土坑遺物出土状況	244
図版六十五	D53・54・56・57号土坑 市道遺跡Ⅲ(跡部交差点より南を望む)	245
図版六十六	Ta1・20・21・22・23・24・25号竪穴状遺構 Ta23号竪穴状遺構遺物出土状況 M21・23号溝状遺構	246
図版六十七	M21・23号溝状遺構	247
図版六十八	市道遺跡ⅢH1・2号住居址出土遺物	248
図版六十九	市道遺跡ⅢH2・3・4・5号住居址出土遺物	249
図版七十	市道遺跡ⅢH4・5・6・7・8号住居址出土遺物	250
図版七十一	市道遺跡ⅢH7・8号住居址出土遺物	251
図版七十二	市道遺跡ⅢH8・9号住居址出土遺物	252
図版七十三	市道遺跡ⅢH9・10・11・14・15号住居址出土遺物	253
図版七十四	市道遺跡ⅢH15・16号住居址出土遺物	254
図版七十五	市道遺跡ⅢH16・17・18・19号住居址出土遺物	255
図版七十六	市道遺跡ⅢH19・20・21・22・23号住居址出土遺物	256
図版七十七	市道遺跡ⅢH24・25・26・27・29号住居址出土遺物	257
図版七十八	市道遺跡ⅢH27・29・30・31号住居址出土遺物	258
図版七十九	市道遺跡ⅢH32・33・34号住居址出土遺物	259
図版八十	市道遺跡ⅢH34・35・36・37号住居址出土遺物	260
図版八十一	市道遺跡ⅢH37・38・39・40号住居址出土遺物	261
図版八十二	市道遺跡ⅢH39・40・41・43・44・45号住居址出土遺物	262
図版八十三	市道遺跡ⅢH45・46・47号住居址出土遺物	263
図版八十四	市道遺跡ⅢH47・48・49号住居址出土遺物	264
図版八十五	市道遺跡ⅢH50・51号住居址出土遺物	265
図版八十六	市道遺跡ⅢH51・52号住居址出土遺物	266
図版八十七	市道遺跡ⅢH52・53・54・55号住居址出土遺物	267
図版八十八	市道遺跡ⅢH54・55号住居址出土遺物	268
図版八十九	市道遺跡ⅢH55・56・57号住居址出土遺物	269
図版九十	市道遺跡ⅢH57・58号住居址出土遺物	270
図版九十一	市道遺跡ⅢH58・60号住居址出土遺物及びD1・8・15・37・38号土坑出土遺物	271

図版九十二	市道遺跡Ⅲ土坑・竪穴状遺構・溝状遺構出土遺物	272
図版九十三	市道遺跡Ⅲビット出土遺物及び遺構外出土遺物及びH1号住居址石製品	273
図版九十四	市道遺跡ⅢH1・7・8・9・11・12号住居址石製品	274
図版九十五	市道遺跡ⅢH14・15・19・23・27・29・30・31・32・35・37号住居址石製品	275
図版九十六	市道遺跡ⅢH39・40・43・46・47・48号住居址石製品	276
図版九十七	市道遺跡ⅢH51・52・53・54号住居址石製品	277
図版九十八	市道遺跡ⅢH55・56・57・58号住居址・掘立柱建物址・土坑石製品	278
図版九十九	市道遺跡Ⅲ石器製品及び土製品	279
図版百	市道遺跡Ⅲ鉄製品	280
図版百一	市道遺跡Ⅲ石製模造品(1)	281
図版百二	市道遺跡Ⅲ石製模造品(2)	282
図版百三	市道遺跡Ⅲ石製模造品(3)	283
図版百四	市道遺跡Ⅲ石器類	284
《辻遺跡》		
図版一	辻遺跡A地点より噴火した浅間山を望む	349
	辻遺跡A地点調査区全景（北より南佐久方向を望む）	
図版二	辻遺跡B地点調査区全景	350
	辻遺跡B地点調査区近景	
図版三	H1号住居址全景・遺物出土状況	351
	H2号住居址遺物出土状況・住居址全景	
図版四	H3号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況・カマド掘り方全景・掘り方全景	352
図版五	H4号住居址全景	353
	H5号住居址全景	
図版六	H7号住居址全景・掘り方	354
図版七	H7号住居址遺物出土状況・カマド全景・カマド付近遺物出土状況・カマド掘り方	355
図版八	H6号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	356
図版九	H8号住居址全景・遺物出土状況	357
	H11号住居址全景・掘り方全景	
図版十	H9号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・カマド掘り方全景	358
	辻遺跡遺構検出状況	
図版十一	H10号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	359
図版十二	H12号住居址全景・掘り方全景	360
図版十三	H12号住居址カマド全景	361
	H13号住居址セクション・掘り方全景・カマド全景・住居址全景	
図版十四	H14号住居址全景・No.1・2カマド全景・掘り方全景	362
	H16号住居址カマド全景	
図版十五	H16号住居址全景	363
	H17号住居址全景	
図版十六	H15号住居址全景・掘り方全景	364
	H19号住居址掘り方全景・住居址全景	
図版十七	H18号住居址全景・掘り方全景	365
図版十八	H20号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	366
図版十九	H21号住居址全景・掘り方全景	367
図版二十	H22号住居址全景・掘り方全景	368
	H23号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	
図版二十一	H25号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	369
	H26号住居址全景	
	辻遺跡調査風景	
図版二十二	H24号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	370
	H28号住居址遺物出土状況	
図版二十三	H28号住居址全景・掘り方全景	371
図版二十四	H27号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	372
図版二十五	F1・2・3・4・5・6・7号掘立柱建物址全景	373
	F3号掘立柱建物址遺物出土状況	
図版二十六	F8・9・10・11号掘立柱建物址全景	374
	辻遺跡調査風景（南端）	
図版二十七	D2・3・4・5・7・9・10・11号土坑	375
図版二十八	D16・19・20・21・23・24・26・27号土坑	376

図版二十九	D28・29・30・31・32号土坑 D29号土坑焼土・炭化物検出状況及び焼土・遺物出土状況	377
図版三十	M1・2・3・4・5・6・7・9溝状遺構	378
図版三十一	M8号溝状遺構 T1号特殊遺構掘り方・焼土検出範囲・焼土半裁状況 T2・3・5号特殊遺構 T3号特殊遺構セクション	379
図版三十二	T4号特殊遺構・遺構範囲・焼土完掘状況・焼土セクション	380
図版二十三	辻遺跡H1・2号住居址出土遺物	381
図版三十四	辻遺跡H2・3・4号住居址出土遺物	382
図版三十五	辻遺跡H3・4・5・6・7号住居址出土遺物	383
図版三十六	辻遺跡H7・8・9・10・11・12号住居址出土遺物	384
図版三十七	辻遺跡H12・14・15・16・18号住居址出土遺物	385
図版三十八	辻遺跡H18・19・20・21・23・24・25号住居址出土遺物	386
図版三十九	辻遺跡H25・26・27・28号住居址及び掘立柱建物址及びD9・10・15号土坑出土	387
図版四十	辻遺跡D19・21・28号土坑及び溝状遺構及びT3・4号特殊遺構出土遺物	388
図版四十一	辻遺跡特殊遺構・遺構外出土遺物及び土製品及び鉄製品及び 石製模造品及び石製品	389
図版四十二	辻遺跡石製品(2)	390
	《儘田遺跡Ⅱ》	
図版一	儘田遺跡Ⅱ航空写真(上が南)	457
図版二	儘田遺跡調査A区 儘田遺跡調査B区 儘田遺跡調査C区	458
図版三	H1号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況 H2号住居址全景・掘り方全景	459
図版四	H3号住居址全景 H5号住居址全景・掘り方全景 H7号住居址全景・掘り方全景	460
図版五	H6号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	461
図版六	H8号住居址全景・掘り方全景 H9号住居址No.1・2カマド全景・掘り方全景・床検出状況	462
図版七	H9号住居址全景・掘り方全景	463
図版八	H10号住居址全景 H11号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	464
図版九	H12号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	465
図版十	H13号住居址全景・掘り方全景	466
図版十一	H13号住居址遺物出土状況・住居址内土坑・壁ビット検出状況	467
図版十二	H14号住居址全景・掘り方全景	468
図版十三	H14号住居址遺物出土状況・No.1・2カマド全景・No.1・2カマド掘り方全景	469
図版十四	H15号住居址全景・掘り方全景	470
図版十五	H16号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方全景・掘り方全景 儘田遺跡Ⅱ調査風景	471
図版十六	H17号住居址全景・覆土堆積状況・掘り方全景・カマド全景	472
図版十七	H20号住居址全景・覆土堆積状況・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況	473
図版十八	H18号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・焼土検出状況 H19号住居址カマド全景	474
図版十九	H19号住居址全景・掘り方全景	475
図版二十	F1・3号掘立柱建物址全景	476
図版二十一	F4・6・7・8号掘立柱建物址全景 儘田遺跡Ⅱより野沢中学校方面を望む	477
図版二十二	D1・2・4・5・6・8・9号土坑 D6号土坑遺物出土状況	478
図版二十三	D10・11・12・13・14・15・17号土坑 D14号土坑焼土検出状況	479
図版二十四	D21・22・23・24・25・26・28・29号土坑	480
図版二十五	D30・33・36・39・42・44・45・46号土坑	481
図版二十六	D47・48・50・51・52・53・54・55号土坑	482

図版二十七	D56・57・58・59・60・61・62・63号土坑	483
図版二十八	M1・4・5・6・7・8号溝状遺構 M5号溝状遺構遺物出土状況	484
図版二十九	T1号特殊遺構・焼土検出状況 徳田遺跡Ⅱ調査状況 H13号住居址壁柱検出状況	485
図版三十	徳田遺跡ⅡH1・2・3・5・6号住居址出土遺物	486
図版三十一	徳田遺跡ⅡH6・7・9・10・11・12号住居址出土遺物	487
図版三十二	徳田遺跡ⅡH12・13号住居址出土遺物	488
図版三十三	徳田遺跡ⅡH13・14号住居址出土遺物	489
図版三十四	徳田遺跡ⅡH14・16・17・19・20住居址出土遺物	490
図版三十五	徳田遺跡ⅡH17・20号住居址・掘立柱建物址・柱列・土坑出土遺物	491
図版三十六	徳田遺跡Ⅱ土坑出土遺物	492
図版三十七	徳田遺跡Ⅱ土坑出土遺物及び溝状遺構出土遺物	493
図版三十八	徳田遺跡Ⅱビット出土遺物及び遺構外出土遺物	494
図版三十九	徳田遺跡Ⅱ遺構外出土遺物及び土製品及び石製品(1)	495
図版四十	徳田遺跡Ⅱ石製品(2)	496
図版四十一	徳田遺跡Ⅱ鉄製品	497
図版四十二	徳田遺跡ⅡX線写真 《西裏遺跡》	498
図版一	西裏遺跡遺構検出状況 西裏遺跡全景 H1号住居址覆土堆積状況 西裏遺跡調査風景	503
図版二	H1号住居址全景・掘り方全景・カマド全景 H2号住居址カマド全景・カマド掘り方全景	504
図版三	H2号住居址全景 F1号掘立柱建物址全景	505
図版四	D1・2号土坑	506
図版五	西裏遺跡出土遺物	507
図版六	整理作業風景 《化学分析》	508
付編図版1	出土した炭化種実	512
付編図版1	市道遺跡ⅢD25遺構出土ウマ	515
付編図版2	市道遺跡Ⅲ出土骨片	516
付編図版1	佐久市市道遺跡Ⅲの竈穴住居跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真	521

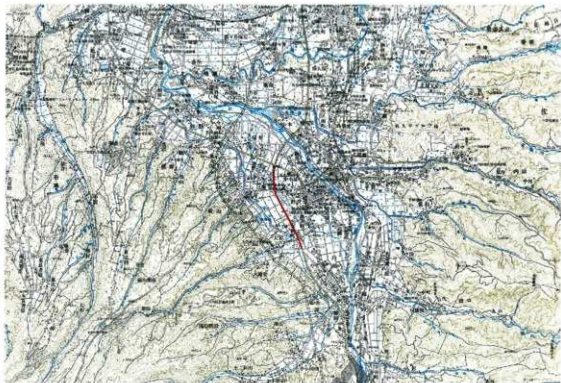
第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯

市道遺跡Ⅲ、辻遺跡、徳田遺跡Ⅱ、西裏遺跡が所在する佐久市は長野県の東端に位置し、北に浅間山、南に八ヶ岳連峰、東に荒船山塊などの山並みに抱かれた海拔700m前後に広がる高原都市である。

佐久市においては、平成17年4月1日に旧佐久市・浅科村・望月町・白田町の1市2町1村が合併した。これにより市域の広さは東西32.1km、南北23.1kmで、面積は423.99㎡、人口は10万を擁し、佐久平の中核都市としての新生「佐久市」が誕生した。合併後の新佐久市の重点課題の一つとして4地域の融合が上げられ、地域間の基幹連絡道路の整備が急務となっている。市内における基幹道としては東西に走る国道254号と142号、南北に貫く国道141号がある。折しも『中部横断自動車道』の建設が始まり、佐久平の南玄関口として「佐久南インター」が計画された。これらのことから今後、国道142号及び141号の交通量の増大が予想されるに至り、佐久建設事務所により国道141号の佐久市跡部交差点から南の旧佐久市分3kmについて複線化工事が計画された。

佐久建設事務所は、平成16年に佐久市教育委員会へ当地籍の遺跡有無についての照会を行った。教育委員会では予定地に市道遺跡、辻遺跡が存在することを回答した。よって、佐久建設事務所と当教育委員会で保護協議を行った結果、平成16年7月より試掘調査を行い遺跡の存在する部分については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成16年9月から辻遺跡より開始され市道遺跡の一部を行い、続く平成17年には徳田遺跡Ⅱ、西裏遺跡が調査され、同年晩秋に発掘調査は終了した。整理作業は平成17年冬から始められ、平成18年度に主だった作業を行い、平成19年度に原稿執筆を行い報告書を刊行した。



第1図 市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・徳田遺跡Ⅱ・西裏遺跡位置図 (1:100,000)

第2節 調査組織

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	高柳 勉(平成17年5月退任)
			三石昌彦(平成17年5月就任)
			木内 清(平成19年4月就任)
事務局	教育次長	赤羽根寿文(平成16年度)	柳沢健一(平成17年度)
	社会教育部長	柳沢義春	(平成18年度より組織改正)
	社会教育部次長	山崎明敏	(平成19年度より組織改正)
	文化財課長	小林正衛(平成16年度)	中山 悟(平成17年度～19年6月)
		森角吉晴	(平成19年7月～)
	文化財係長	高村博文	(平成16年度)
	文化財調査係長	高柳正人	(平成17年より組織改正)
	文化財調査係	林 幸彦	須藤隆司
		小林真寿	羽毛田卓也
		富沢一明	上原 学
		赤羽根太郎(17年度10月移動)	神津 格(平成17年度10月～)
		出澤 力	並木節子(平成19年度10月～)

調査体制

調査担当者	富沢一明	出澤 力(平成17年度)			
調査主任	佐々木宗昭	森泉かよ子			
調査副主任	堺 益子	武者幸彦			
調査員	阿部和人	浅沼ノブ江	市川 昭	白田真杉	江原富子
	岩崎重子	小幡弘子	岡部憲裕	岡部恵美子	有賀晴美
	柏木貞夫	柏木義雄	菊池喜重	小林よしみ	上原幸子
	小林東喜和	小林妙子	小林幸子	小林喜久子	小山 功
	島田幹子	佐藤志げ子	清水美恵	清水澄生	副島充子
	高見沢綾	高橋好春	東城武夫	大工原達江	中嶋フクジ
	橋詰信子	中条悦子	細堂ミスズ	萩原宮子	比田井久美子
	羽田貴恵	花岡美津子	堀籠滋子	広瀬梨恵子	森角雅子
	柳沢千賀子	山浦豊子	百瀬秋男	山田和子	宮川百合子
	渡邊久美子	渡辺長子	佐藤瑞希	斉藤惠李	井出孝子
	清水律子				柳田晴美
					磯米知子
					井出哲夫
					小林百合子
					金森治代
					田中ひさこ
					橋詰勝子
					細谷秀子
					柳沢孝子
					依田三男
					柳田晴美



平成16年秋、市道遺跡調査にて

第3節 調査日誌

平成16年度

- 7月 5日 国道141号試掘開始
- 8月 3日 本新町手前まで試掘終了
- 9月13日 辻遺跡より本調査開始
- 10月 7日 市道遺跡Ⅲ本調査開始
- 10月22日 H27号住居址で良好なカマド発見
- 11月 6日 野沢中学遺跡見学
- 11月26日 中央公民館遺跡見学

平成17年1月11日 本年度の現場作業を終了

2月28日 本年度の室内整理作業を終了

平成17年度

- 6月13日 辻遺跡発掘調査再開
- 8月 5日 辻遺跡調査終了
- 8月 8日 儘田遺跡Ⅱ調査開始
- 8月22日 H5号住居址より風字硯出土
- 8月19日 西裏遺跡調査開始
- 9月30日 儘田遺跡Ⅱ調査終了
- 10月 3日 市道遺跡Ⅲ調査再開
- 11月 2日 市道遺跡Ⅲ現場見学会
- 11月24日 市道遺跡Ⅲ調査終了
- 12月 1日 すべての調査を終了し機材撤収する。
- 12月～ 調査区埋め戻し

平成18年1月6日 風字硯新聞報道する。

平成18年度

- 4月～3月 報告書作成業務開始
- 土器復元・図面修正
- 遺物実測・写真撮影・トレース
- 図版作成

平成19年度

- 6月～3月 写真図版作成・表作成
- 原稿執筆をして報告書を刊行する。



市道遺跡Ⅲ表土剥ぎ状況



野沢西交差点調査状況



塚六住居址調査状況



野沢小学校生遺跡見学風景



遺跡説明会風景

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

佐久平は長野県内を流れる大河千曲川の上流部に位置し、浅間山・八ヶ岳・荒船山などの山々に囲まれた海拔700mを平均とする盆地である。この盆地の中央部には南から千曲川が先の山々から流れ出た湯川・滑津川・片貝川などの中小河川を集め北流している。佐久平の地形は大きく北と南で異なる。北側は浅間山の火山活動により形成された火山灰台地が浅間山麓より広がり、特に佐久市長土呂・小諸市耳取付近では火山灰台地特有の「田切り」地形が発達している。これとは趣を異にして、南側は蓼科・八ヶ岳山麓から筋状に延びる尾根とそれら尾根の谷筋より流れ出る小河川が造り出す小規模な扇状地と千曲川や片貝川の氾濫により形成された沖積低地が広がり、のどかな水田風景が広がっている。

市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・徳田遺跡Ⅱ・西裏遺跡はこの千曲川左岸の跡部・野沢・本新町に所在する。各遺跡は千曲川や片貝川の氾濫により形成された沖積微高地部に位置すると考えられるが、今回調査対象となった国道141号周辺部は大規模な圃場整備田となっており旧来の微地形は推測し得ない。遺跡の海拔は北側の市道遺跡Ⅲ付近で667m南側の西裏遺跡付近で689mであり、約3km区間の比高差は22mを測る。

第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する跡部・野沢地区およびその周辺地区には、西より傾斜する山地や山裾、また沖積低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡としては、当遺跡北西方向5kmの八ヶ岳北東山麓中に立科F遺跡がある。本遺跡からは211点からなる石器群が検出され、検出層位より31200年±900年前の年代が与えられている。また、同じく蓼科山麓の丘陵先端に位置する榛名平遺跡からは定型化したナイフ形石器2点を含む19点の石器が出土している。なお当遺跡からは14cm以上の獅子柴型槍先尖頭器1点が既出資料としてある。続く縄文時代の遺跡としては、同じく榛名平遺跡から縄文前期12軒、中期8軒の集落址が検出された。また、埋没谷からはおびただしい量の土器・石器が出土した。これらの中には佐久市で希少な出土例となる花積下層・塚田・中道・神ノ木・関山・有尾・諸磯A～Cなどの各土器型式が含まれており、塚田から中道、神ノ木から有尾といった変遷を推測しうる資料が含まれていた。この他の縄文遺跡としては前期前半の住居址6軒が調査された後沢遺跡、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡、筒村B・山法師B遺跡などがある。また、前山地帯の瀧の下遺跡からは、後期の敷石住居址2軒が検出され、そのうち1号住居址の敷石は炉の周辺に菱形に敷かれていた。周辺地域の縄文時代の遺跡は、その多くが山地沿いの谷間か、水田面に接する山裾周辺に広がっており、沖積低地での集落址は未だ発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては、まず、氷Ⅱ式を含む弥生前期土器群を出土した東五里田遺跡がある。これらの遺物はいずれも円形の土坑からの出土で、土器群には変形工字文の浅鉢や細密条痕が施された甕などがあり、土器群に伴い大型の打製石鉞や黒曜石製石鉞・石錐なども出土した。なお、土坑出土の炭化物により年代測定を行い2370年±40年の数値結果が出ている。次ぎに中期・後期になると丘陵地で遺跡が多く発見されている。まず、水田面を見下ろす丘陵上に位置する榛名平遺跡で後期箱清水期の住居址29軒、同じく後沢遺跡で中期栗林期3軒、後期箱清水期32軒の住居址、方形周溝墓3基が調査されている。また、当遺跡と同じ様な地形にある西裏・竹田峯遺跡からは中期栗林期9軒、後期箱清水期5軒の住居址とともに、後期に比定される壺棺が検出され壺内より胎児骨一体と管玉・ガラス小玉が発見された。また、当遺跡からは、円形周溝墓と考えられる遺構も確認されており、後沢遺跡も含め小地域内での墓制の多様性を考える上で貴重な資料となっている。また、近年沖積地においても中道遺跡付近で後期箱清水期の集落と考えられる遺跡が発見されている。試掘調査のため詳細は不明であるが、今回本調査を行った隣接する辻遺跡においても箱清水期の甕が低地部分より出土し

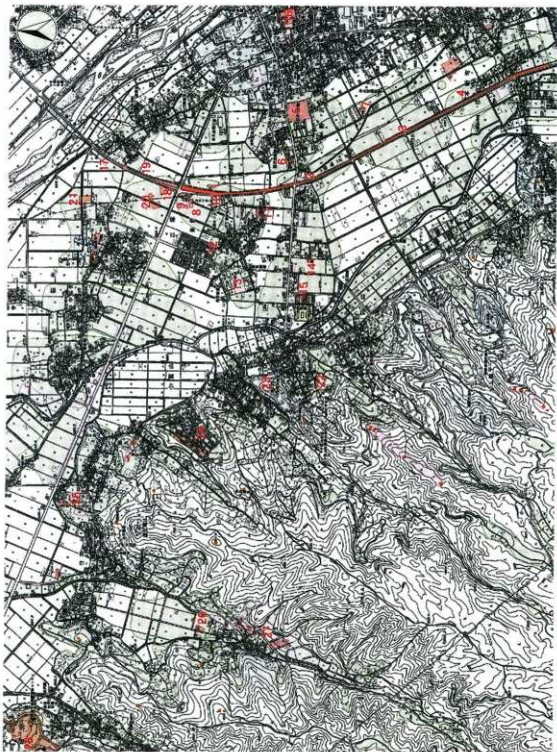
No.	遺跡名	所在地	調査年度	出土遺物・出土遺構等
1	川邊遺跡群	跡部市街道	平成16・17年度	住居址60、竪立柱礎物址25、土坑54、溝址4
2	川邊跡	野矢字法	平成16・17年度	住居址28、竪立柱礎物址12、土坑28、溝址7
3	塚田遺跡群	野矢字塚田	平成17年度	住居址19、竪立柱礎物址9、土坑52、溝址7
4	西森遺跡	野矢字西森	平成17年度	住居址2、竪立柱礎物址1、土坑3
5	米五原田遺跡	野矢字五原田	平成14年度	住居址2、竪立柱礎物址、土坑、溝址
6	柳沢遺跡Ⅰ・Ⅱ	野矢字柳沢	昭和62年度	住居址6、土坑4
7	藤田遺跡	野矢字藤田	昭和45年度	住居址4、土坑9
8	市道遺跡	三塚字市道	昭和49年度	住居址10、特殊遺構5
9	市道遺跡Ⅱ	三塚字市道	平成10年度	住居址5、竪立柱礎物址4、土坑10、溝址3
10	三千米遺跡群(宮添遺跡)	三塚字宮添	平成11年度	住居址4、竪立柱礎物址2、竪立柱礎物址1、土坑3、ピット39
11	三千米遺跡群(寺添遺跡)	三塚字寺添	平成6年度	住居址29、竪立柱礎物址6、井戸址4、土坑3、溝溝址1
12	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	昭和50年度	住居址4、土坑3
13	御倉小学校敷地遺跡	三塚字一町田	昭和40年度	
14	中道遺跡	前山字中道	昭和46年度	住居址7、奈良「影」(土)
15	中道遺跡Ⅱ	前山字中道	平成9・11・13年度	住居址17
16	野矢遺跡	野矢字御倉敷	平成14年度	
17	跡部遺跡(遺跡)	跡部市街道	平成11年度	N.19の跡部町田遺跡Ⅱと合わせて住居址86
18	跡部町田遺跡	跡部町田	昭和50年度	住居址5、土坑2、溝1
19	跡部町田遺跡Ⅱ	跡部字次郎太・辰田	平成11年度	
20	平塚町田遺跡	一塚字町田	昭和49年度	住居址6、竪立柱礎物1、土坑、溝
21	16坂井文遺跡	坂井字橋筋	昭和52年度	住居址18、特殊遺構10
22	橋の下遺跡	橋下字橋の下	平成2年度	住居址3 炉・竈
23	山崎遺跡	小宮山字塚山・伴野城町		
24	西沢遺跡	小宮山字西沢	昭和51・52年度	住居址50
25	西栗・折出家遺跡	折野字西栗・折野字竹田墓	昭和60年度	住居址26、特殊遺構4、西溝3、土坑26、溝2、ピット
26	高村遺跡	柳野字11号	昭和57年度	住居址16、土坑5、溝1
27	橋村Ⅱ・山法師Ⅱ遺跡	橋野字川向	平成3・4年度	住居址2、竪立柱礎物址4、竪立柱礎物2、土坑10、溝址
28	橋名平・坪の内遺跡群(橋名平遺跡)	橋下字橋名平・坪の内	平成5・6年度	住居址122、竪立柱礎物址30、土坑、古溝2基、溝か
29	橋下遺跡	野矢字石石	昭和33年度	火葬場
30	橋下遺跡Ⅱ	橋野字平反り田	昭和56年度	住居址60、竪立柱礎物址4、土坑18
31	小倉平遺跡	橋野字小倉平	昭和56年度	住居址3、土坑
32	立石遺跡	相沢字立石	昭和56年度	土坑
33	石附塚Ⅰ～Ⅲ	相沢字石附	昭和55年度	竪立柱礎物址3、炭炭Ⅳ4、方形凹溝1、竪立柱礎物2、土坑1
34	野矢柳野Ⅱ	相沢字柳野	平成13年度	土坑11、柱址152、特殊遺構1
35	野矢立遺跡	源米原遺跡	平成11年度	寺院本堂礎石、基礎

第1表 周辺遺跡一覧表

ている。この事から今後調査事例が増せば、沖積微高地上に弥生時代の集落が発見される可能性は十分にあり。

古墳時代になると集落・生産・墳墓等の遺跡が調査されている。古墳時代集落は沖積低地まで広がりはじめ、圃場整備などで調査された遺跡も多く、中道遺跡・市道遺跡Ⅰ、Ⅱ・三塚町田遺跡・跡部町田遺跡・三塚鶴田遺跡・上坂井北遺跡・寺添遺跡などが挙げられる。これらの遺跡はいずれも自然堤防上や微高地上に立地しており中期後半から後期におよぶ集落址である。また、近年沖積地において空白であった前期土器群が宮添遺跡で出土し、今後は周辺域で集落発見の期待がかかる。古墳址は調査されたものは少ないが、まず灘の峯古墳群が上げられる。市志編纂事業の一環として学術調査が行われ、2基の前方方型の墳丘墓が検出された。規模は2号墳が全長18m、1号墳が約13mを測り、2号墳からは後方部中央に主体部として土壇墓が確認されている。また2号墳の周溝内からは壺・小型壺・甕・鉢・高坏・器台が出土し、これら土器群をもって4世紀後半の位置づけがなされている。次に後期古墳としては調査されたものは少なく橋名平1号墳と坪の内古墳にとどまっているが、火の雨塚古墳からは円筒と竈などの埴輪片が出土している。なお、佐久平においては千曲川西岸の低地や山地には古墳址が少なく、千曲川東岸の山裾に群集墳が集中して存在する極めて対照的な様相を示している。次に生産遺跡として石附塚群が挙げられる。数次の調査が行われ現在迄に2基の須恵器窯と5基の木炭窯が検出されている。これら窯址の年代は出土須恵器より7世紀後半～末の実年代が与えられている。

次に、奈良・平安時代は前代と同様な様相を示し山裾には小規模な集落址が、沖積地においては舞台場遺跡の29軒や跡部儘田遺跡の古墳時代も含め約70軒等集落規模が大きくなる。特に跡部儘田遺跡からは砂層に埋没した住居址や畝状遺構、そして砂層上に構築された竪穴住居址等が発見され、それら遺構の帰属時期がいわゆる「仁和の水害」に関連するようであり今後の本報告が待たれる。また墓址としては石石遺跡があり、大甕3個の中に長頭壺・甕の産物が入って発見され、時期は10～12



第2圖 周辺の遺跡位置図 (1:22,000)

世紀の火葬墓群と考えられている。出土遺物としては中道遺跡と榛名平遺跡からは奈良三彩の蓋が後沢遺跡からは緑釉陶器が出土しており注目される。

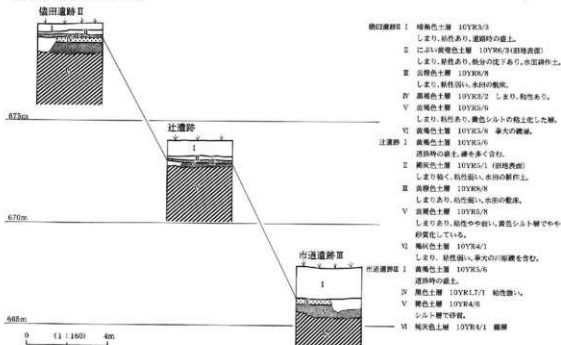
鎌倉時代以降になると当地域では伴野氏の活躍が始まる。伴野氏関連の遺跡としては方形の区画を持つ野沢館跡が平成14年度に整備に伴う発掘調査が行われ、石積みを伴う土塼や館出入り口と考えられる土橋が発見され、規模も南北100m・東西80mの長方形プランであることが判明した。また、館跡周辺部の調査も行われ、城域の外郭と考えられる堀跡も発見されつつあり、今後「野沢館」の縄張り解明に向けた資料が蓄積されつつある。山城としては良好な保存状態を保つ前山城跡があり、伴野氏によって築かれたものとされている。また、絵画資料として中世伴野庄の様子は「一遍上人絵伝」にも当時の市の活況な様子が描かれている。遺物としては小金平遺跡から常滑の甕に入った備前銭約14,400枚が出土している。また、榛名平遺跡からは中世の原敷地と墓域がまとめて検出されている。特に墓域には火葬墓・土塼墓・集石土塼墓等様々の形態が確認され、一部には地形を改変しテラス状の部分に五輪塔も建てられていた痕跡があった。近世の調査事例としては野沢原の薬師寺遺跡が調査され、近世前期よりの寺院址が調査されている。

以上、野沢地域周辺の遺跡を時代を追って概観してみた。

第3節 基本層序

市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・徳田遺跡Ⅱ・西裏遺跡はいずれも千曲川の左岸、片貝川と千曲川に挟まれた中間地点に位置している。調査区の標高は北端の市道遺跡Ⅲで667m、中間地点の辻遺跡で674m、南端の西裏遺跡で681mを測る。今回の調査区間全長2800mで確認面の標高差は14mあり、北西に緩やかに傾斜する現地地形に沿うようなかたちである。

各遺跡の遺構検出面は基本的に黄色シルト層である。残存状況の良い場所では暗褐色土層の堆積も見られ、遺構検出面として掘り込み線も検出できたが、不確定な部分が多く見えなかった。また、調査地点によっては黄色シルト層の堆積のないまま円礫層となる部分もあり、この円礫層を掘り込んで遺構が構築されていた。



第3図 基本層序模式図

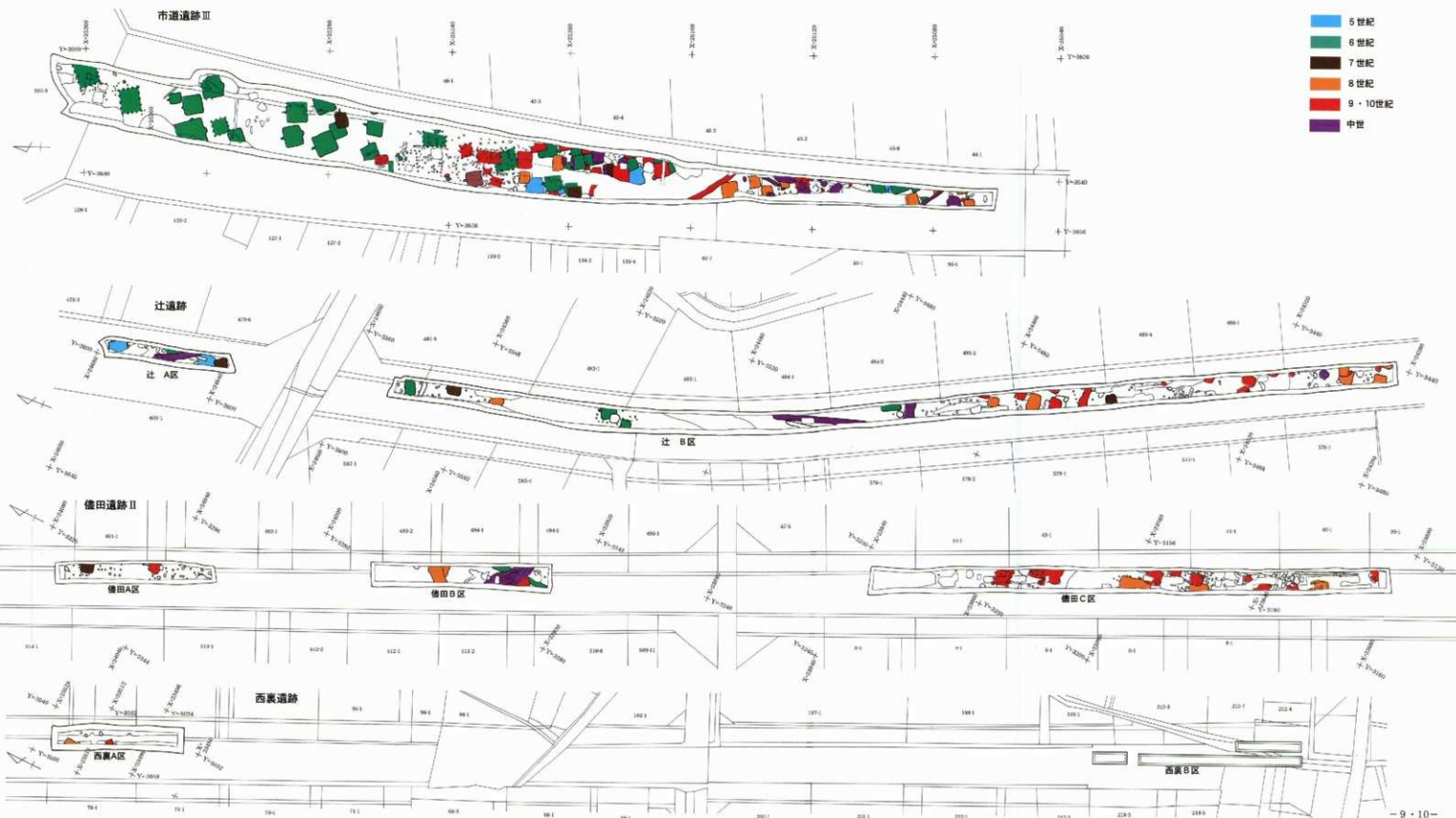
第4節 検出遺構と遺物の概要

今回の発掘調査は、まさしく野沢平を南北に大きく貫くようにトレンチを入れた状態となった。その結果、今まで不明確であった野沢平の遺跡の分布状況がおぼろげながら把握できた事が今回の調査成果の第1と考えられる。遺跡範囲は旧来より考えられていた範囲と大きく異なり、国道沿線は遺跡包蔵地であり、また周辺部にも広がりがあることが予想された。また、発見された遺跡も時代的に偏りがあり、市道遺跡Ⅲは古墳時代後期を主体とする集落であるが奈良・平安時代と続き、一部中世に及ぶ複合遺跡。これに対して辻遺跡・徳田遺跡Ⅱは古墳時代の住居址が少なく、主に奈良・平安時代の集落が主体であることが判明した。また、徳田遺跡Ⅱからは奈良時代前半と考えられる超大型の竪穴住居址や総柱掘立柱建物址が検出され、特殊遺物として青銅製品の鞘尻金具や丸鞘、大型の鉄斧、また平安時代の所産と考えられるが佐久平で初めての風字硯の出土などがあり、徳田遺跡Ⅱ周辺が単なる農村集落址とは考えずらい調査成果も得られた。

以下が今回の検出遺構及び出土遺物の概要である。

検出遺構	出土遺物
市道遺跡Ⅲ 竪穴住居址 60軒 (古墳35、奈良・平安21) 掘立柱建物址 25棟 (柱列含む) 土坑 54基 溝状遺構 4本 竪穴状遺構 7基 (中世) ビット 249個	縄文時代 加曾利EIV式土器 石鏃 打製石斧 弥生時代 箱清水式土器 石鏃 古墳時代 土師器 須恵器 鉄製品 砥石 編物石 ミチア土器 石製模造品 (白玉・剣・有孔)
辻遺跡 竪穴住居址 28軒 (古墳10、奈良・平安15) 掘立柱建物址 12棟 (柱列含む) 土坑 28基 溝状遺構 7本 特殊遺構 5基 ビット 73個	奈良・平安時代 土師器 須恵器 墨書土器 灰釉陶器 緑釉陶器 円面硯 風字硯 鉄製品 (鉄斧・刀子・鏃) 青銅製品 (鞘尻金具・丸鞘)
徳田遺跡Ⅱ 竪穴住居址 19軒 (古墳1、奈良・平安16) 掘立柱建物址 9棟 (大型掘立柱建物址) 土坑 52基 溝状遺構 7本 特殊遺構 1基 ビット 105個	中世 龍泉系青磁 白磁 常滑 (壺・こね鉢) 古瀬戸 (碗・皿・こね鉢・瓶子) 東濃系山茶碗
西裏遺跡 竪穴住居址 2軒 (平安2) 掘立柱建物址 1棟 土坑 3基 ビット 1個	近世 陶磁器類 (伊万里・瀬戸・美濃 唐津・前山焼) 炭化材・馬骨

第2表 検出遺構一覧表



第4図 市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・徳田遺跡Ⅱ・西裏遺跡調査全体図 (1:1,000)

市道遺跡Ⅲ

第三章 市道遺跡Ⅲ

第1節 竪穴住居址

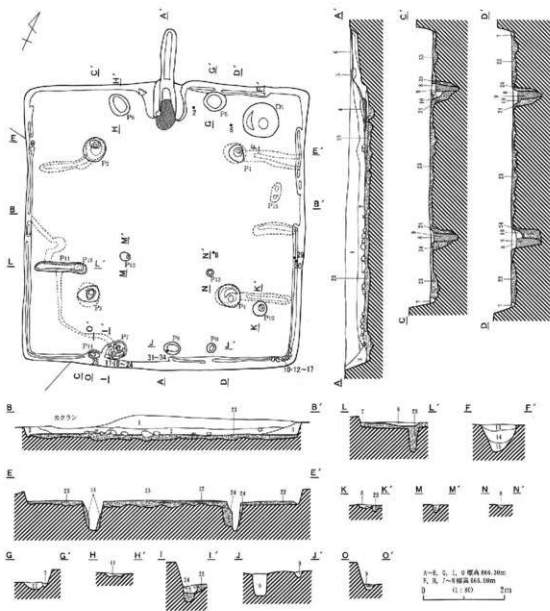
(1) 1号住居址 (第5・6・7図, 写真図版3)

本住居址は、調査区北側であるツ-26.27.28、テ-26.27.28、ト-27.28Grに位置する。残存状態は西壁が一部クラクランにより壊されている他は良好である。H51号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁6.89m・南壁6.52m・西壁6.50m・東壁6.56mで、壁高さは南壁中央で最大54cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-23°-Wを示す。住居址の床面積は43.716㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれるが、2層中と床面に多量の河原石が検出された(写真図版参照)。これら礫は拳大から人頭大の大きさが含まれ、小石や砂を含まない事から、人為的な投棄と考えられる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に3~22cmの厚さで貼られていた。壁溝は東壁と南壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は約12~32cm・深さ2~11cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め16カ所確認され、P1~4が主柱穴、P8が入り口梯子穴と考えられる。規模はP1が径43cm・深さ71cm、P2が径58cm・深さ72

No.	種別	器種	法量		形状・測定・文様				備考	出土位置	
			山形	底面	内	外	四				
1	土師器	杯	13.0	-	-	ナデ	ヘラケズリーナデ	口縁ヨコナデ	図輪実測 1/2残存	I区	
2	土師器	坪	16.0	10.4	5.3	ミガキ	底部ヘラケズリー	口縁ミガキ	完全実測 3/4残存	6.5cm	
3	土師器	杯	12.0	-	2.9	ヘラナデ	口縁ヨコナデ・ヘラケズリー		図輪実測 2/3残存	P.4 II区	
4	土師器	杯	16.9	10.2	4.1	ナデ	ナデ	底部ヘラケズリー	穴全実測 2/3残存	P.4 II区	
5	土師器	杯	14.6	13.7	(9.0)	ヘラナデ	体部ヘラケズリー	口縁ヨコナデ	図輪実測 1/4残存	IV区	
6	土師器	小壺	13.6	6.0	13.4	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	底面実測	3cm I・II・IV区	
7	土師器	壺	15.8	-	-	ヘラナデ	口縁ヨコナデ	ヘラケズリー	図輪実測	口縁1/3残存	I・IV区
8	土師器	壺	22.0	-	-	ヨコナデ	ヘラケズリー	ヘラケズリー	図輪実測	口縁1/3残存	3cm P.4 II区
9	土師器	壺	22.0	5.1	34.6	ヘラナデ	口縁ミガキ	ミガキ	穴全実測	底面実測	P.5 III・IV区
28	土師器	円盤	縦3.8	横3.7	0.8				直径9.80g	土師器覆土	I区
No.	器種	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見		出土位置	
10	編み物石	輝石安山岩	完形	12.4	7.1	6.7	820.00			1cm	
11	編み物石	ホルンフェルス	完形	13.3	5.8	5.3	610.00	下部の割離は使用痕か		-4cm	
12	編み物石	花崗岩	完形	11.2	6.4	4.4	415.00			1cm	
13	編み物石	安山岩	完形	10.8	5.6	3.8	310.00			1cm	
14	編み物石	安山岩	完形	10.0	5.3	4.4	315.00			1cm	
15	編み物石	輝石安山岩	完形	11.6	7.4	2.8	350.00			1cm	
16	編み物石	ホルンフェルス	完形	10.5	5.8	3.8	310.00			1cm	
17	編み物石	砂岩	完形	12.5	6.1	4.7	462.00	上・下縁部に浅い痕行痕		1cm	
18	編み物石	輝石安山岩	完形	11.9	6.3	3.7	690.00			-4cm	
19	編み物石	砂岩	完形	10.0	8.6	3.7	423.00	両面に浅いための割離		-4cm	
20	編み物石	輝石安山岩	完形	13.7	6.8	4.9	670.00	下部部に磨行痕		-6cm	
21	編み物石	石安山岩	完形	15.2	6.3	4.7	610.00			-6cm	
22	編み物石	輝石安山岩	完形	16.1	9.4	6.8	1330.00	上縁部に浅い痕行痕		-6cm	
23	編み物石	砂岩	完形	14.2	8.4	4.7	620.00	下部部に磨行痕 裏面はすり面か		-4cm	
24	編み物石	花崗岩	完形	14.8	7.7	4.6	630.00	下部部に磨行痕		-4cm	
25	編み物石	ホルンフェルス	完形	13.5	6.8	5.0	750.00			-5cm	
26	礫	凝灰岩		8.0	4.5	4.1	162.77			I区	
27	石礫	安山岩		6.0	5.9	3.9	169.14			I区	
29	白玉	燐石		0.6	0.96	0.28	0.78				
30	白玉	燐石	完形	0.75	0.98	0.24	1.06				
31	白玉	燐石	完形	0.67	0.77	0.26	0.57			-21cm	
32	白玉	燐石	完形	0.82	0.82	0.25	0.86			-21cm	
33	白玉	燐石	完形	0.83	0.8	0.27	0.82			-21cm	
34	白玉	燐石	完形	0.51	0.77	0.24	0.44			-21cm	
35	白玉	燐石	完形	0.44	0.77	0.25	0.35			P.8-1	
36	白玉	燐石	完形	0.6	0.74	0.26	0.52			P.8-2	
37	白玉	燐石	完形	0.39	0.72	0.25	0.22			P.8-3	
38	白玉	燐石	完形	0.64	0.74	0.23	0.4			P.8-4	
39	白玉	燐石	完形	0.13	0.95	0.26	0.14			I区	

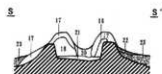
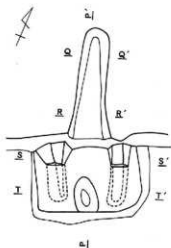
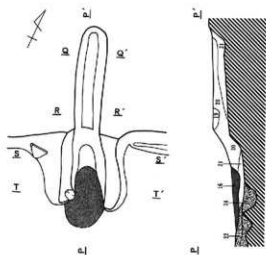
第3表 H1号住居址出土遺物観察表



1. 黒色土層 (1012/1) 炭化粒子微量混入。
2. 黒褐色土層 (1012/2) 炭色ローム粒子 (砂質) 少量混入し、人獣の糞が混在。
3. 黒褐色土層 (1012/3) 炭色ローム粒子 (砂質) 多量混入。
4. 黒色土層 (1012.1/1) ローム粒子微量混入。
5. 黒色土層 (1012.1) 炭化粒子・ローム粒子微量混入。
6. 黒褐色土層 (1012.1) ローム粒子少量混入。
7. 黒褐色土層 (1012.2) ロームブロック・ローム粒子多量混入。

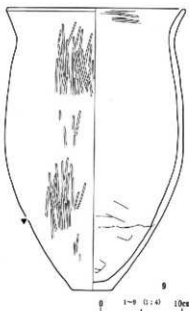
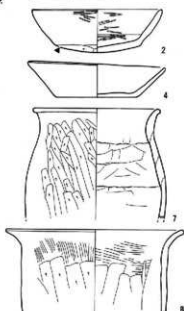
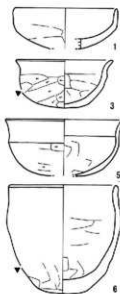
11. 暗赤褐色土層 (1012/4) 焼土ブロック・焼土粒子多量混入。(灰だめか?)
12. 黒褐色土層 (1012/2) 焼土ブロック・ロームブロック混入。
13. 黒色土層 (1012.1) ロームブロック微量混入。
14. 黒褐色土層 (1012/2) ロームブロック・ローム粒子混入。
15. 黒色土層 (1012.1/1)。
22. 暗褐色土層 (1012.4) ローム粒子多量混入。(床の厚さ部分でカチカチ)
23. 暗褐色土層 (1012/3) ローム粒子・ロームブロック多量混入。
24. 暗褐色土層 (1012.4) 黒色ブロック・ロームブロック多量混入。

第5図 H1号住居地実測図

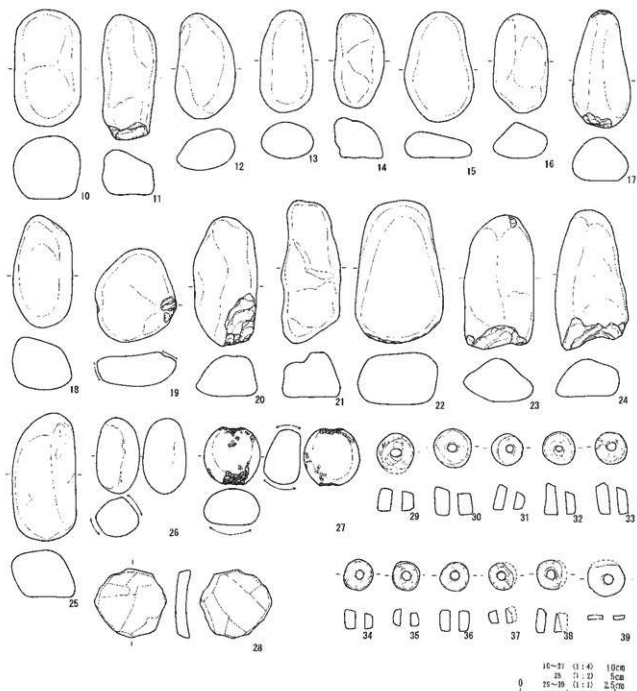


縦高 844.10m
(1:40)

4. 黒褐色土層 (S1K2/1) 焼土粒子・焼土ブロック少量混入。
5. 赤色土層 (S1K5/4) 焼土。
6. 濃い赤褐色土層 (S1K4/0) 焼土ブロック少量混入し、焼土粒子多量混在。
16. 濃い赤褐色土層 (S1K4/2) 焼土。灰を多量に含み、焼土ブロックが混入。
17. 黒褐色土層 (S1K2/1) 焼土ブロック・焼土粒子多量混入し、炭化物を含む。
18. 暗赤褐色土層 (S1K3/4) 焼土粒子多量混入。
19. 明赤褐色土層 (S1K3/3) 焼土粒子多量混入。
20. 暗赤褐色土層 (S1K3/4) 焼土ブロック多量に混入し、焼土粒子少量混入。
21. 黒褐色土層 (S1K3/3) 焼土粒子・炭化物少量混入。



第6図 H1号住居址カマド及び出土遺物実測図



第7図 H1号住居址出土遺物実測図

cm、P3が径52cm・深さ69cm、P4が径57cm・深さ70cm、P5が径53cm・深さ15cm、P6が径58cm・深さ8cm、P7が径61cm・深さ43cm、P8が径40cm・深さ53cm、P9が径22cm・深さ18cm、P10が径36cm・深さ11cm、P11が径26cm・深さ9cm、P12が径24cm・深さ20cm、P13が径17cm・深さ7cm、P14が径39cm・深さ17cm、P15が径48cm・深さ26.5cm、P16が径28cm・深さ63cmを測る。住居址掘り方は南西コーナー部が一段掘り下がっていた。またP1とP2、P4、P16から壁に向かって間仕切り溝が検出された。貯蔵穴はカマド右脇に検出され、規模は長軸87cm・短軸84cm・深さ71cmを測る。

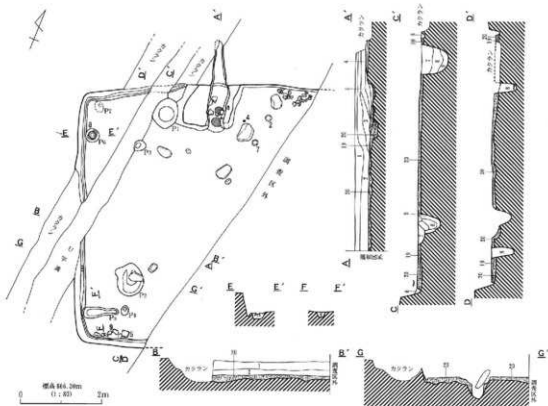
カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。火床面の焼土厚みは9cmを測り、良く焼け硬質化していた。カマド袖は左右両方ともに地山を掘り残し芯材とし、粘性土で構築していた。煙道部の長さは151cmを測り、底面を黒褐色土で構築していた。カマド主軸方位はN-24°-Wを測る。

出土遺物は覆土中のものが多かったが、編み物石は住居址南壁西よりのP7より、また白玉はP8よりりとまって出土した。図示した遺物の内、1～5は土師器坏であり、1と2はいわゆる須恵器模倣坏である。7～9は土師器釜、27は両端に窪みを付けた石鍾と考えられる。29～39は石製模造品の白玉で、形態は39のみ扁平である。これら遺物より本址は6世紀後半に位置づけられる。

(2) 2号住居址 (第8・9・10図, 写真図版四・五)

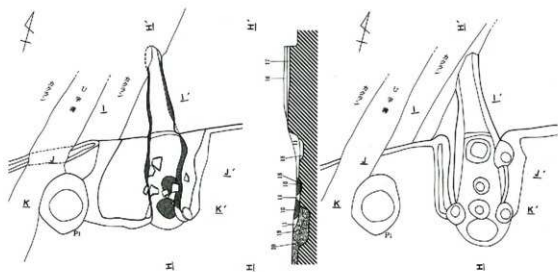
本住居址は、調査区北側であるソ・26.27, タ・26.27.28, チ・27Grに位置する。残存状態は住居址南東側1/3が調査区外に、またカマド西側から西壁にかけて一部カクランにより壊されている他は良好である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁残存5.71m・南壁残存1.50m・西壁6.00mで、壁高さは北西コーナー部で最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-21°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で22.864㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に3～14cmの厚さで貼られていた。壁溝は北壁の一部と西壁の全体、南壁に検出された。断面形はU字形で、幅は約14～34cm・深さ3～11cmを測る。ピツ



- | | |
|--|--|
| 1. 黒色土層 (01R2/1) 炭化植物繊維混入し、ロームブロック多数混入。 | 7. 暗褐色土層 (01R3/3) ローム粒子・ロームブロックが少量混入し、純土粒子も少量含む。 |
| 2. 灰色土層 (01R2/2) 炭化物繊維混入し、ロームブロック多数含む。 | 8. 黒色土層 (01R2/2) ローム粒子少量混入。 |
| 3. 黒褐色土層 (01R1/1) 炭化物・灰が少量混入し、純土ブロックを多く含む。 | 9. 黒褐色土層 (01R2/3) ローム粒子少量混入。 |
| 4. 黒褐色土層 (01R1/2) 炭化粒子・灰・純土粒子・焼土ブロック多数混入。 | 10. 暗褐色土層 (01R3/3) ロームブロック・ローム粒子多数混入。 |
| 5. 暗褐色土層 (01R2/4) 純土ブロック・純土粒子多数混入し、灰・炭化物も少量混入。 | 11. 暗褐色土層 (01R3/3) ローム粒子多数混入し、ロームブロック少量混入。 |
| 6. 暗褐色土層 (01R2/2) 炭化粒子・ローム粒子少量混入。 | |

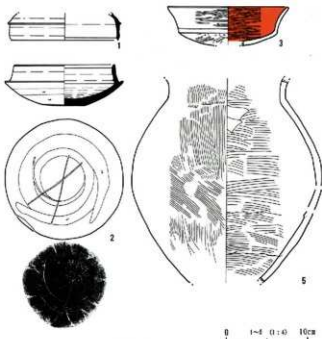
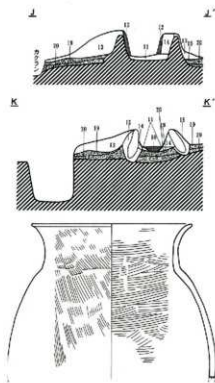
第8図 H2号住居址実測図



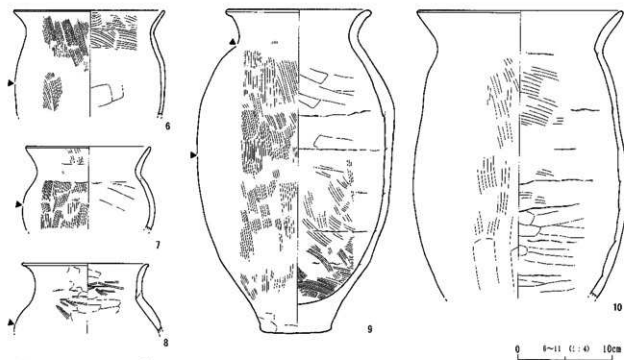
標高 86.30m
(1:40)



10. 赤褐色土層 (3781/0) 焼土。
11. 暗赤褐色土層 (3783/0) 焼土・焼土ブロック多量混入し、灰・炭化物を含む。
12. 濃い橙褐色土層 (3785/0) 火跡による焼けこみ。
13. 黒褐色土層 (3782/2) 炭化物微量混入し、灰・炭化物を含む。
14. 黒褐色土層 (3782/1) 焼土ブロック・炭化粒子混入。
15. 黒褐色土層 (3782/1) ローム粒子多量混入。
16. 黒褐色土層 (3783/1) 焼土ブロック・焼土粒子少量混入し、灰・炭化物微量混入。
17. 黒褐色土層 (3782/1) 焼土粒子少量混入。
18. 暗赤褐色土層 (3782/0) 焼土ブロック・炭化物・灰が多量混入。



第9図 H2号住居址カマド及び出土遺物実測図



第10図 H2号住居址出土遺物実測図

トは掘り方検出時も含め7カ所確認され、P2・3が支柱穴と考えられる。規模はP1が径74cm・深さ74cm、P2が径80cm・深さ53cm、P3が径30cm・深さ51cm、P4が径23cm・深さ56cm、P5が径86cm・深さ15cm、P6が径34cm・深さ15cm、P7が径28cm・深さ15cmを測る。P5は形態より間仕切り溝とも考えられる。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。火床面の焼土厚みは6cmを測り、良く焼け硬質化していた。カマド袖は左右両方ともに地山を掘り残し芯材とし、焚口部分は川原石を構築材としていた。また本址は左袖が右袖に比べて異様に大きく貯蔵穴と考えられるP1脇までテラス状に伸びていた。煙道部の長さは116cmを測り、底面を黒褐色土で構築していた。カマド主軸方位はN-20°-Wを測る。

出土遺物は覆土中とカマドからが多かった。2は須恵器坏身でほぼ完形であり、底部付近に焼成前のヘラ記号が施されている。襷類は成形に刷毛目の残るナデのものが主体である。11は単孔の甗である。これら遺物より本址は6世紀前半に位置づけられる。

No.	種別	器種	寸法	成形・調査・文様		備考	出土位置		
				内面	外面				
1	須恵器	甗	13.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ	図録実測 口縁1/3残存	IV区	
2	須恵器	坏身	12.5 5.3 5.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ→刷毛ヘラズリ	ヘラ記号	完全実測	4cm
3	土師器	甗	16.0 12.2 (4.8)	ミガキ 赤色磨影	ミガキ	底面ヘラズリ→ミガキ	図録実測	カマド	
4	土師器	甗	19.8	-	ハケ目	ハケ目	図録実測 口縁1/3残存	12cm	カマド
5	土師器	甗	-	-	ハケ目	ハケ目	図録実測	5cm	カマド
6	土師器	甗	16.1	-	口縁ハケ目	ヘラナデ	陶板〜体積2/3残存	P2 I・II・IV区	
7	土師器	小型甗	13.3	-	ヘラナデ	ハケ目→ナデ	完全実測	口縁実形	5cm
8	土師器	小型甗	13.5	-	ヘラナデ	指頭圧痕→ミガキ	指頭圧痕→ミガキ	完全実測	5cm
9	土師器	甗	15.4 7.5 34.5	ハケ目	ヘラナデ	ハケ目→口縁ヨコナデ	図録実測	口〜底面1/2残	4〜18cm
10	土師器	甗	21.8	-	ハケ目	ハケ目(ヘラナデ)→口縁ヨコナデ	図録実測	I区トレンチ	
11	土師器	甗	- 4.5	-	ハケ目→ヘラズリ→ナデ	ヘラズリ→ハケ目→ヘラナデ	完全実測	遺部実形	III・IV区

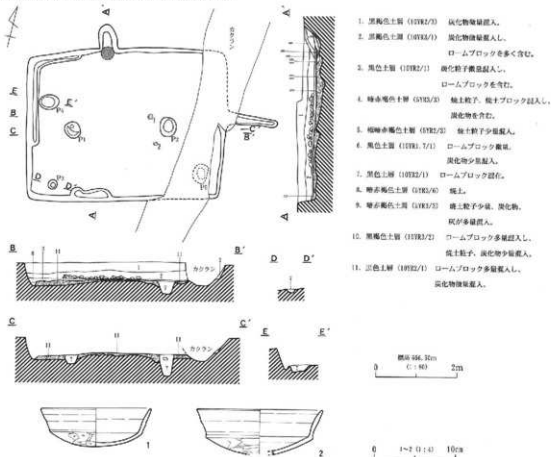
第4表 H2号住居址出土遺物観察表

(3) H3号住居址 (第11図, 写真図版六)

本住居址は、調査区北側であるタ・28.29、チ・28.29、ツ・28.29Grに位置する。残存状態は東壁側がカクランにより壊されている他は良好である。H51号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は東西に長い長方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央と北壁西よりの2箇所造られている。規模は北壁4.23m(残存)4.75m(推定)・南壁4.60m・西壁3.36m・東壁1.65m(残存)3.50m(推定)で、壁高さは西壁中央で最大43cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-11°-Wを示す。住居址の床面積は15.84㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれるが、2層中と床面上にH1号住居址と同じく多量の河原石が検出された(写真図版参照)。これら礫は拳大から人頭大の大きさが含まれ、小石や砂を含まない事から、人為的な投棄と考えられる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に5~26cmの厚さで貼られていた。壁溝は北西コーナーの一部分に検出された。断面形はU字形で、幅は約23~34cm・深さ4~17cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認され、P1とP2が支柱穴と考えられる。規模はP1が径42cm・深さ56cm、P2が径48cm・深さ52cm、P3が径23cm・深さ10cm、P4が径48cm・深さ15cm、P5が径48cm・深さ12cmを測る。

カマドは2箇所検出され、まず北壁中央のカマドは煙道部と火床部のみの検出で袖部は残存していなかった。また、東壁のカマドは燃焼部をカクランにより削平されているため煙道部しか残存しておらず、煙道長さは102cmを測る。北壁カマドが袖部等が残存していなかったことから、本址の最終的な使用カマドは東壁のカマドと考えられる。



第11図 H3号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は覆土中からが多かった。1と2は上師器環で、いわゆる「有段口縁環」である。いずれも底部へラケズリで口縁部に段を有する。これらの出土遺物より本址は6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる。

No.	種別	品名	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径	高さ	厚さ	内面	外面		
1	上師器	鉢	13.6	—	4.7	口ケヒナデ	口ケヒナデ 底面ヘラケズリ	完全実測 撮影	19.5cm
2	土師器	鉢	15.1	—	15.5	口ケヒナデ	口ケヒナデ 底面ヘラケズリ	口縁実測	14cm

第5表 H3号住居址出土遺物観察表

(4) H4号住居址 (第12図, 写真図版七)

本住居址は、調査区北側であるチ-30.31.32、ツ-31.32Grに位置する。残存状態は東壁側がカクランにより壊されている他は良好である。

形態は正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁4.25m(残存)・南壁4.53m(残存)・西壁4.82mで、壁高さは西壁中央で最大25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-11°-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で22.0㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で単層であるが、床面上にH1号住居址と同じく少量の河原石が検出された。床は全体的に硬質であったが、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「敷き床」であった。壁溝はカマド東側に一部検出された。断面形はU字形で、幅は約14~17cm・深さ4~9cmを測る。ピットは6カ所確認され、P1~P4が主柱穴、P5が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径30cm・深さ55cm、P2が径35cm・深さ37cm、P3が径21cm・深さ42cm、P4が径33cm・深さ53cm、P5が径64cm・深さ30cm、P6が径38cm・深さ9cmを測る。

カマドは北壁中央に検出され、煙道部と袖部は残存していたが、火床部は良好な形で確認されなかった。煙道部の規模は長さ148cmで、煙道部には黒褐色土の構築上が観察された。袖の規模は高さが最大19cmを測る。袖は粘土の構築であり、カマド掘り方検出時に焚口部で径16cm・深さ7cm程のピット2箇所が検出された。検出位置より焚口部構築の石掘り込み跡と考えられる。

出土遺物は覆土中からが多く、図示したものもいずれも覆土中からの出土である。1は上師器環である。2は須恵器ハソウの模倣品と考えられ、胴部に焼成前と考えられる穿孔がある。3は小型鉢である。他の鉢に比べ器厚が厚く、外面にあらぬ刷毛目の残るナデを施す。4も小型鉢と考えられるが、底部が非常に厚く、或いは台状に使われる土器とも考えられる。5と6は土師器の裏で底部と口縁部である。

本址はこれらの出土遺物より6世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	品名	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径	高さ	厚さ	内面	外面		
1	上師器	環	15.4	10.5	—	ナデ	ナデ	口縁実測 口縁1/4残存	Ⅱ区
2	土師器	ハソウ	—	—	—	ナデ	ナデ	口縁実測 1/4残存	Ⅱ区
3	土師器	小型鉢	11.1	6.2	6.7	ヘラナデ	口縁口コナデ ハケ目	口縁実測 1/3残存	Ⅱ区
4	土師器	小型鉢	12.0	6.0	6.0	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	口縁実測 1/6残存	V区
5	土師器	裏	—	6.5	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 撮影済	Ⅱ区
6	土師器	裏	17.0	—	—	ヘラナデ	口縁口コナデ ヘラケズリ	口縁実測 3/4残存	Ⅱ・Ⅲ区

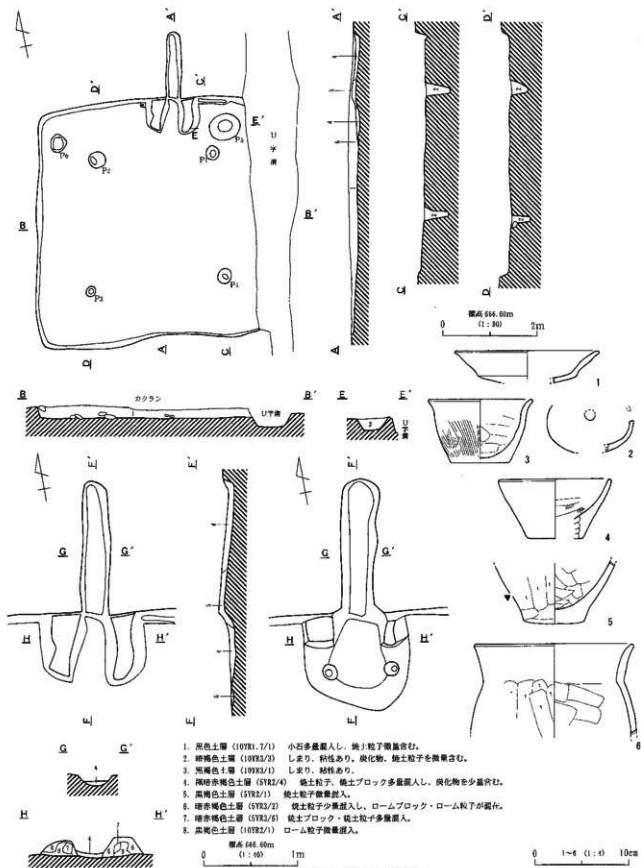
第6表 H4号住居址出土遺物観察表

(5) H5号住居址 (第13図, 写真図版七)

本住居址は、調査区北側であるチ-31、ツ-31Grに位置する。残存状態は住居址のほとんどが調査区域外となり住居址北西コーナーの一部が検出されたのみである。

No.	種別	品名	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径	高さ	厚さ	内面	外面		
1	土師器	鉢	20.1	—	—	口縁口コナデ→ハケ目→ヘラナデ	口縁口コナデ→ハケ目→ヘラケズリ	口縁実測 口縁1/5残存	Ⅱ区
2	土師器	裏	22.8	—	—	口縁口コナデ→ヘラナデ	口縁口コナデ→ヘラケズリ	口縁実測 口縁1/8残存	Ⅱ区

第7表 H5号住居址出土遺物観察表

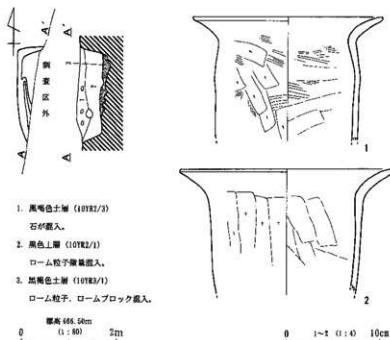


第12図 H4号住居址及び出土遺物実測図

形態は不明であり、規模は北壁0.58m(残存)・西壁1.93m(残存)で、壁高さは西壁側で最大45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で0.32㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれるが、1層中には川原石が多く混入していた。床は軟質であったが、貼床は4~16cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁に一部検出された。断面形はU字形で、幅は約20~29cm・深さ7cmを測る。ピットは確認されなかった。

出土遺物は覆土中から少量出土した。図示した2点はいずれも土師器である。調整等はともに共通するが、土師の胎土が大きく異なり、1は良く精練されており不純物はあまり含まれない粘土であるが、2は2~3mmの長石と考えられる鉱物が多量に含まれ、器面が荒れたような状態である。

本址からの出土遺物は少なく所産時期は不確定であるが、図示した甕の形態より7世紀代に位置づけられると考えられる。



第13図 H5号住居址及び出土遺物実測図

1. 黒褐色土層 (10TR2/3)
石が混入。
2. 黒色土層 (10TR2/1)
ローム粒子・燧石混入。
3. 黒褐色土層 (10TR3/1)
ローム粒子、ロームブロック混入。

(6) H6号住居址 (第14図、写真図版七)

本住居址は、調査区北側であるト-31.32、ナ-31.32Grに位置する。残存状態は西側と一部床面もカランにより大きく壊されている。

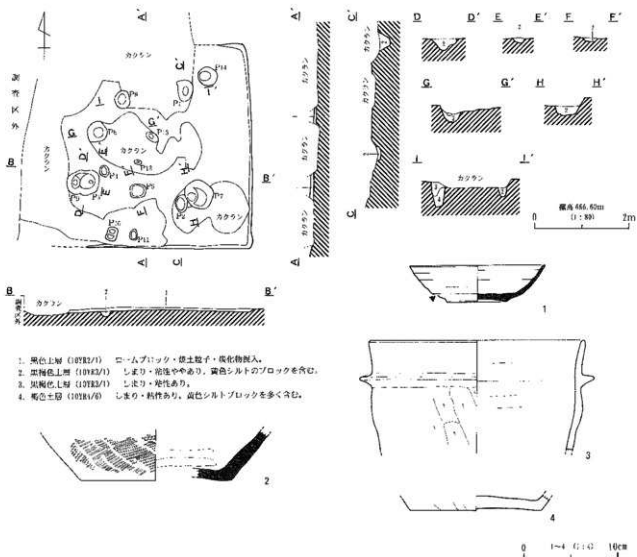
形態は正方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.56m(残存)・南壁3.52m(残存)・東壁4.30mで、壁高さは南壁中央で最大7cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で11.36㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で単層である。床は全体的に硬質であったが、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「敷き床」であった。ピットは14カ所確認され、P1~P3が主柱穴と考えられる。規模はP1が径45cm・深さ35cm、P2が径37cm・深さ11cm、P3が径56cm・深さ29cm、P4が径25cm・深さ10cm、P5が径35cm・深さ9cm、P6が径43cm・深さ31cm、P7が径63cm・深さ25cm、P8が径37cm・深さ51cm、P9が径45cm・深さ18cm、P10が径30cm・深さ10cm、P11が径22cm・深さ5cm、P12が径16cm・深さ4cm、P13が径30cm・深さ10cm、P14が径41cm・深さ7cmを測る。

出土遺物は覆土中から多く、図示したものもいずれも覆土中からの出土である。1は須恵器杯、2は須恵器甕の底部部分で、3は土師器の羽釜である。4は土師器の底部であるが、形状から3と同一個体と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、不確定であるが9世紀代と考えられる。

No.	種別	部種	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置
			口徑長	底径短	内面	外面		
1	須恵器	杯	14.3	6.3	3.9	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底部右側転削り 火摩	完全欠損 口縁1/6残存 II・III区
2	須恵器	甕	-	16.0	-	ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ→タタキ 底部切り離し→ナデ	底部欠損 底部1/4残存 IV区
3	土師器	羽釜	23.0	-	-	ナデ	舞駒付→口縁ヨコナデ 縁部ヘラケズリ	底部欠損 口縁1/4残存 I・II・III区
4	土師器	羽釜	-	14.0	-	ナデ	体→底部ヘラナデ	底部欠損 底部1/2残存 II区

第8表 H6号住居址出土遺物観察表

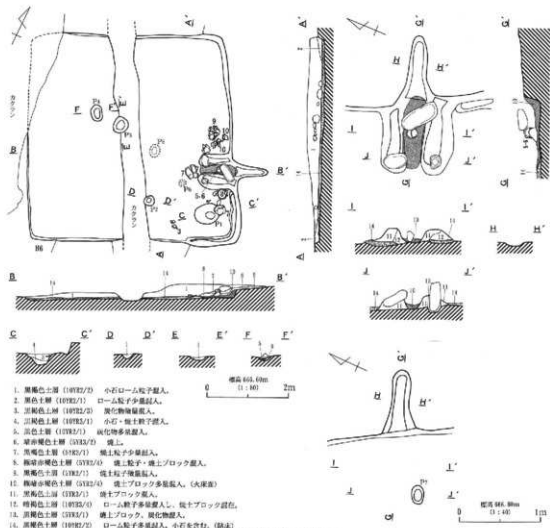


第14図 116号住居址及び出土遺物実測図

(7) H7号住居址 (第15・16図, 写真図版八)

本住居址は、調査区北側であるテ-30.31、ト-30.31.32Grに位置する。残存状態は住居址中央部分と北西コーナー端がカクランにより壊されている他は良好である。重複関係はH6号住居址より本址の方が古い。

形態は正方形を呈する。カマドは東壁やや南よりに造られている。規模は北壁3.89m(残存)4.62m(推定)・南壁4.84m・西壁2.59m(残存)4.82m(推定)・東壁5.00mで、壁高さはカマド脇で最大34cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-68'-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で20.8㎡・推定で24.1㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床は0~8cmの厚さで貼られていた。壁溝は南東コーナー部に検出された。断面形はU字形で、幅は約18~29cm・深さ2~4cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認された。主柱穴は確定できなかったが、P1は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径62cm・深さ28cm、P2が径25cm・深さ15cm、P3が径40cm・深さ10cm、P4が径40cm・深さ11cm、P5が径30cm・深さ11cmを測る。

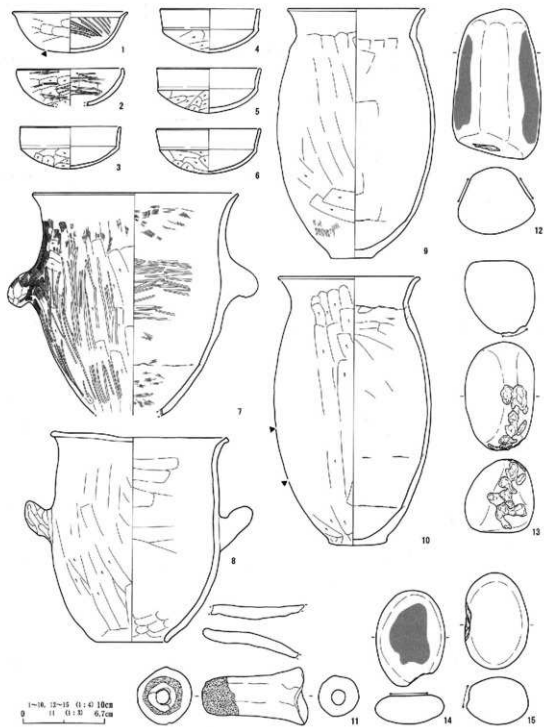


第15図 H7号住居址実測図

カマドは東壁南よりに検出された。主軸方位はN-69°-Eを示し、住居長辺とほぼ同一であった。残存状況は煙道部と袖部ともに良好に残存しており、焚口部の天井石は原位置から動いていたが、焚口部の構築石は残存していた。規模は煙道部長さ89cm・幅23cm、袖部高さ17~20cmで、火床部は焚口部よりカマド奥まで広がり、焼土の厚さは5cmであった。燃焼部の中央には支脚石があり、石上部には図示した5と6の土師器環が重ねて載せられていた。また袖部は貼床を施した後、粘土で構築されていることが断面観察で解った。

出土遺物は覆土中とカマド周辺からの出土が多く、特にカマド周辺のは床面上のものが多く、破棄された時の原位置を保っていると考えられるものが多かった。

1~6は土師器環であるがタイプはそれぞれ異なる。1はいわゆる「外斜口縁環」、2は「内屈口縁環」、3~6は須恵器環蓋模倣の土師器環である。また3~6は口径や底部へラケズリの技法また胎土ともに非常に似通っている。7と8は把手付の大型甕であるが、把手の向きが7と8で異なっている。8は単孔であり7も単孔と考えられる。9と10は土師器甕であり、カマド北側で並んで出土した。11は土製の羽口であり、端部が欠損しているが全容は把握できる。先端に鉄分の付着が見られる。12~



第16图 H7号住居址出土遗物实测图

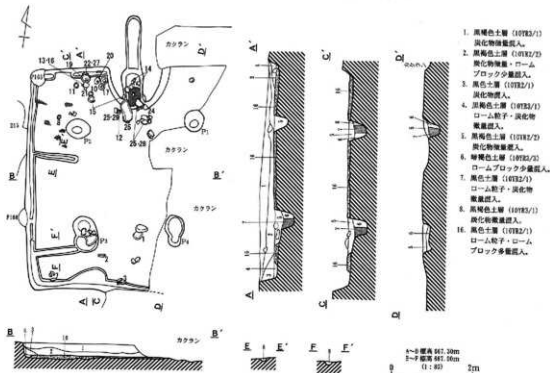
15は敵石と磨石で両方の機能を備えたものもある。本址はこれらの出土遺物より6世紀前半でも初頭に近い段階に位置づけられる。

No.	種別	部類	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			口径(底径)	高さ	内面	外面			
1	土師器	甕	14.2	—	5.0	縦文	口縁ヨコナデ ヘラケズリ→ナデ	河内東部 1/4残存	I区
2	土師器	甕	18.8	—	6.6	ヘラナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ	完全実形 1/2残存	
3	土師器	甕	12.4	12.2	5.2	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実形 3/4残存	3ca I区
4	土師器	甕	12.8	11.9	5.4	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実形 2/3残存	I区
5	土師器	甕	12.8	12.4	5.5	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実形 ほぼ実形	3ca
6	土師器	甕	12.0	12.0	5.6	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実形 ほぼ実形	11cm
7	土師器	甕	25.4	—	—	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ヘラケズリ→ミガキ	完全実形	0~1cm
8	土師器	甕	21.9	8.8	25.0	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	完全実形 実形	0ca II区
9	土師器	甕	16.9	5.2	30.6	ヘラナデ	口縁ヨコナデ ハケ目→ヘラケズリ→ナデ	完全実形 ほぼ実形	0ca
10	土師器	甕	17.4	7.2	33.0	ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実形 4/5残存	0~2cm
11	土製品	羽口	外径2.8~5.2 内径1.4				ナデ	先端部断片付	IV区
No.	部類	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
12	磨石	敵石	18.9	10.9	8.6	2670.00		西面にすり面 下端面に磨打痕	II区
13	磨石	敵石	13.3	8.5	9.0	1560.00		上面から正面にかけて磨打痕	IV区
14	磨石	敵石	11.7	8.4	3.7	310.00		正面にすり面 下端面に磨打痕	IV区 法南
15	磨石	敵石	11.8	7.8	5.9	710.00		左面に磨打痕	II区

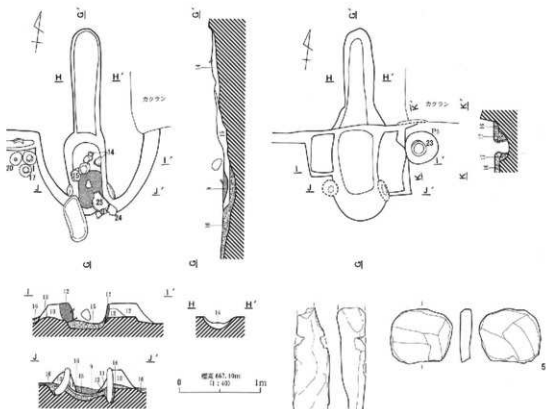
第9表 H17号住居址出土遺物観察表

(8) H 8号住居址 (第17・18・19図, 写真図版十・十一)

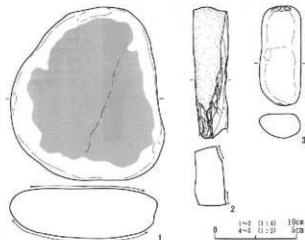
本住居址は、調査区北側であるニ-45.46.47、又-45.46.47Grに位置する。残存状態は東側側がカクランにより壊されている他は良好である。重複関係はD15より本址の方が古い。



第17図 H8号住居址実測図



1. 暗赤褐色土層 (1012/4) 大坑。
10. 灰褐色土層 (1012/7) ロームブロック多量混入。
11. 黒色土層 (1012/1) 焼土ブロック、炭混入。
12. 暗赤褐色土層 (1012/6) 焼土。(カチカチ)
13. 暗褐色土層 (1012/5) ローム粒子多量混入し、黒色土ブロックが混在する。
14. 黒褐色土層 (1012/2) 焼土粒子少量混入。
15. 黒緑赤褐色土層 (1012/3) 焼土粒子・炭化物微量混入。
17. 黒褐色土層 (1012/2) ローム粒子・ロームブロック混入。



第18図 H8号住居址カマド及び出土遺物実測図

形態は方形を呈すると考えられる。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁4.73m(残存)・南壁2.81m(残存)・西壁5.26mで、壁高さは南西コーナー部で最大40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-8°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で18.3㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であり、貼床は最大8.5cmの厚みで確認された。壁溝は北壁、西壁、南壁に確認された。断面形はU字形で、幅は約7~29cm・深さ3~10cmを測る。また、西壁側から伸びるように2箇所の間仕切り溝が床面で確認された。ピットは掘り方時の検出も含めて5カ所確認され、P1~P4が

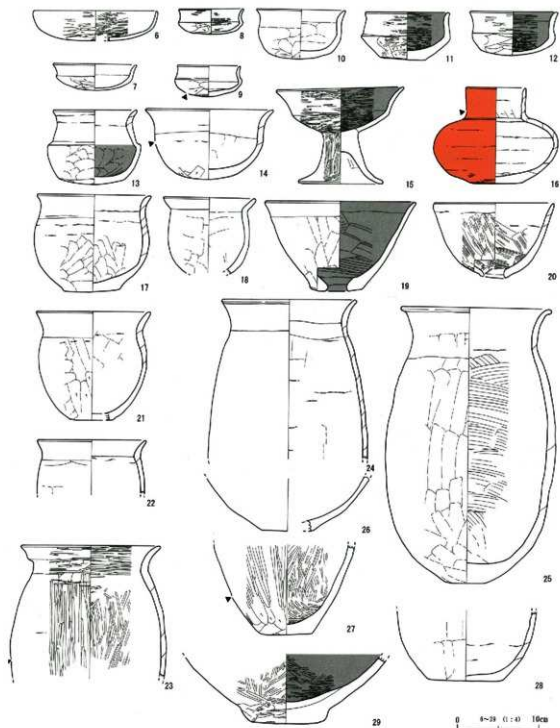
主柱穴と考えられる。規模はP1が径50cm・深さ39cm、P2が径58cm・深さ44cm、P3が径90cm・深さ48cm、P4が径76cm・深さ20cm、P5が径40cm・深さ16cmを測る。

カマドは北壁中央に検出された。残存状況は良好で焚口部の構築材と天井石が検出された。規模は煙道部長さ132cm・幅32～37cm、袖高さは掘り方面より32cmを測る。袖は住居址掘り方時に備かに高く地山を掘り残し、その上に暗褐色土で構築している。火床部は円形で良く焼けており、焼上の厚みは8cmを測る。煙道部の主軸方位はN-7°-Wを示す。火床部及び煙道部も構築上がある。

出土遺物はカマド周辺の床面上からまとまって出土した(写真図版十・十一参照)。1～3は石製品で1は磨石で台としての使用が考えられ、両面磨りが観察された。4と5は土製品で、4はカマド煙道部から出土し、形態はヘラ状を呈している。用途は不明である。5は土製円盤で土師器裏片の転用品と考えられる。6～12までは土師器坏である。6は胎上も精緻され他の坏とは形態が異なる。7～9は須恵器片蓋模倣タイプの坏と考えられ、いずれも小型品である。13と14は鉢と形がいずれもタイプの異なるもので13は小型甕のような形態を呈する。15は高坏である。ほぼ完成であり坏部は黒色処理されている。16は直口壺で口縁部が短いタイプのものである。外面に赤彩が施されている。17.18.21～22は小型甕である。19と20は単孔の小型の甕であり、19は内面黒色処理を行っていた。23～28は土師器甕である。23はカマド東脇のピットより底部を欠いた状態で出土した。このP5は貯蔵穴的な性格が考えられるが、右袖が大きく覆っていたため、掘り方時の検出となった。29は甕の底

No.	種別	器種	法 器		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考	出土位置	
			口径(cm)	底径(%)	内 面	外 面			
4	土製品	小皿	7.3	2.2	1.8			高さ19.51g	カマド煙道部
5	土製品	円盤	縦3.3	横3.8	0.7			高さ12.01g	II区
6	土師器	坏	15.2	-	(5.6)	ミガキ	口縁ミガキ 体部ヘラケズリ	回転装置 1/4残存	II・III区
7	土師器	坏	10.2	-	3.2	ミガキ	体部ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実測 完形	8cm
8	土師器	坏	8.0	-	3.1	ミガキ	体部ヘラケズリ 口縁ヨコナデ・ミガキ	完全実測 完形	0cm
9	土師器	坏	7.8	-	3.8	底部ヨコナデ→口縁ヨコナデ	底面ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	完全実測 完形	P5
10	土師器	坏	10.9	-	6.2	ナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ→ナデ→口縁ヨコナデ	完全実測 完形	0cm
11	土師器	坏	10.1	5.7	5.9	ミガキ→黄色色施	底面ナデ 下部部ヘラケズリ・ミガキ 上半部ヨコナデ→ミガキ	完全実測 完形	0cm
12	土師器	坏	10.8	-	6.4	ミガキ・黄色色施	ト下部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→ミガキ	完全実測 完形	0cm
13	土師器	鉢	10.3	8.0	9.1	下部部ヘラケズリ 黄色色施 上半部ヨコナデ	下部部ヘラケズリ→ナデ 底面ヘラケズリ 上半部ヨコナデ	完全実測 完形	2cm
14	土師器	鉢	13.7	-	8.5	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ナデ→口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 1/3残存	0～1cm
15	土師器	高杯	15.7	16.6	11.6	杯部ミガキ・黄色色施 胴部ヘラケズリ	杯部ミガキ 握部ミガキ	完全実測 ほぼ完形	0～3cm
16	土師器	直口壺	7.4	6.5	11.8	口縁ヘラケズリ→ナデ 胴部ナデ 底部ヘラケズリ	ト下部→底部ミガキ 黄色色施	完全実測 顔面残存している	0cm
17	土師器	甕	14.0	6.9	11.9	上半部ヨコナデ 下部部ヘラケズリ	中央部ナデ 下部部ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実測 完形	0cm
18	土師器	甕	11.3	-	(9.3)	口縁ヨコナデ 胴部ヘラケズリ→ナデ	口縁ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	回転装置 1/4残存	II区
19	土師器	甕	18.5	6.3	11.1	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ 口コナデ 黄色色施	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ 底部ナデ	完全実測 完形	2cm
20	土師器	甕	14.5	-	9.1	口縁ヨコナデ→ヘラケズリ	口縁ヨコナデ→ヘラケズリ	完全実測 完形 孔径2.4	0cm
21	土師器	甕	14.1	5.3	13.3	胴部ヘラケズリ→ナデ 口縁ヨコナデ	胴部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	回転装置 1/3残存	0cm
22	土師器	甕	13.4	-	(6.7)	顔面残存している不明	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実測 完形	5cm III区
23	土師器	甕	17.1	-	(16.3)	ヨコナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 1/2残存	0cm P5
24	土師器	甕	16.6	-	(19.5)	胴部ヘラケズリ→ナデ 口縁ヨコナデ	胴部ナデ 口縁ヨコナデ	完全実測 ほぼ完形	1.5cm カマド
25	土師器	甕	18.5	2.2	33.7	口縁ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	胴部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ 胴部ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形	0cm I区
26	土師器	甕	-	6.4	(6.8)	顔面残存している不明 底部ヘラケズリ 黄色色施	顔面残存している不明	回転装置	I・II区
27	土師器	甕	-	6.1	(11.1)	ミガキ	底部・底部付部ヘラケズリ 胴部ミガキ	完全実測	5cm P5
28	土師器	甕	-	9.2	(8.3)	顔面残存している不明	ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	回転装置	0cm カマド
29	土師器	甕	-	9.3	(8.3)	ミガキ・黄色色施	底部付部ヘラケズリ ミガキ	回転装置	0cm カマド III区
No.	器 種	数	最大径	最大深	容 量	注 意			
1	磨石(磨石)	磨石製陶器	完形	21.2	18.8	6.2	3590.66	赤・黒にすり面	3cm Ⅱ区
2	磨石?	鹿角砂岩	一部欠	(10.0)	4.4	7.7	(800.00)	正面下部に磨石の痕跡・裏・正面自然石	下端部欠損
3	磨石	砂岩	完形	12.2	5.0	3.1	312.00	上・下両面に強い磨石痕	

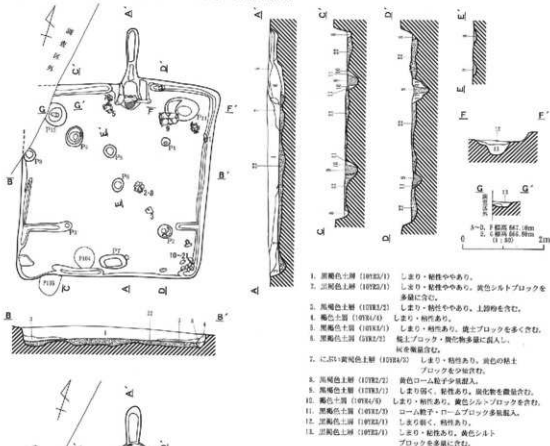
第10表 I18村住居址出土遺物観察表



第19图 H8号住居址出土遺物実測図

部付近と考えられる。内面黒色処理が行われている。本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

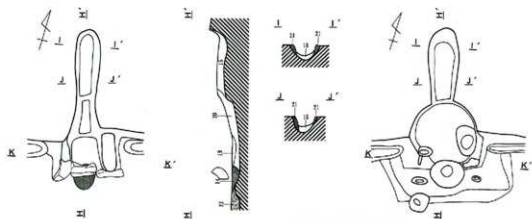
(9) H 9号住居址 (第20・21・22図, 写真図版九)



本住居址は、調査区北側であるナ-39.40、ニ-39.40Grに位置する。残存状態は住居址北西コーナー端がカクランにより壊されている他は良好である。

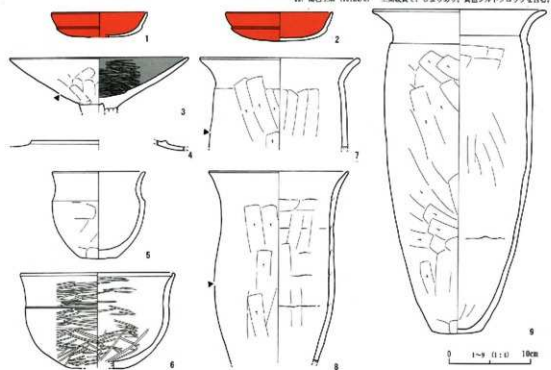
形態は方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.96m(残存)4.78m(推定)・南壁4.23m・西壁2.96m(残存)4.60m(推定)・東壁4.50mで、壁高さは西壁中央で最大37cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-13'-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で19.5㎡・推定で20.1㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床は3~13cmの厚さで貼られていた。壁溝は北壁と東壁の全体、西壁と南壁の一部に確認された。断面形はU字形で、幅は約8~26cm・深さ3~10cmを測る。

第20図 H9号住居址実測図

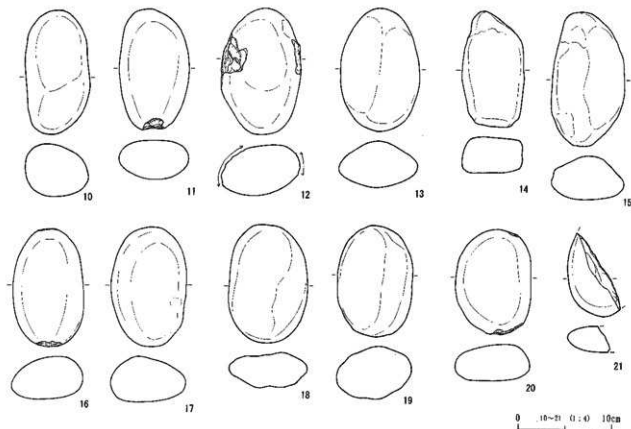


標高 477.10m
(1:40)

14. 赤赤褐色土層 (3782/4) 火成。
15. 暗赤褐色土層 (3782/4) 焼土ブロック・ロームブロック混入。
16. 高褐色土層 (3782/1) 焼土ブロック・灰・ロームブロック混入。
17. 暗赤褐色土層 (3782/4) 焼土。(火熱による焼け込み)
18. 高褐色土層 (3782/1) 炭化物・焼土ブロック多量混入。
19. 暗赤褐色土層 (3782/3) 焼土粒子・焼土ブロック少量混入。
20. 高褐色土層 (3782/1) ロームブロック混入。
21. 暗赤褐色土層 (3782/4) 焼土粒子・焼土ブロック多量混入。
22. 褐色土層 (10784/4) 上面破片で、しきりあり。黄色シルトブロックを含む。



第21図 H9号住居址カマド及び出土遺物実測図



第22図 H9号住居址出土遺物実測図

また、P2とP3に向かって壁より間仕切り溝が伸びていた。ピットは掘り方検出時も含め12カ所確認された。P1～P4が支柱穴、P11とP12は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径23cm・深さ39cm、P2が径33cm・深さ23cm、P3が径23cm・深さ31cm、P4が径50cm・深さ31cm、P5が径33cm・深さ9cm、P6が径32cm・深さ10cm、P7が径66cm・深さ24cm、P8が径30cm・深さ7cm、P9が径34cm・深さ17cm、P10が径47cm・深さ17cm、P11が長軸82cm・短軸55cm・深さ35cm、P12が長軸53cm・短軸52cm・深さ16cmを測る。

住居掘り方はカマド前と東西壁前が一部高くなる「コ」字状の掘り方で、掘り方検出時に支柱穴から間仕切り溝が伸びている状態が確認された。

カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN-17°-Wを示す。残存状況は良好であり、煙道部の長さは149cm・幅23～37cmを測り、極暗赤褐色土で構築していた。袖は地山掘り残しの部分を芯材として黒褐色土で補強している。袖の高さは残存部で35cmを測る。焚口部は大型の礫を3つ使用し、袖と天井を構築していた。火床部は焚口部付近にあり、良く焼けており焼土の厚みは9cmを測る。

出土遺物は覆土中とカマド周辺から多く出土した。1と2は土師器環でいずれも内外面赤彩が施されている。本土器の色彩は橙色ではなく、いわゆる弥生箱清水式土器の様な赤色である。3は高坏坏部で内面黒色処理を施す。4は高坏脚部の破片か、或いはいわゆる二重口縁壺の口縁部とも考えられる。いずれにしても本址に伴う遺物ではなく古墳前期の所産遺物と考えられる。5は小型甕、6は鉢である。見込み部に放射状の暗文的なミガキが施されている。7～9は土師器甕である。9はほぼ完形でカマド東側の貯蔵穴脇から出土した。10～21は編み物石と考えられる。住居址南東コーナー部よりまとめて出土した。11.16.20等は敲打の跡があり、12は両側に抉りのような敲打が確認できる。

本址はこれらの出土遺物より7世紀前半に位置づけられると考えられる。

No.	種別	部材	数量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			口内径(内径)	外径	内面	外面			
1	土師罎	杯	11.8	10.5	18.0	ナデ 金剛赤色塗彩	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ 金剛赤色塗彩	原実田園 1/2残存	0ca
2	土師罎	杯	13.1	11.8	3.6	ナデ 金剛赤色塗彩	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ 金剛赤色塗彩	完全実田園 4/5残存	0ca
3	土師罎	高杯	23.0	-	-	ミガキ 黒色処理	ナデ	国本実田園 杯底残存	1cm
4	土師罎	高杯	-	-	-	ナデ	ナデ	国本実田園 底部1/8残存	IV区北寄り
5	土師罎	小形甕	11.4	4.8	10.7	ナデ	ヘラケズリ	完全実田園 甕底	11cm
6	土師罎	鉢	19.8	6.6	11.6	ミガキ 磨文?	ミガキ	国本実田園 1/4残存	カマド Ⅱ区
7	土師罎	甕	19.7	-	-	ヘラケズリ	口縁ヨコナデ・ヘラケズリ	完全実田園 口縁完全	0ca
8	土師罎	甕	17.2	-	-	ナデ	口縁ヨコナデ・ヘラケズリ	完全実田園 口縁完全	0ca
9	土師罎	甕	21.4	6.1	39.7	ヘラケズリ	ヘラケズリ・口縁ヨコナデ	完全実田園 甕底	0ca
10	罎	鉢	残存	残存	最大径	重量	所見	出土位置	
10	罎	罎	漆黒灰被覆	完全	13.1	6.9	5.8	630.00	0~15cm
11	罎	罎	黒灰被覆	完全	12.7	7.4	4.2	450.00	0~15cm
12	罎	罎	漆黒灰被覆	完全	13.1	8.6	3.3	820.00	罎底に盛り付いた
13	罎	罎	角四角・灰山削	完全	13.0	8.4	3.1	740.00	罎底に盛り付いた
14	罎	罎	角四角	完全	12.3	6.5	4.5	550.00	0~14cm
15	罎	罎	角四角・灰山削	完全	14.2	7.8	4.7	660.00	0~15cm
16	罎	罎	角四角・灰山削	完全	12.5	8.5	4.6	460.00	上・下部部に盛り付いた
17	罎	罎	角四角・灰山削	完全	13.6	8.1	5.0	680.00	0~14cm
18	罎	罎	角四角・灰山削	完全	12.5	8.5	3.8	435.00	0~14cm
19	罎	罎	角四角・灰山削	完全	11.7	8.0	5.7	880.00	0~14cm
20	罎	罎	角四角・灰山削	完全	11.1	8.0	4.0	980.00	上・下部部に盛り付いた
21	罎	罎	角四角・灰山削	1/2残	(6.9)	(5.6)	(2.8)	(136.00)	有平分欠

第11表 H9村住居址出土土物観察表

(10) H10号住居址 (第23図, 写真図版十二)

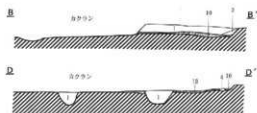
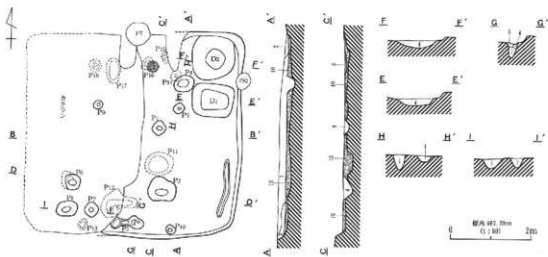
本住居址は、調査区北側であるト43.44、ナ43.44Grに位置する。残存状態は西側半分がカクランにより大きく壊されている。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.60m(残存)5.20m(推定)・南壁3.15m(残存)4.87m(推定)・西壁4.53m(推定)・東壁4.60mで、壁高さは南壁中央で最大18cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部部分で12.04㎡・推定で24.7㎡を測る。住居址の主軸方位はNを示す。覆上はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面上には硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みが11cmで貼られている。壁溝は東壁南よりに壁から離れた状態の一部検出され、規模は幅10~15cm・深さ3~8cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め18カ所確認された。P3は入り口施設の柱穴と考えられる。1規模はP1が径37cm・深さ9cm、P2が径72cm・深さ33cm、P3が径81cm・深さ38cm、P4が径51cm・深さ16cm、P5が径30cm・深さ30cm、P6が径42cm・深さ31cm、P7が径37cm・深さ21cm、P8が径51cm・深さ19cm、P9が径24cm・深さ22cm、P10が径25cm・深さ26cmを測る。P11からが掘り方検出時のピットで、規模がP11が径68cm・深さ17cm、P12が径73cm・深さ25cm、P13が径28cm・深さ21cm、P14が径28cm・深さ21cm、P15が径27cm・深さ7cm、P16が径30cm・深さ10cm、P17が径59cm・深さ11cm、P18が径32cm・深さ16cmを測る。また、本址にはカマド東脇に2つの貯蔵穴と考えられる掘り込みが確認された。規模はD1が長軸101cm・短軸79cm・深さ20cm、D2が長軸107cm・短軸104cm・深さ18cmを測る。

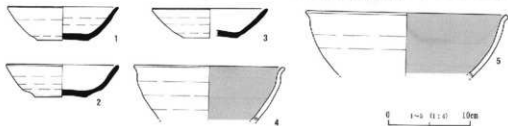
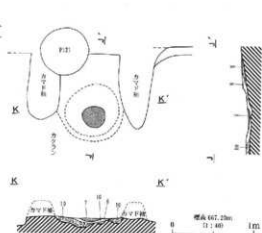
本址のカマドは北壁中央に造られていたが、上面をカクランにより削平され煙道部等は確認されず火床部のみ検出にとどまった。カマドは貼床の上に構築され、火床部の焼土厚みは3cmを測る。

No.	種別	部材	数量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			口内径(内径)	外径	内面	外面			
1	京鹿野	杯	13.6	6.2	4.1	口クロナデ	口クロナデ	国本実田園 1/3残存	Ⅱ区
2	須磨部	杯	13.9	6.4	4.0	口クロナデ	口クロナデ 底部有同軸糸切り	完全実田園 底部完全	Ⅰ区
3	須磨部	杯	14.2	6.6	(3.6)	口クロナデ	口クロナデ 底部ヘラケズリ	国本実田園 1/3残存	Ⅱ区
4	土師罎	鉢	18.6	-	-	口クロナデ 黒色処理	口クロナデ	国本実田園 口縁1/8残存	Ⅰ区
5	土師罎	鉢	23.0	-	-	口クロナデ 黒色処理	口クロナデ	国本実田園 口縁1/8残存	Ⅱ区北寄り

第12表 H10号住居址出土土物観察表



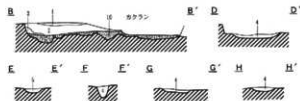
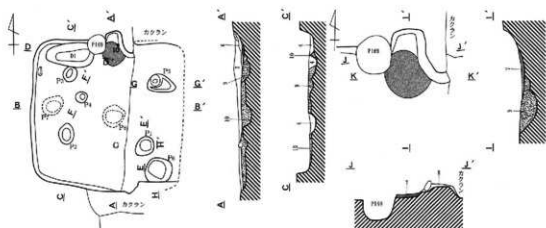
1. 黒褐色土層 (107R3/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを含む。
2. 褐色土層 (107R4/1) しまり・粘性弱。水田跡等上。
3. 褐色土層 (107R4/2) しまり・粘性弱。黄色シルトブロック上層。
4. 黒褐色土層 (107R3/2) しまり・粘性あり。
5. 褐色土層 (107R4/3) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを含む。
6. 黒褐色土層 (107R3/1) しまり・粘性あり。炭化物、粘土粒子多く含む。
7. 暗赤褐色土層 (107R3/3) 水成。
8. 黒褐色土層 (107R2/2) 地上灰子層埋入。
9. 黒褐色土層 (107R2/3) ローム灰子・ロームブロック埋入。
10. 黒褐色土層 (107R3/2) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを含む。



第23図 H10号住居址及び出土遺物実測図

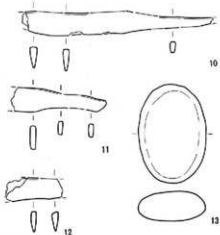
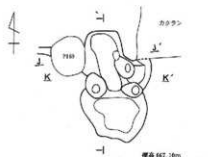
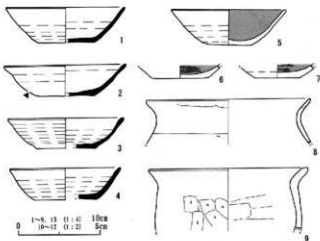
出土遺物は覆土中からが多く、図示したのもいずれも覆土中からの出土である。1～3は須恵器坏であり、2は底部右回転系切り離し。3は底部ヘラケズリを施している。4と5は土師器鉢でいずれも内面黒色処理されている。

本址はこれらの出土遺物より9世紀前半に位置づけられる。



1. 褐色土層 (117R1/1) しまり・粘性ややあり。
2. 黄褐色土層 (117R3/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを多く含む。
3. 黄褐色土層 (117R3/1) しまり・粘性ややあり。黄色シルトブロック少ない。
4. 黄褐色土層 (117R3/1) しまり強く、粘性あり。黄土粒子を微量含む。
5. 褐色土層 (117R4/1) しまりあり。粘性ややあり。黄土粒子を含む。
6. 褐色土層 (117R4/2) しまり・粘性あり。黄土ブロックを微量含む。
7. 黄褐色土層 (117R5/2) 流土。(水)
8. 黄土層 (117R2/1) ロームブロック混入。
9. 黄褐色土層 (117R2/2) 黄土粒子・炭化物・微量混入。
10. 黄褐色土層 (117R2/3) ローム粒子・ロームブロック混入。

標高 647.10m
(1: 80) 2m



第24図 H111号住居址及び出土遺物実測図

(11) 11号住居址 (第24図, 写真図版十三)

本住居址は、調査区北側であるナ-43.44、ニ-43.44Grに位置する。残存状態は東側がカクランにより壊されていたが掘り方部分が一歩残存していた。新旧関係はH19号住居址より本址の方が新しい。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.45m・南壁2.06m(残存)3.38m(推定)・西壁3.17m・東壁3.36m(推定)で、壁高さは南壁中央で最大29cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居址の床面積は7.61㎡(残存)・12.33㎡(推定)を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~12cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め8カ所が確認され、P1~3・P5が支柱穴、と考えられる。規模はP1が径51cm・深さ13cm、P2が径51cm・深さ16cm、P3が径35cm・深さ21cm、P4が径30cm・深さ30cm、P5が径71cm・深さ19cm、P6が径68cm・深さ11cm、P7が径56cm・深さ14cm、P8が径57cm・深さ19cmを測る。また、住居址カマド西脇には貯蔵穴と考えられる掘り込みがあり、規模は長軸117cm・短軸58cm・深さ13cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は左側袖がピットに、東側袖がカクランにより削平されていた。煙道部は長く伸びないタイプで、火床部は貼床の上に構築されていた。

出土遺物は覆土中のものが多く、図示した遺物も覆土中やカマド内、掘り方検出時のものである。1~4は須恵器環で、底部はいずれも回転糸切り難しである。5~7は土師器環でいずれも内面黒色処理されている。8と9は土師器甕で、8はいわゆる「武蔵甕」のタイプに含まれる。10~12は鉄製品でいずれも刀子の一部と考えられる。13は楕円形の川原石で顕著な磨りあと等はなかったが、遺構内への持ち込みと考え図示した。

これら遺物より本址は8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	部類	法量		形状・調整・文様		備考	出土位置	
			口部径	底径	内面	外面			
1	須恵器	環	14.6	7.0	(4.3)	ロクロナデ	底面回転糸切り(方向不明)	回転実測 1/4残存	IV区
2	須恵器	環	13.0	6.9	(3.8)	ロクロナデ	底面回転糸切り	完全実測 2/3残存	カマド
3	須恵器	環	14.4	7.2	3.7	ロクロナデ	底面回転糸切り 火磨	回転実測 1/4残存	IV - IV区ホリ方
4	須恵器	環	13.6	7.4	(3.9)	ロクロナデ	底面回転糸切り(方向不明)	回転実測 1/4残存	IV区
5	土師器	環	14.2	5.6	4.3	ロクロナデ	黒色処理	完全実測 ほぼ完全	P7
6	土師器	環	-	7.2	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測 1/4残存	I区ホリ方
7	土師器	環	-	5.4	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測 3/4残存	III区
8	土師器	甕	20.2	-	-	ナデ	ヘラケズリ	回転実測 1/6残存	カマド
9	土師器	甕	19.6	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 1/17残存	III区
10	刀子	鉄	残存中	最大径	最大厚	重量	所見		出土位置
11	刀子	鉄	(11.7)	1.4	(0.4)				0cm
12	刀子	鉄	(5.9)	1.5	(0.4)				カマドホリ方
13	刀子	鉄	(3.5)	(1.3)	(0.4)				カマドホリ方
13	不明	磨り磨石	完全	12.0	8.3	3.6	494.00	顕著な使用痕なし	

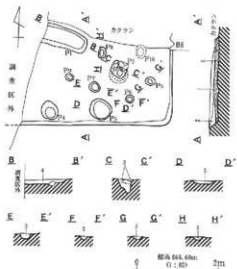
第13表 H11号住居址出土遺物観察表

(12) 12号住居址 (第25図, 写真図版十二)

本住居址は、調査区北側であるト-32.33、ナ-32.33Grに位置する。残存状態は住居址西側が調査区域外、北側がカクランによって削平されている。新旧関係は本址の方がH6号住居址より古い。

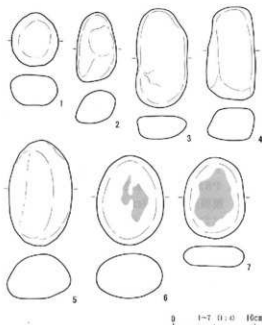
形態は全容は不明であるが、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は南壁3.64m(残存)、東壁2.85m(残存)で、壁高さは南東コーナー部で最大16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.98㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~14cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め10カ所確認された。規模はP1が径108cm・深さ16cm、P2が径47cm・深さ33cm、P3が径56cm・深さ8cm、P4が径45cm・深さ17cm、P5が径22cm・深さ8cm、P6が径20cm・深さ9cm、P7が径28cm・深さ11cm、P8が径25cm・深さ9cm、P9が径22cm・深さ6cm、P10が径33cm・深さ41cmを測る。

出土遺物は覆土中から古墳時代の甕片と図示した編み物石が出土した。1~6の編み物石はP4よりまともって出土した。これら遺物より不確実ではあるが本址は古墳時代後期に位置づけられると考える。



1. 黒色土層 (0132/1) しまり・粘りあり、炭化物を微量含む。
2. 黒褐色土層 (0133/1) しまり・粘りあり。
黄色シルトブロックを多量含む。
3. 黒褐色土層 (0133/1) ロームブロック多量混入。
4. 黒褐色土層 (0132/2) 小石を多量含む。
5. 黒褐色土層 (0132/2) ロームブロック・ローム粒を少量混入。

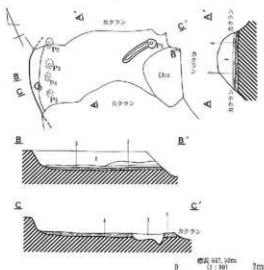
第25図 H12号住居址及び出土遺物実測図



(13) H13号住居址 (第26図, 写真図版十三)

本住居址は、調査区北側であるニ-49.50、ヌ-49Grに位置する。残存状態は南北側と東壁側がカクランにより壊されており住居址の全容は不明である。重複関係はH14号住居址とD16号土坑があり、古い方よりH14号住居址→本址→D16号土坑である。

形態は不明であり、規模は西壁1.70m(残存)で、壁高さは西壁中央で最大43cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.92㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床面上の3層中に炭化物が検出された。床は全体的に硬質で、貼床は全体に3~12cmの厚さで貼られていた。壁溝は部分的に検出された。断面形はU字形で、幅は約14~16cm・深さ8cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認された。規模はP1が径24cm・深さ29cm、P2が径25cm・深さ11cm、P3が径23cm・深さ12cm、P4が径22cm・深さ6cm、P5が径17cm・深さ6cmを測る。



1. 暗褐色土層 (0132/2) 硬質、ロームブロック微量混入。
2. 黒褐色土層 (0133/1) 硬質、ロームブロック微量混入。炭化物を含む。
3. 黒褐色土層 (0132/2) 硬質。炭化物微量混入。
4. 灰色土層 (0132/1) 砂質。ローム粒を少量混入。

第26図 H13号住居址実測図

出土遺物は覆土中から多く図示可能なものはなかったが、土師器高台杯や内面黒色処理された坏片等の出土から平安時代の所産と考えられる。

No.	品名	素材	残存率	最大径	最大径	最大径	重量	備註	出土状況
1	編み物石	安山岩	完形	6.6	5.8	3.7	173.00		P4
2	編み物石	ホルンフェルス	完形	8.5	4.9	4.3	247.00		P4
3	編み物石	輝石安山岩	完形	12.0	6.5	3.1	356.00		P4
4	編み物石	石英安山岩	完形	11.4	5.8	3.9	457.00		P4
5	編み物石	角閃石安山岩	完形	12.9	7.8	5.5	620.00		P4
6	編み物石	緑輝輝石岩	完形	10.9	8.3	5.5	610.00	正面にすり面	P4
7	磨石	緑輝輝石岩	完形	9.9	7.5	2.5	266.00	正面にすり面	P10

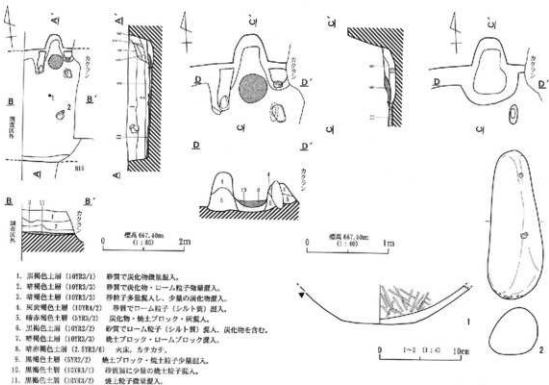
第14表 H12号住居址出土遺物観察表

(14) H14号住居址 (第27図, 写真図版十四・十五)

本住居址は、調査区北よりであるヌ-48.49Grに位置する。残存状態は東壁側がカクラン、西側が調査区域外となる。新旧関係は古い方より本址→H13号住居址である。

形態は方形を呈すると考えられる。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.17m(残存)・南壁1.17m(残存)で、壁高さは北壁カマド脇で最大53cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.18㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であり、床は1~5cmの厚さで貼られていた。

カマドは北壁中央に検出され、ほぼ良好な形で確認された。煙道部は外に煙道が伸びないタイプで、規模は長さ60cm・幅23cmを測る。軸は川原石を芯材として、褐色土で被覆していた。規模は高さが34~48cmを測る。火床部はよく焼けており、焼土の厚みは7cmを測る。



第27図 H14号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	形種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			山形色(%)	赤褐色(%)	西面		外面			
1	土師器	壺	—	9.0	—	ナブエミガキ		不明	完全実高 底筋完整	Dca 1区
Ka	器種	素材	性内容	最大径	最大径	最大径	重量	所産		出土位置
2	麻石	定山形	完好	18.2	6.9	5.5	960.00	下部部に浅い敲打痕 上部が突っばい		Dca 際

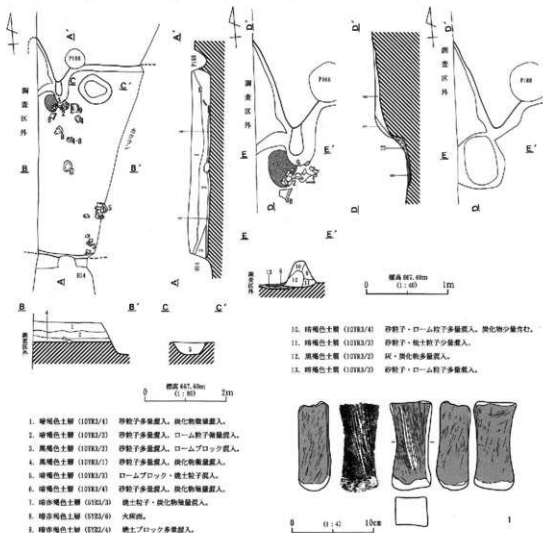
第15表 H14号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中からが多かった。1は土師器壺か壺の底部であり、内面にあらいミガキが施されている。2は敲き石で側面と先端に敲打の跡が確認できた。

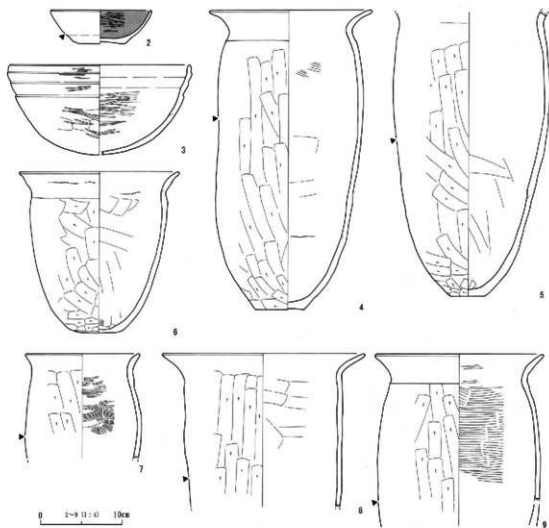
本址は出土遺物が少なく、所産時期は不確定である。

(15) H15号住居址 (第28・29図, 写真図版十五)

本住居址は、調査区北よりである二-47.48、ヌ-47.48.49Grに位置する。残存状態は住居址東側がカクランにより壊され、西側が調査区域外となる。遺構の新旧関係は新しい方よりH14号住居址→本



第28図 H15号住居址及び出土遺物実測図



第29図 H15号住居址出土遺物実測図

No.	種別	器種	出 土		成 形 ・ 観 覧 ・ 文 様				備 考	出土位置	
			出 土 年 代	出 土 層	内 面	外 面	厚 度	重 量			
2	土師器	埴	12.4	5.7	4.1	ミガキ 褐色肌唐	口タコナデ	底縁右側転車切り	完全実高	底縁定形	0cm
3	土師器	埴	22.4	—	(11.0)	ハケ目→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	—	田転実高	1/4残存	20cm
4	土師器	甕	20.0	5.8	36.7	ヘラナデ (ハケナデ)	ヘラケズリ	ヨコナデ	完全実高	口縁1/3残存	0~5cm カマド
5	土師器	甕	—	4.2	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	—	完全実高	底縁定形	0cm
6	土師器	甕	19.6	6.3	19.7	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	完全実高	ほぼ定形	カマド
7	土師器	甕	14.1	—	—	ハケ目	ヨコナデ	ヘラケズリ	完全実高	口縁2/4残存	カマド
8	土師器	甕	24.9	—	—	ヘラナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	完全実高	口縁2/3残存	0~4cm カマド
9	土師器	甕	20.6	—	—	ハケ目	ヘラケズリ	ヨコナデ	田転実高	口縁1/3残存	0.5cm カマド
No.	器 種	素 材	推定年 代	最大径	最大幅	最大厚	重 量	所 在	出土位置		
1	成石	武蔵野	推定年 代	10.85	5.1	4.2	348.00	上部穴縁 隅部とも底面	転本有り		

第16表 H15号住居址出土遺物観察表

址→H44号住居址である。

形態は不明である。規模は北壁2.62m(残存)・南壁1.38m(残存)で、壁高さは南壁側で最大48

cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.32㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は軟質であり、カマド側で一部貼床が確認された。また、カマド東脇に貯蔵穴が検出された。規模は長軸82cm・短軸64cm・深さ33cmを測る。カマドは北壁側に検出された。煙道部は外に煙道が伸びるタイプで、規模は長さ127cmを測る。袖は暗褐色土で被覆していた。規模は高さ34cmを測る。火床部はよく焼けており、焼上の厚みは3cmを測る。

出土遺物はカマド周辺及び南壁付近からまとまって出土した。特にカマド周辺のものには床面上のものが多く、破棄された時の原位置を保っていると考えられるものが多かった。1は砥石であり、覆土中からの出土である。刃物傷の様な鋭い傷跡あり。2は土師器環で内面黒色処理されている。カマド前面の床面上から出土しているが、他の床面上の遺物が古墳時代後期（7世紀代）を示しているため、2は重複遺構の未確認などによる混入と考えられる。3は鉢であり、いわゆる「有段口縁杯」の口縁部と酷似する形態を示す。胎土はよく練雑されており、粗いミガキが施されている。6と7は土師器小型甕であり、7は内面に刷毛目の残るナデが施されている。4と5・8と9は土師器甕で外面ヘラケズリで頸部が「く」の字に曲がるタイプのものである。

本址はこれらの出土遺物より7世紀代の所産と考えられる。

(16) H16号住居址 (第30図、写真図版十六)

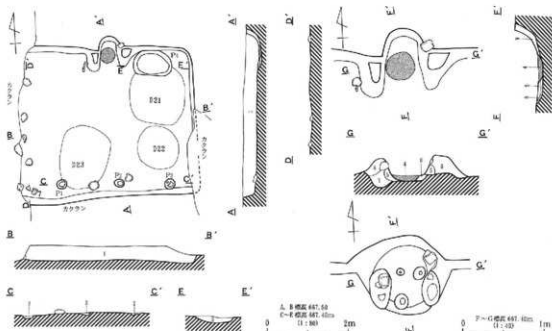
本住居址は、調査区北よりであるト-46.47、ナ-46.47Grに位置する。残存状態は西側と東壁南よりがカクランにより削平されている。重複関係は古い方よりH17号住居址→H45号住居址→本址→D21→23号土坑である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.91m（残存）・南壁4.20m（残存）・西壁3.53m（残存）・東壁3.42mで、壁高さは南壁西よりで最大37cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で14.19㎡を測る。住居址主軸方位はN-3°-Eを示す。覆土はおおむね自然堆積で単層である。床は全体的に軟質で、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「箆き床」であった。ピットは3カ所確認された。規模はP1が径27cm・深さ10cm、P2が径25cm・深さ6cm、P3が径25cm・深さ10cmを測る。本址は主柱穴は確認されなかったが、P1～3は壁柱穴、西側カクラン脇で検出された礫群は柱礎石の使用が考えられる。貯蔵穴はカマド東脇で検出された。規模は長軸95cm・短軸63cm・深さ20cmを測る。

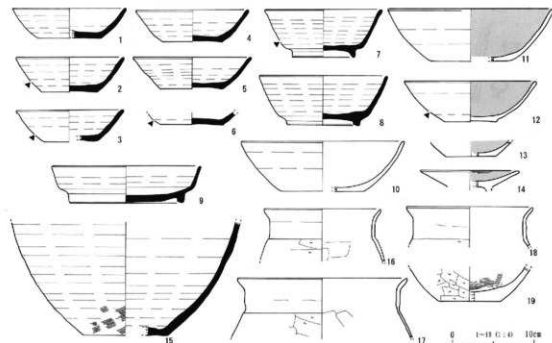
カマドは北壁中央部で検出された。残存状況は良好である。煙道部は煙道が長く伸びないタイプで、規模は長さ40cmを測る。袖は小型の川原石と暗褐色土の混合土で構築されており、高さは27cm前後を測る。火床部は良く焼けており硬化していた。

No.	類別	形状	法 量		成 形 ・ 測 定 ・ 支 援		備 考	出土位置	
			1/40cm	1/20cm	西 面	東 面			
1	須磨器	杯	14.0	7.7	(3.7)	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底面右同軸糸切り 火床	同軸実測 1/2残存	IV区
2	須磨器	杯	13.9	6.9	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右同軸糸切り 火床	完全実測 底面完全	IV区
3	須磨器	杯	13.2	6.5	(3.9)	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底面右同軸糸切り 火床	完全実測 3/4残存	I区
4	須磨器	杯	14.5	7.6	3.9	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底面右同軸糸切り 火床	完全実測 2/3残存	I・IV区 カマド
5	須磨器	杯	13.8	7.2	3.9	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底面右同軸糸切り 火床	同軸実測 1/3残存	IV区
6	須磨器	杯	-	7.8	-	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底面右同軸糸切り	完全実測 底面完全	IV区
7	須磨器	高台杯	14.4	7.8	5.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右同軸糸切り・付高台	完全実測 底面完全	IV区
8	須磨器	高台杯	15.8	9.0	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右同軸糸切り・付高台	同軸実測 2/3残存	I・IV区
9	須磨器	高台杯	18.4	14.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ 底面同軸ヘラケズリ・付高台	同軸実測 1/2残存	I区 D1 D22
10	土師器	杯	20.4	10.0	(6.4)	ロクロナデ ミガキ付	ロクロナデ 底面ヘラケズリ	同軸実測 1/4残存	カマド IV区
11	土師器	杯	20.0	10.0	(6.2)	ロクロナデ 黒色焼酎	ロクロナデ 底面ヘラケズリ	同軸実測 1/4残存	I区
12	土師器	杯	16.2	6.3	3.0	ミガキ→藍色焼酎	ロクロナデ 底面右同軸糸切り	完全実測 底面完全	II・IV区
13	土師器	杯	-	6.0	-	ロクロナデ 藍色焼酎	ロクロナデ	同軸実測 底面1/4残存	II17-S区
14	土師器	高台杯	12.2	-	-	ミガキ→藍色焼酎	ロクロナデ 高台実測	同軸実測 口縁1/4残存	II17-S区
15	須磨器	甕	-	10.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右同軸糸切り	同軸実測 底面1/4残存	I・IV区 D1
16	土師器	甕	14.4	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 口縁コナデ	同軸実測 1/2残存	II区
17	土師器	甕	20.8	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 口縁コナデ	同軸実測 口縁1/4残存	II17-S区
18	土師器	甕	15.6	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 口縁コナデ	同軸実測 口縁1/2残存	II17-S区
19	土師器	甕	-	7.6	-	ハケII	ヘラケズリ	同軸実測 1/3残存	IV区

第17表 H16号住居址出土遺物観察表



1. 赤褐色土層 (197B/3) ロームブロック・ローム粒子少量混入。
2. 赤褐色土層 (197B/3) ローム粒下・ロームブロック少量混入。
3. 赤褐色土層 (197B/3) ローム粒子・ロームブロック混入。
4. 赤褐色土層 (197B/3) 穴底。
5. 暗赤褐色土層 (197B/3) ローム粒子多量混入し、炭化物含む。
6. 濃い灰褐色土層 (197B/3) ローム粒子・炭化物・粘土粒子微量混入。
7. 赤褐色土層 (197B/3) 焼土ブロック・炭化物混入。
8. 赤褐色土層 (197B/3) 灰・粘土粒子多量混入。
9. 暗赤褐色土層 (197B/3) 焼土ブロック混入。



第30回 H16号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は覆土中からのものが多く、図示したのも多くが覆土中からの出土である。1~6は須恵器坏でいずれもロクロ成形、底部回転糸切り離しである。7~9は須恵器高台坏である。7と8は底部回転糸切り離しの後、高台貼付。9は底部ヘラケズリの後、高台を貼付している。10~13は土師器坏で11~13は内面黒色処理されている。14は土師器高台付皿で、内面黒色処理されている。16~19は土師器甕で、16~18はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるタイプのものである。

本址はこれらの出土遺物より8世紀前半に位置づけられる。

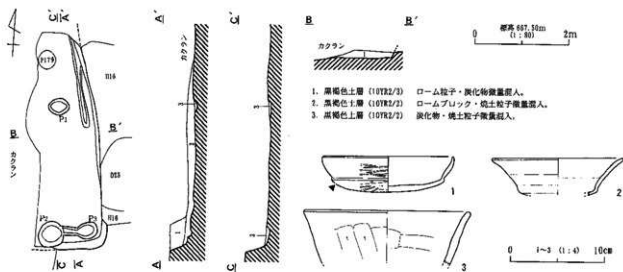
(17) H17号住居址 (第31図, 写真図版十六)

本住居址は、調査区北よりであるナ46.47Grに位置する。残存状態は住居址西側がカクランにより、東側がH16号住居址に壊されている。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.81m(残存)・南壁1.42m(残存)・東壁4.48m(残存)で、壁高さは南壁側で最大42cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で5.42㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床は軟質であり、地山を直に使う「敷き床」のような状態であった。壁溝は東壁北よりに検出された。断面形はU字形で、幅は約10~22cm・深さ1~4cmを測る。ピットは3カ所確認された。規模はP1が径44cm・深さ7cm、P2が径55cm・深さ11cm、P3が径44cm・深さ3cmを測る。

出土遺物は少なかったが3点を図示した。1は土師器坏で外面に粗いミガキを施す。形態は口縁部が肥厚し、口唇部が僅かに内湾するタイプである。在地の須恵器模倣坏とは形態が異なり、いわゆる「甲斐型」土師器坏と呼ばれるものに似ている。2は土師器坏としたが、その形態より高坏坏部の可能性もある。口縁部が大きく外反するタイプのものである。3は土師器鉢としたが不確実である。

本址は周辺部で他の遺構との重複も多く、出土遺物にも時期の異なる物の混在が見られた。しかし、図示した出土遺物と重複関係から、古墳時代後期の所産と考えられる。



第31図 H17号住居址及び出土遺物実測図

No	種別	器種	法量			成形・調整・文様		調査	出土位置
			口径(φ)	残存径	胎高(深)	内面	外面		
1	土師器	坏	14.0	12.0	3.8	ナデ	口縁ヨコナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	図版実測 2/3残存	H16-F区
2	土師器	坏	14.0	-	-	ナデ	ナデ	図版実測 口縁1/4残存	H17-A区
3	土師器	鉢	17.0	-	-	ヘラナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	図版実測 口縁1/6残存	H17-M区

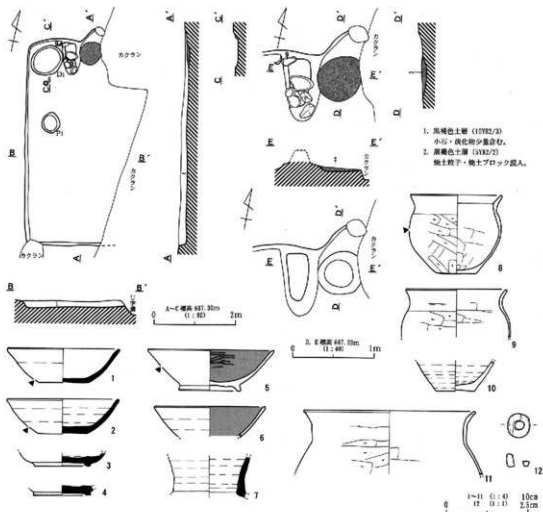
第18表 H17号住居址出土遺物観察表

(18) H18号住居址 (第32図, 写真図版十六)

本住居址は、調査区北側であるテ-44.45、ト-44.45Grに位置する。残存状態は東壁側がカクランにより壊されており、住居址全体の半分ほどの検出にとどまった。重複関係はH45号住居址より本址のほうが新しい。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.80m(残存)・南壁1.83m(残存)・西壁4.83mで、壁高さは南西コーナーで最大20cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で11.06㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積の単層である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は施されておらず、地山を直に踏みしめる「敷き床」と考えられる。ピットは1カ所確認された。ピットの規模はP1が径50cm・深さ9cmを測る。またカマド西脇には貯蔵穴と考えられる掘り込みが検出された。規模は長軸82cm・短軸70cm・深さ9cmを測る。

本址のカマドは北壁西よりに造られていた。煙道部は煙道が伸びないタイプで、煙道長さは35cmを測る。袖は川原土と褐色土で構築されており、袖芯部分は地山を掘り残していた。火床部は良く焼けており、焼土の厚みは4cmを測る。



第32図 H18号住居址及び出土遺物実測図

No.	品別	番種	法 量		内 容		備 考	出土位置	
			寸法(縦×横×厚)	重量	内 容	外 容			
1	須恵器	5c	13.8	6.0	4.2	ロクロナデ	完全複製 武部実形	IV区	
2	須恵器	5c	13.9	6.2	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ 磁網四転糸切り(方向不明)	完全複製 磁網実形	IV区
3	須恵器	高台坪	-	6.8	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部内転糸切り(付合)	複製実形 磁網1/4残存	IV区
4	須恵器	高台坪	-	7.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部内転糸切り・付合	複製実形 磁網1/4残存	IV区
5	土師器	甕	15.6	7.6	5.0	ロクロナデ ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 付合	完全複製 磁網実形	D1
6	土師器	坪	13.6	-	-	ロクロナデ 黒色処理	ロクロナデ	複製実形 口縁1/4残存	IV区
7	須恵器	壺	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	複製実形 胴面1/4残存	IV区
8	土師器	甕	11.2	4.9	9.7	ヘラナデ	ヘラナデ 1軸ヨコナデ	複製実形 口縁1/4残存	IV区
9	土師器	甕	12.1	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	複製実形 1軸1/4残存	IV区
10	土師器	甕	-	4.8	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右内転糸切り	複製実形 磁網3/4残存	IV区
11	土師器	甕	21.2	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	複製実形 口縁1/4残存	III・IV区
N.	部 類	材 質	残存率	最大径	最大厚	項 目			
12	白玉	滑石	完全	0.11	0.70	0.29	0.29	所 見	

第19表 H18号住居址出土遺物観察表

本址からの出土遺物は覆土中からのものが多かった。1と2は須恵器坏で、いずれもロクロ成形である。3と4は須恵器高台坪でどちらも底部のみの残存である。5は土師器高台坪で内面黒色処理されている。6は土師器坏である。7は須恵器壺の頸部と考えられる。8～10は土師器小型甕であり、10はロクロ成形である。11は土師器甕でいわゆる「武蔵甕」であり、口縁部から頸部の「コ」の字化が始まっている。12は滑石製の白玉であり混入遺物と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀前半の所産時期と考えられる。

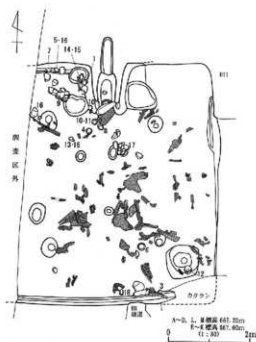
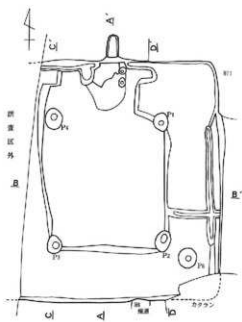
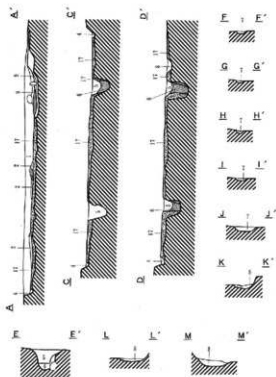
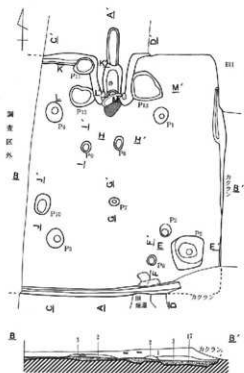
(19) H19号住居址 (第33・34・35図, 写真図版十七)

本住居址は、調査区中央である二-44.45、ヌ-44.45Grに位置する。残存状態は西側1/4が調査区域外となるほかは良好である。重複関係は古い方より本址→H8号住居址→H11号住居址である。

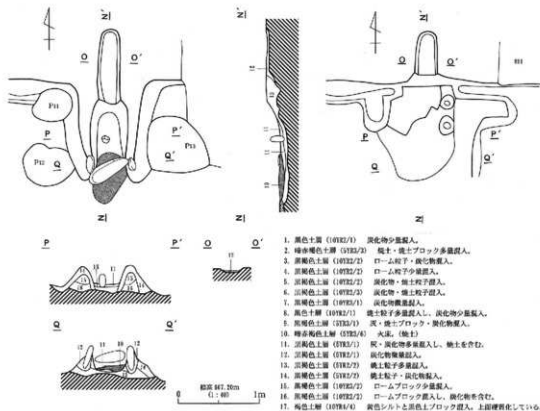
形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁4.17m(残存)・南壁4.85m(残存)・東壁5.77m(残存)で、壁高さは南壁側で最大22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で25.98㎡である。住居址の主軸方位はN-2°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積であるが、床面全体に炭化材及び焼土が検出された(写真図版十七・樹種同定についてはP517参照)。全体の形態は住居壁側より中央に向かって炭化材は伸びており、屋根の構築材が焼失したと考えられる。床は全体的に硬質であり、カマド前面にかけては特に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1～13cmで貼られていた。壁溝は南壁と東壁の一部に検出され、規模は幅8～30cm・深さ3～10cmを測る。ピットは13カ所確認された。P1～4が主柱穴、P5とP12・P13は貯蔵穴の可能性がある。各ピットの規模はP1が径41cm・深さ56cm、P2が径31cm・深さ44cm、P3が径27cm・深さ42cm、P4が径50cm・深さ47cm、P5が径81cm・深さ53cm、P6が径25cm・深さ7cm、P7が径45cm・深さ8cm、P8が径34cm・深さ12cm、P9が径28cm・深さ8cm、P10が径52cm・深さ11cm、P11が径50cm・深さ8.5cm、P12が径61cm・深さ9.5cm、P13が径75cm・深さ16cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。残存状況は良好であり、焚口部分の構築石や支脚石が原位置で検出された。煙道部は長く伸びるタイプで、長さ79cmを測る。袖部分は地山の上に黄色の粘土を盛り上げて造られており、焚口部は楕円の川原石を門構え状に構築していた。火床部は長く焼けており硬質化し、焼土の厚みは6cmを測る。また、火床部下と煙道部分は黒褐色土によって構築されていた。

本址からの出土遺物はカマド西脇やカマド前面からまともに出土した。特にカマド西側から出土した土器類は本址が焼失住居址とすると、使用時の原位置を保っているような状況であった。1～3は土師器坏である。1と3は口縁部がやや内湾するタイプであり、2は口縁部にやや稜があり須恵器坏蓋模倣のタイプとも捉えられる。4は高坏で、坏部はいわゆる「内斜口縁状」を載せたタイプである。5と6は鉢である。5は坏とすべきか迷うところであるが、器高があるため今回は鉢とした。7と8は単孔の小型の甕で7は円錐形、8は頸部が「く」の字に曲がるタイプである。9は大型の単孔の甕で、内



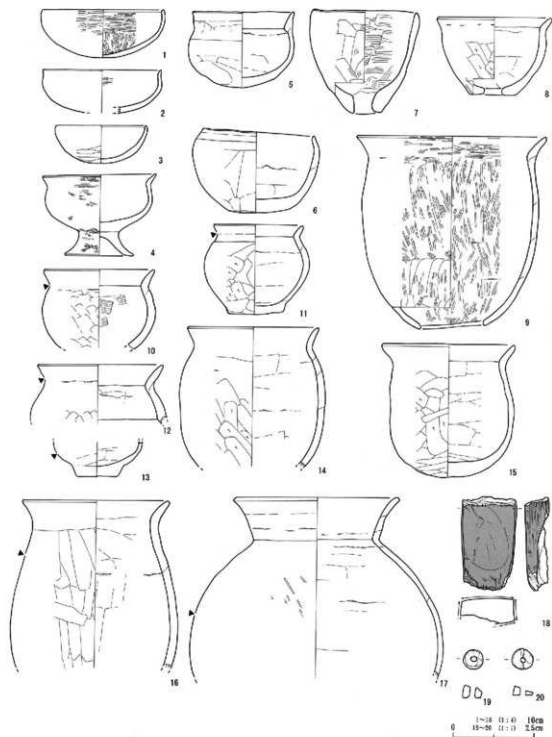
第33图 H119号住居址实测图



第34回 H119号住居址カマド実測図

No.	種別	基層	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径高	底径高	体積	内径	外径		
1	土師器	埴	14.9	—	5.9	ミガキ	ミガキ	完全実測 一徳欠陥	2cm カマド
2	土師器	埴	14.5	—	(5.3)	ミガキ?	筋面残存して不明	目録実測 1/3残存	13区
3	土師器	埴	11.1	—	4.6	ナデ	ナデ→底面付近ヘラケズリ	目録実測 1/3残存	13cm
4	土師器	高埴	13.9	8.5	9.9	評部ヘラミガキ 脚部ナデ	ヘラミガキ	完全実測 一徳欠陥	3cm
5	土師器	鉢	12.5	—	9.3	ナデ 口縁ヨコナデ	ナデ 口縁ヘラケズリ→ヨコナデ	完全実測 定形	10cm 13区
6	土師器	鉢	12.7	7.8	9.9	ヨコナデ 底面村出ナデ	口縁ヨコナデ ヘラナデ・底面ヘラケズリ	完全実測 ほぼ定形	2cm
7	土師器	壺	12.8	3.7	12.6	ヘラナデ 口縁ヨコナデ 丸ナデ	口縁ヨコナデ ヘラナデ	完全実測 定形 口径2.1	3cm
8	土師器	壺	14.1	5.6	9.5	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測 定形 口径2.1	3cm
9	土師器	壺	23.4	8.1	23.3	ミガキ	ミガキ 下半部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 定形 口径7.6	3.5cm
10	土師器	甕	13.6	—	(9.7)	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ→ナデ	完全実測	約6.5cm 1-13区 カマド下ホリ
11	土師器	甕	11.0	11.0	6.8	ナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ 脚部ナデ	完全実測 ほぼ定形	3cm
12	土師器	甕	16.4	—	(7.3)	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ナデ ヘラケズリ	完全実測 転用の可能性あり	3cm
13	土師器	甕	—	5.1	(4.3)	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	3cm
14	土師器	甕	16.2	—	(17.0)	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ナデ 体部ヘラケズリ	目録実測	3.5cm 7-11 13区
15	土師器	甕	16.5	—	16.3	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測 定形	3.5cm
16	土師器	甕	18.1	—	(20.0)	ナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	目録実測	5~10cm
17	土師器	甕	20.4	—	(22.0)	口縁ヨコナデ ナデ	口縁ヨコナデ ミガキ?	完全実測	3cm
30	器種	基材	残存数	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
18	瓦石	流紋岩		(11.4)	(6.8)	(3.0)	(250.00)	火熱有り(黒っぽくなっていて) 筋面欠陥 経路最4(正・裏・内側) 右側の糸状筋等上・下端面は基材の面	8.5cm
19	白玉	礫石	定率	0.4	0.6	0.2	0.20		13区
20	白玉	礫石	定率	0.5	0.6	0.17	0.14		13区

第20表 H119号住居址出土遺物観察表



第36图 H19号住居址出土物実測図

外面丁寧に磨いている。10～15は小型の甕である。16は甕、17は壺と考えられる。18は砥石で火熱の跡がある。19と20は白玉である。

本址は先に述べたように焼失の可能性があり、出土遺物も一括性が高い。図示した出土遺物の年代感より、所産時期は5世紀後半と考えられる。

(20) H20号住居址 (第36図, 写真図版十八)

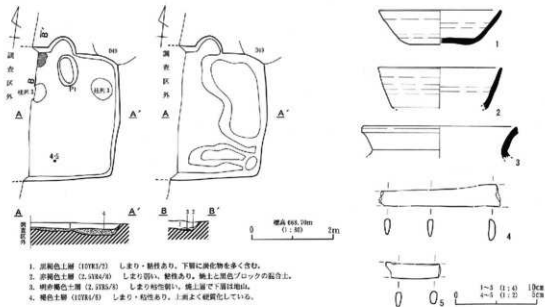
本住居址は、調査区南端であるヌ-80.81、ネ-80.81Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外となる。重複関係は古い方より本址→柱列3→D49号土坑である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.05m(検出)・南壁2.14m(検出)・東壁2.74mで、壁高さは西壁中央で最大17cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で5.79㎡を測る。住居址の主軸方位はN-8°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2～16cmで貼られていた。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径76cm・深さ19cmを測る。住居址掘り方は住居址北東コーナー部と南東コーナー部が一段低くなり4～15cmの段差が確認された。

本址のカマドは北壁中央に煙道部と火床部のような焼土のみを確認したが、煙道部と火床部は軸線が合わず、また袖等は検出できなかった。

出土遺物は覆土中からが多かった。1と2は須恵器杯、3は甕である。4と5は鉄製の刀子と考えられる物で、床面上から出土した。

本址はこれらの出土遺物より8世紀後半に位置づけられる。



第36図 H20号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量		成形・器壁・文様		備考	出土位置	
			11号区	12号区	内	外			
1	遺物部	杯	15.2	7.8	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ→底部右側縁染付	図版実測 底面1/2保存	II区
2	遺物部	杯	15.2	-	(5.1)	ロクロナデ 片縁	ロクロナデ 片縁	同版実測 1/3保存	II区
3	遺物部	甕	18.8	-	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	同版実測 11線3/16保存	II区
4, 5	刀子	鉄							出土位置
4	刀子	鉄			(7.4)	(1.2)	(9.4)		8cm
5	刀子	鉄			(3.4)	(1.6)	(9.5)		8cm

第21表 H20号住居址出土遺物観察表

(21) H21号住居址 (第37図, 写真図版十八)

本住居址は、調査区南端であるニ-79.80、ヌ-79.80Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる為、住居址北西コーナー及び南西コーナーのみの検出にとどまった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.85m(検出)・南壁0.27m(検出)・西壁3.47mで、壁高さは西壁中央で最大19cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.61㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~12cmで貼られていた。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径113cm・深さ19cmを測る。P1は形態から床下土坑的であるが、ピット上面には床は確認されなかった。

出土遺物は少なく、図化可能なものは1の上師器甕のみであった。器厚は薄く、いわゆる「武藏甕」と呼ばれるタイプの甕である。

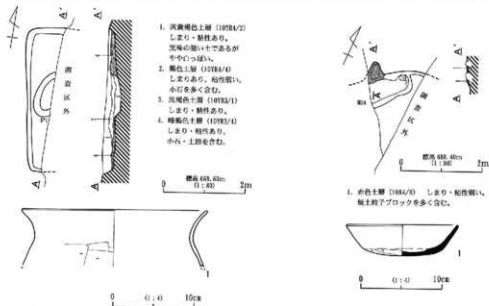
本址の所産時期は出土遺物も少なく不確定であるが、おおむね8世紀代と考えられる。

(22) H22号住居址 (第37図, 写真図版十九)

本住居址は、調査区南端であるニ-77.78、ヌ-77.78Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、西側が近世の溝状遺構であるM24号溝上遺構により削平されている。

形態は不明で、規模は北壁1.42m(検出)で、壁高さはカマド脇で最大10cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.26㎡を測る。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。本址のカマドは北壁側で確認したが、火床部のみであった。

出土遺物は図示した須恵器坏のみで、本址の所産時期は8世紀後半に位置づけられると考える。



第37図 H21,22号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	図種	位置	形状・調整・文様	備考	出土位置
1	土師器	甕	22.8 - 06.90	ナデ	口縁ナデ 腰部ヘラケズリ	口縁東側 口縁1/6残存

第22表 H21号住居址出土遺物観察表

No.	種別	図種	位置	形状・調整・文様	備考	出土位置
1	須恵器	坏	13.8 9.7 3.8	口縁ナデ	口縁ナデ→底部手持ちヘラケズリ	完全実測 3/4残存 2cm

第23表 H22号住居址出土遺物観察表

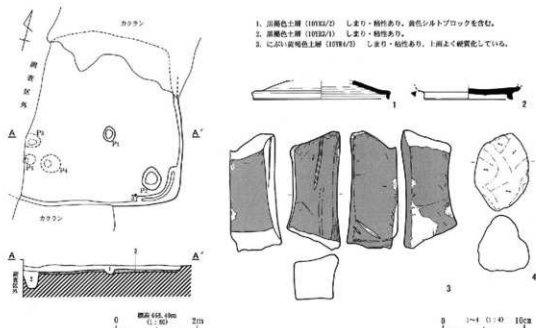
(23) H23号住居址 (第38図, 写真図版二十)

本住居址は、調査区南端であるニ-76、ヌ-75.76Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外、北側がカクランにより削平されている。

形態は方形を呈すると思われる。規模は北壁2.87m(推定)・南壁3.85m(検出)・東壁2.56m(残存)3.60m(推定)で、壁高さは南東コーナーで18cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で11.78㎡を測る。住居址の主軸方位はN-15°-Eを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~10cmで貼られていた。ピットは掘り方時検出も含め、5カ所確認された。規模はP1が径35cm・深さ10cm、P2が径55cm・深さ9cm、P3が径38cm・深さ31cm、P4が径50cm・深さ26cm、P5が径30cm・深さ19cmを測る。住居址掘り方はほぼ均一であった。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1は須恵器蓋でありロクロ成形で、蓋端部が屈曲する。2は須恵器高台坏であり、底部回転系切り離しの後ヘラケズリを行う。3は砥石で四面の砥面がある。4は矢印方向に磨り面の様な窪みがある。

本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから8世紀後半に位置づけられると考える。



第38図 H23号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	部類	寸法	成形・調査・文様				備考	出土位置
				成形	調査	文様	面		
1	須恵器	蓋	16.1	(23)	ロクロナデ	ロクロナデ	須恵器	須恵器 1/6残存 蓋の破片	Ⅱ区
2	須恵器	高台坏	—	10.8	(17)	ロクロナデ	底縁回転系切りヘラケズリ付高台	完全欠損 底縁残存	P3
3	砥石	砂岩	方形	14.4	6.8	5.5	668.E3		Ⅱ区
4	不明	白色軟石	方形	9.4	6.7	6.8	92.18		掘り方

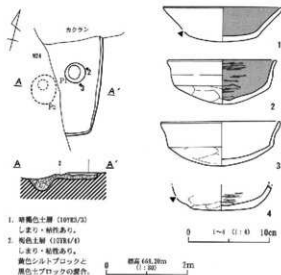
第24表 H23号住居址出土遺物観察表

(24) H24号住居址 (第39図, 写真図版十九)

本住居址は、調査区南端であるヌ-76.77Grに位置する。残存状態は北側がカクラン、西側が近世の溝状遺構であるM24号溝状遺構により削平されている。

形態は不明で、規模は南壁0.60m(残存)・東壁2.35m(残存)で、壁高さは東壁側で8cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.21㎡を測る。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは3~17cmで貼られていた。ピットは掘り方時検出も含め2カ所確認された。規模はP1が径48cm・深さ34cm、P2が径70cm・深さ27cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。図示したものはいずれも土師器坏である。4以外は全容が解る土器で、2と3はいわゆる模倣坏であるが、口縁部に段を有し「有段口縁坏」の要素も見られる。1は口縁部が直線的に開くタイプである。1と2は内面に黒色処理されている。本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから6世紀後半に位置づけられると考える。

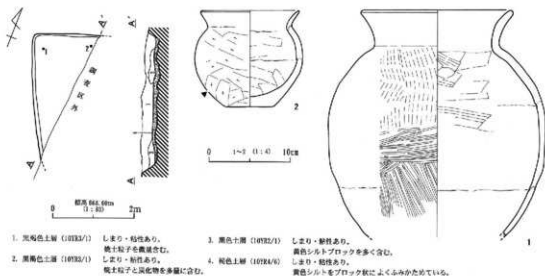


1. 暗褐色土師 (107B2/3) しまり・粘性あり。
2. 褐色土師 (107B4/5) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックと黒色シルトブロックの組合。

第39図 H24号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法線			状況・形状・文様		備考	出土位置
			長さ	幅	高さ	内面	外面		
1	土師器	杯	14.8	8.5	4.3	ナデ	黒色処理	11線ヨコナデ 純部ヘタクズリーナデ	完全実測 1/3残存
2	土師器	杯	13.5	11.8	5.4	ナデ→ミガキ	黒色処理	11線ヨコナデ 純部ヘタクズリーナデ	完全実測 2/3残存 5cm
3	土師器	杯	14.7	12.9	5.4	ナデ		11線ヨコナデ 純部ヘタクズリーナデ	完全実測 4/5残存 3cm
4	土師器	杯	-	-	-	ミガキ		ヘタクズリーナデ	完全実測 純部実測

第25表 H24号住居址出土遺物観察表



1. 灰褐色土師 (107B3/7) しまり・粘性あり。焼土粒子を濃密含む。
2. 黒褐色土師 (107B2/1) しまり・粘性あり。焼土粒子と炭化物を多量に含む。
3. 黒色土師 (107B2/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを多く含む。
4. 褐色土師 (107B4/6) しまり・粘性あり。黄色シルトをブロック状によくふかためている。

第40図 H25号住居址及び出土遺物実測図

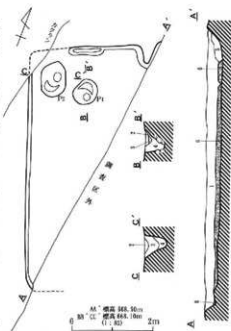
(25) H25号住居址 (第40回, 写真図版二十一)

本住居址は、調査区南端である二-76Grに位置する。残存状態は住居址のほとんどが調査区域外となり、住居址の北西コーナーのみの検出となった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.63m(検出)・西壁3.06m(検出)で、壁高さは西壁側で15cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.27㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは4~13cmで貼られていた。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1は土師器甕であり、住居址北西コーナー部の床面より7cm浮いた状態で出土した。2は小型甕であり、床面上より出土した。

本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから古墳時代後期に位置づけられると考えられる。



1. 黒褐色土層 (10193/1) しまり・粘性あり。微量の炭化物を含む。
2. 黒褐色土層 (10193/2) しまり・粘性やや弱し。しまり弱く、粘性あり。
3. 黒褐色土層 (10193/3) 黄色土と黒褐色土の混在土。
4. 褐色土層 (10194/3) しまり・粘性ややあり。
5. 黒褐色土層 (10192/1) しまりあり。粘性ややあり。焼土ブロック・炭化物を多く含む。
6. 褐色土層 (10194/2) しまり・粘性あり。上面焼土ブロックでかたい。



第41回 H26号住居址及び出土遺物実測図

(26) H26号住居址 (第41回, 写真図版二十一)

本住居址は、調査区南端である二-74.75、又-74.75Grに位置する。残存状態は住居址の東側ほとんどが調査区域外となり、住居址の西半分のみを検出となった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.15m(検出)・西壁5.82m(推定)で、壁高さは西壁側で22cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.97㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~16cmで貼られていた。壁溝は北壁の一部に検出され、規模は幅22~23cm・深さ4~7cmを測る。ピットは2箇所検出された。規模はP1が径64cm・深さ48cm、P2が径83cm・深さ55cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1は土師器甕である。本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから古墳時代後期に位置づけられると考えられる。

No.	種別	器種	寸法		成形・調整・文様			備考	出土位置
			口径	高さ	内面	外面	外面		
1	土師器	甕	18.8	-	-	ヘラナデ (ハケ目が見える)	ヘラナデ・ナデ・下腹部ニギキ	図版実測 1/2残存	7cm
2	土師器	小型甕	12.1	6.1	11.8	ヘラナデ	口縁ヨコナデ	完全実測 3/5残存	6cm

第26表 H25号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	寸法		成形・調整・文様			備考	出土位置
			口径	高さ	内面	外面	外面		
1	土師器	甕	18.8	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ・ナデ	口縁ヨコナデ	図版実測 1/3残存

第27表 H26号住居址出土遺物観察表

(27) 27号住居址 (第42-43図, 写真図版二十二・二十三)

本住居址は、調査区南側であるニ-72.73、ヌ-73Grに位置する。残存状態は東壁がカクランにより壊されており、また西壁は調査区域外となる。H28号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。

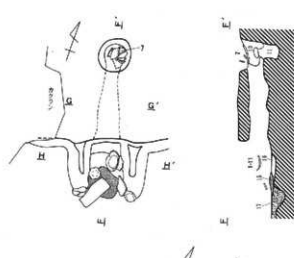
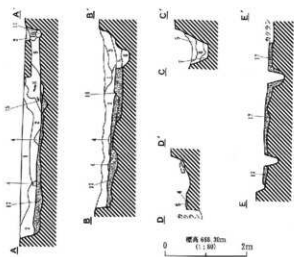
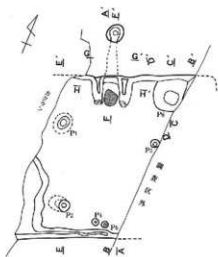
形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.08m(残存)・南壁2.55m(残存)で、壁高さは北壁で最大40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-17°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で10.78㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれるが、床面上に多量の炭化物和焼土が検出された。床は全体的に硬質で、貼床は4~18cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁側と南壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は約18~32cm・深さ1~6cmを測る。特に西側部分は幅が広がっており、壁溝状ではなかった。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認され、P1とP2が主柱穴、P4.5が入り口梯子穴と考えられる。規模はP1が径33cm・深さ39cm、P2が径30cm・深さ33cm、P3が径21cm・深さ20cm、P4が径19cm・深さ14cm、P5が径19cm・深さ11cmを測る。住居址掘り方は住居中央部がやや高くなっていて、貯蔵穴はP6の名称で示した地点で、カマド東脇で検出された。規模は長軸78cm・短軸77cm・深さ54cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。特に煙道部はトンネル部分が崩落しておらず、覆土が詰まった状態で検出できた。カマド形態は煙道部が長く伸びるタイプである。煙道部は先端で堅穴とつながっており図示した7の甕が出土したが、地上部の構造物として使用されていたと考えられる。また図示した12の円礫も甕と重なるように出土した。煙道部の規模はトンネル部分が長さ96cm、堅穴は径42cm・深さ50cmを測る。この堅穴は煙道部よりも深く掘られており、雨水などの処理のための機能と考えられる。袖部は地山掘り残しの上に粘性のある黄褐色で構築していた。袖の高さは最大46cmを測る。火床部はよく焼けており、焼土の厚みは6cmを測る。焚口部は袖口に川原石を縦方向に置き、図示した13の礫を天井用に使用していたと考えられるが、この礫は中央部から意図的におおられた状態で出土した。

出土遺物は床面上とカマド内からのものが多かった。1~6は土師器環である。1は内面黒色処理を施す。3と4はいわゆる「有段口縁環」で口径も等しく規格品の様相を示す。5と6は須恵器環身模倣の土師器環である。4と5は重ねられた状態で出土した。7は把手付の大型甕である。8は胴部が大きく張った甕でいわゆる「胴張甕」として捉えられる物である。10は貯蔵穴脇の床面から6cm浮いた状態で出土した土師器甕で外面に刷毛目を残す。11は頸部がくびれないタイプの上師器甕である。これら遺物より本址は6世紀後半に位置づけられる。

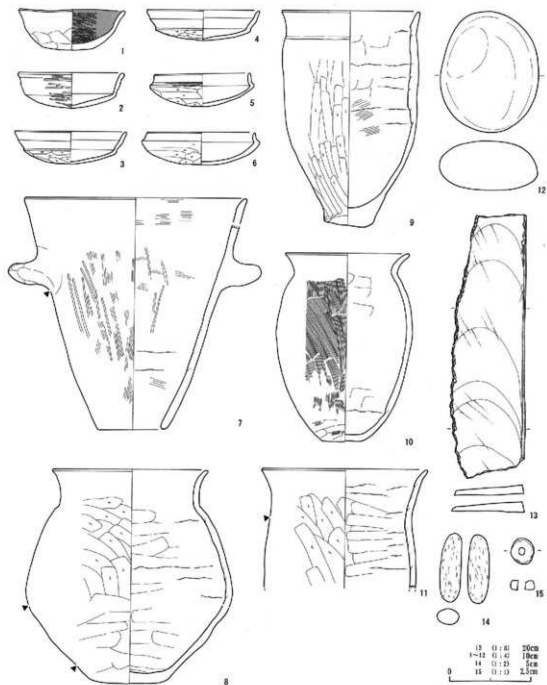
No.	種別	図番	位置				成形・調製・文様		備考	出土位置
			山内区	山内区	山内区	山内区	内面	外面		
1	土師器	環	13.1	6.0	5.0	ミガキ・黒色処理	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリーナデ	完全実測 完形品	11cm	
2	土師器	環	13.1	11.1	4.4	ヘラケズリ・ナデ	口縁ヨコナデ・ミガキ 底部ヘラケズリ・ナデ→ミガキ	完全実測 完形品	0cm	
3	土師器	環	13.8	11.5	4.0	ナデ	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形品	3cm	
4	土師器	環	13.8	11.6	3.7	ナデ	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 完形品	4cm	
5	土師器	環	11.8	12.8	4.0	ナデ	口縁ヨコナデ・ミガキ 底部ヘラケズリ	完全実測 完形品	0cm	
6	土師器	環	13.2	15.4	4.0	ナデ	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形品	0cm	
7	土師器	甕	27.2	8.4	28.3	ハケ目→ヘラミガキ	ハケ目→ミガキ 把手貼付	完全実測	I区 カマド	
8	土師器	甕	19.2	8.4	(26.2)	ヘラナデ	ヘラケズリ・ヘラナデ	完全実測 完形品 口縁1/3残存	4cm カマド Ⅲ区トレンチ	
9	土師器	甕	17.0	6.0	26.3	ヘラナデ 下半部ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形品 底部未ケズリ	0~4cm	
10	土師器	小型甕	15.3	4.9	23.0	ヘラナデ	ハケ目	完全実測 ほぼ完形品	6cm	
11	土師器	甕	20.4	-	-	ヘラナデ	口縁ヨコナデ・ヘラケズリ	完全実測 口縁完形	11cm	
No.	遺物	素材	残存率	最大径	最大径	最大径	重量	所見		出土位置
12	石碁	安山岩		14.8	12.0	6.3	1430.00			埋蔵
13	カマド天井石	凝結凝灰岩		64.5	18.7	2.7	3980.00	火熱有り(正・逆)。No.33とNo.34同位。隣り坂状の素材を伴出。 下層に自然石。下層に成層のための割罫		6cm 17cm
14	磨き石	安山岩	穴穿	4.2	3.3	1.0	8.34			ホリ方
15	円瓦	磨石	穴穿	0.29	0.72	0.21	0.26			Ⅱ区南側

第28表 H27号住居址出土遺物観察表



1. 褐色土層 (0974/4) しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土層 (0972/2) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロック・炭化物・炭土を多量に含む。
3. 暗褐色土層 (0972/2) 炭化物。
4. 黒褐色土層 (0972/1) 炭化物。
5. 暗褐色土層 (0972/2) しまり・粘性あり。炭化物・粘土を多く含む。
6. 暗褐色土層 (0972/2) しまり・粘性強い。炭化物を多く含む。
7. 褐色土層 (0974/4) しまり・粘性強い。
8. 赤褐色土層 (2176/3) しまり・粘性あり。粘土ブロックと炭化物を多量に含む。
9. 赤褐色土層 (0972/1) しまり・粘性あり。炭のようなブロックを含む。
10. 黒褐色土層 (0972/1) しまりやや硬く、粘性あり。5層にくらべると、しまり・粘性ややあり。地層よりやわらかい。
11. 黄褐色土層 (0972/4) しまり・粘性ややあり。地層よりやわらかい。
12. 黒褐色土層 (0972/2) 上面よく現れている。
13. 赤褐色土層 (0972/3) 15層に似るが、粘性はやや強い。
14. 赤色土層 (0974/4) 13層がよく現れて観察化している。
15. 赤色土層 (0974/4) 夾炭層。
16. 黒褐色土層 (0972/2) しまり強く、粘性やあり。炭土ブロックを少量含む。
17. 黒褐色土層 (0972/2) しまり・粘性あり。黒色土ブロックを多く含む。
硬質化ブロックを含む。
18. 暗褐色土層 (0972/4) しまり・粘性強い。褐色土ブロックを多く含む。

第42図 H27号住居地実測図



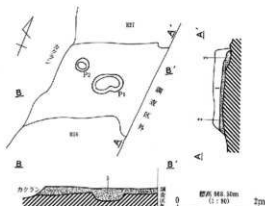
第43图 H127号住居址出土遗物实例四

(28) 28号住居址 (第44図, 写真図版二十五)

本住居址は、調査区南側であるニ-73.74、ヌ-74Grに位置する。残存状態は住居址北側をH27号住居址に、南側をH26号住居址に、また東側は調査区域外、西側はカクランによりそれぞれ削平されている。新旧関係は本址が一番古い。

形態は不明である。壁規模はいずれも検出されず不明であるが、貼床は全面に施されており、厚さは5~21cmを測る。住居址の床面積は検出部分で4.77㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。ピットは掘り方検出時も含め2カ所確認され、規模はP1が径77cm・深さ18cm、P2が径33cm・深さ17cmを測る。

出土遺物は覆土中からの小片がほとんどで、いわゆる赤彩された内斜口縁や古墳中期末の特徴をもつ土師器葉片などが出土したが、図示可能な物はなかった。これらの遺物より不確実ではあるが、本址は5世紀後半に位置づけられると考える。



1. 解明色土層 (10TK2/2) しまり・粘性あり。灰化物・焼土粒子を多く含む。
2. 褐色土層 (10TK1/4) しまり・粘性強。土質硬質化ブロック。
3. 泥褐色土層 (10TK2/2) しまり・弱く粘性あり。

第44図 H28号住居址実測図

(29) H29号住居址 (第45図, 写真図版二十四)

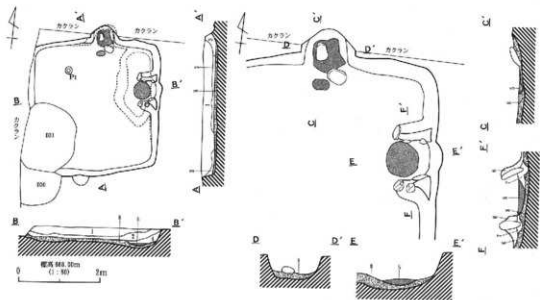
本住居址は、調査区南側であるニ-63.64、ヌ-63.64Grに位置する。残存状態は西壁側がカクランにより壊されている他は良好である。D30.31号土坑と重複関係にあり本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央と北壁東よりの2箇所に造られている。規模は北壁2.98m・南壁2.44m(残存)3.17m(推定)・西壁1.48m(残存)2.88m(推定)・東壁2.88mで、壁高さは北東コーナー付近で36cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-2°-Wを示す。住居址の床面積は7.08㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質で、3~11cmの厚さで貼られていた。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径18cm・深さ4cmを測る。住居址掘り方は東壁に造られたカマド前面から住居址北東コーナーに向かって、一段低く掘り込まれていた。掘り方時の段差は最大9cmを測る。

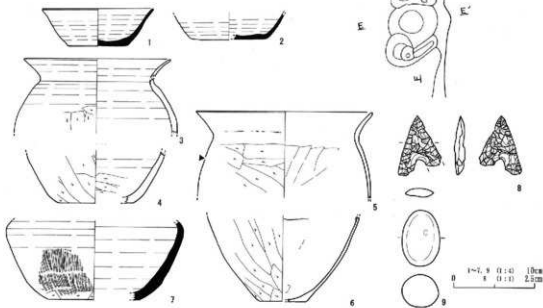
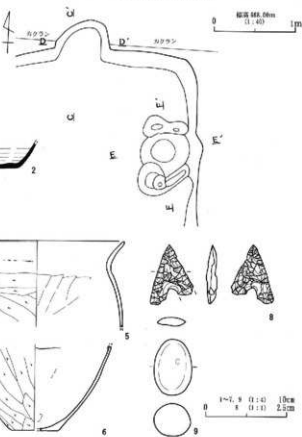
カマドは2箇所検出され、まず北壁中央のカマドは煙道部と火床部のみで袖部は残存していなかった。煙道部の主軸方位は住居址と同じN-2°-Wを示す。煙道部の規模は長さ44cmを測る。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは5cmを測る。次に東壁のカマドは短い煙道部と袖部及び火床部が残存していた。カマド主軸方位はN-87°-Eを示す。煙道部の規模は長さ26cmを測る。袖部は川

No.	種別	規模	位置			形状・構造・文様		備考	出土位置
			北壁	西壁	外壁	西壁			
1	遺品	鉢	13.7	7.5	4.6	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底面ヘラケズリ 火床	図説実測 1/4残存	Ⅱ区
2	遺品	鉢	-	9.2	-	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底面ヘラケズリ	図説実測 底面1/2残存	Ⅱ区
3	土師器	甕	18.0	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 側面ヘラケズリ	図説実測 口径1/4残存 口縁わずかに残存	10cm カマド 1区
4	土師器	甕	-	9.4	-	ロクロナデ 側面下ヘラケズリ	ロクロナデ 側面ヘラケズリ	図説実測 1/2残存	カマド
5	土師器	甕	21.5	-	-	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実測 口縁1/2残存	カマド 1区
6	土師器	甕	-	15.7	-	ヘラナデ	側面ヘラケズリ	図説実測 底面1/2残存	カマド
7	須恵器	小型甕	-	11.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 体面側面ヘラケズリ・タタキ	図説実測 1/3残存	Ⅱ区
8	部	部	部	部	部	部	部	部	出土位置
9	心礎	高砂石	1.8	1.3	0.3	0.48			Ⅱ区
9	石碁	高砂石	完形	0.9	4.6	4.0	100.00	層入(石山製の砂碁?)	Ⅱ区

第29表 H29号住居址出土遺物調査表



1. 黒褐色土層 (0132/1) しまり・粘性あり、黄色シルトブロックを少量含む。
2. 暗褐色土層 (0132/2) しまり・粘性やや弱し。
3. 褐色土層 (0134/1) しまり・粘性あり、黄色シルトブロック主体。
4. 濃い黄褐色土層 (0134/2) しまりやや弱く、黄土粒子を多く含む。
5. 赤色土層 (0134/3) しまりあり、土粒凝縮化している。
6. 褐色土層 (0134/4) しまり・粘性あり。
7. 褐色土層 (0134/5) しまり・粘性あり、黄色土ブロック含む。
8. 褐色土層 (0134/6) しまり・粘性あり、黄色土ブロックを多く含む。



第45図 H29号住居址及び出土遺物実測図

原石と褐色の粘土により構築されていた。袖高さは33cmを測る。火床部は良く焼けており、焼土の厚さは7cmを測る。これら2箇所のカマドは袖部等の残存状況より、東壁のカマドが本址の最終使用カマドと考えられる。

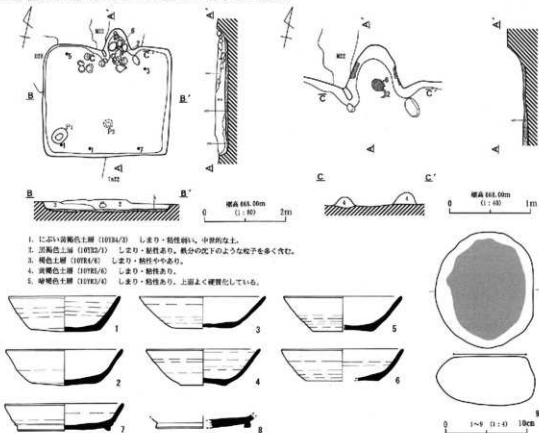
出土遺物は覆土中からが多かった。1と2は須恵器坏である。いずれも底部ヘラケズリが施され、火押痕が確認できる。3～6は土師器甕であり、3はロクロ成形がなされている。5と6はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるタイプであり、同一個体と考えられる。7は須恵器甕で、頸部が短く口径が広いタイプの甕と考えられる。8は石甕、9は磨石と考えられる。

これらの出土遺物より本址は8世紀後半に位置づけられる。

(30) H30号住居址 (第46図, 写真図版二十五)

本住居址は、調査区南側であるナ-65、ニ-65.66Grに位置する。残存状態は良好である。重複関係はD28号土坑、Ta22号竪穴状遺構、M22号溝状遺構等と重複しているが、いずれも本址の方が古い。

形態は正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.90m・南壁2.91m・西壁2.59m・東壁2.51mで、壁高さは南壁中央で最大28cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-12°-Wを示す。住居址の床面積は7.38㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれるが、北壁カマド側では1層下に拳大の川原石が投げ込まれたような状態で検出された。床は全体的に硬質で、1～4cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め2カ所確認された。規模はP1が径39cm・深さ11cm、P2が径23cm・深さ8cmを測る。



カマドは北壁中央に検出された。先にも述べたがカマド内からは礎が投げ込まれたような状態で多数検出されたが、いずれも火床面からは浮いた状態であり、本址の廃絶後に入れられた物と考えられる。煙道部はやや外側に張り出すタイプで、規模は長さ56cmを測る。袖は粘性のある黄褐色土で構築されており、袖の規模は高さが最大15cmを測る。火床部は小さく、又あまり硬質化していなかった。

遺物は覆土中やカマドから、多く出土した。1～6は須恵器である。1は底部手持ちヘラケズリ、2・3・5・6は回転ヘラ切りが施されている。1と2と5はほぼ床面直上で出土した。7と8は須恵器高台杯である。7は床面より6cm浮いた状態で出土した。9は磨石の台石と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	数量		成形・調査・文様				備考	出土位置
			口縁口	底面(内)	内面	外面	所見			
1	須恵器	杯	13.7	8.6	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ→底部手持ちヘラケズリ	完全実測 3/4残存	0~6cm	
2	須恵器	杯	14.4	8.2	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り	図転実測 1/2残存	0cm	
3	須恵器	杯	15.5	7.1	3.9	ロクロナデ 火押	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り 火押	図転実測 5/12残存	4cm 1区1層	
4	須恵器	杯	14.0	5.6	4.4	ロクロナデ 火押	ロクロナデ→底部右回転係り	図転実測 1/4残存	IV区	
5	須恵器	杯	14.6	7.2	4.2	ロクロナデ 火押	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り 火押	図転実測 3/8残存	0cm	
6	須恵器	杯	15.0	8.8	3.9	ロクロナデ 火押	ロクロナデ→底部回転ヘラ切り 火押	図転実測 3/8残存	1.5cm カマド	
7	須恵器	高台杯	14.6	11.3	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ →付高台 ナデ	図転実測 1/3残存	6cm	
8	須恵器	高台杯	-	10.6	11.6	ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ→付高台	図転実測 5/16残存	出土位置	
9	磨石	磨石	14.2	12.1	6.1	1340.00	正切に磨り傷		0cm	

第30表 H30号住居址出土遺物観察表

(31) H31号住居址 (第47図, 写真図版二十六)

本住居址は、調査区南側であるナ-62.63Grに位置する。残存状態は南東コーナーがカクランにより壊されている。重複関係では本址が一番古い。

形態はやや歪な方形を呈すると考えられる。カマドは東壁北よりに造られている。住居址規模は北壁3.25m(残存)3.56m(推定)・南壁2.75m(残存)3.53m(推定)・西壁3.38m(残存)3.59m(推定)・東壁2.38m(残存)3.22m(推定)で、壁高さは南西コーナーで最大31cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で11.23㎡、推定で11.65㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的にやや軟質であったが、貼床は1~9cmの厚さで貼られていた。

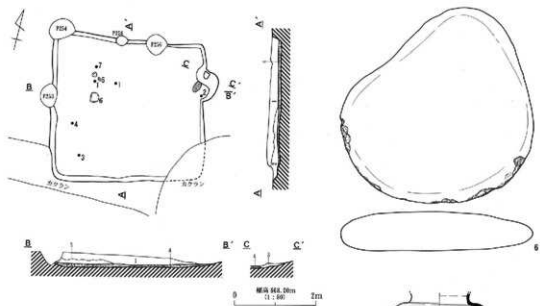
カマドは東壁北よりに造られており、煙道部と火床部及び一部袖部が検出された。煙道部はあまり伸びないタイプのもので、袖部も左側しか検出できなかった。

出土遺物は覆土中からが多く、図示したものも2と3の土師器甕以外は住居址床面より浮いた状態で出土した。1~3は土師器甕で、いわゆる武蔵甕と呼ばれるタイプのものである。4は須恵器短頸壺である。底部回転ヘラケズリを施す。5と6は敲打痕がある敲き石で、特に6は縁辺部に顕著である。7は鉄製品の釘と考えられるが、床面より14cm浮いた状態で出土した。

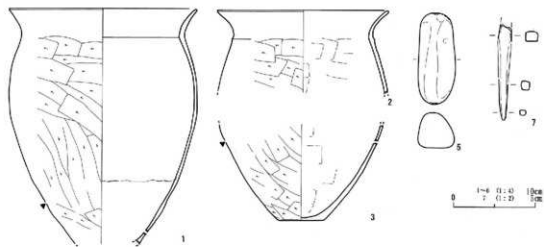
本址はこれらの出土遺物より8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	数量		成形・調査・文様				備考	出土位置
			口縁口	底面(内)	内面	外面	所見			
1	土師器	甕	23.0	-	-	ヘラナデ? 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実測 口縁1/3残存 胴部2/3残存	Ⅵ・Ⅳ区	
2	土師器	甕	21.0	-	-	口縁ヨコナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	図転実測 口縁1/3残存	~7cm	
3	土師器	甕	-	5.6	-	ヘラナデ	胴部~底部ヘラケズリ	図転実測 胴~底部1/2残存	0cm Ⅵ区	
4	須恵器	短頸壺	-	6.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ 胴からド反回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	完全実測 3/4残存	5cm	
5	磨石	磨石	11.2	4.5	4.4	338.00	上・下両面に浅い磨り傷		6cm	
6	磨石	安山岩	24.0	23.6	5.2	3720.00	縁辺に敲打痕		10cm	
7	釘	鉄	(5.0)	(0.8)	(0.6)				14cm	

第31表 H31号住居址出土遺物観察表



1. 褐色土層 (J0184/0) しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土層 (J0183/0) しまり弱く、粘性中やあり。微土粒子を少量含む。
3. 次黄褐色土層 (J0184/2) しまり・粘性あり。焼土ブロックを含む。
4. 褐色土層 (J0184/0) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック主体。上面縦割化している。



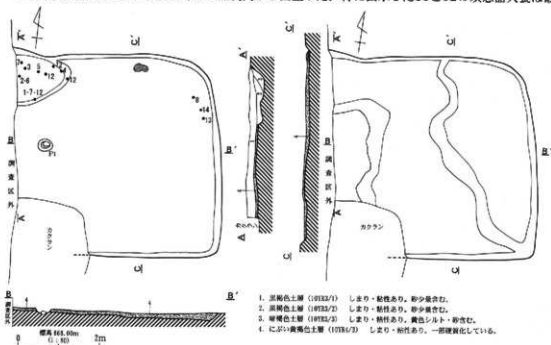
第47図 H31号住居址及び出土遺物実測図

(32) H32号住居址 (第48-49回, 写真図版二十七)

本住居址は、調査区中央であるニ-60.61、ヌ-60.61Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外に、南側の一部がカクランにより大きく壊されている。

形態は方形と考えられる。規模は北壁4.62m(残存)・南壁3.14m(残存)・東壁4.50mで、壁高さは北壁で最大15cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で20.50㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であったが、特に西側半分が硬質であった。貼床は1~15cmの厚さで貼られていた。ピットは1カ所のみ確認された。規模はP1が径35cm・深さ7cmを測る。住居址掘り方は東に向かって段状に掘り込まれており、いずれの段も12cmほどの段差があった。カマドは検出されなかったが、北壁側に焼土塊が見られ、やや火床部の様相を呈していた。

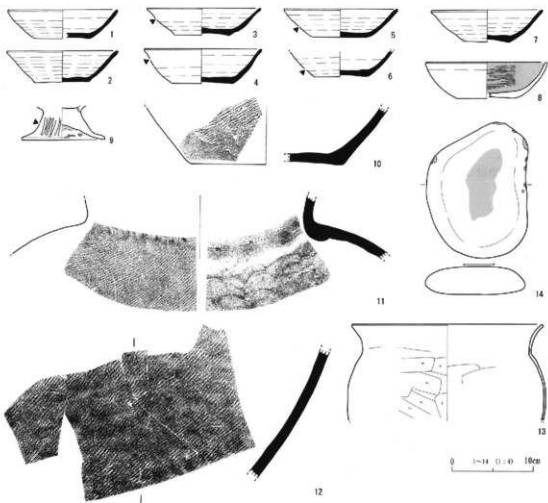
出土遺物はほとんどが北壁西寄りの土坑内から出土した。特に図示した11と12の須恵器大甕は破



第48回 H32号住居址及び掘り方実測図

No.	種別	規格	法量	成形・調整・文様		備考	出土位置		
				西側	東側				
1	須恵器	甕	13.6 6.8 (3.5)	ロクロナデ 火輝	ロクロナデ 底縁右回転糸切り 火輝	回転糸輝 1/4残存	0cm		
2	須恵器	甕	13.8 6.7 3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底縁右回転糸切り	完全未割 底縁糸輝	14cm		
3	須恵器	甕	14.8 6.7 3.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底縁右回転糸切り	完全未割 底縁糸輝	0cm		
4	須恵器	甕	14.5 7.3 4.2	ロクロナデ	ロクロナデ 底縁右回転糸切り	完全未割 底縁糸輝	0cm		
5	須恵器	甕	14.0 6.8 3.4	ロクロナデ 火輝	ロクロナデ 底縁右回転糸切り 火輝	完全未割 2/3残存	3cm		
6	須恵器	甕	- 5.8 -	ロクロナデ	ロクロナデ 底縁右回転糸切り	完全未割 底縁糸輝	14cm		
7	須恵器	甕	13.8 5.8 3.9	ロクロナデ 火輝	ロクロナデ 底縁右回転糸切り	完全未割 1/2残存	6cm		
8	土師器	甕	15.0 7.2 (4.4)	ミヅキ一光色器	ロクロナデ	回転糸輝 1/4残存	6cm		
9	土師器	高坪	- 19.3 -	ハケナデ	ミヅキ	回転糸輝	北		
10	須恵器	甕	- 19.2 -	ナデ	平行タタキヘラケズリ	回転糸輝 底縁1/4残存	北		
11	須恵器	甕	- - -	ロクロナデ 出貝縁	ロクロナデ 平行タタキ	回転糸輝 底縁1/4残存	北		
12	須恵器	甕	- - -	ハケナデ	平行タタキ	新治光輝	0~6cm 北		
13	土師器	甕	23.6 - -	ヘラナデ	ヘラタタキ 口縁タコナデ	回転糸輝 口縁1/5残存	-10cm		
No.	種別	素材	残存率	最大径	最大厚	重量	河見	出土位置	
14	礎石	黄褐色石灰石	完全	16.7	12.5	3.6	1170.00	正副中央にすり置 縁辺に縦行直	3cm

第32表 H32号住居址出土遺物観察表



第49図 H32号住居址出土遺物実測図

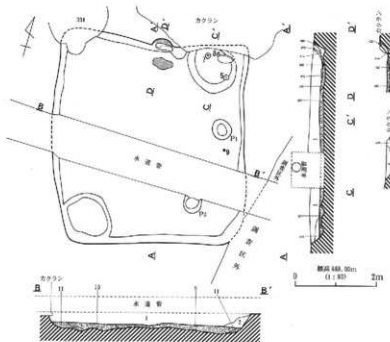
砕した状態の小片が多数出土した。1～7は須恵器坏であり、いずれも底部回転糸切りである。出土位置は2と6以外はいずれも床面上からである。8は土師器坏であり内面黒色処理されている。9は土師器高坏脚である。10～12は須恵器甕の頸部と胴部と底部である。13は土師器甕である。14は磨石で中央に磨面、縁辺部に敲打痕がある。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられる。

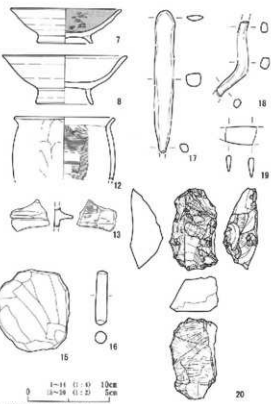
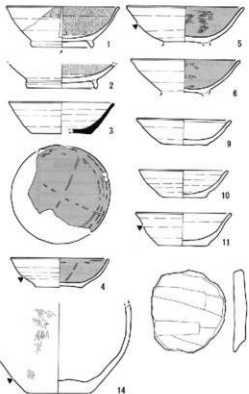
(33) H33号住居址 (第50図, 写真図版二十七)

本住居址は、調査区中央であるト-54.55.56、ナ-54.55.56、ニ-55Grに位置する。残存状態は住居址中央部分に水道管が、住居址北東側がカクランにより削平されている。新旧関係は古い方より、H36号住居址→H35号住居址→F24号掘立柱建物址→本址→D34号土坑である。

形態は正方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁2.25m(残存)4.42m(推定)・南壁3.95m(残存)4.06m(推定)・西壁4.78m(残存)5.11m(推定)・東壁2.92m(残存)4.58m(推定)で、壁高さは西壁で最大27cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-



1. 暗褐色土層 (0132/2)
しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土層 (0132/1)
しまり・粘性あり。炭化物を含む。
3. 灰褐色土層 (0131/1)
しまり・粘性あり。焼土ブロックを含む。
4. 黒褐色土層 (0131/1)
しまり・粘性あり。
5. 褐色土層 (0131/4)
しまり・粘性あり。炭化物・焼土を含む。
6. 赤色土層 (0131/5)
しまりあり。土質よく硬質化している。
7. 褐色土層 (0131/6)
しまり弱く。粘性ややあり。
焼土・炭化物を含む。
8. 黒褐色土層 (0131/1)
しまり・粘性あり。
焼土・灰を多く含む。
土質は硬質化していない。
9. 褐色土層 (0131/5)
しまりあり。粘性ややあり。
土質硬質化している。
10. 黒褐色土層 (0131/2)
しまり弱く。粘性あり。やわらかい。
11. ぶらぶら褐色土層 (0131/3)
しまり・粘性弱い。砂質。



0 1-11 (1:1) 10cm
12-19 (1:2) 5cm

第50図 H33号住居址及び出土遺物実測図

15'-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で19.76㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床は1~21cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、2カ所確認された。規模はP1が径52cm・深さ12cm、P2が径45cm・深さ10cmを測る。また、本址はカマド東脇と住居址南西コーナー部に貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。カマド脇の貯蔵穴はほぼ円形で、規模は長軸130cm・短軸110cm・深さ22cmを測る。住居址南西コーナーの土坑もほぼ円形で、規模は長軸136cm・短軸100cm・深さ15cmを測る。住居址の掘り方は住居中央がやや高く、壁際が低くなる掘り方であった。

カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN-4'-Wを示す。残存状況は煙道部と一部袖部、及び火床部が残存していたのみである。煙道部は住居址壁よりもあまり飛び出さないタイプであり、規模は32cmを測る。火床部はあまり硬化しておらず、焼土の厚みも5cmであった。

本址からの出土遺物はカマド、及びカマド脇の貯蔵穴周辺から多く出土した。5と9は床面直上からの出土、6と11はカマド東脇の貯蔵穴から、その他のものは住居址覆土中からの出土である。1と2は灰釉陶器碗である。1の施軸は内外面ハケ塗りが施され、見込み部は転用硯のように磨れていた。いずれも高台が三日月である事と軸がハケ塗りであることなどから、光が丘1号窯式にあたると思われる。3は須恵器環であり、底部回転糸切り離しである。4は土師器環で内面黒色処理を施されている。内面見込み部に十文字の暗文風のミガキが施されている。5~8は土師器碗で、8のみ黒色処理が施されていない。9~11は土師器環である。12は土師器の小型甕で、外面ヘラナデ、内面は細かなハケ目の残るナデが施されている。また口唇部が面取りされたような状態である。13は羽釜であり羽の部分が残存する。内面に細かなハケ目の残るナデが施されている。14は形態と調整から土師器壺としたが確証を得ない。或いは周辺部に広がる古墳時代住居址からの混入品とも考えられる。15は土師器甕を利用した土製円盤である。16は柱状の土製品で使用目的は不明である。17~19は鉄製品で、17は鎌、18は釘、19が刀子と考えられるがいずれも残存部分が少なく、また錆びにより詳細は不明である。20は黒曜石の石核である。

これらの遺物から、本址の所産時期は9世紀後半に位置づけられる。

No	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置			
			口径(φ)	底径(φ)	高さ(H)	内面	外面					
1	灰釉陶器	碗	13.9	7.5	5.0	ロクロナデ	雲ね焼き痕有り	ロクロナデ	付高台	回転実測	Ⅲ・Ⅳ区ホリ方	
2	灰釉陶器	碗	-	8.5	(3.0)	ロクロナデ	雲ね焼き痕有り	ロクロナデ	付高台	回転実測	I・Ⅳ区	
3	須恵器	環	12.9	7.4	3.8	ロクロナデ	火焼	ロクロナデ	底部回転糸切り	火焼	回転実測	I区
4	土師器	環	12.1	5.5	3.8	黒色処理	焼文	ロクロナデ	底部右回転糸切り	完全実測	I区	
5	土師器	碗	14.5	-	(4.5)	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ	底部右回転糸切り	付高台	完全実測	Ⅱ区
6	土師器	碗	13.4	-	(4.1)	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ	底部右回転糸切り	付高台	完全実測	高台部削落
7	土師器	碗	13.7	6.9	4.3	ミガキ	黒色処理	ロクロナデ	底部右回転糸切り	付高台	完全実測	10cm
8	土師器	碗	15.3	7.1	6.0	ロクロナデ		ロクロナデ	底部右回転糸切り	付高台	回転実測	10cm
9	土師器	環	11.6	5.6	3.1	ロクロナデ		ロクロナデ	底部右回転糸切り	完全実測	Ⅲ区ホリ方	
10	土師器	環	10.9	5.4	3.4	ロクロナデ		ロクロナデ	底部右回転糸切り	完全実測	Ⅳ区	
11	土師器	環	11.7	5.9	4.1	ロクロナデ		ロクロナデ	底部右回転糸切り	完全実測	貯蔵穴	
12	土師器	甕	12.5	-	(7.7)	ハケナデ		ヘラナデ	口縁ヨコナデ	回転実測	I区ホリ方	
13	土師器	羽釜	-	-	-	ハケナデ		ヘラナデ		鏡片実測	Ⅲ区	
14	土師器	壺	-	-	8.1	(11.0)	ナデ	ミガキ		完全実測	I区	
15	土製品	円盤	径5.0	幅4.5	0.8					重量22g	土師器使用区	
16	土製品	柱状	3.3	径0.7	-					重量1.88g	Ⅲ区	
No	器種	素材	保存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見		出土位置		
17	鉄鎌?	鉄		(8.7)	1.2	0.5				I区		
18	釘?	鉄		(5.1)	(0.8)	(0.5)						
19	刀子	鉄		(1.9)	(1.1)	(0.3)				Ⅳ区		
20	石核	黒曜石		2.9	5.0	2.1	29.54			Ⅲ区		

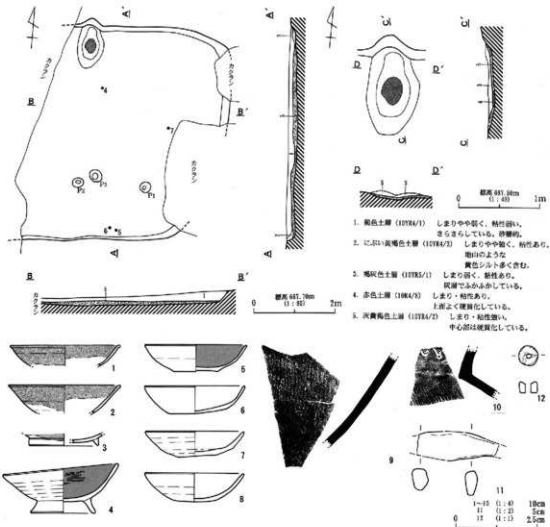
第33表 H33号住居址出土遺物観察表

(34) H34号住居址 (第51図, 写真図版二十八)

本住居址は、調査区中央であるナ-51.52、ニ-51.52Grに位置する。残存状態は西側半分がカクランにより大きく壊されている。重複関係は本址が一番新しい。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.75m(残存)・南壁3.78m(残存)・東壁0.75m(残存)4.50m(推定)で、壁高さは東壁中央で最大29cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で18.7㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床はカマド前面から住居中央部分が硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~11cmで貼られていた。ピットは3カ所確認された。規模はP1が径25cm・深さ23cm、P2が径28cm・深さ19cm、P3が径33cm・深さ13cmを測る。本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道部と火床部のみを検出であり、煙道部の規模長さ28cm、火床部の焼土厚みは3cmを測る。

出土遺物はカマド周辺及び覆土中から出土した。1~3は灰軸陶器碗である。1と2は釉がハケ塗りである。4は土師器碗で内面黒色処理されている。5~8は土師器坏であり、5のみ内面黒色処理され



第51図 H34号住居址及び出土遺物実測図

ている。9と10は須恵器甕の胴部と頸部であり、10の頸部は口縁部の波状文が一部観察できる。11は鉄製品であるが、錆により品種は不明である。12は滑石製の白玉である。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀後半から10世紀前半に位置づけられる。

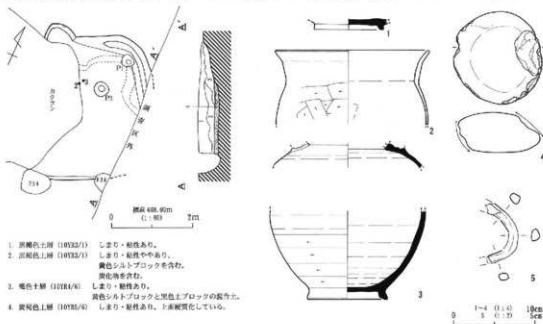
No.	種類	器種	状態		成形・調整・文様				備考	出土位置				
			山形県	岩手県	内	外	底	面						
1	灰地陶器	甕	13.6	—	—	ロクロナデ	無胎	つけがけ	ロクロナデ	遺跡	つけがけ	西側奥割	口縁1/4残存	1区
2	灰地陶器	甕	13.8	—	—	ロクロナデ	無胎	つけがけ	ロクロナデ	遺跡	つけがけ	西側奥割	口縁1/8残存	2区
3	灰地陶器	甕	—	8.6	—	ロクロナデ	無胎	つけがけ	ロクロナデ	遺跡	つけがけ	西側奥割	底厚1/4残存	2区
4	土師器	甕	14.1	7.9	5.4	ロクロナデ	ミガキ→黒色施埋	—	ロクロナデ	付高台	—	完全実測	—	2.5cm
5	土師器	杯	10.6	5.8	3.3	ロクロナデ	黒色施埋	—	ロクロナデ	底部有斜線帯切り	—	西側奥割	1/2残存	2.5cm
6	土師器	杯	12.4	6.6	3.4	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ	底部有斜線帯切り(方向不明)	—	完全実測	完全	3cm
7	土師器	杯	12.2	4.7	3.1	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ	底部有斜線帯切り	—	完全実測	2/3残存	3cm
8	土師器	杯	12.2	3.6	3.5	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ	底部有斜線帯切り(方向不明)	—	完全実測	2/3残存	3cm
9	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	—	—	ぎげタタキ	—	—	西側奥割	瓶本	合ヤド 2区
10	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	—	—	ぎげタタキ	波状文	—	西側奥割	瓶本	3区
No.	器種	素材	形状	最大径	最大厚	最大型	重量	西見						出土位置
11	鉄	鉄	丸型	φ1.1	1.20	1.00	—							1区
12	白玉	滑石	完全	0.24	0.27	0.18	0.19							2区

第34表 H34号住居址出土遺物観察表

(35) H35号住居址 (第52図, 写真図版二十八)

本住居址は、調査区中央であるト-53.54、ナ-54Grに位置する。残存状態は西側半分がカクランにより、住居址南東コーナーは調査区域外となる。重複関係は古い方よりH36号住居址→本址→F24号掘立柱建物址→H33号住居址である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.72m(残存)・南壁1.28m(残存)・東壁0.90m(残存)で、壁高さは北西コーナーで最大29cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で5.30㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは5~13cmで貼られていた。壁溝は確認されなかったが、北東コーナ



第52図 H35号住居址及び出土遺物実測図

一から東壁にかけて一段高いテラス状の平坦部が確認できた。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径32cm・深さ26cm、P2が径37cm・深さ12cmを測る。

本址のカマドは確認できなかったが、北壁中央に一部焼上を伴う掘り込みが検出された。焼上は壁部分に僅かに残るのみで、覆土中にも焼土・炭化物は確認されなかった為、カマドとしては確証が得られなかった。

出土遺物は覆土中からで、少量であった。1は須恵器高台坏で底部のみであった。底部は回転系切り離しである。2は土師器甕で床面上から出土した。いわゆる「武蔵甕」であり、頸部が「コ」の字状に曲がっている。3は須恵器甕であり、肩部に把手の付くタイプと考えられる。底部から胴部のもので接合関係はなかったが、同一地点からの出土であり、胎土・焼成も類似することから、同一個体として扱った。4は敷き石であり側面に敲打痕が残る。5は鉄製品の釘と考えられるが大きく山がっている。

本址はこれらの出土遺物より9世紀後半に位置づけられると考えられる。

No.	種別	器種	法量 (内径/外径/高さ/厚さ)	成形・胎土・文様				備考	出土位置	
				内面	外面	胎土	文様			
1	須恵器	高台坏	—	8.5	—	ロクコナデ	大脚	ロクコナデ 武蔵国紀伊郡一持高台 大脚	完全実測 底径1/2残存	3cm
2	土師器	甕	20.0	—	—	ヘラナデ	白線コナデ	ヘラナデ 白線コナデ	完全実測 口縁1/3残存	カマド トンナ
3	須恵器	甕	9.0	—	—	ロクコナデ	自然輪付帯	ロクコナデ 胴部下半回転ヘラナデ	回転実測	小
4	敷き石	敷	—	—	—	—	—	胎土・焼成類似	出部1/2残存 一部焼存	小
5	鉄	釘	—	—	—	—	—	—	—	出土位置

第35表 H35号住居址出土遺物観察表

(36) H36号住居址 (第53図, 写真図版二十八)

本住居址は、調査区中央であるト-54.55.56、ナ-56Grに位置する。残存状態は西側半分がH33号住居址に、東側が調査区域外となる。重複関係は本址が一番古い。

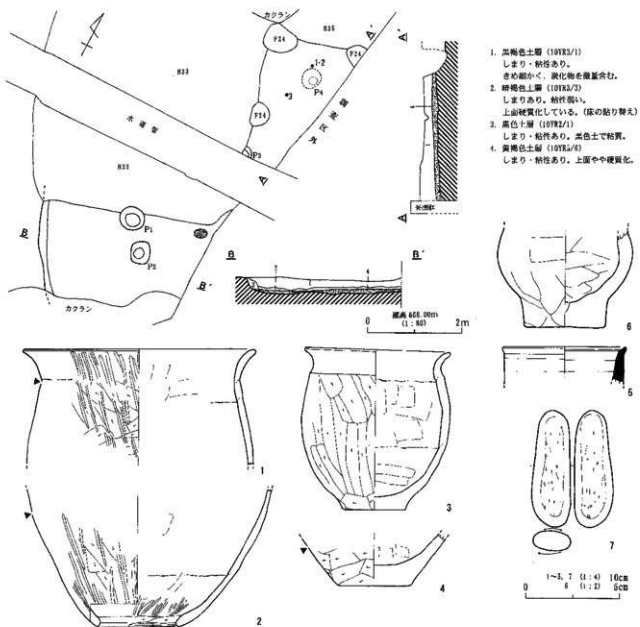
形態は方形を呈すると考えられる。規模は西壁2.02m(残存)で、壁高さは西壁で最大25cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で9.34㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~1.5cmで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、4カ所確認された。規模はP1が径53cm・深さ9cm、P2が径46cm・深さ15.5cm、P3が径20cm・深さ11cm、P4が径41cm・深さ26cmを測る。カマドは確認されなかったが、一部南側に焼上の範囲が確認され、火床部のような硬化が観察できた。

出土遺物は覆土中から多く出土した。1と2は単孔の大型甕で同一個体と考えられるが、1と2は接合関係がなかった。1と2のいずれも床面より4cmほど浮いた状態で出土し、内面は黒ずんでいる。3は土師器の小型甕であり、ほぼ完形である。4も土師器甕の底部である。5は須恵器の短頸甕の口縁部と考えられるが、口唇部内面に沈線状の窪みがある。6はミニチュア土器で壺と考えられる。7は磨石である。

本址はこれらの出土遺物より、6世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量 (内径/外径/高さ/厚さ)	成形・胎土・文様				備考	出土位置	
				内面	外面	胎土	文様			
1	土師器	甕	34.8	—	—	ヘラナデ	白線コナデ	ヘラナデ 白線コナデ	完全実測 口縁ほぼ完形	3.5cm
2	土師器	甕	8.7	—	—	ヘラナデ・ミガキ	自然輪付帯	ヘラナデ 白線コナデ	完全実測	3.5cm 1区
3	土師器	甕	15.5	6.8	17.0	ヘラナデ	白線コナデ	胎土・焼成類似	完全実測 4/5残存	1.5cm
4	土師器	甕	—	7.8	—	ヘラナデ	—	ヘラナデ	完全実測 武蔵甕	1区
5	須恵器	短頸甕	13.2	—	—	ロクコナデ	—	ロクコナデ	白線実測 口縁1/3残存	1区
6	土師器	子甕	4.4	—	—	ナデ	—	ナデ	完全実測 1/4~底径1/2残存	出土位置
7	磨石	磨石	—	—	—	—	—	—	—	出土位置

第36表 H36号住居址出土遺物観察表

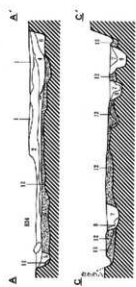
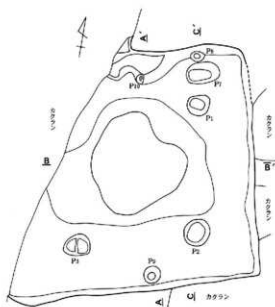
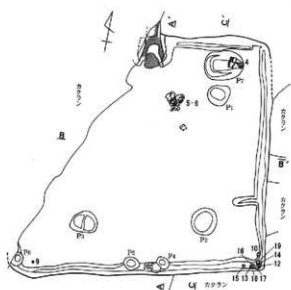


第53図 H36号住居址及び出土遺物実測図

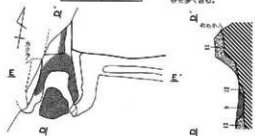
(37) H37号住居址 (第54-55図, 写真図版三十)

本住居址は、調査区中央であるト-50.51.52、ナ-50.51.52、ニ-51.52Grに位置する。残存状態は西側1/3がカクランにより削平されている。重複関係は古い方より、H40号住居址→本址→H34号住居址→D35.36号土坑である。

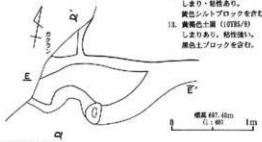
形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.96m(残存)・南壁6.00m・西壁0.72m(残存)・東壁5.48mで、壁高さは北壁東寄りで最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で25.76㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~25cmで貼られていた。壁溝は北東コーナーを除き、ほぼ全周している。規模は幅14~35cm・深さ1~13cmで、断面はU字形である。また、P2に向かって間仕切り溝状態で伸びている。ピットは掘り方検出時も含め、9カ所確認された。P1~3が主柱穴、



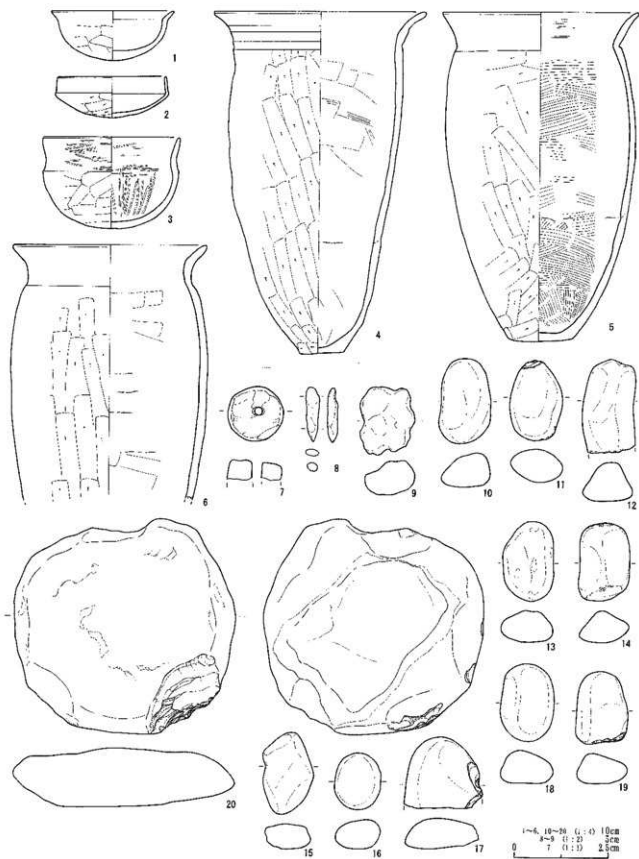
1. 黄灰色土層 (107B/1)
しまり・粘性強い。
さらさらしている。
2. 黄褐色土層 (107B/2)
しまりあり。粘性弱い。
3. 黄褐色土層 (107B/1)
しまり・粘性あり。
黄色シルトブロックを含む。
4. 黄褐色土層 (107B/1)
しまり・粘性あり。
黄色シルトブロック
粘土ブロックを含む。
5. 黄褐色土層 (107B/1)
しまり・粘性弱い。
さらさらの砂層。
6. 黄褐色土層 (107B/1)
しまり・粘性あり。
黄色ブロックを含む。
7. 黄褐色土層 (107B/1)
しまり強く。粘性あり。
さらさらした土で
粘土粒子を含む。
8. 黄褐色土層 (107B/1)
しまり・粘性あり。
黄色シルトブロックを
多く含む。
9. 赤色土層 (107A/3)
しまりあり。粘性ややあり。
火照度でよく焼け。
硬質化している。
10. 褐色土層 (107B/3)
しまり・粘性あり。
11. 黄褐色土層 (107B/2)
しまり・粘性あり。
砂を多く含む。



12. 黄褐色土層 (107B/1)
しまり・粘性あり。
黄色シルトブロックを含む。
13. 黄褐色土層 (107B/3)
しまりあり。粘性強い。
黒色土ブロックを含む。



第54図 H37号住居址実測図



第55图 H37号伴原址出土遗物实测图

P4と5が入り口施設の穴、P7が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径57cm・深さ33cm、P2が径66cm・深さ30cm、P3が径66cm・深さ31cm、P4が径34cm・深さ21cm、P5が径40cm・深さ26cm、P6が径35cm・深さ13cm、P7が長軸95cm・短軸72cm・深さ42cm、P8が径35cm・深さ23cm、P9が径42cm・深さ39cmを測る。住居址掘り方は住居址中央部分が一段高くなる掘り方で、段の高さは最大11cmを測る。

カマドは北壁の中央部に造られていた。カクランにより煙道部と左袖が壊されていた。煙道部は長く伸びるタイプで、規模は残存で長さ50cmを測る。袖部は地山の上に粘性のある褐色と黄褐色の粘土を交互に積み、造られていた。また焚口部から内側の袖内面は非常に焼け込んでおり、硬化していた。火床部は焚口部にあり、良く焼けていた。焼土の厚みは7cmを測る。カマド掘り方は焚口部前面部分のみ一段高くなっており、掘り方時にP10が検出された。P10は焚口部に立てられた袖構築材の掘り込み穴と考えられる。

本址からの出土遺物は多く、特に完形に近いものが多かった。1はいわゆる「内斜口縁杯」と呼ばれるタイプの土師器杯で、重複している5世紀代のH40号住居址からの混入品と考えられる。2は須恵器杯蓋模倣の土師器杯である。底部はヘラケズリを施す。3は土師器鉢で、内面に暗文風のミガキが施されている。4～6は土師器甕である。4はほぼ完形で、貯蔵穴と考えられるP7内に倒れ込むように出土した。ただ、土坑底面よりは12cm浮いた状態であった。5と6はカマド前からまとまって出土した。いずれも床面直上である。5は内面ハケ目の残るナゲが施されている。7は滑石製のFI玉でやや大型のタイプである。8は土製品であるが品種は不明であり、ミニチュア的なものとも思われる。9は鉄製品であるが品種は不明である。10～19は編み物石と考えられる。住居址南東コーナーの壁溝上でまとまって出土した。20は台石で、P4と5のあいだの壁溝上から出土した。一部に敲打のためと考えられる剥離痕がある。

これらの遺物より、本址の所産時期は7世紀代と考えられる。

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			口内径(単位)	底径(単位)	内面		外面			
1	土師器	杯	13.0	-	5.3	ミガキナ	口縁ヨコナデ	ヘラケズリナデ	西脇実測 1/3残存	IV区 II区ホリ方
2	土師器	鉢	11.8	12.0	4.4	ミガキナ	口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	西脇実測 1/4残存	III区 II区ホリ方
3	土師器	杯	14.6	14.4	9.7	ミガキナ 暗文	口縁ヘラミナキ	底面ヘラケズリナデ	西脇実測 1/3残存	III区
4	土師器	甕	22.4	4.7	36.4	ヘラナゲ (ハケナゲ)	ヘラケズリ	口縁ヨコナデ	完全実測 全部	-23cm 貯蔵穴
5	土師器	甕	20.8	6.8	35.0	ヘラナゲ	ヘラケズリ	口縁ヨコナデ	完全実測	12cm
6	土師器	甕	20.6	-	-	ヘラナゲ	ヘラケズリ	口縁ヨコナデ	完全実測 口縁1/4残存	III区
8	土製品	不明	2.9	0.7	0.6				重量1.14g	III区
No.	種別	器種	素材	保存率	最大径	最大厚	最大重	重量	所見	出土位置
7	石工	磨石	完形	0.54	1.48	0.23	1.35			
9	不明	鉄		3.0	3.6	2.8			法量は全てサビの部分含む	III区
10	編み物石	解石安山岩	完形	5.0	5.5	4.0	293.00			III区
11	編み物石	砂岩	完形	8.5	5.6	3.8	230.00		上・下端面に均打痕	III区
12	編み物石	花崗岩	(5.9)	(5.6)	(4.3)	(336.00)			下部欠損(設置?)	1.5cm
13	編み物石	新緑凝灰岩	完形	8.5	5.5	3.5	158.00			5cm
14	編み物石	ホルンフェルス	完形	8.8	5.4	3.7	244.00		上・下端面に均打痕	4cm
15	編み物石	結晶質石灰岩	完形	8.7	5.1	2.7	169.00			5cm
16	編み物石	凝灰岩	完形	6.1	4.9	3.1	112.00			1.5cm
17	編み物石	砂岩	(7.5)	(8.3)	(3.3)	(288.00)			下部欠損(設置?)	2.5cm
18	編み物石	新緑凝灰岩	完形	8.2	5.7	3.4	240.00			III区
19	編み物石	ホルンフェルス	完形	7.2	5.5	3.5	195.00		下端面に使用のためと思われる凹痕	2.5cm
20	台石	黒色角礫安山岩	22.8	23.1	6.3	5060.00			全体に均らさ、止扉下部に均打	III区

第37表 H37号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			口内径(単位)	底径(単位)	内面		外面			
1	須恵器	杯	-	(5.6)	-	口クロナデ	口クロナデ	西脇実測 全部1/4残存	I区	
2	須恵器	甕	-	(5.6)	-	口クロナデ	口クロナデ 平行タタキ	西脇実測 全部1/4残存	I区	
3	土師器	甕	21.0	-	-	ヘラナデ	口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	西脇実測 口縁1/3残存	I区

第38表 H38号住居址出土遺物観察表

(38) 38号住居址 (第56図, 写真図版三十)

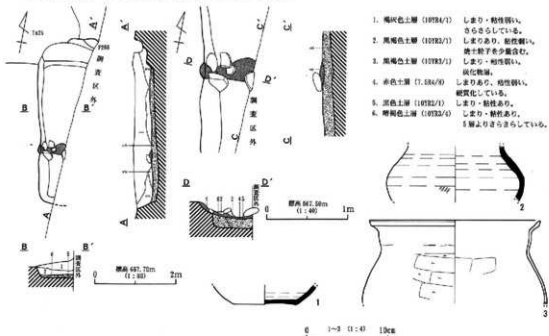
本住居址は、調査区中央であるト-52.53Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となり、全体の1/4ほどの検出にとどまった。新旧関係は古い方より、H39号住居址→本址→T a 25号竪穴遺構→P 266である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは西壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.28m (検出)・南壁0.25m (検出)・西壁3.56mで、壁高さは西壁北よりで最大35cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は2.51㎡ (検出) を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に軟質で、貼床は全体に1~15cmの厚さで貼られていた。また本址は北壁側にテラス状の段が検出された。いわゆる棚上遺構と考えられ、規模は幅40cm・高さ15cmを測る。

カマドは西壁中央にあり、検出状況は構築材と考えられる礫と、火床部が検出されたのみである。カマドの主軸方位はN-80°-Eを示す。

出土遺物は覆土中のものが多く、図示した遺物も覆土中からの出土である。1は須恵器杯、2は須恵器壺と考えられる。3は土師器甕で頸部が「コ」の字となる武蔵甕のタイプである。

これら遺物より本址は9世紀前半に位置づけられる。

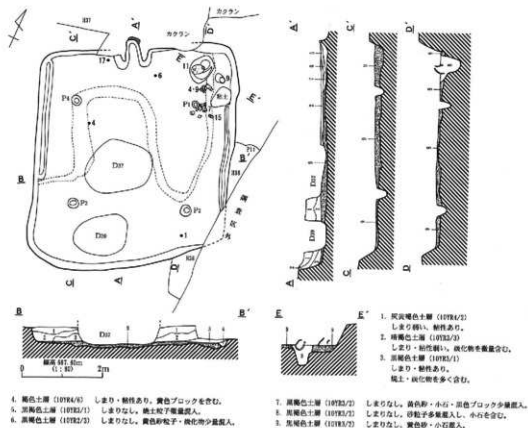


第56図 H38号住居址及び出土遺物実測図

(39) 39号住居址 (第57-58図, 写真図版三十・三十一)

本住居址は、調査区中央であるト-52.53、ナ-52.53Grに位置する。残存状態は住居址南東コーナーが調査区域外、北側はカクランによって削平されている。新旧関係は古い方から、H40号住居址→本址→H37号住居址→H38号住居址・D37.39号土坑→Ta25号竪穴遺構である。

形態は角がやや丸い方形である。規模は北壁4.51m・南壁4.21m (検出)・西壁4.73m・東壁3.97m (検出) で、壁高さは北東コーナー一部で最大55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で22.37㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は1~16cmの厚さで貼られていた。壁溝は東壁と西壁の一部にそれぞれ検出された。規模は幅15~30cm・

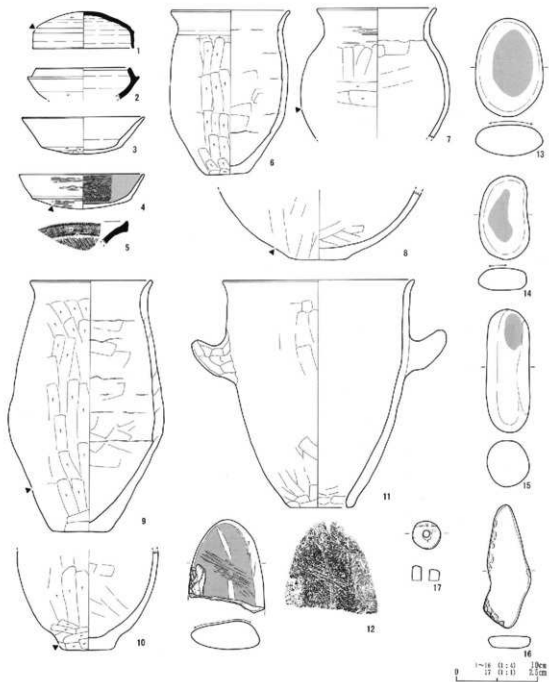


第57図 H39号住居址実測図

No.	種別	数量	法量			成形・材質・文様				備考	出土位置	
			容積(m³)	重量(kg)	体積(m³)	内面	外面	重量	断面			
1	銅金部	秤量	12.1	-	4.5	コケコナデ			コケコナデ	天骨部回転ヘラケズリ	完全実測 2/3残存	Ⅱ区
2	銅金部	秤量	11.4	-	-	コケコナデ			コケコナデ	底縁部回転ヘラケズリ	回転実測 11個/10残存	Ⅰ区
3	土師器	号	15.2	9.9	4.5	ナデ			口縁ヨコナデ	底縁ヘラケズリ	完全実測 4/5残存	Ⅱ区
4	土師器	号	15.4	12.1	4.3	ミガキ→黒色粘焼			ミガキ		完全実測 3/4残存	D~2cm
5	土師器	号	-	-	-	コケコナデ			コケコナデ	樽造り状文	断面実測	Ⅰ区
6	土師器	号	14.6	8.1	20.1	ヘラケズリ			ヘラケズリ		完全実測 3/4残存	Dcm
7	土師器	号	14.7	-	-	ヘラケズリ			ヘラケズリ	口縁ヨコナデ→ヘラミガキ	完全実測 口縁3/4残存	Dcm
8	土師器	号	-	7.1	-	ヘラケズリ			ヘラケズリ→ナデ		完全実測 口縁完全形	Ⅱ区
9	土師器	号	15.0	6.7	30.8	ヘラケズリ			ヘラケズリ	口縁ヨコナデ	完全実測 2/3残存	D~1cm
10	土師器	号	-	6.6	-	ヘラケズリ			ヘラケズリ		完全実測 口縁2/3残存	あり方
11	土師器	号	23.6	7.7	27.8	ヘラケズリ			ヘラケズリ→ナデ		完全実測 完全形	-16cm P1
No.	種類	素材	内寸	外寸	重量	断面	断面		断面		出土位置	
12	磁石	安山岩	定形	(11.4)	(9.3)	(3.5)	(495.00)	下部欠損	定形に磨打痕	正面が破断(急角現る)	Ⅰ区	
13	磨石	安山岩	定形	12.0	8.3	3.9	320.00	正面にすり面			Ⅱ区	
14	磨石	安山岩	定形	10.3	6.2	3.1	278.00	正・裏にすり面			Ⅰ区	
15	磨石	礫石安山岩	定形	15.0	5.4	5.6	710.00	正面にすり面			Ⅱ区	
16	磨石?	粘板岩	定形	15.0	5.8	1.6	198.00	下部部の影響は使用痕か。			Ⅱ区	
17	白玉	磨石	定形	6.47	0.85	0.23	0.50				Dcm	

第39表 H39号住居址出土遺物観察表

深さ3~10cmで、断面は「U」字形である。ピットは4カ所確認された。P1~4は主柱穴と考えられ、規模はP1が径19cm・深さ27cm、P2が径28cm・深さ22cm、P3が径26cm・深さ25cm、P4が径25cm・深さ15cmを測る。

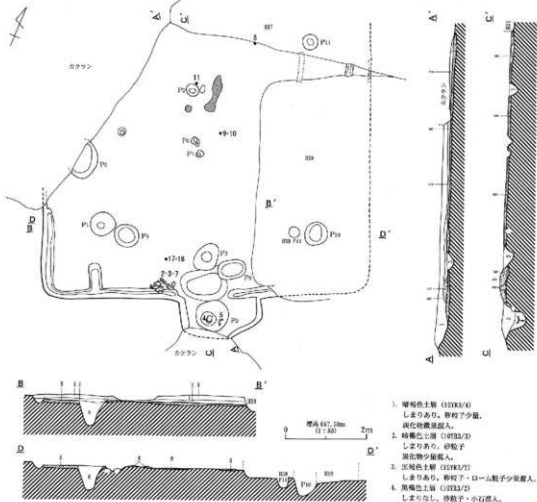


第58圖 1139号住居址出土遺物実測圖

また、本址はカマド東脇に貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内からは図示した11の大型把付甕が口縁部を下にして完形で出土した（写真図版八十二参照）。規模は長軸70cm・短軸52cm・深さ51cmを測る。住居址の掘り方はカマド側を中心に、挿図で示した点線の範囲が一段高くなる掘り方であった。段差は2~8cmを測る。

カマドは北壁中央に造られていたが、カクランにより上部がほとんど削平され、煙道と一部袖が検出されたのみである。煙道部の長さは36cmである。袖部も高さは5cmほど残存していた。また、本址の貯蔵穴内には図に示した範囲で、白色粘土が床面上に置かれていた。

出土遺物は覆土中や貯蔵穴周辺から多く出土した。1は須恵器坏蓋で、床面より6cm浮いた状態で出土した。天井部は回転ヘラケズリを施す。2は須恵器坏身で覆土中の出土である。これら2点の須恵器はその特徴から、MT15~TK10型式の範疇で捉えられると考える。3と4は土師器坏で、4は内面黒色処理されている。5は須恵器甕の口縁部で、櫛描波状文が施されている。6と7は土師器の小型甕で、2点とも床面直上からの出土である。8は土師器の壺、9は土師器甕で、貯蔵穴脇に上半分を据え置く



5. 褐色土層 (017R/0) 黄色砂・小石混在。カゲカサ。
6. 黄褐色土層 (017R/2) 砂・小石・ロームブロック混入。

7. 灰褐色土層 (017R/1) しまりなし。砂多量混入。
8. 黄褐色土層 (017R/3) しまり・粘付強い。上部硬質。

1. 黄褐色土層 (017R/4) しまりあり。砂粒子少量。炭化物微量混入。
2. 暗褐色土層 (017R/2) しまりあり。砂粒子炭化物少量混入。
3. 灰褐色土層 (017R/1) しまりあり。砂粒子・ローム粒子少量混入。
4. 黄褐色土層 (017R/2) しまりなし。砂粒子・小石混入。

第59図 H40号住居址実測図

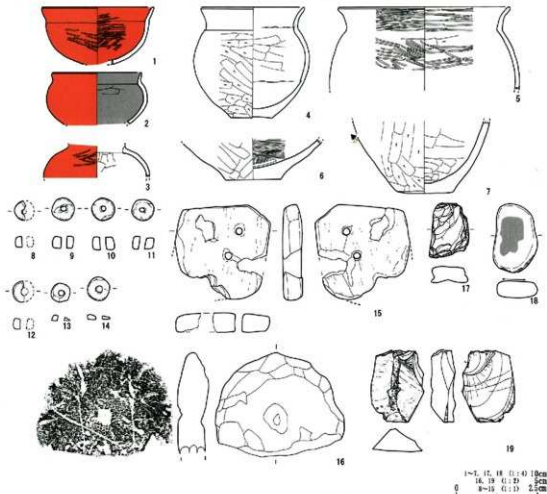
ような形で出土した(写真図版三十一参照)。底部はその脇より床面に潰れたような状態で出土した。10は土師器甕である。11は大型の把手付甕で完形である。12は砥石のような刃物傷がある石で、傷周辺は磨れている。13~15は磨石、16は敲石と考えられる。17は滑石製の白玉である。

これら遺物より、本址は6世紀前半に位置づけられると考える。

(40) H40号住居址 (第59・60図, 写真図版二十九)

本住居址は、調査区中央であるナ-52.53.54、ニ-52.53.54Grに位置する。残存状態は西壁側がカラン、北壁側がH137号住居址により削平されている。新旧関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁5.54m(残存)7.66m(推定)・西壁2.26m(残存)・東壁0.15m(残存)で、壁高さは南壁で最大27cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で29.75㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、貼床は1~21cmの厚さで貼られていた。壁溝は南壁と西壁の一部にめぐっていた。また、南壁からは間仕切り溝的な壁溝も伸びていた。規模は幅18~30cm・深さ2~8cmを測る。ピットは11カ所確認された。P4.10.11が主柱穴、P9が入り口部の貯蔵穴の可能性ある。各ピットの規模はP1が径64cm・



第60図 H40号住居址出土遺物実測図

深さ59cm、P2が径32cm・深さ22cm、P3が径73cm・深さ26cm、P4が径60cm・深さ15cm、P5が径95cm・深さ17cm、P6が径24cm・深さ9cm、P7が径18cm・深さ8cm、P8が径69cm・深さ10cm、P9が径81cm・深さ57cm、P10が径56cm・深さ39cm、P11が径38cm・深さ38cmを測る。本址は南壁中央にいわゆる張り出しピットを持つ。規模は長軸200cm・短軸100cmで中央にP9が掘られていた。また、このピットを跨ぐ状態で床面上に出っ張る円形の硬質部が確認された。この硬質部分は踏み固められたように硬く、この硬質を取り除いた下層には、また硬質化した貼床が存在した。

カマドは北壁側が削平されていたため検出できなかったが、住居中央部に焼土塊が検出され、硬質化はしていなかったが、床土炉の可能性はある。

本址からの出土遺物は床面上のものが多かった。1は土師器環である。口縁部が外反しながら伸びるタイプで、内外面ともに赤彩が施されている。2は土師器環で口縁部が短く外反しながら伸びるタイプのものである。外面が赤彩、内面黒色処理されている。3は土師器壺と考えられ、口縁部が直線的に伸びる、いわゆる直口壺と呼ばれるものと考えられる。外面赤彩が施されている。4は一部胴部が欠損するがほぼ完形で、P9内から出土した。5～7は土師器甕である。8～15は滑石の石製模造品である。8～14は白玉である。15は厚み6mmほどの模造品で、各面は面取りが行われている。中央に不規則な2つの孔が明けてある、いわゆる石製円盤とも考えられる。16は土師器の底部転用の土製品で中心部に両側から穿孔途中の跡があるため、土製紡錘車の未製品と考えられる。片面に木葉痕が確認できる。18は敲打痕と磨り面が確認できる石器である。19は黒曜石の石核である。

本址はこれらの出土遺物より、5世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様				備考	出土位置
			口径(色)	底径(色)	高(厚)	内面		外面			
1	土師器	環	13.8	-	-	ミガキ 赤色塗彩	ミガキ 赤色塗彩	ミガキ 赤色塗彩	同軸実測 1/4残存	P3 Ⅱ区	
2	土師器	環	11.1	-	-	ヘラナデ 黒色処理	赤色塗彩	赤色塗彩	同軸実測 1/2残存	0cm	
3	土師器	壺	-	-	-	ヘラナデ	ミガキ 赤色塗彩	ミガキ 赤色塗彩	同軸実測 1/2残存	0cm	
4	土師器	甕	12.6	5.1	13.6	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測	-33cm P9	
5	土師器	甕	21.2	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	ミガキ	同軸実測 口縁1/3残存	0cm	
6	土師器	甕	-	6.8	-	ハケ目	ヘラナデ	ヘラナデ	同軸実測 底縁1/2残存	0cm	
7	土師器	甕	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測 底縁完形	0cm	
16	土製品	納餅器	7.9	6.3	2.1				重量93.15g 木葉痕	Ⅳ区	
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見		出土位置	
8	白玉	滑石	0.32	(0.28)	-	0.06				0cm	
9	白玉	滑石	完形	0.38	0.67	0.17	0.27			0cm	
10	白玉	滑石	完形	0.42	0.70	0.68	0.36			0cm	
11	白玉	滑石	完形	0.40	0.65	0.15	0.27			0cm	
12	白玉	滑石		0.34	(0.63)	-	0.09			Ⅳ区	
13	白玉	滑石	完形	0.19	0.55	0.20	0.06			Ⅳ区	
14	白玉	滑石	完形	0.19	0.68	0.19	1.10			Ⅳ区	
15	石製模造品	滑石		2.9	2.9	0.6	5.49	有孔円盤(双孔) 孔径0.2cm		Ⅳ区	
17	原石	滑石		6.7	4.9	1.9	88.00			0cm	
18	磨・敲石	安山岩	完形	8.6	5.5	2.2	164.00	正面にすり面 下端部に敲打痕		0cm	
19	石核	黒曜石		4.4	3.2	1.5	19.04			P9	

第40表 H40号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様				備考	出土位置
			口径(色)	底径(色)	高(厚)	内面		外面			
1	灰胎陶器	甕	16.2	9.0	5.6	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	底縁同軸ヘラナデ	完全実測 2/3残存	6cm	
2	土師器	環	12.2	5.7	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	底縁右面転軸糸切り	完全実測 2/3残存	3cm	
3	土師器	環	-	7.1	-	ロクロナデ	ロクロナデ	底縁右面転軸糸切り	完全実測		
4	土師器	環	-	6.4	-	ロクロナデ 黒色処理	ロクロナデ	底縁右面転軸糸切り	完全実測 底縁完形		
5	土師器	甕	-	-	-			かご目圧痕有り	拓本		

第41表 H41号住居址出土遺物観察表

(41) H41号住居址 (第61図, 写真図版三十二)

本住居址は、調査区中央であるテ-48.49、ト-48.49Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、南側はTa1号竪穴状遺構により削平されている。新旧関係は古い方より、H43.49号住居址→本址→Ta1号竪穴状遺構である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.59m(検出)・西壁3.40m(残存)で、壁高さは西壁で最大20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.84㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であるが、第2層は焼土ブロックが大量に混入し、樹木の根のように入っていた。床は全体的に硬質であったが、貼床は施されておらず、敷き床的な状態であった。

出土遺物は全体に少なかった。1は灰軸陶器碗で、床面より6cmほど浮いた状態で出土した。2/3程が残存しており、軸はハケ塗りである。見込み部は良く磨れている。軸葉の塗り方や三日月高台の特徴から、光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式にあたると思われる。2は土師器杯であり、床面直上からの出土である。3は土師器碗、4はやや大型であるが土師器杯とした。内面黒色処理されている。5は籠目のついた土師器甕の底部付近である。覆土中からの出土と所産時期は古墳時代と考えられる為、本址に伴うものではないと考えられるが、ここで記載する。

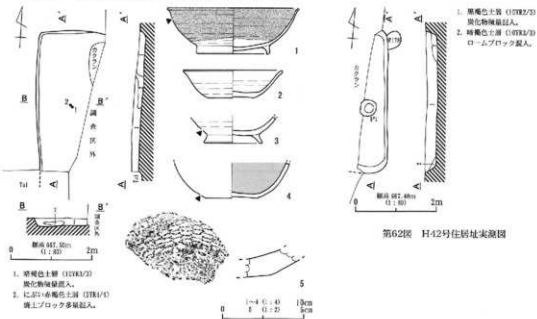
本址これらの出土遺物より、9世紀後半～10世紀前半の所産と考えられる。

(42) H42号住居址 (第62図, 写真図版三十二)

本住居址は、調査区北よりであるナ-48.49Grに位置する。残存状態は住居址西側がカクランにより削平されている。遺構の新旧関係は古い方より、D48号土坑→本址→P178である。

形態は不明である。規模は北壁0.22m(残存)・南壁0.60m(残存)・東壁3.37mで、壁高さは南東コーナーで最大26cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.54㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は軟質であり、貼床は施されていない。ピットは1箇所検出され、規模はP1が径44cm・深さ23cmを測る。

本址からの出土遺物は無く、所産時期は不明である。



第61図H41号住居址及び出土遺物実測図

第62図 H42号住居址実測図

(43) H43号住居址 (第63・64・65図, 写真図版三十二・三十三)

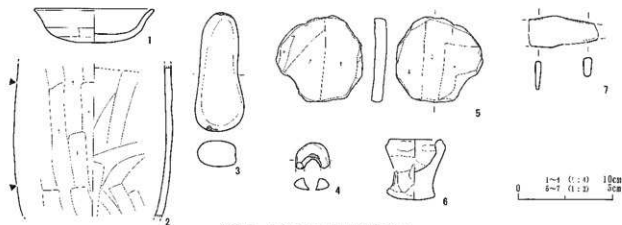
本住居址は、調査区中央であるテ49、ト49.50、ナ49Grに位置する。残存状態は東側1/3が調査区域外となる。重複関係は古い方より、H50号住居址→本址→H41号住居址→Ta1号竪穴状遺構である。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央やや東よりに造られていた。規模は北壁5.14m(検出)・南壁3.25m(検出)・西壁5.02mで、壁高さは南西コーナーで最大60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で21.62㎡を測る。住居址主軸方位はN-10°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は1~14cmの厚みで貼られていた。壁溝は北壁側と南西コーナーを中心に検出された。規模は幅19~38cm・深さ1~9cmで、断面はU字形を呈する。ピットは掘り方時も含め、7箇所確認された。P1と2は主柱穴、P6は入り口施設関連のピットと考えられる。規模はP1が径47cm・深さ51cm、P2が径71cm・深さ46cm、P3が径46cm・深さ20cm、P4が径28cm・深さ10cm、P5が径40cm・深さ9cm、P6が径84cm・深さ22cm、P7が径50cm・深さ50cmを測る。また、本址はカマド東脇に貯蔵穴と考えられる掘り込みが検出された。形態は一段のテラスを持つ方形で、規模は長軸74cm・短軸65cm・深さ42cmを測る。住居址掘り方は、中央部分が一段テラス状に高くなり、段差は6~11cmを測る。

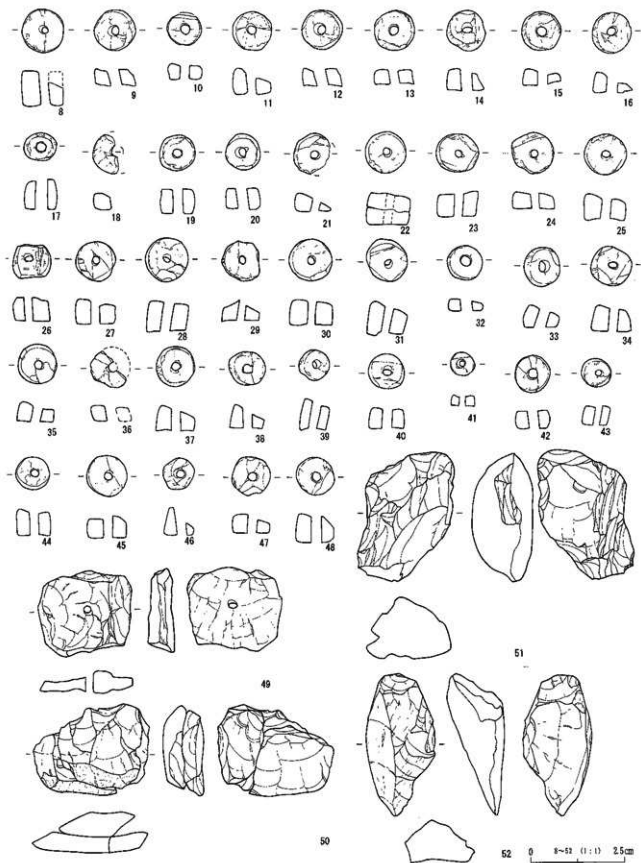
カマドは北壁東よりで検出された。煙道・袖・焚口・火床部が検出され、煙道部先端はI146号住居址に切られていた。煙道部は長く伸びるタイプであり、長さは92cmを測る。袖部は貼床上に黄褐色の粘土により構築されていた。高さは16cmを測る。焚口部は大型の川原石を袖先端部に立てて、構築していた。火床部はよく焼けており焼土は硬質化して、焼土厚みは6cmを測る。また、本址は掘り方検出時に、このカマド西脇に煙道部の掘り込みが検出された。この煙道部跡の前面は、住居址掘り方が一段高くなっており、主柱穴と考えられるP1とP7の中間地点にあたることから、この煙道部が本址の最初のカマド位置であり、図に示したカマド西脇の焼土範囲がその火床部と考えられる。よって本址はカマドの作り替えが行われたと考えられる。

本址からの出土遺物は土器類は少なかったが、滑石の石製模造品が多く出土した。1は土師器坏である。2は土師器甕で覆土中からの出土である。3は敲石で両側の先端に敲き痕が確認できる。4は不明石器で中心部を故意に穿孔していると考えられるが、使用目的は不明である。5は土師器甕片を転用した土製円盤である。6は土製品でいわゆる手掘土器である。小型の白形と考えられる。7は鉄製品で刀子の一部と思われる。8~48は滑石製の白玉である。41は小型の玉であるが、その他は径が大きいタイプの玉である。21~32の12点は西壁壁溝中よりまとまって出土した。また38~41は掘り方検出時に貼床内より出土した。49は中央部に穿孔があり方形を呈する。有孔円盤と考えられる。50~52は滑石の石核で石製模造品の原材料と考えられる。

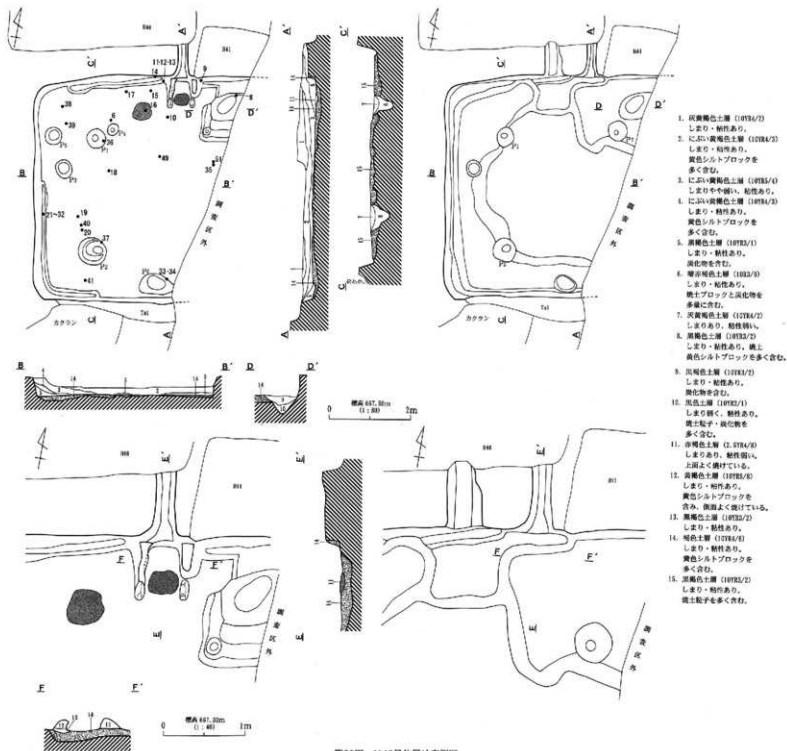
本址からは土器類の出土が少なく所産時期は不確実であるが、1の上師器坏や白玉の大型化等により、6世紀代でも後半の位置づけが考えられる。



第63図 I143号住居址出土遺物実測図



第64图 H43号住居址出土遺物実測図



第65図 H43跡住居地平面図

No.	種別	形種	法 基			成 形・調 節・文 様				備 考	出土位置	
			口徑(φ)	底径(φ)	高(φ)	内 面		外 面				
1	土師器	杯	12.6	—	3.6	ナデ				ヘラナデ 口縁ヨコナデ	同転実測 1/2残存	I区
2	土師器	盃	—	—	—	ヘラナデ				ヘラケズリ	同転実測 銅線残存	I区
3	土製品	内輪	縦4.5	横4.6	0.7	ロクロナデ					重量16.23g 土師器製転用	IV区
6	土師器	平部	32	2.5	3.2	ナデ						0cm
No.	器 種	素 材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重 量	用 意		出 土 位 置		
3	燧石	燧石安山岩	完形	12.6	6.2	3.2	296.00	上・下両部に鋭打痕		II区		
4	不明	燧石岩	完形	(2.8)	(3.7)	(1.3)	(13.00)	下半分欠損		IV区		
7	刀丁	鉄		(3.7)	1.7	(0.6)				I区		
8	白土	滑石	完形	0.94	1.09	0.21	1.81			13cm		
9	白土	滑石	完形	0.45	1.05	0.28	0.82			0cm		
10	白土	滑石	完形	0.44	0.90	0.27	0.51			0cm		
11	白土	滑石	完形	0.71	1.03	0.22	1.01			8.5cm		
12	白土	滑石	完形	0.48	1.04	0.30	0.52			8.5cm		
13	白土	滑石	完形	0.39	1.07	0.25	0.79			8.5cm		
14	白土	滑石	完形	0.58	1.04	0.26	0.90			8cm		
15	白土	滑石	完形	0.43	1.00	0.26	0.58			3cm		
16	白土	滑石	完形	0.54	1.06	0.24	0.83			1.5cm		
17	白土	滑石	完形	0.80	0.85	0.30	0.85			12cm		
18	白土	滑石	完形	0.44	—	—	0.43			0cm		
19	白土	滑石	完形	0.67	0.96	0.27	1.00			0cm		
20	白土	滑石	完形	0.60	0.92	0.30	0.80			0cm		
21	白土	滑石	完形	0.50	(1.04)	0.22	0.58			4cm		
22	白土	滑石	完形	0.85	1.07	0.22	1.69			4cm		
23	白土	滑石	完形	0.70	1.08	0.22	1.41			4cm		
24	白土	滑石	完形	0.46	1.10	0.22	0.88			4cm		
25	白土	滑石	完形	0.72	1.10	0.23	1.29			4cm		
26	白土	滑石	完形	0.64	1.00	0.22	1.07			4cm		
27	白土	滑石	完形	0.65	1.07	0.23	1.22			4cm		
28	白土	滑石	完形	0.81	1.12	0.27	1.60			4cm		
29	白土	滑石	完形	0.54	1.06	0.23	0.71			4cm		
30	白土	滑石	完形	0.68	1.12	0.23	1.47			4cm		
31	白土	滑石	完形	0.89	1.10	0.25	1.47			4cm		
32	白土	滑石	完形	0.33	0.92	0.29	0.38			4cm		
33	白土	滑石	完形	0.60	1.00	0.32	0.79			—16.5cm P B		
34	白土	滑石	完形	0.71	1.05	0.26	1.18			—16.5cm P B		
35	白土	滑石	完形	0.52	1.00	0.28	0.77			14cm		
36	白土	滑石	完形	0.40	—	—	0.30			0cm		
37	白土	滑石	完形	0.69	1.05	0.27	1.08			0cm		
38	白土	滑石	完形	0.63	0.92	0.26	0.59			—2.5cm		
39	白土	滑石	完形	0.82	0.80	0.34	0.83			—11cm		
40	白土	滑石	完形	0.56	0.95	0.30	0.74			—16cm		
41	白土	滑石	完形	0.30	0.63	0.19	0.18			—12cm		
42	白土	滑石	完形	0.48	0.95	0.29	0.63			直区中層		
43	白土	滑石	完形	0.51	0.75	0.20	0.53			直区下層		
44	白土	滑石	完形	0.72	0.89	0.24	0.90			IV区下層		
45	白土	滑石	完形	0.59	1.10	0.22	1.20			IV区上層		
46	白土	滑石	完形	0.77	0.78	0.24	0.56			IV区下層		
47	白土	滑石	完形	0.51	1.03	0.23	0.73			下層		
48	白土	滑石	完形	0.78	1.02	0.27	1.26					
49	石製遺物	滑石		2.3	2.5	0.7	4.05	孔径0.3cm		2cm		
50	石鏡	滑石		2.4	3.0	1.1	8.79			IV区 P 1		
51	石鏡	滑石		3.4	2.5	1.8	15.11			0cm		
52	石鏡	滑石		3.8	1.8	1.5	8.63			IV区		

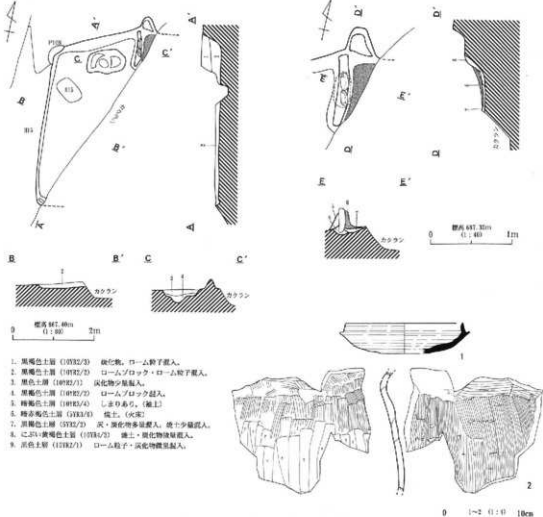
第42表 H43号住居址出土遺物観察表

(44) H44号住居址 (第66図, 写真図版三十三)

本住居址は、調査区中央であるニ47.48、ヌ47.48Grに位置する。残存状態は住居址東側がカクランにより壊されている。重複関係は古い方よりH47号住居址→本址→H15号住居址→P168である。

形態は方形を呈すると考えられるが、北壁と西壁の角度が開いており、住居址全体では五角形のような状況になる可能性がある。カマド北壁中央に造られていた。規模は北壁2.50m(残存)・南壁0.10m(残存)・西壁3.66mで、壁高さは北西コーナーで最大50cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.84㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床は軟質であり、地山を直に使う「敷き床」のような状態であった。壁溝は住居址南西コーナーで検出された。規模は幅15~20cm・深さ3cmを測る。また、本址からはカマド西脇に貯蔵穴と考えられる土坑が確認された。規模は長軸94cm・短軸60cm・深さ37cmを測る。中央部が一段低くなる掘り方であった。

カマドは北壁中央部に造られていたが、東側はカクランにより削平されており、煙道部と左袖の検出のみであった。煙道部は長く伸びないタイプで、煙道の長さは49cmを測る。袖部は川原石を構築の芯材として、しまりの強い暗褐色土により造られていた。火床部はよく焼けており硬質化していた。



第66図 H44号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は少なかったが、2点を図示した。1は須恵器坏身であり、底部に回転ヘラケズリを施す。返り部は貼付である。特徴からMT15~TK10型式に含まれると考えられる。2は土師器甕であり、内外面にハケ目の残るナデを施す。

本址の所産時期は出土遺物は少なく不確定ではあるが、6世紀代と考えられる。

No.	類別	器種	遺 跡			成 形・編 織・文 様		備 考	出土位置
			山原石	北神原	東山原	内 面	外 面		
1	須恵器	坏	144	58	37	口ケロナデ	口ケロナデ 底面回転ヘラケズリ	回転文彫	
2	土師器	甕	-	-	-	ヘラナデ (工具類)	ヘラナデ (工具類) ・ヘラケズリ	破片文彫	カマド

第13表 H44号住居址出土遺物観察表

(45) H45号住居址 (第67・68図, 写真図版三十四)

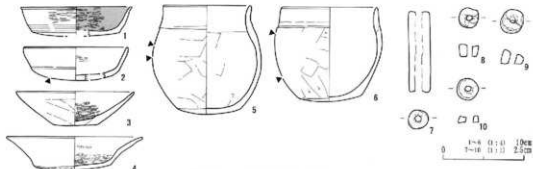
本住居址は、調査区中央であるテ-45.46、ト-45.46Grに位置する。残存状態は東壁側が調査区域外となり、住居址全体の2/3ほどの検出に止まった。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁4.61m (検出)、南壁3.03m (検出)、西壁4.73m (残存) 5.85m (推定) で、壁高さは西壁南よりで最大23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で23.41㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積の単層である。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、貼床の厚みは2~13cmを測る。壁溝は北壁と西壁の一部、及び南壁で検出された。規模は幅12~27cm・深さ4~8cmで、断面はU字形を呈する。また、P2とP3からは西壁に向かって間仕切り溝が確認された。ピットは掘り方検出時も含め、10カ所確認された。P2~4と掘り方時に検出されたが、P9が主柱穴。また、P8が入り口施設ピットと考えられる。ピットの規模はP1が径56cm・深さ11cm、P2が径54cm・深さ25cm、P3が径48cm・深さ36cm、P4が径43cm・深さ16cm、P5が径39cm・深さ55cm、P6が径49cm・深さ35cm、P7が径40cm・深さ29cm、P8が径41cm・深さ24cm、P9が径42cm・深さ20cm、P10が径62cm・深さ29cmを測る。またカマド東脇から貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。規模は長軸68cm・短軸64cm・深さ10cmを測る。住居址掘り方は南側が一段高く掘られており、P7の部分に段差が見られた。この事からP6をP3に対応する主柱穴、P7が入り口施設のピットと仮定すると、本址は南側への拡張が推定でき、拡張後の主柱穴としてP2とP6とP9が対応すると考えられる。

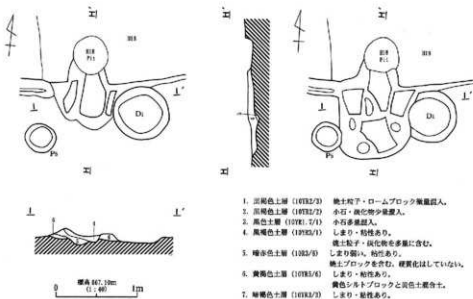
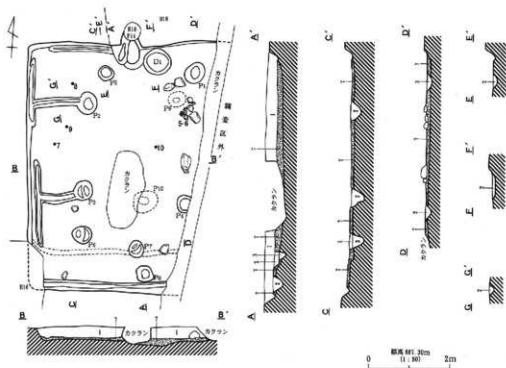
本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道部はH18号住居址のピットによって削平されていたが、煙道が伸びないタイプと考えられる。袖は黄褐色土で構築されており、顕著な火床部は確認されなかった。

本址からの出土遺物は覆土中からが多かった。1~4は土師器坏である。1は内面黒色処理されている。5と6は土師器の短頭の小型甕である。7は滑石製の管玉で、床面より19cm浮いた状態で出土した。8~10は白玉で、9と10はほぼ床面上から出土した。

本址はこれらの出土遺物より6世紀後半の所産時期と考えられる。



第67図 H45号住居址出土遺物実測図



1. 赤褐色土層 (10T32/3) 焼土粒下・ロームブロック集積層入。
2. 赤褐色土層 (10T32/2) 小石・炭化物少量混入。
3. 黒色土層 (10T31/7/1) 小石多量混入。
4. 黒褐色土層 (10T33/1) しまり・粘性あり。
焼土粒下・炭化物を多量に含む。
5. 暗赤色土層 (10T3/3) しまり強い。粘性あり。
焼土ブロックを含む。硬質化はしていない。
6. 黄褐色土層 (10T3/4) しまり・粘性あり。
7. 暗褐色土層 (10T32/2) しまり・粘性あり。

第68図 H45号住居址実測図

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			口径(外)	底径(内)	内面	外面	重量	所見		
1	土師器	杯	13.6	10.8	(3.6)	ミガキ→黒色処理	ミガキ 底面付近不明	完全実測	円形	Ⅲ区
2	土師器	杯	12.9	10.9	(4.0)	ミガキ?	器面残っていて不明	図転実測	円形	Ⅱ・Ⅲ区
3	土師器	杯	16.5	5.4	(4.2)	ミガキ	ヘラケズリ	図転実測	円形	Ⅳ区
4	土師器	杯	16.7	9.4	4.2	口縁ヨコナデ みこぶヘラケズリ→ミガキ	口縁ヨコナデ→底面ヘラケズリ→ミガキ?	完全実測	内面単純	Ⅱ区
5	土師器	壺	10.9	7.7	13.2	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測	1cm 1区	Ⅰ区
6	土師器	壺	11.9	7.7	11.5	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測	1cm 1区	Ⅰ区
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置	
7	管玉	滑石	完形	2.50	0.60	0.20	1.87		1.8x2cm	
8	白玉	滑石	完形	0.40	0.60	0.17	0.21		2.2cm	
9	白玉	滑石	完形	0.45	0.70	0.19	0.34		1.5cm	
10	白玉	滑石	完形	0.20	0.65	0.18	0.15		0.6cm	

第44表 H45号住居址出土遺物観察表

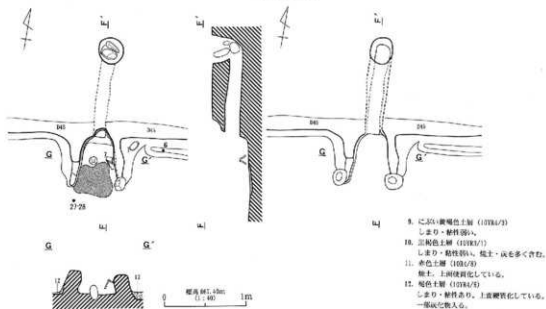
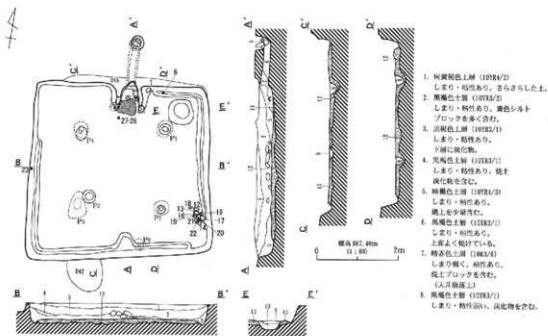
(46) H46号住居址 (第69・70図, 写真図版三十六・三十七)

本住居址は、調査区中央であるト-48.49、ナ-48.49Grに位置する。残存状態は良好である。重複関係は古い方より、H50号住居址→H49号住居址→本址→D45号土坑である。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央に確認された。規模は北壁4.10m、南壁4.40m、西壁4.26m、東壁3.90mで、壁高さは南西コーナーで最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は17.46㎡を測る。住居址の主軸方位はN-9°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積であるが、床面上に準大から人頭大の河原礫が検出された(写真図版三十七参照)。これらの礫は床面上より僅かに浮いた状態で、特に住居址中央部からまとまって出土した。床は全体的に硬質であり、カマド前面にかけては特に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~16cmで貼られていた。壁溝は東壁と北壁東側と南壁と西壁南側の一部に検出された。規模は幅19~32cm・深さ2~10cmを測る。断面はU字形である。ピットは6カ所確認された。P1~4が主柱穴、掘り方時の検出であるが土P6

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			口径(外)	底径(内)	内面	外面	重量	所見		
1	土師器	杯	13.3	11.9	2.7	ナデ	ヨコナデ 底面ヘラケズリ→ナデ	完全実測	円形	3cm
2	土師器	杯	13.2	13.3	4.5	ミガキ→ 黒色処理	口縁ミガキ 底面ヘラケズリ	完全実測	3/4残存	Ⅰ区ホリ方
3	土師器	鉢	9.6	5.4	(5.0)	ヘラケズリ	ハケ目→ヘラケズリ	図転実測	1/5残存	Ⅲ区ホリ方
4	土師器	高杯	-	12.6	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	図転実測	器底1/4残存	Ⅱ区
5	土師器	鉢	16.4	-	-	ミガキ→黒色処理	口縁ミガキ 体部ヘラケズリ	図転実測	1/3残存	Ⅱ区
6	土師器	壺	13.9	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実測	口縁4/5残存	6cm Ⅳ区ホリ方
7	土師器	壺	18.7	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測	口縁3/4残存	7cm カマド
8	土師器	壺	23.6	5.7	(37.2)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測	1/3残存	カマド Ⅳ区 Ⅰ区ホリ方
9	土師器	壺	-	5.4	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測	底面完形	Ⅰ区
10	土師器	壺	-	5.2	-	ヘラケズリ 黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	底面2/3残存	Ⅳ区ホリ方
11	土師器	壺	-	8.7	-	ヘラケズリ→ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	底面4/5残存	Ⅳ区ホリ方
23	土製品	紡錘車	4.2	0.6	2.4		ミガキ	重量30.89g		0.6cm
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置	
12	磁み物石	赤土シフェルス	完形	13.9	6.4	5.9	600.0g	上下部部に浅い縦打痕		2cm
13	磁み物石	角閃石安山岩	完形	13.6	9.2	4.3	650.0g			2.5cm
14	磁み物石	かんらん岩	完形	12.6	6.6	4.3	480.0g	下部面に縦打痕		7cm
15	磁み物石	輝緑岩	完形	11.8	8.9	4.8	530.0g	正面にすり面		2.5cm
16	磁み物石	安山岩	完形	12.8	5.6	4.2	390.0g			3cm
17	磁み物石	帯緑輝閃岩	完形	14.2	7.0	5.2	550.0g	上・下部面に縦打痕		3cm
18	磁み物石	安山岩	(12.2)	(4.8)	(3.1)	(302.0g)		下部欠損 上部部に浅い縦打痕		1cm
19	磁み物石	安山岩	(8.7)	(7.3)	(5.4)	(480.0g)		上部に縦打による割傷 下部欠損(欠損後も縦打有り)		3cm
20	磁み物石	輝石安山岩	完形	9.6	6.2	4.7	400.0g			2.5cm
21	磁み物石	輝石安山岩	完形	9.8	8.0	3.8	430.0g	正面にすり面		2.5cm
22	磁み物石	輝石安山岩	完形	8.2	5.7	2.3	178.0g	正面中央にすり面		2cm
24	原石	滑石		2.4	1.7	0.5	3.12			Ⅱ区
25	白玉	滑石	完形	0.68	0.83	0.24	0.64			Ⅲ区中層
26	白玉	滑石	完形	0.52	1.04	0.27	0.84			Ⅲ区下層
27	白玉	滑石	完形	0.52	1.42	0.30	1.75			Ⅲ区
28	白玉	滑石	完形	0.80	1.42	0.30	2.27			Ⅲ区

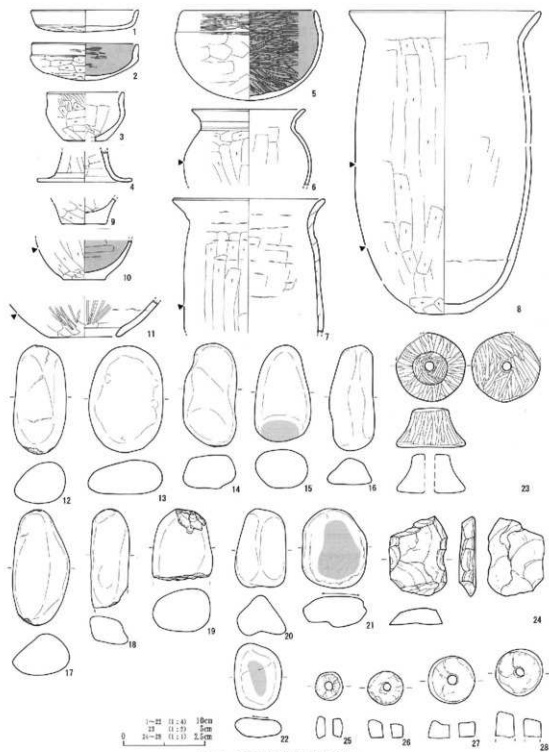
第45表 H46号住居址出土遺物観察表



第69図 H46号住居址実測図

が入り口施設のピットと考えられる。各ピットの規模はP1が径28cm・深さ20cm、P2が径20cm・深さ21cm、P3が径32cm・深さ10cm、P4が径32cm・深さ22cm、P5が径68cm・深さ20cm、P6が径28cm・深さ25cmを測る。また、本址はカマド東脇に貯蔵穴が確認された。規模は径60cm・深さ22cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。残存状況は良好であり、煙道部が潰れずにトンネル状になって検出された。煙道部は長く伸びるタイプで、規模は長さ130cm・高さ18cmを測る。煙道部先端

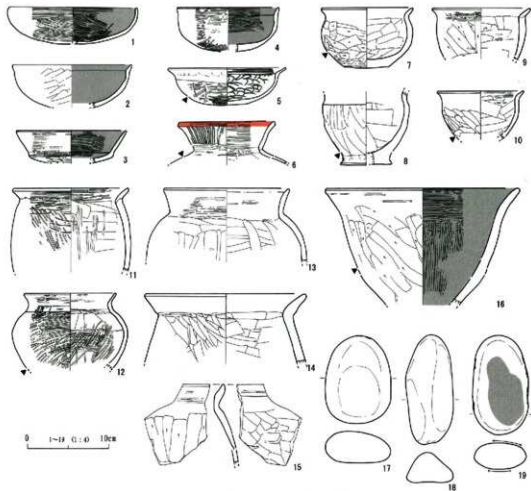


第70图 1146号住居址出土器物实物图

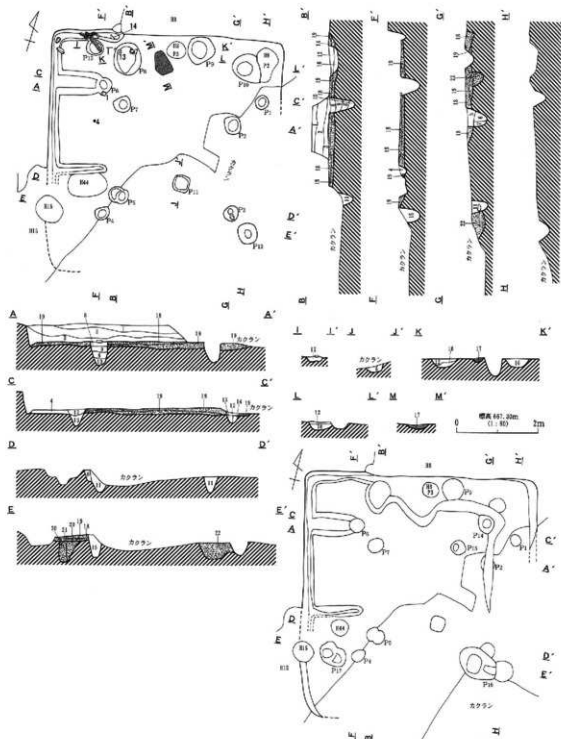
はH27号住居址と同じくピットが掘られており、川原石3点が出土した。ピットの規模は径32cm・深さ38cmを測る。また、煙道部の天井部は焚口部分のみ良く焼けており、煙道先端や側面は焼土化していなかった。袖部分は地山削りだして造られており、高さの残存値は29cmを測る。焚口部は精円の川原石を門構え状に構築していた。火床部は良く焼けており硬質化し、焼土の厚みは3cmを測る。

本址からの出土遺物はカマド及び掘り方からが多く、図示した土器類の多くが掘り方内より出土した物である。1と2は土師器坏であり、2は内面が黒色処理されている。3は土師器鉢である。4は土師器高坏脚である。5は土師器の大型の鉢で、内面が黒色処理されている。6～10は土師器の変類で、6は口縁部が有段状になっている。11は土師器甕の孔部分である。12～22は編み物石と考えられ、住居址南東コーナー付近からまとまって出土した。上下先端に敲打或いは磨り面が存在するものがある。23は土製の紡錘車であり、ほぼ完形である。表面よく磨かれている。24は滑石製品の未製品か原石と考えられるが、一部に加工痕がある。25～28は白玉であり、27・28はやや大型品でカマド前面の床面上から出土した。

本址は図示した出土遺物の年代感より、所産時期は6世紀後半から7世紀前半と考えられる。



第71図 H47号住居址出土遺物実測図



第72図 H447号住居址実測図

1. 濃い黒褐色土層 (19784/2)
しまり・粘り、粘性あり。炭化物微量含む。
2. 黒褐色土層 (19782/2)
しまり・粘性あり。褐色シルトブロック含む。
3. 暗褐色土層 (19783/2)
しまり・粘性あり。褐色シルトブロック少量含む。
4. 黒色土層 (19781/1)
しまり・粘性強い。
5. 黒褐色土層 (19785/1)
しまり・粘性あり。炭化物含む。
6. 黒褐色土層 (19781/2)
しまり・粘性中程度。炭化物含む。
7. 褐色土層 (19784/2)
しまり・粘性あり。
8. 黒褐色土層 (19783/1)
しまり強い。粘性あり。
9. 黄褐色土層 (19783/3)
しまり・粘性あり。
褐色シルトブロック含む。
10. 濃い黒褐色土層 (19784/1)
しまり・粘性あり。
褐色土層がレンズ状に散在する。
11. 黄褐色土層 (19784/2)
褐色土層がレンズ状に散在する。
12. 暗褐色土層 (19783/4)
ロームブロック少量。粘土粒子少量混入。
13. 黒色土層 (19782/1)
ロームブロック少量混入。
14. 灰褐色土層 (19784/2)
ローム少量混入。
15. 黒色土層 (19782/1)
炭化物少量混入。
16. 黒褐色土層 (19783/1)
粘土粒子・炭化物混入。
17. 赤色土層 (1984/9)
かなり大塊混入。しまり・粘性あり。
土層よく層状している。
18. 黒褐色土層 (19783/1)
しまり・粘性あり。
19. 褐色土層 (19784/4)
しまり・粘性あり。土層よく層状している。
褐色土層がシルトブロックの互層。
20. 褐色土層 (19784/2)
しまり・粘性あり。褐色シルト土層。
21. 暗褐色土層 (19781/1)
しまり・粘性強い。炭化物微量含む。
22. 褐色土層 (19784/1)
しまり・粘性あり。褐色土層と褐色シルトブロックの互層土。

(47) H47号住居址 (第71・72図, 写真図版三十四・三十五)

本住居址は、調査区中央であるナ-47、ニ-46.47.48、ヌ-46.47.48Grに位置する。残存状態は南東コーナー側がカクランにより削平されている。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁5.53m・西壁5.91m(掘り方)・東壁1.64m(残存)で、壁高さは西壁中央で最大50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は掘り方検出部分で23.13㎡を測る。住居址の主軸方位はN-15°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であり、特に中央部分にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、2面の床が確認できた。厚みは2~25cmで貼られていた。壁溝は西壁側で確認され、2箇所で間仕切り溝も検出された。壁溝の規模は幅22~61cm・深さ4~11cmを測る。ピットは掘り方時も含め、17カ所確認された。規模はP1が径34cm・深さ31cm、P2が径48cm・深さ47cm、P3が径39cm・深さ41cm、P4が径39cm・深さ53cm、P5が径41cm・深さ29cm、P6が径40cm・深さ46cm、P7が径43cm・深さ56cm、P8が径79cm・深さ21cm、P9が径67cm・深さ22cm、P10が径81cm・深さ28cm、P11が径41cm・深さ20cm、P12が径43cm・深さ12cm、P13が径52cm・深さ38cm、P14が径48cm・深さ32cm、P15が径37cm・深さ33cm、P16が径103cm・深さ37cm、P17が径70cm・深さ49cmを測る。主柱穴は2組考えられ、まずP5・P7・P15の組み合わせ、次にP3・P4・P6・P14の組み合わせがある。本址は先に触れたが床が2面確認できた事と、主柱穴が2組確認できることから柱穴の移動に伴う床の張り替えか或いは住居拡張も考えられるが、掘り方時に壁等が広がっている様子は観察できず拡張の確認は得られなかった。住居址の掘り方は中央部が一段高くなり、壁周辺が下がり、7cmの段差が確認された。

本址のカマドは確認されなかったが、北壁中央より火床部のような焼土範囲が検出された。北壁側がH8号住居址に削平されていることから、本来はここにカマドが存在したと考えられる。

本址からの出土遺物は比較的多く、ピット内からの出土が多かった。1~5は土師器坏である。いずれもタイプが異なる物で、1は口縁部が内湾するタイプ、2,4,5はいわゆる「内斜口縁坏」と呼ばれるタイプのものである。5は内面に「コ」の字を重ねたような螺旋状の暗文が施されている。3は須恵器模倣タイプの坏で、内面が黒色処理されている。6は壺の口縁部から頸部の部分で、口唇部に僅かに

No.	種別	器種	位置		形状・調整・文様		備考	出土位置	
			口縁長	底径	内面	外面			
1	土師器	杯	16.0	-	4.4	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測	IV区
2	土師器	杯	14.6	-	(5.2)	黒色処理	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	回転実測	P 6
3	土師器	杯	13.5	5.4	(4.0)	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	P 2
4	土師器	杯	12.5	-	5.4	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測 外面摩耗	→5.5cm
5	土師器	杯	14.5	-	4.8	ミガキ(螺旋暗文)	口縁ヨコナデ 体→底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	P 8・16
6	土師器	壺	11.9	-	(5.3)	胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ→口辺部一部赤色塗彩	ミガキ→口辺部赤色塗彩	完全実測	IV区
7	土師器	鉢	11.3	5.5	7.3	口縁ヨコナデ→胴部→底部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	→2cm P 8 Ⅲ区
8	土師器	鉢	-	6.3	(9.0)	口縁ヨコナデ→胴部→底部ヘラナデ	胴部ヘラナデ→底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	回転実測	P 6
9	土師器	鉢	12.1	-	(8.3)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→ミガキ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測 摩耗	IV区
10	土師器	鉢	10.7	-	(5.8)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→口縁ミガキ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	回転実測	IV区
11	土師器	甕	14.3	-	(10.2)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→ミガキ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	IV区
12	土師器	甕	11.4	-	(9.4)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	
13	土師器	甕	15.4	-	(9.1)	口縁ヨコナデ→ミガキ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→ミガキ	回転実測	→8cm P 8
14	土師器	甕	20.0	-	(8.0)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヘラナデ→胴部ヘラナデ	回転実測	→2cm 内溝
15	土師器	甕	-	-	-	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→一部ミガキ	鏡片実測	Ⅲ・IV区
16	土師器	鉢	23.9	-	(14.3)	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→一部ミガキ	回転実測	Ⅱ・Ⅲ区
No.	器種	素材	残存率	最大径	最小径	最大深	重量	所見	出土位置
17	凝り物石	麻石安山岩	完形	10.7	8.0	3.8	500.00	土壌中に埋打直	P 7-1
18	凝り物石	麻石安山岩	完形	13.3	3.9	3.9	390.00		P 7-2
19	凝り物石	麻石安山岩	完形	12.1	6.9	3.3	460.00	正・裏にすり面 両側に研磨痕の使用痕	P 7-3

第46表 H47号住居址出土遺物観察表

赤影の跡が残る。7～10・16は土師器の鉢とした。11～15は土師器の甕の破片で、12は良くミガキが施されており壺とすべきか。17～19は編み物石でP7からまとまって出土した。19は表裏に磨り面、側面に擦痕のような傷がある。

本址はこれらの出土遺物より、5世紀後半から6世紀初頭に位置づけられる。

(48) H48号住居址 (第73図, 写真図版三十八)

本住居址は、調査区中央であるト-47.48Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる為、住居址北西コーナー及び南西コーナーのみの検出にとどまった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.65m(検出)・南壁0.30m(検出)・西壁4.97mで、壁高さは西壁北よりで最大42cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.69mを測る。覆上はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは3～14cmで貼られていた。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径62cm・深さ10cm、P2が径50cm・深さ51cmを測る。

出土遺物は検出された面積からすると多く、特に北西コーナー付近の床面上からは図示した遺物が多く出土した。1は灰釉陶器の碗であり、軸はハケ塗りと考えられる。2～4は須恵器環で、いずれも右回転の糸切り離しを行う。5～7は内面黒色処理した土師器である。8～10は内面黒色処理を施した土師器碗である。11は土師器の大型高坏脚と考えられる。脚部には3箇所の穿孔があり、孔の形は円形にC字がついたような異形である。12は土師器高坏の脚部で、形態より古墳時代の高坏と考えられ混入品である。13は土師器甕で、頸部がコの字状を呈するいわゆる「武蔵甕」である。14は大型の砥石で西壁に沿うように出土した。15は敲打と磨り面が確認される河原礫で、カマドの構築材とも考えられる。17は白玉で覆土中の出土である。

本址の所産時期はこれらの出土遺物より、9世紀後半と考えられる。

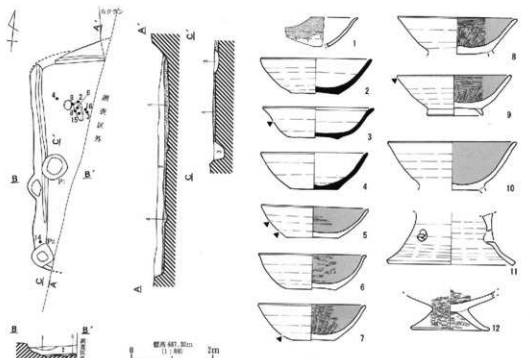
No.	種別	器形	法量		造形・測定・文様		備考	出土位置	
			口徑(内)	底径(内)	内	外			
1	灰釉陶器	碗	—	—	(13.0)	ロクロナデ 灰釉陶 八ケ塗り	ロクロナデ 須恵器 八ケ塗り	破片(裏面) 頸～口縁付	I区
2	須恵器	環	13.7	5.9	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ 裏面右回転糸切り	完全素焼 口縁～底穴部	8cm
3	須恵器	環	13.7	6.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全素焼 1/3残存	1.3cm
4	須恵器	環	13.7	6.0	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ 裏面右回転糸切り	完全素焼 口縁～底穴部	5.5cm
5	土師器	環	13.2	6.4	3.8	ミガキ・黒色処理	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全素焼 2/3残存	I区
6	土師器	環	13.2	6.2	4.3	ミガキ・黒色処理	ロクロナデ 裏面右回転糸切り	完全素焼 ほぼ完全	8cm
7	土師器	環	13.8	3.7	4.4	ミガキ・黒色処理	ロクロナデ 裏面右回転糸切り	完全素焼 1/6残存	I区
8	土師器	碗	14.9	—	(14.5)	ミガキ・黒色処理	ロクロナデ 底面付足ハケケズリ 底縁糸切り・付蓋付 ナデ	完全素焼 口縁～底穴部	6cm
9	土師器	碗	14.2	6.9	6.0	ミガキ・黒色処理	ロクロナデ 裏面糸切り・付蓋付 ナデ	完全素焼 2/3残存	2cm
10	土師器	碗	15.9	—	(6.9)	黒色処理	ロクロナデ 底面糸切り・付蓋付 ナデ	陶輪素焼 1/4残存	I区
11	土師器	高坏脚	—	14.9	(6.3)	ロクロナデ	ロクロナデ 上部の孔・竹管で下下に外面よりあけられる	完全素焼 孔の径1.5cm 脚部3ヶ所に孔有り	I区
12	土師器	高坏	—	9.7	(4.9)	ミガキ 黒色処理	ミガキ 黒色処理	陶輪素焼 脚～受蓋部付	P5
13	土師器	甕	20.6	—	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 須恵器ハケケズリ	陶輪素焼 口縁～底穴部	I区
14	砥石	砥石	縦長	縦大	縦大	縦大	縦大	所見	
15	瓦石?	瓦石	縦長	縦大	縦大	縦大	縦大	4面とも縁面有り 特に向斜面を使用	8cm
16	磨石	磨石	縦長	縦大	縦大	縦大	縦大	平面と右側にすり面 上縁部と左側下部に磨り面	1cm
17	白玉	白玉	縦長	縦大	縦大	縦大	縦大	正・裏に3つのすり面	2cm
18	河原礫	河原礫	縦長	縦大	縦大	縦大	縦大	所見	I区

第47表 I148号住居址出土遺物観察表

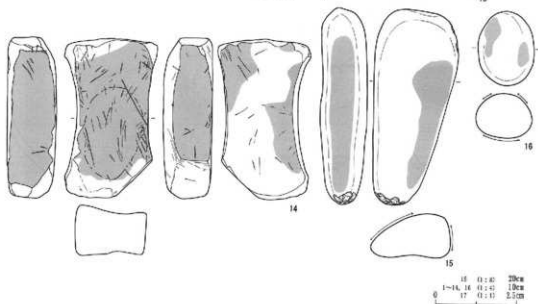
(49) H49号住居址 (第74図, 写真図版三十八)

本住居址は、調査区中央であるテ-48.49、ト-48.49Grに位置する。残存状態は東側が調査区外、西側がH46号住居址により削平されている。新旧関係は古い方より、本址→H46号住居址→H48号住居址→H41号住居址→D45号土坑である。

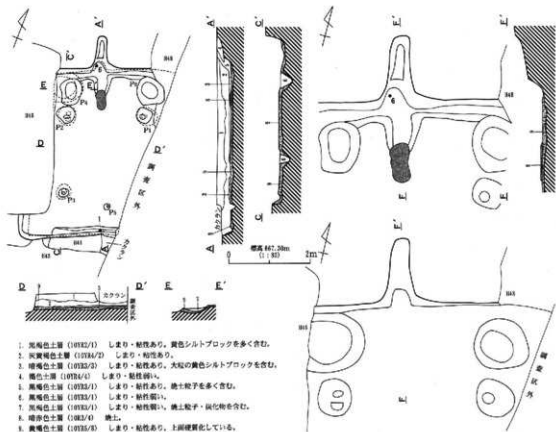
形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.39m(残存)・南壁2.42m(検出)・西壁0.54m(残存)で、壁高さはカマド西脇で最大38cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は



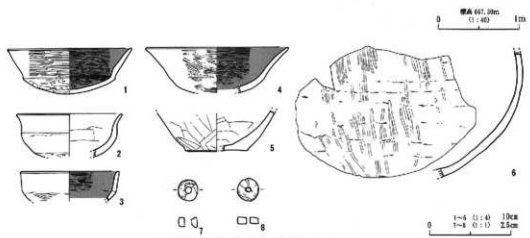
1. 灰褐色土器 (10YR6/7) しまり・粘性あり。
 2. 黄褐色土器 (10YR5/2) しまり・粘性あり。灰色シルトブロックを多量に含む。
 3. 黄灰色土器 (10YR6/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックと黄土粒子を含む。
 4. 黄褐色土器 (10YR5/3) しまり・粘性あり。上高麗質あり。黒色土ブロックを含む。



第73図 H48号住居址及び出土遺物実測図



1. 灰褐色土層 (H182/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを多く含む。
2. 灰褐色土層 (H184/2) しまり・粘性あり。
3. 灰褐色土層 (H182/2) しまり・粘性あり。大粒の黄色シルトブロックを含む。
4. 褐色土層 (H182/3) しまり・粘性弱い。
5. 灰褐色土層 (H182/1) しまり・粘性あり。焼土粒子を多く含む。
6. 灰褐色土層 (H182/1) しまり・粘性弱い。
7. 灰褐色土層 (H182/1) しまり・粘性あり。焼土粒子・炭化物を含む。
8. 褐色土層 (H182/3) 焼土。
9. 灰褐色土層 (H182/3) しまり・粘性あり。上面硬質化している。



第74図 H49号住居址及び出土遺物実測図

検出部分で8.94㎡を測る。床は全体的に硬質であり、貼り床は1~9cmの厚みで貼られていた。

壁溝は北壁と南壁に巡っていた。規模は幅が18~27cm・深さ2~10cmを測る。ピットは6箇所検出され、P1~P3は支柱穴、P4とP6は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径38cm・深さ32cm、P2が径45cm・深さ30cm、P3が径25cm・深さ26cm、P4が径64cm・深さ15cm、P5が径18cm・深さ13cm、P6は長軸74cm・短軸66cm・深さ48cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られている。煙道部と火床面のみの検出で、袖部は確認されなかった。煙道は長く伸びるタイプで、長さ90cmを測る。火床部上面は良く硬質化しており、焼土の厚みは2cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中からのものが多い。6の土師器甕のみがカマド中から出土した他は、覆土中からの出土である。1~4は土師器環である。1と3は須恵器蓋機做タイプの坏であり、いずれも内面黒色処理されていた。5は土師器甕の底部である。7と8は白玉でいずれも覆土中からの出土である。

本址の所産時期は覆土中からの出土遺物が多く、不確定であるが6世紀後半に位置づけられると考える。

No.	類別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(高)	底径(高)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	環	15.4	11.3	5.5	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナデ・体部ヘラケズリ→ミガキ	穴空実測	6cm 東溝
2	土師器	環	13.0	—	(5.3)	口縁ヨコナデ→体部ヘラナデ	体部ナデ→口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区
3	土師器	環	11.2	11.3	(4.6)	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナデ・底部ヘラナデ(工具痕)	回転実測	Ⅳ区
4	土師器	環	17.4	—	5.6	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	Ⅰ区
5	土師器	甕	—	7.8	(5.0)	ヘラナデ	胴部ヘラナデ→底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅳ区
6	土師器	甕	—	—	—	ヘラナデ・ミガキ	ミガキ	破片実測	9cm カマド
No.	器種	素材	形状	最大径	最大厚	最大型	法量	所産	出土位置
7	白玉	磨石	実形	0.30	0.60	0.22	0.18		Ⅱ区
8	F15	磨石	実形	0.20	0.65	0.14	0.18		Ⅳ区

第48表 H49号住居址出土遺物観察表

(50) H50号住居址 (第75図, 写真図版三十八)

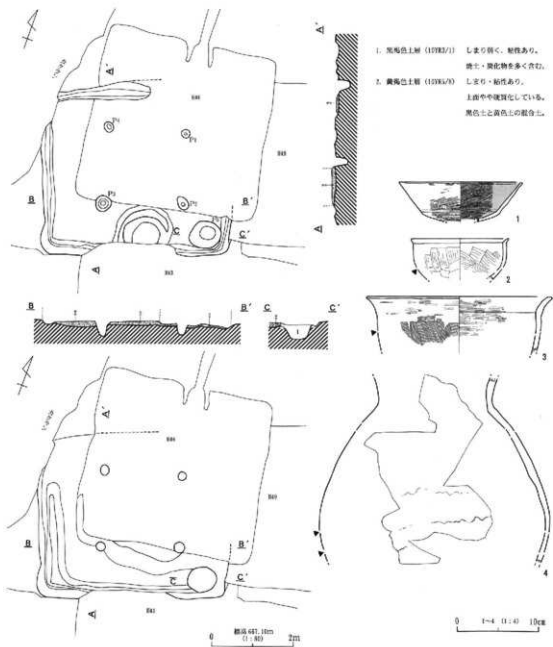
本住居址は、調査区南端であるト-48.49、ナ-48.49Grに位置する。残存状態は重複する住居址群とカクランにより、覆土のほとんどと北東コーナーは検出できなかった。重複関係は古い方より、本址→H43.49号住居址→H46号住居址→D.20.45号土坑→P178である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.30m(残存)・南壁4.52m・東壁0.75m(残存)・西壁3.19m(残存)で、壁高さは南西コーナーで46cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.67㎡を測る。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~13cmで貼られていた。壁溝は検出された壁全体に巡るように検出され、規模は幅13~44cm・深さ2~11cmを測る。ピットは5カ所確認された。P1~P4は支柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径21cm・深さ34cm、P2が径35cm・深さ29cm、P3が径39cm・深さ36cm、P4が径27cm・深さ36cm、P5が径78cm・深さ45cmを測る。また、南壁の入り口部分と考えられる床面上には円形の周境帯のような盛り上がりが見出され、段差は8cmを測る。この境の上部は硬質化していた。住居址掘り方は中央部が一段高く、壁際が低くなる掘り方であった。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1と2は土師器環であり、1は口縁部が大きく外反するタイプの坏で、内面黒色処理が施されている。2はいわゆる内斜口縁坏であり、体部外面は粗い

No.	類別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(高)	底径(高)	器高(厚)	内面	外面		
1	土師器	環	15.2	9.3	(6.9)	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ→ヘラナデ→ミガキ	回転実測	貯蔵穴
2	土師器	環	12.0	—	(5.0)	口縁ヨコナデ→体部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→体部ヘラナデ	回転実測	
3	土師器	鉢	22.8	—	(7.1)	ミガキ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ(工具痕)→口縁ミガキ	回転実測	
4	土師器	甕	—	—	—	ヘラナデ	口縁ヨコナデ 体部ヘラナデ 隆起(?)	回転実測	

第49表 H50号住居址出土遺物観察表



第75図 H50号住居及び出土遺物実測図

ナデが施されている。3は大型の鉢である。内面に丁寧なミガキが施されている。4は土師器の壺か或いは胴張甕である。外面に橙色の塗彩が行われているようであるが、不確定である。

本址は出土遺物も少なく不確定であるが、図示した遺物などから5世紀後半に位置づけられると考える。

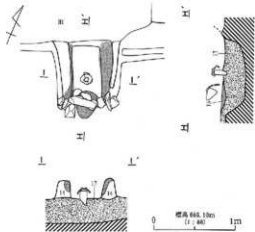
(51) 51号住居址 (第76~79図, 写真図版四十・四十一)

本住居址は、調査区北側であるチ-28.29、ツ-27.28.29、テ-28Grに位置する。残存状態は北壁がH1号住居址に、南西側がH3号住居址によって削平されている。重複関係は本址が一番古い。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁4.76m・南壁4.47m・西壁4.42m・東壁4.36mで、壁高さは南壁中央で最大58cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-22°-Wを示す。住居址の床面積は20.14m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で5層に分かれるが、4層と5層の間に多量の炭化材と焼土が検出された(写真図版四〇・四一)。これら炭化材は床面より浮いた状態であったが、焼土は炭化材の上にかぶるように検出され、尚かつ被熱していることから、当初屋根上を覆ういわゆる「土屋根」の痕跡とも考えたが、床面との間に間層を持つことから、住居廃絶後に屋根材が崩落、土が覆ったところで廃材を火により消却した可能性もある。床は全体的に硬質で、カマド前面と住居址中央部分は特に硬かった。貼床は全体に8~31cmの厚さで貼られていた。壁溝は東壁・南壁・西壁と北壁の一部分に検出された。断面形はU字形で、幅は約16~39cm・深さ2~15cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め、12カ所確認された。P1~4が柱柱穴、P10が入り口施設ピットと考えられる。規模はP1が径54cm・深さ68cm、P2が径57cm・深さ60cm、P3が径44cm・深さ55cm、P4が径56cm・深さ60cm、P5が径33cm・深さ22cm、P6が径55cm・深さ14cm、P7が径66cm・深さ31cm、P8が径57cm・深さ22cm、P9が径20cm・深さ19cm、P10が径56cm・深さ17cm、P11が径81cm・深さ12cm、P12が径20cm・深さ26cmを測る。また本址は住居址南東コーナーに貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。形態は楕円形で、規模は長軸93cm・短軸77cm・深さ66cmを測る。住居址掘り方は中央部が一段高くなる掘り方で、特にカマド側の北壁寄りには深かった。段差は最大22cmを測る。

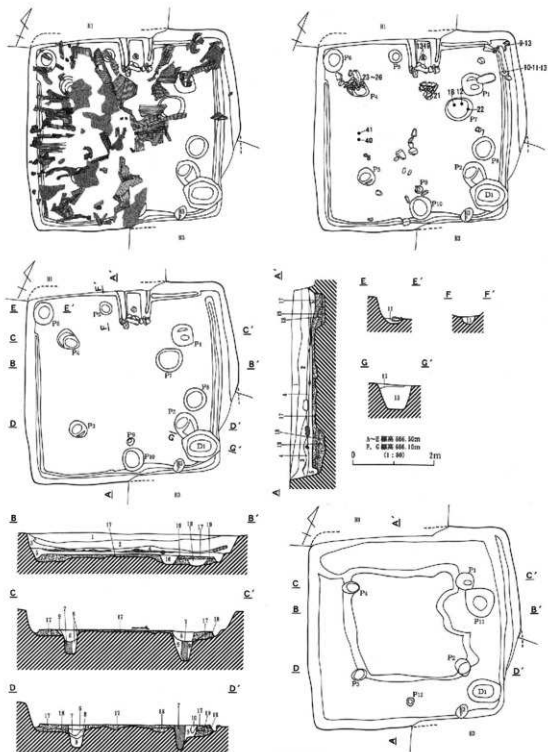
カマドは北壁中央にあり、検出状況は煙道部をH1号住居址によって削平されている他は良好である。袖部は最大26cmの高さがあり、貼床の上に褐色土で構築されていた。焚口部は川原石によって門構え状に造られており、天井石が崩落した状態で出土した。また、燃焼部の中央には支脚石が検出され、石上部には土師器坏が載せられていた。火床部は良く焼けており、焼土の厚みは4cmを測る。

出土遺物は覆土中やカマド、床面上から多く出土したが、床面直上といえるものは21の大型甕と2点の白玉のみで、その他の物は4~6cm浮いた状態で出土している。1~6は土師器坏であるが、5と6はやや口径が大きく鉢とした方が良いかもしれない。1は須恵器坏蓋模倣タイプで、3は内斜口縁坏と呼ばれるタイプである。7と8は土師器鉢でいずれもほぼ完形である。7は内面黒色処理が施されている。9~11は直口壺で9と10は外面赤彩が施されている。また10は口縁部の内面も赤彩が確認できる

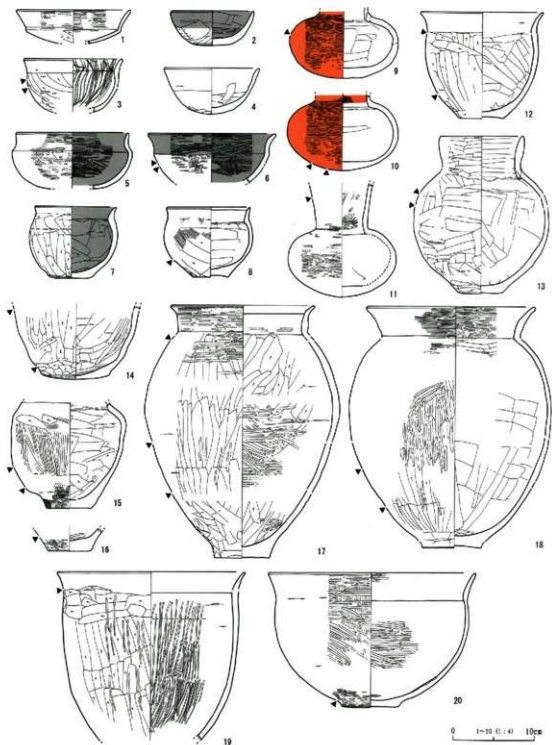


1. 褐色色土層 (101R3/3) しまり・粘性やや強い。焼土粒子を含む。
2. 灰黄褐色土層 (101R4/2) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを含む。
3. 暗褐色土層 (101R3/0) しまり・粘性あり。炭化物・焼土を含む。
4. 黒褐色土層 (101R2/3) しまりあり。炭化物・焼土ブロック散入。
5. 黒褐色土層 (101R3/2) しまりあり。焼土塊・ロームブロック散入。
6. 黒褐色土層 (101R3/1) 炭化物・ロームブロック散入。
7. 褐色色土層 (101R3/0) ローム粒子・炭化物散入。
8. 黒褐色土層 (101R3/1) ローム粒子散入。
9. 黒褐色土層 (101R3/2) ロームブロック・黒色土 (101R2/1) が散入。
10. 暗褐色褐色土層 (31R2/4) 焼土ブロック・焼土塊・炭化物散入。
11. 黒褐色土層 (101R2/2) ロームブロック少量散入。
12. 黒褐色土層 (101R2/3) 炭化物少量散入。
13. 黒色土層 (101R2/1) ロームブロック・黒色土・黒色シルト (101R2/1) が散入。
14. 褐色色土層 (101R4/0) しまり・粘性あり。黒色土と黄色シルトが互層になっている。
15. 赤褐色土層 (2. 31R4/3) しまり・粘性あり。上面よく焼けている。
中央部に白色の焼土の層がある。
16. 黒色土層 (101R2/1) しまり・粘性強い。焼土炭化物を含む。
17. 暗褐色土層 (101R3/1) しまり・粘性あり。上面よく焼けている。
黄色土と黒色土の互層になっている。
18. 棕色土層 (101R2/1) しまり・粘性あり。
19. 褐色土層 (101R4/0) しまり・粘性あり。黄色シルトと黒色土の互層。

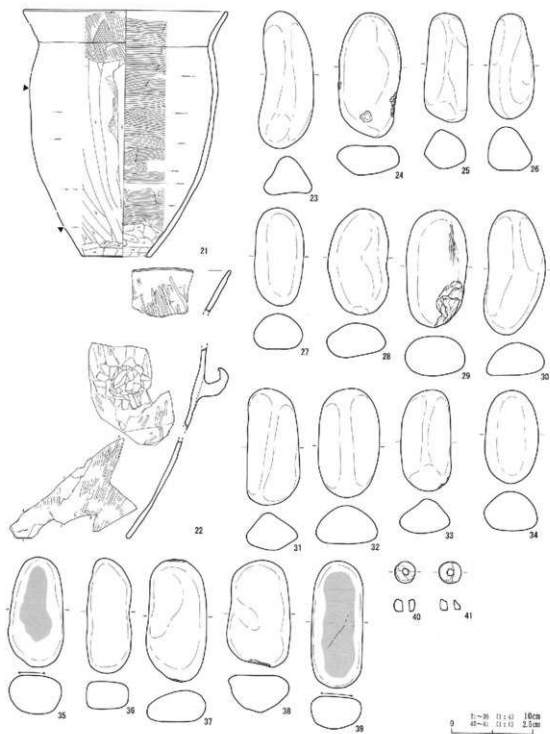
第76図 H51号住居址カマド実測図



第77图 H51号住居址实测图



第78图 H51号住居址出土遺物実測図



第79图 H51号住居址出土遗物实图

No.	器 別	器 種	造 器			成 形 ・ 調 整 ・ 文 装		備 考	出土位置
			口径	底径	高さ	内 面	外 面		
1	土師器	鉢	14.0	11.6	4.1	ミガキ	ミガキ	口縁突部 磨耗著しい	116cm
2	土師器	鉢	10.2	7.0	4.3	口縁口コナデ→口縁へみこみ部ヘラナデ→黒色処理	口縁口コナデ・口縁・底部ヘラナデ→口縁黒色処理	完全実測	1・II区
3	土師器	鉢	12.2	—	(6.3)	博文	底部ヘラナデリ・口縁口コナデ・ミガキ?	口縁実測	P11
4	土師器	鉢	11.7	—	5.6	みこみ部ヘラナデ→口縁口コナデ	底部ナデ・底部ヘラナデ→口縁口コナデ	口縁実測	116cm
5	土師器	鉢	13.8	14.6	(6.8)	ミガキ→黒色処理	口縁口コナデ 底部ヘラナデリ・ミガキ	口縁実測	III区 III区
6	土師器	鉢	13.6	14.2	(6.0)	ミガキ→黒色処理	口縁口コナデ 底部ヘラナデリ→ミガキ→口縁黒色処理	口縁実測	III区
7	土師器	鉢	10.0	5.7	8.8	口縁口コナデ→胴→底部ヘラナデ→黒色処理	口縁口コナデ→胴部ヘラナデリ ヘラナデリ→底部ヘラナデリ	完全実測	17cm
8	土師器	鉢	10.2	4.3	8.5	口縁口コナデ→胴→底部ヘラナデ	口縁口コナデ 底部ヘラナデリ ハケ11→胴部ヘラナデリ ハケ目	完全実測	5cm II区 庫
9	土師器	山口壺	—	—	(8.1)	胴へみこみ部ヘラナデ	ミガキ 赤色塗彩	完全実測	12cm I区 庫
10	土師器	山口壺	—	—	(9.4)	口縁ミガキ 胴部塗彩→底部ヘラナデ	ミガキ→赤色塗彩	完全実測	12cm IIV区 庫
11	土師器	山口壺	—	—	(13.9)	口縁ミガキ 胴へみこみ部ヘラナデ	ミガキ	完全実測	口縁外周磨滅
12	土師器	小瓶	15.1	5.3	13.0	口縁口コナデ→胴→底部ヘラナデ	口縁口コナデ・胴部ヘラナデリ	完全実測	20cm P7 P11 III区
13	土師器	壺	10.2	5.1	19.2	口縁ヘラナデ 胴→底部ヘラナデ	口縁ヘラナデ 胴部ヘラナデリ ヘラナデリ	口縁実測	4~12cm I区 庫 カマド
14	土師器	壺	—	8.1	(9.1)	ヘラナデ	胴部ヘラナデリ 底部ヘラナデリ	完全実測	III区 カマド
15	土師器	壺	—	5.5	(12.9)	口縁ハケ目	口縁口コナデ 胴部ヘラナデリ ナケ目	完全実測	8cm カマド
16	土師器	小瓶	—	5.4	(2.0)	ヘラナデ	胴部ヘラナデリ→ミガキ 底部ヘラナデリ	完全実測	III区
17	土師器	壺	17.7	6.8	30.8	口縁口コナデ・ミガキ 胴ヘラナデヘラナデリ→部分のミガキ	口縁口コナデ→ミガキ 胴部ヘラナデ→部分のミガキ	完全実測	P6
18	土師器	壺	20.7	7.2	29.4	口縁ミガキ 胴→底部ヘラナデ	口縁ミガキ 胴部ヘラナデリ ヘラナデ→部分のミガキ 底部ヘラナデリ	完全実測	~18cm P7・8 113~111 カマド
19	土師器	壺	23.0	—	(20.0)	胴部ヘラナデリ→口縁口コナデ→ミガキ	口縁口コナデ→胴部ヘラナデリ	口縁実測	4cm I区 カマド
20	土師器	鉢	25.5	6.8	16.4	ミガキ	口縁→胴部ヘラナデ→ミガキ	完全実測	磨滅著しい
21	土師器	鉢	25.1	8.4	30.1	ハケ目・胴部下ヘラナデリ	ハケ目→胴部ヘラナデリ	完全実測	21cm カマド
22	土師器	甌	—	—	—	ミガキ	ミガキ	口縁実測	~15cm P7
23	縄文	土 材	携行事	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
24	編み物石	藤行安山岩	完形	16.7	6.3	5.3	780.00	破熟	4~12cm
25	編み物石	産駒産岩	完形	15.1	7.6	4.3	670.00	破熟 正面と背面に磨打痕	4~12cm
26	編み物石	産駒産岩	完形	13.2	5.3	4.7	520.00	破熟	4~12cm
27	編み物石	向門石安山岩	完形	12.8	5.7	5.3	520.00	破熟	4~12cm
28	編み物石	向門石安山岩	完形	11.9	6.0	4.5	480.00	破熟	4~12cm
29	編み物石	安山岩	完形	13.0	7.5	4.6	550.00	破熟	4~12cm
30	編み物石	藤行安山岩	完形	14.4	7.5	4.8	700.00	破熟 正面に磨打とと思われる跡 正面に磨打	4~12cm
31	編み物石	藤行安山岩	完形	15.7	7.5	4.1	600.00	破熟	4~12cm
32	編み物石	藤行安山岩	完形	14.2	6.6	4.7	550.00	破熟	4~12cm
33	編み物石	産駒産岩	完形	13.1	7.5	4.7	660.00	破熟	4~12cm
34	編み物石	産駒産岩	完形	12.3	6.2	4.3	480.00	破熟 上面部に磨打痕	4~12cm
35	編み物石	安山岩	完形	11.4	6.5	3.0	530.00	破熟	4~12cm
36	編み物石	藤行安山岩	完形	13.5	6.8	4.8	630.00	破熟 正面にすり面	4~12cm
37	編み物石	藤行安山岩	完形	14.0	5.5	3.7	520.00	破熟	8.5cm
38	編み物石	産駒産岩	完形	15.0	7.6	3.9	670.00	破熟 上面部に磨打痕	14.5cm
39	編み物石	藤行安山岩	完形	13.0	7.8	4.6	740.00	破熟 上面部に磨打痕	14cm
40	編み物石	砂岩	破熟	15.5	6.3	4.0	630.00	破熟 正面にすり面	III区
41	口蓋	滑石	完形	0.31	0.54	0.22	0.19		1cm
41	口蓋	滑石	完形	0.38	0.65	0.25	0.24		1cm

第50表 H51号住居址出土遺物観察表

ことから、短い口縁のタイプとも考えられる。12は土師器の小型甌、13は壺とした。14~18は土師器の甌であるが、17は口縁部に特徴があり、コの字状に屈曲するものである。19は器形から単孔の甌と考えられる。20は大型の鉢とした。内外面丁寧なミガキが施されている。21は大型の甌ではほぼ完形である。22は把手付の甌破片で、口縁部・胴部・孔部の同一個体と考えられる破片があるが、接合関係が見いだせなかった。本遺跡の中では他の土師器大型甌に比べ器厚が薄く、丁寧な作り方である。23~39は編み物石で、多くはP4脇から出土した。40と41はP16である。

本址はこれら遺物より6世紀前半に位置づけられる。

(52) 52号住居址 (第80-81図, 写真図版三十九)

本住居址は、調査区北側であるタ-24.25.26、チ-24.25.26Grに位置する。残存状態は東壁から南壁東側にかけてカクランにより壊されている他は、良好である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁6.32m・南壁2.31m(残存)6.14m(推定)・西壁6.50m・東壁0.90m(残存)6.46m(推定)で、壁高さは南壁西寄り最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-2'-Wを示す。住居址の床面積は残存部分で33.90㎡、推定で42.72㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~27cmの厚さで貼られていた。壁溝は北壁と西壁の全体と、南壁に検出された。断面形はU字形で、幅は約17~38cmを測る。また、西壁より2箇所、南壁より1箇所の間仕切り溝が検出された。ピットは8カ所確認され、P1~P4が主柱穴、P6とP7が貯蔵穴、P8が入り口の張り出し土坑施設のピットと考えられる。規模はP1が径58cm・深さ44cm、P2が径57cm・深さ44cm、P3が径47cm・深さ45cm、P4が径42cm・深さ30cm、P5が径50cm・深さ11cm、P6が長軸77cm・短軸51cm・深さ53cm、P7が長軸101cm・短軸50cm・深さ15cm、P8が径62cm・深さ36cmを測る。住居址掘り方はほぼ平坦であったが、東側に床下土坑が検出された。規模は長軸168cm・短軸72cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。煙道部は長く伸びるタイプのもので、煙道の規模は長さ157cmを測る。H27号住居址と同じく、先端にピットが検出された。ピットの規模は径28cm・深さ7cmを測る。袖部は地山を芯材として、黒色土で構築されていた。火床部はよく焼けており、硬質化していた。焼土の厚みは6cmを測る。カマド掘り方は袖先端に径24~30cm・深さ9~12cmのピットが検出され、焚口部の礫を立てた痕跡と考えられる。また、本カマドは煙道部と火床部に構築土があり、煙道部は一本の溝状の掘り込みとなった。

出土遺物は覆土中から多かった。1は須恵器高杯の坏部である。2と3は土師器坏であり、2は口縁部が直立するタイプで、3は口縁部が大きく外反するタイプのものである。4と5は小型の土師器甕であり、4は頸部が不明瞭で口縁部に至るタイプのものである。6と7も土師器の甕であるが、7は4と同じく頸部が不明瞭で、尚かつ非常にゆがんだ器形である。8は土師器壺の胴部である。内外面丁寧なミガキが施されている。9はやや大型であるが土師器坏とした。内面黒色処理されている。10は磨石。11は礫石で側面に敵打痕がある。12は白玉であり、床面直上から出土した。

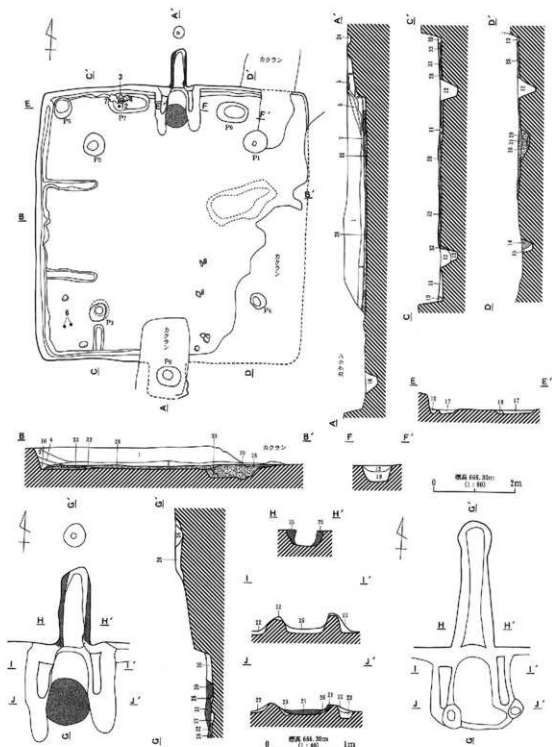
本址はこれら遺物より6世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	内面	外面		
1	須恵器	高杯	12.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 口縁1/3残存	IV区床
2	土師器	坏	13.9	13.2	4.1	ナデ	口縁コナデ 底部ヘラケズリ-ナデ	回転実測 1/2残存	IV区1層
3	土師器	坏	16.3	12.6	4.5	ナデ	口縁コナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形	3cm P7
4	土師器	甕	12.0	3.8	14.4	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底部完形 口縁1/2残存	~25cm P7
5	土師器	甕	12.6	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 口縁1/3残存	P7
6	土師器	甕	18.2	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 1/3残存	~19cm P1 IV区
7	土師器	甕	13.8	6.5	21.0	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形	~2cm IV区
8	土師器	壺	-	10.4	-	ミガキ	ヘラケズリ-ミガキ	回転実測 1/3残存	2cm
9	土師器	坏	21.0	14.4	-	ミガキ-黒色処理	ミガキ	回転実測 口縁1/6残存	
No.	器種	素材	検出率	最大径	最大厚	法量	所見		出土位置
10	磨石	礫石安山岩	完形	12.9	5.4	5.0	540.00	正面にすり面	III区床底
11	礫石	凝灰岩		14.3	(8.4)	(5.3)	(679.00)	裏面は新腐か 左側敵打による割離	IV区1層
12	白玉	磨石	完形	0.50	0.82	0.28	0.60		~8cm P7

第51表 H52号住居址出土遺物観察表

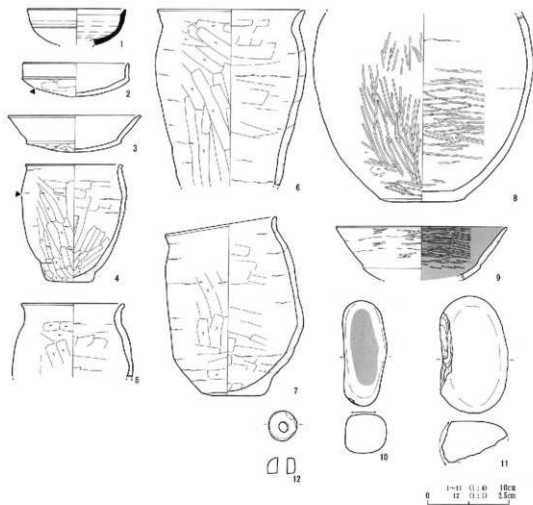
(53) H53号住居址 (第82-83図, 写真図版四十二)

本住居址は、調査区北側であるツ-19.20.21、テ-19.20.21Grに位置する。残存状態は西側と住居址中央部分がカクランにより壊されている。重複はF14号掘立柱建物址と新旧関係にあり、本址の方が新しい。



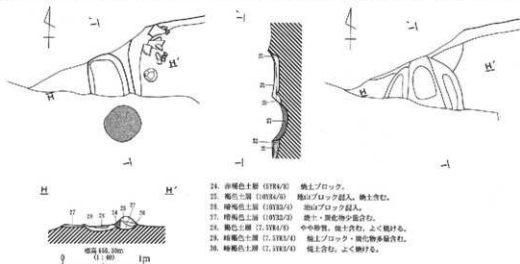
第80图 H52号住居址实测图

1. 暗褐色土層 (10YR3/4) 小礫・赤色土ブロックを含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) 地山ブロック・黄土を一部多量に含む。
3. 褐色土層 (10YR4/4) 地山ブロックを多量に含む。(硬固層)
4. 高褐色土層 (10YR2/2) 地山ブロックを少量含む。(硬固層)
5. 赤褐色土層 (5YR3/3) よく腐けてる。
6. 灰褐色土層 (10YR2/2) 暗褐色色のブロック含む。粘土を含む。カマド跡層。
7. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黄土・炭を多く含む。(カマド跡層)
8. 暗褐色土層 (7.5YR3/4) 炭土ブロック・炭を含む。
9. 黒色土層 (10YR2/1) 炭・灰・カマド構築材粘土ブロックを多量に含む。カマド跡層。
10. 灰褐色土層 (10YR2/2) 地山褐色土ブロックを含む。粘土・炭微塵を含む。
11. 灰褐色土層 (10YR2/2) 地山褐色土ブロックを少し含む。
12. 高褐色土層 (10YR2/2) 小礫を含む。
13. 高褐色土層 (10YR2/2) 地山。
14. 高褐色土層 (10YR2/2) 地山。
15. 褐色土層 (10YR4/0) 地山多く含む。
16. 黒色土層 (10YR2/1) 炭・黄土混入。粘性あり。入口施設層上。
17. 暗褐色土層 (10YR3/4) 粘土・炭多量を含む。
18. 暗褐色土層 (10YR3/2) 炭少量含む。
19. 暗褐色土層 (10YR3/2) 地山褐色土ブロック多量に混入。
20. 褐色土層 (1.1YR4/4) 粘土ブロック・炭を多く含む。文脈が混ざり
21. 赤褐色土層 (3YR4/4) 粘土。非常に硬く塊状層になっている。
22. 灰色土層 (10YR2/1) 粘土・炭のブロックを少量含む。
23. 灰褐色土層 (10YR2/2) 炭・黄土を含む。
24. 褐色土層 (10YR4/0) 地山シルト質上。やや腐けており、炭を少量含む。
25. 赤褐色土層 (2.5YR4/2) 大礫による塊け込みの層。
26. 高褐色土層 (10YR2/2) 粘土を少し含む。炭・灰を含む。
27. 暗褐色土層 (10YR2/4) 粘土粒子・黄色ローム粒子少量混入。
28. 暗褐色土層 (10YR2/4) 地山ブロック混入。よく腐る。
29. 灰褐色土層 (10YR2/2) 炭微塵含む。
30. 高褐色土層 (10YR2/2) 地山ブロックを多く含む。
31. 暗褐色土層 (10YR3/4) 地山少し混入。
32. 暗褐色土層 (10YR3/2) 地山ブロックを含む。小礫を混入。
33. 高褐色土層 (10YR2/2) しまり・粘性あり。

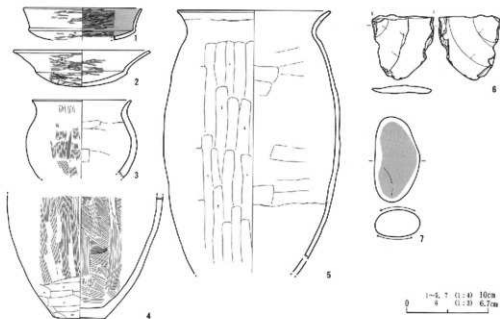


第81図 1152号住居址出土遺物実測図

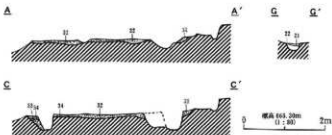
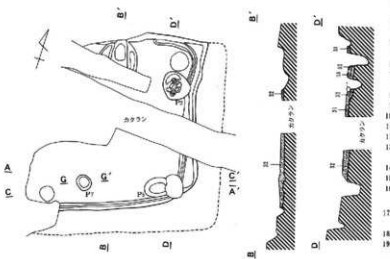
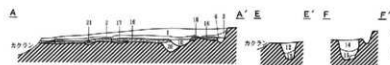
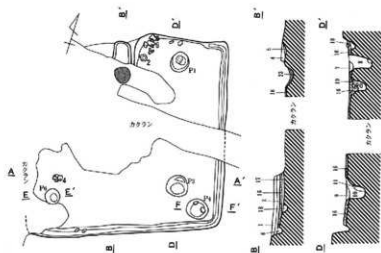
形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.50m(残存)・南壁4.54m(残存)・東壁4.44mで、壁高さは南壁中央で最大32cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-14°-Wを示す。住居址の床面積は、残存部分で11.71㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~10cmの厚さで貼られていた。壁溝は北東コーナーから北壁を除く全体で検出された。断面はU字形で、幅は約15~25cm・深さ4~10cmを測る。ピットは6カ所確認され、P1とP3とP6が支柱穴と考えられる。規模はP1が径48cm・深さ56cm、P2が径70cm・深さ54cm、P3が径54cm・深さ48cm、P4が径53cm・深さ53cm、P5が径52cm・深さ28cm、P6が径38cm・



- 24. 赤褐色土層 (T184/3) 焼土ブロック。
- 25. 褐色土層 (T183/5) 焼土ブロック混入。焼土含む。
- 26. 暗褐色土層 (T182/4) 焼土ブロック混入。
- 27. 暗褐色土層 (T182/2) 焼土・炭化物少量含む。
- 28. 褐色土層 (T181/1) 中や硬質。焼土含む。よく焼ける。
- 29. 暗褐色土層 (T183/4) 焼土ブロック・炭化物多量含む。
- 30. 暗褐色土層 (T183/3) 焼土含む。よく焼ける。



第82図 H53号住居址カマド及び出土遺物実測図



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) パリス
地山ブロック混入。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) パリス・地山ブロック
混入。炭化物
塊土含む。
3. 黒褐色土層 (10YR2/2) 地山ブロック
多量混入。
4. 暗赤褐色土層 (5YR3/4) 焼土・炭化物
多量含む。
5. 暗赤褐色土層 (10YR3/3) 焼土・炭化物
多量含む。
6. 黒褐色土層 (10YR2/2) 地山含む。
7. 黒褐色土層 (10YR2/2) しまりあり。
焼土・炭含む。
8. 黒褐色土層 (10YR2/2) 焼土・炭化物含む。
9. 暗褐色土層 (10YR3/3) 炭化物。鐵屑含む。
10. 黒褐色土層 (10YR2/2) 地山ブロック少量含む。
11. 暗褐色土層 (10YR3/3)
12. 黒褐色土層 (10YR2/2) 地山ブロック含む。
13. 黒色土層 (10YR1/1) 中や砂質。
17層よりやや厚い。
14. 豆褐色土層 (10YR2/2) 炭化物微量含む。
15. 暗褐色土層 (10YR3/3) 地山ブロック多量含む。
16. 暗褐色土層 (10YR3/3) しまりあり。地山
ブロック多量含む。
炭化物少量含む。
17. 暗褐色土層 (10YR3/3) しまりなし。
炭化物少量含む。
18. 黒褐色土層 (10YR2/2) しまりなし。
19. 黒褐色土層 (10YR2/2) しまりなし。粘性あり。
塊状あり。
20. 赤色土層 (10YR2/1) 砂少量混入。
21. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土・炭化物含む。
22. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 炭化物含む。焼土多量
混入。
23. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土。
24. 暗褐色土層 (10YR3/3) しまりあり。地山含む。
25. 褐色土層 (10YR4/4) しまり・粘性あり。
地山含む。
26. 暗褐色土層 (10YR2/2) 砂質の地山少量混入。
27. 暗褐色土層 (10YR2/2) 焼土・炭少量含む。

第53図 H53号住居址実測図

深さ38cmを測る。

カマドは北壁中央に造られており、火床部と袖部が残存していた。袖は褐色土で構築されており、火床部はカクランにより上面が削平されていたが、よく焼けていた。

また、本址は掘り方時に東壁と南壁をひとまわり小さくした範囲で新たな貼床が検出され、住居址を拡張していることが確認された。拡張前後の住居址は北壁と西壁を共有する形で、北西コーナーを起点に拡張したことが考えられる。拡張前の住居址の形態は方形で、規模は北壁3.08m（残存）・南壁3.30m（残存）・東壁3.50mを測る。住居址の床面積は8.99㎡を測る。貼床は全体に張られており、厚さは2～20cmを測る。壁溝は北壁の一部も含め全体に巡っており、規模は幅10～27cm・深さ3～9cmを測る。カマドは拡張後の位置と同じと考えられる。P2・5・7は拡張前の床に伴うものである。

出土遺物は覆土中からが多かったが、拡張前と拡張後の遺物に関しては出土層位から分離できなかった。1と2は土師器で、1はいわゆる須恵器模倣坏、2は須恵器模倣坏であるが大きく口縁部が外反するタイプのものである。3～5は土師器甕である。5はカマド東脇から出土した。底部を欠損する他は良好に残存する。外面は縦方向のヘラズリが施されている。6は打製石斧で覆土中からの出土である。7は磨石で両面にすり面が認められた。

これらの出土遺物より本址は6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(高)	口径(深)	底面積	内面	外面		
1	土師器	坏	14.6	13.2	-	ミガキ一黒色施埋	ヨコナデ→ミガキ ヘラズリ→ミガキ	回転実測 口縁1/2残存	P7
2	土師器	坏	16.8	11.2	4.5	ミガキ	ヨコナデ→ミガキ ヘラズリ→ミガキ	完全実測 完形品	0cm
3	土師器	甕	12.2	-	-	ヘラナデ	ハケ目	回転実測 口縁1/2残存	カマド
4	土師器	甕	-	6.2	-	ハケ目	ハケ目→ヘラズリ	完全実測 底部完形	0cm
5	土師器	甕	13.8	-	-	ヘラナデ	口縁ヨコナデ→ヘラズリ	完全実測 3/4残存	0cm カマド
6	石斧	磨石	遺存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
7	磨石	磨石(安山岩)		(5.9)	5.6	0.8	(27.40)		I区
8	磨石	磨石(安山岩)	完形	10.4	6.6	3.4	338.00	正・裏面にすり面	II区

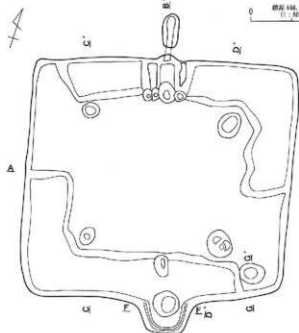
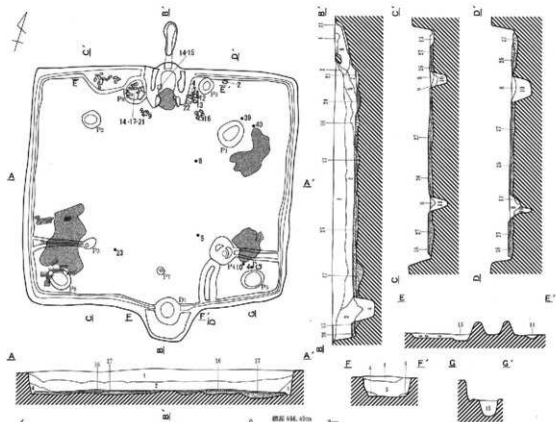
第52表 H53号住居址出土遺物観察表

(54) H54号住居址 (第84～87図, 写真図版四十三～四十五)

本住居址は、調査区北側であるツ・24.25、テ・24.25Grに位置する。残存状態はいずれの壁もカクランを受けておらず、本遺跡にあって極めて良好である。

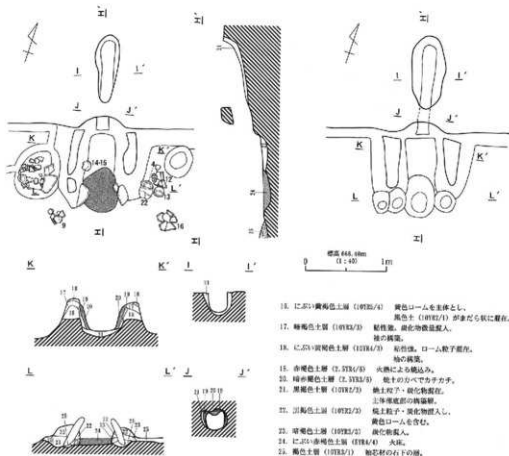
形態はほぼ正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁6.34m・南壁6.10m・西壁5.64m・東壁5.20mで、壁高さは北東コーナーで最大60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-16°-Wを示す。住居址の床面積は35.68㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、カマド前面と住居址中央部分は特に硬質であった。貼床は住居址全体で確認され、貼床の厚みは2～13cmを測る。壁溝は住居址壁全体で確認され、特にカマド西側に関しては幅広く広がっていた。壁溝の規模は幅14～33cm・深さ1～11cmである。また、P3に向けて間仕切り溝が壁より伸びていた。ピットは9カ所確認され、P1～P4が主柱穴、P5とP6とP8が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径69cm・深さ51cm、P2が径45cm・深さ53cm、P3が径33cm・深さ40cm、P4が径70cm・深さ55cm、P5が径57cm・深さ45cm、P6が径61cm・深さ8cm、P7が径20cm・深さ19cm、P8が径70cm・深さ15cm、P9が径41cm・深さ9cmを測る。貯蔵穴と考えられるP5の周りには、僅かに盛り上がる周堤帯のような土手が検出された。また、本址の南壁中央にはいわゆる「張り出し土坑」と呼ばれる掘り込みが検出された。土坑は住居址壁ラインと直行して方形に掘り込まれ、床面の高さから円形にもう一段深く掘り込まれている。この円形の掘り込みは住居址の壁溝がつながり、掘り込みの規模は長軸67cm・短軸61cm・深さ57cmを測る。

住居址の掘り方は図に示したように中央部と東壁南寄りと西壁北寄りが一段高くなる掘り方で、南壁中央の張り出し土坑にはU字形の壁溝のような掘り込みも検出された。



1. 赤褐色土層 (101R2/1) しまり・粘性あり。一部に黄土粒子を含む。
2. 赤褐色土層 (101R2/1) しまり強い。砂質あり。4層より黄色粒子を少量含む。
3. 黄褐色土層 (101R3/2) しまり・粘性強い。黄色シルト粒子を多量含む。
4. 褐色土層 (101R4/3) しまり弱く・粘性あり。黄色シルトブロックを多量含む。
5. 黒色土層 (101R2/1) しまり・粘性あり。粘土粒子多量含む。
6. 黒褐色土層 (101R3/1) しまり・粘性強い。粘土粒子多量含む。
7. 褐色土層 (101R4/2) しまり・粘性あり。黒色土と黄色シルトの混合土。塊のすずれ。
8. 黒色土層 (101R2/1) しまり・粘性強い。
9. 赤褐色土層 (101R3/1) しまり・粘性強い。黄色シルトを含む。
10. 黄色土層 (101R4/1) しまり弱く・粘性あり。黄土粒子少量含む。
11. 黄褐色土層 (101R3/2) しまり・粘性あり。
12. 黄褐色土層 (101R4/3) しまり・粘性あり。
13. 灰褐色土層 (101R2/2) 粘土ブロック・炭化物混入。
14. 灰褐色土層 (101R2/1) 炭化物・黄土ブロック多量混入。
15. 灰褐色土層 (101R2/2) しまり弱く・粘性あり。黄色シルトブロック少量含む。
16. 黒色土層 (101R2/1) しまり強い。地ブロック・炭化物混入。
17. 黄褐色土層 (101R3/1) しまりあり。粘質なし。シルト質土。地台と混ざっている。

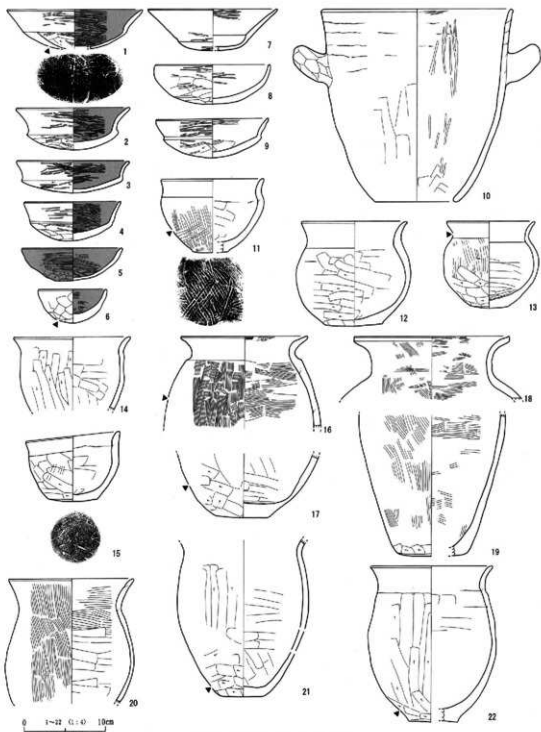
第84図 H154号住居址実測図



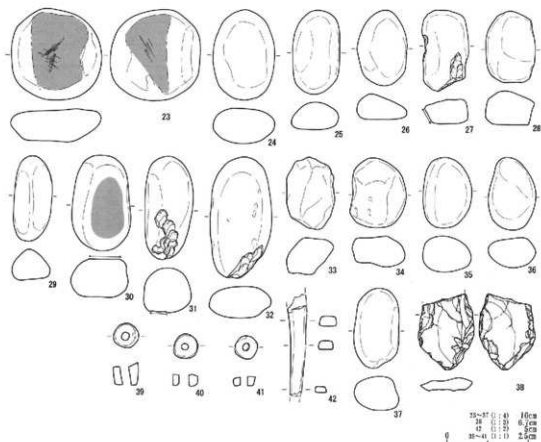
第85図 H54号住居址カマド実測図

カマドは北壁中央に検出された。煙道部や袖部は良好に残存していた。煙道部は一部トンネル状の掘り込みが残存しており、形態は長く伸びるタイプで、住居址外側に向かって斜めに上っていた。規模は長さ130cmを測る。また、煙道部には黒褐色土の構築土が観察された。袖の規模は高さが最大46cmを測る。袖部は粘土を構築材として、袖芯部分は地山掘り残しによって構築していた。焚口部は2枚の大型の川原石を立て、門柱状の形態を取っていた。火床部は良く焼けており上面硬質化していた。焼土の厚みは7cmを測る。

出土遺物は覆土中及びカマド周辺部からまとまって出土した。特にカマド周辺から出土した遺物は床面直上からの物が多く、小型甕の中に坏が入れ込んであるような状態(写真図版四十四参照)など、住居使用時の様子を推測しうるような資料も出土した。1~9は土器器坏である。いずれも須恵器模倣タイプの坏であるが、8は口縁部が内湾するタイプの坏、6は通常の坏に比べ口径がやや小型でミニチュアの様相を呈する。また、5は口縁部と体部の稜が明瞭でないタイプで、内外面黒色処理されている。出土時に坏部内面に皮膜状の物質が付着しており、科学分析の結果は漆であることが判明した。なお詳細については第VII章の化学分析結果報告書を参照とする。1~6は内面黒色処理が施されている。1は底部付近に1本の焼成前の刻線が確認できる。10は把手付の大型甕である。住居址南東側の貯蔵穴脇より出土した。11~15までは小型甕で、口縁部がくの字状に曲がる物と、15のように屈折しないタイプの物がある。11は外面の調整が粗いハケ目の残るナデであり、蔽きのような模様目である。



第86图 H54号住居址出土遗物实测图



第87図 H54号住居址出土遺物実態図

No.	品名	素材	保存率	最大長	最大短	最大厚	重量	所見	出土位置
22	硬石	花崗岩	定形	11.1	11.0	4.3	770.00	正・面に染織有り	15cm 露出地表
24	磁器物石	安山岩	定形	11.0	7.0	4.3	400.00		2.5m
25	磁器物石	砂岩	定形	10.2	5.8	3.3	200.00	縦線有り (全体に赤褐色)	カマド
26	磁器物石	輝石安山岩	定形	9.2	6.7	3.2	243.00		-6cm P.8
27	磁器物石	安山岩	定形	9.9	5.8	3.2	250.00	左制, 下縁部に縦行と思われる刻線	-6cm P.8
28	磁器物石	石炭層岩	定形	8.7	6.0	4.2	338.00		-9cm P.8
29	磁器物石	砂岩	定形	10.4	4.6	4.1	283.00		-6cm P.8
30	磁器物石	花崗岩	定形	11.6	7.3	5.0	650.00	縦線有り? 正面にすり面	-7cm P.8
31	磁器物石	安山岩	定形	12.8	5.9	3.7	390.00	下縁部, 正面と背面に縦打痕	-7cm P.8
32	磁器物石	輝石安山岩	定形	14.7	7.5	4.0	610.00	下縁部に縦打痕	-7cm P.8
33	磁器物石	瓦状色チャート	定形	8.9	6.0	4.7	310.00		-7cm P.8
34	磁器物石	花崗岩	定形	8.5	6.9	3.8	302.00		-7cm P.8
35	磁器物石	輝石安山岩	定形	8.0	6.0	4.5	332.00		-7cm P.8
36	磁器物石	安山岩	定形	8.8	5.8	3.7	259.00		-7cm P.8
37	磁器物石	輝石安山岩	定形	9.7	5.5	4.2	329.00		-9cm P.8
38	石片	輝石安山岩		(7.0)	5.1	0.8	48.22		露出
39	白玉	磨石	定形	0.66	0.75	0.25	0.63		-12.0cm 寄り方
40	白玉	磨石	定形	0.35	0.75	0.30	0.30		5cm
41	白玉	磨石	定形	0.50	0.70	0.20	0.24		-6.5cm 寄り方
42	不明	鉄		(6.3)	(1.2)	(0.6)			露出上層

第53表 H54号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法華			成形・調製・文様		備考	出土位置
			口径	底径	高さ	内面	外面		
1	土師器	杯	16.7	12.7	-	ミガキ→黒色処理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 4/5残存 木本 刷痕(底成形)	カマド
2	土師器	杯	14.1	11.2	3.2	ミガキ→黒色処理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 4/5残存	13.5cm
3	土師器	杯	14.0	12.5	3.9	ミガキ→黒色処理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 4/5残存	カマド
4	土師器	杯	12.0	10.1	4.8	ミガキ→黒色処理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 ほぼ完全	6cm
5	土師器	杯	12.5	-	4.0	ミガキ→黒色処理	ヘラケズリ→ミガキ→黒色処理	完全実測 ほぼ完全 漆付	1cm
6	土師器	杯	8.6	-	4.2	ハケ目 黒色処理	ヘラケズリ→ナデ	図録実測 1/3残存	II区
7	土師器	杯	16.0	8.4	(5.1)	ミガキ	ミガキ	図録実測 1/3残存	I・II区
8	土師器	杯	14.2	-	4.8	ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 ほぼ完全	0cm
9	土師器	杯	14.0	12.1	4.8	ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 3/4残存	0cm
10	土師器	甕	23.6	10.2	(23.3)	ヘラケズリ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ	図録実測 1/3残存	0cm
11	土師器	甕	12.7	4.4	(9.0)	ヘラケズリ	ハケ目(衝)	完全実測 3/4残存	II・III区
12	土師器	甕	13.0	7.0	12.8	ヘラケズリ	ヘラケズリ ココナデ	完全実測	0cm
13	土師器	甕	10.8	4.6	10.6	口縁ハケ目 ヘラケズリ	ハケ目→ヘラケズリ	完全実測 4/5残存	0cm
14	土師器	甕	14.4	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	図録実測 口縁1/3残存	7.5~11cm
15	土師器	甕	11.6	5.1	8.0	ヘラケズリ	ハケ目→ヘラケズリ 木炭痕(木本)	完全実測 ほぼ完全	7.5cm
16	土師器	甕	13.7	-	-	ハケ目	ハケ目	完全実測	3cm
17	土師器	甕	-	6.6	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測 底部完全	-11cm P8
18	土師器	甕	19.2	-	-	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	図録実測 口縁1/3残存	I・II区
19	土師器	甕	-	8.4	-	ハケ目	ハケ目 漆部剥離ヘラケズリ	図録実測 底部1/3残存	カマド II区
20	土師器	甕	15.4	-	-	ハケ目→ヘラケズリ	ハケ目	完全実測 底部欠損	I・II区
21	土師器	甕	-	5.4	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測 底部1/3残存	-11cm P8
22	土師器	甕	15.0	6.0	(19.0)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測	0cm

第54表 H54号住居址出土遺物調査表

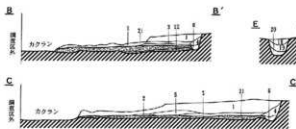
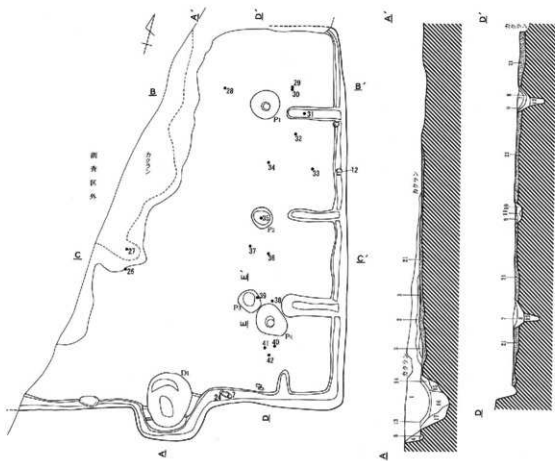
16~22は土師器甕である。外面調整がハケ目の残るナデのタイプと縦方向のヘラケズリを施す物があり、18は口唇部の面取りが行われている。石製品は砥石や編み物石が出土した。23は砥石で、表裏の中央部分が磨れていた。また擦痕のような傷が無数確認できる。24~37は編み物石でP8からまとまって出土した。38は石斧の欠損品であり混入品と考えられる。39~41は白玉で貼床内より出土した。42は鉄製品であるが品種は不明である。

本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

(55) H55号住居址 (第88-89-90図, 写真図版四十六)

本住居址は、調査区北側であるテ-15.16.17、ツ-15.16.17、テ-15.16.17Grに位置する。残存状態は北壁側から西壁にかけて、カクランと調査区域外により削平されていた。

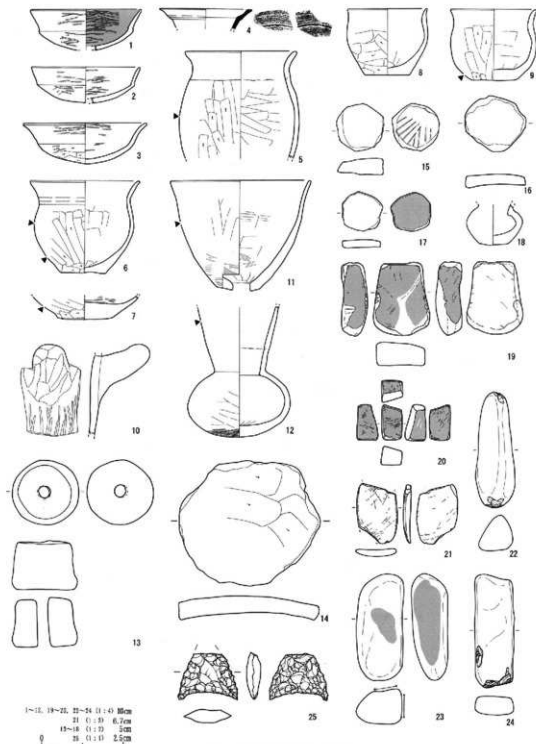
形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁3.48m(残存)・南壁7.88m(残存)・東壁9.21mで、壁高さは南東コーナーで最大47cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-15°-Wを示す。住居址の床面積は残存部分で45.54㎡、推定で75.68㎡を測る。本址はカクランを受けているが、本遺跡の中では最も大型の住居址と考えられる。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、住居址中央部分とD1号土坑の北脇は特に硬質であった。貼床は住居址全体で確認され、貼床の厚みは1~18cmを測る。壁溝は住居址壁全体で確認され、特に東壁からはビットに向けて間仕切り溝が確認された。壁溝規模は幅17~47cm・深さ2~11cmを測る。ビットは4カ所確認され、P1~P3が主柱穴と考えられ、本址は6本の主柱穴である事が推定出来る。規模はP1が径73cm・深さ68cm、P2が径53cm・深さ18cm、P3が径57cm・深さ37cm、P4が径85cm・深さ64cmを測る。また、本址は南壁中央に張り出しを伴う貯蔵穴と考えられるD1号土坑が発出された。形態は楕円形で、規模は長軸133cm・短軸106cm・深さ74cmを測る。土坑内の覆土は炭化物や焼土が混ざっていた。住居址の掘り方はほぼ平坦な掘り方であった。



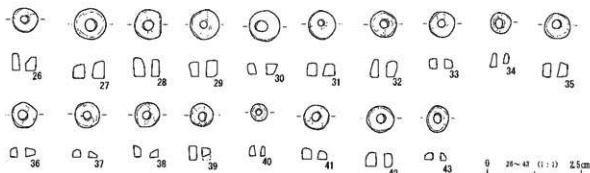
A-A' 標高 646.40m
 B-B' 標高 645.90m
 C-C' 標高 645.90m
 D-D' 標高 645.90m

- | | | | |
|---------------------|-----------------------|---------------------|-------------------|
| 1. 赤褐色土層 (10132/2) | パミス・地山ブロックを含む。 | 12. 黒褐色土層 (10132/2) | 炭化物・黄土を含む。小礫含む。 |
| 2. 黒褐色土層 (10132/2) | 黄土・炭化物を多く含む。 | 13. 黒褐色土層 (10132/2) | 粘土・炭化物を多く含む。 |
| 3. 黒褐色土層 (10132/2) | 一層。黄土・炭化物が層状に堆積する。 | 14. 黒褐色土層 (10132/3) | 地山ブロック多く含む。 |
| 4. 黒褐色土層 (10132/2) | 地山ブロックをやや含む。 | 15. 黒褐色土層 (10132/3) | 地山ブロック少し含む。 |
| 5. 黒褐色土層 (10132/2) | 地山ブロックを少量含む。 | 16. 赤褐色土層 (10132/3) | 粘土・炭化物・黄土を含む。 |
| 6. 黒褐色土層 (10132/2) | 地山ブロックが層状に堆積。炭化物少量含む。 | 17. 黒褐色土層 (10132/2) | 地山ブロック多く含む。 |
| 7. 黒褐色土層 (10132/2) | 上層(層)より地山ブロックの混入が多い。 | 18. 黒褐色土層 (10132/2) | 地山ブロック少量含む。 |
| 8. 黒褐色土層 (10132/2) | 黄土・炭化物・地山ブロック少し含む。 | 19. 黒褐色土層 (10132/2) | 地山ブロック多量混入。 |
| 9. 黒褐色土層 (10132/2) | 地山ブロック・地山砂を含む。 | 20. 黒褐色土層 (10132/2) | 小礫含む。粘性あり。 |
| 10. 赤褐色土層 (10132/2) | 炭化物・粘土多量に含む。粘性あり。 | 21. 赤褐色土層 (10132/4) | 地山ブロック多く混入。しまりあり。 |
| 11. 赤褐色土層 (10132/4) | 黄土を含む。 | 22. 赤褐色土層 (10132/2) | 地山・白色粘土を含む。 |

第88図 H155号住居址実測図



第89图 H55号住居址出土遗物实测图



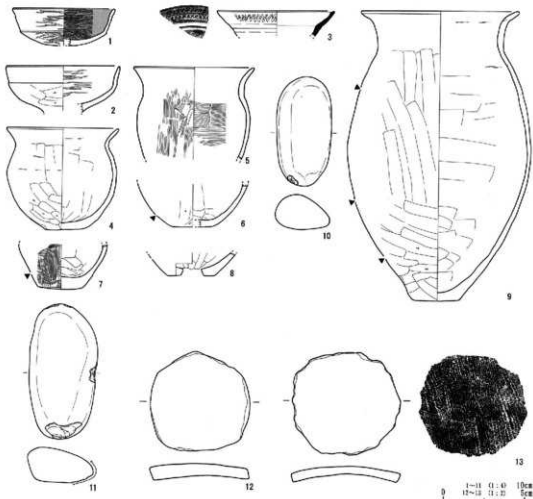
第90図 H55号住居址出土遺物実測図

No.	種別	器種	法急		成形・裝飾・文様				備考	出土位置
			口内径	底径	内面	外面	底面	口縁		
1	土師器	杯	13.6	11.6	-	ミガキ一色色焼成	口縁ミガキ	底面ヘラケズリ→ミガキ	埋藏実測 1/3残存	V区 周溝
2	土師器	杯	13.4	12.0	(4.4)	ミガキ	口縁ミガキ	底面ヘラケズリ→ミガキ	埋藏実測 1/3残存	D1 IV区
3	土師器	杯	16.2	11.8	5.0	ミガキ	口縁ミガキ	底面ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 3/4残存	IV・V区
4	土師器	ハソウ	11.4	-	-	ロクロナデ	口縁ナデ	-	埋藏実測 口縁1/4残存	V区
5	土師器	甕	13.8	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	-	完全実測 2/3残存	IV区
6	土師器	甕	13.5	5.5	11.3	ヘラナデ	ヘラケズリ	-	完全実測 4/5残存	V区
7	土師器	甕	-	6.6	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	-	完全実測 底面一部	5.5cm 周溝
8	土師器	甕	9.8	3.1	8.1	ヘラナデ	ヘラケズリ	-	埋藏実測 1/2残存	IV区
9	土師器	甕	10.6	5.5	8.7	ヘラナデ	ヘラケズリ	-	埋藏実測 1/2残存	IV区
10	土師器	甕	-	-	-	ミガキ	ミガキ	-	埋藏実測 (断面)	IV区
11	土師器	甕	17.3	5.3	13.4	ヘラナデ	ヘラナデ ハケト	-	完全実測 2/3残存	IV区
12	土師器	甕	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ ミガキ	-	完全実測 口縁欠損	2cm 周溝
13	土製品	新羅半	径4.1	径0.7	3.0	-	-	-	重量52.0g	II区
14	土製品	円盤	径8.6	1.1	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	-	埋藏実測	V区
15	土製品	円盤	径2.8	1.0	-	-	-	-	重量8.49g	D1
16	土製品	円盤	径3.7	0.7	-	ナデ	ナデ	-	埋藏実測	周溝
17	土製品	円盤	径2.4	0.55	-	藍色焼成	-	-	重量3.8g	IV区
18	土師器	手取	1.8	(2.1)	-	-	-	-	ミニチュア 重量13.9g	5cm IV区
No.	器種	材料	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置	
19	灰石	砂岩	完形	8.9	7.0	3.4	306.26		II区	
20	灰石	凝灰岩	完形	4.3	2.6	2.7	43.73		IV区	
21	石片	新灰岩	(5.4)	3.8	0.7	17.76			II区	
22	磨石	雲山岩	完形	14.0	4.9	4.3	378.00	上・下腹面に磨り痕	VI区	
23	磨石	雲山岩	完形	13.0	5.6	4.4	520.00	上面と右側にすり面	V区	
24	磨石	輝石砂岩	完形	13.8	6.0	2.1	326.00	下腹面と上面に磨り痕	5.5cm	
25	石鏡	黒色チャート	(1.4)	(1.8)	(0.4)	(1.08)		上縁欠損	II区 I層	
26	口元	滑石	完形	0.42	0.65	0.25	0.27		1cm	
27	口元	滑石	完形	0.50	0.84	0.32	0.48		0cm	
28	口元	滑石	完形	0.48	0.70	0.29	0.48		0cm	
29	口元	滑石	完形	0.45	0.75	0.20	0.45		0cm	
30	口元	滑石	完形	0.32	0.79	0.32	0.26		0cm	
31	口元	滑石	完形	0.32	0.72	0.18	0.34		0cm	
32	口元	滑石	完形	0.47	0.70	0.21	0.32		0cm	
33	口元	滑石	完形	0.28	0.70	0.20	0.27		0cm	
34	口元	滑石	完形	0.38	0.51	0.24	0.16		0cm	
35	口元	滑石	完形	0.40	0.63	0.20	0.28		17cm P2	
36	口元	滑石	完形	0.31	0.65	0.30	0.17		0cm	
37	口元	滑石	完形	0.25	0.64	0.21	0.16		0cm	
38	口元	滑石	完形	0.30	0.65	0.20	0.16		0cm	
39	口元	滑石	完形	0.36	0.60	0.20	(0.18)		0cm	
40	口元	滑石	完形	0.29	0.41	0.11	0.10		1cm	
41	口元	滑石	完形	0.30	0.66	0.22	0.21		0cm	
42	口元	滑石	完形	0.38	0.74	0.25	0.34		0cm	
43	口元	滑石	完形	0.22	0.67	0.26	0.14		I区ホリ方	

第55表 H55号住居址出土遺物実測表

出土遺物は覆土中を中心に出土したが、白玉等はピット付近の床面上から多く出土した。1～3は土師器坏である。いずれも須恵器模倣坏のタイプで、1は内面黒色処理されている。4は須恵器ハソウの口縁部と考えられる。胎土に白色粒子を多く含み、内面に自然釉が付着している。5～9は土師器甕でいずれも小型のタイプである。11は小型の単孔甕である。10は大型の把手付甕の把手部分と考えられ、丁寧に磨かれている。12は直口壺であり、東壁の壁溝内より出土した。口縁部が欠損しているが、ほぼ完形である。13は土製の紡錘車で覆土中からの出土である。14～17は土製円盤であり、大小はあるが、いずれも土師器の坏裏片を再利用したものである。18は土製ミニチュアの壺と考えられるもので、口縁部が欠損している。19と20は砥石である。21は砥石とも考えたが、石材が粘板岩のため砥石とは考えにくく、磨製石斧的なものとして報告する。22～24は磨り石や敲き石である。25は石鏃で先端部が欠損する。26～43は白玉でいずれも小型のタイプである。先に述べたが、ピット脇の床面上から広がって出土した。

これらの出土遺物より、本址は6世紀前半に位置づけられると考えられる。

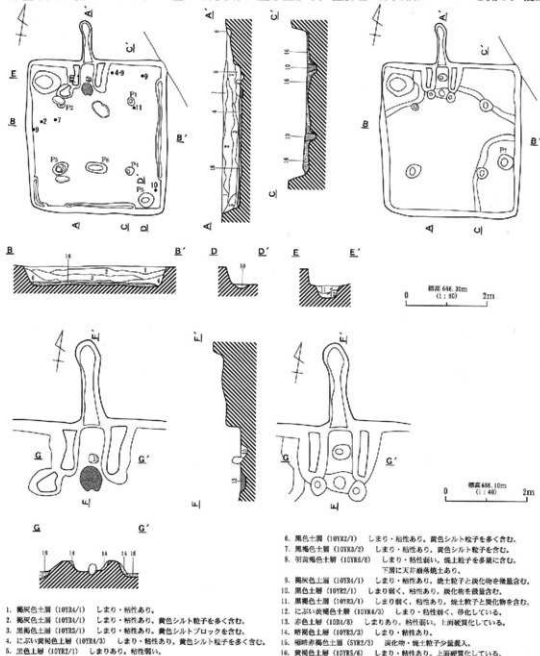


第91図 H156号住居址出土遺物実測図

(56) H56号住居址 (第91-92図, 写真図版四十七)

本住居址は、調査区北側であるソ-14.15、タ-14.15Grに位置する。残存状態は住居址北東コーナーの一部が削平されている他は、良好である。

形態はほぼ正方形を呈する。規模は北壁3.30m・南壁3.14m・西壁3.52m・東壁3.60mで、壁高さは東壁中央で最大43cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は10.93㎡を測る。覆土



第92図 H56号住居址実測図

No.	種別	出 産 地	法 量			成 形 ・ 規 格 ・ 文 様		備 考	出土位置
			山形県	秋田県	岩手県	内 面	外 面		
1	土師器	環	12.6	10.6	(4.5)	ミガキ一色色処理	口縁ミガキ 底面ヘラケズリ・ミガキ	西館東側 口縁1/3残存	Ⅱ区 貯蔵穴
2	土師器	高杯	14.0	—	—	ミガキ	ヘラケズリ	西館東側 口縁1/2残存	4cm Ⅱ区
3	須恵器	ハソウ	14.4	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ 波状文	西館東側 口縁1/2残存	Ⅱ区
4	土師器	環	13.8	1.9	12.3	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底面残存	0cm カマド 貯穴
5	土師器	環	14.8	—	—	ハケ目	ハケ目	西館東側 口縁1/3残存	Ⅱ区 カマド
6	土師器	環	—	5.4	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底面2/3残存	Ⅱ区 赤り方
7	土師器	環	—	5.1	—	ヘラナデ	ハケ目	完全実測 底面残存	0cm Ⅰ区
8	土師器	環	—	5.7	—	樽形底	ナデ	完全実測 底面残存	Ⅱ区
9	土師器	環	19.4	5.6	35.5	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 2/3残存	0~1.5cm P1
12	土製品	円盤	6.1	—	0.8	ナデ	ナデ	破片実測	Ⅱ区
13	土製品	円盤	6.7	—	0.6	ナデ	ハケ目	破片実測	Ⅱ区
No.	種 類	素 材	残存率	最大径	最大厚	重 量	所 見		出土位置
10	烏石	輝石安山岩	穴形	13.3	6.8	4.3	630.0	下館部に磨り痕	1cm
11	烏石	輝石安山岩	穴形	16.5	8.4	4.6	900.0	上・下両部と右側に磨り痕	1cm

第56表 1156号住居址出土土物観察表

はおおむね自然堆積で4層に分かれる。床は全体的に硬質であり、特にカマド前面と住居址中央部分が非常に硬かった。貼床は2~10cmの厚みで貼られていた。壁溝は東壁と南壁・南西コーナーで検出された。規模は17~30cm・深さ1~5cmを測る。断面はU字形である。ピットは7カ所確認され、P1~P4が主柱穴と考えられる。規模はP1が径21cm・深さ24cm、P2が径18cm・深さ29cm、P3が径40cm・深さ26cm、P4が径22cm・深さ26cm、P5が径36cm・深さ12cm、P6が径52cm・深さ5cm、P7が径38cm・深さ12cmを測る。また、本址は住居址の北西コーナー角に貯蔵穴と考えられる掘り込みが確認された。形態は楕円形で、規模は長軸68cm・短軸56cm・深さ34cmを測る。

カマドは北壁中央やや西よりで検出された。残存状況は良好で、煙道部は長く伸びるタイプである。煙道の規模は長さ109cmで、やや先端がピット状に丸まっている。袖部は地山を芯材としており、今の調査では被覆した土はあまり見られなかった。高さは20cmを測る。燃焼部には支脚石が原位置を保って出土した。火床部は良く焼けており硬質化していた。焼土の厚みは6cmを測る。また、カマド掘り方時に焚口部に2個のピットが検出され、焚口に立てられた川原石の埋め込み穴と考えられる。

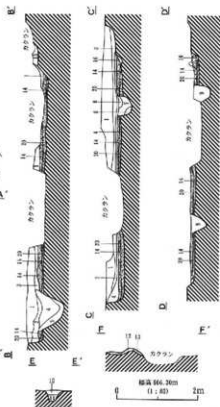
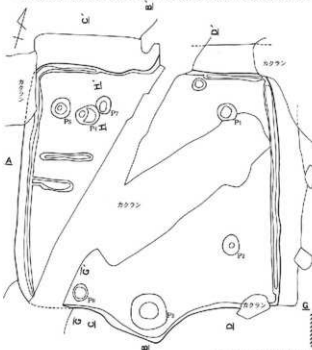
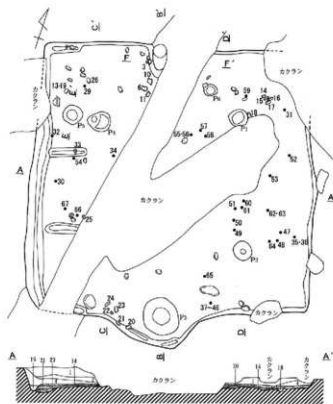
出土遺物は覆土中からが多く、特にカマド西脇の覆土から出土した。1は土師器環であり、内面黒色処理されている。2は土師器高杯の坏部である。3は須恵器ハソウの口縁部であり、口唇部に波状文が描かれている。胎土はよく精錬されている。4~7と9は土師器甕である。10と11は敲き石である。12と13は土製円盤で、土師器鍔片の転用品である。

本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

(57) H57号住居址 (第93~95図, 写真図版四十八・四十九)

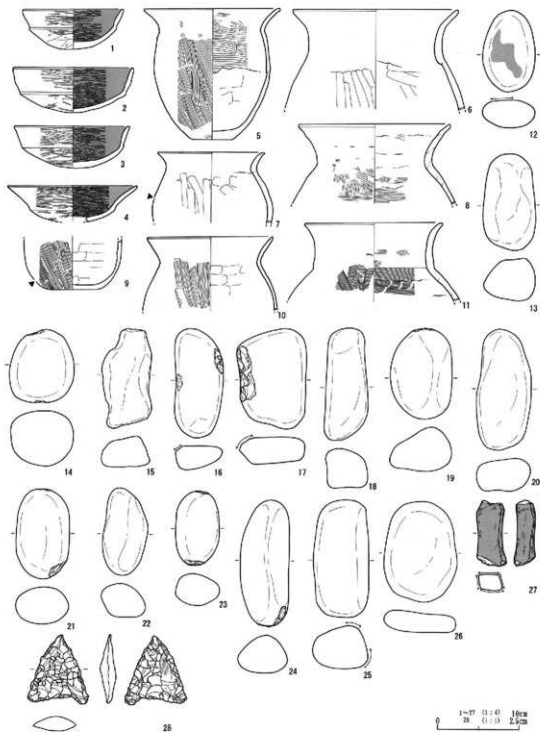
本住居址は、調査区北側であるセ-17.18.19、ソ-17.18.19Grに位置する。残存状態は住居址中央部分と北東コーナー端がカクランにより壊されている。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央に造られていたと考えられるがカクランにあたり、ほとんど削平されていた。規模は北壁5.37m(残存)・南壁5.74m(残存)・西壁6.42m・東壁4.50m(残存)で、壁高さは西壁南寄りで最大46cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる部分と、垂直に立ち上がる部分がある。主軸方位はN-16°-Wを示す。住居址の床面積は、床を削平したカクラン部分も含めて42.00㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心に硬質であった。壁溝は西壁に検出された。断面はU字形で、幅は約14~45cm・深さ3~14cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め、8箇所確認された。主柱穴はP1とP2とP4と考えられる。また、P3は南壁に拡張部を持つ貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径48cm・深さ42cm、P2が径48cm・深さ37cm、P3が長軸94cm・短軸88cm・深さ62cm、P4が径58cm・深さ51cm、P5が径50cm・深さ29cm、P6が径35cm・深さ15cm、P7が径43cm・深さ44cm、P8が径42cm・深さ14cmを測る。

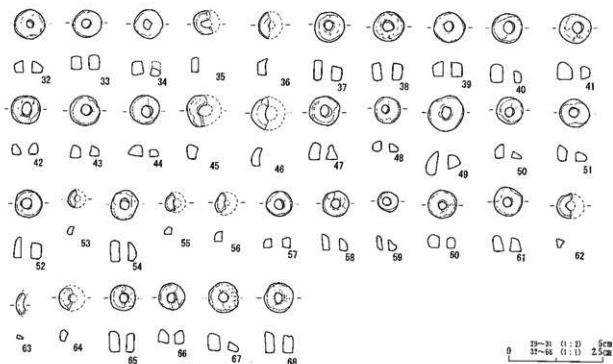
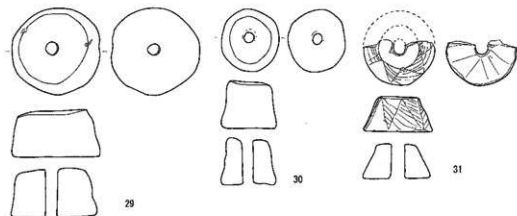


1. 褐色土層 (10784/1) しまり・粘性あり。褐色シルト砂子を含む。
2. 赤褐色土層 (10783/1) しまり・粘性あり。
3. 灰褐色土層 (10783/1) 2層に似るが、塊土砂子を含量含む。
4. におい・黄褐色土層 (10784/2) しまり・粘性ややあり。
黄色シルトブロックを含む。
5. 灰黄褐色土層 (10784/3) しまり・粘性強い。水分が多い。
6. 高褐色土層 (10782/2) バミス少量含む。
7. 高褐色土層 (10782/2) 塊土・褐色土ブロック・
小礫を少量含む。
8. 灰色土層 (10782/1) ややしめる。
9. 暗褐色土層 (10783/4) 礫・炭化物少量含む。
10. 暗褐色土層 (10782/2) 炭化物・塊土粒子微量混入。
11. 暗褐色土層 (10782/2) 黄色砂粒子微量混入。
12. 褐色土層 (10784/4) 褐色土・炭化物・塊土微量含む。
塊土多く混入。
13. 褐色土層 (7.718/4) 褐色土・炭化物・塊土多量混入。
14. 暗褐色土層 (10782/3) 塊土ブロック混入。しまりややあり。
15. 褐色土層 (10784/4) 近彩色土ブロック少量混入。
炭屑。
16. 暗褐色土層 (10782/2) 炭屑。
17. 暗褐色土層 (10782/2) 塊土・炭化物・池山ブロックを含む。
塊土・炭化物微量含む。
18. 暗褐色土層 (10782/2) 池山シルト質土ブロック多量含む。
塊土・炭化物・小礫含む。
19. 暗褐色土層 (10782/2) 塊土・炭化物・小礫含む。
20. 高褐色土層 (10782/2) 塊土多く混入。炭・塊土含む。
21. 高褐色土層 (10782/2) やや粘性あり。しまりあり。

第93図 H57号住居址実測図



第94图 H57号住居址出土遗物实测图



32-31 0:1.2 5cm
33-66 0:1.1 2.5cm

第95図 H57号住居址出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量		成形・調査・文様		備考	出土位置	
			高さ	口径	内径	外径			
1	土師器	杯	12.1	10.8	4.9	ミガキ一黒色施埋	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	図録実測 1/3残存	I区
2	土師器	杯	15.0	13.0	5.5	ミガキ一黒色施埋	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	図録実測 1/3残存	I区
3	土師器	甕	14.2	12.5	5.2	ミガキ一黒色施埋	ミガキ	完全実測 4/5残存	0cm
4	土師器	杯	16.0	10.4	-	ミガキ一黒色施埋	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	図録実測 1/2残存	II区床
5	土師器	甕	16.8	5.4	16.0	ハケ口 ヘラナデ	ハケ口	図録実測 1/2残存	I区 II区床
6	土師器	甕	20.0	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	図録実測 口縁1/3残存	0cm
7	土師器	甕	13.2	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測 口縁3/4残存	0cm
8	土師器	甕	18.8	-	-	ハケ口	ハケ口	図録実測 口縁1/4残存	II区床 III区
9	土師器	甕	-	7.2	-	ヘラナデ	ハケ口	完全実測 底部完形	II区
10	土師器	甕	15.6	-	-	ヘラナデ	ハケ口	図録実測 口縁1/3残存	1.5cm
11	土師器	甕	17.0	-	-	ハケ口	ハケ口	図録実測 口縁1/2残存	1cm II区
29	土製品	紡錘車	径16	孔径0.7	2.6			重量04.87g	15cm
30	土製品	紡錘車	径13	孔径0.6	2.5			重量24.1g	0cm

第57表 H57号住居址出土遺物観察表

No.	層 号	部 材	残存率	長さ	幅	厚	重 量	所 見	出土位置
12	土層	厚石(灰山岩)	完全	9.9	6.4	3.1	31.000	芋田にすり面	
13	編み物石	花崗岩	完全	11.8	6.5	5.6	600.00		0cm
14	編み物石	輝石安山岩	完全	9.0	7.9	6.8	610.00	上・下端部に敷打痕	0cm
15	編み物石	黒灰色チャート	完全	12.2	6.1	3.9	450.00		0cm
16	編み物石	砂岩	完全	13.3	5.9	3.0	370.00	両側に敷打痕(左側の側面は磨滅している)	0cm
17	編み物石	輝石(灰山岩)	完全	12.2	8.4	3.5	660.00	左側に敷打痕	0cm
18	編み物石	ホルンフェルス	完全	13.7	5.4	5.1	590.00		0cm
19	編み物石	輝石安山岩	完全	11.0	7.6	5.5	630.00	上端部に敷打痕	6cm
20	編み物石	ホルンフェルス	完全	14.8	6.7	4.2	680.00		11cm
21	編み物石	輝石(灰山岩)	完全	10.9	6.5	4.5	470.00	上・下端部に敷打痕	15cm
22	編み物石	花崗岩	完全	10.7	5.5	4.2	320.00		7cm
23	編み物石	輝石(灰山岩)	完全	9.0	6.4	4.0	270.00	上・下端部に敷打痕	0cm
24	編み物石	砂岩	完全	15.5	6.1	4.8	640.00	磨滅有り(下半分が黒角色になっている) 下端部に敷打痕	1cm
25	編み物石	角閃石安山岩	完全	14.4	6.8	5.4	850.00	磨滅有り(右側が磨滅に磨けている)	7cm
26	編み物石	輝石(灰山岩)	完全	12.3	9.0	2.7	470.00		2cm
27	灰石	花崗岩	完全	8.0	3.7	2.3	94.45	縦断面4(正・真・西側) 上・下は素材の面	0cm
28	石層	花崗岩		7.2	1.8	0.48	1.08		貫底
29	石製粘土	燧石		83.7	丸形0.8	1.8	19.73	不規則な断面形状がほとんどされている	0cm
32	白土	燧石	完全	0.32	0.75	0.20	0.27		0cm
33	白土	燧石	完全	0.39	0.74	0.22	0.31		0cm
34	白土	燧石		0.40	0.79	(0.20)	(0.20)		1cm
35	白土	燧石		0.51	(0.20)	0.21	(0.16)	破片	0cm
36	白土	燧石		0.40	-	-	0.09	破片	0cm
37	白土	燧石	完全	0.51	0.80	0.30	0.45		0cm
38	白土	燧石	完全	0.19	0.80	0.29	0.17		0cm
39	白土	燧石	完全	0.40	0.82	0.29	0.39		0cm
40	白土	燧石	完全	0.46	0.80	0.30	0.36		0cm
41	白土	燧石	完全	0.45	0.82	0.25	0.34		0cm
42	白土	燧石	完全	0.31	0.79	0.33	0.25		0cm
43	白土	燧石	完全	0.32	0.77	0.28	0.23		0cm
44	白土	燧石	完全	0.28	0.80	0.28	0.20		0cm
45	白土	燧石		0.44	-	-	(0.20)	破片	0cm
46	白土	燧石		0.50	-	-	(0.20)	破片	0cm
47	白土	燧石	完全	0.45	0.80	0.20	0.43		0cm
48	白土	燧石	完全	0.30	0.68	0.18	0.21		0cm
49	白土	土製	完全	0.65	0.95	0.33	(0.42)	黒色	0cm
50	白土	燧石	完全	0.39	0.70	0.28	0.24		0cm
51	白土	燧石	完全	0.39	0.79	0.24	0.32		0cm
52	白土	燧石	完全	0.58	0.70	0.30	0.38		0cm
53	白土	燧石		(0.20)	-	-	(0.03)	破片	0cm
54	白土	燧石	完全	0.52	0.73	0.28	0.48		0cm
55	白土	燧石		0.19	-	-	(0.04)	破片	-11.2cm
56	白土	燧石		0.29	-	-	(0.06)	破片	-11.5cm
57	白土	燧石	完全	0.33	0.68	0.26	0.20		-9cm
58	白土	燧石	完全	0.42	0.66	0.26	0.25		-10.5cm
59	白土	燧石	完全	0.40	0.51	0.20	(0.16)	欠損有り	8cm
60	白土	燧石	完全	0.35	0.72	0.20	0.28		-7.5cm
61	白土	燧石	完全	0.40	0.75	0.28	0.34		-6cm
62	白土	燧石		(0.21)	-	-	(0.08)	破片	3.5cm
63	白土	燧石		(0.11)	-	-	(0.02)	破片	3.5cm
64	白土	燧石		0.30	-	-	(0.08)	破片	-6cm
65	白土	燧石	完全	0.57	0.66	0.23	0.40		9.5cm
66	白土	燧石	完全	0.39	0.70	0.22	0.29		-3cm
67	白土	燧石	完全	0.48	0.80	0.25	0.34		-1cm
68	白土	燧石	完全	0.60	0.76	0.30	0.53		貫底

第58表 H57号住居址出土遺物観察表

カマドは詳細が不明であるが、一部左袖の残存のような部分とカクラン内に焼土が一部確認されたことから、北壁中央に存在したと考えられる。

また、本址は掘り方検出時に2枚目の貼床である、第20層が確認された。それに伴って、北壁側と東壁側で住居址の内側に壁溝を伴う立ち上がりが確認された。よって本址は拡張を行った事が考えられる。拡張前の住居址は形態が方形で、規模は北壁5.60m、南壁5.25m、西壁5.71m、東壁5.62mを測る。住居址の床面積は35.41㎡で、住居址規模を比べると約120%の拡張である。壁溝は北壁と東壁、西壁で確認され、規模は幅15～38cm・深さ1～10cmを測る。また、西壁からは間仕切り溝が伸び

ていた。

柱穴と考えられるピットは拡張後の位置と変わらず、柱の移動はなかったようである。カマドに関しては、同じく位置は不明であったが、掘り方時に北壁中央が焚口部のように曲線的に掘り込まれていたことから、北壁中央にあったと考えられる。

出土遺物は拡張後の住居床面を中心に出土した。特に白玉が多く出土したのが特徴的である。1～4は土師器坏である。1～3は須臾器模倣タイプの坏で、4は口縁部が大きく外反するタイプである。いずれも内面黒色処理され、丁寧なミガキが施されている。5～11は土師器甕であり、5.7.9.10は小型甕である。ハケ目の残るナデを施すものと、ヘラケズリを行われたものがある。12は磨石である。片面中央に磨り面が確認できた。13～26は編み物石と考えられ、住居地の北西コーナーと北東コーナー及び南壁際西寄りからまとまって出土した。27は砥石であり4面の砥面がある。28は石鏝である。29～31は紡錘車で29と30は土製品、31は滑石製の石製紡錘車で、表面に刻線による粗い不規則な鋸歯文が描かれている。32～68は白玉であり、37点出土した。32～54は拡張後の床面上から出土した。55～68は出土層位から、拡張前の床面上に伴うものと考えられる。

本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

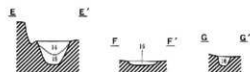
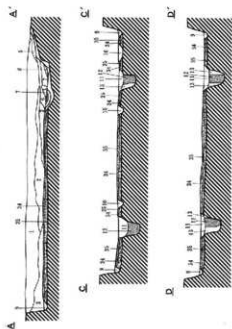
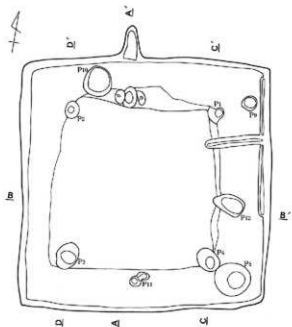
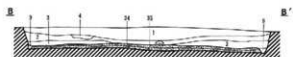
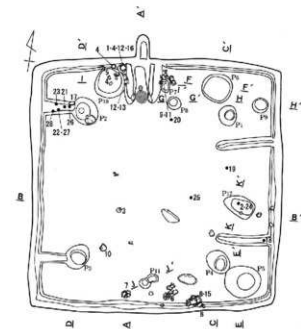
(58) H58号住居址 (第96～98図, 写真図版五十一)

本住居址は、調査区北側であるソ-16.17、タ-16.17、チ-16.17Grに位置する。残存状態は重複関係も無く、非常に良好である。

形態は正方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁5.98m・南壁5.90m・西壁5.86m・東壁5.66m、壁高さは北壁カマド西脇寄り、最大49cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-10°-Wを示す。住居地の床面積は33.73mを測る。覆土はおおむね自然堆積であり、

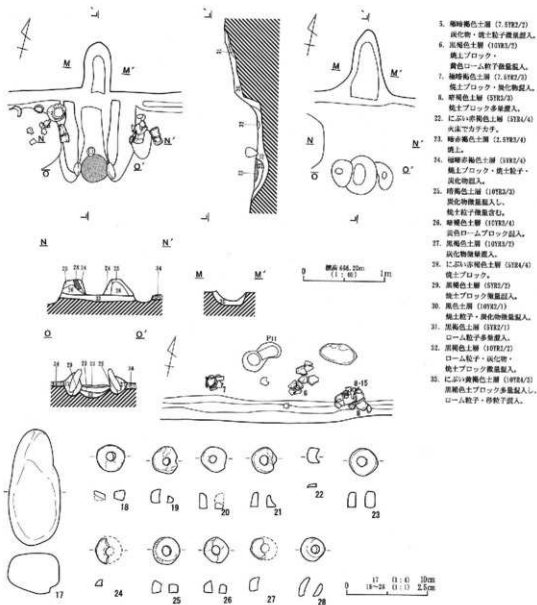
No.	類別	用途	法量			成形・調整・文様			備考	出土位置
			石内長	石内短	石内厚	内面	外面			
1	土師器	坏	17.0	10.8	(3.4)	ミガキ一両色処理	口縁ミガキ 底面ヘラケズリ	ミガキ	円形欠部 1/4残存	1.5cm I・Ⅱ区
2	土師器	甕	11.6	6.8	11.2	ヘラナデ 黒色処理	ヘラケズリ		円形欠部 1/3残存	0cm III・Ⅳ区
3	土師器	甕	11.7	6.4	11.6	ハケ目 黒色処理	ヘラケズリ		完全欠部 ほぼ完全	0cm III区
4	土師器	甕	11.5	6.3	10.7	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全欠部 底面欠部 口縁1/2残存	-5～8.5cm
5	土師器	甕	14.8	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ		円形欠部 口縁1/2残存	0cm
6	土師器	甕	12.9	7.4	17.9	ハケ目	ハケ目 底面木炭痕		完全欠部 2/3残存	0cm II・Ⅲ区
7	土師器	甕	14.3	6.8	15.8	ハケ目	ヘラケズリ		完全欠部 ほぼ完全	2cm III・Ⅳ区
8	土師器	甕	14.2	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全欠部 底面欠部	6.5cm IV区
9	土師器	甕	14.2	5.0	(18.3)	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全欠部	2cm P7
10	土師器	甕	-	7.6	-	ハケ目	ハケ目・ヘラナデ		完全欠部 底面欠部	7cm
11	土師器	甕	13.5	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全欠部 底面欠部	2cm P7 カマド
12	土師器	甕	13.0	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ		円形欠部 口縁1/2残存	1～3cm カマド
13	土師器	甕	19.1	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ		円形欠部 口縁2/3残存	3cm
14	土師器	甕	17.0	6.4	27.9	ヘラナデ	ヘラケズリ		円形欠部 底面欠部	III・Ⅳ区
15	土師器	甕	16.9	7.4	35.0	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全欠部	8.5cm
16	土師器	甕	18.8	6.9	33.9	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全欠部 完全欠部	1cm
17	磁器	茶材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	完全欠部	出土位置
17	磁石物石	輝石(火山岩)	残存	14.1	6.4	5.0	690.00	縁線有り(黒くなっている)		0cm
18	白玉	滑石		0.35	0.85	0.29	(0.32)			4.5cm 間仕切り
19	白玉	滑石		0.40	0.70	0.25	0.30			0cm
20	白玉	滑石		0.50	0.75	0.22	(0.37)			0cm
21	白玉	滑石		0.45	0.76	0.27	0.38			2cm 間仕切り
22	白玉	磨石		(0.10)	-	-	0.03	破片		1cm 間仕切り
23	白玉	滑石		0.49	0.85	0.31	0.56			2.5cm 間仕切り
24	白玉	滑石		0.20	-	-	(0.08)			1cm
25	白玉	滑石		0.38	0.90	0.28	0.36			1.5cm
26	白玉	滑石		0.40	0.72	0.21	0.30			0cm 間仕切り
27	白玉	磨石		0.44	-	-	(0.14)	破片		1cm 間仕切り
28	白玉	磨石		0.49	0.71	0.25	0.31			2cm 間仕切り

第59表 H58号住居址出土遺物観察表



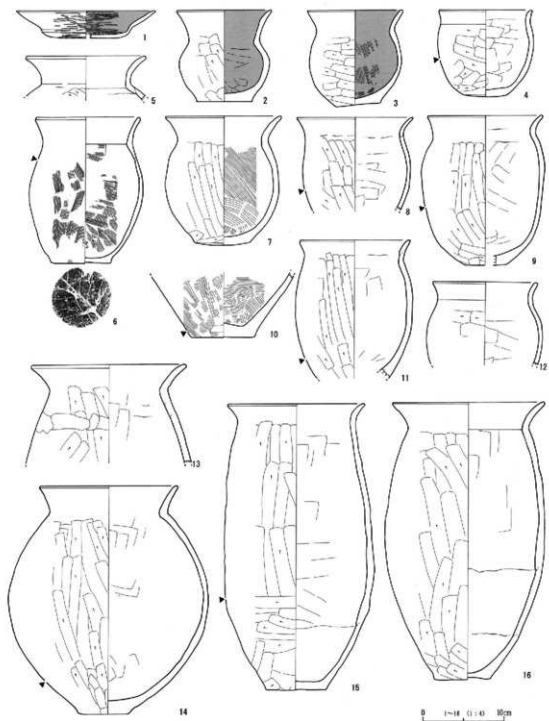
1. 帯褐色土層 (10193/3) 黄色ローム粒子微量混入。
 2. 黒褐色土層 (10192/3) 炭化粒子微量混入。
 3. 黒色土層 (10192/1) 炭化粒子・炭化物少量混入。
 黄色ローム粒子微量混入。
 4. 褐色土層 (10194/3) 黄色ローム粒子・ブロック主体。
 5. 黒褐色土層 (10193/1) 黄色ローム・ブロック微量混入。
 6. 黒褐色土層 (10192/2) 黄色砂粒子・炭化物微量混入。
 7. 黒褐色土層 (10192/3) ローム粒子・炭化物微量混入。
 8. 黒褐色土層 (10192/3) 砂粒子少量。炭化物微量混入。
 9. 黒褐色土層 (10192/1) ローム・ブロック・小石が少量混入。
 10. 黒褐色土層 (10192/3) ローム粒子少量混入し、炭化物を含む。
 11. 黒褐色土層 (10192/1) 炭化物混入。
 12. 黒褐色土層 (10192/2) 炭化物少量。粘土微量混入。
 13. 黒褐色土層 (10192/3) 黄色砂粒子少量混入。
 14. 黒褐色土層 (10192/3) 炭化物少量混入。
 15. 黒褐色土層 (10192/3) 炭化物・焼土粒子多量混入。
 16. 黒褐色土層 (10192/4) ローム粒子・粘土粒子微量混入。
 17. 黒褐色土層 (10192/1) ローム粒子・粘土粒子微量混入。
 18. 黒褐色土層 (10194/3) ローム粒子多量混入し、砂粒子を含む。
 19. 黒褐色土層 (10192/2) 黒色土・黄色ローム粒子を含む。

第96図 H58号住居址実測図



第97図 H58号住居址カマド及び出土遺物実測図

3層に分かれる。床はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床の厚みは2~14cmを測る。壁溝は住居址を全周し、東壁と西壁にそれぞれ2箇所間仕切り溝が検出された。壁溝の形態はU字形で、幅は約18~38cm・深さ1~9cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め、12箇所確認された。主柱穴はP1~P4、P5とP6とP10は貯蔵穴、P11が入り口施設と考えられる。規模はP1が径50cm・深さ45cm、P2が径70cm・深さ53cm、P3が径67cm・深さ50cm、P4が径62cm・深さ50cm、P5が径88cm・深さ62cm、P6が径74cm・深さ11cm、P7が径36cm・深さ11cm、P8が径33cm・深さ27cm、P9が径36cm・深さ24cm、P10が径76cm・深さ17cm、P11が径49cm・深さ28cm、P12が径77cm・深さ20cmを測る。住居址の掘り方は中央部分が方形に一段高くなる形態で、高さは4~7cmの段差がある。



第98图 H58号住居址出土遺物実測図

カマドは北壁中央に検出された。残存状況は良好で、焚口部や袖部が検出された。規模は煙道部長さ73cm、袖高さは右袖が27cm、左袖が23cmを測る。袖はロームブロックを混入した褐色土で構築されていた。焚口部は構内の川原石を2本立てた状態で検出された。火床部は良く焼けており、上面は硬質化していた。焼土の厚みは11cmを測る。また火床部奥には支脚石が立った状態で検出された。火床部及び煙道部も構築土がある。

出土遺物はカマド周辺の床面上や、入り口付近と考えられる南壁中央寄りから、まとまって出土した(写真図版五十一参照)。1は土師器坏であり、内面黒処理されていた。床面より1.5cm浮いた状態でカマド西脇より出土した。2~12は土師器甕でいずれも小型のタイプである。2と3は形態的に良く似ており、内面も共に黒色処理されていた。6は住居址中央部の床面上から出土し、胴部は細かなハケ目の残るナデが施され、底部に木葉痕が残る。7はほぼ完形で、南壁寄りの床面から出土した。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はハケ目の残るナデが施されている。13~16は土師器甕で、13.15.16は胴が長いタイプのいわゆる「長胴甕」であり、14は壺的な要素が残る器形の胴張甕である。14は覆土中からの出土であり、10も含めて混入品の可能性がある。17は形態より編み物石と考えられるが、本址からは1点のみの出土であり不確実である。一部に被熱の痕跡がある。18~28は滑石製の白土で、多くが西壁北寄りの間仕切り溝内より出土した。

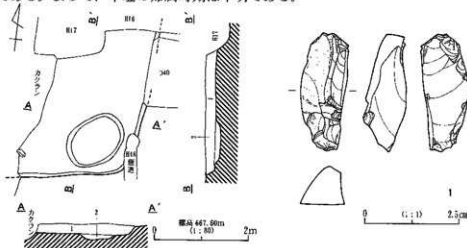
本址はこれらの出土遺物より、6世紀後半に位置づけられる。

(59) H59号住居址 (第99図, 写真図版五十二)

本住居址は、調査区中央であるト-47.48、ナ-47.48Grに位置する。残存状態は住居址西側をカクラン、北側をH16.17号住居址により削平されている。新旧関係は、本址が一番古い。

形態は不明で、規模は南壁2.23m(残存)・東壁2.91m(残存)、壁高さは南壁で最大21cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は、検出部分で5.74㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はやや軟質であり、貼床は検出されなかった。南東コーナー部に貯蔵穴と考えられる円形の土坑が検出された。規模は長軸133cm・短軸99cm・深さ9.5cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した黒曜石石核の他に、小片で須恵器坏片や土師器甕片が出土したのみである。よって、本址の帰属時期は不明である。



1. 黒褐色土層 (10TR2/2) 砂質。ロームブロック散乱層。
2. 黒色土層 (10TR2/1) ロームブロック散乱層。

第99図 H59号住居址及び出土遺物実測図

No.	図 号	部 材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
1	石核	黒曜石	3.1	1.3	1.1	3.72			1区

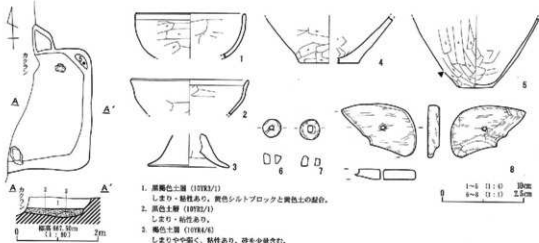
第60表 H59号住居址出土遺物観察表

(60) H60号住居址 (第100図, 写真図版五十二)

本住居址は、調査区中央であるナ-49.50Grに位置する。残存状態は西側半分がカクランにより大きく壊されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.28m(残存)・南壁1.88m(残存)・東壁2.78mで、壁高さは東壁南寄りで最大23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は、検出部分で3.79㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは17~30cmで貼られていた。また、本址には北壁側に張り出しのような掘り込みが検出された。

本址からの遺物は覆土中から多く出土したが、5のみは床面上から出土した。1と2は土師器坏でいずれも古墳時代中期後半の所産と考えられる特徴を持つ。3は土師器高坏脚部である。4は土師器甕の底部である。5も土師器甕の胴部から底部の破片であり、特徴からいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるタイプのものである。6と7は白玉、8は欠損しているがその形態から、剣形の石製模造品と考えられる。本址は出土遺物が少なく時期の確定は不確実であるが、5の土師器甕の出土層位から9世紀代と考えられる。



1. 黒褐色土器 (10TK3/1)
しまり・粘性あり。黄色シルトブロックと黄褐色土の結合。
2. 黒色土器 (10TK2/1)
しまり・粘性あり。
3. 褐色土器 (10TK4/4)
しまりやや弱く、粘性あり。砂も少量含む。

第100図 H60号住居址及び出土土器実測図

No.	種別	器種	法量	成形・調整・文様				備考	出土位置
				内	面	外	面		
1	土師器	杯	13.6	-	-	ヘラナズリ	ヘラケズリ	目録未録 ①破1/3残存	1区
2	土師器	杯	14.6	-	-	ヘラナズリ	ヘラナズリ	目録未録 ①破1/4残存	1区
3	土師器	高坏	-	10.9	-	ヘラナズリ	ナズリ	目録未録 破部1/3残存	2区
4	土師器	甕	-	7.4	-	ヘラナズリ	ヘラケズリ	目録未録 破部1/3残存	1区
5	土師器	甕	-	4.2	-	ヘラナズリ	ヘラケズリ	完全実測 既測定形	2区
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
6	白玉	燧石	完形	0.34	0.53	0.15	0.13		
7	白玉	燧石	完形	0.30	0.60	0.22	0.17		
8	剣形石製模造品	燧石		1.6	2.3	0.3	1.70		1区

第61表 H60号住居址出土土器観察表

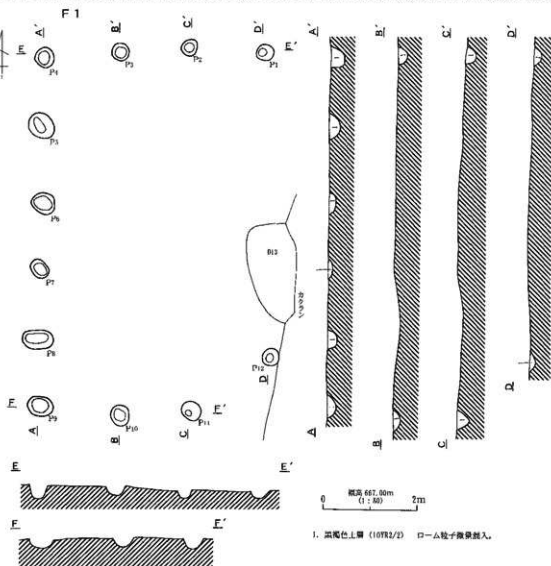
第2節 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址 (第101図, 写真図版五十三)

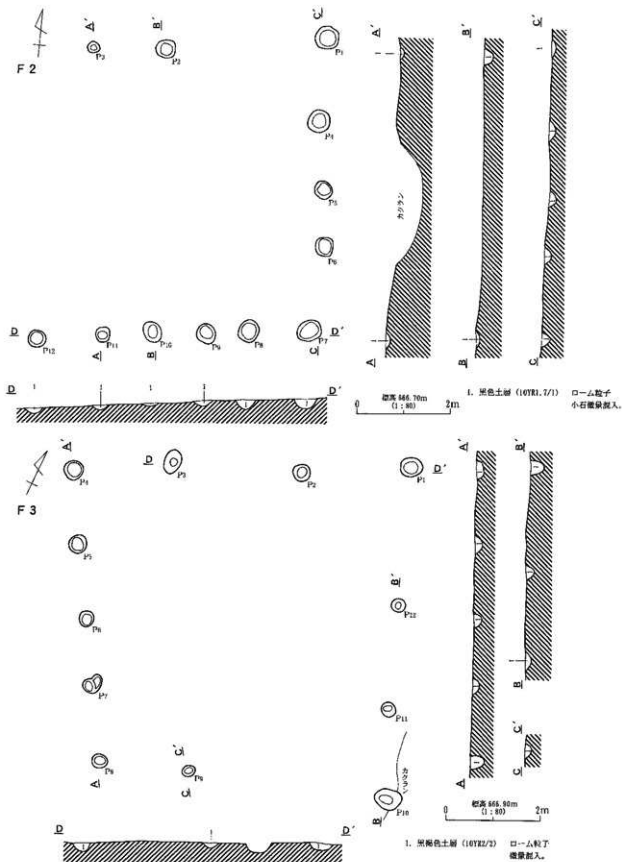
本址は、調査区中央部であるツ-35.36.37、テ-35.36.37Grに位置する。残存状態は東側がカクランにより削平され、柱列が確認できなかつた。

形態は南北方向に長い、3間×5間の側柱式建物址である。軸方位はN⁺を示す。規模は桁行7.50m (P4~P9)・梁行4.63m (P1~P4)で、桁行柱間は1.40~1.62m・梁間柱間は1.47~1.62mを測る。ピット間に囲まれた面積は36.05m²を測る。柱穴の形態はいずれもほぼ円形である。ピットの規模はP1が径39cm・深さ18cm, P2が径37cm・深さ21cm, P3が径38cm・深さ22cm, P4が径45cm・深さ30cm, P5が径61cm・深さ24cm, P6が径51cm・深さ16cm, P7が径42cm・深さ12cm, P8が径66cm・深さ23cm, P9が径57cm・深さ19cm, P10が径46cm・深さ19cm, P11が径44cm・深さ27cm, P12が径37cm・深さ9cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかつた。

本址より図示できる出土遺物はなかつたが、P3~P5, P8, P10~P12より土師器甕・坏が出土した。これら土師器の特徴は古墳時代後期のものであり、本址の帰属時期は古墳時代後期と考えられる。



第101図 F1号掘立柱建物址実測図



第102図 F 2.3号竪立柱建物址大測図

(2) F 2号掘立柱建物址 (第102図, 写真図版五十三)

本址は、調査区中央部であるト-33.34.35、ナ-33.34.35Grに位置する。残存状態は良好であったが、西側の柱列は確認できなかった。

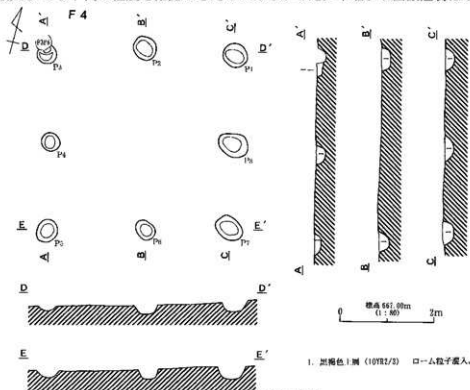
形態は南北方向に長い、4間×5間の側柱式建物址である。軸方位はN-4°-Wを示す。規模は桁行5.78m (P7~P12)・梁行6.22m (P1~P7)で、桁行柱間は0.91~1.41m・梁行柱間は1.20~1.82mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ8cm、P2が径45cm・深さ21cm、P3が径27cm・深さ7cm、P4が径48cm・深さ15cm、P5が径40cm・深さ17cm、P6が径41cm・深さ18cm、P7が径56cm・深さ21cm、P8が径49cm・深さ21cm、P9が径45cm・深さ13cm、P10が径48cm・深さ8cm、P11が径32cm・深さ10cm、P12が径36cm・深さ7cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より図示できる出土遺物はなかったが、P1、P2、P4、P10より土師器甕や須恵器残片が出土した。特にP4からは土師器甕のいわゆる「武藏甕」が出土している。これらの遺物より本址の帰属時期は平安時代以降と考えられるが、不確定である。

(3) F 3号掘立柱建物址 (第102図, 写真図版五十四)

本址は、調査区中央部であるツ-38.39、テ-37.38.39、ト-37.38.39Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は整っていない。

形態はほぼ方形で、3間×4間の側柱式建物址である。軸方位はN-26°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は48.86㎡を測る。規模は桁行7.16m (P1~P4)・梁行7.04m (P1~P10)で、桁行柱間は2.08~2.75m・梁行柱間は1.94~2.94mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径48cm・深さ20cm、P2が径38cm・深さ12cm、P3が径54cm・深さ25cm、P4が径42cm・深さ16cm、P5が径40cm・深さ17cm、P6が径35cm・深さ20cm、P7が径48cm・深さ18cm、P8が径32cm・深さ29cm、P9が径31cm・深さ14cm、P10が径58cm・深さ15cm、P11が径32cm・深さ19cm、P12が径31cm・深さ32cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より出土遺物はなかった。



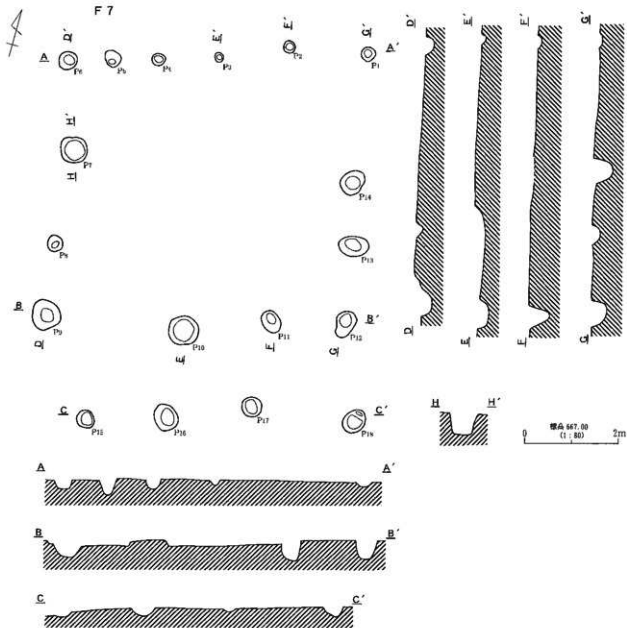
第103図 F4号掘立柱建物址実測図

(4) F 4号掘立柱建物址 (第103図, 写真図版五十四)

本址は、調査区中央部であるテ-38.39、ト-38.39Grに位置する。残存状態は良好であった。

形態はほぼ方形で、2間×2間の側柱式建物址である。軸方位はN-8°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は14.83㎡を測る。規模は桁行3.96m (P1~P3)・梁行3.82m (P3~P5)で、桁行柱間は1.86~2.10m・梁行柱間は1.88~1.94mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径55cm・深さ22cm、P2が径53cm・深さ21cm、P3が径43cm・深さ14cm、P4が径41cm・深さ26cm、P5が径49cm・深さ16cm、P6が径46cm・深さ24cm、P7が径60cm・深さ29cm、P8が径67cm・深さ21cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より図示できる出土遺物は無かったが、P1、P3、P6より土師器甕・坏片が出土した。しかし、いずれも小片であり、遺構の所属時期を確定できるものは無かった。



第104図 F7号掘立柱建物址実測図

(5) F 7号掘立柱建物址 (第104図, 写真図版五十五)

本址は、調査区中央部であるテ-42.43、ト-41.42.43、ナ-41.42.43Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は一定していない。

形態は東西方向に長い3間×5間の側柱式建物址で、南側に庇と考えられる柱列を持つ。軸方位はN-18°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は35.06㎡・底部分を含めると47.78㎡を測る。規模は桁行6.34m (P1~P6)・梁行5.68m (P1~P12)で、桁行柱間は0.92~1.67m・梁行柱間は1.31~2.74mを測る。底部分の規模は長辺が5.78m、短辺が2.02mである。柱穴の形態はいずれも円形であるが、北側の柱列は全体に比べて径が小さく、掘り込みも浅い。ピットの規模はP1が径32cm・深さ7cm、P2が径29cm・深さ9cm、P3が径21cm・深さ11cm、P4が径30cm・深さ9cm、P5が径38cm・深さ33cm、P6が径40cm・深さ21cm、P7が径62cm・深さ46cm、P8が径35cm・深さ18cm、P9が径62cm・深さ27cm、P10が径66cm・深さ31cm、P11が径49cm・深さ42cm、P12が径61cm・深さ25cm、P13が径62cm・深さ18cm、P14が径58cm・深さ37cm、P15が径42cm・深さ10cm、P16が径56cm・深さ18cm、P17が径45cm・深さ7cm、P18が径55cm・深さ25cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

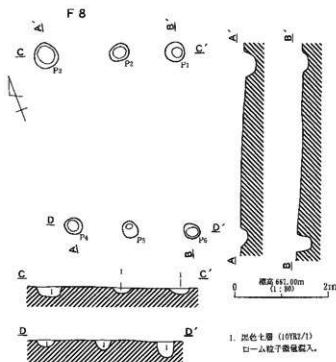
本址より図示できる出土遺物は無かったが、P7、P13、P15より土師器甕片が出土した。しかし、いずれも小片であり、遺構の帰属時期を確定できるものはなかった。

(6) F 8号掘立柱建物址 (第105図, 写真図版五十五)

本址は、調査区中央部であるナ-41.42、ニ-41.42Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は一定していない。

形態は南北方向に長い、1間×2間の側柱式建物址である。軸方位はN-16°-Eを示す。ピット間に囲まれた面積は10.03㎡を測る。規模は桁行2.82m (P1~P3)・梁行3.80m (P1~P6)で、桁行柱間は1.24~1.58m・梁行柱間は3.66~3.80mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径41cm・深さ11cm、P2が径43cm・深さ13cm、P3が径54cm・深さ27cm、P4が径36cm・深さ16cm、P5が径36cm・深さ21cm、P6が径38cm・深さ32cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物は図示できるものは無かったが、P3、P4より土師器甕片が出土した。特にP4からの甕はいわゆる「武蔵甕」の特徴を有するものである。

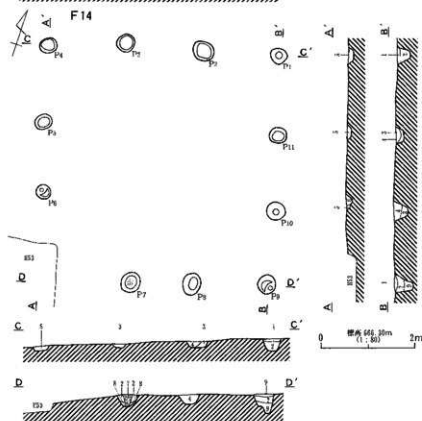
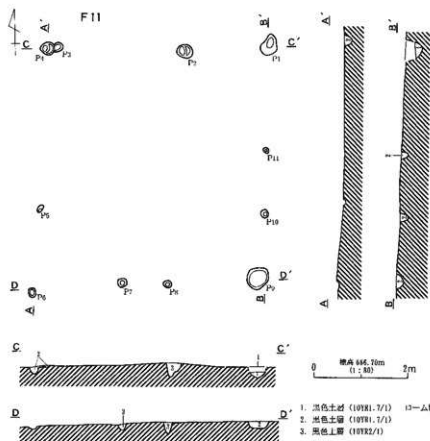


第105図 F 8号掘立柱建物址実測図

(7) F 11号掘立柱建物址 (第106図, 写真図版五十八)

本址は、調査区中央部であるテ-34.35、ト-34.35、ナ-34.35Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は一定していない。

形態は南北方向に長い、3間×3間の側柱式建物址である。軸方位はN-3°-Eを示す。ピット間に囲まれた面積は24.24㎡を測る。規模は桁行5.14m (P4~P6)・梁行4.90m (P6~P9)で、桁行柱間は1.36~3.44m・梁行柱間は0.96~2.90mを測る。柱穴の形態はいずれも円形であるが、規模の大小に



第106図 F11.14号掘立建柱建物址実測図

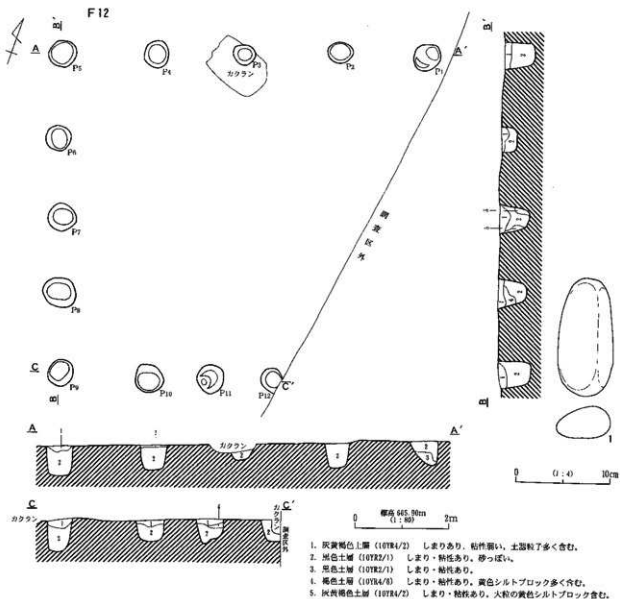
ばらつきがある。ピットの規模はP1が径46cm・深さ14cm、P2が径33cm・深さ29cm、P3が径26cm・深さ2cm、P4が径28cm・深さ17cm、P5が径18cm・深さ11cm、P6が径18cm・深さ3cm、P7が径19cm・深さ16cm、P8が径18cm・深さ24cm、P9が径49cm・深さ18cm、P10が径18cm・深さ22cm、P11が径14cm・深さ20cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より図示できる出土遺物は無かったが、P3より土器器坏片が出土した。しかし、小片であり遺構の帰属時期を確定できるものではなかった。

(8) F12号掘立柱建物址 (第107図, 写真図版五十六)

本址は、調査区北側であるス-6.7、セ-7.8、ソ-7.8Grに位置する。残存状態は良好であったが、東側が調査区域外となり、全体は検出できなかった。

形態は東西方向に長い、4間×4間以上の側柱式建物址である。軸方位はN-19°-Wを示す。規模は桁行7.83m (P1~P5)・梁行6.87m (P5~P9)で、桁行柱間は1.85~2.02m・梁行柱間は1.60~1.91mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径64cm・深さ49cm、P2が径56cm・



第107図 F12号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

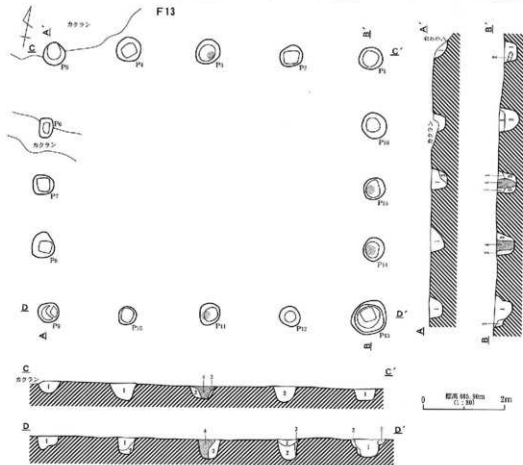
深さ53cm、P3が径48cm・深さ28cm、P4が径58cm・深さ52cm、P5が径61cm・深さ66cm、P6が径53cm・深さ34cm、P7が径60cm・深さ64cm、P8が径74cm・深さ64cm、P9が径58cm・深さ72cm、P10が径61cm・深さ50cm、P11が径61cm・深さ56cm、P12が径47cm・深さ52cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP7の第2層があたるが、他のピットは顕著な堆積状況を示していない。

本址からの出土遺物は、図示した編み物石がP10より出土した。この他にはP2、P4～10、P12より土師器甕・坏片や把手付甕などが出土した。これらは小片であるがいずれも古墳時代後期の所産を示す形態の土器であるため、本址は古墳時代後期に属すると考えられる。

(9) F13号掘立柱建物址 (第108図, 写真図版五十六・五十七)

本址は、調査区北側であるセ-12、ソ-10.11.12、タ-10.11.12、チ-10.11.12Grに位置する。残存状態は良好であり、本遺跡の中では数少ない全体が検出できた掘立柱建物址の一つである。

形態は東西方向に長い、4間×4間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は50.35㎡を測る。軸方位はN-10°-Wを示す。規模は桁行7.94m (P1～P5)・梁行6.34m (P5～P9)で、桁行柱間は



1. 赤褐色土層 (10YR2/1) しまり・粘性あり。黄色シルト粒子も多く含む。炭化物塊層を含む。
2. 褐色土層 (10YR1/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック含む。
3. 黄色土層 (10YR2/1) しまりあり。粘性強い。
4. 黄褐色土層 (10YR3/2) しまり弱い。粘性あり。1.3層にくらべ粘り強い。

第108図 F13号掘立柱建物址実測図

1.92～2.05m・梁行柱間は1.40～1.80mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径58cm・深さ32cm、P2が径58cm・深さ41cm、P3が径63cm・深さ34cm、P4が径60cm・深さ45cm、P5が径55cm・深さ29cm、P6が径58cm・深さ33cm、P7が径50cm・深さ41cm、P8が径63cm・深さ36cm、P9が径53cm・深さ34cm、P10が径47cm・深さ40cm、P11が径57cm・深さ49cm、P12が径52cm・深さ49cm、P13が径90cm・深さ47cm、P14が径60cm・深さ48cm、P15が径58cm・深さ49cm、P16が径67cm・深さ49cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP3、P11、P14、P15の第4層があった。

本址より図示できる出土遺物はなかったが、P1～4、P6～8、P11～13、P15～16より土師器甕・坏片などが出土した。これらは小片であるがいずれも古墳時代後期の所産を示す形態の土器であるため、本址は古墳時代後期に属すると考えられる。

(10) F 14号掘立柱建物址 (第106図, 写真図版五十七)

本址は、調査区北側であるチ-18.19、ツ-18.19Grに位置する。残存状態は良好であり、H53号住居址と重複関係にある。新旧関係は、本址の方が古い。

形態はほぼ方形の3間×3間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は24.50㎡を測る。軸方位はN-17°-Wを示す。規模は桁行4.98m (P1～P9)・梁行4.92m (P1～P4)で、桁行柱間は1.61～1.75m・梁行柱間は1.60～1.68mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径38cm・深さ32cm、P2が径47cm・深さ13cm、P3が径39cm・深さ8cm、P4が径37cm・深さ12cm、P5が径37cm・深さ7cm、P6が径31cm・深さ14cm、P7が径43cm・深さ20cm、P8が径48cm・深さ20cm、P9が径40cm・深さ44cm、P10が径41cm・深さ29cm、P11が径37cm・深さ16cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP7の第7層があった。

本址より出土遺物は図示できるものは無かったが、P1、P3、P6～10より土師器甕・坏片などが出土した。これらは小片であるがいずれも古墳時代後期の所産を示す形態の土器であるため、本址は古墳時代後期に属すると考えられる。

(11) F 15号掘立柱建物址 (第109図, 写真図版五十八)

本址は、調査区中央であるセ-7.8.9、ソ-8Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は13.31㎡を測る。軸方位はN-30°-Wを示す。規模は桁行4.37m (P3～P5)・梁行3.07m (P1～P3)で、桁行柱間は2.10～2.27m・梁行柱間は1.35～1.72mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径38cm・深さ44cm、P2が径33cm・深さ51cm、P3が径34cm・深さ37cm、P4が径31cm・深さ16cm、P5が径41cm・深さ26cm、P6が径39cm・深さ42cm、P7が径39cm・深さ35cm、P8が径29cm・深さ36cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

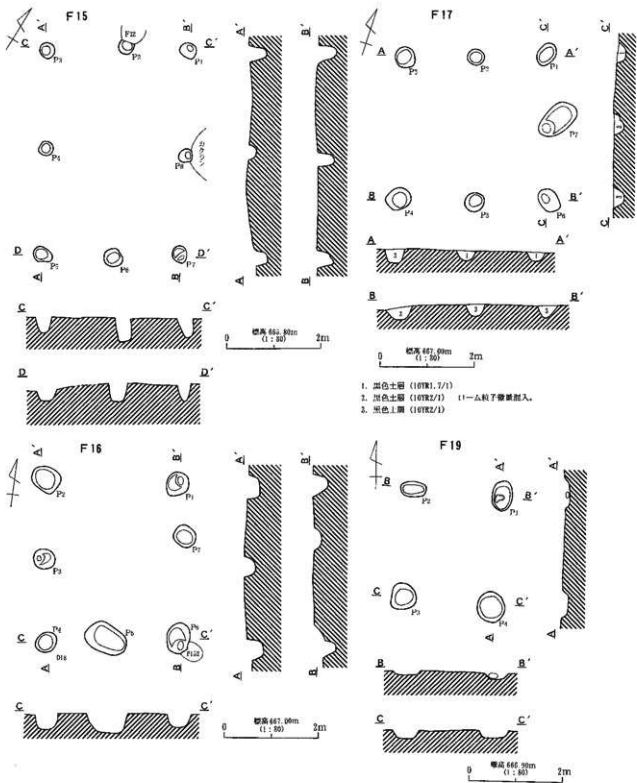
本址より出土遺物は無く、遺構の帰属時期は不明である。

(12) F 16号掘立柱建物址 (第109図)

本址は、調査区中央であるナ-42.43、ニ-43Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一一定しない。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は9.93㎡を測る。軸方位はN-7°-Wを示す。規模は桁行3.52m (P1～P6)・梁行2.88m (P4～P6)で、桁行柱間は1.21～2.31m・梁行柱間は1.42～1.46mを測る。柱穴の形態は楕円形と円形である。ピットの規模はP1が径53cm・深さ36cm、P2が径62cm・深さ23cm、P3が径46cm・深さ29cm、P4が径48cm・深さ37cm、P5が径92cm・深さ48cm、P6が径62cm・深さ50cm、P7が径50cm・深さ19cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物はP2より土師器甕と赤彩された土師器坏片、P3及びP4より土師器甕片がそれ



第109图 F15~17.19号掘立柱建筑物址实测图

ぞれ出土している。これらの土器片はいずれも古墳時代後期の所産であり、よって本址の帰属時期は不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(13) F 17号掘立柱建物址 (第109図)

本址は、調査区中央であるテ-41.42、ト-41.42Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態はほぼ方形の2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は9.22㎡を測る。軸方位はN-15°-Wを示す。規模は桁行3.06m (P1~P6)・梁行3.05m (P4~P6)で、桁行柱間は1.52~1.54m・梁行柱間は1.50~1.55mを測る。柱穴の形態は楕円形と円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ19cm、P2が径36cm・深さ23cm、P3が径44cm・深さ34cm、P4が径44cm・深さ29cm、P5が径40cm・深さ25cm、P6が径56cm・深さ28cm、P7が径91cm・深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物はP1より土師器甕、P3から土師器甕・坏、P4からいわゆる「武藏甕」と呼ばれる土師器甕片がそれぞれ出土している。他のピットの出土土器は古墳時代後期の物である。これらから本址の帰属時期は不確実ではあるが、奈良・平安時代以降と考えられる。

(14) F 18号掘立柱建物址 (第110図)

本址は、調査区中央であるテ-40、ト-40.41.42、ナ-42Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態は南北方向に長い、2間×3間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は29.86㎡を測る。軸方位はN-4°-Eを示す。規模は桁行7.81m (P1~P9)・梁行4.00m (P1~P3)で、桁行柱間は2.17~4.37m・梁行柱間は1.88~2.12mを測る。柱穴の形態は楕円形と円形である。ピットの規模はP1が径81cm・深さ16cm、P2が径99cm・深さ10cm、P3が径60cm・深さ14cm、P4が径67cm・深さ14cm、P5が径59cm・深さ7cm、P6が径93cm・深さ17cm、P7が径68cm・深さ24cm、P8が径57cm・深さ34cm、P9が径52cm・深さ25cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P7より内面黒色処理された土師器坏や武藏甕と呼ばれる土師器甕片が出土したのみである。これらから本址の帰属時期は不確実ではあるが、奈良・平安時代以降と考えられる。

(15) F 19号掘立柱建物址 (第109図)

本址は、調査区中央であるナ-40、41Grに位置する。残存状態は良好である。

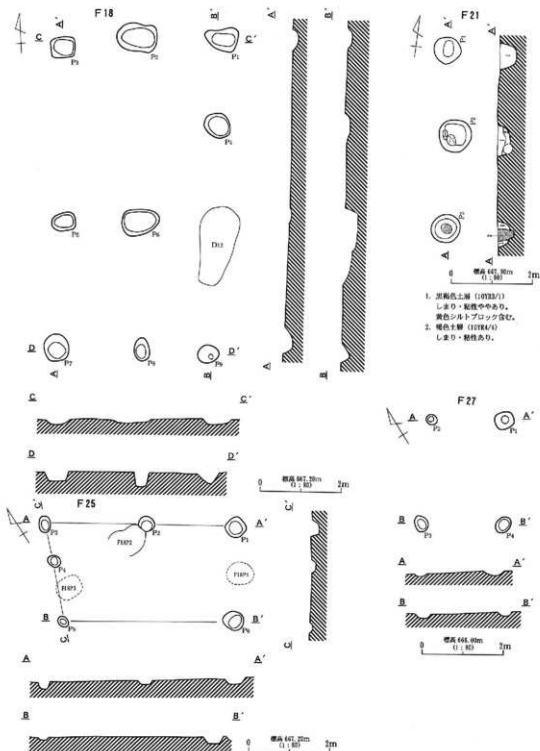
形態は方形に近い1間×1間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は4.58㎡を測る。軸方位はN-4°-Eを示す。規模は桁行2.38m (P1~P4)・梁行2.00m (P3~P4)を測る。柱穴の形態は楕円形と円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ13cm、P2が径54cm・深さ13cm、P3が径57cm・深さ15cm、P4が径65cm・深さ15cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはないが、P1内に根石となるような礎が1点検出された。本址より出土遺物は無い。

(16) F 21号掘立柱建物址 (第110図, 写真図版五十七)

本址は、調査区南側であるナ-67、二-66.67Grに位置する。残存状態は良好であるが、東側が調査区外となるため、南北の柱穴しか検出できなかった。

形態は東西方向に広がる側柱式建物址と考えられる。規模は桁行4.43m (P1~P3)、桁行柱間は2.08~2.35mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径66cm・深さ44cm、P2が径80cm・深さ32cm、P3が径73cm・深さ43cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP3である。

本址からの出土遺物は、P1より須恵器坏、土師器坏・甕、P2より須恵器坏、土師器甕、P3より土師器甕、須恵器坏がそれぞれ小片で出土している。これらから本址の帰属時期は不確実ではあるが、



第110図 F18,21,25,27号掘立柱建物址実測図

奈良・平安時代以降と考えられる。

(17) F22号掘立柱建物址 (第111図)

本址は、調査区南側である二-66.67、ヌ-66.67Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は13.86㎡を測る。軸方位はN-10°-Wを示す。規模は桁行4.03m (P3~P5)・梁行3.47m (P1~P3)で、桁行柱間は1.70~2.33m・梁行柱間は1.56~1.88mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径41cm・深さ18cm、P2が径40cm・深さ40cm、P3が径33cm・深さ19cm、P4が径42cm・深さ15cm、P5が径47cm・深さ23cm、P6が径45cm・深さ14cm、P7が径33cm・深さ11cm、P8が径45cm・深さ30cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P1とP8より土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(18) F23号掘立柱建物址 (第111図)

本址は、調査区南側である二-65、ヌ-65.66Grに位置する。残存状態は東側と南側の柱穴が検出できなかった。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址と考えられる。軸方位はN-7°-Wを示す。規模は桁行3.78m (P3~P5)・梁行3.33m (P1~P3)で、桁行柱間は1.88~1.90m・梁行柱間は1.43~1.90mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ12cm、P2が径47cm・深さ11cm、P3が径44cm・深さ23cm、P4が径43cm・深さ18cm、P5が径50cm・深さ24cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P5より土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(19) F24号掘立柱建物址 (第111図)

本址は、調査区中央であるト-54.55Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となるため、東側と南側の柱穴が検出できなかった。H35.36号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。

形態は不明で、規模は桁行1.82m (P1~P2)・梁行1.74m (P2~P3)を測る。ピットの規模はP1が径57cm・深さ55cm、P2が径70cm・深さ22cm、P3が径52cm・深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

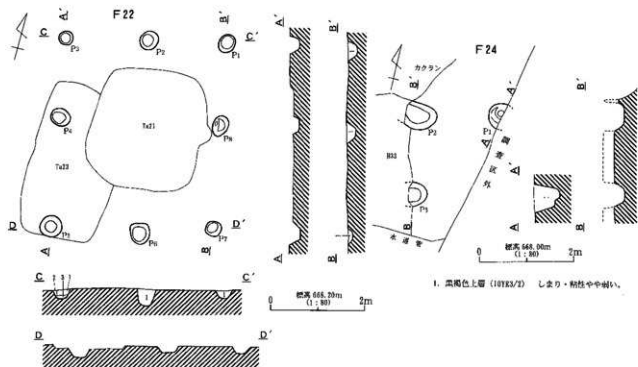
本址より出土遺物はP1とP2から土師器甕片が出土したのみで、その内のP1からの甕は武蔵甕と呼ばれる形態の物である。よって本址の帰属時期は不明である。

(20) F25号掘立柱建物址 (第110図)

本址は、調査区中央であるテ-40、ト-39.40、ナー40Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

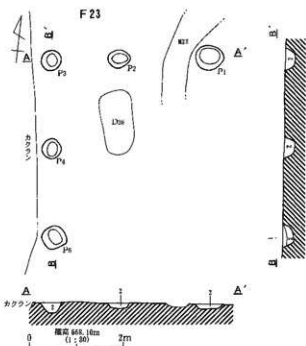
形態は東西方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は10.59㎡を測る。軸方位はN-35°-Wを示す。規模は桁行4.68m (P1~P3)・梁行2.47m (P3~P5)で、桁行柱間は2.20~2.48m・梁行柱間は0.97~1.50mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ17cm、P2が径40cm・深さ10cm、P3が径40cm・深さ17cm、P4が径30cm・深さ11cm、P5が径30cm・深さ7cm、P6が径50cm・深さ15cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P4より土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

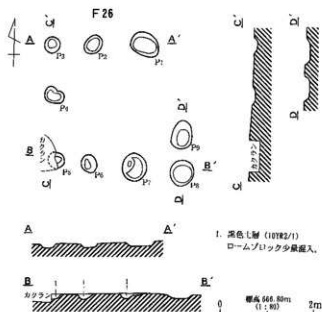


1. 黒褐色土層 (10YR3/2) しまり・粘性やや強い。

1. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性ややあり、炭化物を微量含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) しまり・粘性ややあり、黄色シルトブロックを含む。
3. 褐色土層 (10YR4/4) しまり・粘性あり。



1. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性ややあり。
2. 褐色土層 (10YR4/4) しまり・粘性あり、黄色シルトブロックを含む。



1. 褐色土層 (10YR2/1) ロームブロック少量混入。

第111図 F22～24,26号掘立柱建物址及び3号柱列址実測図

(21) F 26号掘立柱建物址 (第111図)

本址は調査区中央であるナ-36.37.38Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態は東西方向に長い、2間×3間の側柱式建物址である。規模は桁行2.72m (P5~P8)・梁行2.44m (P3~P5)で、桁行柱間は0.70~1.04m・梁行柱間は1.10~1.34mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径64cm・深さ11cm、P2が径43cm・深さ8cm、P3が径34cm・深さ8cm、P4が径43cm・深さ8cm、P5が径34cm・深さ12cm、P6が径40cm・深さ13cm、P7が径60cm・深さ12cm、P8が径54cm・深さ10cm、P9が径60cm・深さ5cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址よりの出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(22) F 27号掘立柱建物址 (第110図)

本址は、調査区中央であるト-35、ト-35.36Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は南北方向に長い、1間×1間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は4.85㎡を測る。軸方位はN-36°-Eを示す。規模は桁行2.56m (P1~P4)・梁行2.01m (P3~P4)を測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径48cm・深さ13cm、P2が径26cm・深さ6cm、P3が径41cm・深さ11cm、P4が径43cm・深さ10cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址よりの出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(23) 1号柱列址 (第112図)

本址は、調査区中央であるト-40、ナ-39.40Grに位置する。形態は東西方向に伸びる柱列で、ピットの形態は小型で櫛列的な様相を示す。ピットの間隔は0.93~1.95mを測るピットの規模はP1が径30cm・深さ11cm、P2が径20cm・深さ7cm、P3が径20cm・深さ8cm、P4が径35cm・深さ17cmを測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P1より土師器甕片2点が出土しているが、遺構の帰属時期は不明である。

(24) 2号柱列址 (第112図)

本址は、調査区中央であるテ-40.41.42Grに位置する。形態は南北方向に伸びる柱列で、ピットの形態は円形である。ピットの規模がやや大きいことから、掘立柱建物址の可能性もある。ピットの間隔は2.08~2.64mを測る。ピットの規模はP1が径50cm・深さ21cm、P2が径48cm・深さ19cm、P3が径46cm・深さ16cm、P4が径42cm・深さ22cmを測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。出土遺物は、P1とP4より土師器甕、P2より土師器坏が出土しているが、遺構の帰属時期は不明である。

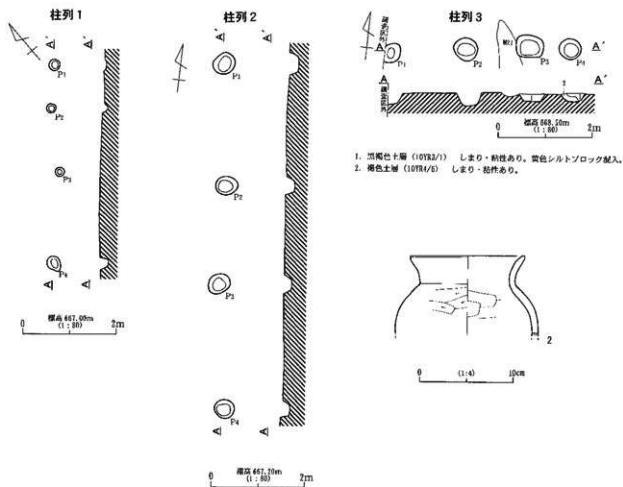
(25) 3号柱列址 (第112図, 写真図版五十七)

本址は、調査区南側であるニ-80、ヌ-80Grに位置する。形態は東西方向に伸びる柱列で、ピットの形態は円形で、規模は大きく掘立柱建物址の様相がある。ピットの間隔は0.90~1.60mを測る。ピットの規模はP1が径45cm・深さ15cm、P2が径53cm・深さ16cm、P3が径57cm・深さ17cm、P4が径49cm・深さ19cmを測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址よりの出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

No.	種別	原種	柱 痕		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様				備 考	出土位置
			戸跡長	軸方位	内 面	外 面	所 見			
2	土師器	甕	12.2	-	ヘラナズ				加太遺跡 1号1/3残存	住列2 P1
3	土師器	甕			最大径	最大厚	重量			出土位置
1	掘立柱石	安山岩	空形	12.5	5.9	3.5	335.00			P12-P10

第62表 掘立柱建物址及び柱列出土遺物観察表



第112図 1～3号柱列址及び出土遺物実測図

第3節 土坑

(1) D1号土坑 (第113・117図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-33.34Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。D7号土坑と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-7°-Wを示す。規模は長軸1.48m・短軸1.15m・深さ13cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器坏と甕がある。1の土師器坏は内面黒色処理を施す。2は口縁部が直立気味に立ち上がるタイプの甕で、丁寧なミガキが施されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、古墳時代後期と考えられる。

(2) D2号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-34Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-61°-Wを示す。規模は長軸1.04m・短軸0.78m・深さ6cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) D3号土坑 (第113図)

本址は、調査区中央部のテ-34、ト-34Grに位置する。残存状態は中央部分をカクランにより削平されている。F11号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は不整形で、長軸方位はN-79°-Wを示す。規模は長軸3.38m・短軸0.88m・深さ24cmを測る。また、本址の東側底面にはピットが検出され、規模は径41cm・深さ11cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(4) D4号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-34Grに位置する。残存状態は良好である。F2号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は円形で、長軸方位はN-10°-Wを示す。規模は長軸0.78m・短軸0.67m・深さ15cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(5) D5号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-39.40Grに位置する。残存状態は良好である。F4号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は不整形で、長軸方位はN-72°-Wを示す。規模は長軸1.37m・短軸0.92m・深さ14cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(6) D6号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のテ-42Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-3°-Wを示す。規模は長軸1.19m・短軸0.98m・深さ30cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(7) D7号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-33Grに位置する。残存状態は北側をカクラン、西側をD1号土坑により削平されている。形態は不整形である。規模は長軸1.37m(残存)・深さ6cmを測る。本址からの出土遺物は、武蔵甕と呼ばれるタイプの土師器甕片や須恵器甕片が出土しており、遺構の帰属時期は奈良・平安時代と考えられる。

(8) D8号土坑 (第113・117図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のナ-37.二-37Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-14°-Wを示す。規模は長軸1.77m・短軸1.08m・深さ6cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した須恵器坏がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(9) D 9号土坑 (第113・117図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のニ-37.38Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-46°-Wを示す。規模は長軸1.45m・短軸1.28m・深さ27cmを測る。

本址の出土遺物は図示した打製石斧の他に、須恵器甕片と土師器甕片がある。土師器甕は古墳時代後期に帰属する形態の物であるので、本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(10) D 10号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のニ-43、ヌ-43Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外になり、全容は検出できなかった。形態は不整形で、長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は長軸1.51m・短軸1.00m・深さ31cmを測る。

本址からの出土遺物は土師器甕・坏片が少量ある。これらはいずれも古墳時代後期の帰属と考えられる形態の土器であることから、本址の帰属時期は古墳時代後期と考えられる。

(11) D 12号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のテ-41、ト-41Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は長軸1.95m・短軸0.85m・深さ28cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(12) D 13号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のツ-36.37Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は不整形である。規模は長軸2.14m・短軸0.95m・深さ37cmを測る。また、本址の底面にはビットが検出され、規模は径46cm・深さ20cmを測る。本址からの出土遺物は土師器甕片2点があるが、帰属時期は不明である。

(13) D 14号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のツ-36、テ-36Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長楕円形で、長軸方位はN-80°-Eを示す。規模は長軸1.25m・短軸0.72m・深さ17cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

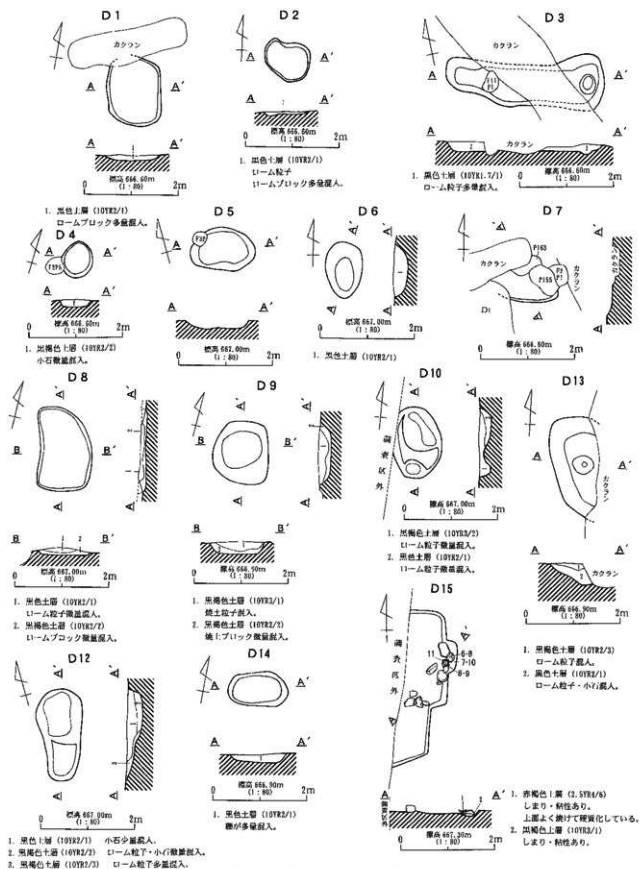
(14) D 15号土坑 (第113・117図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のニ-46Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となるため、全容は検出できなかった。形態は不整形であるが、コーナー部分があり、方形を基調としている。規模は長軸3.36m・短軸0.95m・深さ11cmを測る。また、本址は図示した土器と拳大の礫と共に、土坑底面に一部焼土が確認できた。これらの形態は住居址カマドの崩落破棄状態に似る。

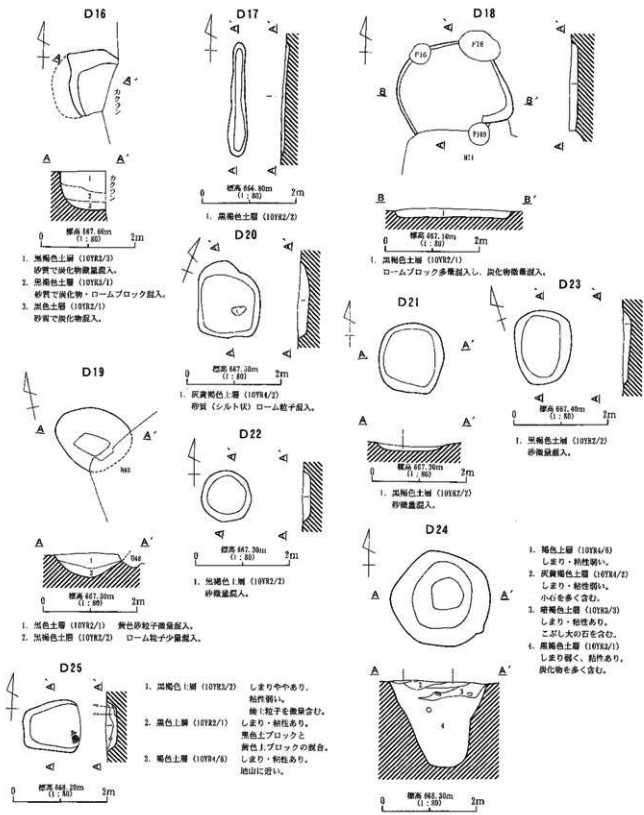
本址より出土遺物は、7点を図示した。いずれも土師器杯であり、礫とまとまって出土した(写真図版六十参照)。6~8が内面黒色処理されている。特に6と7は見込み部に放射状の暗文風のミガキが施されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(15) D 16号土坑 (第114図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のニ-49.50Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-81°-Eを示す。規模は長軸1.28m・短軸1.35m・深さ83cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



第113図 D1～15号土坑火測図



第114図 D16～25号上坑実測図

(16) D17号土坑 (第114図)

本址は、調査区中央部のテ-34.35Grに位置する。残存状態は良好である。形態は細長い溝状遺構のような形態で、長軸方位はN-1'-Eを示す。規模は長軸2.40m・短軸0.28m・深さ11cmを測る。本址より出土遺物は土師器甕片があったが、帰属時期は不明である。

(17) D18号土坑 (第114図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のナ-43、ニ-43Grに位置する。残存状態は南側をH11号住居址により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-72'-Wを示す。規模は長軸2.53m・短軸2.10m・深さ16cmを測る。

本址からの出土遺物は内面黒色処理した土師器坏片や、古墳時代後期帰属の土師器甕片が出土しているが、本址の帰属時期は不明である。

(18) D19号土坑 (第114図)

本址は、調査区中央部のテ-46.47、ト-46.47Grに位置する。残存状態は南側をH48号住居址により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-43'-Wを示す。規模は長軸1.55m・短軸1.30m・深さ54cmを測る。

本址からの出土遺物は、古墳時代後期帰属の土師器甕片20片と土師器坏片がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(19) D20号土坑 (第114図, 写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のナ-49Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はN-21'-Wを示す。規模は長軸1.63m・短軸1.31m・深さ21cmを測る。

本址からの出土遺物は内面黒色処理した土師器坏片、須恵器坏・甕片がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実であるが、平安時代と考えられる。

(20) D21号土坑 (第114図, 写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のト-46Grに位置する。残存状態は上面をH16号住居址によって削平されている。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-1'-Wを示す。規模は長軸1.93m・短軸1.36m・深さ17cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器坏片、武蔵甕と呼ばれる土師器甕片などがあるが、本址の帰属時期は不明である。

(21) D22号土坑 (第114図, 写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のト-46.47Grに位置する。残存状態は上面をH16号住居址により削平されている。形態は円形で、長軸方位は北を示す。規模は長軸1.06m・短軸1.04m・深さ13cmを測る。

本址より出土遺物は、須恵器坏・甕片と武蔵甕と呼ばれる土師器甕片があるが、本址の帰属時期は不明である。

(22) D23号土坑 (第114図, 写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のト-46.47、ナ-46.47Grに位置する。残存状態は上面をH16号住居址によって削平されている。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-17'-Eを示す。規模は長軸1.56m・短軸1.17m・深さ21cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏・甕片が少量あるのみで、本址の帰属時期は不明である。

(23) D24号土坑 (第114・117図, 写真図版六十一)

本址は、調査区南側の二-68.69Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、底面はすり鉢状を呈する。長軸方位はN-55°-Wを示す。規模は長軸2.08m・短軸1.97m・深さ181cmを測る。本址の覆上は土が交互に堆積したような状態で、特に第4層は細部に観察すると砂などが混ざる間層が確認でき、人為的な埋め戻しのような状態であった。本址からの出土遺物は図示した石鏃の他に、須恵器坏・蓋、土師器甕片等もあったが、土坑底面より青磁の口縁部小破片が出上したため、本址の帰属時期は中世と考えられる。

(24) D25号土坑 (第114図, 写真図版六十一)

本址は、調査区南側の二-70.71Grに位置する。残存状態は良好である。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-86°-Eを示す。規模は長軸1.21m・短軸1.03m・深さ17cmを測る。本址より平面図に示した獣骨の歯が出土した(獣骨の詳細は第VII章参照)が、その他の出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

(25) D26号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のナ-68、二-68Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸1.82m・短軸0.40m・深さ53cmを測る。本址からの出土遺物は、古墳時代後期の土師器甕片が1点のみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(26) D27号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のナ-67、二-67.68Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はN-5°-Wを示す。規模は長軸0.91m・短軸0.70m・深さ22cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片、土師器甕片があるのみで、本址の帰属時期は不明である。

(27) D28号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側の二-65Grに位置する。残存状態は良好で、F23号掘立柱建物址とH30号住居址と重複関係にあり、いずれも本址の方が新しい。形態は長方形で、長軸方位はN-14°-Wを示す。規模は長軸1.35m・短軸0.69m・深さ12cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器甕・坏片、武蔵甕と呼ばれる土師器甕片があるのみで、本址の帰属時期は不明である。

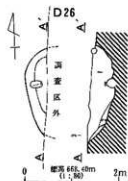
(28) D29号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側の二-68Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-70°-Eを示す。規模は長軸1.09m・短軸1.00m・深さ25cmを測る。また、本址は底面にビツが検出され、規模は径30cm・深さ20cmを測る。

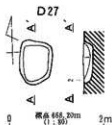
本址からの出土遺物は灰箱陶器皿片1点、須恵坏片1点、古墳時代後期の土師器甕片のみであり、本址の帰属時期は不確実であるが、平安時代と考えられる。

(29) D30号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

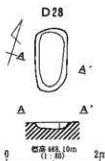
本址は、調査区南側のヌ-64Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は方形で、長軸方位はN-17°-Wを示す。規模は長軸1.78m・短軸0.95m・深さ12cmを測る。本址より出土遺物は須恵器甕片、土師器坏片があるが、本址の帰属時期は不明である。



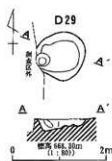
1. 褐色土層 (10TR4/1)
しまり・粘性弱い、
小石を多く含む。
2. 高知色土層 (10TR3/2)
しまり・粘性ややあり、
黄化物を含む。
3. 黄褐色土層 (10TR5/3)
しまり・粘性あり。



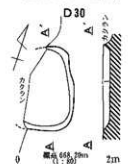
1. 褐色土層 (10TR4/4)
しまり・粘性あり、
高知土ブロックを含む。
2. 黄褐色土層 (10TR5/5)



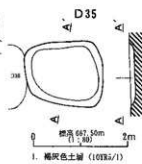
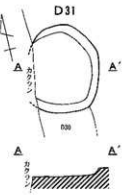
1. 褐色土層 (10TR4/4)
しまり・粘性あり、
炭化物を微量含む。



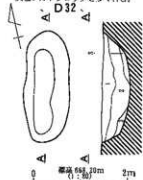
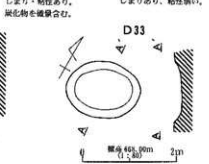
1. 暗褐色土層 (10TR2/2)
しまりあり、粘性弱い。



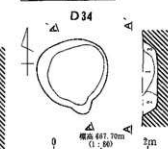
1. 褐色土層 (10TR4/2)
しまり・粘性弱い、
黄色シルトブロックを多く含む。



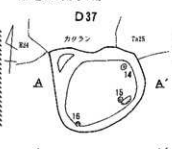
1. 褐色土層 (10TR3/1)
しまり・粘性弱い、
褐色色のぼそぼそ土。



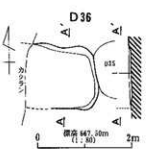
1. 灰黄褐色土層 (10TR4/2)
しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土層 (10TR3/1)
しまり・粘性あり、
黄色シルトブロックを含む。
3. 黄褐色土層 (10TR5/3)
しまり・粘性弱い、
増山のような土。



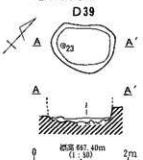
1. 灰黄褐色土層 (10TR4/2)
しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土層 (10TR3/1)
しまり・粘性あり、褐色の溜り土含む。
3. 褐色土層 (10TR4/1)
しまり・粘性あり。



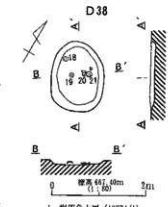
1. 灰黄褐色土層 (10TR4/2)
しまり弱く、粘性あり。
2. 高知色土層 (10TR3/1)
しまり・粘性弱い、黄色シルトブロックを含む。



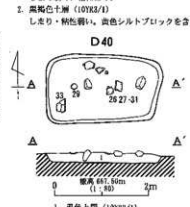
1. 褐色土層 (10TR3/1)
しまり・粘性弱い、
褐色色のぼそぼそ土。



1. 灰黄褐色土層 (10TR4/2)
しまり・粘性あり、小石を多く含む。



1. 褐色土層 (10TR4/1)
しまり弱く、粘性あり、
さらさらした土。

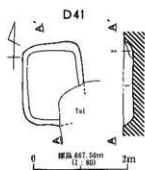


1. 褐色土層 (10TR2/1)
ローム粒子微量混入し、
床上粒子微量含む。

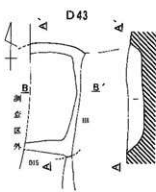


1. 褐色土層 (10TR4/1)
しまり・粘性あり、白色の土。

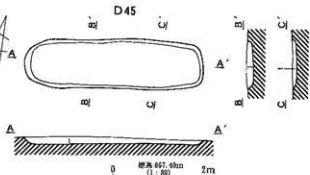
第115図 D26~40.42号土坑実測図



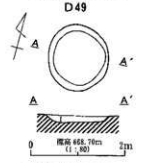
1. 灰褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性強い。灰色でやわらかい。
2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) しまり・粘性あり。黒褐色シブロックを含む。



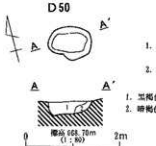
1. 灰褐色土層 (10YR2/1) ロームブロックを散見。断面入り。



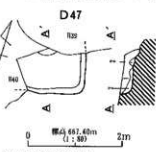
1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ロームブロック・ローム粒子・炭化物散入。



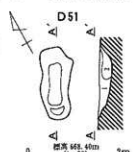
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり。炭化物散見含む。



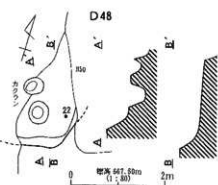
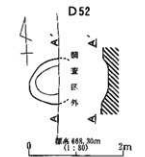
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) しまり・粘性ややあり。粘土・炭化物を含む。



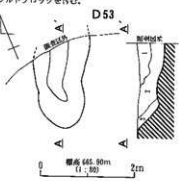
1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) しまり・粘性あり。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) しまり・粘性ややあり。粘土・炭化物を含む。



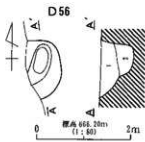
1. 褐色土層 (10YR5/8) しまり・粘性あり。
2. 暗灰色土層 (10YR4/1) しまり・粘性あり。鉄分の沈下あり。



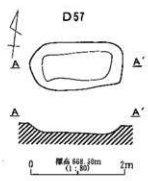
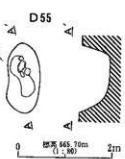
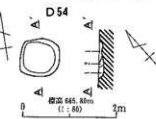
1. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを多く含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) しまり・粘性あり。大粒の黄色シルトブロック含む。



1. におい黄褐色土層 (10YR4/3) しまり・粘性あり。
2. 出褐色土層 (10YR3/2) しまり弱く、粘性あり。
3. 褐色土層 (10YR5/4) しまりあり、粘性強い。



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ロール粒子散見。土層片散入。
2. 黒褐色土層 (10YR2/2) 黒色土片。土層片散入。



第116図 D41.43.45.47~57号土坑実測図

(30) D31号土坑 (第115・117図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のヌ64Grに位置する。残存状態は西側がカクランにより削平されている。H29号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は円形で、長軸方位はN-11°-Eを示す。規模は長軸1.86m・短軸1.39m・深さ24cmを測る。出土遺物は、敲石及び武蔵甕と呼ばれる土師器甕片と須恵器坏片が出土しているのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(31) D32号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のニ62、ヌ62.63Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長楕円形で、長軸方位はN-12°-Eを示す。規模は長軸2.37m・短軸0.97m・深さ61cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(32) D33号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のナ62、ニ62Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-27°-Wを示す。規模は長軸1.57m・短軸1.22m・深さ16cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(33) D34号土坑 (第115図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のナ54.55、ニ54.55Grに位置する。残存状態は良好で、H33号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は不整形で、長軸方位はN-24°-Wを示す。規模は長軸1.60m・短軸1.47m・深さ31cmを測る。本址からの出土遺物は、底部回転糸切り離しの土師器坏片が1点出土しているのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(34) D35号土坑 (第115図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のナ50.51Grに位置する。残存状態は良好である。H37号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は方形で、長軸方位はWを示す。規模は長軸1.66m・短軸1.33m・深さ10cmを測る。本址からの出土遺物は、古墳時代後期所産と考えられる土師器甕片13点程であるが、覆上が中世を特徴づける褐色土であるため、本址の帰属時期は不確実ではあるが、中世と考えられる。

(35) D36号土坑 (第115図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のナ50.51Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。H37号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は方形で、長軸方位はN-87°-Wを示す。規模は長軸1.49m(残存)・短軸1.28m・深さ4cmを測る。本址からの出土遺物は、古墳時代後期所産と考えられる土師器甕片10点程であるが、覆土が中世を特徴づける褐色土であるため、本址の帰属時期は不確実ではあるが、中世と考えられる。

(36) D37号土坑 (第115・117図)

本址は、調査区南側のト52.53、ナ52.53Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。竪穴状遺構と竪穴住居址と重複関係にあり、新旧関係は新しい方より、Ta25号竪穴状遺構→本址→H39号住居址である。形態は不整形で、長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸2.03m・短軸1.83m(残存)・深さ53cmを測る。本址より出土遺物は、図示した土師器坏と被熱した礫がある。14~16は土師器坏で、いずれも底部回転糸切り離しを行っている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(37) D38号土坑 (第115・117図)

本址は、調査区南側のナ-53、ニ-53Grに位置する。残存状態は良好である。H40号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は円形で、長軸方位はN-28°-Wを示す。規模は長軸1.48m・短軸1.10m・深さ11cmを測る。本址よりの出土遺物は図示した土師器坏がある。20と21は内面黒色処理が施されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(38) D39号土坑 (第115・117図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のト-53、ナ-53Grに位置する。残存状態は良好である。H39号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は楕円形で、長軸方位はN-53°-Eを示す。規模は長軸1.34m・短軸0.96m・深さ20cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器坏がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(39) D40号土坑 (第115・118図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のト-47Grに位置する。残存状態は良好である。H59号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は長方形で、長軸方位は西を示す。規模は長軸2.43m・短軸1.42m・深さ24cmを測る。

本址からの出土遺物は多く、図示したように礫と共に覆土中より出土した。25は土師器皿である。26~30は土師器坏で、28~30は内面黒色処理を施している。なお、30は高台を意識したような造りとなっている。31はロクロ成形の土師器甕である。32は須恵器の横瓶で、自然袖の付着が見られる。33は須恵器甕の口縁部であり、敲き痕が残る。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(40) D41号土坑 (第116・117図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のト-49.50Grに位置する。残存状態は南東側をTa1号竪穴状遺構に削平されている。H43号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は方形で、長軸方位はN-5°-Wを示す。規模は長軸1.73m・短軸1.31m・深さ19cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器坏がある。内面見込み部に放射状の暗文があり、内面黒色処理されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確定であるが、平安時代と考えられる。

(41) D42号土坑 (第115・118図, 写真図版六十四)

本址は、調査区南側のト-49、ナ-49Grに位置する。残存状態は良好である。H46.50号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は円形で、長軸方位はN-24°-Wを示す。規模は長軸1.17m・短軸0.86m・深さ24cmを測る。本址からの出土遺物は、覆土中より図示した砥石と台石がある。砥石は表裏に切り離しの為と考えられる溝が切り込まれている。本址の帰属時期は不明である。

(42) D43号土坑 (第116図, 写真図版六十三)

本址は、調査区中央部のヌ-45.46Grに位置する。残存状態は東側をH8号住居址により削平されている。形態は方形で、長軸方位はN-2°-Eを示す。規模は長軸2.06m・短軸1.08m・深さ48cmを測る。本址より出土遺物はなく、土坑の帰属時期も不明である。

(43) D45号土坑 (第116図, 写真図版六十四)

本址は、調査区中央部のト-48、ナ-48Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形で、長軸方位はN-84°-Eを示す。規模は長軸3.77m・短軸1.03m・深さ14cmを測る。本址からの出土遺物は、黒色処理を施した土師器坏片や土師器甕片があるが、土坑の帰属時期は不明である。

(44) D47号土坑 (第116図)

本址は、調査区南側のト-53、ナ-53Grに位置する。残存状態は、北側と西側をH39.40号住居址にそれぞれ削平されている。形態は方形である。規模は長軸1.47m(残存)・短軸0.94m(残存)・深さ32cmを測る。本址からの出土遺物は古墳時代後期の土師器甕片があるが、本址の帰属時期は不明である。

(45) D48号土坑 (第116・117図, 写真図版六十四)

本址は、調査区中央部のナ-49Grに位置する。残存状態は西側をカクラン、東側をH50号住居址に削平されている。形態は不整形である。規模は長軸2.50m(残存)・短軸1.28m(残存)・深さ38cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器甕がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(46) D49号土坑 (第116図, 写真図版六十四)

本址は、調査区南側のヌ-80Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-16°-Wを示す。規模は長軸1.41m・短軸1.27m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は武蔵甕と呼ばれる土師器甕片、須恵器甕片等があり、本址の帰属時期はこれより不確実であるが、平安時代と考えられる。

(47) D50号土坑 (第116図, 写真図版六十四)

本址は、調査区南側のヌ-80Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-79°-Wを示す。規模は長軸0.92m・短軸0.71m・深さ30cmを測る。本址からの出土遺物は土師器坏片があるが、本址の帰属時期は不明である。

(48) D51号土坑 (第116図, 写真図版六十四)

本址は、調査区南側のニ-79、ヌ-79Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-32°-Eを示す。規模は長軸1.55m・短軸0.60m・深さ36cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

(49) D52号土坑 (第116図, 写真図版六十四)

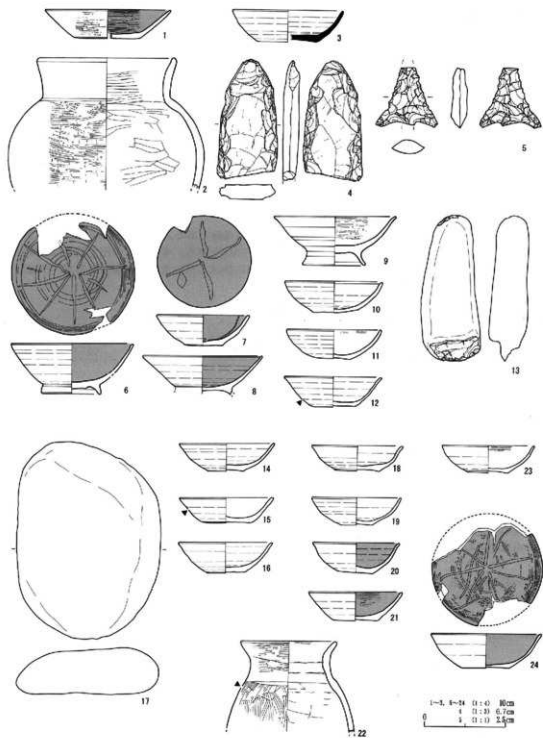
本址は、調査区南側のニ-72Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸0.96m(残存)・短軸0.62m(残存)・深さ13cmを測る。本址より出土遺物は無く、遺構の帰属時期も不明である。

(50) D53号土坑 (第116図, 写真図版六十五)

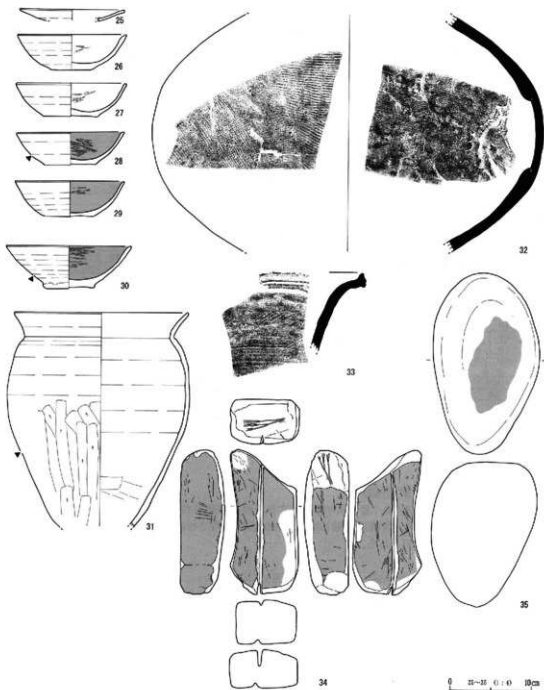
本址は、調査区北側のス-6.7Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外となる。形態は不整形である。規模は長軸1.76m(検出)・短軸1.17m(検出)・深さ62cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

(51) D54号土坑 (第116図, 写真図版六十五)

本址は、調査区北側のセ-11Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はN-82°-Wを示す。規模は長軸0.83m・短軸0.80m・深さ10cmを測る。本址からは古墳時代後期の土師器甕片4点が出土しているが、遺構の帰属時期は不明である。



第117图 D1.8.9.15.24.31.37~39.41.48号土坑出土文物实测图



第118圖 D40.42号土坑出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(底径)	高さ	底径	内面	外面		
1	土師器	杯	15.4	8.2	3.6	ミガキ→黒色処理	ミガキ	完全実測	D1-1層上
2	土師器	壺	17.2	-	(16.0)	口縁コナデ→ミガキ→黒色処理	胴部ヘラケズリ・ミガキ→口縁コナデ	同輪実測	D1-1層上
3	埴土器	杯	13.6	6.8	3.9	口コナデ→火傷	口コナデ→底部右回転糸切り	同輪実測	D8
6	土師器	碗	15.1	7.1	6.2	口コナデ→ミガキ・黒色処理	口コナデ→底部右持ちヘラケズリ→付高台	完全実測 縄文あり	D15 8cm
7	土師器	杯	11.4	4.8	3.8	口コナデ→黒色処理	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測 縄文あり	D16 8cm
8	土師器	碗	14.6	-	(4.8)	口コナデ→黒色処理	口コナデ→底部糸切り→付高台	完全実測	D15 7~8cm
9	土師器	碗	15.0	7.8	6.1	口コナデ→ミガキ	口コナデ→底部右回転糸切り→付高台	完全実測	D15 7cm
10	土師器	杯	12.1	6.5	3.8	口コナデ	口コナデ→底部持ちヘラケズリ	完全実測	D15 8cm
11	土師器	杯	11.6	4.5	3.6	ミガキ	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測 摩耗	D15 9cm
12	土師器	杯	11.9	5.1	5.0	口コナデ	口コナデ→底部右回転ヘラケズリ	完全実測 摩耗	D15
14	土師器	杯	11.7	4.4	3.7	口コナデ	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測 内面摩耗	D37 14cm
15	土師器	杯	11.6	6.1	3.1	口コナデ→ヘラケズリ	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測 内面摩耗	D37 20cm
16	土師器	杯	11.5	4.7	3.8	口コナデ	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測	D37 17cm
18	土師器	杯	11.3	6.3	3.2	口コナデ	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測	D38 0cm
19	土師器	杯	10.9	3.6	3.4	口コナデ	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測	D38 0cm
20	土師器	杯	10.7	4.1	3.8	口コナデ→黒色処理	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測	D38 0cm
21	土師器	杯	11.6	5.4	3.6	口コナデ→ミガキ→黒色処理	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測	D38 0cm
22	土師器	壺	11.8	-	(11.0)	胴部ヘラケズリ→口縁コナデ→ミガキ	胴部ヘラケズリ→口縁コナデ→ミガキ	完全実測	D48 12.5cm
23	土師器	杯	11.4	5.0	3.4	口コナデ→ミガキ	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測 内面摩耗	D39 4cm
24	土師器	杯	13.6	6.9	4.3	ミガキ→黒色処理	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測 縄文あり	D41
25	土師器	皿	13.0	-	-	口コナデ	口コナデ	同輪実測 口縁1/2残存	D40
26	土師器	杯	13.4	5.0	4.4	ミガキ	口コナデ→底部右回転糸切り	同輪実測 口縁1/3残存	D40 19cm
27	土師器	杯	13.6	6.6	4.1	ミガキ	口コナデ→底部右回転糸切り	同輪実測 口縁1/4残存	D40 19cm
28	土師器	杯	13.2	5.3	4.0	ミガキ→黒色処理	口コナデ→底部右回転糸切り	同輪実測 口縁1/4残存	D40
29	土師器	杯	13.1	6.0	4.4	ミガキ→黒色処理	口コナデ→底部右回転糸切り	完全実測 口縁1/2残存	D40 20cm
30	土師器	杯	15.1	6.3	3.3	ミガキ→黒色処理	口コナデ	完全実測 口縁1/2残存	D40
31	土師器	壺	21.4	-	-	口コナデ→ヘラケズリ	口コナデ→ヘラケズリ	完全実測 口縁欠損	D40 19cm
32	埴土器	碗	-	-	-	ナデ	平行タタキ→口コナデ	同輪実測 拓本	D40 14.5cm
33	埴土器	碗	-	-	-	口コナデ	平行タタキ	同輪実測 拓本	D40
ka.	器種	素材	残存率	最大径	最大径	重量	所見	出土位置	
4	打井	輝石安山岩	10.9	5.5	1.5	126.84		D9	
5	石磨	チャート	1.8	1.8	0.5	0.97		D24	
13	磨石	安山岩	壳形	17.7	7.4	4.8	880.00	上・ト階層に散在	B31
17	合石	輝石安山岩	定形	24.1	17.7	5.8	3450.00	非常に黄色した部分あり	D37 23cm
34	砥石	流紋岩	定形	17.7	8.4	5.4	1190.16		D42 7cm
35	白石	輝石安山岩	定形	22.2	13.0	17.8	6920.00	正面にすり面	D42 19cm

第63表 土坑出土土物観察表

(52) D55号土坑 (第116図)

本址は、調査区北側のS-10、セ-10Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-44'-Eを示す。規模は長軸1.47m・短軸0.67m・深さ64cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

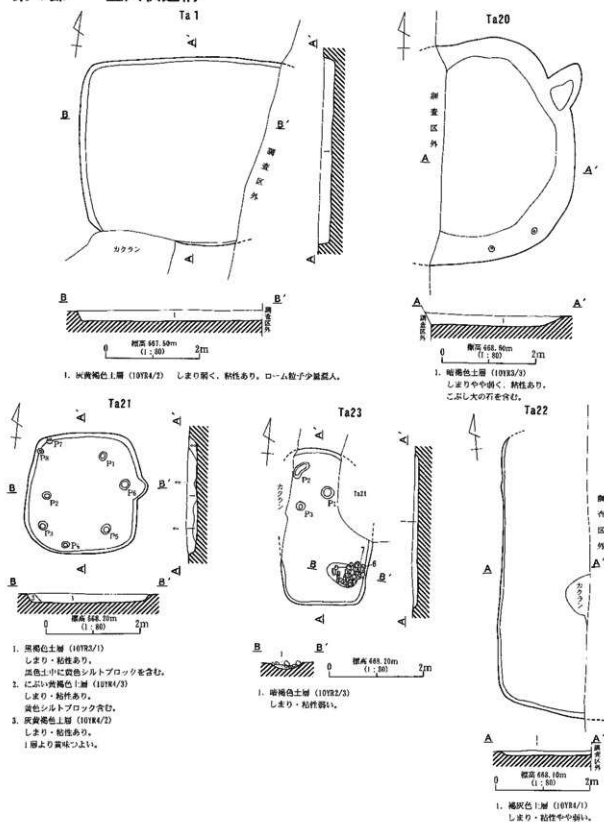
(53) D56号土坑 (第116図, 写真図版六十五)

本址は、調査区北側のチ-16Grに位置する。残存状態は西側をH55号住居址に削平されている。形態は円形である。規模は長軸1.24m(残存)・短軸0.74m(残存)・深さ69cmを測る。本址より出土遺物は古墳時代後期の土師器薬片があるが、遺構の帰属時期は不明である。

(54) D57号土坑 (第116図, 写真図版六十五)

本址は、調査区南側のヌ-82Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形で、長軸方位はN-82'-Eを示す。規模は長軸1.97m・短軸1.01m・深さ21cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

第4節 竪穴状遺構



第119図 Ta1, 20~23号竪穴状遺構実測図

(1) Ta1号竪穴状遺構 (第119図, 写真図版六十六)

本址は、調査区中央部のテ-49.50、ト-49.50Grに位置する。残存状態は南西側がカクラン、東側は調査区域外となる。H41.43号住居址・D41号土坑と重複関係にあり、いずれの遺構よりも本址の方が新しい。形態は長方形で、長軸方位はN-83°-Eを示す。検出部分の面積は13.17㎡を測る。規模は北壁4.06m(検出)・南壁3.00m(残存)・西壁3.35mで、壁の高さは北壁中央で最大25cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した須恵器の他に、土師器甕片があった。図示した1と2は須恵器環、3は須恵器甕の口縁部である。本址の帰属時期は覆土の状態より中世と考えられるが、不確実である。

(2) Ta20号竪穴状遺構 (第119図, 写真図版六十六)

本址は、調査区南側のヌ-79.80、ネ-79.80Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となるため、半分ほどの検出である。形態は円形で、検出部分の面積は7.64㎡を測る。規模は北壁1.02m・南壁2.66m・東壁3.71mで、壁の高さは南壁中央で最大35cmを測る。底面は平坦であり、やや硬化化していた。

本址からの出土遺物は図示した4がカワラケの底部小片であり、5が龍泉窯系の青磁口縁部の破片である。いずれも覆土中より出土した。

本址の帰属時期は出土遺物より、中世と考えられる。

(3) Ta21号竪穴状遺構 (第119図, 写真図版六十六)

本址は、調査区南側のニ-66.67Grに位置する。残存状況は良好であり、重複する遺構の中では本址が、一番新しい。形態は隅丸の方形で、東壁に張り出しを持つ。面積は4.98㎡を測る。規模は北壁1.85m・南壁1.96m・東壁2.25m・西壁2.15mで、壁の高さは西壁中央で最大17cmを測る。長軸方位はN-4°-Wを示す。底面は平坦であり、やや硬化化していた。ピットは8箇所検出された。規模はP1が径20cm・深さ11cm、P2が径17cm・深さ8cm、P3が径19cm・深さ13cm、P4が径16cm・深さ10cm、P5が径22cm・深さ10cm、P6が径22cm・深さ12cm、P7が径13cm・深さ13cm、P8が径13cm・深さ8cmを測る。

本址は覆土中より土師器甕片が出土したのみであるが、覆土の状態は中世的であるため、不確実ではあるが本址の帰属時期は中世と考えられる。

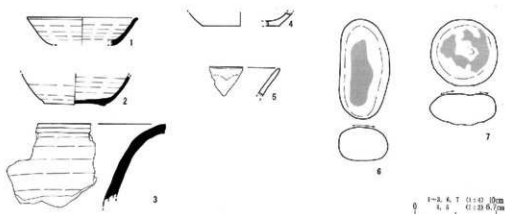
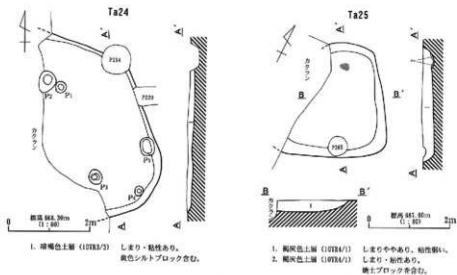
(4) Ta22号竪穴状遺構 (第119図, 写真図版六十六)

本址は、調査区南側のナ-64.65.66、ニ-64.65.66Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は長方形で、面積は10.50㎡を測る。規模は南壁1.68m(検出)・西壁5.54mで、壁の高さは西壁中央で最大9cmを測る。底面は平坦であり、硬化化はしていなかった。

本址は覆土中より須恵器環・甕片や武蔵窯と呼ばれる土師器甕片が出土したのみであるが、覆土の状態は中世的であるため、不確実ではあるが本址の帰属時期は中世と考えられる。

No	種別	図様	法量			成形・調整・文様				備考	出土位置	
			口径	底径	底内径	内面		外面				
1	須恵器	環	13.6	-	-	ロクロナダ	火焼	ロクロナダ	火焼	図1-16残存	Ta1	
2	須恵器	環	7.4	-	-	ロクロナダ	火焼	ロクロナダ	底部口縁糸切り	火焼	図1-16残存	Ta1-1区
3	須恵器	甕	-	-	-	ロクロナダ	-	ロクロナダ	-	破片	Ta1 2区	
4	1期型	かわらけ	-	7.0	-	ロクロナダ	-	ロクロナダ	-	破片	Ta20-1区	
5	青磁	碗	-	-	(2.7)	龍崎	-	龍崎	通片	破片	Ta20-1区	
No	部類	素材	残存率	縮尺	最大径	最大厚	重量	所見			出土位置	
6	磨石	磨石(安山岩)	完全	12.2	6.1	4.3	520.00	正面にすり面			Ta23 0cm	
7	磨石	磨石(安山岩)	完全	8.1	8.1	3.9	238.00	正面にすり面			Ta23 0cm	

第61表 竪穴状遺構出土遺物観察表



第120図 Ta24,25号竪穴状遺構及び出土遺物実測図

(5) Ta 23号竪穴状遺構 (第119図, 写真図版六十六)

本址は、調査区南側のニ-66.67、ヌ-66.67Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、面積は4.24㎡を測る。規模は北壁1.00m(残存)・南壁1.48m・西壁3.07m(推定)・東壁2.85m(推定)で、壁の高さは西壁で最大10cmを測る。底面は平坦であり、硬質化はしていなかった。ピットは3箇所検出された。規模はP1が径25cm・深さ7cm、P2が径41cm・深さ6cm、P3が径20cm・深さ6cm、P4が径70cm・深さ13cmを測る。またP4からは拳大の河原礫がまとも出土した。

本址からの出土遺物はP4からまとも出土した礫群中より、磨石を2点図示した。本址の帰属時期は覆土の状態から、不確実ではあるが中世と考えられる。

(6) T a 24号竪穴状遺構 (第120図, 写真図版六十六)

本址は、調査区南側のニ-69.70、ヌ-69.70Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、面積は8.34㎡を測る。規模は北壁1.90m(推定)・南壁1.36m(残存)・東壁2.75mで、壁の高さは北壁で最大16cmを測る。底面は平坦であり、硬質化はしていなかった。ピットは5箇所検出された。規模はP1が径29cm・深さ10cm、P2が径54cm・深さ15cm、P3が径36cm・深さ11cm、P4が径25cm・深さ23cm、P5が径47cm・深さ17cmを測る。

本址は覆土中より須恵器坏片、土師器残片が出土したのみであるが、覆土の状態から、不確実ではあるが中世に位置づけられると考えられる。

(7) T a 25号竪穴状遺構 (第120図, 写真図版六十六)

本址は、調査区中央のト-52Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。重複関係はP265よりは古く、住居址・土坑よりは新しい。形態は方形で、面積は3.58㎡を測る。規模は北壁1.11m(残存)・南壁2.52m(残存)・東壁2.35mで、壁の高さは南壁で最大29cmを測る。長軸方位はN-24°-W(推定)を示す。底面は平坦であり、硬質化はしていなかった。ピットは検出されなかったが、北壁寄りで焼土の塊が検出された。この焼土は径25cmの範囲で、あまり硬質化していなかった。

本址は覆土中より古墳時代後期の土師器甕・坏片が多数出土したが、本址の帰属時期は覆土の状態から、不確実ではあるが中世と考えられる。

第5節 溝状遺構

(1) M21号溝状遺構 (第121図, 写真図版六十七)

本址は、調査区南側のヌ-80.81Grに位置する。残存状態は中央をD50号土坑により削平されている。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ3.26m(検出)・幅0.29~0.57m・深さ13cmを測る。

本址からの出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

(2) M22号溝状遺構 (第121図)

本址は、調査区南側のナ-63.64、ニ-63.64.65Grに位置する。残存状態は北側をカクランによって削平されている。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ7.23m(検出)・幅0.51~0.87m・深さ18cmを測る。溝の底面は硬質化していた。

本址は古墳時代後期の土師器環・甕片が出土したが、覆土の状態は中世的であるため、遺構の帰属時期は不確実であるが中世と考えられる。

(3) M23号溝状遺構 (第121図, 写真図版六十七)

本址は、調査区南側のナ-60.61、ニ-58~61、ヌ-57~59Grに位置する。残存状態は北側と南側は調査区域外となる。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ17.32m(検出)・幅1.54~2.00m・深さ10~29cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中より多く、図示した遺物はすべてM23号溝状遺構からである。1と2は土師器環で、1は口縁部が屈折するタイプ、2は僅かに口唇部にナデが残るタイプのものである。いずれも内面黒色処理されている。3は須恵器蓋である。天井部は回転ヘラケズリが行われている。4は須恵器環で、底部回転糸切り難しを施している。5は須恵器甕の口縁部である。自然釉が付着している。6は須恵器横板の口縁部である。7は土師器甕で、いわゆる「武蔵甕」と呼ばれるタイプのものである。8は鉄製品で刀子と考えられる。

本址は古墳時代後期から平安時代までの出土遺物があったが、主体となる物は奈良・平安時代の土器類が多く、遺構の帰属時期も奈良・平安時代と考えたい。

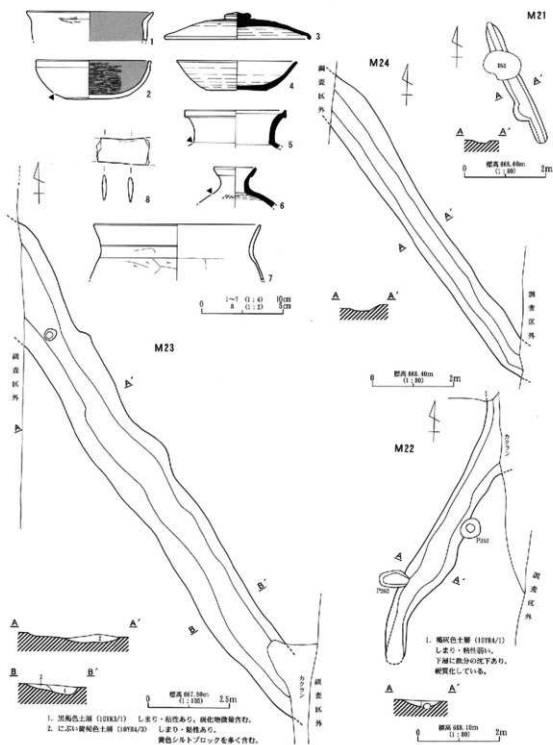
(4) M24号溝状遺構 (第121図)

本址は、調査区南側のニ-78、ヌ-76~78Grに位置する。残存状態は北側と南側は調査区域外となる。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ8.70m(検出)・幅0.74~1.07m・深さ3~16cmを測る。

本址からの出土遺物は無かったが、覆土中から木片等が出土し、覆土も水田の耕作土が崩落したような土であったため、本址の帰属時期は近世から近代と考えられる。

No.	種別	器種	法		成形・調整・文様			備考	出土位置
			法	数	内	外	面		
1	土師器	杯	3.5	-	-	黒色処理	ヘラミガキ	図版実測 口縁1/3残存	M23-II区
2	土師器	杯	14.1	7.2	4.8	ミガキ一帯色処理	ナデ	完全実測 2/3残存	M23-II区
3	須恵器	甕	17.9	-	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	図版実測 1/4残存	M23-I区
4	須恵器	環	14.8	7.4	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	図版実測 1/4残存	M23-II区
5	須恵器	甕	12.4	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 口縁部	M23-III区
6	須恵器	横板	5.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 平行タタキ	完全実測 口縁部	M23-II区
7	土師器	甕	20.4	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	図版実測 口縁1/4残存	M23-II区
No.	器種	素材	残存率	最大径	最大厚	重量	所見		出土位置
8	刀子	鉄	(3.2)	(1.7)	(0.3)				M23-II区ベタ土

第65表 溝状遺構出土遺物観察表

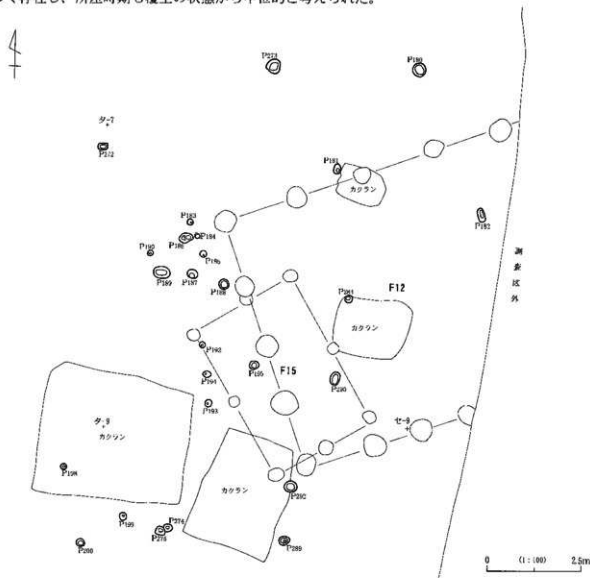


第121図 M21~24号溝状遺構及び出土遺物実測図

第6節 ビット群 (第122~127図)

本遺跡からは単独のビットとして、300以上検出された。これらビットの検出位置は、調査区中央部と南側に偏っている。中央部はテ-33~43Grの40m間に集中する。この区間には多くの掘立柱建物址も存在し、掘立柱建物址と単独ビットが有機的に関連することが伺えた。これらのビットの所産時期は出土遺物が無く不明であるが、掘立柱建物址の所産が古墳時代後期や奈良・平安時代と考えられる事から、これらビットも同様の時期と推定できる。

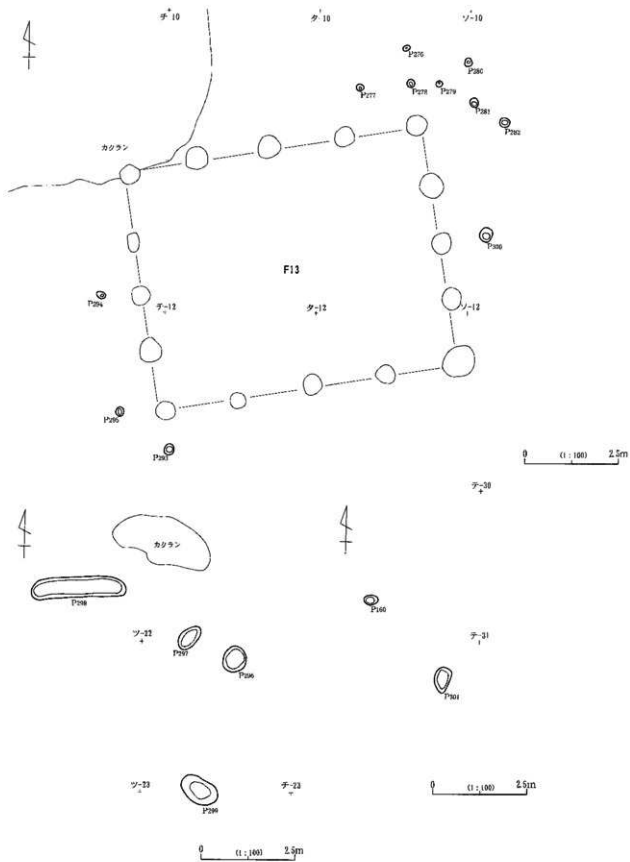
なお、調査区南側にも単独ビットの集中区が見られたが、中央部とは対照的にこちらは竪穴状遺構が多く存在し、所産時期も覆土の状態から中世的と考えられた。



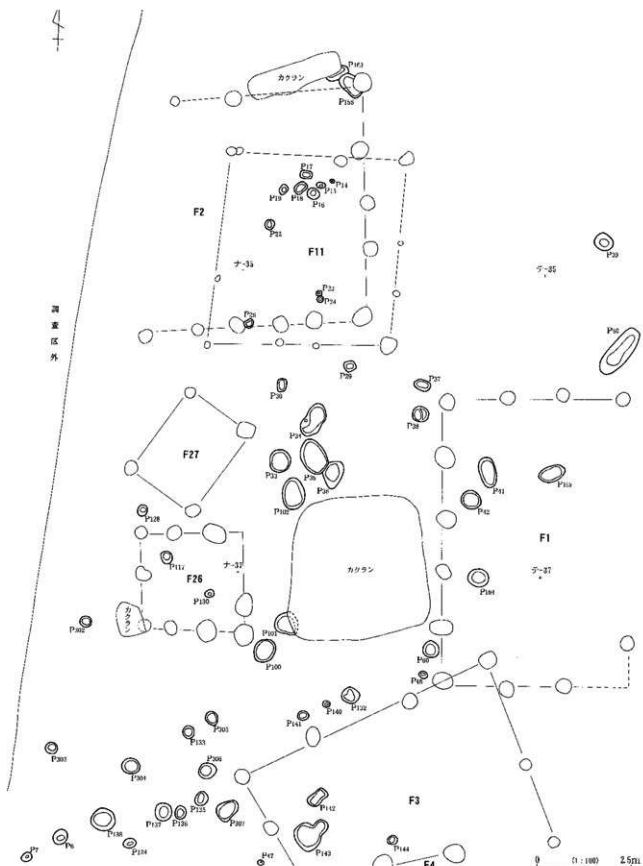
第122図 ビット実測図(1)

No	種別	種類	法 規			成 形・調 整・文 様				備 考	出土位置
			口縁径	底径	高さ	内 面	外 面	所 見			
3	深底器	鉢	13.8	8.0	14.3	ロクロナデ	ロクロナデ	透彫ヘラケズリ		阿曇米蒨 1/4残存	P102
4	七脚器	弁	13.2	5.8	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	鹿彫心図彫糸切り		完全実蒨 4/5残存	P155
5	深底器	鉢	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	平行タタキ		阿曇米蒨 新編1/0残存	P102
No	器 種	素 材	残存率	最大径	最小径	最大厚	最大径	最大厚			出土位置
1	原石	黒輝石	—	5.2	2.2	1.6	22.26	—			P7
2	刀丁	鉄	(2.6)	(1.3)	(0.4)	—	—	木葉が残る			P41

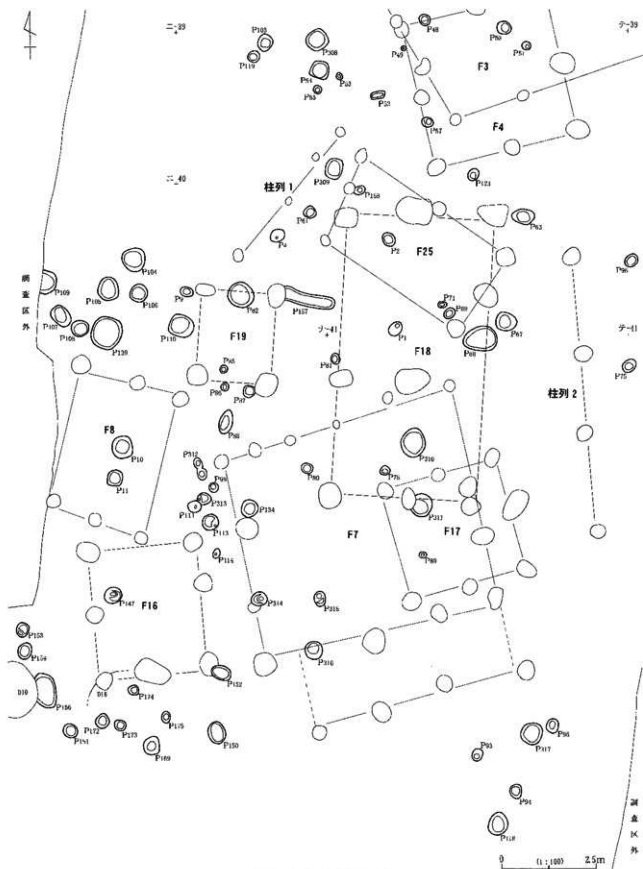
第66表 ビット出土遺物観察表



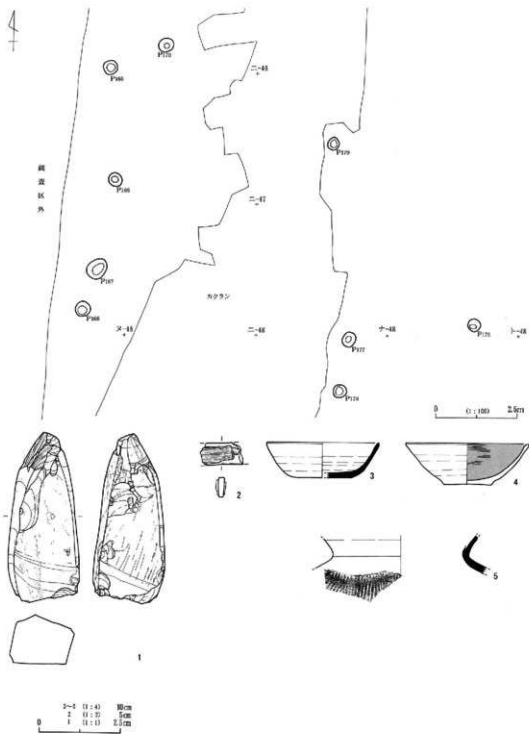
第123図 ビット実測図 (2)



第124号ピット実測図 (3)



第125図 ビット実測図(4)



第126図 ビット実測図 (5) 及び出土遺物実測図



第127号 ピット実測図 (6)

地籍名	検山位置	長径×短径×高さ	形 態	覆 土	出土遺物	巧代	遺物図録
P1	ト-10	38×31×9	楕円形	黒褐色土 (10YR2/3)			
P2	*	39×32×6	*	*			
P3							F25に変更
P4	ナ-40	39×32×17	*	黒褐色土 (10YR2/3)			F19に変更
P5							
P6	ニ-55	38×32×4	円形	黒色土 (10YR2/1)			
P7	*	30×24×16.5	楕円形	*	須恵器片? (平安)、土師器蓋、黒曜石		
P8							F19に変更
P9	ナ-40	32×24×9.5	楕円形	黒色土 (10YR2/1)	土師器蓋 (古物)、土師器片 (内底)		
P10	ニ-41	38×32×18	円形	*			
P11	*	40×38×14	楕円形?	*			
P12							D17に変更
P13							F11に変更
P14	ト-34	12×10×6	円形	黒色土 (10YR2/1)			
P15	*	22×18×7.5	楕円形	*			
P16	*	34×30×3	円形	*			
P17	*	30×20×1.5	長方形	*			
P18	*	32×24×4	楕円形	*			
P19	*	24×22×3	*	*			
P20							F11に変更
P21							*
P22	ト-34	24×24×6	円形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P23	ト-35	16×14×5.5	*	黒色土 (10YR2/1)			
P24	*	14×12×4	*	*			
P25	*	25×22×3.5	下盤円形	*			
P26							F11に変更
P27							*
P28							*
P29	ト-35	30×29×10.5	四角形?	黒色土 (10YR2/1)			
P30	*	30×20×7.5	長方形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P31							F27に変更
P32							*
P33	ト-36	60×54×20	円形	黒色土 (10YR2/1)			
P34	ト-35	90×44×17.5	小盤形	*			
P35	ト-36	94×66×13.5	楕円形	*			
P36	*	74×48×7	下盤形	*			
P37	ナ-35	62×28×20	楕円形	*	土師器蓋・片		
P38	*	40×38×12	円形	*			
P39	ツ-34	38×42×11.5	*	黒色土 (10YR1.7/1)			
P40	ツ-35	142×63×28.5	長楕円形	黒色土 (10YR2/1)			
P41	ナ-36	82×42×7	楕円形	*	土師器片、鉄製品		
P42	*	52×50×6.5	円形	*			
P43							欠番
P44							F11に変更
P45							*
P46	ナ-37	22×20×9	円形	黒褐色土 (10YR2/2)			
P47	ト-38	16×14×4	*	黒色土 (10YR2/1)			
P48	*	30×30×6	*	黒褐色土 (10YR2/2)			
P49	ト-39	14×14×13.5	*	黒色土 (10YR2/1)			
P50	ナ-ト-39	40×34×7.5	楕円形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P51	ナ-39	24×24×10.5	円形	*			
P52	ト-39	38×20×4	長方形	*			
P53	*	18×15×8.5	小盤形	*			
P54	ナ-39	48×46×14.5	楕円?	*			
P55	*	22×22×4	円形	*			
P56							柱列1に変更
P57	ト-39	31×24×8	楕円形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P58							F25に変更
P59							*
P60	ナ-37	46×44×15	円形	黒色土 (10YR2/1)			

第67表 ビット計測表 (1)

P61	ナ-40	32.5×30×17	円形	黒色上 (10YR2/1)			
P62							F25に変更
P63	ナ-40	58×40×9	楕円形	黒色土 (10YR2/1)			
P64							柱列2に変更
P65							F25に変更
P66							F18に変更
P67	ナ-40	36×50×19	楕円形	黒色土 (10YR2/1)			
P68	ナ-40-41	88×66×11	*	*			
P69	ト-40	30×26×15.5	円形	*			
P70							F25に変更
P71	ト-40	22×19×12.5	円形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P72							柱列2に変更
P73							*
P74							*
P75	ナ-41	40×34×13	楕円	黒色土 (10YR1.7/1)	須志器坪 (西転糸切り)		
P76							F17に変更
P77							*
P78	ト-41	26×24×21	円形	黒褐色土 (10YR2/2)			
P79							F17に変更
P80	ナ-41	30×27×15	円形	黒褐色土 (10YR2/2)			
P81	ト-41	28×24×7	*	*			
P82	ナ-40	66×64×20.5	*	黒色土 (10YR2/1)	土師器		
P83							柱列1に変更
P84							*
P85	ナ-41	20×18×9	円形	黒褐色土 (10YR3/2)			
P86	*	22×20×3	*	*			
P87	*	133×28×5.5	*	黒色土 (10YR1.7/1)			
P88	*	62×32×11	楕円形	黒褐色土 (10YR2/2)			
P89	ト-42	18×16×33	円形	*			
P90							F17に変更
P91							欠番
P92							*
P93	ト-43-44	32×26×21	楕円形	黒褐色土 (10YR2/2)			H10を切る
P94	ナ-44	38×32×10.5	*	*			
P95	ナ-43	34×32×15	*	褐色土 (10YR1.7/1)			
P96	ナ-40-41	38×30×18	*	褐色土 (10YR2/1)			
P97							F26に変更
P98	ナ-42	26×24×18.5	円形	褐色土 (10YR1.7/1)			
P99							F26に変更
P100	ト-37	60×50×13.5	楕円形	褐色土 (10YR1.7/1)			
P101	*	56×40×10	小瓶形	*			
P102	ト-36	80×62×13	楕円形	*	須志器坪、須志器礎、土師器武蔵塚 (奈良)		
P103	ナ-39	42×38×11	*	*			
P104	ニ-40	60×58×32	*	黒褐色土 (10YR2/2)	須志器礎、土師器坪		H19を切る
P105	*	60×56×13	円形	*			*
P106	ニ-ヌ-41	48×46×10.5	*	*			
P107	ニ-40	58×43×27.5	楕円形	褐色土 (10YR1.7/1)	土師器		
P108	*	46×42×11	円形	黒褐色土 (10YR2/2)			
P109	*	64×40		*			
P110	ナ-ニ-40	66×58×36	楕円形	褐色土 (10YR1.7/1)	土師器・坪 (古墳)		
P111	ナ-42	34×32×24	円形?	褐色土 (10YR2/1)			
P112							F16に変更
P113	ナ-42	42×42×27	円形	黒褐色土 (10YR2/2)			
P114	*	23×18×27.5	楕円形	*			
P115							F27に変更
P116							F26に変更
P117	ナ-36	34×30×9.5	円形	褐色土 (10YR1.7/1)			
P118	ナ-44	60×52×21	楕円形	*			
P119	ナ-39	28×28×7.5	円形	褐色土 (10YR2/1)			
P120							F7に変更
P121							*

第68表 ビット計測表 (2)

P181	セー7	24×22×14	円形	黒色土			
P182	スー7	36×20×11.5	長方形	*			
P183	ソー7	16×14×10.5	円形	*			
P184	*	16×13×26	*	*			
P185	*	18×16×14.5	楕円形	*			
P186	*	36×26×24(テラス16)	不整形	*			
P187	ソ・タ・8	26×23×37.5	円形	黒褐色土 黄色シルト多含			
P188	ソー8	26×26×13.5	*	黒色土			
P189	ソ・タ・8	44×30×7	楕円形	黒褐色土 黄色シルト多含			
P190	ソー7	14×14×11	円形	黒色土			F13に調査
P191							
P192	ソー8	16×14×10	円形	黒色土			
P193	*	19×18×20.5	*	*			
P194	*	20×18×6.5	*	*			
P195	ソー8・9	24×24×6.5	*	黒褐色土 黄色シルト多含			
P196							F15に調査
P197							F16に調査
P198	タ9	16×16×13	円形	黒色土			
P199	ソー9	20×20×20	*	*			
P200	タ9	22×22×8	*	*	土師器表(古墳)		
P201	ニー72	50×32×7	楕円形	褐灰色土			中世
P202	ニー71	60×(35)×7		*			*
P203	*	64×(30)×27		赤色土			?
P204	*	40×(30)×22	楕円形	黒色土			?
P205	ニ70	58×55×18	円形	褐灰色土	須恵器表、土師器牙・武藏産(平安)		
P206	*	68×64×46	楕円形	灰色土 黄土粒多含	土師器表(古墳)		古代
P207	*	52×50×27.5		褐灰色土			中世
P208	ニー69	34×32×15	円形	*			*
P209	*	48×46×13	*	*	土師器表(武部～行徳)		*
P210	*	35×32×40	*	*	土師器表		*
P211	*	24×24×27.5	*	*	須恵器表		*
P212	*	53×46×32	楕円形	*			*
P213	*	48×42×17.5	*	*	土師器表		*
P214	*	70×70×23	円形	*	土師器表(古墳)・表		* T a 24を切る
P215	*	28×(22)×11		*			*
P216	*	34×32×32	楕円形	*			*
P217	*	48×45×	円形	*			* 石が有り下層不明
P218	*	68×52×14.5	楕円形	*			*
P219	*	50×(42)×30	*	*			*
P220	*	104×46×11	長方形	黒褐色土	須恵器表(武部)、土師器表(平安)		? T a 24を切る
P221	ニ・ヌー70	54×44×11.5	楕円形	黒褐色土 黄土粒多含	土師器表・表(円盤)		古代
P222	*	36×32×9	円形	黒褐色土			*
P223	ニー70	40×40×7	圓筒形	*			
P224	ニー68	24×24×18.5	円形	褐灰色土			中世
P225	*	32×30×16.5	*	*			*
P226	*	34×32×15	*	*			*
P227	*	32×26×15	楕円形	*			*
P228	*	36×33×19	円形	*			*
P229	ニー70	60×56×19.5	不整形	黒褐色土	須恵器表・表、土師器(平安)		古代 石有り
P230	ニー69・70	57×52×26.5	楕円形	*	須恵器表		*
P231							大層
P232	ニ68	50×(40)×28.5		褐灰色土			中世 D24に切られる
P233	ニー70	50×(26)×8		灰色土 黄土粒多含	須恵器表、土師器表(平安)		古代?
P234	ニー68	36×28×17.5	円形	黒褐色土 黄色シルト多含			*
P235	*	36×24×13.5	楕円形	褐灰色土			中世 石有り
P236	*	48×33×6.5	不整形	*	土師器表(古墳)		*
P237	*	34×34×14	四角形?	*	土師器表(古墳)・表		*
P238	*	24×22×16	*	*			*
P239	ニー67	22×22×24	円形	黒褐色土			
P240	ニー67	30×28×11.5	*	褐灰色土			
P241	*	50×46×14.5	*	*			

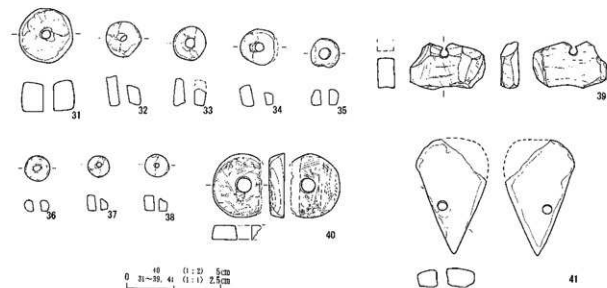
第70表 ビット計測表(4)

P242	ニ 67	24×22×14.5	円形	黒褐色土				古代?
P248	*	28×28×12	*	*				
P241	*	28×28×9	*	褐色土				中世
P245	ヌ-68	(24)×22×18	楕円形?	*				
P246	ニ-68	48×38×25	*	*				中世
P247	ナ-67	28×26×13.5	四角形?	*				*
P248	ニ-68	28×26×11.5	円形	*				*
P249	ニ-67	20×20×12.5	*	*				*
P250								欠番
P251	ニ-65	22×18×17.5	楕円形	赤褐色土 黄色シルトブロック状				
P252	ニ 64	(70)×42×17	楕円形?	褐色土	継多量			中世
P253	ニ-63	56×56×32	円形	褐色土		上層部(内周・内底)・上層部境	*	H31を切る
P254	ニ-62	64×56×29.5	楕円形	*		上層部(内周・内底)・上層部境	*	*
P255								欠番
P256	ニ-62	60×60×22	円形	褐色土				中世 H31を切る
P257	ナ-62	36×30×12.5	楕円形	黒褐色土				*
P258	ニ 62	26×26×22	円形	*				H31を切る
P259	*	26×26×20.5	円形?	*				*
P260	*	23×20×15	楕円形	*				*
P261	*	26×24×12	円形	*				*
P262	ニ-64	(50)×46×20	楕円形?	*				*
P263	ニ・ヌ-62	28×28×21	円形	*				*
P264	ト 53	38×30×28	長方形?	褐色土		上層部境・底		古代
P265	ト-52	50×50×25	円形?	*		上層部境	*	Tn23を切る
P266	*	40×36×18	楕円形	*		土師部境(内底)・武蔵境(平安)	*	*
P267	ト-51・52	58×48×18	*	*	(台座あるが中世とは異なる)			*
P268	ト-51	52×40×39	円形	*				
P269	*	38×30×19	楕円形					
P270	*	36×34×17	円形?			土師部境		
P271	*	(40)×(18)×11						
P272	ター 7	24×20×10	四角形	黒色土				
P273	セ 6	39×38×15	円形	*				
P274	ソ-9	24×20×21	*	*				
P275	*	25×25×12.5	楕円形	*				
P276	ソ-10	18×16×16.5	円形	*				
P277	*	20×20×30.5	*	*				
P278	*	23×18×2.5	楕円形	*				
P279	*	16×15×17.5	円形	黒褐色土 黄色シルト多量				
P280	ソ-10・11	24×18×26	楕円形	*				
P281	*	24×24×22	円形	*				
P282	セ-10	26×24×8	*	*	灰化層			
P283								
P284	セ-8	20×18×16.5	四角形?	黒色土				F15に変更 カタラン内
P285								F15に変更
P286								F15に変更
P287								F15に変更
P288								欠番
P289	セ-9	25×20×6	楕円形	褐色土				
P290	セ-8	34×25×3.5	*	*				
P291								F15に変更
P292	セ-9	30×30×13.5	円形	褐色土				
P293	チ-12・13	26×24×17	*	黒褐色土				
P294	チ 11	22×20×11	楕円形	*	黄色シルト粒多量			
P295	チ-12	24×22×11	円形	*	*			
P296	チ-22	70×60×17	*	黒褐色土(10YR3/3) 黄色ロームブロック多量				
P297	*	70×44×12	楕円形	*	*			
P298	チ-21	230×54×16	*	黒色土(10YR2/1) 褐色土主産				
P299	チ・フ-23	1:0×66×43	*	1) 黒色土(10YR2/1) 褐色土主産 2) 黒褐色土(10YR3/2) 黄色ロームブロック多量				

第71表 ビット計測表 (5)

遺構名	検出位置	長さ×幅×高さ	形 状	層 土	出土遺物	時代	遺構関係
P300	セー11	38×34×16	円形	褐色土			
P301	セー31	70×40×12	楕円形				
P302	ニー37・38	32×30×6	円形	黒色土 (10YR2/1) 少含	ロームブロック		
P303	ニー38	30×30×7	*	*	*		
P304	ナー38	48×10×10.5	楕円形	*	*		
P305	ナー37	36×33×13	円形	*	*		
P306	ナー39	43×40×17	*	*	*		
P307	ナー38・39	62×42×9.5	不整形				
P308	ナー39	58×56×6.5	円形				
P309	トー39	52×48×7.5	楕円形				
P310	トー41	74×60×18	*	黒色土 (10YR2/1) ローム粒子混含			
P311	トー42	64×(48)×23	*	黒色土 (10YR2/1)			F18に知られる
P312	ナー41	62×20×19					
P313	ナー42	36×32×21	円形				
P314	*	37×30×16.5	楕円形	黒色土 (10YR2/1) ローム粒子混含			
P315	*	41×38×33	*	*	*		
P316	ナー43	45×45×20	円形	黒色土 (10YR2/1)			
P317	ナー43	56×54×15	円形*	*			
P318	ナー66	(70)×(30)×10					

第72表 ビット計測表 (6)



第128回 遺構外出土遺物実測図 (1)

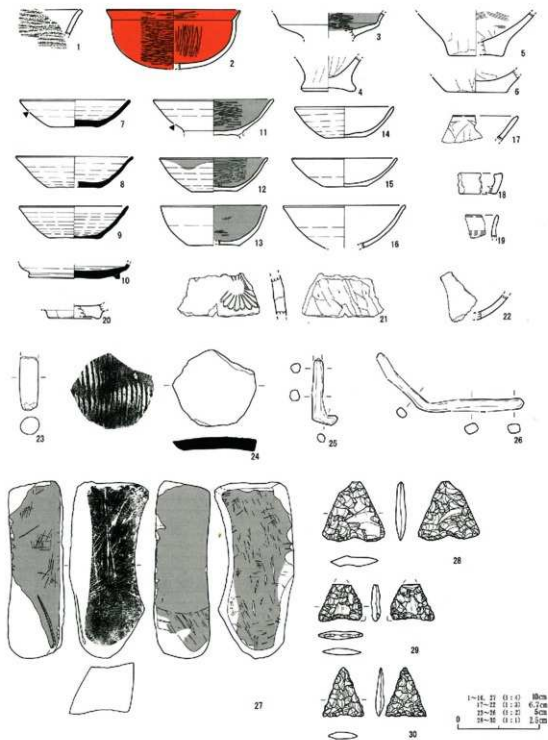
第7節 遺構外出土遺物 (第128・129図)

本遺跡からは多量の遺構外遺物が出土した。特に調査区中央部分については、遺構確認面が水田耕作上直下の黒色土中にあり、確認面を黄色のシルト層まで下げるにより多量の遺物が検出時に出土している。また、カクラン部分についても、削平された土の中には周辺部の住居址の遺物が混入した状態であった。

図示した遺物は石製品も含め、41点を示した。1は弥生前期の土器片と考えられる。外面にやや粗い細密条痕を施している。2は古墳時代中期に属する土師器坏で、やや大型の物である。内外面赤彩を施す。3は土師器高坏である。7~10は須恵器坏と高台坏で、いずれも底部回転系切り離しである。14~16は土師器坏である。17は龍泉窯系の青磁碗の口縁部である。18は近世在地窯の前山焼と考えられる。21は古瀬戸の瓶子で、菊のスタンプが押されている。22は伊万里染付碗の底部である。23は土製品であるが孔とかはなく、用途不明である。24は須恵器甕を転用した土製円盤で、外面に織き目が残る。25と26は鉄製品で釘と考えられる。27は砥石、28~30は石鎌である。31~38は白玉、40は石製紡車、39は石製模造品の剣のようだが不確定で有孔品、41は剣形と考えられる。

取	種別	群種	法		成形・製法・文様			備考	出土位置	
			口部形	底面形	内	外	底			
1	弥生土器	浅鉢	-	-			二字文	破片実測	チ17	
2	土師器	坏	15.4	(17.3)	ミガキ 赤色塗彩	ミガキ 赤色塗彩		同製実測 1/2残存	チ60	
3	土師器	高坏	-	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ		同製実測 坏部1/4残存	チ48	
4	土師器	甕	-	6.8	-	ヘラナデ	ヘラナデ	同製実測	Z	
5	土師器	甕	-	6.8	ハケ目	ヘラナデ	ヘラナデ	同製実測 底部1/2残存	チ53	
6	土師器	甕	-	7.7	-	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測 底部2/3残存	チ48	
7	須恵器	坏	13.6	5.6	3.4	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底部回転系切り 火摩	完全実測 4/5残存	チ54	
8	須恵器	坏	14.4	6.2	(3.8)	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底部回転系切り 火摩	同製実測 1/3残存	チ53	
9	須恵器	坏	13.5	6.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転系切り	完全実測	チ47	
10	須恵器	高台坏	-	11.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転系切り 外周ヘラナズリ→付合行	同製実測 底部1/4残存	チ54	
11	土師器	坏	14.8	-	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 高台付	完全実測	チ48	
12	土師器	坏	13.2	5.2	4.2	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転系切り→ 口部黒色処理	完全実測	チ47	
13	土師器	坏	13.0	5.4	(4.9)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底部回転系切り	同製実測 1/2残存	チ48	
14	土師器	坏	12.2	4.7	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラナズリ	完全実測 4/3残存	チ46	
15	土師器	坏	13.0	5.4	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラナズリ	同製実測 1/3残存	チ31	
16	土師器	坏	15.0	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	同製実測 口縁1/6残存	チ48	
17	青磁	碗	-	-	(2.4)	旋輪	旋輪 厚分文	破片実測 龍泉 13C 口縁	チ56	
18	陶器	鉢・皿	-	-	(1.9)	旋輪	旋輪	破片実測 前山 近世 口縁	Z	
19	陶器	刀・杖	-	-	(2.0)	旋輪	旋輪 下部ロクロにより溝 毛彫	破片実測 前山 18C後半 口縁	チ18	
20	陶器	鉄胎碗	-	4.7	(1.3)	ロクロナデ 全面旋輪	底部回転系ヘラナズリ 脚部一部旋輪	同製実測 前山 近世 口縁	チ75	
21	陶器	瓶子	-	-	(3.8)	ねんどひも上からヘナデ	菊スタンプ 全面旋輪	破片実測 古瀬戸 手磨式 13C末~14C前	チ17	
22	陶器	染付碗	-	-	(2.5)	旋輪	旋輪	破片実測 伊万里 足利町近 郊5号 18C前~19C前	チ32	
23	土製品	不明	3.2	径1.1	-			重量5.14g	チ53	
24	須恵器	円盤	径5.1	-	0.7	ナデ		破片実測	Z	
25	釘	鉄				最大長	最大径	重量	所 注	
26	釘	鉄				(4.1)	(0.7)		チ60	
27	砥石	砂岩				10.3	0.9	0.6	チ49	
28	石鎌	砂岩				21.5	9.6	7.0	1727.53	拓本
29	石鎌	黒曜石				(1.1)	(1.4)	(0.3)	(0.39)	正・裏と下前面に磨滅した面。上部・右側先部欠削
30	石鎌	黒曜石				1.5	1.5	0.31	0.27	廣野区北境
31	白玉	礫石	定形			0.80	1.40	0.24	2.88	チ52
32	白玉	礫石	不定形			0.80	0.90	0.25	0.86	チ53
33	白玉	礫石				0.70	0.90	0.25	0.75	チ49
34	白玉	礫石				0.60	0.90	0.30	0.62	チ53
35	白玉	礫石	定形			0.44	0.74	0.28	0.34	チ16
36	白玉	礫石	不定形			0.30	0.70	0.20	0.23	チ54
37	白玉	礫石	不定形			0.40	0.55	0.12	0.16	チ50
38	白玉	礫石	不定形			0.40	0.60	0.15	0.21	チ50
39	石製模造品	礫石				1.2	2.0	0.4	1.79	孔径0.2cm
40	石製紡車	礫石				径3.4	孔0.8	0.8	12.56	チ49
41	石製模造品(剣)	礫石				3.1	(1.9)	0.55	3.36	廣野区北境

第73表 遺構外出土遺物観察表



第129图 遗物出土文物实例图(2)



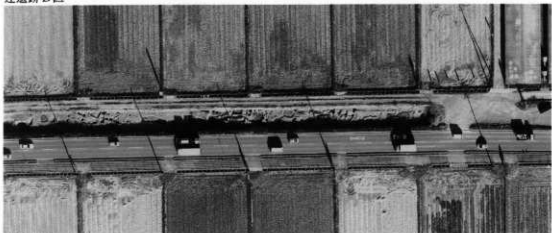
市道遺跡Ⅲ・辻遺跡航空写真（上が北で、南北にのびるのが国道141号で、東西に交差するのは国道142号）



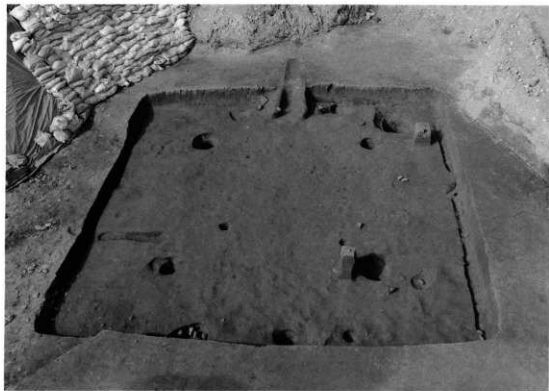
市道遺跡Ⅲ



辻遺跡B区



徳田遺跡ⅡC区



H1号住居址全景



H1号住居址掘り方全景



H1号住居址遺物出土状況



H1号住居址カマド全景



H1号住居址カマド掘り方全景



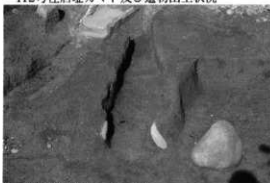
H2号住居址全景



H2号住居址掘り方全景



H2号住居址カマド及び遺物出土状況



H2号住居址カマド全景



H2号住居址カマド掘り方



H2号住居址遺物出土状況



H2号住居址カマド構築材



H3号住居址全景



H3号住居址掘り方全景



H3号住居址遺物出土状況



H3号住居址カマド全景



H3号住居址カマド掘り方



H4号住居址全景



H4号住居址掘り方全景



H4号住居址カマド全景



H5号住居址全景



H6号住居址全景



H7号住居址全景



H7号住居址掘り方



H7号住居址遺物出土状況



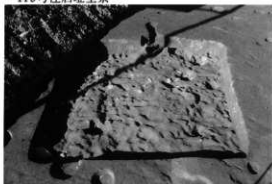
H7号住居址カマド全景



H7号住居址カマド掘り方



H9号住居址全景



H9号住居址掘り方全景



H9号住居址遺物出土状況



H9号住居址カマド全景



H9号住居址カマド掘り方



H8号住居址遺物出土状況



H8号住居址全景



H8号住居址掘り方



市道遺跡Ⅲ調査風景（南から）



H8号住居址カマド脇遺物出土状況



H8号住居址カマド全景



H8号住居址カマド全景



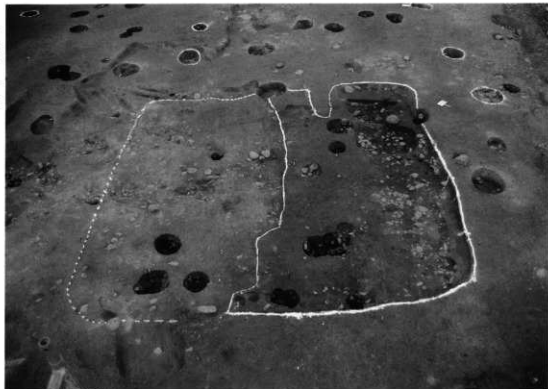
H8号住居址カマド掘り方



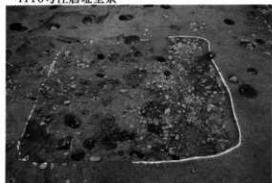
H8号住居址カマド構築材



H8号住居址埋裏出土状況



H10号住居址全景



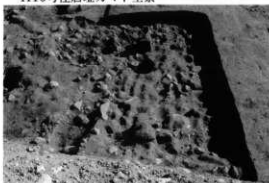
H10号住居址掘り方全景



H10号住居址カマド全景



H12号住居址全景



H12号住居址掘り方全景



H11号住居址全景



H11号住居址掘り方全景



H11号住居址カマド全景



H13号住居址全景



H13号住居址遺物出土状況



H14号住居址全景



H14号住居址掘り方全景



H14号住居址カマド全景



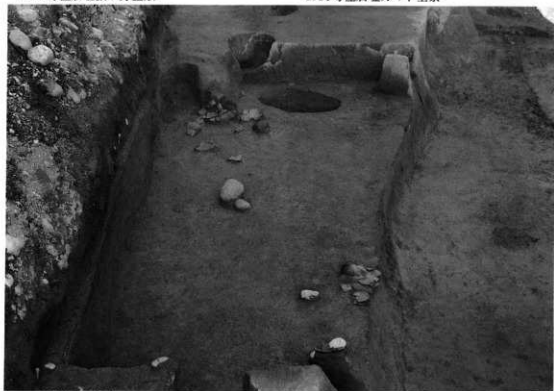
H14号住居址カマド廻り方



H15号住居址廻り方全景



H15号住居址カマド全景



H15号住居址全景



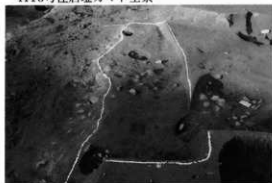
H16号住居址全景



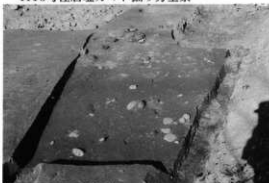
H16号住居址カマド全景



H16号住居址カマド掘り方全景



H17号住居址全景



H18号住居址全景



H19号住居址全景



H19号住居址掘り方全景



H19号住居址遺物出土状況



H19号住居址カマド全景



H19号住居址カマド掘り方全景



H20号住居址全景



H21号住居址全景



H20号住居址掘り方全景



H21号住居址掘り方全景



H22号住居址全景



H22号住居址カマド全景



H22号住居址遺物出土状況



H24号住居址遺物出土状況



H24号住居址全景



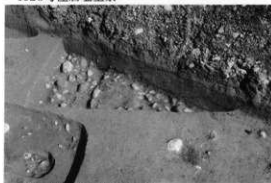
H23号住居址全景



H23号住居址掘り方全景



H25号住居址全景



H25号住居址掘り方全景



H25号住居址遺物出土状況



H26号住居址全景



H26号住居址掘り方全景



H26号住居址カマド全景



H27号住居址全景



H27号住居址掘り方全景



H27号住居址炭化物出土状況



H27号住居址遺物出土状況



H27号住居址遺物出土状況



H27号住居址カマド全景



H27号住居址カマド掘り方全景



H27号住居址カマド煙道断ち割り状況



H27号住居址カマド煙道断ち割り（覆土堆積状況）



H29号住居址全景



H29号住居址掘り方全景



H29号住居址No.1カマド全景



H29号住居址No.2カマド全景



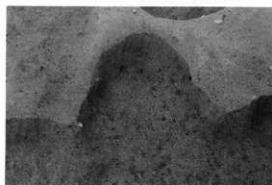
H29号住居址No.2カマド掘り方全景



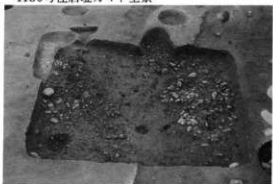
H30号住居址全景



H30号住居址カマド全景



H30号住居址カマド掘り方



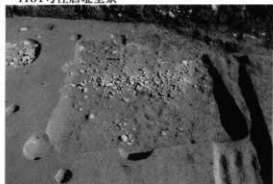
H30号住居址掘り方全景



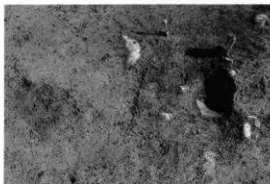
H28号住居址全景



H31号住居址全景



H31号住居址掘り方全景



H32号住居址カマド全景



H31号住居址遺物出土状況



H32号住居址遺物出土状況



H32号住居址全景



H32号住居址掘り方全景



H33号住居址全景



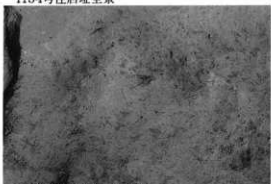
H33号住居址カマド全景



H33号住居址遺物出土状況



H34号住居址全景



H34号住居址カマド全景



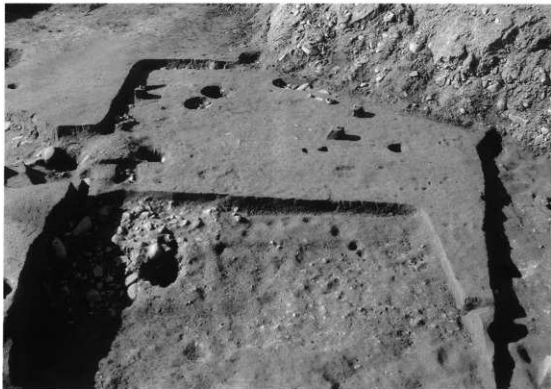
H34号住居址遺物出土状況



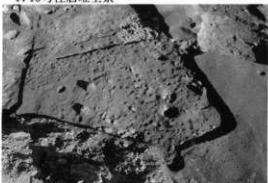
H35号住居址全景



H36号住居址遺物出土状況



H40号住居址全景



H40号住居址掘り方全景



H40号住居址遺物出土状況



H40号住居址遺物出土状況



H40号住居址遺物出土状況



H37号住居址全景



H37号住居址カマド全景



H38号住居址全景



H39号住居址カマド全景



H39号住居址全景



H39号住居址掘り方全景



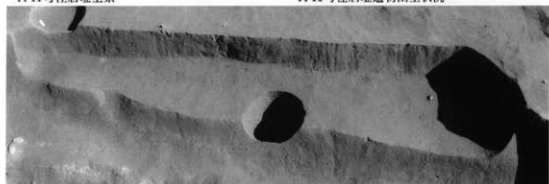
H39号住居址遺物出土状況



H41号住居址全景



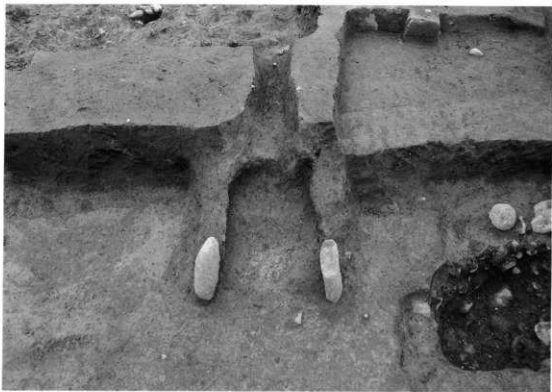
H41号住居址遺物出土状況



H42号住居址全景



H43号住居址全景



H43号住居址№1カマド全景



H43号住居址掘り方全景



H43号住居址№2カマド全景



H44号住居址カマド全景



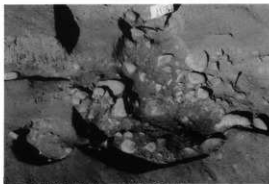
H44号住居址カマド掘り方全景



H45号住居址全景



H45号住居址カマド全景



H45号住居址カマド掘り方全景



H45号住居址遺物出土状況



H47号住居址遺物出土状況



H47号住居址全景



H47号住居址掘り方



H46号住居址全景



H46号住居址掘り方全景



H46号住居址カマド全景



H46号住居址カマド煙道部



H46号住居址カマド煙道確認状況



H46号住居址カマド煙道確認状況



H46号住居址カマド掘り方



H46号住居址カマド断ち割り状況



H46号住居址礎出土状況



H46号住居址遺物出土状況



H48号住居址全景



H48号住居址掘り方全景



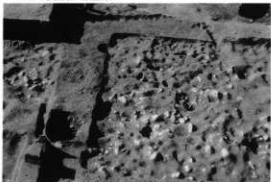
H48号住居址遺物出土状況



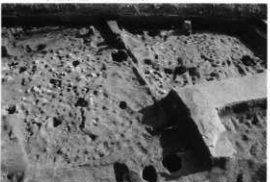
H49号住居址全景



H49号住居址カマド全景



H50号住居址全景



H50号住居址掘り方全景



H52号住居址全景



H52号住居址掘り方全景



H52号住居址カマド全景



H52号住居址カマド補検出状況



H52号住居址カマド掘り方全景



H51号住居址全景



H51号住居址掘り方全景



H51号住居址カマド全景



H51号住居址遺物出土状況



H51号住居址カマド掘り方全景



H51号住居址炭化材検出状況



H51号住居址炭化材検出状況



H51号住居址炭化材検出状況



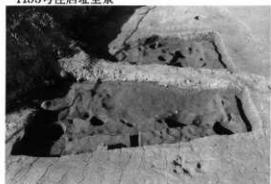
H51号住居址炭化材堆積状況



H51号住居址炭化材堆積状況



H53号住居址全景



H53号住居址掘り方全景



H53号住居址カマド全景



H53号住居址遺物出土状況



H53号住居址遺物出土状況



H54号住居址全景



H54号住居址掘り方全景



H54号住居址カマド全景



H54号住居址遺物出土状況



H54号住居址遺物出土状況



H54号住居址遺物出土状況



H54号住居址焼土検出状況



H54号住居址カマド掘り方全景



H54号住居址カマド煙道完掘状況



H54号住居址カマド煙道完掘状況 (外側より)



H54号住居址入り口張り出しビット



H54号住居址遺物出土状況



H55号住居址全景



H55号住居址遺物出土状況



H55号住居址掘り方全景



H55号住居址遺物出土状況



H56号住居址全景



H56号住居址掘り方全景



H56号住居址遺物出土状況



H56号住居址カマド全景



H56号住居址カマド掘り方全景



H57号住居址全景 (拡張後)



H57号住居址全景 (拡張前)



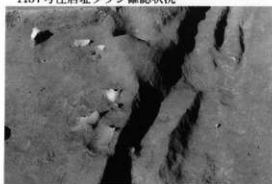
H57号住居址掘り方全景



H57号住居址プラン確認状況



H57号住居址カマド全景



H57号住居址遺物出土状況



H57号住居址入り口張り出しピット



H58号住居址全景



H58号住居址掘り方全景



H58号住居址カマド周辺遺物出土状況



H58号住居址カマド全景



H58号住居址カマド構築材検出状況



H58号住居址カマド掘り方全景



H58号住居址遺物出土状況



H59号住居址全景



H60号住居址全景



H59号住居址掘り方検出状況



H60号住居址掘り方全景



市道遺跡Ⅲ調査区全景（中央部から南部分を北より望む）



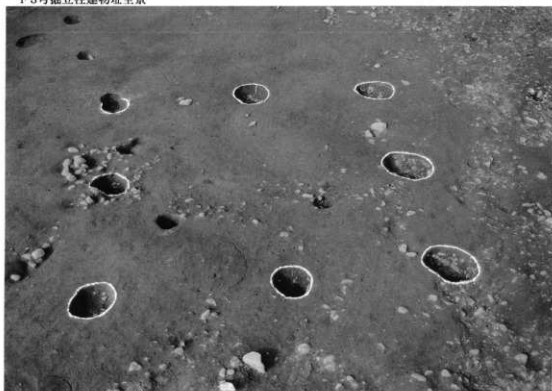
F1号掘立柱建物址全景



F2号掘立柱建物址全景



F3号掘立柱建物址全景



F4号掘立柱建物址全景



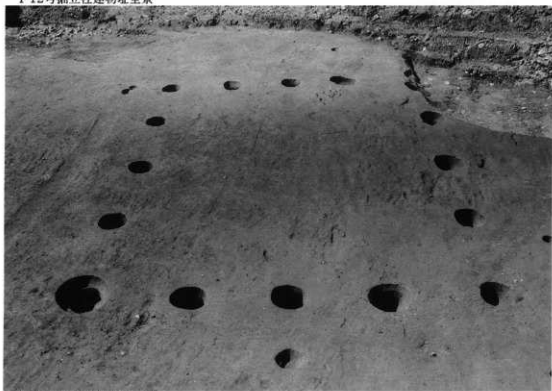
F7号掘立柱建物址全景



F8号掘立柱建物址全景



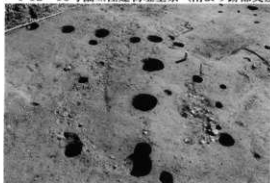
F12号掘立柱建物址全景



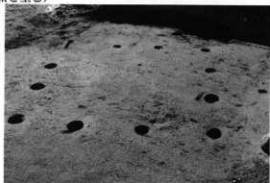
F13号掘立柱建物址全景



F12・13号掘立柱建物址全景（南より跡部交差点を望む）



F15号掘立柱建物址全景



F14号掘立柱建物址全景



3号柱列址全景



F21号掘立柱建物址全景



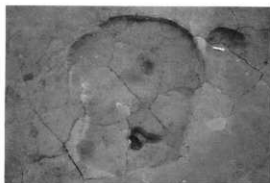
F11号掘立柱建物址全景



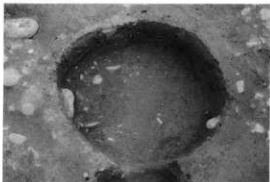
F15号掘立柱建物址全景



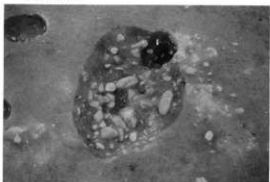
D1号土坑



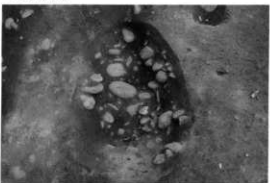
D2号土坑



D4号土坑



D5号土坑



D6号土坑



D7号土坑



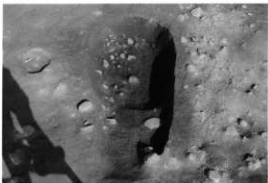
D8号土坑



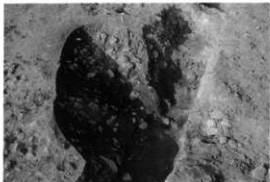
D9号土坑



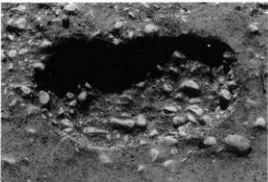
D10号土坑



D12号土坑



D13号土坑



D14号土坑



D15号土坑



D15号土坑遺物出土狀況



D16号土坑



D18号土坑



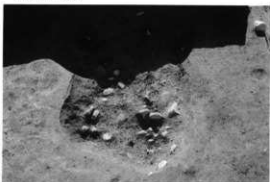
D20号土坑



D21号土坑



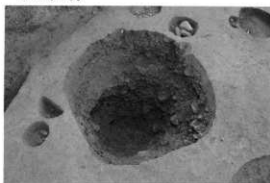
D22号土坑



D23号土坑



D24号土坑セクション



D24号土坑



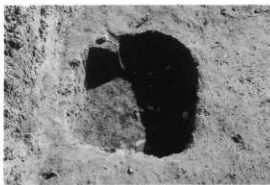
D25号土坑



D25号土坑獣骨検出状況



D26号土坑



D27号土坑



D28号土坑



D29号土坑



D30号土坑



D31号土坑



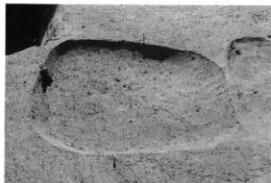
D32号土坑



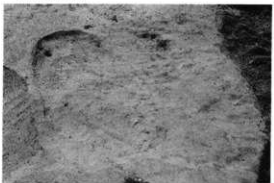
D33号土坑



D34号土坑



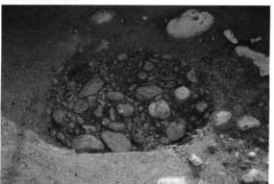
D35号土坑



D36号土坑



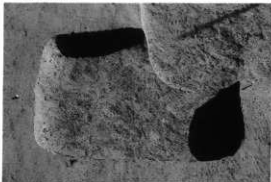
D40号土坑



D39号土坑



D39号土坑遗物出土状况



D41号土坑



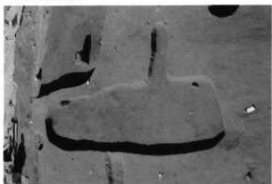
D43号土坑



D42号土坑



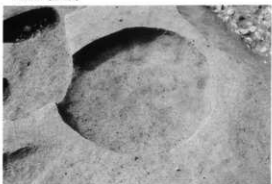
D42号土坑遺物出土状況



D45号土坑



D48号土坑



D49号土坑



D50号土坑



D51号土坑



D52号土坑



D53号土坑



D54号土坑



D56号土坑



D57号土坑



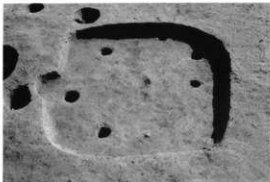
市道遺跡Ⅲ（跡部交差点より南を望む）



T a 1号竪穴状遺構



T a 20号竪穴状遺構



T a 21号竪穴状遺構



T a 22号竪穴状遺構



T a 23号竪穴状遺構



T a 23号竪穴状遺構遺物出土状況



T a 24号竪穴状遺構



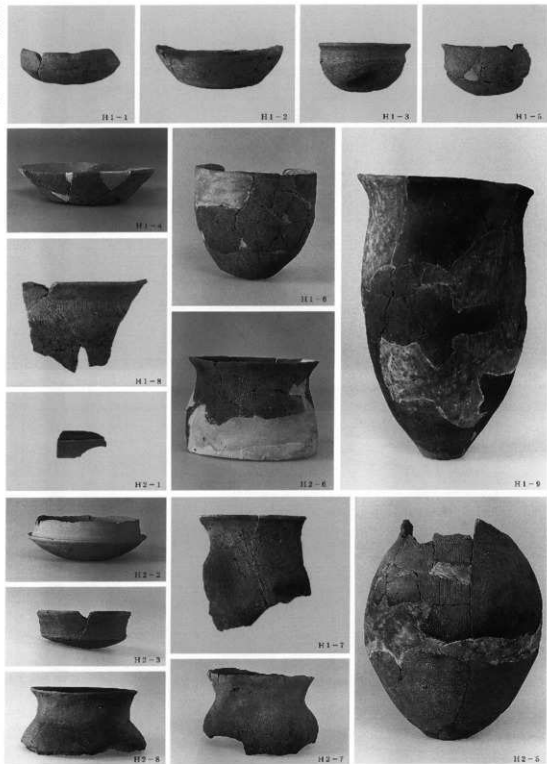
T a 25号竪穴状遺構

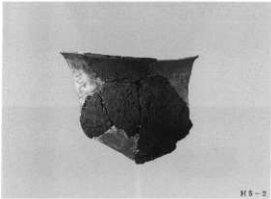


M21号溝状遺構



M23号溝状遺構











H8-14



H8-15



H8-16



H8-17



H8-19



H8-20



H8-27



H8-28



H8-28



H9-4



H9-3



H9-6



H9-1



H9-2



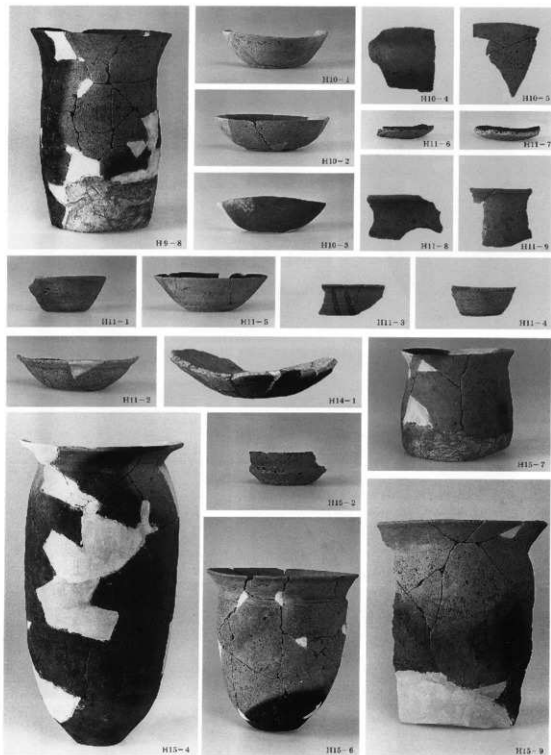
H9-7

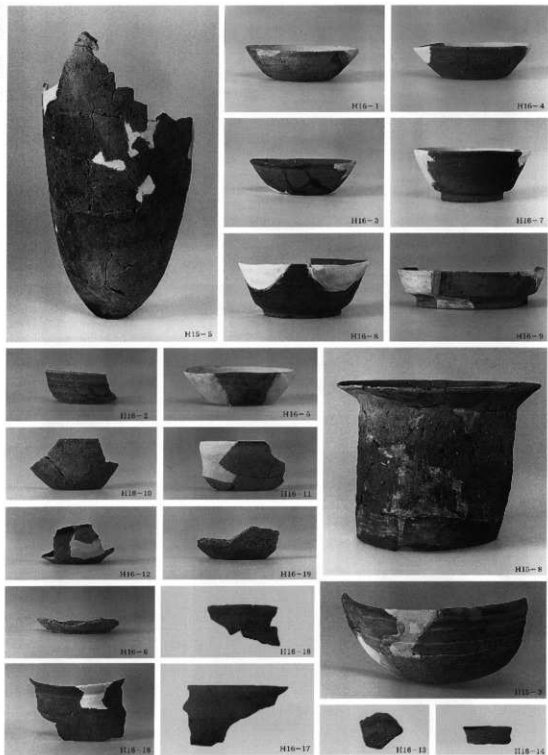


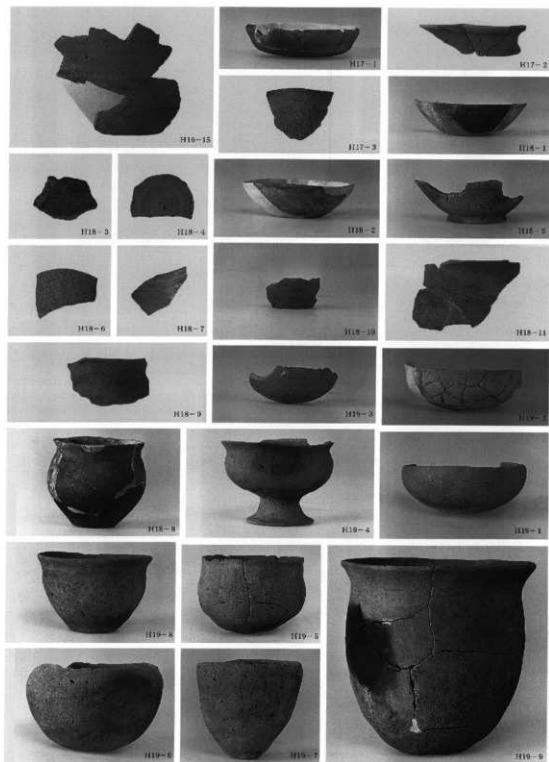
H9-5

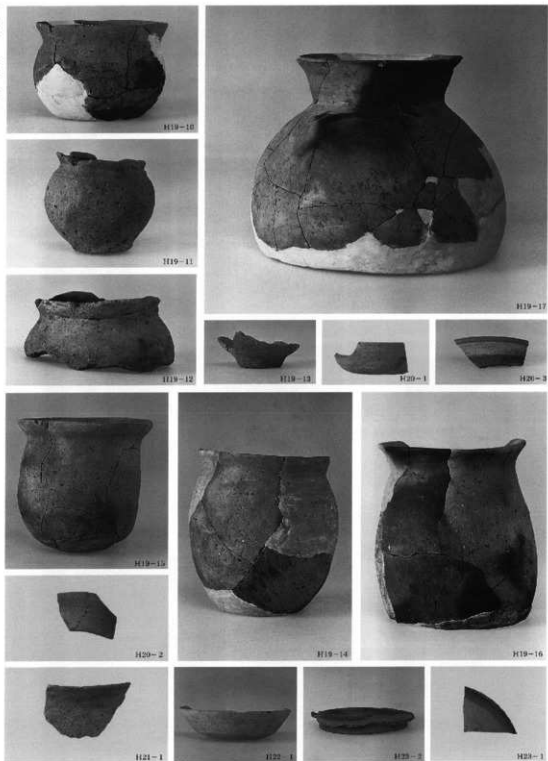


H9-9

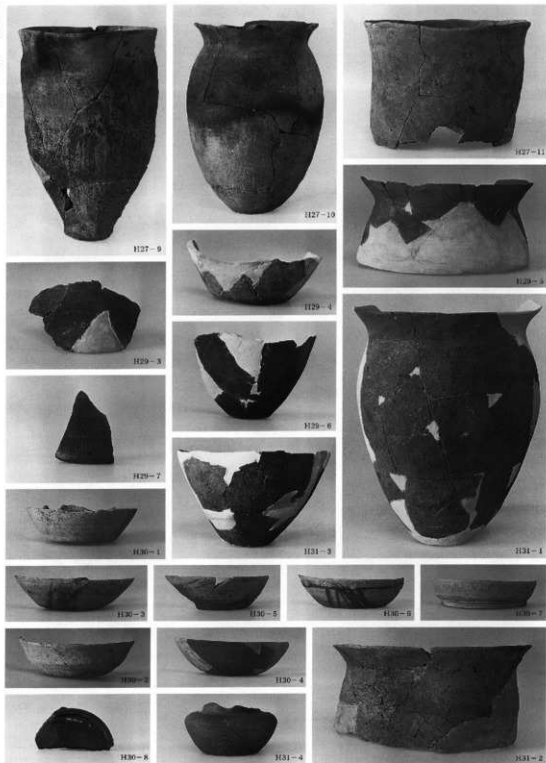




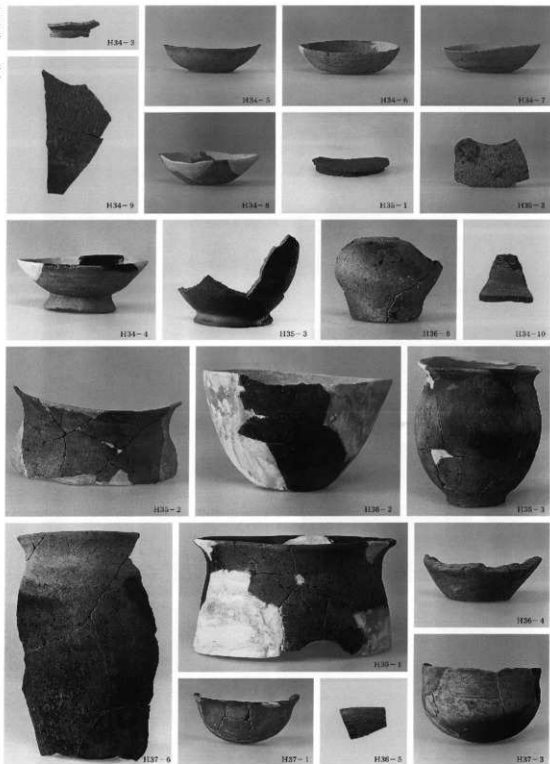


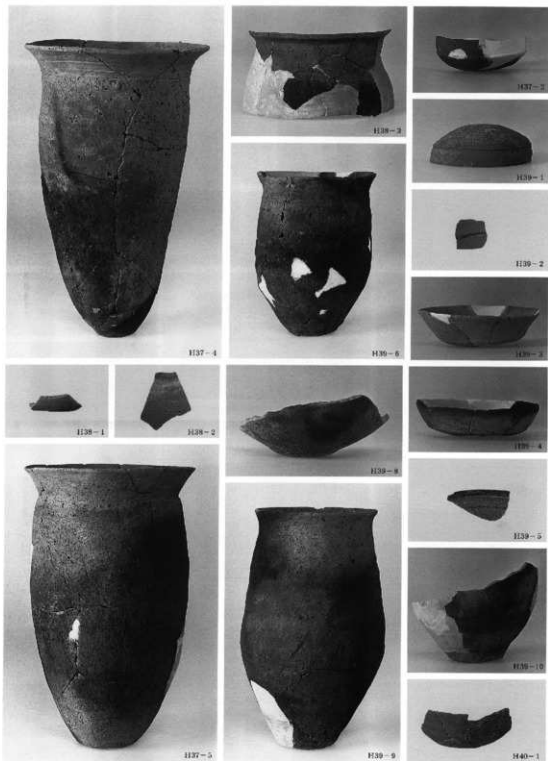




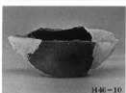


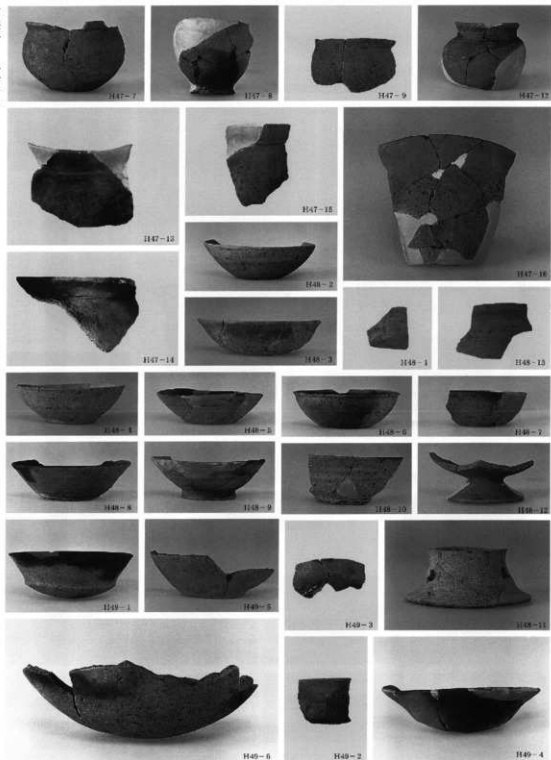


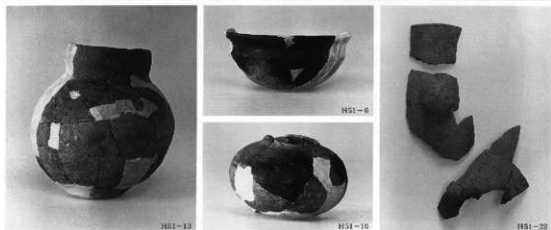
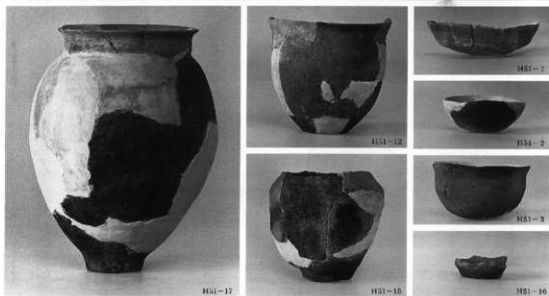
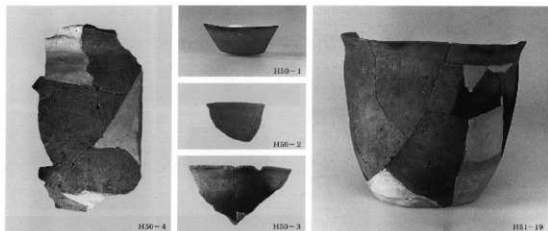
















H52-8



H52-2



H52-3



H52-5



H52-6



H52-7



H52-4



H52-1



H54-1



H54-0



H53-5



H54-2



H53-5



H54-3



H54-4



H54-7



H54-5



H54-8



H54-11



H54-9

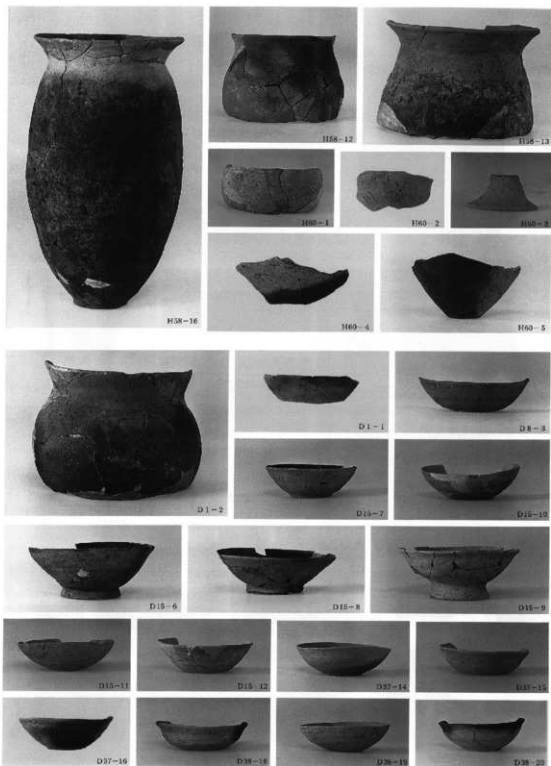


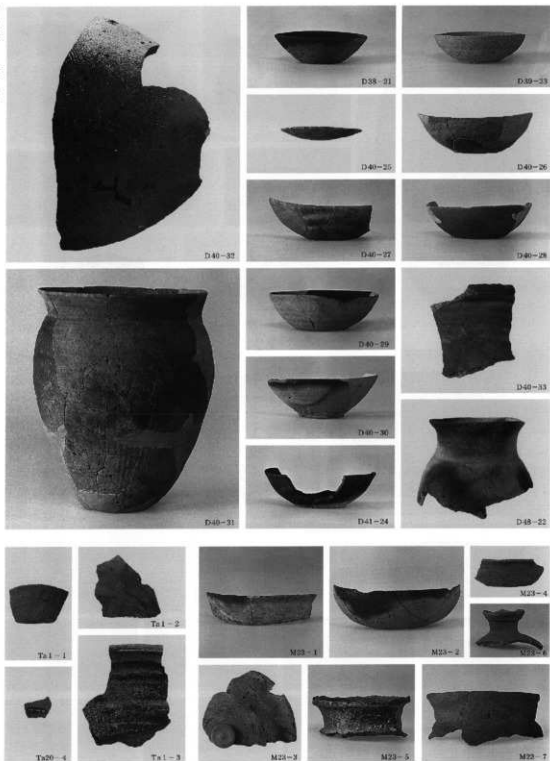
H54-13

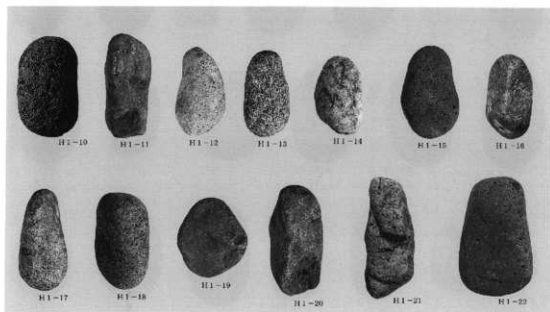
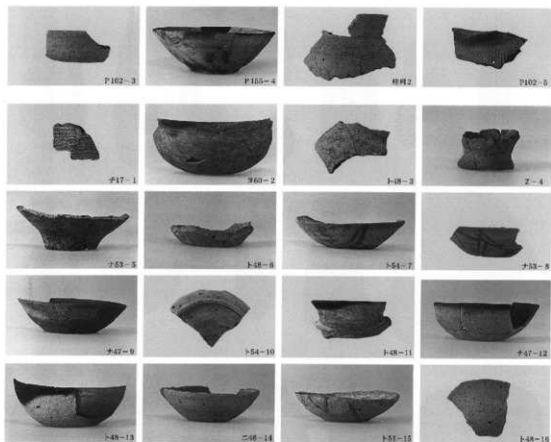


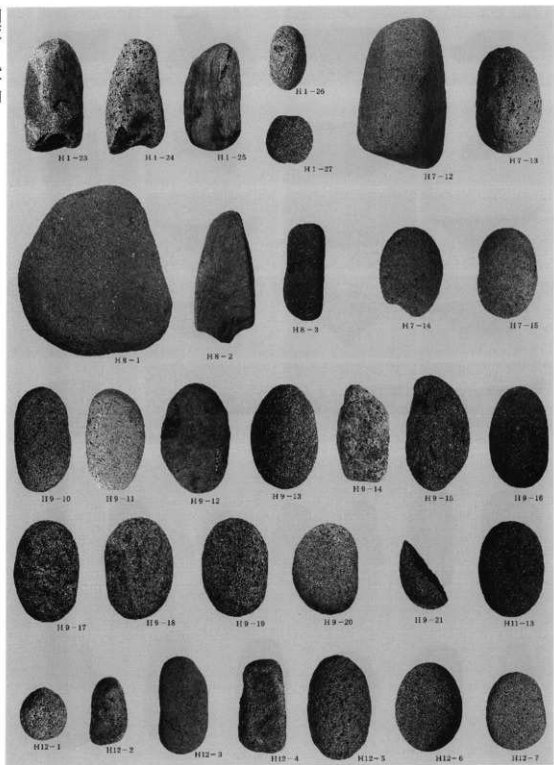


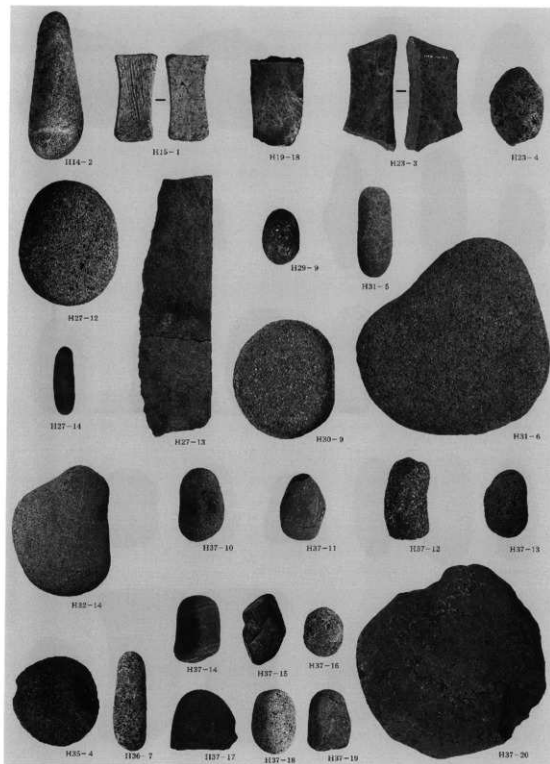


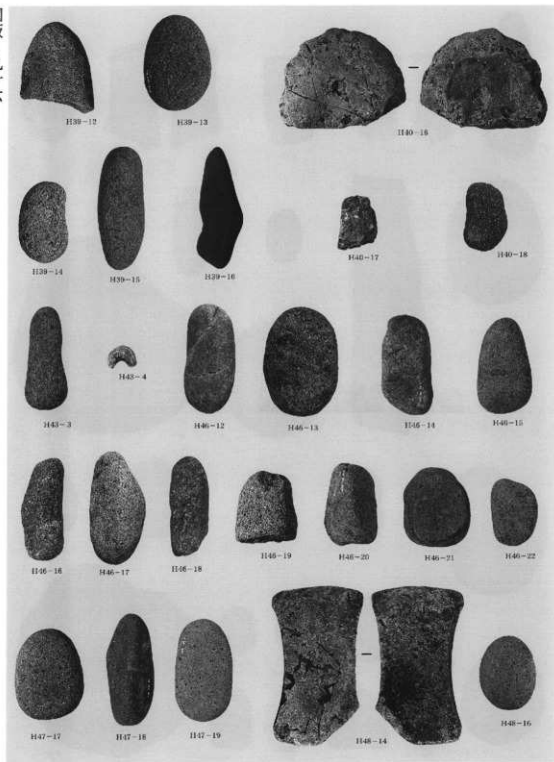


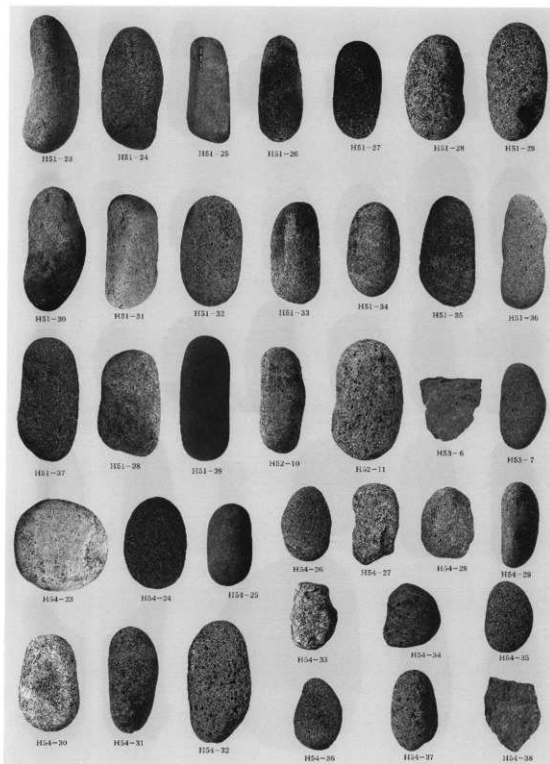


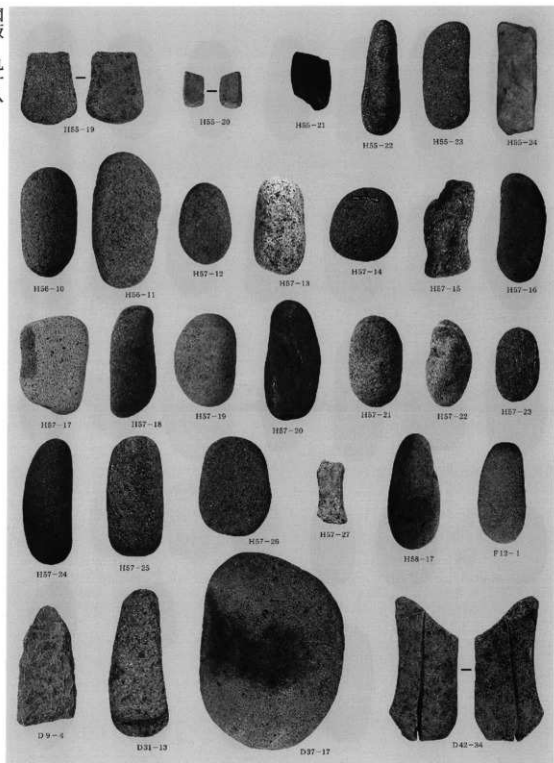


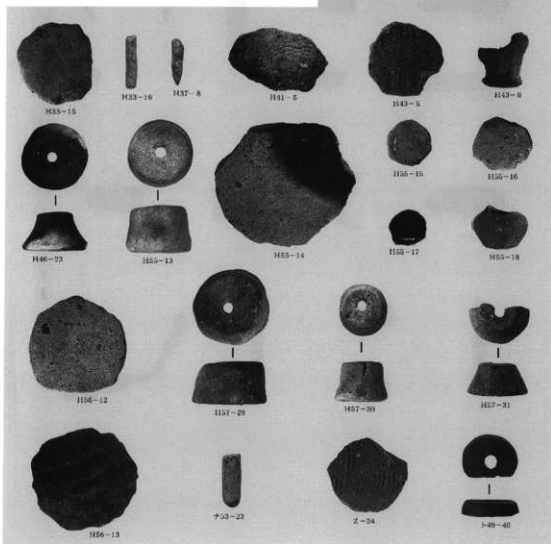
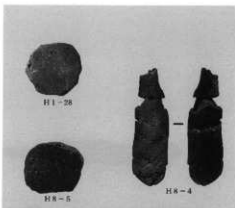
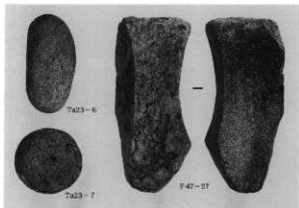


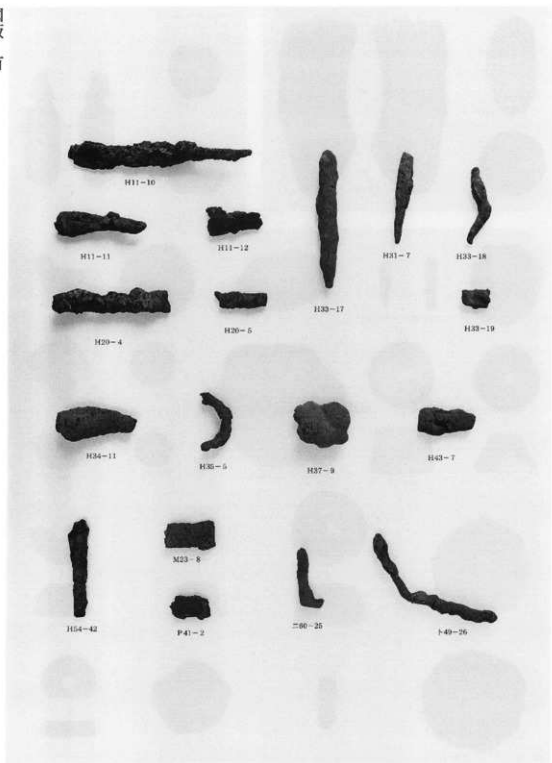


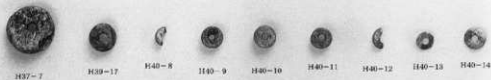
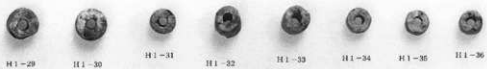


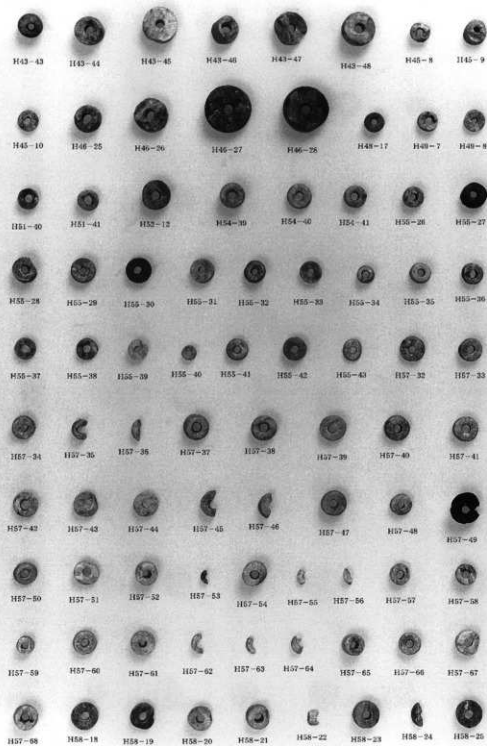














H90-15



H43-49



H43-50



H43-51



H43-52



H45-7



H46-24



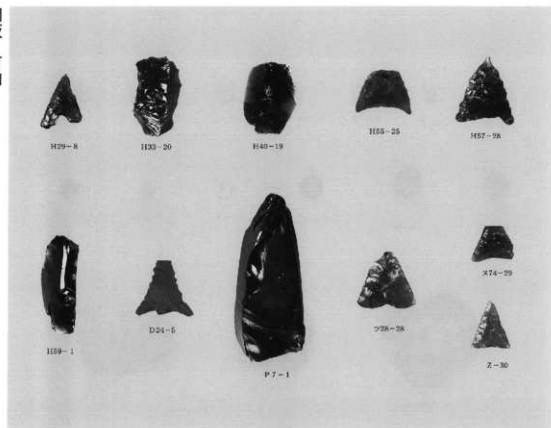
H60-8



X73-39



Z-41



辻 遺 跡

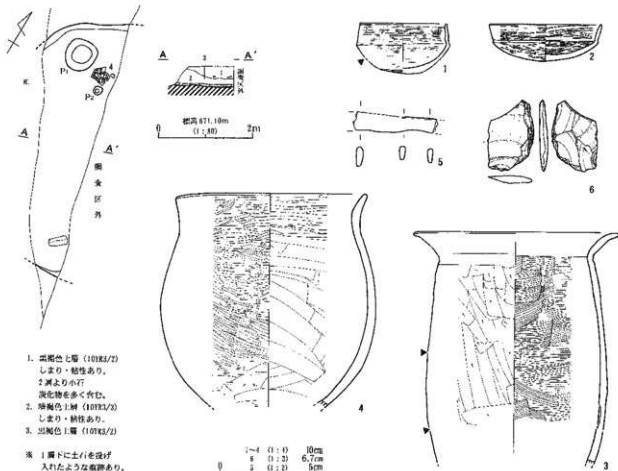
第四章 辻遺跡

第1節 竪穴住居址

(1) 1号住居址 (第130図, 写真図版3)

本住居址は、調査区A区であるD-16.17Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、西側がM1号溝状遺構により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.83m (残存)・南壁0.56m (残存)で、壁高さは南壁で最大31cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址検出部分の床面積は5.89m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれ、1層下層には炭化物と土器が投棄されたような状態であった。床は全体に軟質で貼床が2~11cmの厚さで貼られていた。ピットは2カ所確認され、P1は検出位置よ



第130図 H1号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	種類	法基			形状・測量・文様				備考	出土位置
			口内径	口外径	高さ	内	外	底	底		
1	土器類	鉢	9.3	1.5	3.3	ミガキ	口縁ヨコナデ	底面ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	厚紙張り	0区
2	土器類	鉢	12.0	11.2	3.0	ミガキ	口縁ヨコナデ	底面ヘラケズリ→ミガキ	図輪実測		1区
3	土師類	甕	21.7	-	(21.5)	胴部ヘラケ目→口縁ヨコナデ	胴部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ		完全実測		2区
4	土師類	甕	20.3	-	(22.6)	胴部ヘラケ目→口縁ミガキ	口縁ヨコナデ	胴部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測		13cm 2区
5a	磁種	土	底	底	底	底	底	底			出土位置
6	刀子	鉄	(1.5)	(1.0)	(0.4)						1区
7	打製石斧	黒色泥岩	(5.6)	(3.6)	(0.7)	(13.58)					1区

第74表 H1号住居址出土遺物観察表

り貯蔵穴の可能性がある。規模はP1が径70cm・深さ19cm、P2が径21cm・深さ18cmを測る。

出土遺物は覆土中のものが多かった。1と2は土師器坏であり、いずれも須恵器蓋模倣のタイプであるが形態は異なる。3と4は土師器甕で、3は外面縦方向の削り、内面ハケ目の残るナデを施す。4は外面と口縁部内面は丁寧なミガキが施され、頭部の屈曲も少ない。5は鉄製品で月子の柄の部分と考えられる。6は打製石斧の欠損品である。これらの遺物より本址は6世紀後半に位置づけられる。

(2) 2号住居址 (第131図, 写真図版三)

本住居址は、調査区A区であるC-20.21、D-20.21Grに位置する。残存状態は住居址南東コーナーと西側が調査区外となる。H3号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。

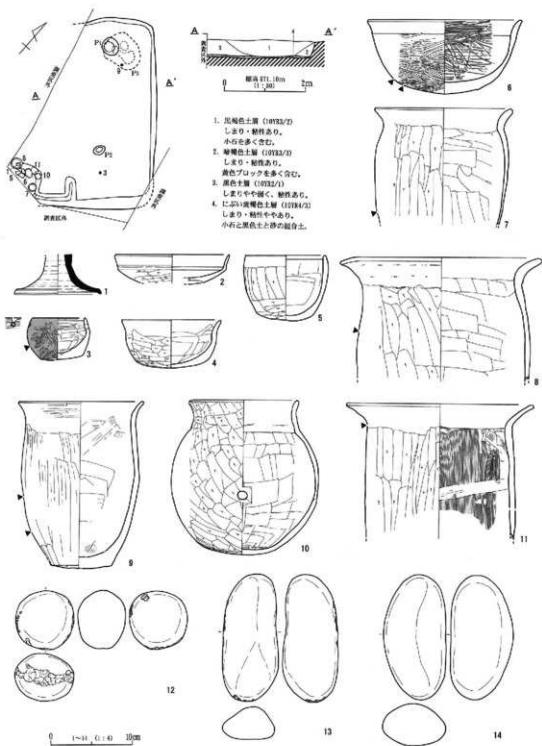
形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁1.66m(検出)・南壁2.82m(検出)・東壁4.24mで、壁高さは東壁北寄りで最大36cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で11.18㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に2~5cmの厚さで貼られていた。壁溝は南壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は約28cm・深さ4~9cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め3カ所確認され、P1・P2が支柱穴と考えられる。規模はP1が径43cm・深さ14cm、P2が径31cm・深さ10cm、P3が径104cm・深さ27cm

出土遺物は覆土中と南壁寄りの壁溝が大きく広がった所からまとまって出土した(写真図版三)。1は須恵器高坏の脚部で無窓と考えられる。図示した8の土師器甕の中に入れたような状態で出土した。2は土師器坏で床面より出土した。3は小型の鉢でミニチュア品のような形態である。外面のみ黒色処理を施し、口縁部に焼成前の穿孔がある。4は土師器の坏としたが鉢としても良い形態である。5は土師器鉢で上器の密集区から出土した。6は大型の土師器鉢で丁寧なミガキが施されている。7~11は土師器甕である。7と8と11はいずれも胴部下半が欠損しているが、いずれも上器密集区に置かれたような状態で出土した。7は頸部が短いタイプの甕で口縁部が肥厚している。8と11は口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプの甕で、8は内面がナデ、11は細かなハケ目の残る縦方向のナデが施されている。9は小型の土師器甕で口縁部の屈曲が緩やかなタイプの甕である。口縁部に僅かなミガキが施されている。10は小型の土師器甕で、口縁部はあまり屈曲せず、胴部は大きく張る、いわゆる胴張り甕のタイプである。外面は斜め方向のヘラケズリを施し、内面は横方向のヘラナデを施す。また、胴部に外面より焼成後の穿孔が施されている。12~14は磨石または磨石と敷き石の両方の使用痕が確認できる石器である。

本址はこれらの出土遺物から、7世紀前半に位置づけられると考える。

No.	種別	器種	位置		形状・調製・文様			備考	出土位置
			口縁部	底面	内	外	面		
1	須恵器	高坏	—	10.6	4.9	口縁コナデ	口縁コナデ	完全実測	10cm
2	土師器	坏	14.0	13.3	(3.4)	みこみ部ナデ→口縁コナデ	口縁コナデ→底縁ヘラケズリ	西側実測 厚鉢	仏
3	土師器	鉢	6.6	5.2	5.1	口縁コナデ→胴部ヘラナデ →ミガキ	口縁→胴部ミガキ→黒色処理 底縁ヘラケズリ	完全実測 焼成前穿孔 口縁部に2カ所あり	3cm
4	土師器	坏	12.2	8.6	5.9	口縁コナデ→胴部ヘラナデ	口縁コナデ→底縁ヘラケズリ	完全実測 蓋のみあり	掘り方
5	土師器	鉢	10.0	7.0	8.0	口縁コナデ→胴部ヘラナデ	口縁コナデ→胴部ヘラケズリ→底縁ヘラケズリ	完全実測	0cm
6	土師器	鉢	19.0	—	9.0	ミガキ	胴部ヘラケズリ→口縁コナデ→ミガキ	完全実測	1.5cm
7	土師器	甕	17.1	—	(14.2)	口縁コナデ→胴部ヘラナデ	口縁コナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	~7cm
8	土師器	甕	24.8	—	(15.4)	口縁コナデ→胴部ヘラナデ	口縁コナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	~1cm
9	土師器	甕	15.4	7.4	20.5	口縁コナデ→胴部ヘラナデ→口縁ミガキ	口縁コナデ→胴部ヘラケズリ→底縁ヘラケズリ	完全実測	0cm
10	土師器	甕	13.5	8.8	18.9	口縁コナデ→胴部ヘラナデ	口縁コナデ→底縁ヘラケズリ→胴部ヘラケズリ	完全実測 焼成後穿孔	2cm
11	土師器	甕	23.1	—	(16.5)	口縁コナデ→胴部ハケ目	口縁コナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	~2.5~0cm 床
No.	種別	器種	形状	長さ	最大径	重量	所見	出土位置	
12	磨石	輝石安山岩		7.1	7.2	5.9	447.36		
13	磨・敷石	輝石安山岩		15.6	8.8	4.0	626.29		
14	磨・敷石	砂結凝灰岩		15.5	7.8	5.2	774.14		II 6f

第75表 H2号住居址出土遺物観察表



第131図 H2号住居址及び出土土遺物実測図

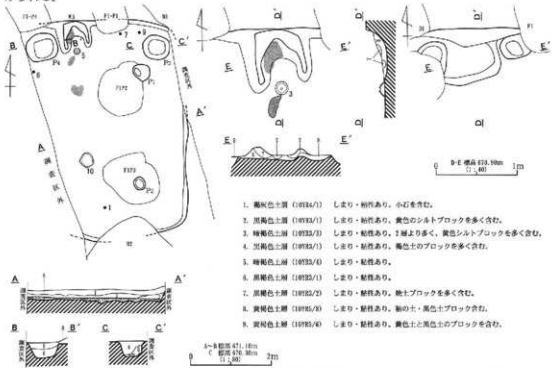
(3) H3号住居址 (第132・133図, 写真図版四)

本住居址は、調査地点A区であるC-19.20、D-19.20Grに位置する。残存状態は北東コーナーと西側が調査区域外となる。H2号住居址、F1号掘立柱建物址と重複関係にあり本址の方が古い。

形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.66m(検出)・南壁2.40m(検出)・東壁4.79m(検出)で、壁高さは北壁東よりで最大26cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は15.84㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床はカマド前が特に硬く、貼床は全体に3~12cmの厚さで貼られていた。ピットは4カ所確認され、P1とP2が支柱穴、P3とP4は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径45cm・深さ49cm、P2が径31cm・深さ57cm、P3が長軸65cm・短軸60cm・深さ39cm、P4が長軸78cm・短軸65cm・深さ40cmを測る。

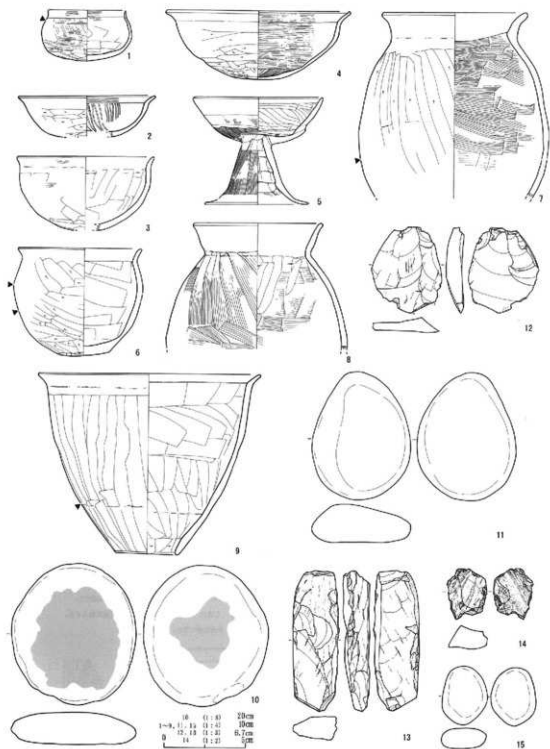
カマドは北壁に検出され袖部等が検出された。住居址壁より飛び出すような煙道部は検出されず、顕著な火床部も確認できなかった。燃焼部には図示した3の土師器高坏の坏部が伏せた状態で検出され、遺構確認時に出土した脚部と接合しほぼ完形となったことから、この高坏が支脚の機能をしていたと考えられる。カマドの掘り方は火床部と袖部分が一段低くなる掘り方であった。

本址からの出土遺物は比較的多く、特に床面上からの出土遺物が多かった。1は器高があることから碗とした。口縁部が直立するタイプでミガキが施されている。2は土師器坏でカマド部分から出土した。口縁部が外反するタイプで、内面に暗文風の強いミガキがある。3と4は土師器鉢である。4は大きさに比べて器厚が薄く、内面に丁寧なミガキが施されている。口唇部には面取りが施されている。5は土師器高坏でカマド燃焼部より出土した。坏部に僅かに稜が残ることからいわゆる「屈折脚高坏」に含まれるタイプと考えられる。脚部と坏部下半はハケ目の残るナゲが施されている。6は小型の土師器甕、7と8は土師器の甕で口縁部はくの字に屈折し、尚かつ8の口縁部は中央部分が肥厚するタイプのものである。9は土師器甕で単孔のものである。床面状から出土し、内外面ヘラナゲを施す。10は台石と考えられ、表裏に顕著な磨り面が残る。本址はこれらの出土遺物より、5世紀後半に位置づけられる。



1. 褐色土層 (10134/1) しまり・粘りあり。小石を含む。
2. 黒褐色土層 (10133/1) しまり・粘りあり。黄色のシルトブロックを多く含む。
3. 暗褐色土層 (10132/3) しまり・粘りあり。2層より多く、黄色シルトブロックを多く含む。
4. 黒褐色土層 (10132/1) しまり・粘りあり。褐色土のブロックを多く含む。
5. 暗褐色土層 (10132/0) しまり・粘りあり。
6. 黒褐色土層 (10132/1) しまり・粘りあり。
7. 黒褐色土層 (10132/2) しまり・粘りあり。褐色ブロックを多く含む。
8. 黄褐色土層 (10135/20) しまり・粘りあり。礫の土・黒色土ブロックを含む。
9. 黄褐色土層 (10135/40) しまり・粘りあり。黄色土と黒色土のブロックを含む。

第132図 H3号住居址実測図



第133图 H13号住居址出土器物实测图

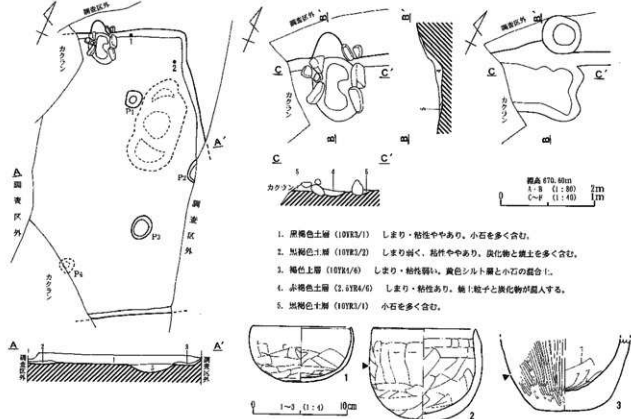
No.	種別	器種	法量		形状・調査・文様		備考	出土位置	
			口縁径(単位)	底径(単位)	内面	外面			
1	土師器	甗	9.6	-	6.2	口縁ヨコナデ→ミガキ 体部へみこみ部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→ミガキ 体部ヘラナデ→ミガキ	完全実測	3cm
2	土師器	杯	16.8	-	(5.0)	ヨコナデ→短文	口縁ヨコナデ→体部ヘラクスリ	図転実測	I区 カマド
3	土師器	鉢	16.8	-	9.0	口縁ヨコナデ→みこみ部ヘラナデ→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	図転実測 厚紙	貯蔵穴2
4	土師器	鉢	22.6	4.5	8.4	ミガキ	口縁ヨコナデ→体部→底部ヘラクスリ	完全実測 厚紙	→34cm 貯蔵穴
5	土師器	高杯	16.0	12.8	13.2	ヘラナデ(工具痕)→口縁ヨコナデ 胴部ヨコナデ→胴部ヘラナデ	胴部ヨコナデ→ヘラナデ(工具痕有り) →口縁ヨコナデ	完全実測	3cm
6	土師器	小形甗	15.2	6.3	13.2	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラクスリ→ 底部ヘラクスリ	完全実測	3cm I区
7	土師器	甗	18.0	-	22.6	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ(工具痕)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラクスリ	図転実測	1cm 貯蔵穴2 カマド I・E区
8	土師器	甗	16.0	-	15.4	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ(工具痕)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ(工具痕)	図転実測	0~1cm I・II区
9	土師器	甗	27.3	8.0	22.2	胴部ヘラナデ→胴下部ヘラクスリ →口縁ヨコナデ	胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ	完全実測	3cm II区
No.	器種	素材	残存率	最大径	最大厚	重量	所見	出土位置	
10	奇石	輝石安山岩	34.5	30.6	8.0	13180.00	形・表面にすり面	3cm	
11	燧	輝石安山岩	15.8	12.2	4.9	1255.37		底面	
12	銅片	砂質砂岩	7.8	6.5	1.6	68.34	銅片	II区	
13	打製石斧	千枚岩	12.8	4.3	2.4	185.38		貯蔵穴	
14	原石	黒曜石	3.0	2.4	1.5	10.43		I区	
15	燧	輝石安山岩	7.2	5.6	2.7	187.18		I区	

第76表 H3号住居址出土遺物観察表

(4) H4号住居址 (第134図, 写真図版5)

本住居址は、調査地点A区であるE-11.12.13、F-11.12.13Grに位置する。残存状態は南東コーナ一側と西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.33m(検出)・南壁



第134図 H4号住居址及び出土遺物実測図

1.75m (検出)・東壁5.92m (検出)で、壁高さは北壁側で最大27cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で16.35㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「敲き床」であった。ピットは掘り方時を含め4カ所確認され、P1とP3が支柱穴と考えられる。規模はP1が径38cm・深さ29cm、P2が径45cm・深さ9cm、P3が径52cm・深さ11cm、P4が径30cm・深さ16cmを測る。また、本址は掘り方時に床下土坑的な掘り込みが確認された。形態は楕円形で、規模は長軸2.00m・短軸0.98m・深さ34cmを測る。

カマドは北壁中央に検出され、煙道部と袖部は残存していたが、火床部は良好な形で確認されなかった。煙道部の規模は長さ39cmで、袖は河原石によって構築されていた。

本址からの出土遺物は少なく3点を図示した。1は土師器坏で、口縁部は内湾するタイプのものである。2は土師器鉢で口縁部は直立し、器厚が厚い。3は土師器甕の底部と考えられる。

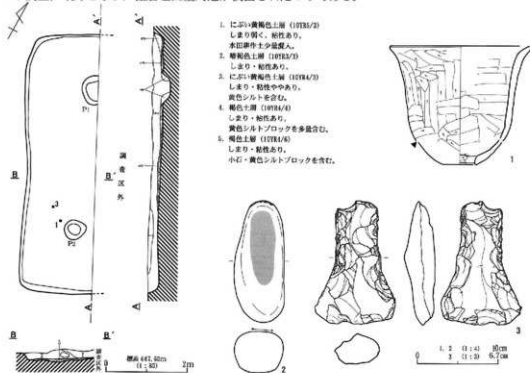
本址はこれらの出土遺物から不確実ではあるが、5世紀後半に位置づけられると考える。

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			口縁径	底径	内面	外面			
1	土師器	坏	10.6	—	4.5	ヘラナデ	ヘラナデ	回転文様 磨滅	Dca
2	土師器	鉢	11.0	—	0.8	口縁コシナデ・胴部ヘラナデ	口縁コシナデ・胴部ヘラナデ	完全素焼	Dm 1区
3	土師器	甕	—	6.3	(2.7)	ヘラナデ	ミガキ	完全素焼	D4k

第77表 H4号住居址出土遺物観察表

(5) H5号住居址 (第135図, 写真図版5)

本住居址は、調査地点B区であるノ-53、ハ-52.53Grに位置する。残存状態は住居址の東側ほとんどが調査区域外となり、住居址西壁周辺が検出されたのみである。



第135図 H5号住居址及び出土遺物実測図

形態は方形と考えられる。規模は北壁1.55m(検出)・南壁1.74m(検出)・西壁5.95mで、壁高さは南壁で最大27cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で10.18㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は軟質であったが、貼床は1~8cmの厚さで貼られていた。

ピットは2箇所確認された。P1とP2は主柱穴と考えられる。規模はP1が径73cm・深さ25cm、P2が径55cm・深さ29cmを測る。

出土遺物は覆土中から少量出土した。1は土師器甕で小型のタイプであり、単孔である。2は磨石と敲き石の両方の使用痕跡を少く石器で、3は打製石斧である。抉りのあるタイプである。

本址からの出土遺物は少なく所産時期は不確定であるが、図示した甕の形態より古墳時代後期に位置づけられると考えられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様					備考	出土位置	
			口径	底径	高	内面	外面	底厚	重	重量			
1	土師器	甕	17.4	4.2	14.5	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ					図形実測 焼成前穿孔 模範	Ⅱ区
No.	器種	素材	残存率	軸大径	軸小径	重	重量	所見		出土位置			
2	磨石・敲石	磨石安山岩		14.9	5.2	5.5	770.00	上溝部に敲打破 広面に巻り縞		Ⅱ区			
3	打製石斧	砂岩の片		11.3	7.1	2.8	183.48			Ⅱ区			

第78表 H5号住居址出土遺物観察表

(6) H6号住居址 (第136図, 写真図版八)

本住居址は、調査地点B区北側であるヨ-18.19、ラ-18.19Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。

形態は正方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.72m(検出)・南壁2.60m(検出)・西壁3.95mで、壁高さは南壁中央で最大52cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の主軸方位はN-15°Wを測る。住居址の床面積は検出部分で10.50㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であった。貼床は1~12cmの厚みで貼られている。ピットは3カ所確認され、P1~P2が主柱穴と考えられる。規模はP1が径30cm・深さ20cm、P2が径27cm・深さ28cm、P3が径21cm・深さ13cmを測る。

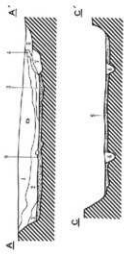
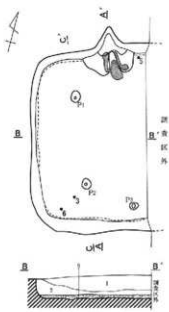
カマドは北壁側に造られており、煙道部と袖部が確認された。煙道部は住居址壁よりもあまり飛び出さないタイプで、袖は黄色の粘土で構築されていた。火床部は良く焼けており、上面硬化化していた。焼上の厚みは11cmを測る。

本址からの出土遺物は比較的少なく、図示した遺物も6点に止まった。1は土師器杯の口縁部で口縁部に段を有する。2は土師器鉢、3と4は土師器の高杯で、全体の部位が残っていた。4は内面黒色処理されている。この2点の高杯はいずれも使用のためか、表面の摩耗が進んでいた。5は土師器甕の底部と考えられるが、丸底である。6は敲石である。

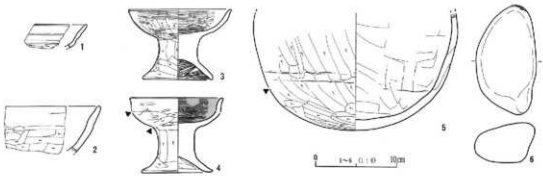
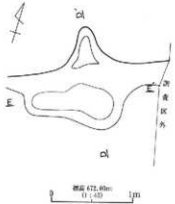
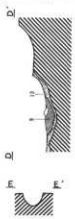
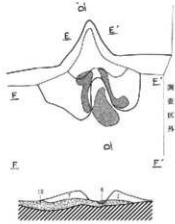
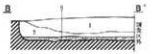
本址はこれらの出土遺物より7世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様					備考	出土位置	
			口径	底径	高	内面	外面	底厚	重	重量			
1	土師器	杯	-	-	-	口コナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ					破片実測	Ⅱ区
2	土師器	鉢	-	-	-	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ(7共収)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ					破片実測	Ⅱ区
3	土師器	高杯	12.6	8.6	8.6	ミガキ 黒褐色ミガキ	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→ミガキ					完全実測 磨滅	4.5cm
4	土師器	高杯	11.1	8.8	9.2	ミガキ→黒色処理 黒部ヘラケズリ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ 筒部ヘラケズリ→胴部ヨコナデ→ミガキ					完全実測 磨滅	Ⅱ区
5	土師器	甕	-	-	(14.4)	ヘラケズリ	ヘラケズリ					完全実測	0cm
No.	器種	素材	残存率	軸大径	軸小径	重	重量	所見		出土位置			
6	敲石	磨石安山岩		13.3	7.5	3.4	810.00	上溝部に敲打破		0cm			

第79表 H6号住居址出土遺物観察表



1. 黒褐色土層 (10YR5/1) しまり・粘性あり。
2. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロック多く含む。
3. 黒褐色土層 (10YR5/1) しまり・粘性あり。
炭化物・灰土含む。
4. 黒褐色土層 (10YR5/1) 粘性あり。灰土ブロック
多く含む。
5. 暗褐色土層 (10YR5/2) しまり・粘性あり。
黄色シルトと
黒色シルトブロックを混入する。
6. 黒褐色土層 (10YR5/1) しまり・粘性あり。
灰色シルトブロックと
黄色シルトブロック含む。
7. にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり。
黄色シルト含む。
8. 赤褐色土層 (2.5YR5/3) しまりあり。粘性ややあり。
上面よく崩れている。(大塚前)
9. 褐色土層 (10YR4/3) しまり・粘性あり。
灰色シルトブロックと
黄色シルトブロックを含む。
10. 黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロックを含む。

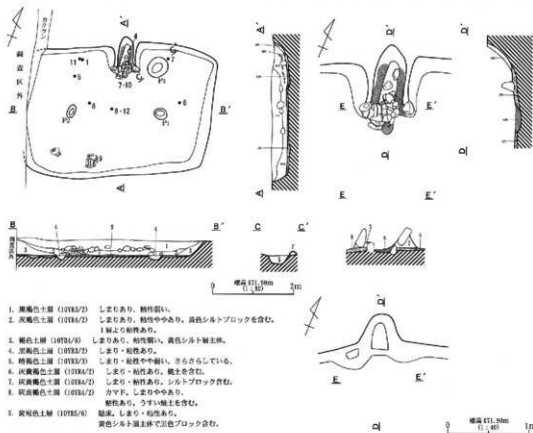


第136図 H6号住居址及び出土遺物実測図

(7) H7号住居址 (第137・138図, 写真図版六・七)

本住居址は、調査地点B区北側であるラ-15.16、リ-15.16Grに位置する。残存状態は住居址西壁が調査区域外となる他は良好である。

形態は東西方向に長い長方形を呈する。カマドは北壁に造られている。規模は北壁4.30m(検出)・南壁4.84m・東壁2.54mで、壁高さは南西コーナーで最大39cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の長軸方位はN-68°-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で11.90mを測る。覆土はお

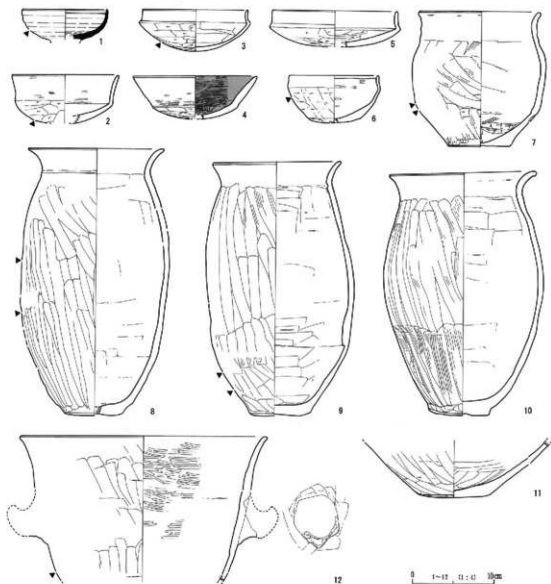


1. 黒褐色土層 (10183/2) しまりあり、粘性弱い。
2. 灰褐色土層 (10186/2) しまりあり、粘性ややあり。黄色シルトブロックを含む。
1層より粘性あり。
3. 褐色土層 (10184/3) しまりあり、粘性弱い。黄色シルト層主体。
4. 灰褐色土層 (10182/2) しまり・粘性あり。
5. 暗褐色土層 (10183/3) しまり・粘性やや弱い。さらさらしている。
6. 灰黄褐色土層 (10184/2) しまり・粘性あり。粘土を含む。
7. 灰黄褐色土層 (10184/2) しまり・粘性あり。シルトブロック含む。
8. 灰黄褐色土層 (10184/2) カマド。しまりややあり。
粘性あり。うすい粘土を含む。
9. 黄褐色土層 (10185/4) 緩急。しまり・粘性あり。
黄色シルト層主体で白色ブロック含む。

第137図 H7号住居址実測図

No.	種別	層番号	法 量			形 態・高 度・文 相		備 考	出土位置
			面積	容積	容積	内 面	外 面		
1	埋土層	高床	10.6	-	(3.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 外直自然降付壁	5m Ⅱ・Ⅲ区 M-6
2	土師器	3F	13.1	11.9	(5.9)	口縁ヨコナデ→ミガキ→底部ヘラナデ	ミガキ	完全実測 摩耗	3cm
3	土師器	3F	12.9	13.6	5.0	口縁ヨコナデ→みこみ部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラナデ	完全実測	1 Ⅱ区
4	土師器	3F	15.2	10.4	(5.2)	ミガキ→敷色処理	口縁ヨコナデ→ミガキ→底部ヘラナデ	断面実測	2cm
5	土師器	3F	15.4	16.2	(4.4)	みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ	底部ヘラナデ→口縁ヨコナデ	断面実測	4.5cm Ⅱ区
6	土師器	3F	11.1	6.4	5.8	ミガキ	みこみ部ナデ→底部ナデ→口縁ヨコナデ	完全実測 摩耗	5cm Ⅰ・Ⅱ区
7	土師器	壁	15.0	7.9	16.5	口縁ヨコナデ→胴部→底部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 底部ヘラナデ	完全実測 摩耗	1cm カマド
8	土師器	壁	16.8	7.3	32.6	口縁ヨコナデ→胴部→底部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→底部ヘラナデ	完全実測	5~13cm Ⅱ・Ⅲ区
9	土師器	壁	15.8	7.4	31.1	胴部から底部ヘラナデ	胴部ヘラナデ 底部ヘラナデ	完全実測	4cm Ⅱ区
10	土師器	壁	18.1	7.6	29.9	口縁ヨコナデ→胴部→底部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→底部ヘラナデ	完全実測	5cm カマド Ⅱ区
11	土師器	底	-	8.7	(7.0)	ヘラナデ	胴部ヘラナデ→底部ヘラナデ	完全実測	3cm
12	土師器	底	20.4	-	(17.7)	ミガキ	ヘラナデ	断面実測	13cm Ⅰ・Ⅱ区

第80表 H7号住居址出土遺物観察表



第138図 H7号住居址出土遺物実測図

おむね自然堆積であったが、1層と2層の間で拳大～人頭大の礫が多量に検出された（写真図版七参照）。この礫群は住居址中央部とカマド内からも検出され、間層に砂等を混入しない事から人為的な投げ込みが考えられる。床はカマド周辺を中心に硬質で、貼床は1～7cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、3カ所確認された。P1とP2が主柱穴、P3が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径32cm・深さ13cm、P2が径33cm・深さ12cm、P3が径52cm・深さ24cmを測る。

カマドは北壁に検出された。主軸方位はN-19°-Wを示す。残存状況は煙道部と袖部共に、良好に残存していたが、先にも述べたとおり焚口から燃焼部にかけて多量の礫が詰まっていた。規模は煙道部長さ34cm、袖部高さ7～17cmで、火床部は良く焼けていたが硬質化はしていなかった。袖は川原

石を縦方向に使って構築されていた。また燃焼部には支脚石が立った状態で検出された。

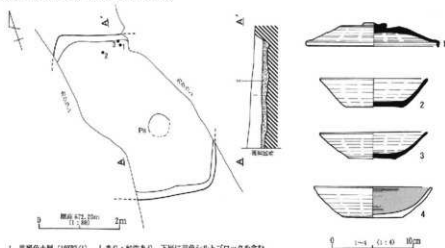
出土遺物は覆土中である礫層の間から多く出土した。1は須恵器高坏の坏部であり、外面は濃い自然釉が付着している。床面より2cm浮いて出土した。本遺構の南に存在するM6号溝状遺構から出土した破片と接合関係にある。2～6は土師器坏である。2は床面上から、その他のものは浮いた状態で出土した。2と4は口縁部が大きく外反するタイプで、3と5は須恵器坏身を模倣したタイプの坏である。7は小型の土師器甕でカマド内より出土した。8～10は土師器甕でいずれも割れているが接合後ほぼ完形となる。8と9は床面より僅かに浮いた状態で、10はカマド内より出土した。11は土師器甕の底部で、底部から胴部の膨らみから、いわゆる胴張り甕の形態である。12は把手付の土師器甕で大型品である。内面にミガキを施す。

本址はこれらの出土遺物より、6世紀後半に位置づけられる。

(8) H 8号住居址 (第139図, 写真図版九)

本住居址は、調査地点B区北側であるユ-22.23、ヨ-22.23Grに位置する。残存状態は北東コーナーと南西コーナーがカクランにより壊されている。形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.70m(残存)・南壁1.85m(残存)・西壁0.65m(残存)・東壁1.04m(残存)で、壁高さは北西コーナー部で最大27cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.42㎡を測る。覆土は自然堆積で単層である。床は全体的に硬質であり、貼床は2～20cmの厚みで確認された。

本址からの出土遺物は少なく、4点を図示した。1～3はまとめて北壁側より出土したが、覆土中の出土である。1は須恵器蓋で扁平なつまみが付く。2と3は須恵器坏であり、いずれも回転糸切り離しである。4は内面黒色処理を施した土師器坏である。本址はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、8世紀後半に位置づけられると考える。



1. 黒褐色土製 (1000/1) しまり・粘土あり、下面に褐色シタブロックを含む。
2. 褐色土製 (1000/6) しまり・粘土あり、下面に鉄分の化下あり。

第139図 H8号住居址及び出土遺物実測図

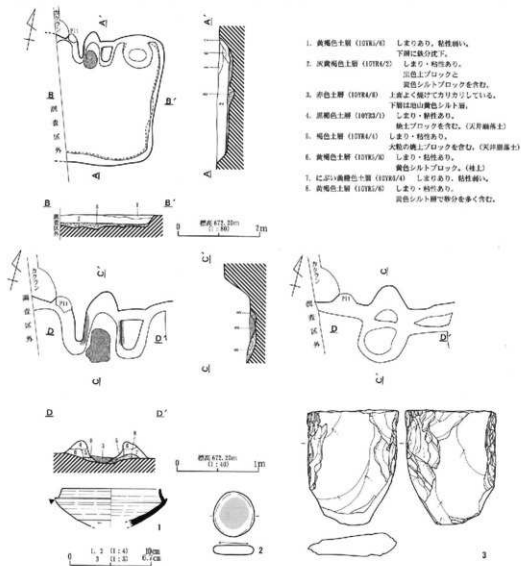
No	種別	器種	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			口縁径(内径)	器底径	内径	器底径			
1	須恵器	蓋	16.3	つまみ 3.9	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部糸切り旋削転へつケズリ→つまみ貼付 火摩	完全実測 自然釉付着 (先蓋から外蓋のみ入り)	10cm
2	須恵器	坏	13.3	7.3	3.5	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ→既述右回転糸切り 火摩	完全実測	5cm
3	須恵器	坏	13.3	3.8	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ→既述右回転糸切り 火摩	完全実測	17cm 1区
4	土師器	坏	14.5	7.5	3.8	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→既述糸切り離し→手跡ハツケズリ	回転実測 摩耗	1区

第81表 H8号住居址出土遺物観察表

(9) H9号住居址 (第140図, 写真図版十)

本住居址は、調査地点B区北側であるモ-32.33、ヤ-33Grに位置する。残存状態は西側1/3が調査区域外となる他は良好である。

形態は方形を呈する。規模は北壁2.56m(検出)・南壁1.96m(検出)・東壁2.84mで、壁高さは



1. 黄褐色土層 (10TK/4) しまりあり、粘性強い、
下層に鉄分沈下。
2. 灰黄褐色土層 (10TK/2) しまり・粘性あり。
三色土ブロックと
黄褐色シルトブロックを含む。
3. 赤色土層 (10TK/4) 土質よく焼けて力かりしている。
下層は山山黄褐色シルト層。
4. 灰褐色土層 (10TK/1) しまり・粘性あり。
粘土ブロックを含む。(天井崩落土)
5. 褐色土層 (10TK/4) しまり・粘性あり。
大粒の焼土ブロックを含む。(天井崩落土)
6. 黄褐色土層 (10TK/3) しまり・粘性あり。
黄褐色シルトブロック。(柱上)
7. にごり黄褐色土層 (10TK/4) しまりあり、粘性強い。
8. 黄褐色土層 (10TK/3) しまり・粘性あり。
黄褐色シルト層で砂分を多く含む。

第140図 H9号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	部類	計量		成形・調整・文様				備考	出土状況
			長さ	幅	内面	外面	重量	所見		
1	土器	杯	12.0	13.6	(L)	ロクロナデ		ロクロナデ一匹2046ヘラケズリ	回転成形 焼直されている	IV区
2	磨石	砂岩	0.5	0.9	1.3		50.28	正面に磨り面		IV区
3	打製石器	燧石(燧石)	(10.6)	(8.4)	(2.1)		(260.70)	琢磨欠陥 正面の刃部研削に使用による磨痕		IV区

第82表 H9号住居址出土遺物観察表

北東コーナーで最大33cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居の床面積は検出部分で6.23㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居全体に施されており、厚みは1~8cmで貼られていた。ピットは検出されなかったが、カマド東脇に貯蔵穴が検出された。形態は円形で、規模は長軸90cm・短軸73cm・深さ38cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道部は住居壁よりもあまり飛び出さないタイプで、長さは26cmを測る。袖はしまりのある黄色シルトで構築されていた。火床面は良く焼けており表面は硬質化していた。

本址からの出土遺物は非常に少なかった。1は覆土中から出土した須恵器坏身で、底部周辺は回転ヘラケズリを施す。2は磨石、3は欠損した打製石斧である。本址の帰属時期は出土遺物が少なく不確定であるが、古墳時代後期の所産と考えられる。

(10) H10号住居址 (第141図, 写真図版十一)

本住居址は、調査地点B区北側であるモ-30.31.32、ヤ-31Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈する。規模は北壁3.84m(検出)・南壁2.34m(検出)・西壁4.76mで、壁高さは西壁中央で最大45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居の床面積は検出部分で14.94㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居全体に施されており、厚みは3~12cmで貼られていた。また、3層を中心に床面上には炭化物と焼土が広がっていた。ピットは2カ所確認された。P1とP2が主柱穴と考えられる。規模はP1が径33cm・深さ33cm、P2が径38cm・深さ12cmを測る。本址の掘り方は住居中央部が一段高くなる掘り方で、段差は1~8cmを測る。

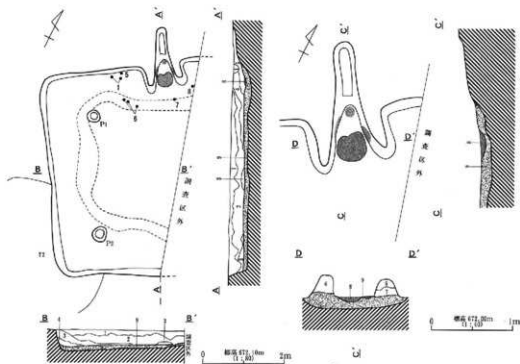
本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道の軸方位はN-31°-Wを示す。煙道部は長く伸びるタイプで、規模は長さ93cmを測る。袖部は高さ21~26cmが残存しており、しまりのある黄褐色土で構築されていた。火床部は良く焼けており上面硬質化していた。火床部の焼土厚みは7cmを測る。カマド掘り方は、北壁側が一段ベット状に高くなっている。

出土遺物は覆土中から出土したが多くはなく、土器5点と石製模造品3点を図示した。1~3は土師器坏であり、1と2は内外面黒色処理と内面は丁寧なミガキが施されている。4は小型の土師器甕で、欠損しているが多孔で、3穴が残存している。5は土師器甕の底部で、住居址掘り方時に出土した。6は石製模造品の白玉で3枚に割れていたが、接合し完形となった。7と8も白玉で床面上からの出土である。

本址はこれらの出土遺物より6世紀後半に位置づけられる。

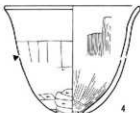
No.	類別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口縁径	底径	高さ	内面	外面		
1	土師器	坏	13.3	11.7	4.8	ミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→黒色処理	完全実測	0~6cm II区
2	土師器	坏	13.0	11.0	(3.9)	ミガキ→黒色処理	底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→黒色処理	図私実測	II区
3	土師器	坏	10.6	9.0	3.7	ヨコナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ	図私実測 内外面黒色処理	II区
4	土師器	甕 (多孔)	18.7	3.2	13.2	口縁ヨコナデ→胴部から底部ヘラケズリ	胴部ヘラケズリ・胴下半部から底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	図私実測 多孔(3孔残存) 焼成時穿孔	I・II区
5	土師器	甕	-	8.9	(8.1)	ヘラケズリ	胴部ヘラケズリ→ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	~2cm P8 II区ホリ方
No.	器種	素材	保存率	最大径	最大厚	重量	所見		出土位置
6	白玉	磨石	完形	0.59	1.28	0.30	1.46	No1・2・3が接合	0cm
7	白玉	磨石	完形	0.60	1.10	0.30	1.17		0cm
8	白玉	磨石	完形	0.45	1.10	0.31	0.83		0cm

第83表 H10号住居址出土遺物観察表



1. 明黄褐色土層 (10YR5/4) しまりあり。下層に鉄分の沈下あり。
2. 黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり。黄色シルト主体。
3. 灰褐色土層 (10YR7/1) しまり・粘性やや弱い。焼と炭化物を多量に含む。
4. 灰褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性やや弱い。
5. 黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性やや弱く、焼土粒を多く含む。
6. 赤・黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり。焼土ブロックを無量含む。
7. 黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック多く含む。
8. 赤色土層 (10R4/3) しまりあり。粘性弱い。よく焼けており上部硬質化している。
9. 黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり。三色土ブロック混入する。

地はよしも粘性あり。



1~3 (1:1) 5cm
4~8 (1:1) 2.5cm



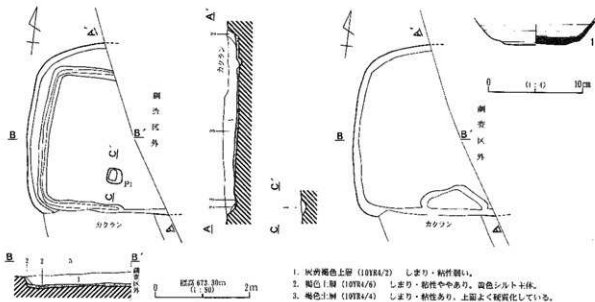
第141図 H110号住居址及び出土遺物実測図

(11) H11号住居址 (第142図, 写真図版九)

本住居址は、調査地点B区中央であるト・62、ナ・61.62Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。

形態は方形を呈する。規模は北壁1.24m(検出)・南壁2.92m(検出)・西壁3.06mで、壁高さは北西コーナーで最大23cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.90㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~8cmで貼られていた。壁溝は南壁中央から西壁と北壁に検出されたが、壁よりも内側で検出され、特に北壁側は壁より40cmほど離れていた。規模は幅16~23cm・深さ3~6cmを測る。ピットは検出されなかった。本址の掘り方は住居址南壁側が一段低くなる掘り方で5cm程の段差があった。

出土遺物は覆土中から出土したが量的には少なく、図示し得たものは1の須恵器環のみであった。本址は出土遺物が少なく所産時期は不確実であるが、出土遺物や小型の住居址形態より平安時代と考えられる。



第142図 H11号住居址及び出土遺物実測図

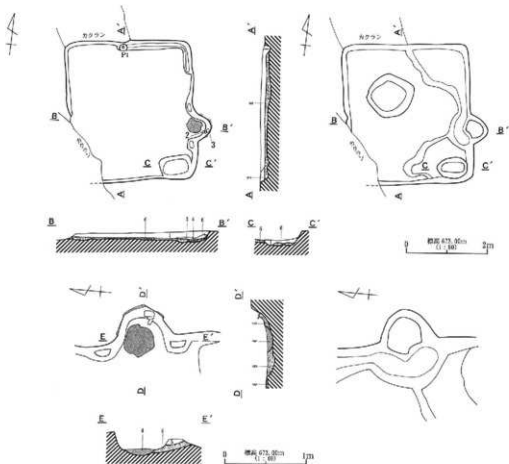
No.	種別	出層	出所	形状・寸法・文様		備考	出土位置
				内面	外面		
1	須恵器	Ⅱ	ト・62	口ノコナダ	口ノコナダ	完全発掘 外面のみ	1区

第84表 H11号住居址出土遺物観察表

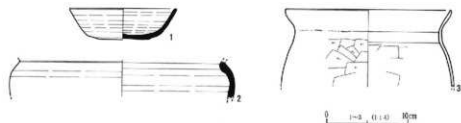
(12) H12号住居址 (第143図, 写真図版十二・十三)

本住居址は、調査地点B区北側である二・60.61Grに位置する。残存状態は南西コーナーがカクランによって削平されている。

形態は方形を呈する。カマドは東壁に造られている。規模は北壁2.97m・南壁2.15m(残存)・西壁1.70m(残存)・東壁3.30mで、壁高さは南壁中央で最大19cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で9.00㎡を測る。住居址の主軸方位はN-7°-Wを測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~11cmで貼られていた。壁溝は北壁から北東コーナーにかけて検出された。規模は幅18~25cm・深さ3cmを測る。ピットは1カ所確認された。P1は北壁内にあり、規模はP1が径19cm・深さ9cmを測る。また、本址はカマド南脇に貯蔵穴と考えられる掘り込みが検出された。規模は長軸78cm・短軸58cm・深さ14cmを測る。本址の掘り方は東側が一段低くなる掘り方で、11cmほ



- | | |
|---|---|
| <p>1. 灰黄褐色土層 (1078A/2) しまりあり。
黄色シルト・ロームブロックを含む。</p> <p>2. 灰褐色土層 (1078A/1) しまり・粘りあり。</p> <p>3. 灰黄褐色土層 (1078A/2) しまり・粘りあり。
焼土ブロック・炭化物を含む。</p> | <p>4. 赤色土層 (1078A/3) しまり・粘りあり。上面よく硬質化している。
下層地山が露出している。</p> <p>5. 灰褐色土層 (1078A/2) しまり・粘りあり。三色土と褐色土の混合土。</p> <p>6. 灰褐色土層 (1078A/2) しまり・粘りあり。上面硬質化している。</p> |
|---|---|



第143図 H12号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法基		形状・調整・文様		備考	出土位置	
			山形(内)	山形(外)	内面	外面			
1	須恵器	坏	13.1	6.6	3.8	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底縁右辺尖部半切り 火押	須恵器	B区
2	須恵器	甕	-	-	(4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	須恵器	1cm B区
3	土師器	甕	20.4	-	49.4	1) 羅コナデ→胴部ヘラケズリ	1) 羅コナデ→胴部ヘラケズリ	須恵器 厚板	8cm カマド B区

第85表 H12号住居址出土遺物観察表

どの段差ができていた。また、住居址中央に長軸120cm・短軸105cm・深さ14cmの楕円形の床下土坑が検出された。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道の軸方位はN-89°-Eを示す。煙道部は伸びないタイプで、燃焼部が住居址壁よりも外に張り出している。袖部は高さ11cmが残存しており、しまりのある黒褐色土で構築されていた。火床部は良く焼けており上面硬化していた。火床部の焼土厚みは8cmを測る。カマドは貼床が貼られた後構築されていた。

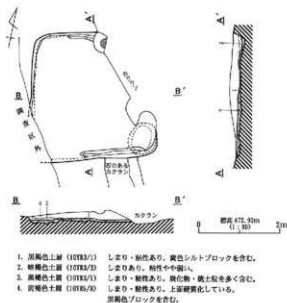
出土遺物は覆土中から多く出土した。図示した遺物の内1は覆土、2と3はカマド内より出土した。1は須恵器環で内外面火押が確認できる。2は須恵器甕で口縁部は欠損しているが広口で短頸のタイプと考えられる。3は土師器甕で頸部が「コ」の字に屈曲するいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。

本址はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、8世紀後半に位置づけられると考える。

(13) H13号住居址 (第144図, 写真図版十三)

本住居址は、調査地点B区中央であるヌ-59Grに位置する。残存状態は東側半分がカクラン、西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは北壁に造られている。規模は北壁1.46m(残存)・南壁2.54m(検出)・西壁2.00m(検出)・東壁0.39m(残存)で、壁高さは南壁で最大17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.56㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面上にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~10cmで貼られていた。壁溝は北壁と南壁の一部で検出された。規模は幅15~24cm・深さ2~6cmを測る。また、掘り方検出時に南西コーナーで貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。形態は楕円形で、規模は長軸80cm・短軸62cm・深さ7cmを測る。本址のカマドは北壁中央に造られていた。火床部のみを検出で、薄く焼土が検出された。



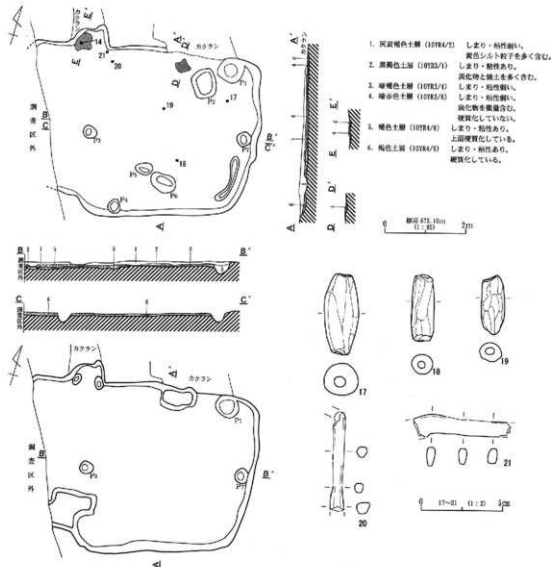
第144図 H13号住居址実測図

出土遺物は覆土中から出土したが少なく、図示できるものはなかった。出土した土器は須恵器破片と土師器甕・坏片であるが、土師器破片の中には7世紀後半から8世紀初頭の所産と考えられるものが含まれていた。本址の所産時期は不明である。

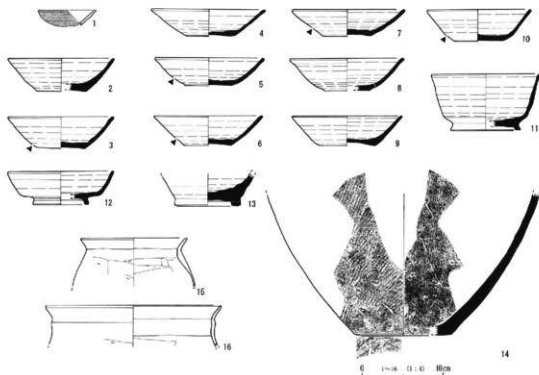
(14) 14号住居址 (第145-146図, 写真図版十四)

本住居址は、調査地点B区中央であるト-63.64、ナ-63.64Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態はほぼ東西方向に長い長方形を呈すると考えられる。規模は北壁5.43m・南壁4.34m(残存)・東壁3.34mで、壁高さは北壁で最大12cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は18.58㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は西側部分が特に硬質であり、全体では貼床が1~9cmの厚さで貼られていた。壁溝は南東コーナー部で短く検出された。規模は幅12~21cm・深さ2~4cmを測る。ピットは掘り方検出時も含めて7カ所確認された。規模はP1が径67cm・深さ14cm、P2が径72cm・深さ11cm、P3が径34cm・深さ24cm、P4が径34cm・深さ5cm、P5が径43cm・深さ5cm、P6が径67cm・深さ9cm、P7が径39cm・深さ22cmを測る。



第146図 H14号住居址及び出土遺物実測図



第146图 H14号住居址出土遺物実照図

No.	種別	図種	位置			形状・調整・文様		備考	出土位置
			中心点	法字順	番取等	内面	外面		
1	灰釉陶器	断面	—	—	—	片輪	造輪	焼片実製	Ⅱ区
2	灰釉器	坪	13.1	6.0	4.0	ロクロナデ	底面右回転糸切り	焼片実製	Ⅱ区
3	灰釉器	坪	13.1	5.9	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実製	Ⅱ区
4	灰釉器	坪	14.1	5.5	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実製	Ⅱ・Ⅳ区
5	灰釉器	坪	13.5	5.8	3.3	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底面右回転糸切り 火押	完全実製	Ⅱ区
6	灰釉器	坪	14.0	6.0	3.2	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底面右回転糸切り 火押	完全実製	Ⅱ区
7	灰釉器	坪	13.4	5.9	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実製	Ⅱ区
8	灰釉器	坪	14.1	5.6	3.9	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底面右回転糸切り	焼片実製	Ⅱ区
9	灰釉器	坪	13.5	6.6	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	焼片実製	Ⅱ区
10	灰釉器	坪	12.9	6.1	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り(方向不明)	完全実製	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区
11	灰釉器	高台付	13.4	8.5	6.5	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り(方向不明) →片高台	焼片実製	Ⅱ・Ⅳ区
12	灰釉器	高台付	13.1	6.8	4.0	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 片高台 火押	焼片実製	Ⅱ区
13	灰釉器	高台付	—	8.2	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り→片高台	焼片実製	Ⅱ・Ⅲ区
14	灰釉器	断面	—	12.0	(17.3)	ヘラナデ	夕夕子	焼片実製	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区
15	土師器	断面	13.0	—	(5.9)	臼鉢ヨコナデ—胴底ヘラナデ	臼鉢ヨコナデ—胴底ヘラナデ	焼片実製	Ⅱ区
16	土師器	断面	21.6	—	(5.9)	臼鉢ヨコナデ—胴底ヘラナデ	臼鉢ヨコナデ—胴底ヘラナデ	焼片実製	Ⅱ区
17	土製品	土器	4.9	3.1	2.0			5cm	
18	土製品	土器	4.1	3.4	1.2			5cm	
19	土製品	土器	3.5	3.4	1.1			5cm	
20	平均	土器				重量	西度		出土位置
21	平均	土器				重量	西度		出土位置

第86表 H14号住居址出土遺物観察表

カマドは北壁西寄りに造られている。煙道部は長く伸びず、燃焼部が住居址壁よりも飛び出すタイプである。袖は検出されなかったが、袖構築時に石を入れたと考えられるピットが2箇所確認された。規模は径が30～33cm・深さ7～9.5cmを測る。火床面はあまり硬質化しておらず、焼土の厚みは4cmを測る。また、本址は北壁東側で焼土の広がりが検出された。この焼土も上面の硬質化はしていなかった。

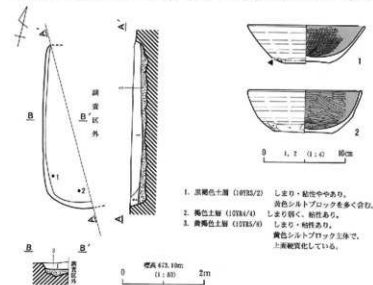
出土遺物は覆土中のものが多かった。1は灰釉陶器皿の口縁部破片である。2～10は須恵器環である。いずれも底部回転系切り離しが行われている。11と12は須恵器高台である。11は見込みが深いタイプで、12が浅いタイプである。13は須恵器壺の底部であり、底部回転系切り離しの後高台を貼付している。14は須恵器甕の底部から胴部下半である。外面に敲き目を残す。15は小型の土師器甕であり、口縁部から胴部である。頸部が「く」の字に屈曲する。16は土師器甕で頸部が「コ」の字に屈曲するいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。17～19は土製品の水甕である。いずれも完形品でありほぼ床面上から出土した。20と21は鉄製品である。21は刀子と考えられるが、20は不明である。

本址は平面形態も不自然であり、調査当初に2軒の住居址の重複とも考えられたが、西側に広がる硬質面の下から、東側から続く床が調査区外まで連なる事、また掘り方時も顕著な掘り方の異なりが確認できなかった事から1軒の住居址として報告した。本址の帰属時期は、図示した出土遺物から8世紀後半と考えられる。

(15) 15号住居址 (第147図, 写真図版十六)

本住居址は、調査地点B区中央である二-59Grに位置する。残存状態は住居址東側が調査区域外となり、南西コーナー部分が検出されたのみである。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は南壁0.97m(検出)・西壁3.78m(検出)で、壁高さは西壁南寄り最大19cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.18㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質で、貼床は全体に1～19cmの厚さで貼られていた。出土遺物は少量であったが、図示した2点は床面より出土した。1と2は土師器環で、共に内面黒色処理されている。1は内面に放射状のミガキが施される。2は横方向の丁寧なミガキが施されている。



第147図 H15号住居址及び出土遺物実測図

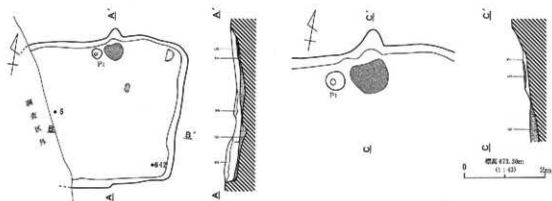
No.	種別	形状	位置			形状・調査・記録		備考	出土位置	
			北壁	東壁	南壁	内面	外面			
1	土師器	坪	14.5	5.5	4.6	ミガキ・黒色処理	口クロナデー・底面右回転系切り→ 流道外周手持ちヘラツクリ	完全実測	庫址	6cm Ⅱ区
2	土師器	坪	14.0	7.0	5.4	ミガキ・黒色処理	口クロナデー・底面右回転系切り→ 流道外周手持ちヘラツクリ	完全実測		6cm

第87表 H15号住居址出土遺物観察表

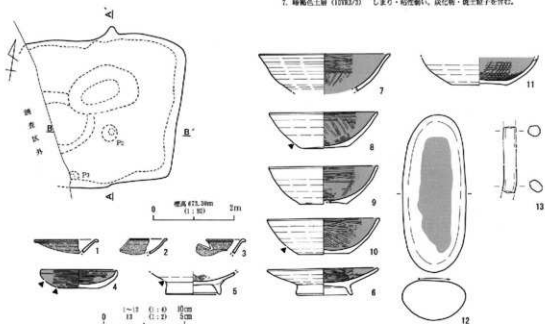
(16) H16号住居址 (第148図, 写真図版十四・十五)

本住居址は、調査地点B区中央であるト-64.65、ナ-65Grに位置する。残存状態は南西コーナーが調査区域外となる。H17・19号住居址と重複関係にあり、本址が一番新しい。

形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。住居址の主軸方位はN-9°-Wを測る。規模は北壁3.82m(検出)・南壁2.38m(検出)・東壁3.15mで、壁高さは南壁で最大29cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は9.95m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床はカマド前が特に硬く、貼床は全体に1~11cmの厚さで貼られていた。ピットは3カ所



1. 黒褐色土層 (OTR3/1) しまり・粘性あり。大粒の黄色粘土を含む。
2. に近い黄褐色土層 (OTR3/2) しまり弱く、粘性あり。
3. に近い黄褐色土層 (OTR3/3) しまり・粘性あり。
4. 黒色土層 (OTR3/4) しまり。粘性弱い。炭化物と焼土を多く含む。
5. 暗赤褐色土層 (OTR3/5) しまり・粘性弱い。あまり焼けていない。
6. 褐色土層 (OTR4/6) しまり・粘性あり。小石を多く含む。
炭化物を微量含む。(配床)
7. 暗褐色土層 (OTR3/7) しまり・粘性弱い。炭化物・焼土粘土を含む。



第148図 H16号住居址及び出土遺物実測図

確認された。規模はP1が径26cm・深さ8cm、P2が径42cm・深さ11cm、P3が径24cm・深さ13cmを測る。

カマドは北壁に検出され火床部等が検出された。煙道部は住居址壁より僅かに飛び出す形態で、壁面より36cm出ていた。火床部の焼け込みは弱く、硬化化もしていなかった。

本址からの出土遺物は覆土中からの出土であるが比較的多かった。1～3は灰釉陶器皿か碗の口縁部破片である。4は土師器皿としたが、カワラケのような形態である。内外面丁寧なミガキと黒色処理されている。5は土師器碗である。6は土師器皿でほぼ完形である。7～11は土師器坏でいずれも内面ミガキで黒色処理が施されている。12は磨り石、13は鉄製品であるが種別は不明である。

本址はこれらの出土遺物より10世紀前半に位置づけられる。

No.	種別	図様	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径長	底径幅	高さ	内面	外面		
1	灰釉陶器	皿	—	—	—	焼物	焼物	破片(窯跡)	
2	灰釉陶器	皿	—	—	—	焼物	焼物	破片(窯跡)	IV区より
3	灰釉陶器	皿	—	—	—	焼物	焼物	破片(窯跡)	
4	土師器	皿	9.0	4.3	2.3	ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	完全素焼	I区
5	土師器	碗	—	5.8	42.7	ミガキ	磨物(磨り石)付(中央部)→付合	完全素焼	0cm III区
6	土師器	皿	13.6	7.0	3.3	ミガキ→黒色処理	焼物(焼物)ヘラケツリ→付合	完全素焼	13cm IV区
7	土師器	坏	16.1	—	16.6	ミガキ→黒色処理	焼物(焼物)ヘラケツリ→付合	完全素焼	III区
8	土師器	坏	13.3	5.8	4.4	ミガキ→黒色処理	焼物(焼物)知り(方向不明)	完全素焼	III区
9	土師器	坏	12.4	5.8	4.6	ミガキ→黒色処理	焼物(焼物)知り(方向不明)	完全素焼	I・II区
10	土師器	坏	13.3	6.0	4.3	ミガキ→黒色処理	焼物(焼物)知り(方向不明)	完全素焼	III区
11	土師器	坏	—	6.7	(3.3)	ミガキ→黒色処理	焼物(焼物)知り(方向不明)	完全素焼	I区
No.	種別	素材	残存率	最大径	最大幅	最大厚	重量	留意	出土位置
12	磨り石	安山岩	—	19.10	7.80	1.90	1230.00	正面に磨り面	半土位置
13	不明	鉄	—	16.10	(8.80)	(0.70)			IV区

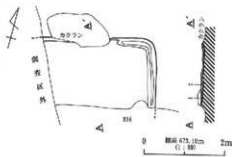
第88表 H16号住居址出土遺物観察表

(17) H17号住居址 (第149図, 写真図版15)

本住居址は、調査地点B区中央であるト-64、ナ-64Grに位置する。残存状態は南側をH16号住居址にまた西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.70m(検出)・東壁1.60m(残存)で、壁高さは北壁側で最大15cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.94㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であり、貼床は1～5cmの厚さで貼られていた。壁溝は北東コーナーで確認され、規模は幅18～24cm・深さ2～5cmを測る。

本址からの出土遺物は非常に少なく、土師器坏片1点と武蔵甕と呼ばれる土師器裏片1点が出上したのみである。よって本址の所産時期は不明である。



第149図 H17号住居址実測図

(18) H18号住居址 (第150図, 写真図版17)

本住居址は、調査地点B区中央であるテ-64.65Grに位置する。残存状態は住居址の東側のほとんどが調査区域外となり、住居址南西コーナーのみ検出された。

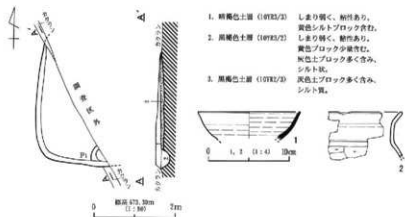
No.	種別	図様	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径長	底径幅	高さ	内面	外面		
1	滑石器	坏	12.6	—	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	白釉光澤	IV区
2	土師器	坏	—	—	—	11條ロクロナデ	11條ロクロナデ	黒部ヘラケツリ口縁ロクロナデ	破片(窯跡)

第89表 H18号住居址出土遺物観察表

形態は方形と考えられる。規模は南壁1.60m（検出）・西壁2.74m（検出）で、壁高さは南壁で最大26cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.06㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は軟質であったが、貼床は1~6cmの厚さで貼られていた。ピットは1箇所のみ確認された。規模はP1が径47cm・深さ18cmを測る。

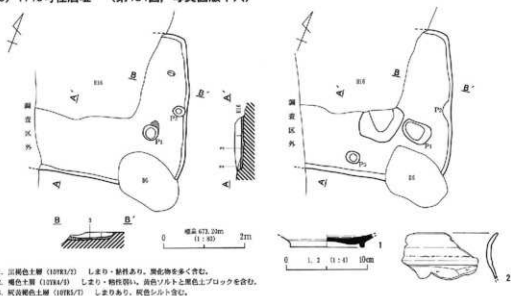
出土遺物は覆土中から少量出土した。1は須恵器杯、2は土師器甕で、頸部が「コ」の字になるいわゆる武藏甕のタイプである。

本址からの出土遺物は少なく所産時期は不確定であるが、図示した甕の形態より9世紀代に位置づけられると考えられる。



第150図 H18号住居址及び出土遺物実測図

(19) H19号住居址 (第151図, 写真図版十六)



第151図 H19号住居址及び出土遺物実測図

本住居址は、調査地点B区中央であるテ-65.66、ト-65.66Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外、北西側がH16号住居址に削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.54m（残存）・南壁3.41m（残存）・東壁3.45mで、壁高さは北壁で最大16cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.26㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は中央部分が硬質であった。貼床は1～12cmの厚みで貼られている。ピットは3カ所確認され、規模はP1が径40cm・深さ18cm、P2が径30cm・深さ11cm、P3が径35cm・深さ9cmを測る。

本址からの出土遺物は比較的少なく、図示した遺物も2点に止まった。1は須恵器高台杯の底部部分で、底部は回転系切り離しの後高台を貼付している。2は土師器甕で、頸部が「コ」の字状になるいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる甕である。

本址は出土遺物が少なく、図示した遺物もいずれも覆土中からのため、所産時期は不明である。

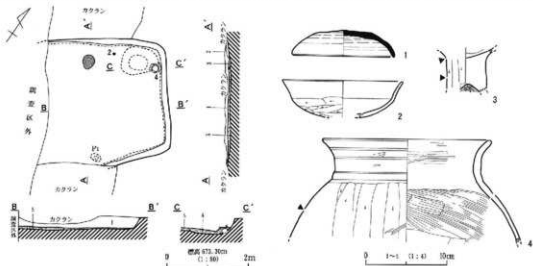
No.	種別	図番	法 量		成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考	出土位置
			口縁高	底面高	内 面	外 面		
1	須恵器	高台杯	9.2	(1.5)	口縁コナデ	口縁コナデ→底面削り込み(方向不明) →付高台	回転系調	B区
2	土師器	甕	—	—	口縁コナデ→胴部ヘラナデ	口縁コナデ→胴部ヘラナデ	破片系調	B区

第90表 H19号住居址出土遺物観察表

(20) H20号住居址 (第152図, 写真図版十八)

本住居址は、調査地点B区中央であるツ-68.69Grに位置する。残存状態は住居址西壁が調査区域外となる。

形態は東西方向に長い長方形を呈する。カマドは北壁に造られていたと考えられる。規模は北壁2.80m（検出）・南壁1.62m（残存）3.24m（推定）・東壁2.47mで、壁高さは北東コーナーで最大32cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の長軸方位はN-56°-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で8.02㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床面はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床は1～11cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め1カ所確認された。規模



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) しまりあり、5cm 大の礫多量に混入。

2. 赤赤褐色土層 (7.5YR/2) 粘土ブロック・小石混入。

3. におい赤褐色土層 (5YR/4) 夾灰面で女子カチに混入。

4. 黒褐色土層 (10YR3/2) 小石・黄色砂粒が少量含む。

5. 暗褐色土層 (10YR/4) 小石・黄色砂粒が少量含む。

第152図 H20号住居址及び出土遺物実測図

はP1が径28cm・深さ12cmを測る。また、カマド東脇で貯蔵穴と考えられる掘り込みが掘り方時に確認された。東西方向に長軸を持ち、形態は不整形である。規模は長軸90cm・短軸67cm・深さ21cmを測る。

カマドは北壁に構築されていたと考えられるが、北壁側に火床部と考えられる焼土塊が検出されたのみである。この火床部は上面良く焼けて硬質化しており、焼土の厚みは6cmを測る。

本址からの出土遺物は少なかつたが4点を図示した。1は須恵器蓋で、天井部にヘラケズリを施す。2は土師器坏で、床面から3cm浮いた状態で出土した。3は土師器高坏脚部の破片で、脚部の内面に黒色処理が施されている。4は土師器甕で、東壁際に口縁部を上にして置かれたような状態で出土した。転用台とも考えられる。口縁部には強いナデによる沈線状の段が巡る。

本址はこれらの出土遺物より、7世紀前半に位置づけられると考える。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口部径	底径	高さ	内面	外面		
1	遺物部	蓋	12.6	8.6(4)	3.5	口縁ナデ	口縁ナデ→瓦片面ヘラケズリ	完全実測 外面に自然釉付着	Ⅱ区
2	土師器	坏	14.8	12.6	64.5	厚数量しく割付でない	口縁コナデ→底部ヘラケズリ	図転実測 厚数量しい	Ⅲ区 Ⅰ区
3	土師器	高坏	—	—	65.0	坏部ヘラケズリ 脚部ヘラケズリ→彩色処理	ヘラケズリ	図転実測	Ⅱ区
4	土師器	甕	20.8	—	112.0	口縁コナデ後とガキ→割部ヘラケズリ	口縁コナデ→脚部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 厚測	Ⅲ区

第91表 H20号住居址出土遺物観察表

(21) H21号住居址 (第153図, 写真図版十九)

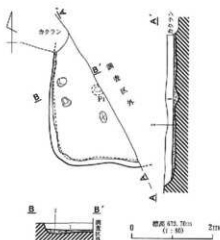
本住居址は、調査地点B区南側であるス-75.76、セ-75.76Grに位置する。残存状態は北東側が調査区域外となり、住居址の南西コーナー部分の検出のみに止まった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁2.04m(検出)・西壁2.60m(残存)で、壁高さは南西コーナー部で最大21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

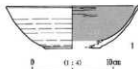
住居址の床面積は検出部分で3.60㎡を測る。覆土は自然堆積で単層である。床は全体的に軟質であり、貼床は1~6cmの厚みで確認された。

ピットは掘り方検出時に1箇所検出され、規模はP1が径25cm・深さ10cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示可能なものは1の土師器坏のみであった。1は内面黒色処理を施し、底部は回転系切り離しである。本址の帰属時期は出土遺物が少なく不明である。



1. 黒褐色土器 (G1032/2) 赤褐色ブロック多量混入。
2. 暗褐色土器 (G1033/0) 黄色コーン粒子多量に混入。



第153図 H21号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口部径	底径	高さ	内面	外面		
1	土師器	坏	16.3	6.8	6.1	ミガキ→黒色処理	口縁コナデ→底部(転系)切り(内面平削)	10%実測	

第92表 H21号住居址出土遺物観察表

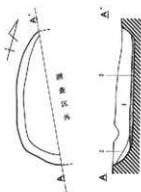
(22) H22号住居址 (第154図, 写真図版二十)

本住居址は、調査地点B区南側であるサ-80.81Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる為、住居址西側のみの検出である。

形態は隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は南壁0.90m(検出)・西壁2.92mで、壁高さは南壁で最大27cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.51㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、貼床は2~14cmの厚さで貼られていた。

本址からの出土遺物は非常に少なく

覆土中からの出土であった。出土した土器は平安時代に帰属すると考えられる須恵器坏片1点、須恵器甕片3点、土師器甕片2点であった。本址の帰属時期は出土遺物が少なく不明である。



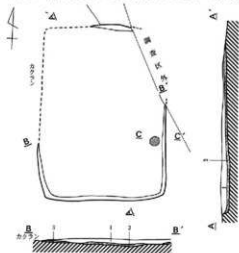
1. 黄褐色土層 (107K1/1)
しまり・粘性あり。こぶし人の石を含む。
2. 褐色土層 (107B1/4)
しまり・粘性あり。
3. におい黄褐色土層 (107B1/4)
しまり、やや弱い。

第154図 H22号住居址実測図

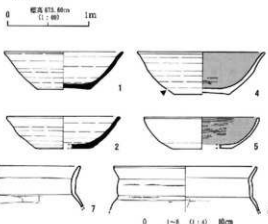
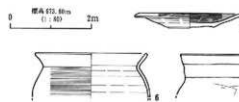
(23) H23号住居址 (第155図, 写真図版二十)

本住居址は、調査地点B区南側であるシ-78.79、ス-78.79Grに位置する。残存状態は北東コーナーが調査区域外、北西コーナーがカクランにより削平されている。

形態は南北方向に長い長方形を呈する。規模は北壁1.06m(残存)2.10m(推定)・南壁2.91m・



1. 暗褐色土層 (107B2/2) 小石・砂ブロック
多量に混入。
2. 赤褐色土層 (2.533A/3) しまり・粘性強い。
粘土粒子を含む。
3. 褐色土層 (107B1/1) しまり・粘性あり。
小石の間に灰色土を含む。
濃い部分は礫大の石を含む。



第155図 H23号住居址及び出土遺物実測図

西壁1.32m(残存)4.10m(推定)・東壁2.66m(検出)で、壁高さは西壁中央で最大10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は推定部分で11.48㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~9cmで貼られていた。

本址のカマドは検出できなかったが、東壁より中央で焼土範囲が確認された。焼土の硬質化等は観察できなかったが、円形でカマド火床部のようであった。

出土遺物は覆土中から多く出土した。1は須恵器坏で底部回転系切りである。2は須恵器坏であるが生焼けのような状態で、色調が褐色を呈する。3は土師器の皿で高台部分は欠損している。4と5は土師器坏でいずれも内面黒色処理されている。6はロクロ成形の土師器甕である。7と8は土師器甕で頸部が「コ」の字状に屈曲するいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるタイプの甕である。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀後半に位置づけられる。

No	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内面	外面		
1	須恵器	坏	14.6	6.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ一部回転系切り	完全未施 摩耗	Ⅱ区
2	須恵器	坏	14.0	7.0	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ一部回転系切り(方向不明)	完全未施 摩耗	Ⅱ区
3	土師器	皿	13.6	-	(1.8)	ミガキ一色色処理	ロクロナデ一真鍮回転系ヘラズリ・付高台(高台欠損)	完全未施	Ⅱ区
4	土師器	坏	13.6	6.8	5.2	ミガキ一色色処理	ロクロナデ一部回転系切り	完全未施 摩耗	Ⅱ・Ⅲ区
5	土師器	坏	14.2	7.0	3.8	ミガキ一色色処理	ロクロナデ一部回転系切り	完全未施 摩耗	Ⅰ区
6	土師器	甕	13.8	-	(5.4)	ロクロナデ	ロクロナデ一部カキメ	完全未施	Ⅰ区
7	土師器	甕	20.4	-	(5.1)	ロクロナデ一真鍮ヘラズリ	ロクロナデ一部カキメ	完全未施	Ⅰ区
8	土師器	甕	17.6	-	(5.5)	ロクロナデ一真鍮ヘラズリ	ロクロナデ一部カキメ	完全未施	Ⅰ区

第93表 H23号住居址出土遺物観察表

(24) H24号住居址 (第156図, 写真版二十二)

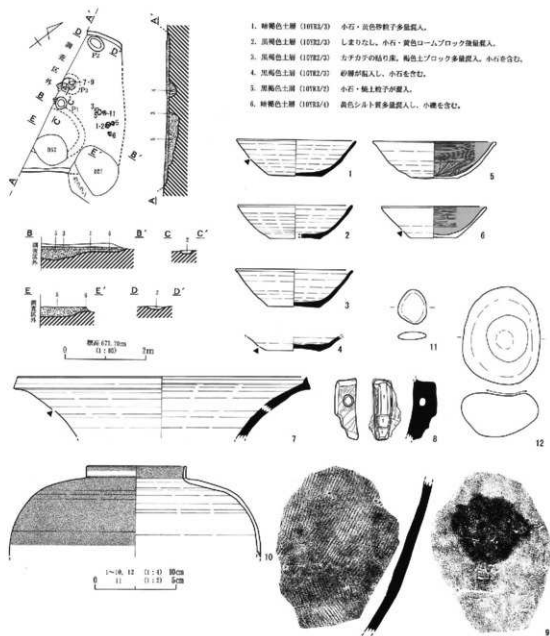
本住居址は、調査地点B区南であるス-78.79Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外、東側がカクランにより削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.66m(残存)・南壁1.21m(残存)で、壁高さは南壁で最大8cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.98㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~11cmで貼られていた。ピットは掘り方時の検出も含め3箇所が確認された。規模はP1が径30cm・深さ8cm、P2が径44cm・深さ9cm、P3が径47cm・深さ22cmを測る。また、本址は床下土坑と考えられる掘り込みが確認された。形態は円形で、規模は長軸130cm・短軸110cm・深さ21cmを測る。

出土遺物は床面を中心に多く出土した。1~4は須恵器坏でいずれも底部回転系切りを施す。1と2は床面上からの出土である。5と6は土師器坏で、いずれも内面丁寧なミガキが施され黒色処理されている。7は須恵器甕の口縁部である。口唇部に顕著な面取りを施す。8は器種不明の須恵器であり、器厚6cmほどの胴部と考えられる部分に三段の段を形成し、中央に焼成前の孔を穿孔している。本品は

No	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(内)	底径(内)	高さ(内)	内面	外面		
1	須恵器	坏	14.2	6.5	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ一部回転系切り	完全未施 摩耗	0cm
2	須恵器	坏	14.2	6.1	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ一部回転系切り	完全未施 摩耗	0cm
3	須恵器	坏	14.4	6.8	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ一部回転系切り	完全未施 摩耗	4cm
4	須恵器	坏	-	8.5	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ一部回転系切り	完全未施	7cm
5	土師器	坏	15.2	5.8	4.5	ミガキ一色色処理	ロクロナデ一部回転系ヘラズリ	完全未施	0~3cm
6	土師器	坏	13.0	3.6	3.8	ミガキ一色色処理	ロクロナデ一部回転系ヘラズリ	完全未施	0~3cm
7	須恵器	甕	36.4	-	7.5	ロクロナデ	自然隆起	完全未施	2cm P
8	須恵器	甕	-	-	-	ヘラズリ	ヘラズリ	完全未施	2cm P
9	須恵器	甕	-	-	-	タタキ	タタキ	完全未施	2cm P
10	瓦	瓦	11.2	-	11.1	瓦	瓦	完全未施	7.5cm

第94表 H24号住居址出土遺物観察表



第156図 H24号住居址及び出土遺物実測図

地のいわゆる須恵器四耳壺の突起部分とも形態が異なり、敢えて類例を指摘すれば、石川県ニツ梨横川1号窯などで見られる双耳瓶の耳と類似する。なお、横川1号窯は8世紀中葉に比定されている。9は須恵器裏の胴部破片であるが、内面に顕著な磨り面が存在する（拓本濃い部分）。硯等の転用の可能性がある。10は灰釉陶器短頸壺の一部である。口縁部から肩部に掛けて顕著な釉が確認できる。11は磨石である。12は凹石であり、窪んだ中央部分では磨り面も見られた。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀前半に位置づけられる。

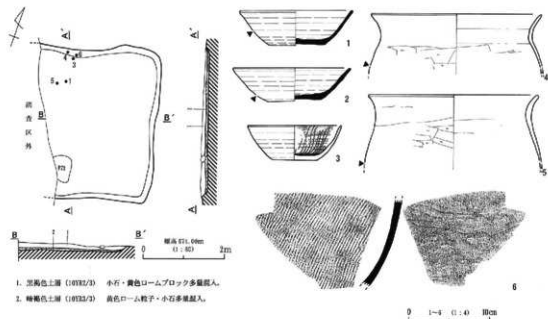
(25) H25号住居址 (第157図, 写真図版二十一)

本住居址は、調査地点B区南側であるキ89、ク88.89Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。規模は北壁2.90m(検出)・南壁2.18m(検出)・東壁3.63mで、壁高さは南壁で最大12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.76㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~6cmで貼られていた。

出土遺物は覆土中からと北壁際から、まとめて多く出土した。1と2は須恵器環であり、底部回転糸切り離しが行われている。3は土師器環である。内面に見込み部から放射状の暗文が施されている。口径が小振りで器高が高く、内面のミガキ等を考えるといわゆる「甲斐型環」の影響を受けた環と考えられる。4と5は土師器甕で、いずれも武蔵甕と呼ばれるタイプのものである。6は須恵器甕である。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられると考える。



1. 黒褐色土層 (H25L/3) 小石・黄色ロームブロック多量混入。

2. 暗褐色土層 (H25L/2) 黄色ローム粒子・小石多量混入。

第157図 H25号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	図番	計量			成形・装飾・文様		備考	出土段階			
			山形石	式部断	多田字	内面	外面					
1	環状器	36	1.40	6.3	4.3	口クロナダ	火焼	口クロナダ一底部右回転糸切り	火焼	完全実割	~1cm III区	
2	環状器	36	1.40	6.5	4.1	口クロナダ	火焼	口クロナダ一底部右回転糸切り	火焼	完全実割	I・II・III区	
3	土師器	36	11.6	5.4	4.3	ミガキ一暗文	—	口クロナダ一底部右回転糸切り	—	完全実割	押鉢	2.5cm III区
4	土師器	32	21.0	—	(7.3)	口縁コナダ一胴部ヘラナダ	—	口縁コナダ一胴部ヘラナダ	—	回転実割	3cm III区	
5	土師器	32	21.0	—	(9.0)	口縁コナダ一胴部ヘラナダ	—	口縁コナダ一胴部ヘラナダ	—	回転実割	~2cm III区	
6	須恵器	—	—	—	—	湯川産ヘラナダ	—	夕夕キ	—	粘土	3cm	

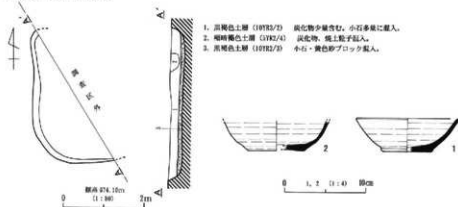
第95表 H25号住居址出土遺物観察表

(26) H26号住居址 (第158図, 写真図版二十一)

本住居址は、調査地点B区南側であるカ-89、キ-88.89Grに位置する。残存状態は東側2/3が調査区域外となる。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁1.46m(検出)・西壁3.10mで、壁高さは西壁で最大21cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.59㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは6~11cmで貼られていた。

出土遺物は覆土中から出土したが、少なく、図示できるものは2点のみであった。1と2は須恵器円でいずれも底部回転系切り離しが施されている。本址の所産時期はこれらの遺物より不確実ではあるが、8世紀代と考えられる。



第158図 H26号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	品類	位置		成分・調整・文様		備考	出土位置
			内	外	内	外		
1	須恵器	杯	12.0	6.2	4.1	ロクロナデー-焼部回転系切り	火傷	同所産
2	須恵器	杯	-	6.8	13.0	ロクロナデ	ロクロナデー-焼部回転系切り	同所産

第96表 H26号住居址出土遺物観察表

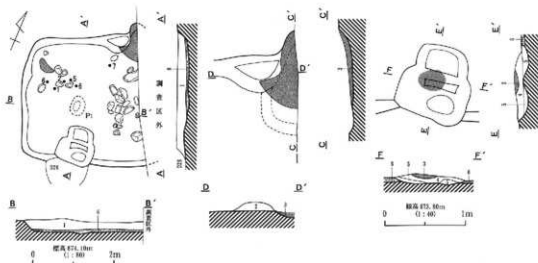
(27) H27号住居址 (第159図, 写真図版二十四)

本住居址は、調査地点B区南であるク-85.86、ケ-85.86Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。D28号土坑とH28号住居址と重複関係にあり、新しい方よりD28号土坑→H27号住居址→H28号住居址となる。

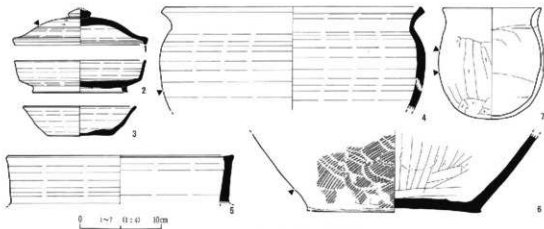
形態は東西方向に長い長方形を呈すると考えられる。カマドは北壁に造られている。住居址の主軸方位はN-22°-Wを測る。規模は北壁2.50m(検出)・南壁2.98m(検出)・西壁2.66mで、壁高さは北壁で最大22cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で7.60㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であるが、図にも示したように拳大から人頭大の川原石が多く床面より浮いた状態で検出された。床は全体的に硬質で、特にカマド周辺は硬かった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~8cmで貼られていた。ピットは掘り方時の検出も含め、1箇所が確認された。規模はP1が径46cm・深さ3cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道部は住居址壁よりあまり飛び出さないタイプで、煙道の長さは57cmを測る。袖は左袖のみの検出で、暗褐色土を構築土としていた。火床部は燃焼部から全体に広がっており、炭化物を多量に含むが硬質化はしていなかった。また、本址は南壁際に焼土塊が検出された。焼土下は不定形の土坑状掘り込みが検出され、深さは14cmを測る。

出土遺物は礫群に混じって多く出土した。1は須恵器蓋であり天井部は回転ヘラケズリを施す。2は



1. 赤褐色土層 (101K2/2) 黄色砂質ブロック多量に混入し、小石を含む。
2. 赤褐色土層 (101K3/3) 黄色ローム瓦子多量に混入し、炭化物散在含む。
3. 2. に近い赤褐色土層 (STR/0) 焼土・炭化物多量に混入。
4. 灰褐色土層 (51K2/2) 焼土ブロック少量含む、炭化物を含む。
5. 灰褐色土層 (101K2/2) 炭化物少量含む。
6. 赤褐色土層 (101K3/2) 小石・黄色砂質ブロック混入。



第159図 H27号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	形制	法量			成形・調査・文様		備考	出土位置	
			口径	底径	高さ	内面	外面			
1	深鉢	高	16.0	2.8	(4.3)	ロクロナデ	自然釉付着	ロクロナデ→天井塚回廊ヘラケズリ→ツまみ粘付	完全灰緑	13.5cm
2	深鉢	高台杯	16.2	11.7	3.9	ロクロナデ		ロクロナデ→直線回廊糸切り後 回廊ヘラケズリ→村裏付	回廊灰緑	14cm
3	深鉢	杯	12.8	8.0	3.5	ロクロナデ	火障	ロクロナデ→ 直線回廊糸切り(方面不明) 火障	回廊灰緑 一部赤変	2V式
4	深鉢	浅	35.4	-	(12.8)	ロクロナデ		ロクロナデ	回廊灰緑	II式
5	深鉢	浅	27.8	-	16.0	ロクロナデ	自然釉付着	ロクロナデ 自然釉付着	回廊灰緑	14cm
6	深鉢	浅	-	31.4	(9.7)	当机籠→ナデ		回廊タタキ 直線ナデ	完全灰緑	12.5~14cm (1V)
7	土師器	小型浅	12.1	7.9	13.6	ロクロナデ		回廊タタキ→直線ヘラケズリ	完全灰緑 厚粘 赤変	6cm

第97表 H27号住居址出土遺物観察表

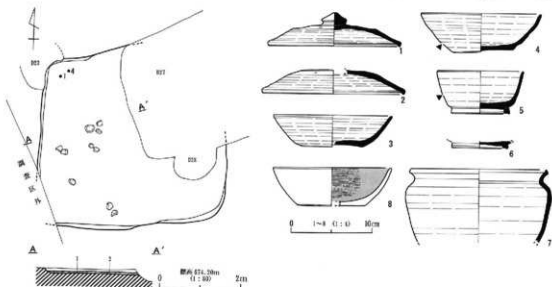
須恵器高台環で、床面より14cm浮いた状態で出土した。3は須恵器環で覆土中の出土である。一部胎土が赤化している。4は須恵器の広口甕と考えられる。5は須恵器の広口の甕か壺と考えられる。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部に面取りがある。6は須恵器甕の底部から胴部下半である。底部内面には当て具痕と考えられる跡が顕著に残る。7は土師器の小型甕でカマド前面の床面上から出土した。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半の所産時期が考えられる。

(28) H28号住居址 (第160図, 写真図版二十二・二十三)

本住居址は、調査地点B区南であるク-86、ケ85.86.87Grに位置する。残存状態は南西コーナーが調査区域外に、東側がH27号住居址によって削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.92m(残存)・南壁3.96m(残存)4.43m(推定)・西壁2.73m(検出)3.92m(推定)・東壁1.66m(残存)で、壁高さは西壁で最大12cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で11.57㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~7cmで貼られていた。



1. 黒褐色土層 (I) 砂粒少量・小石多量混入。
2. 暗褐色土層 (I) 小石多量混入。

第160図 H28号住居址及び出土遺物実測図

No	種別	寸法	法		内		外		備考	出土位置	
			壁	壁高	壁	壁高	壁	壁高			
1	須恵器	壺	18.1	3.0	4.1	ロクロナデ	火障	ロクロナデ→天身環(転ハレケズ)→つまみ貼付	火障	完全実測	10m 東区 D 23 H27-東区
2	須恵器	壺	17.4	—	12.8	ロクロナデ	火障	ロクロナデ→天身環(転ハレケズ)	火障	回転実測	Ⅱ区
3	須恵器	環	14.6	7.4	3.8	ロクロナデ	火障	ロクロナデ→ 成器(軸糸切り(方角不明))	火障	回転実測	Ⅱ区
4	須恵器	甕	14.9	7.6	4.8	ロクロナデ	火障	ロクロナデ→成器(軸糸切り(方角不明))	火障	完全実測 一部赤変	10m 142? IV区
5	須恵器	高台環	10.7	7.2	5.2	ロクロナデ		ロクロナデ→成器(軸糸切り(方角不明)) →径西台	火障	自然堆積	Ⅱ区
6	須恵器	長頸壺?	—	6.9	10.9	ロクロナデ		成器(軸糸切り)→成器(軸糸切り)→付高台		完全実測	Ⅱ区
7	須恵器	甕	17.0	—	10.0	ロクロナデ		ロクロナデ	自然堆積	断面実測	Ⅱ区
8	土師器	甕	14.6	8.2	4.2	丸形半	褐色底面	成器(軸糸切り)		断面実測 残存部	Ⅱ区

第98表 H28号住居址出土遺物実測表

出土遺物は覆土を中心に多く出土した。1と2は須恵器蓋で、1はD23号土坑とH27号住居址から出土した破片と接合関係にある。3と4は須恵器環である。いずれも底部回転糸切り離しである。4はH27号住居址出土の破片と接合関係にあるが、本体の大きな破片は床面より1cmほど浮いた状態で出土している。5は須恵器の高台環である。口縁部が直立気味に立ち上がる小振りのタイプである。6は器厚が薄く、須恵器の小型の長頸壺の底部部分と考えられる。周辺部を丁寧に打ち欠いていることから何らかの転用の可能性がある。7は須恵器の広口甕である。8は土師器環で、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。

本址はこれらの遺物より、8世紀後半の所産時期が考えられる。

第2節 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址 (第161図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点A区中央部であるC-19.20、D-18.19.20Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。また、H3号住居址とF2号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址が一番新しい。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-8°-Wを示す。規模は桁行4.46m (P1~P3)・奥行2.08m (P1~P4)で、桁行柱間は2.14~2.32mを測る。柱穴の形態はいずれもほぼ方形である。ピットの規模はP1が径91cm・深さ55cm、P2が径112cm・深さ72cm、P3が径150cm・深さ56cm、P4が径84cm・深さ53cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。また、P1からP2の間にはいわゆる布掘り状の掘り込みが検出された。

本址よりの、出土遺物は図示した礫が一点出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(2) F2号掘立柱建物址 (第161図, 写真図版二十五)

本址は、調査区A区中央部であるD-18.19Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN°を示す。規模は桁行3.65m (P1~P3)・奥行1.64m (P1~P4)で、桁行柱間は1.75~1.90mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ27cm、P2が径48cm・深さ15cm、P3が径64cm・深さ22cm、P4が径77cm・深さ29cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址よりの出土遺物はなく、よって本址の帰属時期も不明である。

(3) F3号掘立柱建物址 (第161図, 写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるラ-17.18Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は南北に長い側柱式建物址と考えられる。軸方位はN-24°-Wを示す。規模は桁行3.90m (P1~P3)で、桁行柱間は1.70~2.20mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径48cm・深さ27cm、P2が径52cm・深さ43cm、P3が径57cm・深さ47cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

No.	種別	産地	法蓋			成形・開造・文様			備考	出土位置
			口縁部	底面	底縁部	内面	外面	外面		
8	須恵器	備前	-	-	-	当具原一ナギ	自然焼付	網部タタキ	所本	F12 P3
No.	器種	素材	残存率	最大径	最大厚	重量	所見			出土位置
1	編み物石	雲山岩	完形	14.6	8.9	4.0	795.00	上・下縁部に彫り痕		F3 37.5cm
2	編み物石	雲山岩	完形	13.2	8.3	4.3	629.00			F3 38cm
3	編み物石	雲山岩	完形	15.3	9.6	6.0	1119.00			F3 38.5cm
4	編み物石	雲山岩	完形	13.7	8.2	3.8	706.00			F3 41cm
5	編み物石	雲山岩	完形	12.7	9.6	5.8	849.00			F3 32.5cm
6	編み物石	雲山岩	完形	11.8	9.8	4.4	610.00	手面に磨り面 右側と裏面に彫り痕		F3 37.5cm
7	土師器	備前雲山岩	6.8	6.1	4.6	231.91				F1

第99表 掘立柱建物址出土遺物観察表

本址からの出土遺物は、図示したようにP3より6点の編み物石と考えられる機群がまとまって出土した。またP2より土師器坏片1点、武蔵甕と呼ばれる土師器甕片1点が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(4) F 4号掘立柱建物址 (第162図, 写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるモ-32.33、ヤ-32.33Grに位置する。残存状態は良好であったが、ピットの間隔は不揃いであった。T2号特殊遺構とH9号住居址と重複関係にあるが、本址が一番新しい。

形態は南北方向に長軸を持つ1間×2間の側柱式建物址である。軸方位はN-5°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は8.75m²を測る。規模は桁行3.50m (P2~P4)・梁行2.50m (P1~P2)で、桁行柱間は1.31~2.19m・梁行柱間は2.42~2.50mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径23cm、P2が径29cm・深さ14cm、P3が径24cm・深さ18cm、P4が径28cm・深さ21cm、P5が径29cm・深さ15cm、P6が径20cm・深さ32cm、P7が径32cm・深さ21cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

(5) F 5号掘立柱建物址 (第162図, 写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるヤ-31Grに位置する。形態は残存状況から櫛列的な柱列とすべきかもしれない。

形態は南北方向に柱列を検出した。軸方位はN-13°-Wを示す。規模は2.70m (P1~P3)で、ピット間は1.26~1.44mを測る。形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径43cm・深さ24cm、P2が径45cm・深さ19cm、P3が径40cm・深さ19cmを測る。

本址からの出土遺物は、P3より内面黒色処理を施した土師器坏片が1点出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(6) F 6号掘立柱建物址 (第163図, 写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるモ-30、ヤ-30.31Grに位置する。形態は残存状況から櫛列的な柱列とすべきかもしれない。

形態は東西方向に柱列を検出した。軸方位はN-81°-Eを示す。規模は2.97m (P1~P3)で、ピット間は1.39~1.58mを測る。形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径51cm・深さ41cm、P2が径52cm・深さ24cm、P3が径48cm・深さ23cmを測る。

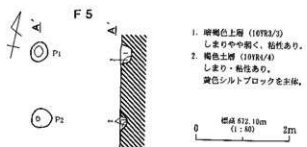
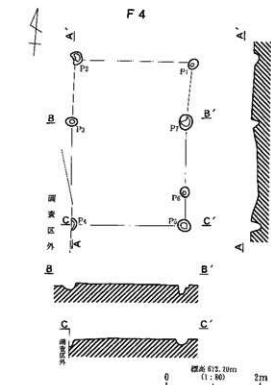
本址からの出土遺物は、P1より内面黒色処理を施した土師器坏片が2点と土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(7) F 7号掘立柱建物址 (第162図, 写真図版二十五)

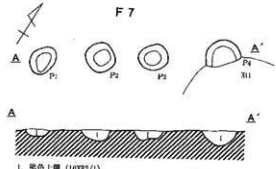
本址は、調査区B区南側であるナ-61.62、ニ-62Grに位置する。形態は残存状況から櫛列的な柱列とすべきかもしれない。

形態は東西方向に柱列を検出した。軸方位はN-55°-Eを示す。規模は3.87m (P1~P4)で、ピット間は1.09~1.52mを測る。形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径64cm・深さ18cm、P2が径62cm・深さ26cm、P3が径63cm・深さ24cm、P4が径75cm・深さ35cmを測る。

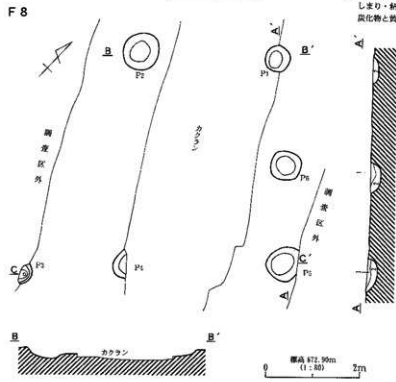
本址からの出土遺物は、P4より古墳時代に帰属する土師器坏片が1点出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



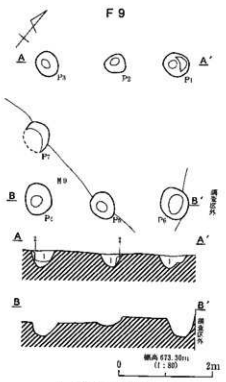
1. 赤褐色土層 (10TR3/3) しまりやや弱く、粘性あり。
2. 褐色土層 (10TR4/4) しまり・粘性あり。黄褐色シルトブロックを主体。



1. 赤色土層 (10TR2/1) しまり・粘性あり。炭化物と黄色粒子を含む。



1. 灰黄褐色土層 (10TR4/2) しまり弱く、粘性あり。
2. 黒褐色土層 (10TR3/1) しまりあり。粘性ややあり。



1. 赤褐色土層 (10TR3/1) しまり・粘性あり。黄褐色シルトブロック多く含む。
2. 褐色土層 (10TR4/4) 黄褐色シルト主体。しまり弱く、粘性あり。

第162図 F4・5・7～9号掘立柱建物址実測図

(8) F 8号掘立柱建物址 (第162図, 写真図版二十六)

本址は、調査区B区中央部であるヌ-57.58.59、ネ-58Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。また、H13号住居址と重複関係にあり、本址が新しい。

形態は東西方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-44°-Wを示す。規模は桁行5.49m (P3～P5)・梁行4.44m (P1～P5)で、桁行柱間は2.15～3.34mを測る。柱穴の形態はいずれもほぼ円形である。ピットの規模はP1が径55cm・深さ17cm、P2が径80cm・深さ23cm、P3が径46cm・深さ30cm、P4が径63cm・深さ18cm、P5が径76cm・深さ26cm、P6が径69cm・深さ24cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址からの出土遺物はP3より上師器片3点が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(9) F 9号掘立柱建物址 (第162図, 写真図版二十六)

本址は、調査区B区南側であるツ-66.67、テ-66Grに位置する。残存状態は良好であった。M9号溝状遺構と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は東西方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-39°-Wを示す。ピットに囲まれた面積は8.97mを測る。規模は桁行2.97m (P4～P6)・梁行3.02m (P1～P6)で、桁行柱間は1.39～1.58mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径55cm・深さ29cm、P2が径44cm・深さ27cm、P3が径55cm・深さ38cm、P4が径68cm・深さ34cm、P5が径60cm・深さ41cm、P6が径70cm・深さ39cm、P7が径66cm・深さ19cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より出土遺物はなく、よって本址の帰属時期も不明である。

(10) F 10号掘立柱建物址 (第163図, 写真図版二十六)

本址は調査区B区中央部であるセ-76、ソ-75.76Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-8°-Wを示す。規模は桁行6.61m (P2～P5)・梁行2.59m (P1～P2)で、桁行柱間は1.99～2.33mを測る。柱穴の形態はいずれも隅丸の方形である。ピットの規模はP1が径105cm・深さ38cm、P2が径113cm・深さ41cm、P3が径92cm・深さ25cm、P4が径74cm・深さ20cm、P5が径68cm・深さ28cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。また、P1からP2の間にはいわゆる布掘り状の掘り込みが検出された。

本址からの出土遺物は図示できなかったが、須恵器環・蓋・甕片、上師器環・甕片等が出土した。これらはいずれも奈良・平安時代に帰属する土器片である。しかし、本址の時期は不明である。

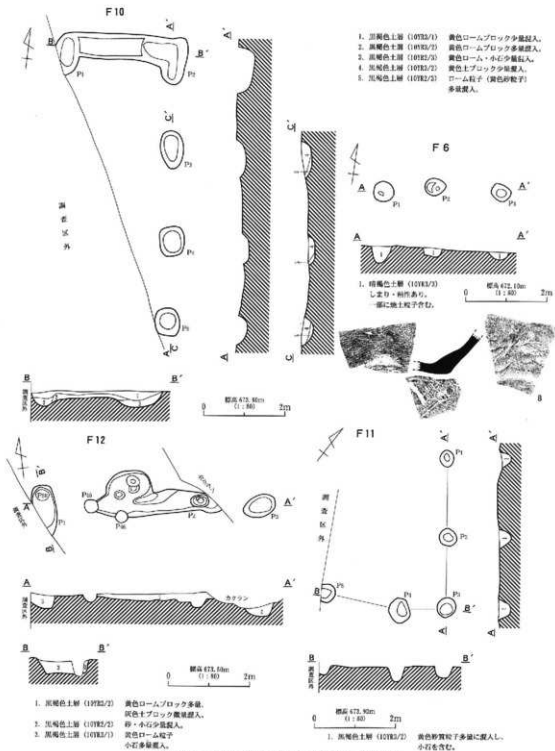
(11) F 11号掘立柱建物址 (第163図, 写真図版二十六)

本址は、調査区B区南端であるク-87.88Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となり、ピットの配列も不規則である。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-37°-Wを示す。規模は桁行3.70m (P1～P3)・梁行3.05m (P3～P5)で、桁行柱間は1.75～1.95m、梁行柱間は1.07～1.98mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径42cm・深さ30cm、P2が径44cm・深さ33cm、P3が径48cm・深さ32cm、P4が径62cm・深さ35cm、P5が径45cm・深さ26cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より、出土遺物はP2とP3から須恵器甕片1点ずつが出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(12) F 12号掘立柱建物址 (第163図)

本址は、調査区B区南側であるソ-73.74、タ-73.74Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外と



第163図 F6・10～12号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

なる。形態は東西方向に柱列を検出した。軸方位はN-84'-Wを示す。規模は5.36m (P1~P3)で、ピット間は1.02~1.52mを測る。形態はいずれも不整形である。ピットの規模はP1が径125cm・深さ33cm、P2が径45cm・深さ22cm、P3が径81cm・深さ34cmを測る。本址の出土遺物は順恵器甕があった。

第3節 土坑

(1) D 2号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

本址は、調査区A区のD-15Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は隅丸の方形である。規模は長軸0.70m (検出)・短軸0.87m・深さ40cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(2) D 3号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

本址は、調査区A区のD-14、E-14Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は長軸1.18m (検出)・短軸0.60m (検出)・深さ34cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) D 4号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

本址は、調査区B区中央のハ-53.54Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-31'-Eを示す。規模は長軸2.40m・短軸2.06m・深さ45cmを測る。本址からの出土遺物は図示した黒曜石の石核が1点出土したのみである。

(4) D 5号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

本址は、調査区B区中央部のテ-65.66、ト-65.66Grに位置する。残存状態は良好である。H19号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は楕円形で、長軸方位はN-72'-Wを示す。規模は長軸1.68m・短軸1.12m・深さ16cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片1点があったのみである。

(5) D 6号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区中央部のツ-67Grに位置する。残存状態は南側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-34'-Wを示す。規模は長軸1.30m・短軸0.87m (検出)・深さ11cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(6) D 7号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

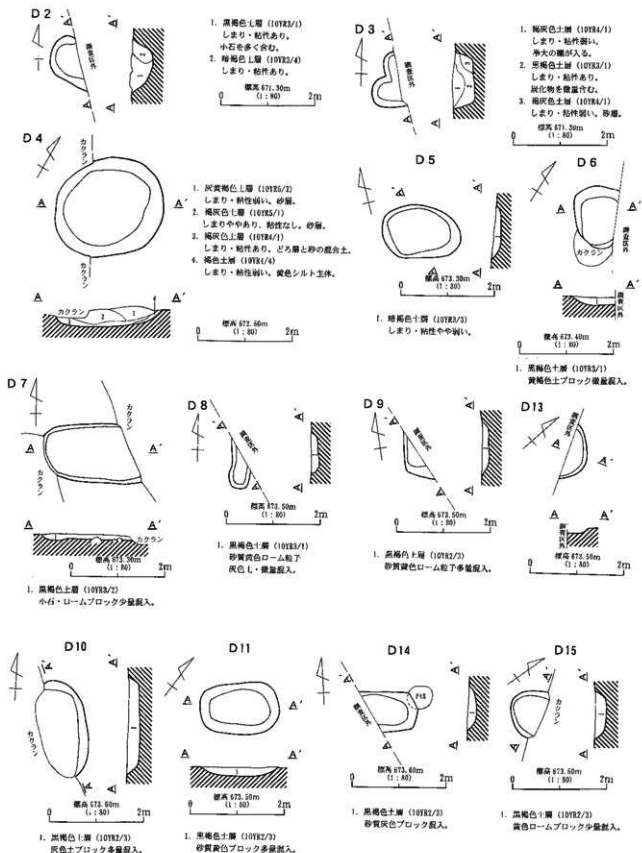
本址は、調査区B区南側のツ-68Grに位置する。残存状態は東側と西側をカクランによって削平されている。形態は隅丸方形で、長軸方位はN-90'-Wを示す。規模は長軸1.83m (残存)・短軸1.24m・深さ13cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(7) D 8号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のタ-70Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外となる。形態は不整形で、長軸方位はN-6'-Eを示す。規模は長軸0.68m (残存)・短軸0.44cm (残存)・深さ16cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(8) D 9号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

本址は、調査区B区南側のタ-71Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外となる。形態は方形である。規模は長軸1.22m (検出)・短軸0.40m (検出)・深さ17cmを測る。本址からの出土遺物は図



第164図 D2～11・13～15号土坑実測図

示した須恵器高台がある。ロクロ成形の後、底部は回転糸切り離しのあと、高台を貼付している。

本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、奈良・平安時代と考えられる。

(9) D10号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

本址は、調査区B区南側のソ-72.73Grに位置する。残存状態は西側をカクランによって削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は長軸2.08m(残存)・短軸1.00m(残存)・深さ29cmを測る。

本址の出土遺物は覆土中より須恵器破片、土師器杯・甕片が出土した。図示した須恵器円面硯は脚全体の1/8~1/6程が残存し、長方形の透窓が確認できる。透窓が等間隔とすると6~7個と推定出来る。陸部はほとんど残存していない。内外面に自然釉の付着が見られる。本硯はこれらの特徴から「圓足円面硯」の範疇に含まれるものと考えられる。本址はこれらの出土遺物より不確定ではあるが、平安時代の所産と考えられる。

(10) D11号土坑 (第164図, 写真図版二十七)

本址は、調査区B区南側のソ-74Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸1.65m・短軸1.12m・深さ15cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器破片、土師器破片が少量あったのみである。

(11) D13号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のタ-74Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は円形と考えられ、規模は長軸1.20m(検出)・短軸0.42m(検出)・深さ10cmを測る。本址より出土遺物は須恵器破片、土師器片が出土したのみである。

(12) D14号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のソ-74.75、タ-74.75Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は楕円形である。規模は長軸1.00m(検出)・短軸0.83m・深さ17cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(13) D15号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のソ-74Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は不明で、長軸方位はN-28°-Wを示す。規模は長軸1.04m(残存)・短軸0.73m(残存)・深さ27cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器破片、土師器片等があった。図示した遺物は須恵器蓋の端部で返りの弱いタイプである。

(14) D16号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

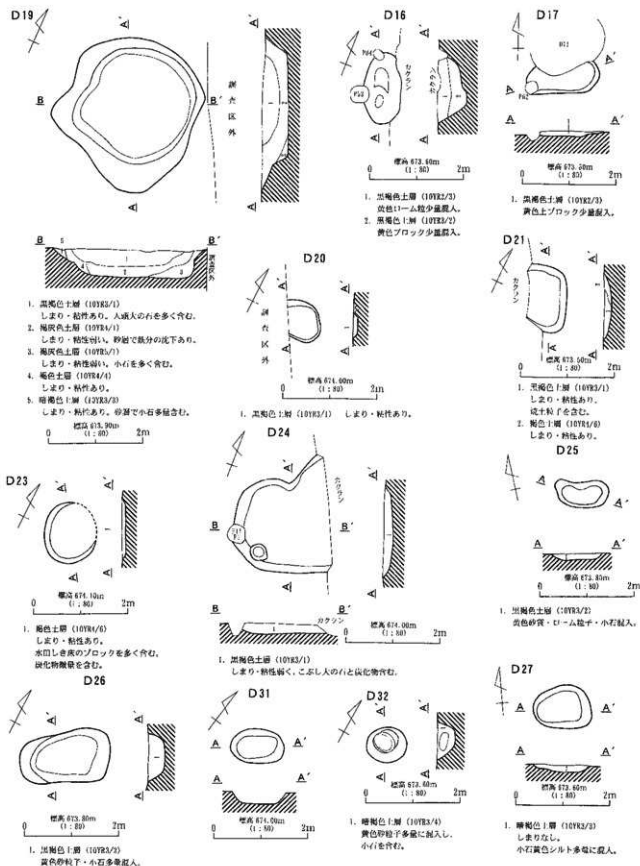
本址は、調査区B区南側のソ-73Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形であり、底面はテラスとビット状になる。規模は長軸1.50m・短軸0.80m・深さ62cmを測る。

本址より出土遺物は、須恵器蓋片1点・破片3点があったのみである。

(15) D17号土坑 (第165図)

本址は、調査区B区南側のソ-74Grに位置する。残存状態は北側をD11号土坑により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-85°-Eを示す。規模は長軸1.54m・短軸0.62m・深さ6cmを測る。

本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



第165図 D16・17・19・21・23~27・31・32村土坑実測図

(16) D19号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のケ-84.85、コ-84Grに位置する。残存状態は良好である。形態は底面は円形で、長軸方位はN-25°-Wを示す。規模は長軸3.30m・短軸3.10m・深さ59cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した須恵器坏や青磁片があった。4は須恵器長頸壺の頸部である。5は須恵器坏の底部、6と7は須恵器高台坏の底部である。13は龍泉窯系の青磁碗の底部である。14は中世常滑の片口鉢で2/3程が残存している。白色を基調に薄い橙色が入る。15は常滑の壺底部と考えられ。

本址はこれらの出土遺物から、所産時期は中世で13世紀代を中心とする時期が考えられる。

(17) D20号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のコ-85Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は不整形で、長軸方位はN-61°-Wを示す。規模は長軸1.00m(検出)・短軸0.75m・深さ12cmを測る。

本址より出土遺物は、須恵器甕片1点と須恵器坏片1点が出土したのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(18) D21号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のソ-72、タ-72Grに位置する。残存状態は西側がカクランにより削平されている。形態は長方形で、長軸方位はN-24°-Wを示す。規模は長軸1.40m・短軸0.82m(残存)・深さ16cmを測る。出土遺物は図示した8の土師器甕があった。底部から胴部下半で、外面は削りを施す。

(19) D23号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のケ-85.86、コ-85.86Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-22°-Wを示す。規模は長軸1.28m・短軸1.10m・深さ10cmを測る。

本址の出土遺物は、須恵器甕片2点・坏片3点、土師器甕片4点が出土したのみである。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、不確定であるが平安時代と考えられる。

(20) D24号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

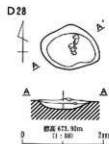
本址は、調査区B区南側のケ-87Grに位置する。残存状態は東側がカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-26°-Wを示す。規模は長軸2.48m(残存)・短軸2.10m・深さ21cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片、土師器甕片の他に、図示した12.16.17の龍泉窯系の青磁碗が出土している。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、中世で13世紀代と考えられる。

(21) D25号土坑 (第165図)

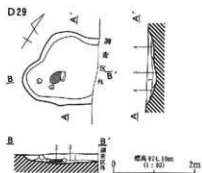
本址は、調査区B区南側のコ-83.84、サ-83.84Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-77°-Wを示す。規模は長軸1.10m・短軸0.54m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片1点があったのみである。

(22) D26号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

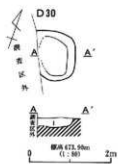
本址は、調査区B区南側のケ-84、コ-83.84Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形で、長軸方位はN-59°-Wを示す。規模は長軸1.90m・短軸1.02m・深さ38cmを測る。本址より出土遺物は無く、本址の帰属時期は不明である。



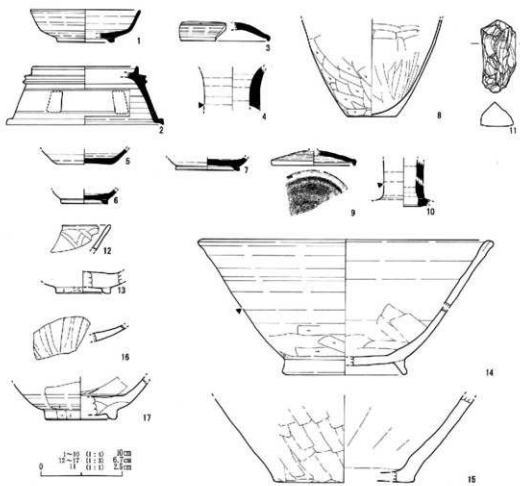
1. 黒褐色土層 (10132/1)
炭化物・炭化粒子多量混入。
洗土粒子混入を含む。
2. 暗褐色土層 (10132/2)
しまり・粘性ややあり。
炭化物少量含む。下層に織分の沈下あり。



1. 暗褐色土層 (10132/3) 黄色砂質シルト多く含む。炭少量混入。
2. 緑褐色土層 (10132/4) 炭化物を含む。
3. 暗褐色土層 (10132/2) しまり・粘性あり。炭化物焼土粒子含む。
4. 黒褐色土層 (10132/2) しまり・粘性あり。炭化物・小石半量含む。



1. 黒褐色土層 (10132/2)
黄色シルト多量に含み小石が混在。



第166図 D28～30号土坑及び出土遺物実測図

(23) D27号土坑 (第165図, 写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のス-79Grに位置する。残存状態は良好である。形態は隅丸方形で、長軸方位はN-89°-Wを示す。規模は長軸1.20m・短軸0.92m・深さ15cmを測る。

本址からの出土遺物は土師器片2点が出土したのみである。

(24) D28号土坑 (第166図, 写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のク-86、ケ-86Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-87°-Wを示す。規模は長軸1.45m・短軸1.10m・深さ21cmを測る。本址は2層に分かれ、1層中に炭化物を多量に含んでいた。

本址からの出土遺物は、図示した須恵器蓋と長頸壺がある。10の須恵器長頸壺は土坑底面より出土した。これらの出土遺物から、本址は平安時代に帰属すると考えられる。

(25) D29号土坑 (第166図, 写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のキ-88Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は不整形である。長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸1.85m(検出)・短軸1.78m・深さ17cmを測る。本址は2層上面に多量の炭化物和焼土が検出された。

本址からの出土遺物は須恵器坏片1点・土師器片4点のみである。D28号土坑と形態や覆土の状況が似ていることから、所産時期は同じく平安時代に帰属すると考えられる。

(26) D30号土坑 (第166図, 写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のコ-84、サ-84Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は方形で、長軸方位はN-26°-Wを示す。規模は長軸1.20m・短軸0.90m(検出)・深さ19cmを測る。本址より出土遺物はなく、本址の帰属時期は不明である。

No.	種別	量	定 量		状 態・詳 察・文 様		備 考	出土位置	
			(個数)	(重量)	内 容	特 徴			
1	須恵器	高台坪	13.5	7.0	3.9	コクロナデ	コクロナデ・底面凹陥部より一段高台 火焼	凹陥部測	D9
2	須恵器	円形椀	12.8	19.3	7.1	コクロナデ 自然焼付着	コクロナデ一縁等部付 底面と縁を繋いだ後溝かしを切る 自然焼付着	凹陥部測 溝かしは本図に あるものと仮定すると6-7?	D10
3	須恵器	蓋	-	-	-	コクロナデ	コクロナデ 大井部凹陥ヘラケズリ	破片実測	D19-B
4	須恵器	長頸壺	-	(5.3)	-	コクロナデ 自然焼付着	コクロナデ 自然焼付着	破片実測	D19-IK
5	須恵器	杯	-	6.5	(1.9)	コクロナデ	コクロナデ 底面糸切り	破片実測	D19 Ⅲ区
6	須恵器	高台坪	-	3.8	(1.8)	コクロナデ 火焼	コクロナデ・底面凹陥部切り付高台	凹陥部測	D19-IV区
7	須恵器	高台坪	-	7.8	(1.6)	コクロナデ	コクロナデ・底面凹陥部切り(方向不明) 一段高台 火焼	凹陥部測	D19
8	土師器	壺	-	6.0	(1.19)	ヘラナデ	凹陥部ヘラケズリ 底面ヘラケズリ	凹陥部測	D21
9	須恵器	蓋	19.2	-	(1.8)	コクロナデ	コクロナデ・大井部凹陥ヘラケズリ	凹陥部測 ヘラ記付有り	D28
10	須恵器	長頸壺	-	(5.7)	-	コクロナデ	コクロナデ 自然焼付着	破片実測	Ⅷc D28
12	青磁	碗	-	(2.5)	-	陶物	陶物 蓮片文	破片実測 蓮葉 13C	D24-B区
13	青磁	碗	-	5.0	(2.1)	陶物	底面切り離し底付高台 凹陥部ヘラケズリ 陶物 蓮片文?	破片実測 蓮葉 鎌倉13C	D19-II区
14	陶器	川口鉢	27.0	11.4	12.3	コクロナデ 底面ナデ	コクロナデ 下半部ヘラケズリ 底縁切り離し後付高台 ナデ	凹陥部測 高台 こんね鉢 13C中	D19-I~IV区
15	陶器	壺	-	12.9	(7.9)	ヘラナデ? 自然焼?	ヘラナデ	破片実測 高台	D19-II~III区
16	青磁	碗	-	(1.8)	-	陶物	陶物 蓮片文	破片実測 蓮葉 13C	D24-IV区
17	青磁	碗	-	6.0	(3.9)	コクロナデ 陶物	コクロナデ 高台 底面凹陥部ヘラケズリ 陶物 蓮片文	凹陥部測 蓮葉 12C後半	D24-B区
Ⅷ	器 種	数	残存率	最大径	最大厚	定 量		所 属	出土位置
11	破片	黒曜石		2.2	1.0	0.8	1.51		D4

第100表 土坑出土遺物観察表

(27) D31号土坑 (第165図, 写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のク-88Grに位置する。残存状態は良好で、形態は楕円形である。長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸1.11m・短軸0.72m・深さ24cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器坏片1点、土師器甕片1点があったのみで、本址の帰属時期は不明である。

(28) D32号土坑 (第165図, 写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のス-79Grに位置する。H24号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-60°-Eを示す。規模は長軸0.85m・短軸0.76m・深さ34cmを測る。また、本址は底面より浮いた状態で、大型の河原礫が検出された。

本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

第4節 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構 (第167・169図, 写真図版三十)

本址は、調査区A区中央のC-18.19, D-16.17.18, E-15.16.17.18Grに位置する。残存状態は西側と東側が調査区域外となる。H3号住居址・M3号溝状遺構と重複関係にあるが、本址が一番新しい。

形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ11.5m(検出)・幅98~200cm・深さ5~48cmを測る。

本址からの遺物は、幅広い時期のものが出土した。1は須恵器蓋で、つまみ部がやや扁平となっている。2は須恵器坏、3は須恵器の高台坏である。4は灰釉陶器壺の肩部の破片と考えられる。釉が多量に付着している。5は土師器甕で、器厚の薄さなどからいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。6は土師器鉢である。成形技法や形態は須恵器と同じであるが、色調と黒斑の存在から土師器とした。7は磨き石と考えられる。8は在地前山焼の陶器であり、皿と考えられる。本址は多様な時期の遺物が出土する事、又覆土中に水田耕作土が混入していた事から、所産時期は近世と考えられる。

(2) M2号溝状遺構 (第167図, 写真図版三十)

本址は、調査区A区中央のD-15, E-15Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ1.72m(検出)・幅57~71cm・深さ6~27cmを測る。本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) M3号溝状遺構 (第167・169図, 写真図版三十)

本址は、調査区A区中央のD-18.19Grに位置する。残存状態はM1号溝状遺構により削平されている。H3号住居址やF1号掘立柱建物址と重複関係にあるが、本址の方が新しい。

形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ2.70m(検出)・幅64~200cm・深さ7~26cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した土師器坏がある。口縁部が内湾するタイプで、底部が肥厚している。特徴から古墳時代中期末から後期初頭に帰属する坏と考えられるため、H3号住居址からの混入品と考えられる。よって本址の帰属時期は不明である。

(4) M5号溝状遺構 (第168・169図, 写真図版三十)

本址は、調査区B区のホ-45~46Grに位置する。残存状態は西側は調査区域外となる。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ8.00m(検出)・幅0.8~1.35m・深さ2~21cmを測る。本址からの出土遺物は土師器坏片、須恵器坏・壺片、不明鉄製品があったのみで

あり、本址の帰属時期は不明である。

(5) M6号溝状遺構 (第167・169図, 写真図版三十)

本址は、調査区B区北側のラ-16.17、リ-16.17Grに位置する。残存状態は西側と東側は調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。覆土は自然堆積で、規模は長さ4.45m(検出)・幅1.06～1.36m・深さ27～39cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した17の須恵器高台杯、18の須恵器壺底部、19の打製石斧があったが、帰属時期は不明である。

(6) M7号溝状遺構 (第167図, 写真図版三十)

本址は、調査区B区中央のナ-62、ニ-62Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ1.70m(検出)・幅0.35～0.56m・深さ10～21cmを測る。

本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(7) M4号溝状遺構 (第168・169図, 写真図版三十)

本址は、調査区B区北側のフ-48～51、ヘ-45～49、ホ-44～46Grに位置する。残存状態は西側と東側は調査区域外となる。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、北端で東側にL字に屈曲する。溝底面は逆台形を呈する。溝底面で流水の痕跡は確認できなかった。規模は長さ25.40m(検出)・幅1.55～2.00m・深さ3～61cmを測る。覆土は上層に砂層が堆積していた。

本址からは多様な遺物が出土した。13は縄文土器深鉢の底部～胴部で、底部には網代痕が付いている。10は緑釉陶器碗で底部が残存し、覆土中より出土した。胎土は濃い鼠色である。

11は龍泉窯系の青磁碗で、外面に連弁文が施されている。12は東濃系の山茶碗で底部のみ残存していた。本址はこれらの遺物より、13世紀代の所産時期が考えられる。

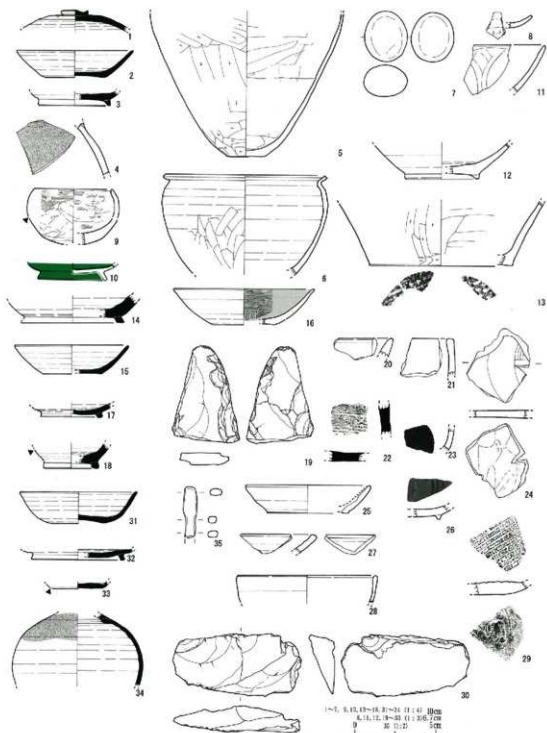
(8) M8号溝状遺構 (第168・169図, 写真図版三十一)

本址は、調査区B区中央のノ-54、ハ-54Grに位置する。残存状態は東側と西側は調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ4.60m(検出)・幅2.80～3.25m・深さ30～49cmを測る。

本址からの出土遺物は、時期の多様なものが出土した。20は尾張系の山茶碗の口縁部で、13世紀前半の時期が考えられる。21は土鍋片の口縁部でやや内湾する。22は須恵質のおろし皿で刻みが入る。23は在地産の碗か徳利で近世末の所産である。24は土鍋の底部である。25はカワラケで、胎土は白色で良く精練されていた。26は伊万里染め付け碗で、18世紀末から19世紀前半の資料である。27は唐津の盛り鉢と考えられる。28は在地前山焼と考えられる丸碗である。29は古瀬戸前期様式のおろし皿であり、底部は回転糸切り離しが行われている。30は打製石斧である。

このように本址からは多様な遺物が出土しているが、中世所産の遺物が主体を占めることと、近世の陶磁器類はいずれも覆土上層からの出土であることを考え合わせると、本址の所産時期はM4号溝状遺構と同じく中世と考えられる。

また、本址の性格であるが、第168図に示したようにM4号溝状遺構とM8号溝状遺構はその検出位置からコの字状に繋がる可能性がある。この推定を裏付けるものとして、覆土の酷似と出土遺物の種類の共通があげられる。もしこの推定が可能であれば、M4号とM8号は中世館跡の堀の可能性が指摘できる。なお、コの字に囲まれた一辺は内側で約38m、溝外側で45mを測る。M8号とM4号の溝底面の海拔は671.90mと671.80mで、42m離れて10cmの差異であった。



第169图 M13~6.8.9号溝状遺構出土遺物実測図

(9) M9号溝状遺構 (第167図, 写真図版三十)

本址は、調査区B区南側のツ-67、テ-67、ト-67Gに位置する。残存状態は西側と東側は調査区域外となる。F9号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ6.40m(検出)・幅1.94~2.94m・深さ9~19cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中から多く出土した。31は須恵器坏である。32は須恵器高台坏の底部であり、回転糸切り難しが行われている。33は須恵器坏の底部、34は須恵器長頸壺の肩部であり、自然軸が付着している。

本址はこれらの出土遺物より、奈良・平安時代の所産と考えられる。

No.	種別	器種	法量 口徑(φ) 底径(φ) 高さ(㎝)	成形・調製・文様			備考	出土位置
				内面	外面	面		
1	須恵器	蓋	- 3.3 (2.6)	ロクロナデ	火井部回転ヘラケズリ→つまみ取付	完全素刷	M1	
2	須恵器	坏	14.2 7.0 3.5	ロクロナデ 火押	ロクロナデ→底部回転糸切り 火押	回転素刷	M1	
3	須恵器	高台坏	- 8.9 (1.7)	ロクロナデ 火押	ロクロナデ→底部回転糸切り(方向不明) →付高台 火押	回転素刷	M1	
4	灰釉陶器	壺	- - -	ココナデ	脇輪	破片素刷	M1	
5	土師器	罌	- 4.6 (17.4)	ヘラナデ	胴部ヘラケズリ 底面ヘラケズリ	回転素刷 摩耗	M1	
6	土師器	鉢	20.2 -	(12.2) ロクロナデ	ロクロナデ→胴下部分ヘラナデ	回転素刷	M1	
8	陶器	在位器	- (1.1)	ロクロナデ 全周輪軸	ロクロナデ 底部以外脇輪	破片素刷 磨山?	M1	
9	土師器	坏	9.6 -	(6.7) ヘラナデ→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	回転素刷	M3	
10	緑釉陶器	筒	- 8.5 (1.9)	轆轤	底部回転ヘラケズリ・付高台→脇輪	回転素刷	M4-II区	
11	青磁	筒	- - (4.6)	轆轤	破片 蓋付文	破片素刷 甕蓋 13C	M4-I区	
12	陶器	山形物	- 6.8 (3.3)	ロクロナデ 底部ナデ	ロクロナデ 底部糸切り後付高台 ナデ	回転素刷 甕蓋 13C前半中 6x7形式	M4-II区 F層	
13	縄文	漆鉢	- 17.6 (7.9)	ヘラナデ	胴部ヘラケズリ 底部網代漉	回転素刷	M4-I区 F層	
14	須恵器	壺	- 12.7 (3.4)	ロクロナデ 自然軸付蓋	ロクロナデ 付高台	回転素刷	M5	
15	須恵器	坏	14.4 7.2 3.3	ロクロナデ 火押	ロクロナデ→底部回転糸切り 火押	回転素刷	M5	
16	土師器	坏	17.2 7.6 4.4	ミガキ・黒色厚焼	底部回転ヘラケズリ	回転素刷	M5	
17	須恵器	高台坏	- 7.6 (1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り 付高台 火押	回転素刷	M6	
18	須恵器	蓋	- 6.8 (3.1)	ロクロナデ	付高台 自然軸付蓋	回転素刷	M6	
20	陶器	山形物	- (1.9)	ロクロナデ 自然軸付蓋?	ロクロナデ	破片素刷 甕蓋 13C前半	M8-II区	
21	陶器	土師	- -	ココナデ	ココナデ	破片素刷	M8-II区	
22	須恵器	おろし皿	- - -	ぎざみ入れ	ナデ	布木	M8-II区	
23	陶器	輪軸器	- (2.1)	ロクロナデ 脇輪	ロクロナデ 脇輪	破片素刷 在位 逆形跡 18C末~19C	M8-II区	
24	陶器	土師	- -	ナデ	ナデ	破片素刷	M8	
25	土師器	安らわし	11.8 7.4 2.5	底面回転糸切り	底面回転糸切り	回転素刷 甕蓋	M8-II区	
26	陶器	染付瓶	- (1.3)	轆轤	轆轤	破片素刷 伊万世 18C末~19C前半	M8	
27	陶器	もり鉢	- (1.8)	ロクロナデ 脇輪	ロクロナデ 脇輪	破片素刷 甕蓋	M8	
28	陶器	丸鉢	12.9 -	(2.5) ロクロナデ 脇輪	ロクロナデ 脇輪	回転素刷 在位山形 近世焼 13C 前期様式	M8-II区	
29	陶器	おろし皿	- (1.1)	ナデ→ヘラ状工具でぎざみ	底部回転糸切り ナデ	破片素刷 甕蓋	M8	
31	須恵器	坏	14.4 6.4 3.8	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底部回転糸切り(方向不明) 火押	回転素刷	M9-I区	
32	須恵器	高台坏	- 11.5 (1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ→付高台	回転素刷	M9-I区	
33	須恵器	坏	- 6.1 (1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り→回転ヘラケズリ	完全素刷	M9-II区	
34	須恵器	壺形器	- (8.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然軸付蓋	回転素刷	M9-III区	
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見
7	土	砂質硬灰岩	6.2	8.3	3.9	126.36		出土位置
19	打製石斧	輝石火山岩	(8.8)	(6.1)	(1.2)	(68.47)	刃部欠損	M6
30	打製石斧	砂質砂岩	6.7	11.7	2.4	141.02		M8-I区
35	不明	紙	(3.2)	(0.9)	(0.4)			M5

第101表 溝状遺構出土遺物調査表

第5節 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構 (第170図, 写真図版三十一)

本址は、調査区A区中央のD-15.16Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北に長軸を持つ不整形で、規模は長軸1.26m・短軸0.86m・深さ15cmを測る。覆土は上層が良く焼けており、2層上面は特に焼けていた。

本址からの出土遺物は、図示した3の須恵器四耳壺と5の葎石のみであった。葎石は上面が窪むほどに葎き痕があった。本址の帰属時期は不明である。

(2) T2号特殊遺構 (第170図, 写真図版三十一)

本址は、調査区B区北側のモ-31.32、ヤ-32Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、規模は北壁2.25m・南壁2.46m・東壁2.81m・西壁2.90mを測る。面積は6.85㎡で、長軸方位はN-16°-Wを測る。壁はなだらかに立ち上がり、壁高さは東壁で最大15cmを測る。遺構底面は鉄分が沈下したような赤褐色の硬質化した土で、全体に凹凸が激しかった。

本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) T3号特殊遺構 (第170図, 写真図版三十一)

本址は、調査区B区南側のコ-82Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北に長軸を持つ不整形で、規模は長軸1.95m・短軸1.33m・深さ12cmを測る。覆土は上層が良く焼けていた。

本址からの出土遺物は図示した須恵器類があった。1は須恵器蓋であり、つまみは扁平である。2は須恵器高台坏で、口縁部が直立気味に立ち上がり、身が深いタイプの坏である。4は須恵器甕の肩部であり、濃い緑色の自然釉が流れるほどかかっている。

本址はこれら出土遺物より奈良・平安時代に帰属すると考えられる。

(4) T4号特殊遺構 (第171図, 写真図版三十二)

本址は、調査区B区南側のコ-82.83.84、サ-82.83.84Grに位置する。残存状態は東側と西側が調査区域外となる。また、北側と南側は顕著な掘り込みを持たず、地山面となる。

本址の特徴は北東側に土坑を伴う硬質面の広がり方が確認されたことである。この硬質面の広がり方は南北8.02m・東西5.47mの広がり、特に焼土を伴う土坑周辺は硬質化していた。この焼土を伴う土坑は規模が長軸1.83m・短軸1.75m・深さ15cmを測る。焼土は2箇所に分かれており、周辺部から人頭大の川原石が散乱した状態で検出された。しかし、焼土はいずれもカマド火床部のように硬質化はしていなかった。

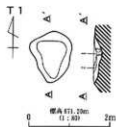
本址からの出土遺物は、6の須恵器蓋と7の須恵器高台坏がある。8は土師器坏で内面黒色処理されている。9～11は須恵器甕である。9は肩部に自然釉が付着している。11は外面が赤化している。

T3号とT4号は検出のレベルこそ差があるが、検出位置が近接する事、形態や出土遺物が似通っている事など、性格を特定できないが同一の性格を有する遺構と考えられる。

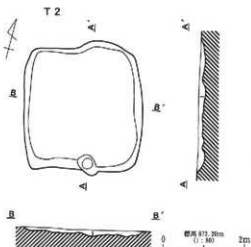
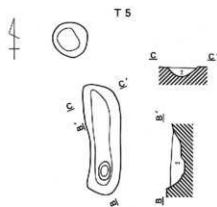
(5) T5号特殊遺構 (第170図, 写真図版三十一)

本址は、調査区B区南側のシ-78.79.80Grに位置する。残存状態は良好である。本址は3つの土坑状の遺構が連なるように検出され、その配列が伴に連関性を示唆するため一つの遺構として扱った。各掘り込みの形態は、北から円形の土坑で径91・深さ11cm。中央の土坑が楕円形で、長軸2.68m・短軸0.75cm・深さ39cm。南端が楕円形で、規模が長軸2.75m・短軸0.95m・深さ31cmを測る。

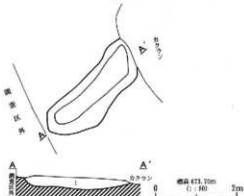
本址からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。



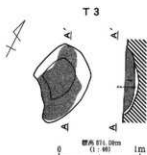
1. 黒褐色土層 (10YR4/1) しまり弱く、粘性あり。黄土ブロックと黄色土ブロックを多く含む。
1. 赤褐色土層 (10YR4/5) しまりあり、粘性弱い。上面よく焼けている。下層は地山が露けた上。
1. 灰色土層 (10YR2/1) しまり、粘性あり。黄色シルトブロックを含む。



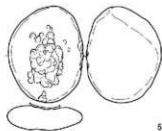
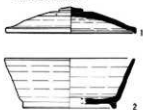
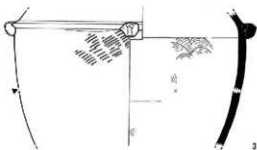
1. 深黄褐色土層 (10YR4/2) しまり、粘性あり。下面に大粒の鉄分沈下あり。



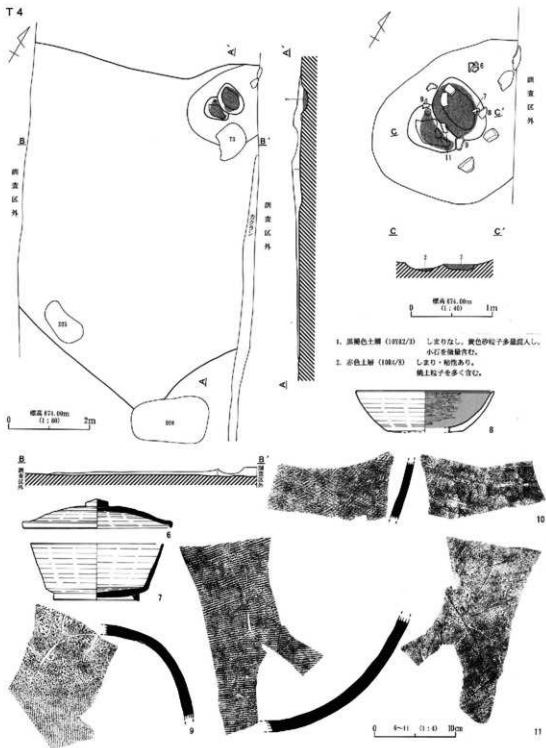
1. 暗黄褐色土層 (10YR2/2) 小石・ローム散在。ニクタン
2. 褐灰色土層 (10YR4/1) しまり、粘性あり。小石の間に灰色土含む。



1. 明赤褐色土層 (2.5Y5/3) 黄土。
2. 暗赤褐色土層 (10YR3/5) 穴跡による焼け込み。



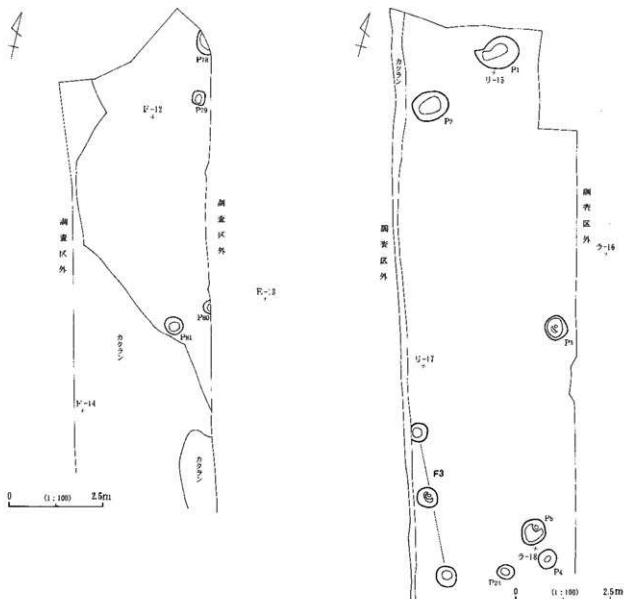
第170図 T1～3.5号特殊遺構及び出土遺物実測図



第171図 T4号特殊遺構及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量			成形・調査・文様				備考	出土位置
			山内	山外	山内	内	外	内	外		
1	須恵罎	蓋	16.0	2.9	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	大井部四輪ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	外面作楽	T3-1区
2	須恵罎	高台杯	16.0	11.5	6.1	ロクロナデ	ロクロナデ	底部四輪ヘラケズリ→高台	四輪実測		T3-1区
3	須恵罎	四耳壺	-	-	(16.4)	タタキ→持帯貼付→耳貼付	タタキ	自然輪付蓋	四輪実測		T1
4	須恵罎	壺	-	-	-	ナデ	タタキ	輪付蓋	拓本		T3-1区
6	須恵罎	蓋	18.2	2.8	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	大井部四輪ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測		T4-0cm
7	須恵罎	高台杯	16.3	10.6	6.9	ロクロナデ 火捺	ロクロナデ	底成右四輪縁切り→付高台 火捺	四輪実測		T4-1cm
8	土師罎	杯	17.0	9.4	(5.1)	ミガキ・黒色彫理	底成子持らヘラケズリ		四輪実測		T4-2cm
9	須恵罎	壺	-	-	-	ナデ	タタキ	片煎輪付蓋	拓本		T4-2.5~3cm
10	須恵罎	壺	-	-	-	陶具破	タタキ (格子)		拓本		T4-3cm
11	須恵罎	壺	-	-	-	ナデ	自然輪付蓋		拓本		T4-III区 2cm
No.	器種	器材	成作年	最大径	最大幅	最大厚	重量	所見			出土位置
5	甌石	凝灰岩		11.8	9.2	3.0	353.54				T1

第102表 特殊遺構出土遺物観察表



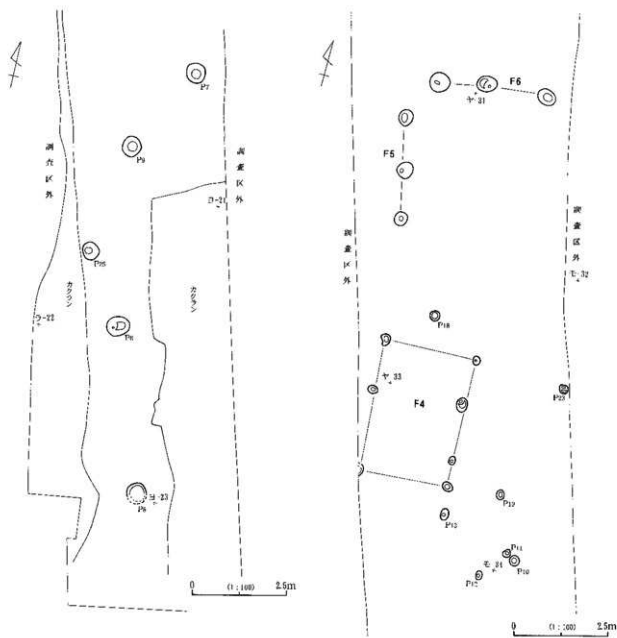
第172図 ビット実測図 (I)

第6節 ピット群 (第172~176図)

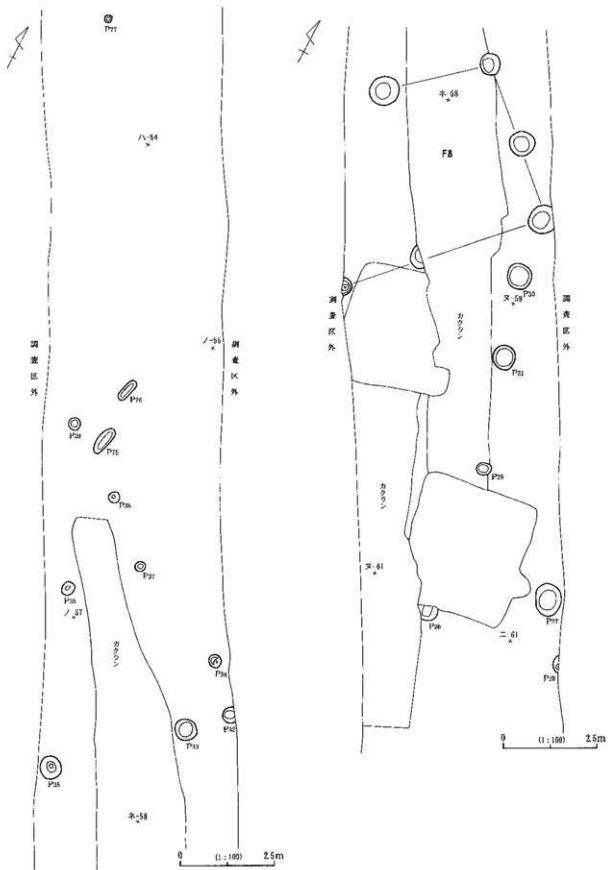
本遺跡の単独ピットは市道遺跡のように偏在することなく、調査区全体において検出された。先に述べたM4号溝状遺構とM8号溝状遺構に囲まれた空間を、中世館跡の可能性があると述べたが、この囲まれた空間からは、中世と考えられる単独ピットは検出されなかった。

形態円形が主体で、楕円形と不整形がそれに続く。規模は径50cm内外のものが多かった。また、顕著な柱痕は確認できなかった。

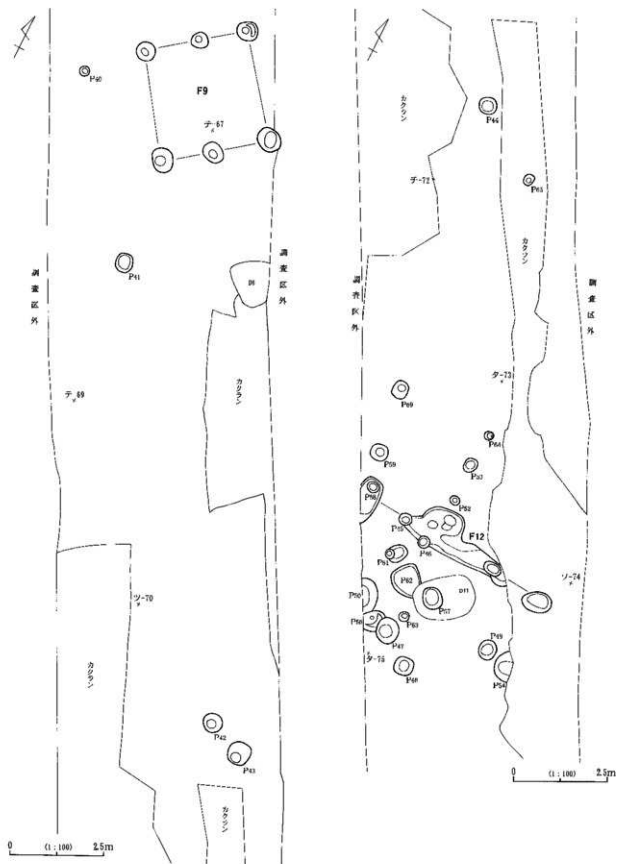
単独ピットからの出土遺物は図示できるものはなかったが、上器片として土師器甕・坏、須恵器坏・甕等が19基のピットから出土した。出土品の帰属時期は古墳時代～平安時代のものであった。なお、一覧表には覆土等から判断した時代を記載してある。



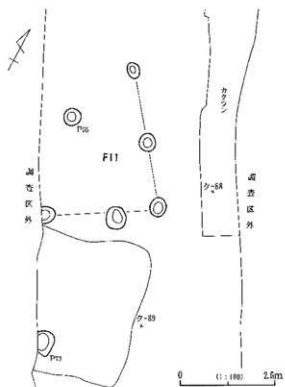
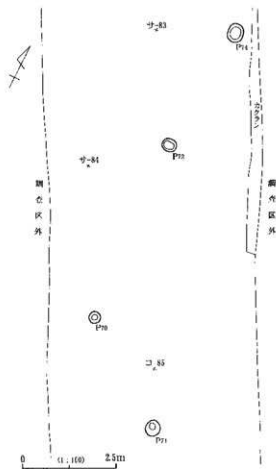
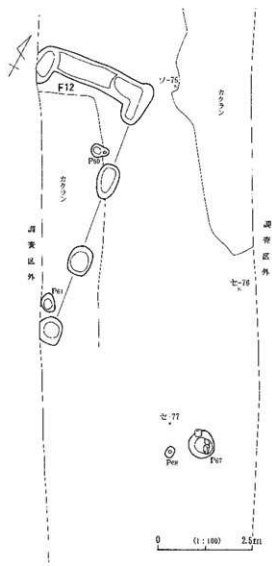
第173図 ピット実測図(2)



第174図 ビット実測図 (3)



第175図 ビット実測図 (4)



第176図 ピット実測図 (5)

通称名	出土位置	長径×短径×深さ	形 態	土 質	年代	重要関係
P1	ウー15	115×80×59.5	不整形	黒褐色土 (10YR3/1)	古代	
P2	リ-15	93×77×27	楕円形	*	*	
P3	ラ-15	66×37×40 (テラス32)	*	*	*	土師器(古墳)
P4	ヨ-18	32×48×42	円形	*	*	土師器
P5	ヨウ-17	68×60×22 (テラス15)	楕円形	黒褐色土	*	土師器
P6	コ-21	61×49×30 (テラス24)	*	黒褐色土	*	
P7	ヨ-20	32×49×36	円形	*	*	弥生
P8	ヨ-23	55×(26)×12	楕円形?	*	*	H8を切る
P9	ヨ-20	52×50×28.5	円形	*	*	土師器(古墳)
P10	メ-33	27×37×12	*	黒灰色土 しまり・粘性弱い、ローム粒子多量。	中世	
P11	*	22×19×14	*	黒灰色土	*	
P12	モ-34	22×16×3	楕円形	*	*	
P13	モ-33	33×23×7.5	*	*	*	
P14						F4に属す
P15						*
P16						*
P17						*
P18	モ-32	26×22×13	円形	黒灰色土	中世	
P19	モ-31	27×24×11	楕円形?	*	*	
P20						F4に属す
P21						*
P22						*
P23	メ-32	23×22×6 (テラス8)	方形	黒灰色土		
P24	ウ-18	46×38×18.5	楕円形	黒色土 黄色シルトブロック含	古代	
P25	ヨ-21	47×44×23.5	円形	黒色土	*	
P26	ニ-61	55×40×27	楕円形?	*	*	
P27	ナ-60	82×67×35.5	楕円形	*	*	土師器
P28	ナ-60-61	(43)×(17)×13.5	-	*	*	
P29	ニ-60	37×32×27	楕円形	黒灰色土 黄色シルトブロック含	中世?	
P30	ニ-58-58	67×62×18.5	円形	黒色土	古代	土師器
P31	ニ-59	63×56×18	*	*	*	縄文
P32	メ-37	40×(33)×31.5	楕円形?	黒灰色土	中世	
P33	メ-36-57	61×55×23.5	円形	*	*	
P34	ネ-56	34×31×25 (テラス16)	*	*	*	
P35	ネ-37	60×54×41.5	*	黒色土	古代	
P36	ノ-56	36×31×20.5	楕円形	黒灰色土	中世	
P37	ネ-56	27×27×7.5	円形	*	*	
P38	ノ-56	30×29×9	*	*	*	
P39	ノ-56	34×30×21	*	*	*	
P40	チ-67	30×30×14.5	*	黒褐色土 黄色シルトブロック含	*	
P41	テ-68	50×40×13	楕円形	黒褐色土 黄色シルトブロック含	*	
P42	チ-70	32×47×20	円形	黒褐色土 (10YR3/1) 灰色土ブロック少含		
P43	タチ-70	60×60×30.5	*	*	*	
P44	タ-71	36×35×12.5	*	*	*	
P45	タ-71	35×32×20	*	*	*	
P46	ソ-74-74	32×32×13	*			銅器
P47	ソ-74	69×59×16.5	楕円形	黒褐色土(10YR2/3) 黄褐色ブロック含	土師器	
P48	ソ-74-75	53×50×14.5	円形	黒褐色土 (10YR3/1) 砂質灰色ブロック含		
P49	ソ-74	30×45×18.3	*	黒褐色土(10YR3/1) 黄色ロームブロック少含		

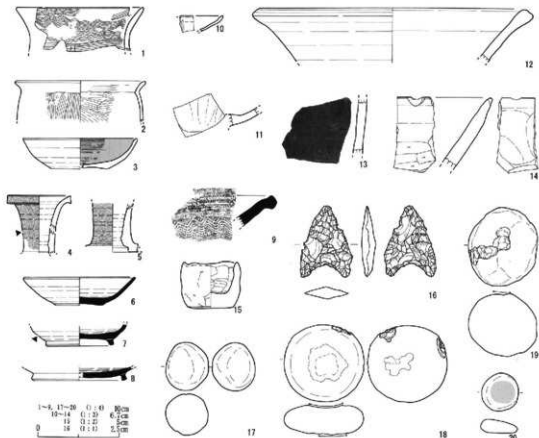
第103表 ビット計測表(1)

遺構名	出土位置	長さ×短径×高さ	形 態	産 土	時代	産地関係
P50	ター74	92×142×36		黒褐色土(10YR2/3) 砂質黄色ブロック状		1層層後
P51	*	25×12×12	不整形	黒褐色土(10YR2/3) 黄土ブロック状		土師器類(内装)
P52	ソ-73	23×23×20	円形			
P53	*	38×32×21	楕円形			
P54	ソ-74	80×180×23	-	赤褐色土(10YR2/3) 黄色ロームブロック状		板山器類・土師器
P55	ケ-87-88	48×41×31	楕円形			
P56	ター74	100×54×37	楕円形	黒褐色土(10YR3/1) 砂質黄色ブロック状		
P57	ソ-74	60×33×18	円形			1層層
P58	ター13-74	36×29×21	楕円形			
P59	ター73	86×46×21.5	円形			土師器
P60	ソ-75	47×34×25	不整形	黒褐色土(10YR3/2) 黄色土ブロック状		
P61	ソ-76	19×31×21	楕円形	*	*	
P62	ソ-タ 74	(88)×76×9	*	*	*	土師器
P63	ソ-74	31×26×19	*	赤褐色土(10YR3/2) 灰色土ブロック状		
P64	ソ-73	24×21×14	円形			
P65	ソ 71	31×25×14	楕円形			
P66						F12に属定
P67	ス-76-77	74×68×21	円形	黒褐色土(10YR2/3) 灰色土ブロック状		
P68	ス-76	30×24×19.5	楕円形	*	*	
P69	ター73	48×42×27	*	黒褐色土		古代
P70	コ-84	30×30×12	円形	褐灰色土		
P71	ケ-85	42×38×19	*	黒褐色土		古代
P72	コ 83	40×36×15	楕円形	赤褐色土(10YR3/2) 黄色砂質土等		
P73	ク-89	70×130×34	不整形			須恵器類(口縁)、土師器P(内装)
P74	コ-82	46×43×12	円形			
P75	ノ-55	77×33×16	楕円形			
P76	ノ-55	60×14×15.5	*			
P77	ハ-53	18×15×13	方形			
P78	E 11	(73)×(24)×26	-			
P79	E-11	39×34×9.5	楕円形			
P80	E-13	(24)×(18)×11	-			
P81	E-13	18×14×29	円形			

第104表 ビット計測表(2)

第7節 遺構外出土遺物 (第177・178図)

本遺跡からの遺構外出土遺物は調査区域により偏りがあった。まず第一の集中区はミ-40Gr付近に検出された黒色土帯である。この黒色土は幅約10m・深さ30cmほどの広がりがあり、南北方向に伸



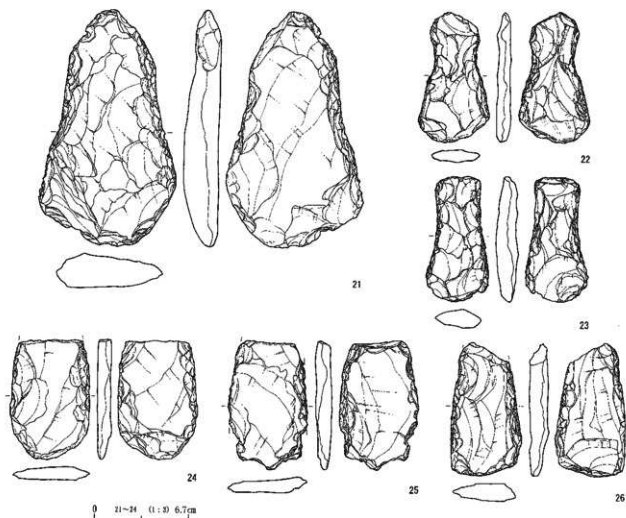
第177図 遺構外出土遺物実測図(1)

No.	種別	品名	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			全長	口径	内径	外径			
1	片断	葉	15.6	-	(5.4)	土器	口縁部は波状文一列並列(葉状文?)(葉上)	同坑出土	Z
2	土器	葉	13.1	-	(5.0)	口縁部コナデ→口縁部ハケ目	同坑出土	Z	
3	土器	葉	14.1	7.4	3.8	口縁部→黒色土帯	口縁部ハケ目	同坑出土	Z
4	土器	片断	7.8	-	(7.1)	片断	口縁部ハケ目	同坑出土	F-61
5	土器	片断	-	-	(6.0)	片断	口縁部ハケ目	同坑出土	Z
6	土器	片断	13.8	5.8	3.4	口縁部コナデ	口縁部コナデ 口縁部ハケ目	同坑出土	ヘラ記号有り
7	土器	高台杯	-	8.2	(2.0)	口縁部コナデ 火押	口縁部コナデ 口縁部ハケ目	同坑出土	F-67
8	土器	高台杯	-	11.8	(1.6)	口縁部コナデ 火押	口縁部コナデ 口縁部ハケ目	同坑出土	F-64
9	土器	葉	-	-	-	口縁部コナデ	口縁部コナデ 口縁部ハケ目	同坑出土	Z
10	白磁	皿	-	(1.0)	(1.0)	片断	口縁部ハケ目	同坑出土	F-30
11	青磁	碗	-	(1.0)	(1.0)	片断	口縁部ハケ目	同坑出土	F-36
12	陶器	こね鉢	25.6	-	(5.0)	口縁部コナデ	口縁部コナデ 口縁部ハケ目	同坑出土	F-36
13	陶器	石皿	-	(5.1)	(5.1)	口縁部コナデ 片断	口縁部コナデ 口縁部ハケ目	同坑出土	F-59
14	陶器	山形碗	-	-	-	口縁部コナデ→ナデ	口縁部コナデ→ナデ 口縁部ハケ目	同坑出土	F-36
15	土器	手取	3.2	2.8	2.8	ナデ	口縁部コナデ	同坑出土	F-33

第105表 遺構外出土遺物観察表(1)

びていた。この黒色土からは図示した21~26のような「石鎌」と呼ばれる大型の打製石斧や、試掘段階の出土であるが、1の箱清水式の甕が出土している。これらの事から、この黒色土帯では弥生後期段階に何らかの活動が行われたと推測できる。

次の集中区は調査区南端の部分である。この周辺からは12.14といった中世陶磁器類や、11の青磁片が出土した。D19号土坑は中世の所産と考えられており、遺構外の出土遺物も13世紀代を示すものが多く、この一帯が13世紀を中心とする中世期の活動エリアであったことが予想できる。



第178表 遺構外出土遺物実測図(2)

No.	品名	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
16	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.4	0.90			Z
17	鏃	輝石火山岩	3.9	6.3	5.1	195.43			Z
18	凹形	輝石火山岩	9.5	9.8	3.7	496.24			Z
19	籠石	凝灰岩	9.6	8.4	7.7	670.00		正面に彫り痕	サ-82
20	鏃石	輝石火山岩	4.7	4.5	1.7	46.64		正面に磨り面	サ-67
21	打製石斧	輝石火山岩	18.7	10.9	2.6	580.00		正・裏の刃部付近に使用による磨滅痕	△-37
22	打製石斧	砂質砂岩	10.3	5.6	1.3	71.00		正面に自然磨のこる 刃部付近に使用による磨滅痕	△-39
23	打製石斧	砂質砂岩	9.9	4.9	1.8	83.00		下面に自然磨のこる	Z
24	打製石斧	輝石火山岩	(9.5)	(6.3)	(1.1)	(103.00)		裏部欠損 刃部に使用による磨滅痕 全体に磨損が不明瞭	△-33
25	打製石斧	輝石火山岩	(10.2)	(6.2)	(1.2)	(110.00)		裏部・刃部ともに欠損 全体に磨損が不明瞭	△-15
26	打製石斧	砂質砂岩	(10.6)	(5.6)	(1.4)	(98.00)		刃部欠損 正面に使用による磨滅痕	△-41

第106表 遺構外出土遺物観察表(2)



辻遺跡A地区より噴火した浅間山を望む



辻遺跡A地区調査区全景（北より南佐久方向を望む）



辻遺跡B地点調査区全景



辻遺跡B地点調査区近景



H1号住居址全景



H1号住居址遗物出土状况



H2号住居址遗物出土状况



H2号住居址全景



H3号住居址全景



H3号住居址カマド全景



H3号住居址遺物出土状況



H3号住居址カマド掘り方全景



H3号住居址掘り方全景



H4号住居址全景



H15号住居址全景



H7号住居址全景



H7号住居址掘り方



H7号住居址遺物出土状況



H7号住居址カマド全景



H7号住居址カマド付近遺物出土状況



H7号住居址カマド全景



H7号住居址カマド掘り方



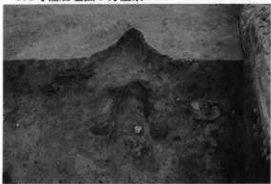
H6号住居址全景



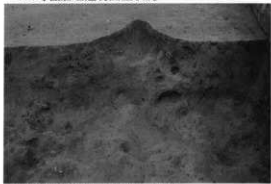
H6号住居址掘り方全景



H6号住居址遺物出土状況



H6号住居址カマド全景



H6号住居址カマド掘り方全景



H8号住居址全景



H8号住居址遺物出土状況



H8号住居址遺物出土状況



H11号住居址全景



H11号住居址掘り方全景



H9号住居址全景



H9号住居址掘り方全景



H9号住居址カマド全景



辻遺跡遺構検出状況



H9号住居址カマド掘り方全景



H10号住居址全景



H10号住居址掘り方全景



H10号住居址遺物出土状況



H10号住居址カマド全景



H10号住居址カマド掘り方全景



H12号住居址全景



H12号住居址掘り方全景



H12号住居址カマド全景



H13号住居址セクション



H13号住居址掘り方全景



H13号住居址カマド全景



H13号住居址全景



H14号住居址全景



H14号住居址№1カマド全景



H14号住居址№2カマド全景



H14号住居址掘り方全景



H16号住居址カマド全景



H16号住居址全景



H17号住居址全景



H15号住居址全景



H15号住居址掘り方全景



H19号住居址掘り方全景



H19号住居址全景



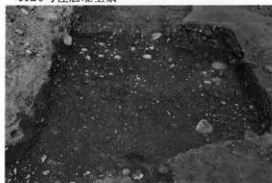
H18号住居址全景



H18号住居址掘り方全景



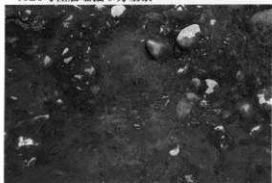
H20号住居址全景



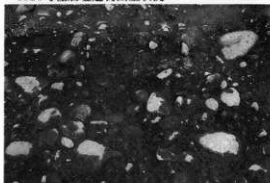
H20号住居址掘り方全景



H20号住居址遺物出土状況



H20号住居址カマド全景



H20号住居址カマド掘り方全景



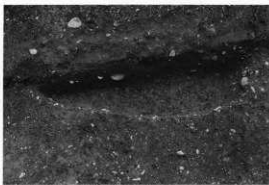
H21号住居址全景



H21号住居址掘り方全景



H22号住居址全景



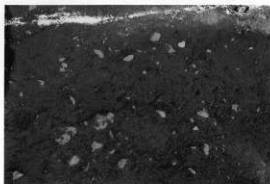
H22号住居址掘り方全景



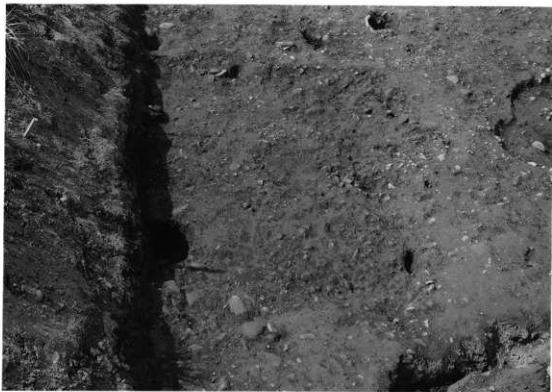
H23号住居址全景



H23号住居址掘り方全景



H23号住居址カマド全景



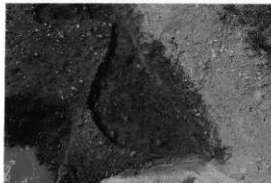
H25号住居址全景



H25号住居址掘り方全景



H25号住居址カマド全景



H26号住居址全景



辻遺跡調査風景



H24号住居址全景



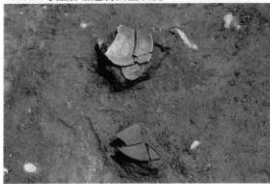
H24号住居址掘り方全景



H24号住居址遺物出土状況



H24号住居址遺物出土状況



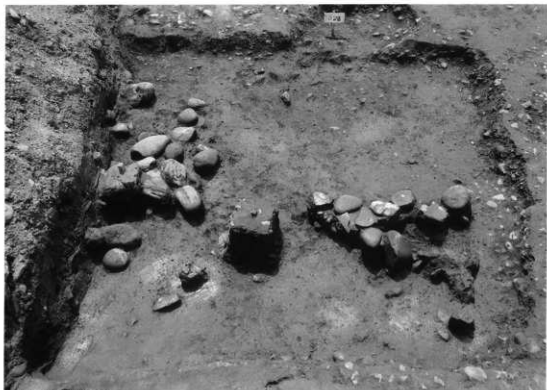
H28号住居址遺物出土状況



H28号住居址全景



H28号住居址掘り方全景



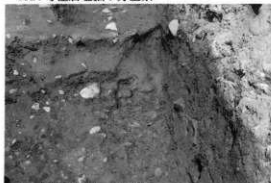
H27号住居址全景



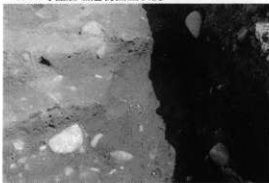
H27号住居址掘り方全景



H27号住居址遺物出土状況



H27号住居址カマド全景



H27号住居址カマド掘り方全景



F 1号掘立柱建物址全景



F 2号掘立柱建物址全景



F 3号掘立柱建物址全景



F 3号掘立柱建物址遗物出土状况



F 4号掘立柱建物址全景



F 5号掘立柱建物址全景



F 6号掘立柱建物址全景



F 7号掘立柱建物址全景



F10号掘立柱建物址全景



F8号掘立柱建物址全景



F9号掘立柱建物址全景



F11号掘立柱建物址全景



辻遺跡調査風景（南端）



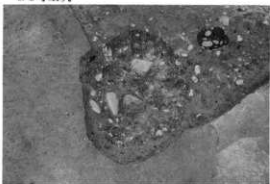
D2号土坑



D3号土坑



D4号土坑



D5号土坑



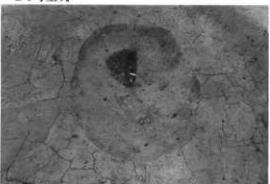
D7号土坑



D9号土坑



D10号土坑



D11号土坑



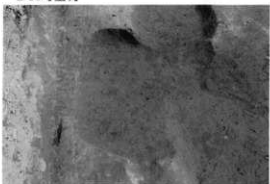
D16号土坑



D19号土坑



D20号土坑



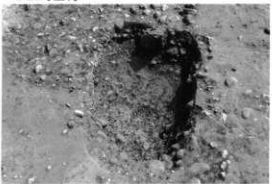
D21号土坑



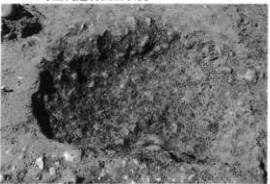
D23号土坑



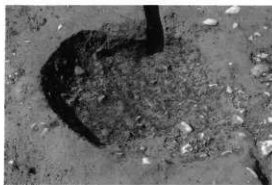
D24号土坑遗物出土状况



D26号土坑



D27号土坑



D28号土坑



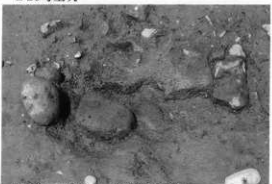
D29号土坑



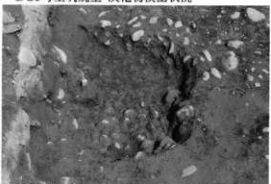
D29号土坑



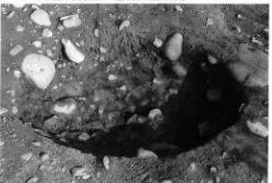
D29号土坑焼土・炭化物検出状況



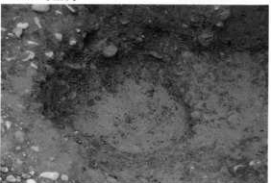
D29号土坑焼土・遺物出土状況



D30号土坑



D31号土坑



D32号土坑



M1号溝状遺構



M2号溝状遺構



M3号溝状遺構



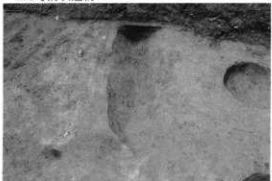
M4・5号溝状遺構



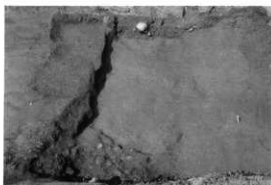
M6号溝状遺構



M9号溝状遺構



M7号溝状遺構



M8号溝状遺構



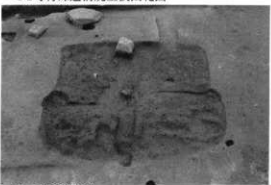
T1号特殊遺構掘り方



T1号特殊遺構焼土検出範囲



T1号特殊遺構焼土半截状況



T2号特殊遺構



T5号特殊遺構



T3号特殊遺構セクション



T3号特殊遺構



T4号特殊遺構



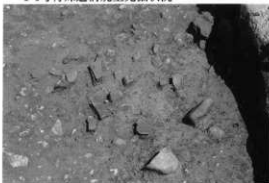
T4号特殊遺構範囲



T4号特殊遺構焼上完掘状況



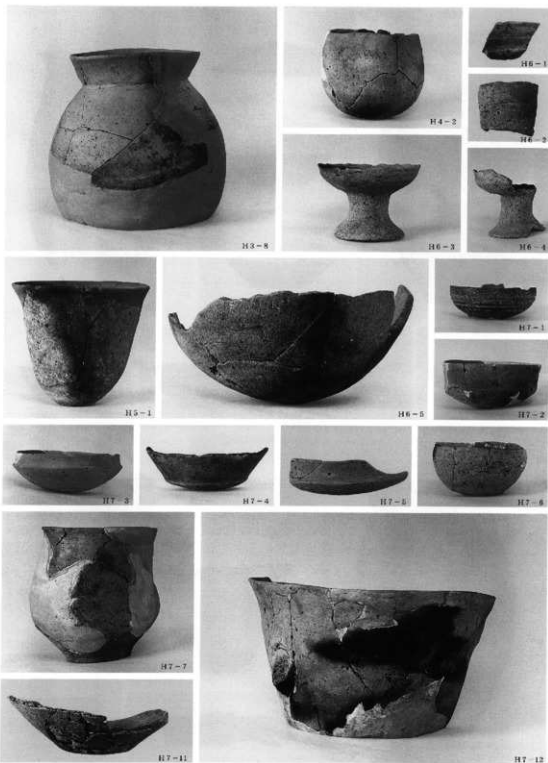
T4号特殊遺構焼上セクション

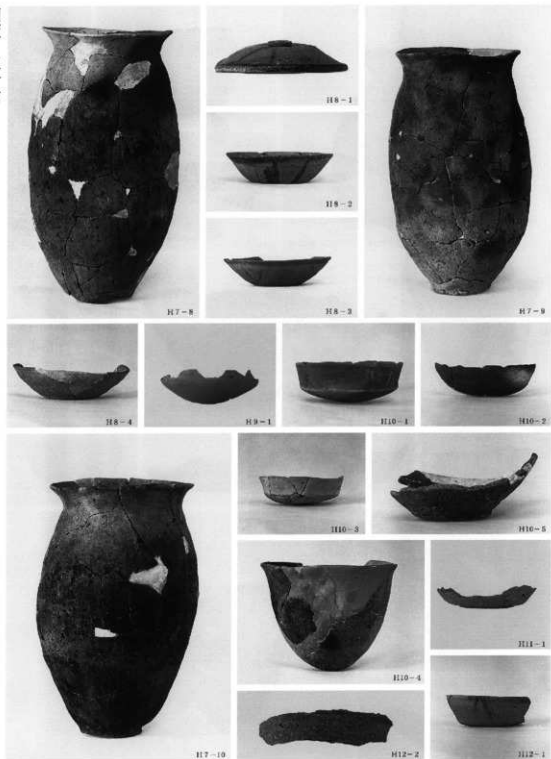


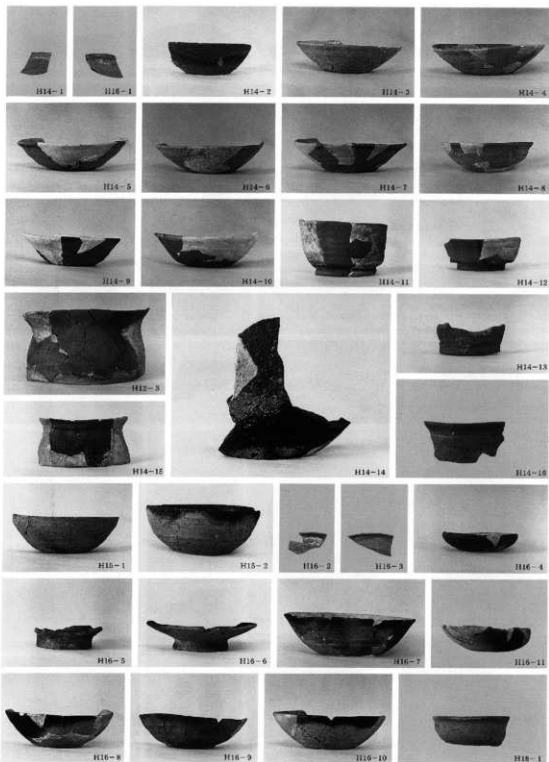
T4号特殊遺構

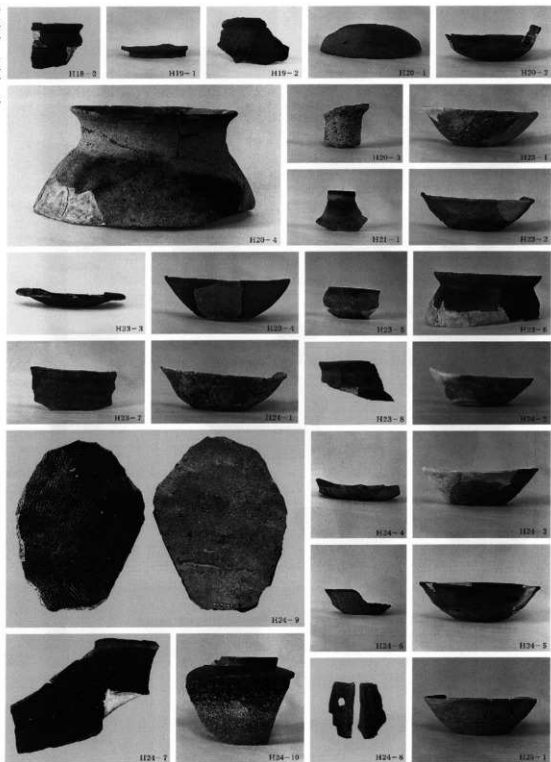


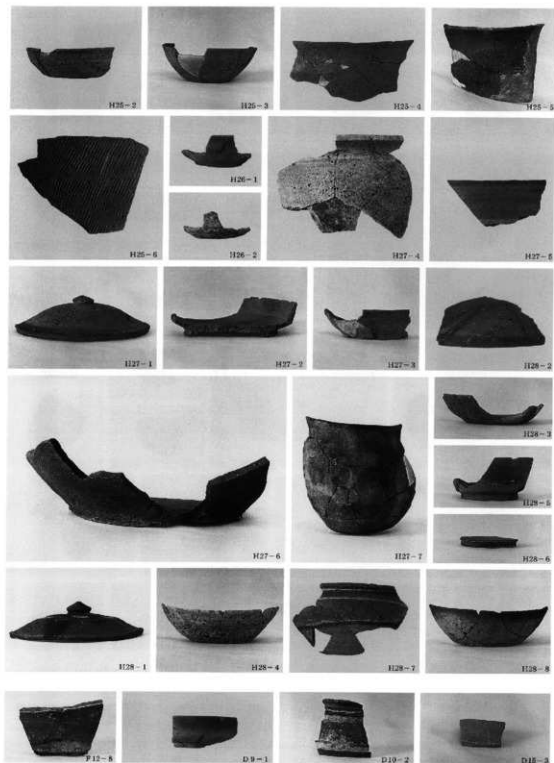


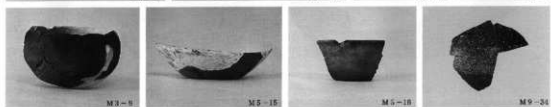
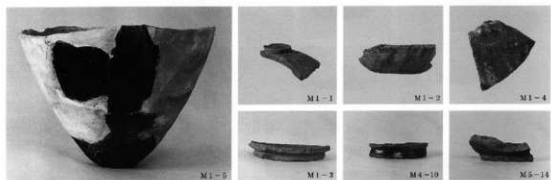


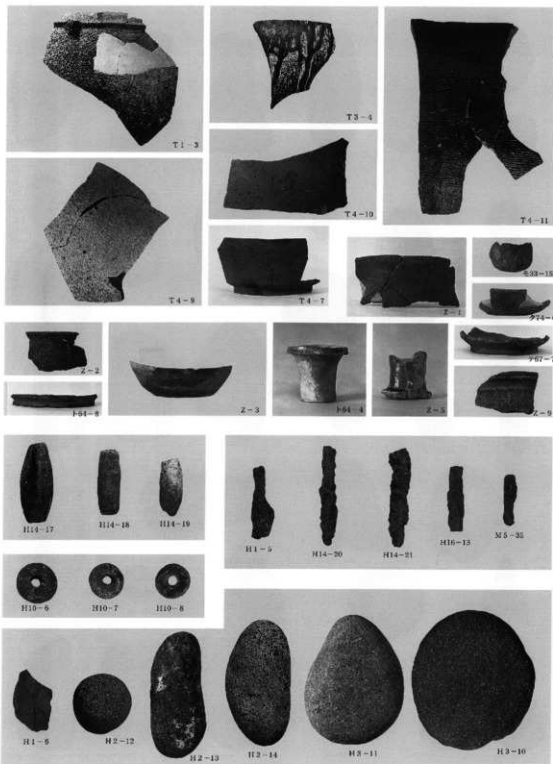


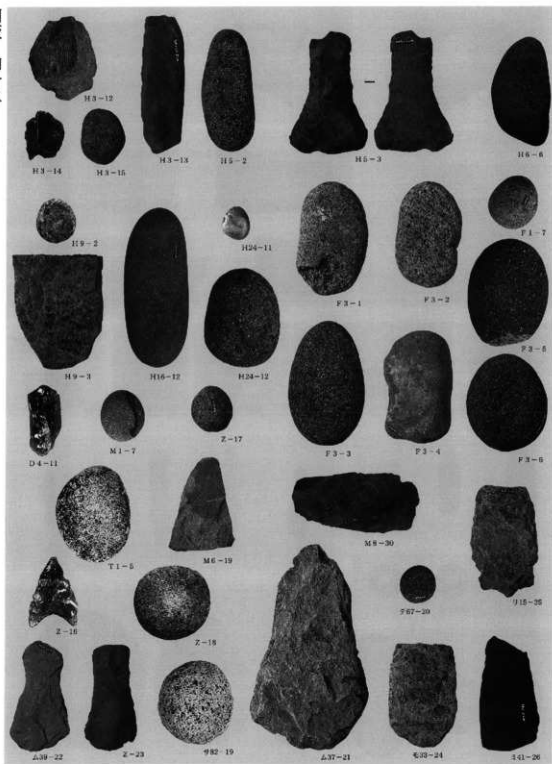












儘田遺跡Ⅱ

第V章 儘田遺跡II

第1節 竪穴住居址

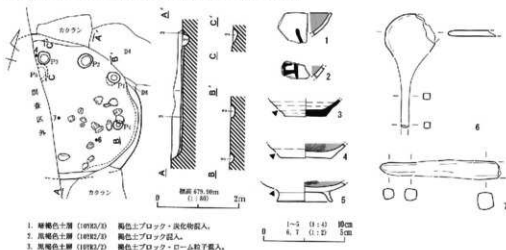
(1) 1号住居址 (第179図, 写真図版三)

本住居址は、調査地点C区南端であるチ-111.112、ツ-111.112Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は楕円形か隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.36m(残存)・南壁0.97m(残存)・東壁2.07m(残存)で、壁高さは南壁で最大23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は5.83㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で単層であったが、床面に人頭大の礫が散らばって多く出土した。床は全体に軟質で、貼床が1~7cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認された。規模はP1が径31cm・深さ15cm、P2が径35cm・深さ16cm、P3が径33cm・深さ15cm、P4が径25cm・深さ11cm、P5が径43cm・深さ11cmを測る。

出土遺物は覆土中から多く出土した。1と2は土師器杯の口縁部と体部で、いずれも外面に墨書が確認できる。墨書の判読は不明である。3は須恵器杯の底部で、回転糸切り離しが行われている。4は土師器杯、5は土師器の碗である。いずれも内面黒色処理されている。6と7は鉄製品である。6は平らな部分を持ち、「匙」のようにも見られるが不確実である。7は釘と思われる。

本址はこれらの出土遺物より9世紀後半と考えられる。



1. 黒褐色土層 (1893)/D 褐色土ブロック・炭化物混入。
2. 黒褐色土層 (1892)/D 褐色土ブロック混入。
3. 黒褐色土層 (1892)/D 褐色土ブロック・ローム粒子混入。

第179図 H1号住居址及び出土遺物実測図

No.	種類	器種	出 産	成 形 ・ 測 量 ・ 文 様			備 考	出土位置	
				内 面	外 面				
1	土師器	杯	—	—	ミガキ→黒色処理	口クロナジ 墨書	鏡片実測		
2	土師器	杯	—	—	ミガキ→黒色処理	口クロナジ 墨書	鏡片実測		
3	須恵器	杯	—	S.3	口クロナジ	口クロナジ 底部右回転糸切り	完全実測 底部実形		
4	土師器	杯	—	S.4	ミガキ→黒色処理	口クロナジ 底部右回転糸切り	完全実測	0cm	
5	土師器	碗	—	S.8	ミガキ→黒色処理	口クロナジ 付台	完全実測		
No.	器種	素材		最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
6	鉄ヤ	鉄		(7.0)	(3.0)	(0.4)			~10cm
7	釘ヤ	鉄		(7.4)	(1.1)	(1.0)			14cm

第107表 H1号住居址出土遺物観察表

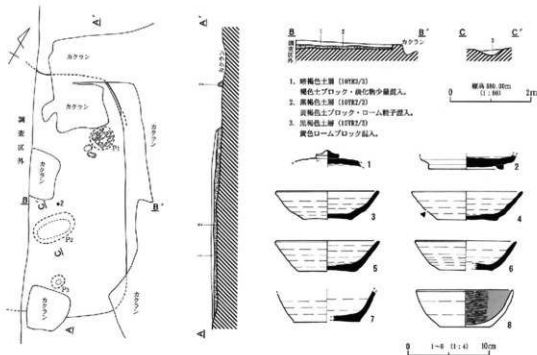
(2) 2号住居址 (第180図, 写真図版三)

本住居址は、調査地点C区南端であるタ-113.114、チ-113.114Grに位置する。残存状態は住居址西側が調査区域外、北壁と南壁もカクランにより削平されている。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁1.70m(残存)・南壁2.25m(残存)・東壁5.58mで、壁高さは北東コーナーで最大5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で13.37㎡を測る。住居址の主軸方位はN-30°-Wを測る。覆土は非常に薄く、おおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~13cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時に3カ所確認され、規模はP1が径60cm・深さ35cm、P2が径104cm・深さ15cm、P3が径35cm・深さ6cmを測る。また、P1からはまとまって川原石が検出された。これらの礫は大きさも形態も統一性がなく、また使用痕等は確認できなかった。

出土遺物は覆土中からの出土である。1は須恵器蓋の天井部分で、扁平な宝珠形を呈する。2は須恵器高台坪の底部である。3~7は須恵器坏で、いずれも底部回転系切り離しである。8は土師器坏で、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。

本址はこれらの出土遺物より8世紀後半に位置づけられる。



第180図 H2号住居址及び出土遺物実測図

No	種別	時期	法量			成形・調査・文書		備考	出土位置
			口縁高	底径	高さ	内径	外径		
1	須恵器	蓋	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 天骨部回転系ヘラズリ	完全実測	D区
2	須恵器	高台坪	-	9.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底骨右回転系切り 外周回転ヘラズリ→付着台	完全実測 底骨光面	D区
3	須恵器	坏	12.8	6.0	3.5	ロクロナデ	火障 ロクロナデ 底骨右回転系切り(方向不明) 火障	回転実測 1/4残存	B区
4	須恵器	坏	13.7	7.6	3.5	ロクロナデ	火障 ロクロナデ 底骨右回転系切り 火障	完全実測 底骨光面	B区
5	須恵器	坏	12.8	7.4	3.7	ロクロナデ	火障 ロクロナデ 底骨右回転系切り 火障	回転実測 1/4残存	B区
6	須恵器	坏	12.8	6.4	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ 底骨右回転系切り(方向不明)	回転実測 1/4残存	B区
7	須恵器	坏	-	8.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底骨回転系切り	回転実測 底骨1/2残存	B区
8	土師器	坏	12.0	6.9	4.5	ミガキ→出島処理	ロクロナデ 底骨切り	回転実測 2/3残存	D区

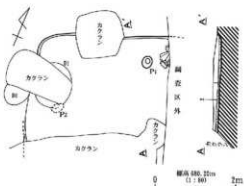
第108表 H2号住居址出土遺物観覧表

(3) H3号住居址 (第181図, 写真図版四)

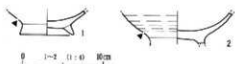
本住居址は、調査地点C区南端であるス-117.118、セ-117.118Grに位置する。残存状態は東側を調査区域外、南側をカクランにより削平されている。D1.2号土坑と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.08m(検出)・西壁2.54m(残存)で、壁高さは北壁東寄りで最大14cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は7.85㎡を測る。覆土は非常に浅かったがおおむね自然堆積である。床は軟質で、貼床は全体に4~7cmの厚さで貼られていた。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径32cm・深さ12cm、P2が径31cm・深さ22cmを測る。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土から出土した土師器碗2点を図示した。いずれも底部付近のみの残存である。本址は出土遺物が少なく、所産時期は不明である。



1. 黒褐色土器 (10YR3/2) 紫色砂粒子多数混入し、炭化物微量含む。
2. 暗褐色土器 (10YR3/4) 暗褐色土ブロック少量混入。



第181図 H3号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	部種	出 土 地 点			成 形・測 量・文 様		備 考	出土位置	
			出出	出出	出出	内 面	外 面			
1	土師器	碗	-	6点	-	口クロナデ	口クロナデ	付高台	完全実測	
2	土師器	碗	-	-	-	口クロナデ	口クロナデ	付高台(最古文様)	完全実測	

第109表 H3号住居址出土遺物観察表

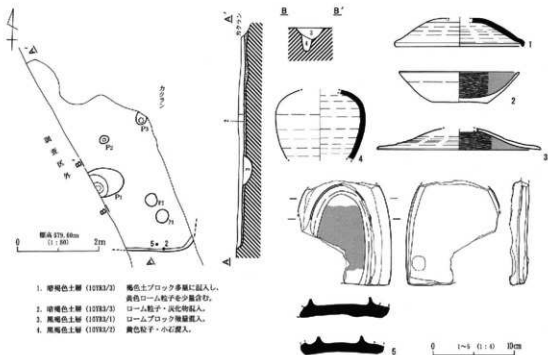
(4) H5号住居址 (第182図, 写真図版四)

本住居址は、調査地点C区南であるツ-109.110、テ-109.110Grに位置する。残存状態は南東コーナー側を残して、西側が調査区域外、北側がカクランとなる。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁1.46m(検出)・東壁0.35m(残存)で、壁高さは南壁側で最大8cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で7.42㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、貼床は全体に貼られており、厚さは1~8cmを測る。ピットは3カ所確認された。規模はP1が径124cm・深さ57cm、P2が径25cm・深さ8cm、P3が径26cm・深さ5cmを測る。P1が主柱穴だとすると、本址の規模は大型であることが予想される。

本址からの出土遺物は少なく5点を図示した。1は須恵器蓋で僅かに返りが見られる。2は土師器環で、内面丁寧なミガキと黒色処理を施している。3は大型の土師器蓋とした。内面丁寧なミガキと黒色処理が施されている。4は須恵器蓋の肩部から胴部であり、自然輪が付着している。5は須恵器の風字硯で貼床内より出土した。形態は二重の堤がめぐる特異な形で、中央の墨を擦る「陸」の部分は非常になめらかなり使い込まれている。また、内側の堤の部分には、墨と思われる付着物が確認できる。裏面は手前側に一箇所「脚」の貼付痕が確認でき、全体には自然輪が付着している(巻頭カラー参照)。本品は風字硯としては、佐久平で初めての出土となった。かつまた、形態は全国的に見て現在までの類例として、山形県天童市に所在する中袋遺跡の性格不明遺構から出土した風字硯があるのみである。今回の出土例は徳田遺跡の性格を考える上でも、非常に貴重な資料である。

本址は特色ある出土遺物があったが、量は少なく遺構の時期決定は難しい。しかし、風字硯が9世紀代から増える事と、3の大型の土師器蓋は8世紀代に帰属が求められる為、9世紀前半の所産時期の可能性があると考えたい。



第182図 H5号住居址及び出土土遺物実測図

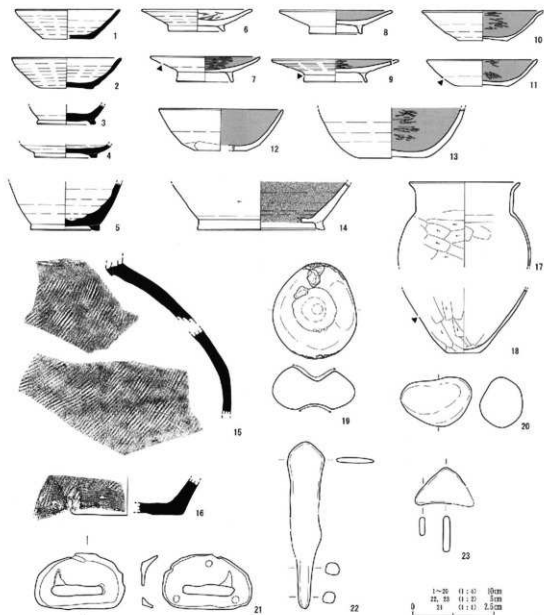
No.	種別	跡種	法 量		成 形・ 測 量・ 文 様		備 考	出土位置		
			口径(長)	底径(幅)	内 面	外 面				
1	須恵部	蓋	15.8	—	—	口クロナデ	大井窪田跡ヘラクエズリ	火焼	90cm東溝 口縁1/3残存	
2	土師部	坪	14.9	6.8	3.8	ミガキ→紫色粘土	口クロナデ		完全東溝 4/5残存	5cm 寄り方
3	土師部	蓋	20.2	—	—	ミガキ→紫色粘土	口クロナデ		90cm東溝 口縁1/7残存	
4	須恵部	長筒形	—	—	—	口クロナデ			90cm東溝 1/4残存	
5	須恵部	扁平形	12.8	10.9	2.4				東溝207.1kg	4cm 寄り方

第110表 H5号住居址出土遺物観察表

(5) H6号住居址 (第183・184図, 写真図版五)

本住居址は、調査地点C区北側であるノ-93.94、ハ-93.94Grに位置する。残存状態は住居址の東側が調査区域外となり、南壁はカクランにより削平されていた。

形態は東西に長い長方形と考えられる。カマドは北壁に造られている。規模は北壁2.93m (検出)・南壁5.42m (検出)・西壁5.35mで、壁高さは南壁で最大13cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で23.22㎡を測る。住居址の主軸方位はN'を示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は硬質であり、特にカマド付近が硬かった。貼床は1~9cmの厚さで貼られていた。壁溝は住居址北西コーナーから西壁にかけて検出された。形態は断面U字形で、規模は幅20~68cm・深さ1~17cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め17箇所確認された。P1とP2は主柱穴、P5とP7はカマド袖構築時のピットと考えられる。規模はP1が径30cm・深さ46cm、P2が径50cm・深さ37cm、P3が径92cm・深さ47cm、P4が径73cm・深さ19cm、P5が径73cm・深さ18cm、P6が径56cm・深さ50cm、P7が径75cm・深さ20cm、P8が径35cm・深さ26cm、P9が径23cm・深さ16cm、P10が径90cm・深さ9cm、P11が径30cm・深さ13cm、P12が径36cm・深さ10cm、P13が径22cm・深さ8cm、P14が径30cm・深さ16cm、P15が径39cm・深さ11cm、P16が径19cm・深さ14cm、P17が径28cm・深さ27cmを測る。本址の掘り方はほぼ平坦であったが、北西コーナー部が壁溝を拡幅するように一段深く広く掘り広がっていた。



第184図 H6号住居址出土遺物実測図

本址のカマドは北壁に造られた。袖構築礫と火床部が残存していた。煙道部は壁よりもあまり飛び出さないタイプであった。袖部は構築時の作業面として手前と奥側に4箇所の掘り込みが検出された。いずれも楕円形の土坑状を呈し、深さは20cm前後を測る。カマド掘り方は火床部下の貼床を剥がすと、不整形の掘り込みが確認された。

本址からの出土遺物は多く、床面やピット内から出土した。1と2は須恵器坏である。2はピット内から出土した。3は須恵器壺の底部である。4は須恵器高台坏の底部で、5は須恵器壺としたが、在地の須恵器としては胎土が白っぽく、一見灰釉陶器に見間違える品である。黒い噴出物が器面にある。

6～9は土師器皿で、6以外は内面黒色処理されている。10～12は土師器杯で、いずれも内面ミガキと黒色処理が施されている。13は土師器の鉢と考えられる。内面黒色処理されている。14は灰釉陶器壺の底部であり、内面に施釉がされている。底部外面は良く磨れており、何かしらの二次利用の可能性がある。15と16は須恵器甕で17と18は土師器甕でいわゆる「武蔵甕」のタイプである。19は埴石で両面に敲打の跡がある。20は一部ミガキと考えられる擦れがある。21は銅製帯金具の丸髷で、長方形の窓と内面に留め金が折れた状態が確認できる。22と23は鉄製品で、22は鉄鏃と考えられるが確証を得ない。

本址はこれらの出土遺物から9世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			口内径	底径	内面	外面	内面	外面		
1	須恵器	杯	13.0	6.0	(3.6)	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底部円板条切り(方向不明) 火摩	凹板表面 1/4残存	II区	
2	須恵器	杯	13.5	6.5	3.7	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底部円板条切り 火摩	完全実態 4/5残存	27cm	
3	須恵器	甕	-	7.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 付高台	凹板表面 底部3/4残存		
4	須恵器	高台杯	-	7.6	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部円板条切り・付高台	完全実態 底部欠形		
5	須恵器	壺	-	8.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部円板ヘラケズリ・付高台	凹板表面 底部1/2残存	7cm	
6	土師器	高台皿	13.6	7.0	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ 付高台	完全実態 底部2/3残存	6cm	
7	土師器	高台皿	13.5	7.0	3.1	ロクロナデ ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 付高台	完全実態 底部欠形	3cm	
8	土師器	高台皿	14.0	6.5	2.9	ロクロナデ ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 付高台	完全実態 完整	5cm	
9	土師器	高台皿	13.7	7.8	(2.8)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 付高台	凹板表面 3/4残存	2cm	
10	土師器	杯	15.0	5.8	3.7	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	凹板表面 1/3残存	II区	
11	土師器	杯	13.6	6.6	3.2	ミガキ→黒色処理	ミガキ 底部ヘラケズリ	完全実態 底部欠形	II区	
12	土師器	杯	15.3	6.4	3.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	凹板表面 1/3残存	1cm	
13	土師器	鉢	-	8.6	-	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	凹板表面		
14	灰釉陶器	壺	-	15.6	-	ロクロナデ 胎輪	ロクロナデ 付高台 底部スレ	凹板表面		
15	須恵器	甕	-	-	-	当具板	平行タタキ	断面表面	4cm	
16	須恵器	甕	-	13.8	-	ヘラケズリ	平行タタキ→ヘラケズリ	凹板表面 底部1/4残存	II区	
17	土師器	甕	13.6	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	凹板表面	II区	
18	土師器	甕	-	4.2	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実態	6cm II区	
X	埴石	素材	残存数	最大径	最小径	重量	所見			
19	凹行	輝石安山岩		11.7	10.3	3.4	750.00	円盤 5.4×6.3(穴) 4.5×4.0(裏) 凹行 1.6(穴) 0.7(裏) 止・裏面にくぼみ 上・下端部に敲打痕		
20	不明	角閃石安山岩		8.7	8.1	0.5	350.00			
21	帯金具(丸髷)	銅	欠損	2.8	1.7			6cm		
22	鉄鏃?	鉄	欠損	10.2	2.3	0.7		1cm		
23	不明	鉄	欠損	2.2	3.6	0.4		2cm		

第111表 H16号住居址出土遺物観察表

(6) H7号住居址 (第185図, 写真図版四)

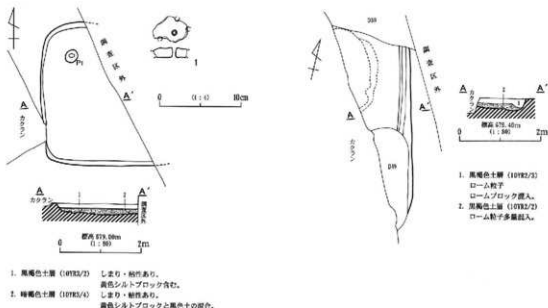
本住居址は、調査地点C区北側であるハ-91.92、ヒ-91.92Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.83m(検出)・南壁2.62m(検出)・西壁3.08mで、壁高さは南壁中央で最大16cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の主軸方位はN°を測る。住居址の床面積は検出部分で5.79㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積で単層である。床は全体的に軟質であった。貼床は8～21cmの厚みで貼られている。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径31cm・深さ7cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示してきた遺物は1点のみであった。1は土師器甕の底で4つの穴が確認できる。本址は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			口内径	底径	内面	外面	内面	外面		
1	土師器	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	断面表面 底部	II区	

第112表 H7号住居址出土遺物観察表



第185図 H7.8号住居址及び出土遺物実測図

(7) H 8号住居址 (第185図, 写真図版六)

本住居址は、調査地点C区南側であるチ-109.110、ツ-109.110Grに位置する。残存状態は西側がカクラン、北側がD30号土坑によって削平されている。

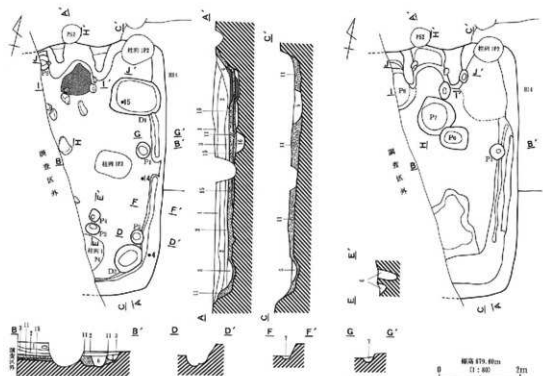
形態は不明である。規模は東壁4.08m(残存)で、壁高さは東壁で最大12cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.01㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。壁溝は東壁側で検出され、規模は幅25~35cm・深さ3~7cmを測る。

本址からの出土遺物は図示できるものはなく、須恵器坏片2点、土師器坏片2点が出土したのみである。よって本址の所産時期は不明である。

(8) H 9号住居址 (第186・187・188図, 写真図版六・七)

本住居址は、調査地点C区南側であるナ-104.105.106、ニ-104Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。また、H14号住居址と1号柱列と重複関係にあり、本址が一番古い。

形態は南北方向に長い方形を呈すると考えられる。北壁にカマドが造られている。住居址の主軸方位はN-13°-Wを測る。規模は北壁3.02m(検出)・南壁1.27m(検出)・東壁5.87mで、壁高さは南東コーナー部で最大39cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で12.24㎡を測る。覆土は自然堆積であり、床は全体的に硬質であった。貼床は1~25cmの厚みで貼られており、特にカマド周辺の北側を中心に床の張り替えが確認でき、古い貼床に伴うようにカマド火床部も検出された。壁溝は東壁と南壁で検出された。規模は幅32~54cm・深さ1~12cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め8箇所検出された。P6~8は床下土坑の可能性がある。規模はP1が径42cm・深さ27cm、P2が径35cm・深さ26cm、P3が径35cm・深さ22cm、P4が径31cm・深さ51cm、P5が径37cm・深さ16cm、P6が径70cm・深さ27cm、P7が径93cm・深さ15cm、P8が径90cm・深さ18cmを測る。また本址は床を切り込むように2箇所土坑が検出された。D1は住居址の北壁よりから検出され、形態は長方形である。規模は長軸122cm・短軸86cm・深さ32cmを測る。D2号土坑は住居址の南東コーナー部にあり、形態は楕円形である。規模は長軸75cm・短軸60cm・深さ19cmを測る。本址の掘り方

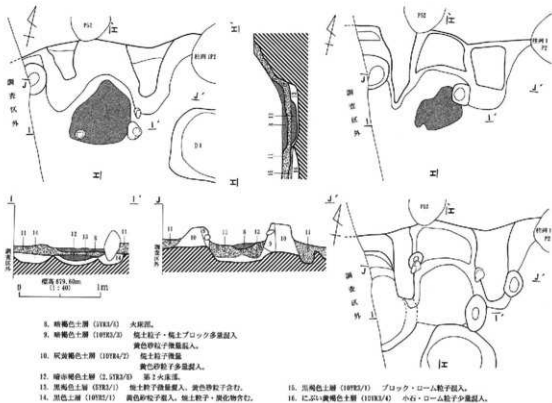


1. 黒褐色土層 (101R2/2) 砂を多く含む、炭化物少量混入。
2. 黒褐色土層 (101R2/2) 炭化物・ローム粒子混入。
3. 灰色土層 (101R2/1) 炭化物多量・ローム粒子少量混入。
4. 10A・黄褐色土層 (101R3/4) 焼土ブロック・炭化物・ロームブロック混入。ホマド層混入。
5. 暗褐色土層 (101R3/3) 炭化物・ロームブロック混入。
6. 黒褐色土層 (101R2/1) 炭化物・砂粒子微量混入。
7. 黒褐色土層 (101R2/2) 炭化物・ローム粒子少量混入。
11. 暗褐色土層 (101R2/4) ローム粒子多量に混入。

第186図 H9号住居址実測図

No.	種別	部種	計量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			長さ	幅	内面	外面			
1	須臾器	蓋	17.2	—	—	ロクロナデ 火押	回転実形 1/4残存	IV区	
2	須臾器	蓋	15.8	—	—	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ 火押	1・IV区 219' 跡点	
3	須臾器	杯	13.1	8.2	3.6	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底部回転軸糸切り 火押	完全実形 底部定形	1・II区
4	須臾器	杯	13.0	8.5	3.8	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底部回転へら切り 火押	完全実形 底部定形	30.5cm IV区
5	須臾器	杯	13.8	7.4	3.6	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 底部回転糸切り(方向不明) 火押	回転実形 1/2残存	II区 カマド
6	土師器	杯	—	—	—	ミガキ→灰色処理	ロクロナデ 華蓋	断片実形	II区
7	土師器	杯	—	—	—	ナデ	—	完全実形	P4
8	土師器	杯	15.0	7.4	4.80	ミガキ→灰色処理	ロクロナデ 底縁ヘラケズリ	回転実形 口縁1/3残存	II区
9	土師器	杯	15.0	8.2	4.0	3ミガキ→灰色処理	ロクロナデ 底縁ヘラケズリ	回転実形 1/3残存	II区
10	土師器	蓋	20.8	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転実形	II区
11	須臾器	蓋	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ 平行タタキ	回転実形 胴縁1/2残存	1・II区
12	須臾器	蓋	—	—	—	ロクロナデ 湯口縁	ロクロナデ 平行タタキ	回転実形	II区
13	須臾器	蓋	24.4	13.2	(19.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実形	10cm 1・II・IV区
No.	部種	素材	径	高さ	最大径	最大高さ	重量	出土地	
14	鉄片	鉄	火瓶	5.9	3.5	2.7			25cm
15	鋳金具	銅	火瓶	2.9	4.2				9cm D1
16	石製	花崗石		3.3	1.0	1.1	2.78		右土層・左土層に二次加工

第113表 H9号住居址出土遺物観察表

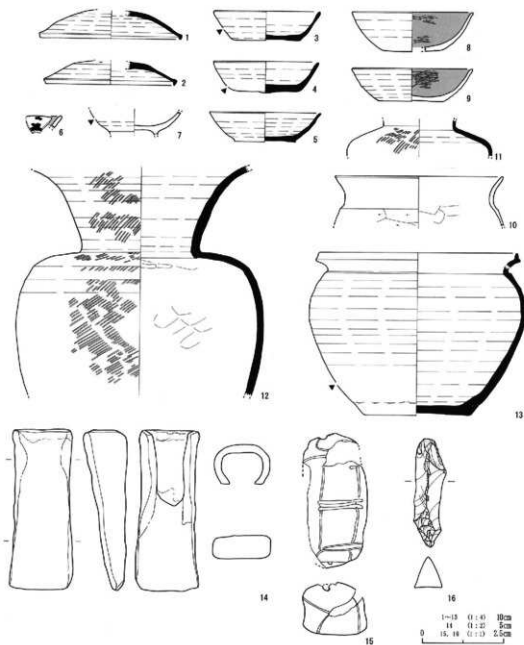


第187図 H19号住居址カマド実測図

は、南壁際が一段低く掘り込まれており、土坑状を呈する。

カマドは北壁の中央部に造られている。袖と火床部が確認された。煙道部は住居址壁よりも飛び出さないタイプのものであり、燃燒部と煙道部の部分には貼床と同じ土が構築土として使われていた。袖は地山を僅かに掘り残し、その上に灰黄褐色の土を構築土として使用していた。袖の芯材として川原石等は使われていなかった。袖の規模はいずれも41～45cmの高さがあった。火床部は先にも述べたが、2面検出された。上面の火床面は床の構築土の上に造られており、上面は良く焼けて硬質化していた。下面の火床部も掘り込み面の上に構築土がある。下面の火床面も表面は硬質化が見られ、よく焼けていた。いずれも焼土の厚みは8cmを測る。カマド掘り方は焚口部に一箇所ピットが検出された。径45cm・深さ12cmを測る。

本址からの出土遺物は比較的多く、覆土やカマドから出土した。1と2は須恵器の蓋である。いずれもつまみ部は欠損するが、返りの部分はやや内湾気味に屈曲する。3～5は須恵器環である。いずれも底部回転糸切り離しが行われている。6は土師器環で内面黒色処理されている。外面に墨書が確認できるが、判読できない。8と9は土師器環で、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。10は土師器甕で、いわゆる「武蔵甕」と呼ばれるタイプの甕で、口縁部は「コ」の字状に屈曲する。11は須恵器壺の肩部と考えられる。外面に敵きを確認できる。12は須恵器で大型の甕と考えられる。胴部は平行タキキが行われ、口縁部はタキキ目をナデによりすり消している。13は須恵器広口の甕であり、胴部はロクロ成形である。口唇部は上方向につまみ出したような形状である。14は鉄斧であり、住居址覆土中の床面から25cm浮いた状態で出土した。ただ、本址は調査当初に重複するH14号住居址と新旧完形を逆に調査してしまった為、本鉄斧は出土位置からH14号住居址の遺物とも考えられる。な



第188図 H19号住居址出土遺物実測図

お、H14号住居址床面からは20cm程浮いた状態である。鉄斧の形状は装着部分の鉄を丸く曲げて納める形態である。15は青銅製の刀装具と考えられる。D1号土坑から出土した。形態から鞘尻部分の可能性がある。沈線による区画の紋様があり、目釘の穴が1箇所確認できる。なお、表面には黒漆を塗装したような痕跡が確認できる。16は黒曜石の石錐と考えられる。

本址はこれらの遺物から、8世紀後半の所産が考えられる。

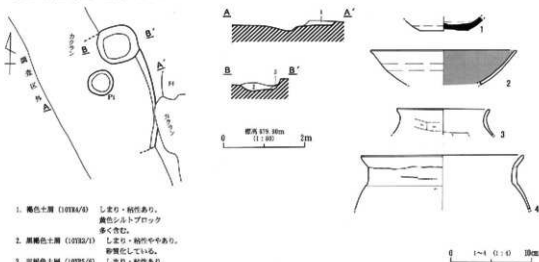
(9) H10号住居址 (第189図, 写真図版八)

本住居址は、調査地点C区北側であるハ-93.94、ヒ-93.94Grに位置する。残存状態は西側がカクランにより削平されており、東壁のみの検出である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は東壁3.12m (残存) で、壁高さは東壁で最大12cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は確認されなかった。ピットは1箇所確認され、規模はP1が径62cm・深さ10cmを測る。また、北東コーナー部に貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。形態は隅丸の方形で、規模は長軸100cm・短軸90cm・深さ30cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示した遺物はすべて貯蔵穴から出土した。1は須恵器杯の底部である。2は土師器杯か皿の口縁部で、内面黒色処理が施されている。3は土師器の小型甕の口縁部である。4は土師器甕で口縁部が「コ」の字状に屈曲する。

本址の所産時期は遺物は少量であるが、図示したこれらの遺物から9世紀後半と考えられる。



1. 褐色土層 (G0784/4) しまり・粘りあり、
黄色シルトブロック
多く含む。
2. 黒褐色土層 (G0782/3) しまり・粘りややあり、
砂質化している。
3. 黄褐色土層 (G0785/6) しまり・粘りあり、
黄色シルトブロック含む。

第189図 H10号住居址及び出土遺物実測図

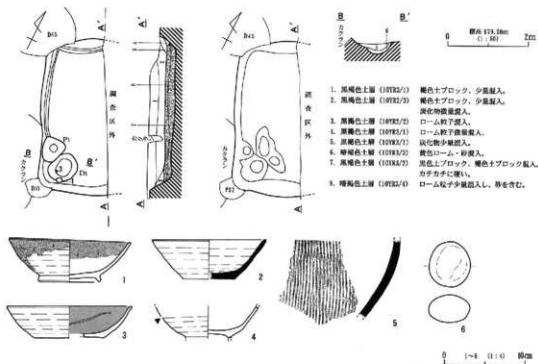
No.	種別	深さ	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			口徑	底径	内面	外面			
1	須恵器	杯	—	5.8	—	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右側断片切り	9%土層 底面1/2残存	貯蔵穴
2	土師器	杯	18.0	—	—	ロクロナデ	褐色粘り	9%土層 口縁1/2残存	貯蔵穴
3	土師器	甕	11.4	—	—	ヘタナデ	ヘタナデ	9%土層 口縁1/2残存	貯蔵穴
4	土師器	甕	20.0	—	—	ヘタナデ	ヘタナデ	9%土層 口縁1/2残存	貯蔵穴

第114表 H10号住居址出土遺物観察表

(10) H11号住居址 (第190図, 写真図版八)

本住居址は、調査地点B区中央であるナ-102.103Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈する。規模は北壁1.14m (検出)・南壁1.64m (検出)・西壁3.32mで、壁高さは南壁中央で最大34cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.92m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは3~26cmで貼られていた。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径58cm・深さ24cmを測る。また、住居址の南西コーナー部には円形の土坑が検出された。規模は長軸74cm・短軸60cm・深さ29cmを測る。本址の掘り方は、住居址南西コーナーが不整形の掘り込みがなされていた。



第190図 H11号住居址及び出土土遺物実測図

No.	類別	品名	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置	
			口内径	底径	高さ	内面	外面			
1	灰釉陶器	碗	15.0	7.7	5.2	ロクロナデ	輪製(ハケ)	ロクロナデ 輪製(ハケ) 付高台	完全複製	3cm
2	須恵器	鉢	14.2	6.4	6.6	ロクロナデ		ロクロナデ	同輪製 1/3焼存	本
3	土師器	鉢	15.4	6.4	(3.9)	黒色胎土	輪文	ロクロナデ	同輪製 1/3焼存	~14cm D1
4	土師器	碗	-	-	-	ロクロナデ		ロクロナデ スス付着 付高台	完全複製	
5	須恵器	壺	-	-	-	ナデ		平行タタキ	破片複製	
6	磨き石	高材	残存中	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見		出土位置
				5.4	5.1	3.4	127.77			

第115表 H11号住居址出土土遺物観察表

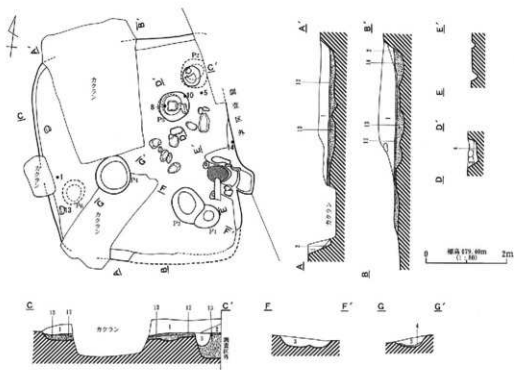
本址からの出土遺物は、覆土から出土した。1は灰釉陶器碗でD1号土坑陥の床面から出土した。口縁部を一部欠損する他は完形である。軸はハケ塗りである。2は須恵器鉢である。焼成が甘いのか黒斑が付いたようになっている。3は土師器鉢で内面黒色処理が行われ、暗文風のミガキが施されている。4は土師器碗で、内面は黒く、外面に煤のような付着部があり、燈明皿等の使用が考えられる。5は須恵器壺の破片であり、外面タタキが施されている。6は磨き石である。

本址はこれらの出土遺物から、9世紀後半の所産時期が考えられる。

(11) H12号住居址 (第191・192図, 写真図版九)

本住居址は、調査地点C区中央であるナ-101.102、ニ-101.102、ヌ-101.102Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、北西側がカクランにより削平されている。

形態は方形を呈する。カマドは東壁に造られている。住居址の主軸方位はN-16°-Wを測る。規模は北壁1.46m(検出)3.73m(推定)・南壁0.60m(検出)4.20m(推定)・西壁4.76m(推定)・東壁3.70m(推定)で、壁高さは南壁中央で最大60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で21.23㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であった。



- 1. 黒褐色土層 (07R2/2) 砂粒子多量に混入し、炭化物少量混入。
- 2. 黒褐色土層 (07R3/2) ローム粒子(砂粒)多量に混入。
- 3. 黒褐色土層 (07R2/2) 砂粒子多量混入して、ローム粒子・炭化物も含む。
- 4. 黒褐色土層 (07R3/2) ローム粒子混入し、炭化粒子(ネトネトした)多量に混入。

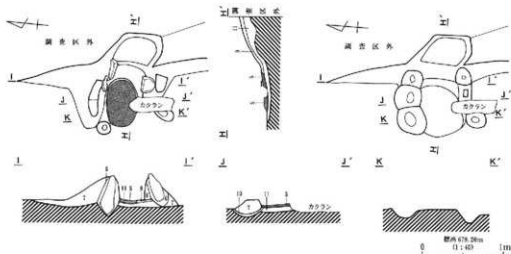
- 12. 黒色土層 (07R2/1) 壁く離れている。
- 13. 黒褐色土層 (07R3/2) ローム粒子・ロームブロック多量に混入して、炭化物微量含む。
- 14. 黒褐色土層 (08R2/2) 黄色砂粒子多量混入。

第191図 H12号住居址実測図

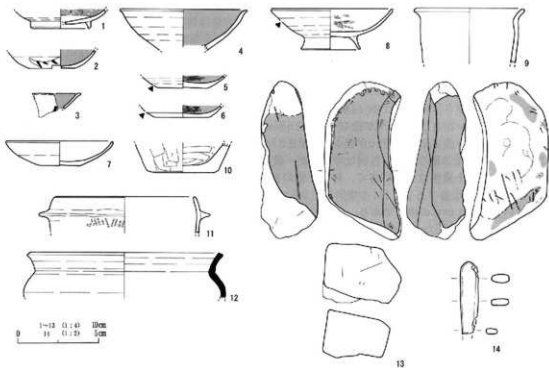
貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~30cmで貼られていた。また、床面には人頭大の礫が多く出土した。ピットは6箇所検出された。各ピットの検出位置に規則性はなかった。ピットの規模はP1が径66cm・深さ18cm、P2が径50cm・深さ56cm、P3が径80cm・深さ30cm、P4が径91cm・深さ28cm、P5が径72cm・深さ26cm、P6が径60cm・深さ25cmを測る。

カマドは東壁やや南寄りで検出された。カマドの主軸方位はN-89°-Eを測る。袖・火床部・煙道部が検出された。煙道部は住居址壁よりやや飛び出すタイプで、煙道長さは55cmである。袖は芯材として川原石を縦に立て、その周りを鈍い赤褐色土で構築している。袖の高さは34~37cm残存していた。火床部は良く焼けており、上面は硬質化していた。焼土の厚みは5cmを測る。カマド掘り方は袖部下にそれぞれ構築材の石を立てたと考えられるピットが検出された。形態はいずれも円形が連続した状態で、規模は径19~37cm・深さ5~20cmを測る。

出土遺物は覆土中や床面から多く出土した。1は灰釉陶器碗で西壁際から出土した。内面に施釉が施されているが、施釉方法は確定できない。2と3は土師器坏である。いずれも外面に墨書が確認できるが判読はできない。4~6は土師器坏で、いずれも内面黒色処理されている。7は土師器坏である。8は土師器碗である。9は土師器の小型甕で口縁部の屈曲が弱い。10は土師器甕の底部と考えられる。11は土師器の羽釜で外面にハケ目が残る。12は須恵器の広口甕の口縁部である。13は砥石で3面に砥面があり、一面には刃物傷のような痕跡がある。14は鉄製品で種別は不明である。



3. 緑赤褐色土層 (5YR3/4) 大灰泥。
 4. 黒褐色土層 (5YR3/1) 炭化物・黄色砂粒子少量混入。
 5. 緑赤褐色土層 (5YR3/2) 黄色砂粒子。
 6. にぶい赤褐色土層 (5YR4/2) rome粒子多量に含む。
 7. 緑赤褐色土層 (5YR3/4) 焼土粒子多量に混入し、灰・炭化物少量混入。
 8. 緑赤褐色土層 (5YR3/3) 炭化物・焼土多量に混入し、romeブロック・rome粒子混入。
 9. 黒褐色土層 (5YR3/1) 黄色砂粒子少量混入。
 10. 黒褐色土層 (5YR3/1) 黄色砂粒子少量混入。
 11. 黒褐色土層 (5YR3/1) 炭化物・黄色砂粒子を少量混入。



第192図 H12号住居址カマド及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法	墓	成形・調整・文様				備考	出土位置		
					内	外	面	面				
1	灰釉陶器	碗	-	7.4	-	ロクロナデ	施釉	ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ・付台付	同転実測	2cm	
2	土師器	杯	-	5.0	-	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ・磨邊	同転実測	底面1/3残存	P3
3	土師器	杯	-	-	-	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ	磨邊	同転実測	口縁1/3残存	
4	土師器	杯	15.0	-	-	黒色処理		ロクロナデ				
5	土師器	杯	-	6.0	-	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ(方向不明)	完全実測	底面2/3残存	1cm
6	土師器	杯	-	7.9	-	ミガキ→黒色処理		ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ	完全実測	底面完全	
7	土師器	杯	13.2	4.8	3.0	ロクロナデ		ロクロナデ		同転実測		P6
8	土師器	碗	15.0	7.3	6.0	ミガキ		ロクロナデ	付高台	完全実測		-15cm P5
9	土師器	甕	13.5	-	-	ナデ		ナデ		同転実測		Ⅱ区北寄り方
10	土師器	甕	-	8.5	-	ヘラケズリ		ヘラケズリ		同転実測		16cm
11	土師器	須恵	17.2	-	-	ナデ		ハケ目		同転実測		Ⅱ区
12	須恵器	甕	23.0	-	-	ロクロナデ		ロクロナデ		同転実測		
No.	器種	素材	焼成	最大径	最大径	最大径	重量	所見			出土位置	
13	灰石	砂岩		19.3	9.3	7.1	1424.42	トに表面と側面使用			0cm	
14	不明	土		(4.4)	1.1	0.6					0cm	

第116表 H12号住居出土遺物一覧表

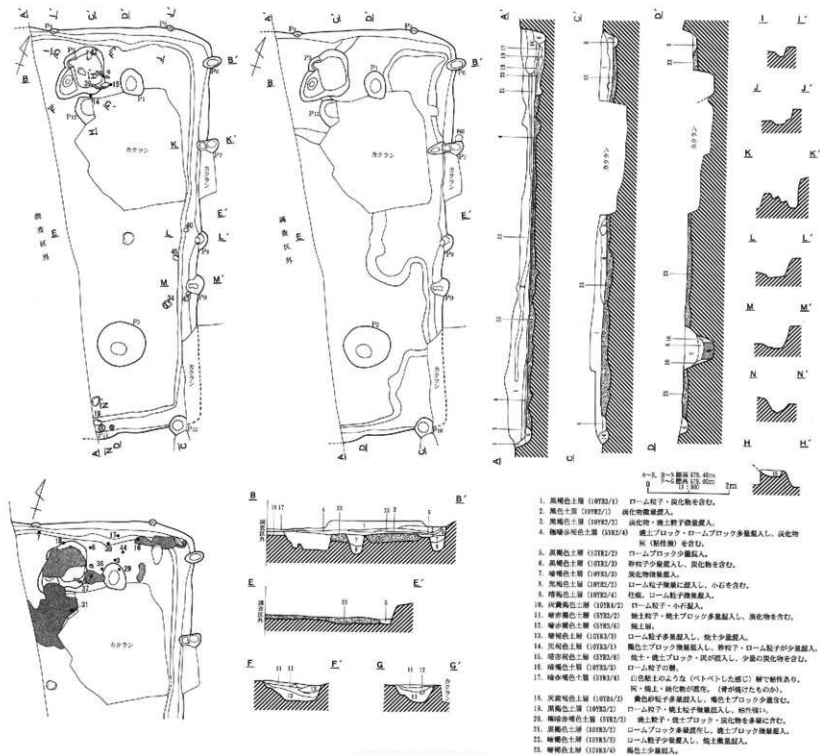
本址はこれらの出土遺物から10世紀前半に位置づけられると考えられる。

(12) H13号住居 (第193・194・195図, 写真図版十・十一)

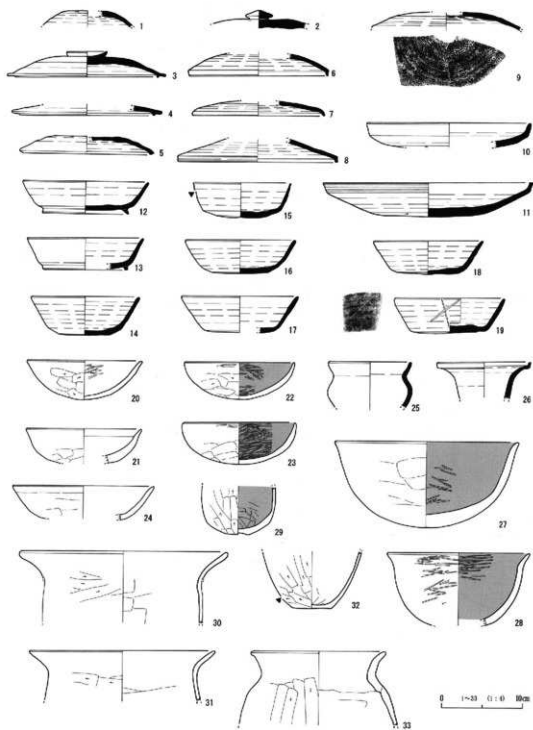
本住居址は、調査地点C区中央であるヌ-99.100.101、ネ-99.100Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは今回の調査では検出されなかったが、P3周辺には焼土と粘土が多量に検出されたことから、北壁側に造られていたと考えられる。規模は北壁4.42m(検出)・南壁2.46m(検出)・東壁9.20m(推定)で、壁高さは東壁で最大40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で30.04㎡を測り、壁長から推定すると住居址全体の規模は100㎡に近い、超大型の竪穴住居址の可能性が高い。住居址の主軸方位はN-15°-Wを測る。覆土はおおむね自然堆積であったが、1層中に炭化物を含む層が入る。床は全体的に硬質で、特に住居址北側が硬かった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~22cmで貼られていた。壁溝は検出された壁に全周しており、形態は逆台形である。規模は幅21~58cm・深さ2~19cmを測る。ピットは12カ所確認された。P2は主柱穴、P4~P10は壁柱穴と考えられる。またP3は貯蔵穴的な位置である。規模はP1が径70cm・深さ53cm、P2が径118cm・深さ86cm、P3が径152cm・深さ47cm、P4が径24cm・深さ26cm、P5が径17cm・深さ26cm、P6が径46cm・深さ68cm、P7が径50cm・深さ58cm、P8が径47cm・深さ50cm、P9が径46cm・深さ59cm、P10が径48cm・深さ27cm、P11が径17cm・深さ7cm、P12が径60cm・深さ15cmを測る。本址の掘り方は、住居址中央部が一段高くなる掘り方で、段差は4~7cm程を測る。

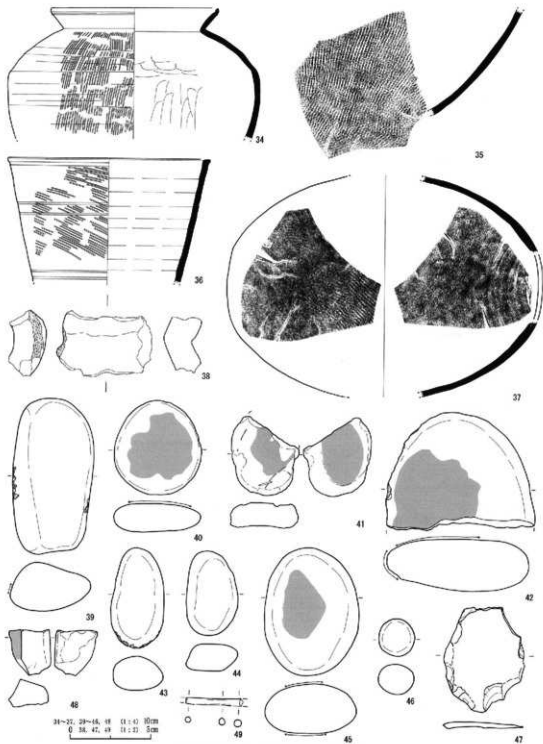
本址からの出土遺物は非常に多く、特に北壁のP3から北東コーナーにかけての床面上から出土した。1~9は須恵器蓋である。1は古墳時代以来の須恵器杯蓋の形態で、天井部が丸くヘラケズリが行われている。P1からの出土である。2は宝珠形のつまみが付くタイプで、覆土中からの出土である。3はつまみ部が環状となる形態の蓋で、返りも端部ではなく内面側にある。これらのタイプは西毛地域の秋間塚群や藤原塚群を中心に製作されたと考えられている。4は3と同じく内面に返りがあるものである。5は返りがなく端部に面取りが施されている。6~8は端部が「く」の字に屈曲するタイプであるが、端部の形状はいずれも違う。9は内面に当て具痕の痕跡が残る。10と11は須恵器の蓋或いは皿で、11は大型品である。いずれも覆土中からの出土であり、残存部も少ない。12と13は須恵器の高台である。14~19は須恵器杯である。いずれもロクロ成形で底部はヘラ切りであるが、18のみ回転ヘラ切りである。また、16は他のものに比して赤化している。19は体部外面に焼成前のヘラ記号「X」がある。20~24は土師器杯であり、いずれも7世紀代に出現してくるタイプのものである。22と23は内面ミガキが施され黒色処理されている。25は須恵器の小型の広口壺、26は須恵器の長頸壺の口縁部と考えられる。27と28は土師器鉢である。いずれも内面ミガキと黒色処理が施されている。29~33は土師器甕で、33は器厚があり外面縦方向の削りが施されており、古墳時代以来の



第193図 H13号住居址実測図



第194図 H13号住居址出土遺物実測図(1)



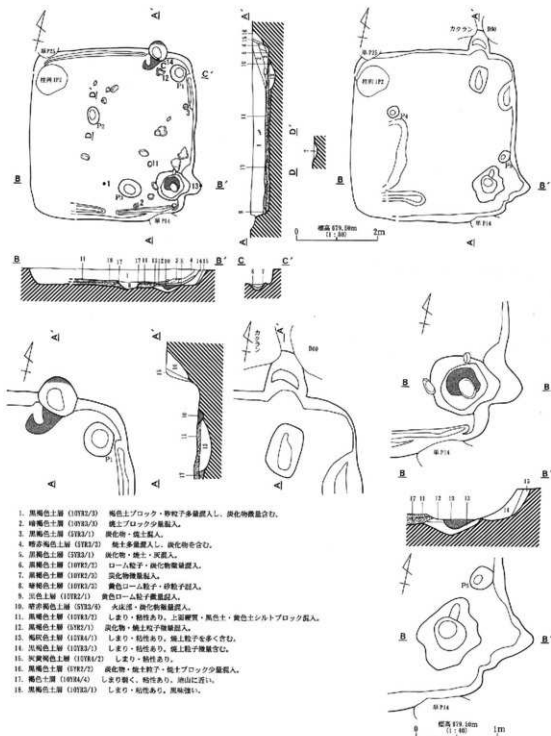
第195图 H113号住居址出土遗物实图(2)

No.	種別	図形	法製		成形・調整・文様		備考	出土位置	
			1層(厚)2層(幅)3層(高)	最高高	内面	外面			
1	須恵器	蓋	-	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/4残存	P1	
2	須恵器	蓋	-	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照	IV区	
3	須恵器	蓋	19.5	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	完全実照 4/5残存	3.5cm P1	
4	須恵器	蓋	18.4	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/7残存	P3	
5	須恵器	蓋	16.4	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/3残存	P1	
6	須恵器	蓋	17.0	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/3残存	10cm	
7	須恵器	蓋	16.2	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照	cm	
8	須恵器	蓋	19.6	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/8残存	Ⅲ区	
9	須恵器	蓋	-	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照	Ⅱ区	
10	須恵器	蓋or皿	20.4	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/8残存	V区	
11	須恵器	蓋or皿	26.0	-	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照	I・IV区	
12	須恵器	高台杯	15.6	10.6	3.9	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ+付高台	図録実照 1/4残存	I区ホリ方
13	須恵器	高台杯	14.1	10.4	3.9	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ+付高台	図録実照 1/4残存	
14	須恵器	杯	13.4	8.4	4.6	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/3残存	-5cm ホリ方
15	須恵器	杯	12.0	6.2	4.2	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 3/4残存	2cm ホリ方
16	須恵器	杯	13.8	6.9	4.1	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	完全実照	4cm
17	須恵器	杯	14.4	8.6	4.4	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	図録実照 1/2残存	15cm
18	須恵器	杯	13.8	7.9	4.1	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	完全実照 2/3残存	3cm
19	須恵器	杯	13.6	9.1	4.3	ロクロナデ	大井部回転ヘラケズリ	完全実照 3/4残存	3cm
20	土師器	杯	14.2	-	ミガキ	ヘラケズリ	図録実照 1/2残存	Ⅱ区	
21	土師器	杯	14.2	-	ナデ	ヘラケズリ+ナデ	図録実照 口縁1/5残存	I・Ⅱ区	
22	土師器	杯	13.6	-	4.6	ミガキ+黒色処理	口縁ミガキ+体部ヘラケズリ	図録実照 1/3残存	P3 IV区
23	土師器	杯	14.0	-	5.1	ミガキ+黒色処理	口縁ミガキ+体部ヘラケズリ+ナデ	図録実照 1/3残存	P1 Ⅲ区
24	土師器	杯	17.4	-	ナデ	ヘラケズリ+ナデ	図録実照 1/7残存	Ⅱ区	
25	須恵器	蓋	10.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ	図録実照 口縁1/4残存	I区	
26	須恵器	蓋	11.6	-	ロクロナデ	ロクロナデ	図録実照 口縁1/4残存	Ⅲ区ホリ方/Ⅳ区	
27	土師器	鉢	22.6	-	ミガキ+黒色処理	ヘラケズリ+ナデ	図録実照 口縁1/4残存	P3 Ⅱ区	
28	土師器	鉢	17.6	-	ミガキ+黒色処理	ヘラケズリ+ミガキ	図録実照 口縁1/5残存	P3	
29	土師器	鉢	-	-	ヘラナデ+黒色処理	ヘラケズリ	図録実照 底部2/3残存	3cm	
30	土師器	壺	23.6	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	図録実照 口縁1/5残存	5cm	
31	土師器	甕	22.8	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	図録実照 口縁1/4残存	6cm	
32	土師器	甕	-	4.8	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実照 底部欠部	P1 Ⅱ区	
33	土師器	甕	16.8	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	図録実照 口縁1/4残存	P3	
34	須恵器	甕	20.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ	図録実照 口縁1/4残存	10cm IV区	
35	須恵器	甕	-	-	ナデ	平行タタキ	断面実照	Ⅳ区	
36	須恵器	甕	25.0	-	ロクロナデ	平行タタキ	図録実照 口縁1/6残存	9~15cm P3	
37	須恵器	横瓶	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	図録実照	5cm	
38	土製品	羽口	外径6.0内径2.6	-	ナデ	ナデ / ロ付着	図録実照	Ⅳ区	
39	磨石	砂打	19.0	10.0	6.8	1870.00	両面に磨打面 施熱有り(上半部赤褐色)	-22cm P3	
40	磨石	安山岩	11.5	10.8	3.5	560.00	正面に磨り面	16cm	
41	磨石	白色燧石	9.7	8.2	3.6	60.84	上部欠部	10cm	
42	磨石	磨石製陶器	(1.4)	(18.3)	(6.3)	(2140.00)	下部欠部 正面に磨り面(磨石の機能) 上側の断面は使用のため不揃	17cm P3	
43	磨石	輝石安山岩	12.2	6.5	4.3	430.00	下部側に磨打面	11cm	
44	磨石	角閃石安山岩	10.3	6.4	3.2	360.00		5cm	
45	磨石	輝石安山岩	15.6	11.7	6.3	1660.00	正・裏面に磨り面	6cm	
46	磨石	安山岩	4.6	4.4	3.7	54.00		I区	
47	磨石	砂富砂打	6.5	4.9	0.4	13.48	摩耗面有り	I区	
48	磨石	砂岩	(2.6)	5.1	3.4	98.54		I区	
49	釘?	鉄	(3.6)	(0.2)	(0.5)			Ⅲ区	

第117表 H13号住居址出土遺物観察表

伝統的な甕の成形である。30と31は器厚が薄く、外面の削りも横方向となるいわゆる「武蔵甕」の範疇に含まれるものとする。34と35は須恵器甕で、34は橙色の生焼けのようである。いずれも平行タタキが施されている。36は須恵器の甕と考えられる。外面に2条1単位の沈線がめぐっている。自然釉が付着している。37は須恵器の横瓶であり、外面は平行タタキである。濃い深緑の釉が多量に付着している。38は土製の羽口で一部に鉄分の付着が見られる。39～47は石器類で、48は砥石である。49は鉄製品である。

本址はこれらの出土遺物から、8世紀前半に位置づけられる。



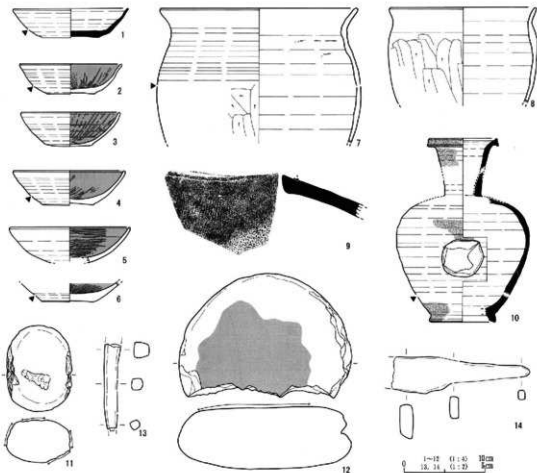
第196図 H114号住居址実測図

(13) H14号住居址 (第196・197図, 写真図版十二・十三)

本住居址は、調査地点C区中央であるト-104.105、ナ-104.105Grに位置する。残存状態は良好であるが、先でも述べた通り西側1/4がH9号住居址と重複関係にあり、当初に新旧関係を誤って掘り進んだ事から、本址の西壁部分の確認できなかつた状態となっている。

形態は方形を呈する。カマドは北壁東よりと南東コーナーに造られている。住居址の主軸方位はN-10°-Wを測る。規模は北壁3.65m・南壁3.52m(推定)・西壁3.70m(推定)・東壁3.72mで、壁高さは北壁で最大37cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で14.93㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であり、特に東側カマド周辺にかけて硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは4~18cmで貼られていた。壁溝は北壁と南壁の一部で検出された。規模は幅11~20cm・深さ3~9cmを測る。また、床面からは拳大の礫が散らばつた状態で検出された。ピットは掘り方検出時も含め、5カ所確認された。規模はP1が径43cm・深さ18cm、P2が径42cm・深さ12cm、P3が径56cm・深さ24cm、P4が径31cm・深さ22cm、P5が径29cm・深さ18cmを測る。本址の掘り方はほぼ平坦であったが、西側部分が一段掘り下がっていた。

カマドは北壁東よりと南東コーナーの2箇所を確認された。残存状況から最終の使用カマドは南東コーナーのカマドと考えられる。北壁のカマドは火床部と煙道部が確認されたのみである。煙道部は



第197図 H14号住居址出土遺物実測図

No.	種別	部類	法量			内		外		備考	出土位置	
			口内径	底径	高	正	内	正	外			
1	須恵器	杯	14.2	7.0	5.8	ロクロナデ	火摩	ロクロナデ	底部右回転糸切り	火摩	完全発掘	1cm I・B・Ⅲ区
2	土師器	杯	12.6	5.8	3.7	ミガキ一黒色処理		ロクロナデ	底部右回転糸切り	火摩	完全発掘	3cm
3	土師器	杯	12.3	5.9	4.2	ミガキ一黒色処理		ロクロナデ	底部右回転糸切り	火摩	完全発掘	1.5cm Ⅲ区
4	土師器	杯	13.7	6.4	(4.2)	ミガキ一黒色処理		ロクロナデ	底部右回転糸切り	ヘラナデ	完全発掘	Ⅲ区
5	土師器	杯	14.8	-	4.3	ミガキ一黒色処理		ロクロナデ			完全発掘	Ⅲ区
6	土師器	杯	-	-	(2.5)	ミガキ(放射状)一黒色処理		ロクロナデ	底部右回転糸切り	高内削落口	完全発掘	I・II・IV区
7	土師器	甕	24.5	-	(16.5)	ロクロナデ		ロクロナデ	胴下平帯ヘラナデリ		回転発掘	I・IV区
8	土師器	甕	19.2	-	(11.7)	ロクロナデ		ロクロナデ	胴部ヘラナデリ		回転発掘	I・Ⅲ区
9	須恵器	甕	-	-	-	ヨコナデ	頸部自然輪付着	タタキ	頸部自然輪付着		折本	I区
10	須恵器	長頸甕	8.4	8.2	-	ロクロナデ	頸部自然輪付着	ロクロナデ	頸部自然輪付着		回転発掘	I・II・Ⅲ区
凡	部類	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見			出土位置	
11	敲石	角四石(山産)		10.5	8.0	5.3	520.00	正・竪・肩側面に磨打痕			2cm I区	
12	奇石	安山岩		(13.2)	21.1	(7.7)	(3570.00)	正・竪・中央部分に磨打痕有り 正面に磨り面(奇石の磨打痕)			5cm	
13	釘	鉄		(5.3)	(6.0)	(1.0)					3cm	
14	刀子	鉄		(8.4)	2.3	(6.8)					17cm カマド	

第118表 H14号住居址出土遺物要覧表

壁よりもやや飛び出すタイプで、規模は長さ65cmを測る。火床部はあまり硬くなく、表面は硬質化していなかった。南東コーナーのカマドも火床部と煙道部の検出であったが、火床部周辺にはカマドの袖構梁材と考えられる礎が散乱した状態であった。煙道部は壁よりも僅かに飛び出すタイプで、規模は長さ53cmを測る。火床面の表面はやや硬く、焼上の厚みは11cmを測る。また、本址のカマドには黒褐色土と灰黄褐色土の構築土が、火床部と煙道部に使用されていた。

出土遺物は覆土中から多く出土した。1は須恵器杯である。床面より1cm浮いた状態で出土した。2～6は土師器杯である。いずれも内面黒色処理されている。2と3は内面に放射状の暗文がある。7と8は土師器甕である。いずれもロクロ成形のいわゆる「ロクロ甕」と呼ばれるものである。9は須恵器甕の肩部である。10は灰陶器とすべきか、須恵器とすべきか、迷った品である。今回は須恵器としたが、いわゆる「原始灰釉」の可能性も指摘できる。器種は長頸甕である。ほとんどが細か小片となつて出土した。色調は暗赤褐色で底に釉がかかっている。胴部中央には焼成後に開けたと考えられる孔がある。頸部の内面が欠損して、2段接合なのか不明である。11は敲石で両側面に敲き痕がある。12は奇石で、中央にすり面が確認できる。13と14は鉄製品で、13は釘、14は刀子の柄の部分と考えられる。

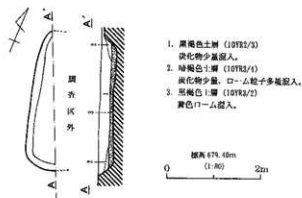
本址の所産時期はこれらの出土遺物より、9世紀の後半と考えられる。

(14) H15号住居址 (第198図, 写真図版十四)

本住居址は、調査地点C区中央である2-100Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となり、住居址の西壁のみの検出である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁0.60m(検出)・西壁2.72mで、壁高さは南壁で最大15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で0.85㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質である。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2～13cmで貼られていた。

本址からの出土遺物は、覆土中より土師器坏片3点と須恵器甕片1点が出土したのみであり、よって本址の帰属時期も不明である。



第198図 H15号住居址実測図

1. 黒褐色土層 (10YR2/3)
炭化物少量混入。
2. 暗褐色土層 (10YR2/1)
炭化物少量、ローム粒子多量混入。
3. 灰褐色土層 (10YR2/2)
黄色ローム混入。

(15) 16号住居址 (第199図, 写真図版十五)

本住居址は、調査地点B区中央であるN-55.56、A-55.56Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外、北側がカクランによって削平されている。

形態は東西方向に長い長方形を呈する。カマドは東壁に造られている。住居址の主軸方位はN-50°-Wを測る。規模は北壁0.87m(残存)・南壁1.00m(残存)・西壁0.91m(残存)・東壁2.85m(残存)で、壁高さは東壁で最大28cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は8.83㎡を測る。覆土は3層に分かれるが、第3層が砂層で水の影響を受けたような堆積状況であった。床は全体に硬質で、貼床が1~17cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、2カ所確認された。規模はP1が径30cm・深さ6cm、P2が径41cm・深さ46cmを測る。

カマドは東壁の中央に造られており、袖部・煙道部・火床部が残存していた。煙道部は僅かに住居址壁よりも飛び出すタイプで、長さは24cmを測る。袖部は焚口側に大型の川原石を2本立て、黒色土と黄褐色土で構築していた。火床部は小さく、また硬質化も確認できなかった。

本址からの出土遺物は、覆土中とカマドから多く出土した。1と2は土師器環である。1は内面黒色処理とミガキが施されている。3は須恵器の平瓶と考えられるが、不確定である。カマド内より出土した。4~6は土師器甕である。4と6はいわゆる「ロクロ甕」と呼ばれるもので、顕著なロクロ成形が施されている。5は内外面に細かなハケ目残り、口唇部もつまみ上げたような特異な形態を呈する。山梨や伊勢地方といった外來の形態と考えられる。7は砥石、9は未製品の打製石斧と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、10世紀の所産時期と考えられる。

No	種別	器種	注 記		成 形 ・ 割 断 ・ 文 様		備 考	出土位置	
			形状	断面	内 面	外 面			
1	土師器	環	14.5	6.5	4.6	3/4弁 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り印	完全表面 3/4残存	下層
2	土師器	環	12.1	4.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部石回転糸切り	完全表面 2/3残存	下層
3	須恵器	平瓶	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転表面	カマド
4	土師器	甕	17.8	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転表面 口縁1/5残存	I区
5	土師器	甕	13.8	-	-	ハケ目	ハケ目	回転表面	II区 カマド
6	土師器	甕	14.8	-	-	ロクロナデ	ロクロナデヘラケズリ	回転表面	II区 カマド
8	砥石	素 材	保存率	最大径	最大厚	重量	所 見		出土位置
7	砥石	砂岩		18.4	6.8	3.8	800.00	上部を斜めに磨いた 下部は磨打による凹溝	0区
9	石核	黒曜石		3.0	2.8	1.9	15.78	全体に風化している 断面に3ヶ所の割痕あり	II区
9	打削(未製品)	砂質砂岩		11.3	8.1	1.3	106.46		I区

第119表 H16号住居址出土遺物観察表

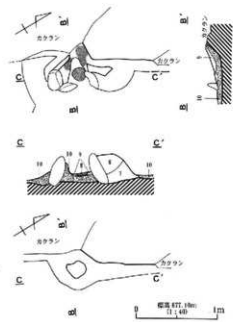
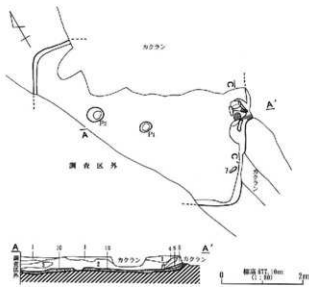
(16) 17号住居址 (第200図, 写真図版十六)

本住居址は、調査地点B区北端であるB-49.50、C-49.50Grに位置する。残存状態は住居址東側が調査区域外となる他は良好である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。住居址の主軸方位はN-15°-Wを測る。規模は北壁2.50m(検出)・南壁3.31m・西壁3.12m・東壁1.05m(検出)で、壁高さは南壁で最大65cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で9.81㎡を測る。覆土は非常に厚かったが、おおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~11cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁の一部に確認され、規模は幅30~49cm・深さ3~8cmを測る。ピットは3カ所確認され、P1~P2は主柱穴と考えられる。規模はP1が径49cm・深さ9cm、P2が径59cm・深さ7cm、P3が径35cm・深さ4cmを測る。

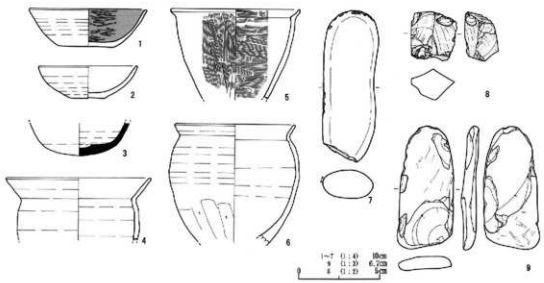
カマドは北壁に造られ、袖と火床部が検出された。煙道部はごく僅かに壁よりも張り出すタイプで、長さは45cmを測る。袖は大型の川原石と褐色土で構築されており、高さは22~35cm残存していた。火床部は硬質化するほどに焼けていなかった。

本址からの出土遺物は、覆土中からの出土がほとんどであった。1と2は須恵器環である。2は底部回転ヘラ切りが行われている。3は土師器環である。内外面に粗いミガキを施す。4は土師器の小型甕の口縁部である。5は須恵器の甕で、全体に焼成が弱く軟質感のある焼き上がりとなっている。6

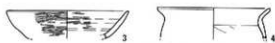
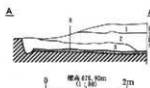
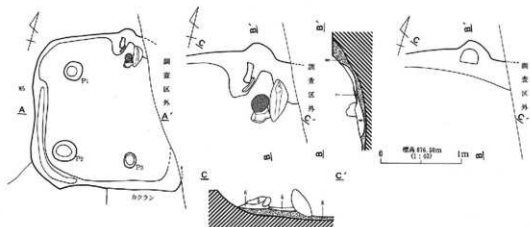


1. 黒色土層 (10YR2/1) しまりあり、炭化物のような臭味。
2. 褐色土層 (10YR4/0) しまり・粘性あり、砂を多く含む。
3. 灰白色土層 (10YR7/1) しまり・粘性なし、砂解でレンズ状を呈する。草全体に水が入った様な土層。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) しまり・粘性あり、焼土粒子微量を含む。
5. 暗褐色土層 (10YR3/2) しまり・粘性あり、焼土粒子多量を含む。
6. 明黄褐色土層 (10YR5/3) しまり・粘性あり、黄色シルトの粘土化した土。

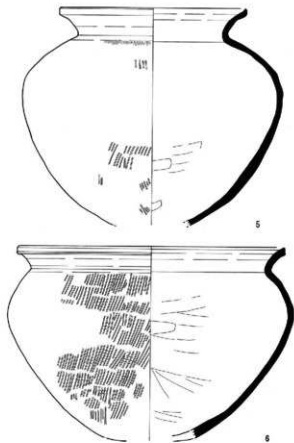
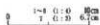
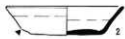
7. 黒色土層 (10YR2/1) しまり・粘性やや弱い、小石を多く含む。
8. 赤色土層 (10R4/3) 火灰層。カマドの火灰層は弱く、焼土の軟質化はみられない。
9. 褐色土層 (10YR4/0) しまり・粘性弱い、焼土多く含む。
10. 暗褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり、上面が軟質化している。カマド跡に粘土状土。



第199図 H16号住居址及び出土遺物実測図



1. 褐色土層 (10T34/G) しまり・粘性あり。上面積分の沈下あり。
2. にぶい黄褐色土層 (10T34/G) しまり・粘性あり。
礫の多い層を多く含む。
3. 黒褐色土層 (10T32/G) しまりやや弱く。粘粒あり。
炭化物を多く含む。
4. 灰褐色土層 (10T34/G) しまり・粘性あり。焼土粒を多く含む。
5. 淡褐色土層 (10T35/G) しまり・粘性あり。
6. 褐色土層 (10T35/G) しまり・粘性弱。小石を多く含む。
7. 赤色土層 (10T34/G) しまり・粘性弱。
8. 黒色土層 (10T32/G) しまり・粘性あり。水分が多く
ベトベトしている。炭化物層を含む。



第200図 H17号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量		成形・造勢・文様		備考	出土位置	
			口径	底径	内径	外径			
1	須恵器	杯	15.0	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	図説先簡 口縁1/7残存	II区
2	須恵器	杯	14.5	9.1	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 流線部輪ヘラ作り	完全欠損	II区
3	土師器	杯	15.0	—	—	ミガキ	ミガキ	図説先簡	II区
4	土師器	甕	14.0	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	図説先簡 口縁1/2残存	II区
5	須恵器	甕	23.0	—	—	ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ 平行タタキ	I・II区
6	須恵器	甕	33.0	—	—	ロクロナデ	ヘラナデ	ロクロナデ 平行タタキ	I・II区
7	器種	素材	残存数	最大径	最大厚	重量		西見	出土位置
	不明	白色軽石		5.6	5.6	3.6	23.84		II区

第120表 H17号住居址出土遺物観察表

は須恵器の広口甕である。外面は平行タタキ目で、内面はナデが施されている。7は軽石で造られた石製品である。貫通した孔と穿孔途中の孔が確認できるが、用途は不明である。

本址はこれらの出土遺物から、8世紀前半の所産時期と考えられる。

(17) H18号住居址 (第201図, 写真図版十八)

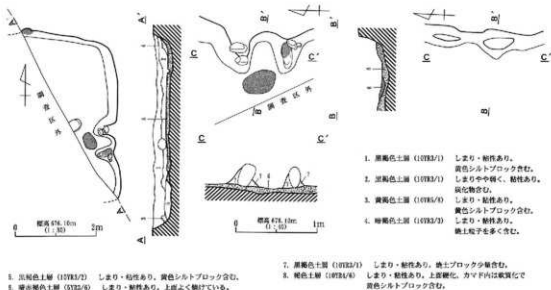
本住居址は、調査地点A区南端であるL-32.33、M-32Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外になり、他は良好である。

形態は方形を呈すると考えられる。カマドは東壁に造られていた。住居址の主軸方位はN-89°-Eを測る。規模は北壁2.06m(検出)・東壁3.63mで、壁高さは東壁で最大31cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は3.78㎡を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体に硬質で、貼床は全体に4~17cmの厚さで貼られていた。

カマドは東壁にあり、袖と火床部が検出された。煙道部は住居址壁よりも飛び出さないタイプである。袖は川原石を芯材として、黒褐色土によって覆われていた。火床部上面はよく焼けており、硬質化していた。焼土の厚みは5cmを測る。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土から須恵器坏片8点と土師器甕の小片が多数出土したのみであった。なお、この土師器甕の小片はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる形態の甕である。

本址は出土遺物が少なく、所産時期は不明である。

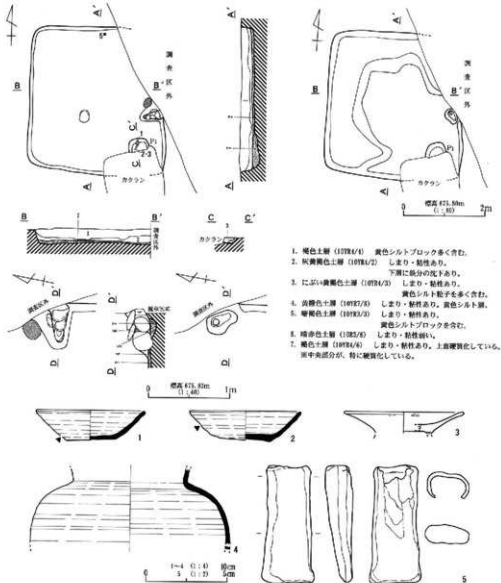


第201図 H18号住居址実測図

(18) H19号住居址 (第202図, 写真図版十八・十九)

本住居址は、調査地点A区中央であるM-28.29、N-28.29Grに位置する。残存状態は北東コーナ側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは東壁に造られている。規模は北壁2.00m(検出)・南壁3.22m(推定)・西壁3.18m・東壁1.74m(検出)で、壁高さは東壁で最大30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で9.41m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、特に住居址中央が硬かった。貼床は全体に貼られており、厚さは2~13cmを測る。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径50cm・深さ16cmを測る。検出位置より貯蔵穴の可能性もある。住居址の掘り方は北壁と西壁際のみ一段低くなる掘り方で、段差は4~9cmを測る。



第202図 H19号住居址及び出土遺物実測図

カマドは右袖と火床部のみ検出された。大型の川原石を立て、その上に扁平な石を乗せて袖としていた。高さは35cmを測る。火床部は小さく、焼け方もあまり強くなかった。

本址からの出土遺物は少なく、5点を図示した。1と2は須恵器環である。1は底部回転糸切り離しの後、手持ちヘラケズリを施しているようにも観察できるが、摩耗が激しく確証を得ない。2は生焼けのような橙色をした須恵器である。3は土師器の皿である。高台部分が欠損していたが、欠損後に平らに削り二次利用の可能性がある。4は須恵器の壺で、胴部から頸部の部分である。5は鉄製品の斧で、柄を装着する部分はくるむような形態である。北壁際床面より出土した。

本址はこれらの出土遺物から、9世紀前半に位置づけられると考える。

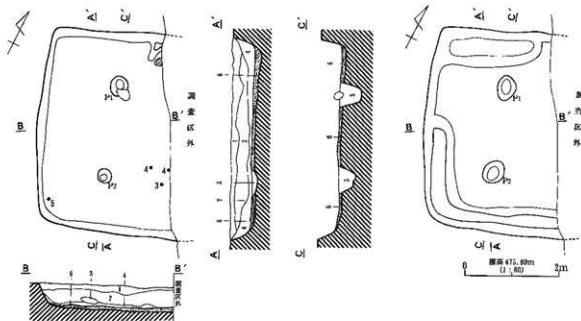
No.	種別	規格	数量			成形・調査・文様		備考	出土位置
			口径	底径	高さ	内面	外面		
1	須恵器	環	13.5	6.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り→手持ちヘラケズリ(?)	完全実測	~8cm P1
2	須恵器	鉢	13.9	6.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	完全実測	~13.5cm ホリ力
3	土師器	高台皿	14.8	6.8	2.6	ミガキ	ミガキ	図帳実測	13.5cm IV区
4	須恵器	壺	-	-	(0.8)	ロクロナデ	胴部自然輪行壺	図帳実測	Ⅱ・Ⅳ区
No.	器種	素材	残存率	最大径	最大幅	輸入率	重量	所見	出土位置
5	鉄斧	鉄	7.2	3.2	1.7				2cm

第121表 H19号住居址出土遺物観察表

(19) H20号住居址 (第203・204図, 写真図版十七)

木住居址は、調査地点A区北側であるP-23.24、Q-23.24Grに位置する。残存状態は住居址の東側が調査区域外となる他は、良好である。

形態は方形を呈する。カマドは北壁に造られている。規模は北壁2.30m(検出)・南壁2.84m(検出)・西壁4.00mで、壁高さは北壁で最大48cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面



1. 濃い黄褐色土層 (10TR6/0)
しまり・粘りあり。下層に硬質の鉄分沈下。
2. 黄褐色土層 (10TR4/2)
しまり・粘りあり。小石を含む。
3. 褐色土層 (10TR4/4)
しまり・粘りあり。黄色シルト粘りを含む。
4. 黄褐色土層 (10TR3/1)
しまり・粘り強い。土中粘りと黄色粘りを多く含む。
5. 灰黄褐色土層 (10TR4/2)
しまり・粘り強い。小石を含む。
6. 黄褐色土層 (10TR5/8)
しまり・粘りあり。小石を少量含む。
7. 褐色土層 (10TR3/1) しまり・粘りあり。

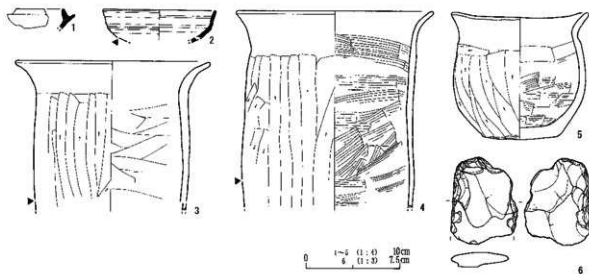
第203図 H20号住居址実測図

積は検出部分で9.97mを測る。住居址の主軸方位はN-24°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は硬質であり、特に住居址中央が硬かった。貼床は1~14cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、2箇所確認された。P1とP2は主柱穴と考えられる。規模はP1が径44cm・深さ21cm、P2が径32cm・深さ27cmを測る。本址の掘り方は中央部はほぼ平坦であったが、北壁側が一段下がり、南西コーナーから南壁にかけては一段上がった掘り方であった。

カマドは北壁側に造られていた。左袖と火床部のみの検出であった。袖は黄色土により構築され、火床部は小さく表面の硬質化も見られなかった。

本址からの遺物は覆土を中心に出土した。1は須恵器坏身の破片である。2は須恵器高坏の坏部と考えられ、外面に自然釉が付着している。3と4は土師器甕で、口縁部があまり屈曲しないタイプの甕で、外面は縦方向のヘラケズリが施される。5は土師器の小型甕である。6は打製石斧の一部と考えられる。

本址の所産時期は、これらの遺物から不確実ではあるが、7世紀後半に位置づけられる。



第204図 H20号住居址出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			口内径(%)	底径(%)	器高(%)	厚(%)	内面	外面		
1	須恵器	坏	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	破片・支脚	Ⅱ区
2	須恵器	高坏	12.0	11.0	(3.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ 自然釉付着	四輪実測	Ⅱ区
3	土師器	甕	20.7	-	(15.8)	-	口縁ヨコナデ-胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ-胴部ヘラケズリ	四輪実測	4cm
4	土師器	甕	21.0	-	(21.0)	-	口縁ヨコナデ-胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ-胴部ヘラケズリ	四輪実測	2~3cm
5	土師器	小型甕	14.5	7.9	13.4	-	口縁ヨコナデ-胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ-胴部ヘラケズリ	完全実測 厚耗	16cm Ⅳ区
6	打製石斧	砂質砂岩	6.8	6.2	1.3	43.67	下刃欠損	所見		Ⅰ区

第122表 H20号住居址出土遺物観察表

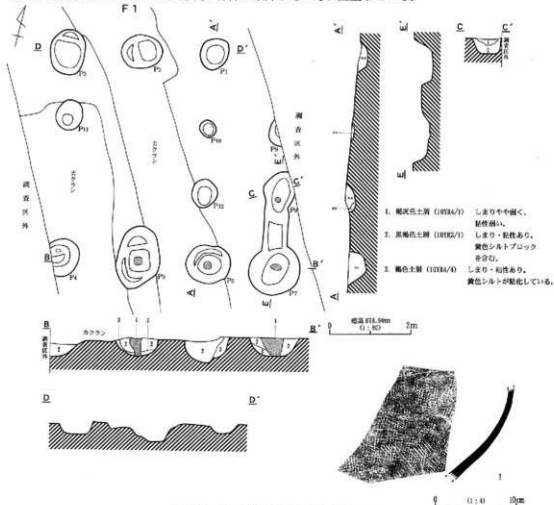
第2節 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址 (第205図, 写真図版二十)

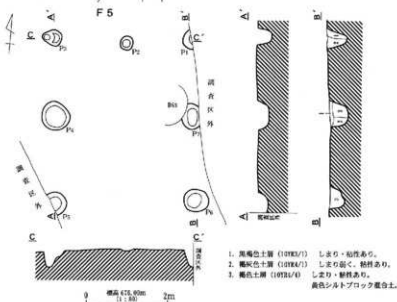
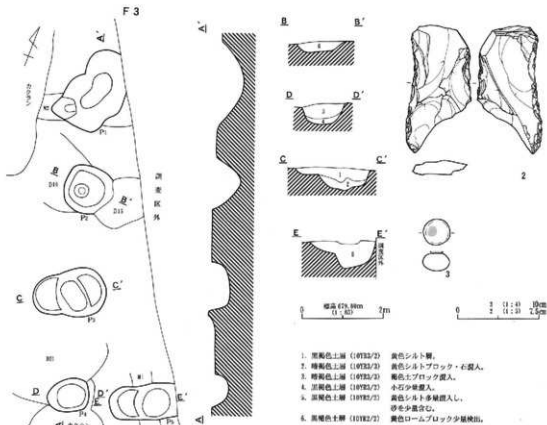
本址は、調査地点C区北側であるヒ-90.91、フ-89.90.91、へ-90Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。また、掘立柱建物址内もカクランにより柱列が確認できなかった部分がある。

形態は東西方向に長い3間×3間の総柱式建物址と考えられる。軸方位はN-12°-Wを示す。規模は桁行5.30m (P4~P7)・梁行5.03m (P3~P4)で、桁行柱間は1.67~1.93m・梁行柱間は1.65~1.82mを測る。ピット間に囲まれた面積は26.66㎡を測る。柱穴の形態はいずれも円形もしくは楕円形である。P7~P8の間には布状にピット間が連結していた。ピットの規模はP1が径81cm・深さ27cm、P2が径100cm・深さ43cm、P3が径110cm・深さ33cm、P4が径102cm・深さ30cm、P5が径154cm・深さ61cm、P6が径110cm・深さ55cm、P7が径122cm・深さ48cm、P8が径77cm・深さ39cm、P9が径66cm・深さ30cm、P10が径43cm・深さ7cm、P11が径74cm・深さ27cm、P12が径68cm・深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP5とP7で、P5~P8まではピット底面に円形もしくは方形の非常に硬質化した面が確認された。

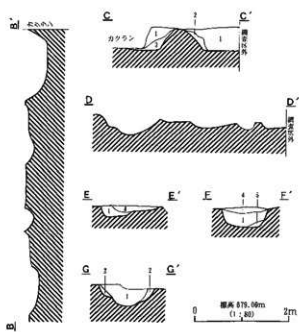
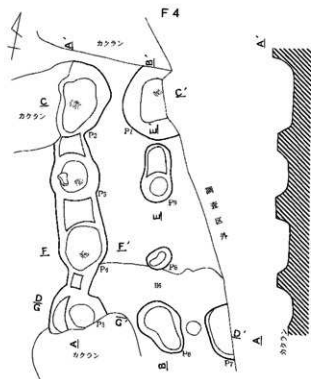
本址からの出土遺物は図示した1の須恵器甕の他に、P3より須恵器甕片、P6より土師器甕片、P7より土師器甕片、P8より土師器甕口縁部の破片がそれぞれ出土している。



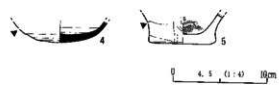
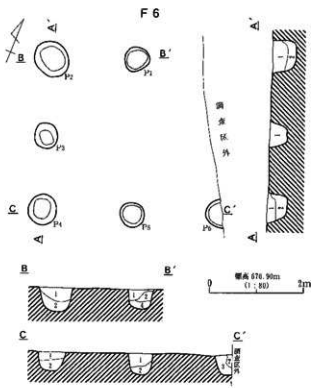
第205図 F1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図



第206図 F3・5号獨立柱建物址及び出土遺物実測図



1. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり。
小粒の黄色シルトブロックを多く含む。
2. 褐色土層 (10YR4/4) しまり・粘性あり。
黄色シルトを多く含む。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) しまり・粘性あり。
砂と黄色シルトブロックを多く含む。
4. にがい黄褐色土層 (10YR4/3) しまり・粘性あり。
5. 褐色土層 (10YR4/5) しまり・粘性あり。



1. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロック含む。
2. 黒褐色土層 (10YR3/1) しまりやや弱く、粘性あり。
1層よりしまり少ない、黄色シルト多い。
3. 褐色土層 (10YR4/1) しまり・粘性あり。
4. 黄褐色土層 (10YR4/5) しまり・粘性あり。黄色シルト多量。

第207図 F4・6 杉原柱建物址及び出土遺物実測図

これら土師器の特徴は奈良・平安時代のものであり、本址の帰属時期は奈良時代以降と考えられる。

(2) F 3号掘立柱建物址 (第206図, 写真図版二十)

本址は、調査地点C区中央部であるタ-112、ナ-110.111.112Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。

形態は南北方向に長い3間以上の側柱式建物址である。軸方位はN-17°-Wを示す。規模は桁行7.20m (P1~P4)・梁行2.10m (P4~P5)で、桁行柱間は2.16~2.44mを測る。柱穴の形態はいずれも楕円形である。ピットの規模はP1が径208cm・深さ58cm、P2が径120cm・深さ52cm、P3が径180cm・深さ52cm、P4が径104cm・深さ42cm、P5が径162cm・深さ62cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址の出土遺物は図示した石器2点の他、P1より土師器内黒坏片、P2より須恵器坏片と土師器内黒坏片、P3より須恵器甕片・坏片、P4は須恵器坏片7点と土師器坏片6点、P5は須恵器甕片1点と土師器片5点がそれぞれ出土したのみである。これらの出土遺物より、本址の帰属時期は平安時代以降と考えられるが、不確実である。

(3) F 4号掘立柱建物址 (第207図, 写真図版二十一)

本址は、調査地点C区中央部であるノ-93、ハ-92.93.94、ヒ-92.93Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。また、H6号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は東西方向に長い、3間以上の総柱式建物址である。規模は桁行4.44m (P2~P5)・梁行3.22m (P5~P7)で、桁行柱間は1.26~1.62m・梁行柱間は1.49~1.73mを測る。柱穴の形態はいずれも円形を基調とするが不整形である。ピットの規模はP1が径100cm・深さ53cm、P2が径110cm・深さ51cm、P3が径105cm・深さ40cm、P4が径102cm・深さ36cm、P5が径120cm・深さ44cm、P6が径124cm・深さ17cm、P7が径120cm・深さ17cm、P8が径55cm・深さ19cm、P9が径123cm・深さ24cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかったが、P1~P4までは柱の重みがかかったと考えられる。ピット底面に非常に硬化化した円形の部分が検出された。

本址より出土遺物は2点図示した。4は須恵器壺か横瓶の破片である。5は形態から弥生中期以前の甕か、壺の底部と考えられる。内外面ミガキが施されている。この他にP5より須恵器坏片2点、内面黒色処理した土師器坏片が出土している。しかし、いずれも小片であり、遺構の帰属時期を確定するには至らなかった。

(4) F 5号掘立柱建物址 (第206図)

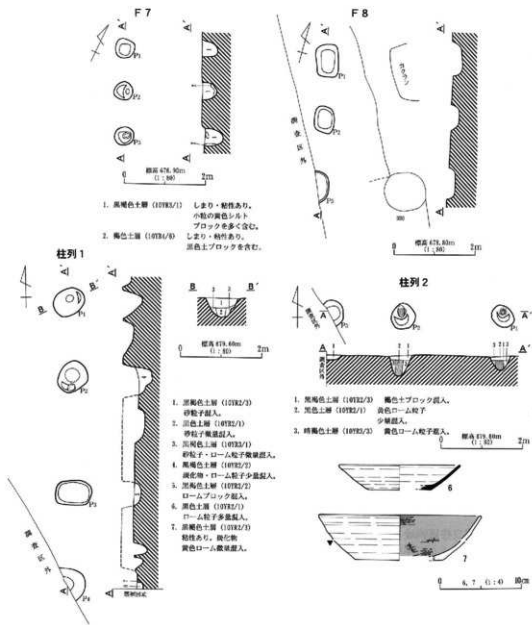
本址は、調査地点A区中央部であるL-30.31、G-30.31、M-30.31Grに位置する。残存状態は良好であったが、東西側が調査区域外となる。

形態はほぼ方形で、2間×2間の側柱式建物址である。軸方位はN-6°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は13.60㎡を測る。規模は桁行4.03m (P3~P5)・梁行3.38m (P1~P3)で、桁行柱間は1.88~2.03m・梁行柱間は1.59~1.79mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ50cm、P2が径35cm・深さ5cm、P3が径49cm・深さ47cm、P4が径70cm・深さ33cm、P5が径57cm・深さ25cm、P6が径63cm・深さ38cm、P7が径63cm・深さ45cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物で図示できるものはなかったが、P2から武蔵甕と呼ばれる土師器甕片、P4からは古墳時代の土師器甕片と武蔵甕片が、それぞれ出土している。本址の帰属時期は不明である。

(5) F 6号掘立柱建物址 (第207図, 写真図版二十一)

本址は、調査地点A区中央部であるO-25.26、P-25.26Grに位置する。残存状態は良好であったが、



第208回 F7・8号側立柱建物址、1・2号柱列址及び出土遺物実測図

東側が調査区域外となる。

形態は東西方向に長軸を持つ、2間×2間以上の側柱式建物址である。規模は桁行3.80m (P4~P6)・梁行3.21m (P2~P4)で、桁行柱間は1.80~1.90m・梁行柱間は1.51~1.70mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径54cm・深さ43cm、P2が径80cm・深さ51cm、P3が径56cm・深さ48cm、P4が径68cm・深さ45cm、P5が径54cm・深さ45cm、P6が径60cm・深さ45cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物で図示できるものはなかったが、P2から土師器甕片、P4からは古墳時代の土師

器壺片8片が、それぞれ出土している。本址の帰属時期は不明である。

(6) F7号掘立柱建物址 (第208図, 写真図版二十一)

本址は、調査地点A区北側であるP-24.25Grに位置する。残存状態は良好であった。東側が調査区域外となり、掘立柱建物址の可能性があるので、掘立柱建物址とした。

規模は2間以上の側柱式建物址である。規模は桁行2.15m (P1~P3) で、桁行柱間は1.05~1.10mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径47cm・深さ39cm、P2が径47cm・深さ38cm、P3が径47cm・深さ47cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物はなく、本址の帰属時期も不明である。

(7) F8号掘立柱建物址 (第208図, 写真図版二十一)

本址は、調査地点C区北側であるヒ-92.93Grに位置する。残存状態は良好であった。西側が調査区域外となり、掘立柱建物址の可能性があるので、掘立柱建物址とした。

規模は2間以上の側柱式建物址である。規模は桁行1.37m (P1~P3) で、桁行柱間は1.43~1.64mを測る。柱穴の形態はいずれも方形である。ピットの規模はP1が径77cm・深さ27cm、P2が径65cm・深さ24cm、P3が径80cm・深さ21cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物はなく、本址の帰属時期も不明である。

(8) 1号柱列址 (第208図)

本址は、調査地点C区中央であるナ-104.105.106Grに位置する。残存状態は重複遺構が多く、不良であった。

規模は3間以上の柱列である。規模は7.00m (P1~P4) で、柱間は1.88~2.90mを測る。柱穴の形態は方形と円形である。ピットの規模はP1が径78cm・深さ48cm、P2が径78cm・深さ72cm、P3が径88cm・深さ20cm、P4が径90cm・深さ19cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址の出土遺物はP1から出土した6の須恵器環があり、底部回転糸切り懸しである。本址の帰属時期は出土遺物も少なく、不明である。

(9) 2号柱列址 (第208図)

本址は、調査地点C区南側であるト-106、ナ-106Grに位置する。残存状態は良好であった。西側が調査区域外となる。

規模は2間以上の柱列である。規模は4.14m (P1~P3) で、柱間は1.67~2.47mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ36cm、P2が径64cm・深さ51cm、P3が径63cm・深さ14cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP1とP2である。

本址からの出土遺物は図示した7の土師器環がP2より出土しているが、他にはなく、本址の帰属時期も不明である。

No	種別	器種	法 規			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考	出土位置
			口縁径	底径	高	内 面	外 面		
1	須恵器	環	-	-	-	ココナデ	タタキナデ	記本	F1-P5
4	須恵器	環	-	5.0	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ 意匠石回転ヘラ切り	完全実測	F4-P5
5	須恵器	環	7.1	(3.3)		ミガキ	胴部ヘラナデ・ミガキ 底部ヘラナデ・ミガキ	完全実測	F4-P1
6	須恵器	杯	14.9	7.6	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り(方向不明)	加配実測	柱列1
7	土師器	杯	20.0	10.8	3.5	ミガキ一色色処理	ロクロナデ 底部平持ちヘラナデ	加配実測	柱列2
8	器種	素材	残存率	最大径	最大径	重量		備 考	出土位置
2	打製石斧	砂質砂岩	(11.8)	(5.9)	(1.5)	(103.71)	下部欠損		F3-P1
3	磨石	崗紋石	3.2	3.2	2.3	24.31	正面に磨り面		F3-P3

第123表 掘立柱建物址及び柱列出土遺物観察表

第3節 土坑

(1) D1号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南端のセ-117.118Grに位置する。残存状態は中央部分をカクランにより削平されている。形態は楕円形と考えられ、長軸方位はN-12°-Wを示す。規模は長軸1.18m・短軸0.78m(残存)・深さ37cmを測る。本址からの出土遺物は、土師器甕片2点のみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(2) D2号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南端のセ-117.118Grに位置する。残存状態は北側をカクランによって削平されている。形態は不明である。規模は長軸0.53m(残存)・短軸0.60m・深さ28cmを測る。本址からの出土遺物は土師器甕片4点、土師器坏片2点である。よって本址の帰属時期は不明である。

(3) D4号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南側のチ-111、ツ-111Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-74°-Wを示す。規模は長軸2.07m・短軸1.10m・深さ17cmを測る。

本址からの出土遺物は、図示した2点である。1は土師器坏で、内面黒色処理がされている。2は土師器碗の底部であり、高台が貼付する。本址の帰属時期はこれらの遺物から、平安時代と考えられる。

(4) D5号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南側のチ-111、ツ-111Grに位置する。残存状態は北側がカクランによって削平されている。形態は不整形で、規模は長軸1.63m・短軸1.42m・深さ12cmを測る。本址より出土遺物は、4点を図示した。3~5は土師器坏である。いずれも内面ミガキと黒色処理が施されている。6は白磁碗である。本址からの出土遺物は時代差があり、遺構の所産時期は不明である。

(5) D6号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

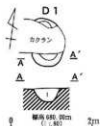
本址は、調査地点C区南端のツ-111Grに位置する。残存状態は北側がカクランによって削平されている。形態は不整形で、規模は長軸1.10m(残存)・短軸1.54m・深さ13cmを測る。本址より出土遺物は、2点を図示した。7は土師器坏であり、内面ミガキと黒色処理されている。8は土師器碗で、内面ミガキと黒色処理が施されている。

(6) D8号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

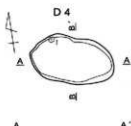
本址は、調査地点C区南端のチ-111.112、ツ-111.112Grに位置する。残存状態は北側がカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-4°-Eを示す。規模は長軸1.63m(残存)・短軸1.25m・深さ18cmを測る。本址より出土遺物は図示できるものがなかったが、内面黒色処理の土師器坏や須恵器甕、特に須恵器四耳壺片などが出土している。本址の帰属時期はこれらの遺物より、平安時代と考えられる。

(7) D9号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

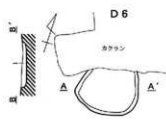
本址は、調査地点C区南端のソ-115Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は不整形である。規模は長軸1.12m(残存)・短軸0.38m(残存)・深さ26cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器片2点、土師器片5点などがある。



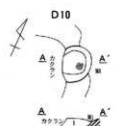
1. 暗褐色土層 (10YR3/4) の質粒子多量混入。黄色ブロック含む。



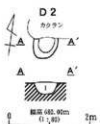
1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 黒褐色土ブロック混入。



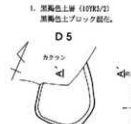
1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭化物少量混入。



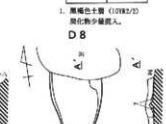
1. 暗褐色土層 (10YR3/2) 灰色シルトブロック混入。塊土・炭化物含む。



1. 暗褐色土層 (10YR3/4) の質粒子多量混入。黄色ブロック含む。



1. 暗褐色土層 (10YR3/2) 灰色シルトブロック多量混入。



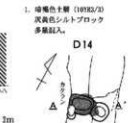
1. 灰褐色土層 (10YR2/2) 炭化物微量混入。
2. 灰色土層 (10YR2/1) 炭化粒子がレンズ状に入る。



1. 暗褐色土層 (10YR3/2)
2. 暗褐色土層 (10YR3/2) 質粒子少量混入。
3. 灰褐色土層 (10YR2/2) 黄色ロームブロック混入。



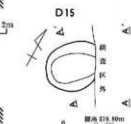
1. 暗褐色土層 (10YR3/2) 炭化物少量混入。



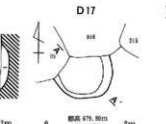
1. 暗褐色土層 (10YR3/2) 砂粒子・炭化物微量混入。
2. 暗褐色土層 (10YR2/2) 黄色ローム粒子混入。質粒子微量含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/2) 質粒子混入。
4. におい暗褐色土層 (10YR4/0) 塊土。
5. 暗褐色土層 (10YR2/2) 炭化物・塊土知り微量混入。



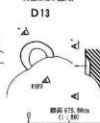
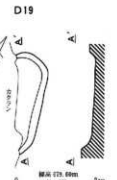
1. 灰褐色土層 (10YR2/2) 黄色土粒子混入。



1. 暗褐色土層 (10YR3/2) 黄色土ブロック混入。



1. 灰褐色土層 (10YR2/2) 黄色ロームブロック少量混入。



1. 暗褐色土層 (10YR3/2) 褐色土ブロック混入。

第209図 D1.2.4~6.8~15.17.19号土坑裏面図

(8) D 10号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のソ-114.115Grに位置する。残存状態は西側をカクランによって削平されている。形態は円形で、規模は長軸0.88m(残存)・短軸0.69m・深さ25cmを測る。土坑底面に焼土範囲が検出された。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(9) D 11号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-112Grに位置する。残存状態はM1号溝状遺構とF3号掘立柱建物址と重複関係にある。形態は楕円形と考えられ、規模は長軸0.70m(残存)・短軸0.57m・深さ54cmを測る。本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(10) D 12号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は西側がF3号掘立柱建物址により削平されている。形態は円形で、長軸方位はN-57°-Wを示す。規模は長軸0.95m・短軸0.90m・深さ30cmを測る。本址より出土遺物は、図示した9の土師器皿がある。内面ミガキと黒色処理が施されている。本址の帰属時期は遺物の出土量が少なく、不明である。

(11) D 13号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は南側をF3号掘立柱建物址に削平されている。形態は円形で、規模は長軸0.78m・短軸0.51m・深さ18cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(12) D 14号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のセ-115、ソ-115Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は楕円形が二つ連結したような形で、規模は長軸1.00m・短軸0.45mと0.46m・深さ14cmと16cmを測る。また、本址の西側の底面には焼土が厚く検出された。本址より出土遺物は図示できるものがなかったが、土師器片3点、須恵器片1点、灰軸陶器片などがあつた。

(13) D 15号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は長楕円形で、長軸方位はN-45°-Eを示す。規模は長軸1.24m(検出)・短軸1.16m・深さ30cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

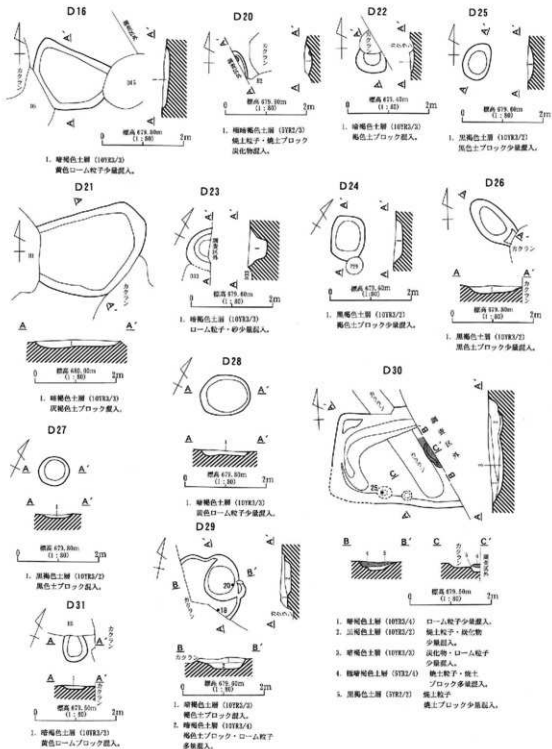
(14) D 16号土坑 (第210図)

本址は、調査地点C区南端のチ-110.111Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は不整形である。規模は長軸1.95m(残存)・短軸1.48m・深さ16cmを測る。

本址より出土遺物は図示できるものはなかったが、須恵器坏片、須恵器甕片、土師器坏片等が出土した。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、平安時代と考えられる。

(15) D 17号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。形態は円形で、規模は長軸1.48m・短軸1.06m(残存)・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は図示した2点があり、10は土師器環で、内面ミガキと黒色処理が施されている。11は土師器碗の底部付近で、内面は黒色処理とミガキが施されている。



第210図 D16.20~31号土坑支那図

(16) D19号土坑 (第209図)

本址は、調査地点C区南側のチ-109.110、ツ-109.110Grに位置する。残存状態は南側がカクランによって削平されている。形態は細長い楕円形と考えられ、規模は長軸2.48m・短軸0.76m(残存)・深さ30cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(17) D20号土坑 (第210図)

本址は、調査地点C区南側のチ-113Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は楕円形で、規模は長軸0.75m(検出)・短軸0.17m(検出)・深さ7cmを測る。覆土中に焼土と炭化物が含まれる。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(18) D21号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区南側のチ-112Grに位置する。残存状態は西側をH1号住居址により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-73°-Eを示す。規模は長軸2.90m(残存)・短軸2.08m・深さ22cmを測る。本址より須恵器甕片2点、土師器坏片4点が出土しており、帰属時期はこれらの出土遺物から不確定ではあるが、平安時代と考えられる。

(19) D22号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区南側のチ-109Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。形態は円形で、規模は長軸0.81m・短軸0.68m(残存)・深さ6cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(20) D23号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のツ-107、テ-107Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる。形態は円形で、規模は長軸1.05m・短軸0.58m(検出)・深さ42cmを測る。本址からの出土遺物は、内面黒色処理を施した土師器坏片4点、須恵器甕片1点などがあり、帰属時期はこれらの遺物より、平安時代と考えられる。

(21) D24号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のテ-107.108Grに位置する。残存状態は南側を単独ピットに削平されている。形態は方形で、長軸方位はN-30°-Wを示す。規模は長軸1.08m・短軸0.82m・深さ22cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器甕片2点、土師器坏片2点があり、帰属時期は不明である。

(22) D25号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のト-107Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-25°-Eを示す。規模は長軸0.92m・短軸0.65m・深さ11cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片1点のみで、帰属時期は不明である。

(23) D26号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のテ-106.107、ト-106Grに位置する。残存状態は東側が削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-48°-Wを示す。規模は長軸1.40m(残存)・短軸0.75m・深さ19cmを測る。本址からの出土遺物は武蔵甕と呼ばれる土師器甕片1点と、内面黒色処理が施された土師器坏片4点があるのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(24) D27号土坑 (第210図)

本址は、調査地点C区中央のテ-105Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、規模は長軸0.75m・短軸0.70m・深さ11cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片2点、内面黒色処理した土師器坏片4点、土師器甕片1点があったのみであり、遺構の帰属時期は不明である。

(25) D28号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のト-105Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形である。土坑の長軸方位はN-50°-Eを示す。規模は長軸1.20m・短軸1.00m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片1点、須恵器甕片、内面黒色処理した土師器坏片があったのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(26) D29号土坑 (第210図, 写真図版二十四)

本址は、調査地点C区南側のテ-108Grに位置する。残存状態は南側がカクランにより削平されている。形態は不整形で、規模は長軸1.38m・短軸1.10m・深さ26cmを測る。本址からの出土遺物は図示した9点がある。12と13は灰軸陶器皿である。14は土師器の高台付皿であり、体部に「用」と読める墨書がある。15も同じく土師器高台付きの皿である。内面黒色処理とミガキが施されている。16は須恵器坏の底部である。17は須恵器坏で、底部回転糸切り離しを施す。18～20は須恵器甕で、18は赤化している。19は胴部に隆帯を貼付している。21は礫石である。本址はこれらの出土遺物から、平安時代の所産と考えられる。

(27) D30号土坑 (第210図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のツ-108.109Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は長方形で、長軸方位はN-86°-Wを示す。規模は長軸3.20m(検出)・短軸2.40m・深さ30cmを測る。本址の底面にはピットと壁溝のような遺構が検出された。ピットの規模は西側が径40cm・深さ55cm、東側が径26cm・深さ34cmを測る。また、本址の底面には焼土塊と炭化物が検出された。

本址からの出土遺物は多く、13点を図示した。22～27は須恵器坏である。22のみ高台を貼付している。いずれも底部は回転糸切り離しである。28～31は土師器坏であり、いずれも内面黒色処理されている。31は内面に螺旋状の暗文が施されている。32は土師器の小型甕である。33は土師器の蓋であり、天井部に扁平な宝珠のつまみが付く。また焼成後あけられたと考えられる孔がある。34は須恵器甕の口縁部である。本址はこれらの出土遺物から、8世紀後半から9世紀前半の所産時期が考えられる。

(28) D31号土坑 (第210図)

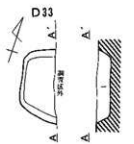
本址は、調査地点C区南側のツ-110Grに位置する。残存状態は北側が削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-25°-Wを示す。規模は長軸0.65m(残存)・短軸0.60m・深さ14cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器甕片1点のみで、遺構の帰属時期は不明である。

(29) D33号土坑 (第211図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のツ-108Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は方形で、規模は長軸1.58m・短軸0.76m・深さ9cmを測る。本址より出土遺物は須恵器坏片1点、内面黒色処理の土師器坏片4点、土師器甕片2点があったが、帰属時期は不明である。

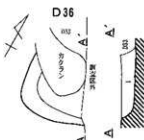
(30) D36号土坑 (第211図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のツ-110Grに位置する。残存状態は北側がカクランにより削平されて



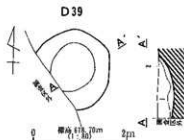
標高 479.70m
(1:50) 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) ロームブロック少量混入。



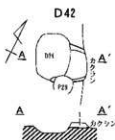
標高 479.70m
(1:50) 2m

1. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム粒子混入。



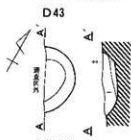
標高 479.70m
(1:50) 2m

1. に近い赤褐色土層 (10YR4/2) しまりあり、粘性弱い、砂を含む。
2. 暗褐色土層 (10YR4/3) しまり・粘性あり。



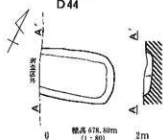
標高 479.70m
(1:50) 2m

1. 黒褐色土層 (10YR3/1) ローム粒子・褐色土ブロック混入。



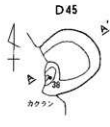
標高 479.50m
(1:50) 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) ロームブロック・砂少量混入。
2. 暗褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子多量混入。



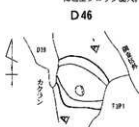
標高 479.50m
(1:50) 2m

1. 暗褐色土層 (10YR3/4) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック含む。



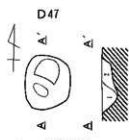
標高 479.50m
(1:50) 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 褐色土ブロック混入。



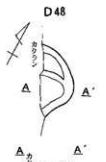
標高 479.50m
(1:50) 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム粒子・ロームブロック多量混入。



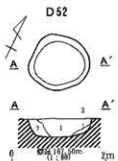
標高 477.20m
(1:50) 2m

1. 黒色土層 (10YR2/1) しまり・粘性弱い。
2. 褐色土層 (10YR4/4) しまり・粘性弱い。黄色の砂を多く含む。



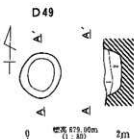
標高 477.00m
(1:50) 2m

1. 暗褐色土層 (10YR3/2) しまり・粘性あり。単体の石含む。



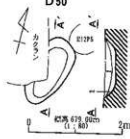
標高 476.00m
(1:50) 2m

1. 暗褐色土層 (10YR3/2) しまり、粘性やや弱く。砂質化している。
2. 褐色土層 (10YR4/5) しまり・粘性あり。
3. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) しまり、粘性弱く。小石を多く含む。



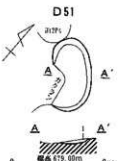
標高 479.90m
(1:50) 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 褐色ローム粒子多く含む。炭化物微量混入。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 炭化物少量混入。



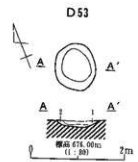
標高 479.90m
(1:50) 2m

1. に近い赤褐色土層 (5YR4/2) ロームブロック少量混入。粘土ブロックを含む。
2. 黒褐色土層 (10YR3/1) 粘土と砂少量混入。



標高 479.00m
(1:50) 2m

1. に近い赤褐色土層 (5YR4/3) ロームブロック少量混入。粘土ブロックを含む。



標高 479.00m
(1:50) 2m

1. 黒褐色土層 (10YR2/1) しまり・粘性あり。下部に粘土粒子を多く含む
2. 褐色土層 (10YR4/4) しまり・粘性あり。

第211図 D33.36.39.42~53号土坑実測図

いる。形態は不整形で、規模は長軸1.50m・短軸1.40m・深さ21cmを測る。本址の出土遺物は図示した35の土師器片があるが、出土遺物が少なく帰属時期は不明である。

(31) D39号土坑 (第211図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点C区中央のホ-90Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は円形で、長軸方位はNを示す。規模は長軸1.70m・短軸1.57m・深さ38cmを測る。本址より須恵器甕片1点、須恵器坏片2点、内面黒色処理した土師器坏片2点が出土しており、不確実であるが本址の帰属時期は、平安時代と考えられる。

(32) D42号土坑 (第211図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点C区中央のテ-107Grに位置する。残存状態は西側がD24号土坑により削平されている。形態は楕円形と考えられ、規模は長軸0.80m(残存)・短軸0.80m・深さ16cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(33) D43号土坑 (第211図)

本址は、調査地点C区南側のニ-104Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は円形と考えられ、規模は長軸1.38m・短軸0.66m(残存)・深さ24cmを測る。本址からの出土遺物は2点を図示した。36は土鍋の胴部破片である。37は須恵器の大型の壺か、或いは皿である。やや生焼け気味である。本址の帰属時期は出土遺物が少なく、不明である。

(34) D44号土坑 (第211図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点C区北側のフ-92Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は長方形で、長軸方位はN-73°-Eを示す。規模は長軸1.60m(検出)・短軸1.08m・深さ23cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(35) D45号土坑 (第211図, 写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のナ-102Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-54°-Eを示す。規模は長軸1.50m(残存)・短軸1.20m・深さ32cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した38の須恵器長頸壺がある。胴部付け根から口縁部下までの破片で、内外面に自然釉が付着している。本址の所産時期は出土遺物が少なく、不明である。

(36) D46号土坑 (第211図, 写真図版二十五)

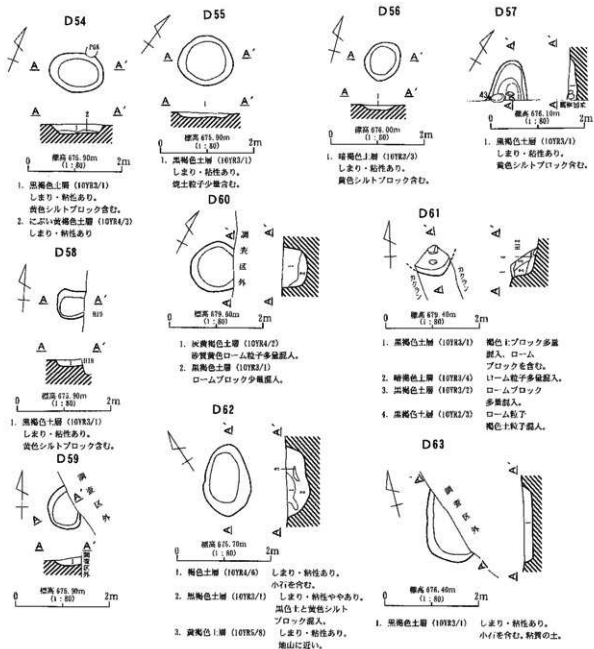
本址は、調査地点C区南端のチ-110Grに位置する。残存状態は東西を別遺構により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-64°-Wを示す。規模は長軸1.12m(残存)・短軸1.07m・深さ15cmを測る。本址の出土遺物は須恵器坏片2点、土師器坏片2点、土師器甕片1点があったのみである。よって本址の帰属時期は、不明である。

(37) D47号土坑 (第211図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点B区南側のヲ-56Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-18°-Eを示す。規模は長軸1.16m・短軸1.00m・深さ33cmを測る。本址からの出土遺物は土師器坏片1点、武蔵甕と呼ばれる土師器甕片5点が出土したのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(38) D48号土坑 (第211図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点B区南側のン-54Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されてい



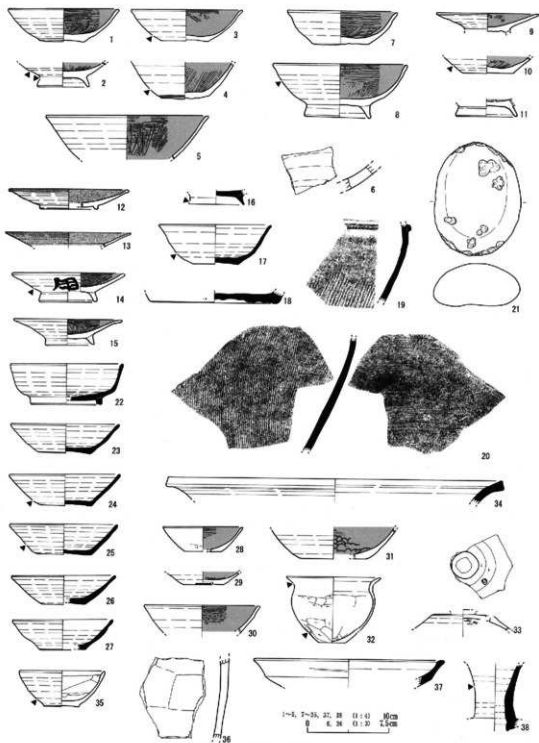
第212図 D54～63号土坑実測図

る。形態は不整形で、規模は長軸1.53m・短軸0.72m・深さ38cmを測る。本址からの出土遺物は、須恵器坏片1点があったのみで、帰属時期は不明である。

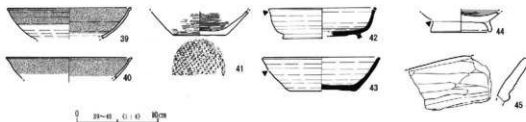
(39) D49号土坑 (第211図)

本址は、調査地点C区中央の二-101Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN^oを示す。規模は長軸0.95m・短軸0.87m・深さ37cmを測る。

本址からの出土遺物は、図示した39.40の灰釉陶器碗の2点がある。いずれも口縁部のみの残存である。この他には図示できなかったが、内面黒色処理された土師器坏片7点と須恵器甕片2点がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、不確実であるが平安時代と考えられる。



第213图 土坑出土遗物实测图(1)



第214図 土坑出土遺物実測図(2)

(40) D50号土坑 (第211図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点C区中央のニ-101Grに位置する。残存状態は北西側をカクランにより削平されている。形態は楕円形で、規模は長軸1.50m・短軸0.67m・深さ27cmを測る。本址からの出土遺物は内面黒色処理された土師器坏片1点、土師器甕片4点があったのみである。本址の帰属時期は出土遺物が少なく、不明である。

(41) D51号土坑 (第211図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点C区中央のニ-102Grに位置する。残存状態は北西側をカクランにより削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-40°-Wを示す。規模は長軸1.52m・短軸0.82m(残存)・深さ20cmを測る。本址からの出土遺物は内面黒色処理された土師器坏片1点、土師器甕片2点があったのみである。よって本址の帰属時期は、不明である。

(42) D52号土坑 (第211図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点B区北側のC-48Grに位置する。残存状態は上面をM5号溝状遺構により削平されている。形態は円形で、規模は長軸1.30m・短軸1.20m・深さ53cmを測る。本址からの出土遺物は図示した縄文土器があり、底部のみの残存であったが、底部に網代痕が明瞭につく。出土遺物が少なく、土坑の帰属時期は不明である。

(43) D53号土坑 (第211図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点A区南側のM-30.31、N-30.31Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、規模は長軸1.00m・短軸0.87m・深さ16cmを測る。本址からは武蔵甕と呼ばれる土師器甕片が多く出土したが、土坑の帰属時期は不明である。

(44) D54号土坑 (第212図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点A区南側のN-29.30Grに位置する。残存状態は良好で、形態は楕円形である。長軸方位はN-82°-Eを示す。規模は長軸1.18m・短軸0.85m・深さ18cmを測る。本址からは武蔵甕と呼ばれる土師器甕片が多く出土したが、土坑の帰属時期は不明である。

(45) D55号土坑 (第212図, 写真図版二十六)

本址は、調査地点A区南側のN-29Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形である。規模は長軸1.14m・短軸1.05m・深さ13cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した42の須恵器高台坏がある。本址の帰属時期は出土遺物が少なく、不明である。

(46) D56号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のL-32Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、規模は長軸0.84m・短軸0.70m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は武蔵甕と呼ばれる土師器甕片4点、土師器坏片1点があったのみであり、帰属時期は不明である。

(47) D57号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のL-33Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は長軸0.84m(検出)・短軸0.90m・深さ33cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した須恵器坏片1点あるのみである。底部は回転糸切り離しが行われている。本址の出土遺物は少量で、帰属時期は不明である。

(48) D58号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のN-29Grに位置する。残存状態は東側をH19号住居址に削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-87°-Eを示す。規模は長軸0.58m(残存)・短軸0.60m・深さ21cmを測る。本址より出土遺物は土師器坏片1点のみであり、遺構の帰属時期も不明である。

(49) D59号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のN-28Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸0.92m(残存)・短軸0.64m・深さ23cmを測る。本址からの出土遺物は武蔵甕の土師器甕片が7点、須恵器坏片1点のみであり、遺構の帰属時期も不明である。

(50) D60号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点C区中央のト-104Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸1.06m・短軸0.92m(検出)・深さ54cmを測る。本址より出土遺物は、図示した44の土師器碗があったのみである。内面は黒色処理されている。本址の帰属時期は出土遺物も少なく、不明である。

(51) D61号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点C区中央の二-102Grに位置する。残存状態は南東側を残してカクランにより削平されている。形態は不明である。規模は長軸0.75m(残存)・短軸0.68m(残存)・深さ57cmを測る。本址より出土遺物は、図示した45の縄文土器深鉢の口縁部破片があった。口縁部は波頂状態となる。本址の帰属時期は不明である。

(52) D62号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点A区北側のQ-22Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、規模は長軸1.53m・短軸1.02m・深さ52cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(53) D63号土坑 (第212図, 写真図版二十七)

本址は、調査地点B区北側のC-47、D-47Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は楕円形である。規模は長軸1.52m(検出)・短軸0.87m(検出)・深さ25cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

No.	種別	器種	法華			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径高	底径高	器高	内	外		
1	土師器	杯	13.6	8.7	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測	D-1 2cm
2	土師器	碗	8.5	(3.0)		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面回転糸切り(方向不明)・付高台	完全実測	D-1
3	土師器	杯	13.7	5.7	3.8	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測 摩耗	D-5
4	土師器	杯	5.9	(4.4)		ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測	D-5
5	土師器	杯	20.0	—	(5.4)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	写実実測	D-5
6	土師器	碗	—	—	(2.5)	ロクロナデ 縁飾	ロクロナデ 縁飾	写実実測	D-5
7	土師器	杯	13.7	6.9	4.3	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測	D-6
8	土師器	碗	16.7	4.2	6.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面回転糸切り(方向不明)・付高台	完全実測	D-6
9	土師器	皿	12.5	—	(2.3)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面回転糸切り(方向不明)・付高台	写実実測	D-12
10	土師器	杯	—	6.4	(2.2)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測	D-17
11	土師器	碗	—	7.6	(2.2)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面回転糸切り(方向不明)	完全実測	D-17
12	灰釉陶器	皿	14.8	7.2	2.4	縁飾	ロクロナデ 底面回転糸切り・付高台	写実実測	D-29
13	灰釉陶器	皿	15.5	—	(1.7)	縁飾	ロクロナデ 縁飾	写実実測	D-29
14	土師器	皿	13.9	7.1	3.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面右切り・付高台	完全実測 摩耗有り	用] D-29 7-108
15	土師器	皿	13.5	6.0	3.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面右切り・付高台	完全実測	D-29
16	須恵器	高台杯	—	6.9	(1.3)		底面糸切り・付高台	完全実測	D-29
17	須恵器	杯	13.9	5.6	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測	D-29
18	須恵器	俵	—	15.7	(1.5)	ナデ	割板ヘラケズリ	写実実測 底面縁飾	D-29 5cm
19	須恵器	俵	—	—	—		タタキ→コナデ→段等貼付	写本	D-29
20	須恵器	俵	—	—	—	当量機→ヘラケズリ	タタキ 自然釉付着	写本	D-29 13cm
22	須恵器	高台杯	13.9	8.8	5.0	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 火摩	写実実測	D-30
23	須恵器	杯	13.5	6.4	3.6	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底面右回転糸切り 火摩	完全実測	D-30
24	須恵器	杯	13.8	6.3	3.8	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底面右回転糸切り 火摩	完全実測	D-30
25	須恵器	杯	13.3	6.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測	D-30 -45cm
26	須恵器	杯	12.8	5.3	3.5	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 火摩 底面回転糸切り(方向不明)	完全実測	D-30
27	須恵器	杯	12.4	5.6	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	写実実測	D-30
28	土師器	杯	9.8	4.4	3.0	ミガキ→黒色処理	底面と底面外周半円ヘラケズリ 黒色処理	写実実測	D-30
29	土師器	杯	—	3.0	(1.6)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ 底面回転糸切り	完全実測 摩耗有り	D-30
30	土師器	杯	14.2	—	(3.4)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	写実実測	D-30
31	土師器	杯	—	8.0	(3.8)	無彩色→黒色処理	ロクロナデ 底面右切りヘラケズリ	写実実測	D-30
32	土師器	小短突	11.6	3.0	8.0	口縁コナデ→ 胴部から底面ヘラケズリ	口縁コナデ 底面ヘラケズリ→胴部ヘラケズリ	写実実測	D-30
33	土師器	蓋	—	—	(2.5)	ミガキ	ロクロナデ 天井蓋回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測 天井部に焼成網の穿孔有り	D-30
34	須恵器	甕	41.3	—	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	写実実測	D-30
35	土師器	杯	10.7	4.4	4.4	ヘラケズリ	ロクロナデ 底面右回転糸切り	完全実測	D-36
36	陶器	土師	—	—	—	ナデ	ナデ	写実実測	D-43
37	須恵器	甕	23.4	—	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	写実実測	D-43
38	須恵器	長頸壺	—	—	(8.1)	ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ 自然釉付着	完全実測	D-45 5cm
39	灰釉陶器	甕	16.3	—	(3.8)	ロクロナデ 縁飾	ロクロナデ 縁飾	写実実測	D-49
40	灰釉陶器	甕	15.4	—	(2.6)	縁飾	縁飾	写実実測	D-49
41	縄文	俵	—	6.6	(3.1)	ミガキ	底面ヘラケズリ→ミガキ 底面調代産有り	写実実測	D-62
42	須恵器	高台杯	13.2	9.7	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底面回転ヘラケズリ ・付高台	写実実測	D-55
43	須恵器	杯	14.5	8.0	4.1	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ 底面右回転糸切り 火摩	完全実測	D-57 5cm
44	土師器	碗	—	7.5	(2.6)	ミガキ→黒色処理	底面回転糸切り(方向不明)・付高台	完全実測	D-60
45	縄文	深鉢	—	—	—	ナデ	ナデ→段等貼付	写実実測 加賀川HIV	D-61
46	器種	素材	現在所	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
21	殿石	向阿良山石	13.8	10.7	5.4	970.00	上・下の縁部、止面に磨り痕		D-29

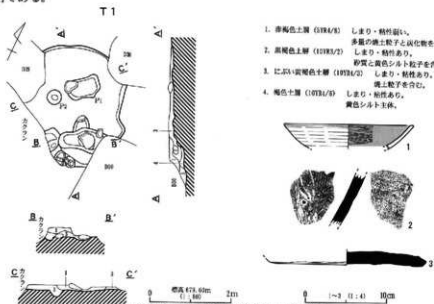
第124表 土坑出土遺物観察表

第4節 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構 (第215図, 写真図版二十九)

本址は、調査地点C区中央のツ-108.109、テ-108.109Grに位置する。残存状態は南側をD30号土坑とカクランにより削平されている。D29.30.36号土坑と重複関係にあり、本址が一番古い。形態は不整形であるが、南北方向に長く、南側が一段深くなっている。規模は北側壁が1.66m(残存)、東側壁が1.32m(残存)、深さは12cmを測る。覆土は4層に分かれるが、焼土と炭化物が混入する1層が他の層を掘り込むように堆積していた。また、深い部分には扁平な川原石が散乱するように底面から検出された。遺構底面にはピットが確認され、形態は方形で、規模は長軸83cm・短軸46cm・深さ10cmを測る。

本址からは図示した1~3の遺物がある。1は土師器杯で、内面黒色処理が施されている。2は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行タタキが施されている。3は須恵器甕の底部と考えられ、内面は当て具痕が僅かに残る。これらの出土遺物から本址は平安時代の所産と考えられるが、遺構の性格については不明である。



第215図 T1号特殊遺構及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量		状況・調整・文様		備考	出土位置
			内径	外径	内面	外面		
1	土師器	杯	15.9	— (3.0)	ミガキ一色黒処理	ロクロナデ	日輪火割	
2	須恵器	甕	—	—	ヘラナデ	タタキ	石本	
3	須恵器	甕	15.8	(1.8)	当具痕一ナデ	ナデ	日輪火割	石本

第125表 T1号特殊遺構出土遺物観察表

第5節 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構 (第216図, 写真図版二十八)

本址は、調査地点C区南端のソ-113.114.115、タ-111.112.113Grに位置する。残存状態は南北側が自然と浅くなり、消滅している。

形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は浅いU字形を呈する。規模は長さ16.30m(検出)・幅20~78cm・深さ3~15cmを測る。

本址からの出土遺物は内面黒色処理した土師器坏片1点、須恵器坏片4点、須恵器甕片3点があったのみであり、所産時期は不明である。

(2) M2号溝状遺構 (第216図)

本址は、調査地点C区南側のチ-110、ツ-110.111Grに位置する。残存状態は東西が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ6.20m(検出)・幅52～90cm・深さ1～17cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器甕片1点、須恵器坏片2点、土師器坏片4点であった。出土遺物が少量で、帰属時期も不明である。

(3) M4号溝状遺構 (第217図, 写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のヲ-55.56、ン-54.55.56、A-53.54.55、B-53.54Grに位置する。残存状態は東西方向が調査区域外となる。

形態は南東から北西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ13.0m(検出)・幅4.77～6.02m・深さ6～39cmを測る。また、本址は溝中央部分に幅0.70～1.42mの新たに掘り込まれた溝状遺構がある。この部分が新たに掘り直した溝なのか、幅広い溝状遺構と別遺構なのかは判断がつかなかったが、中央の細い溝からは染め付け碗等が出土した。

本址からの出土遺物は比較的多く、また時代幅のある遺物が出土した。1は須恵器横瓶の口縁部から肩部である。2は須恵器甕の底部付近で、外面平行タタキが施されている。3は灰釉陶器の短頸壺の口縁部と考えられる。釉が付着している。4は青磁碗の体部の破片で、連弁文が施されている。5は古瀬戸の天目茶碗の口縁部である。6と7はいずれも古瀬戸の灰釉碗と考えられる。8は古瀬戸大窯の天目茶碗底部で、故意的な打ち欠きが見られる。9と10は染め付け碗である。11から13は在地前山焼の製品と考えられる。14はカワラケのようであるが、確証を得ない。15は土鍋の底部付近である。16と17は鉄製品である。

本址はこれらの出土遺物より中世から近世にかけての遺構で、堆積土の中に流水を示す部分もあることから、一時は流路となっていたと考えられる。

No.	種別	器種	法量		成形・装飾・文様		備考	出土位置
			口内径	底径	内面	外面		
1	須恵器	横瓶	-	-	ナデ	タタキ	四輪実軸	I・II区
2	須恵器	甕	9.0	(9.8)	ナデ	胴部タタキ→底面外周ヘラケズリ 底面ナデ	四輪実軸	II区
3	灰釉陶器	壺	-	-	自然輪付着	自然輪付着	破片実軸	II区
4	青磁	碗	-	(0.9)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉 連弁文	破片実軸 底泉	I区
5	陶器	大目茶碗	-	(2.7)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実軸 古瀬戸 産間 17C前半	I区
6	陶器	灰釉碗	-	(1.1)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実軸 古瀬戸・美濃	I区
7	陶器	灰釉碗	-	(1.4)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実軸 古瀬戸・美濃	I区
8	陶器	大目茶碗	4.0	(1.0)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 底部心組ヘラケズリ	完全実軸 古瀬戸 大窯 15C中か16C E・E	I区
9	陶器	染付碗	-	(3.2)		梅花	破片実軸 伊万里 16後半～3割 18C後半	II区
10	陶器	染付碗	-	(1.9)			破片実軸 伊万里 16後半～5割 18C後半	I区
11	陶器	碗?	-	(1.8)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実軸 鶴山 近世	I区
12	陶器	碗?	12.9	(1.6)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉 ト平部ヘラケズリか?	四輪実軸 鶴山 近世	II区
13	陶器	碗?	-	(2.7)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉 (つげがけ)	四輪実軸 鶴山 近世	II区
14	陶器	かわらけ	10.0	(2.0)	黒色処理	黒色処理	四輪実軸	II区
15	陶器	土鍋	12.2	(1.8)	ナデ	底部と底面外周ヘラケズリ→ヘラナデ	四輪実軸	I区
No.	器種	素材	残存率	最大径	最大厚	重量	所見	出土位置
16	不明	鉄	(2.3)	(0.6)	(0.5)			II区
17	不明	鉄		15.7	1.5	1.4		I区

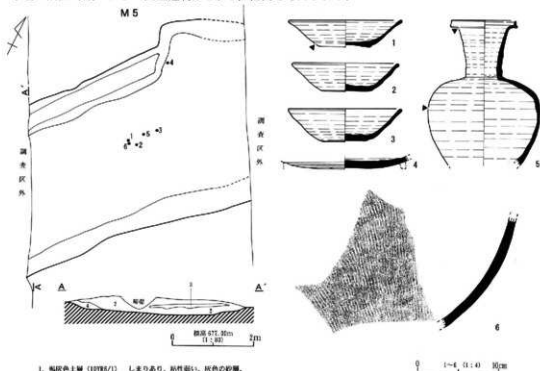
第126表 M4号溝状遺構出土遺物観察表

(4) M5号溝状遺構 (第218図, 写真図版二十八)

本址は、調査地点B区北側のB-49、C-48.49.50、D-49Grに位置する。残存状態は東西端が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ5.60m(検出)・幅3.70~4.75m・深さ19~31cmを測る。覆土は間層に灰色の砂層をレンズ状に含む。

本址からの出土遺物は6点を図示した。1~3は須恵器帯で、いずれも底部回転糸切り離しが行われている。4は須恵器の高台帯で、高台部が欠損している。底部が高台よりも飛び出す、いわゆる東海湖西産の「出尻底タイプ」の帯に似ている。5は須恵器壺であり底部を欠損する。6は須恵器甕胴部の破片である。

本址の所産時期これらの出土遺物から、8世紀代と考えられる。

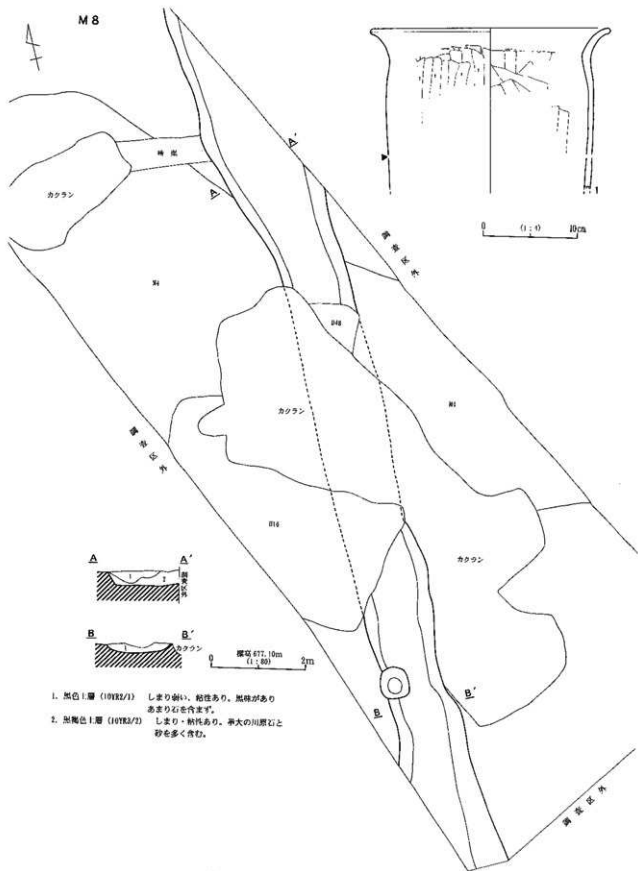


1. 褐色土層 (10TR6/1) しまりあり、粘性弱い、灰色の砂層。
2. 灰褐色土層 (10TR6/2) しまり、粘性弱い、小石と黒色土、灰色の砂層がブロック状に混入。
3. 褐色土層 (10TR6/1) しまり・粘性あり、灰色の砂層。

第218図 M5号溝状遺構及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	位置			形状・調整・文様		備考	出土位置
			口面式	北緯線	東経線	内面	外面		
1	須恵器	鉢	14.1	6.3	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	完全実測	0xcm
2	須恵器	鉢	13.2	6.0	3.5	ロクロナデ 火焼	ロクロナデ 底部回転糸切り 火焼	完全実測	0xcm
3	須恵器	鉢	14.0	5.3	4.0	ロクロナデ 火焼	ロクロナデ 底部回転糸切り 火焼	完全実測	20cm
4	須恵器	高台帯	-	-	(1.5)	ロクロナデ	総線回転ヘラケズリー付高台(高台欠損)	図解実測	20cm
5	須恵器	長頸壺	8.0	-	(17.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測	80cm
6	須恵器	鉢	-	-	-	出尻底→ナデ	タタキ	観本 赤雲	110cm

第127表 M5号溝状遺構出土遺物観察表



第219図 M8号溝状遺構及び出土遺物実測図

(5) M6号溝状遺構 (第216図, 写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のA-52.53、B-51.52.53Grに位置する。残存状態は良好であるが、南北側は溝構が浅くなるのか検出できなかった。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は緩やかな皿状を呈する。規模は長さ8.57m(検出)・幅1.16~1.57m・深さ6~24cmを測る。覆土は自然堆積で炭化物が少量含まれる。

本址からの出土遺物は図示できるものは無かったが、古墳時代後期の特徴を持つ土師器甕片が多く出土した。これらの出土遺物から不確定ではあるが、本址の帰属時期は古墳時代後期と考えられる。

(6) M7号溝状遺構 (第216図, 写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のB-51.52、C-51Grに位置する。残存状態は西端が調査区域外、東側がカクランにより削平されている。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ3.25m(検出)・幅0.45~0.54m・深さ3~12cmを測る。

本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

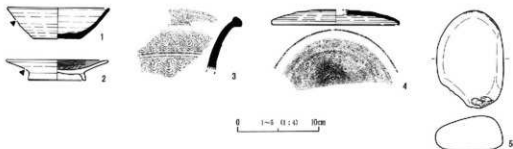
(7) M8号溝状遺構 (第219図, 写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のN-53~57Grに位置する。残存状態は南北端が調査区域外となる。H16号住居址、D48号土坑、M4号溝状遺構と重複関係に本址が一番古い。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ16.36m(検出)・幅1.20~1.80m・深さ7~33cmを測る。覆土中には一部砂層が混じる部分があり、拳大の川原石も多く含む。

本址からの出土遺物は、図示した1の土師器甕があった。口縁部はあまり屈曲せず、外面は縦方向のケズリが施されている。本址の帰属時期は、不確定であるが古墳時代と考えられる。

No.	種類	図号	法量	成形・調整・文様		備考	出土位置
				内面	外面		
1	土師器 甕	25.5	— (17.1)	口縁部コナデ・胴部ヘラケズリ	口縁部コナデ・胴部ヘラケズリ	図版249	B区

第128表 M8号溝状遺構出土遺物観察表



第220図 ビット出土遺物実測図

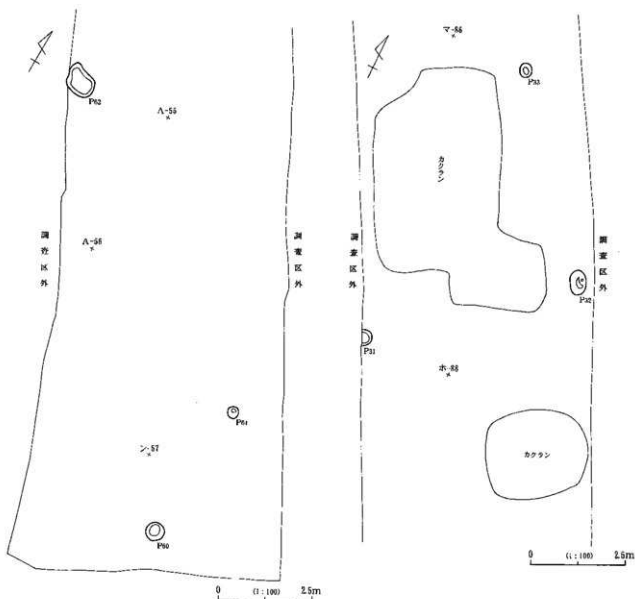
No.	種類	図号	法量	成形・調整・文様				備考	出土位置
				内面	外面	調整	調整		
1	須恵器 鉢	12.7	6.9	2.8	口クラコナデ	口クラコナデ 底面右側転角有り	完全素製	P22 0cm	
2	土師器 高台鉢	12.6	7.2	2.5	ミガキ→黒色磨理	口クラコナデ 底面右側転角有り 付着物	完全素製	P22	
3	須恵器 甕	—	—	—	自然焼付着	縦線流紋紋(本)組付状態で区別	6cm	P22	
4	須恵器 甕	—	15.6 (1.8)	—	口クラコナデ ヘラ起物有り? 自然焼付着	口クラコナデ 天井部回転ヘラケズリ 自然焼付着	同物実測 未見有り	P42	
No.	種類	図号	法量	残存率	長さ	幅	深さ	調整	出土位置
5	甕	西岡石表法	11.9	8.3	4.4	5.0	0.0	上・下縁部に磨付	P88 10cm

第129表 ビット出土遺物観察表

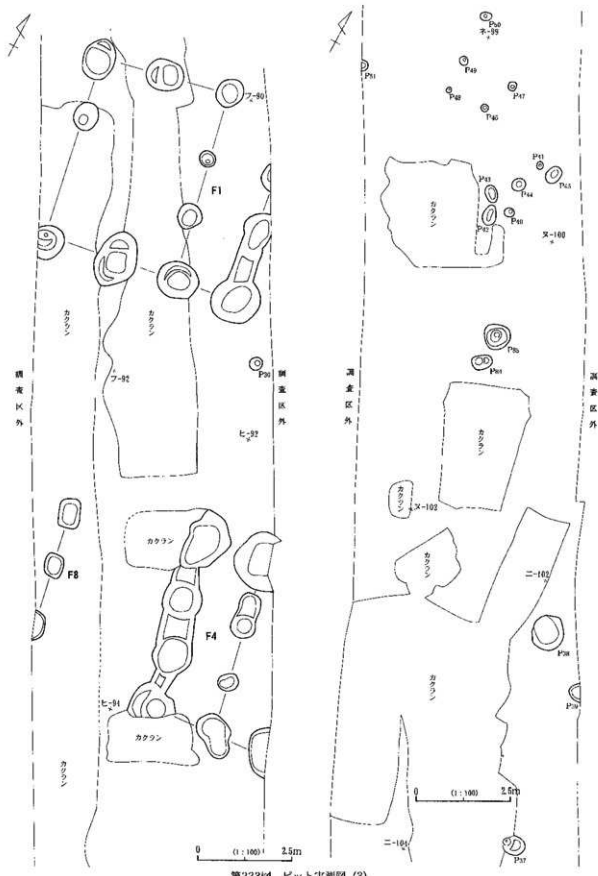
第6節 ピット群 (第220~224図)

徳田遺跡Ⅱから検出された単独ピットは96個であり、先に述べた市道遺跡や辻遺跡とは異なり、ピットの検出数は少なかった。しかし、調査地点C区のト-105Gr付近では大型の円形ピットがいくつか検出され、その配置から掘立柱建物址や或いは柱列を推定出来るようなものもいくつかあったが、調査範囲が道路幅という制約もあり、図中で図示するまでには至らなかった。その他のピットはいずれも小型の円形状で、深さはいずれも浅かった。

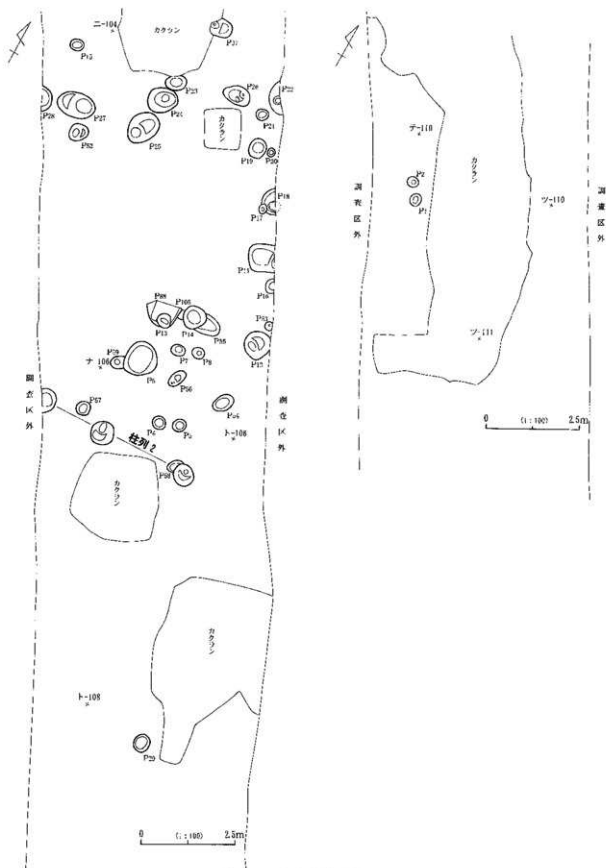
ピットから出土した遺物として5点を図示したが、3点はP22からの出土である。1は須恵器環でピット底面より出土している。2は土師器の高台付きの皿で、内面は黒色処理されている。3は須恵器甕の口縁部で、梅棹の波状文が描かれている。4はP42から出土した須恵器蓋であり、つまみ部が欠損している。内面にヘラ記号状の傷があるが、焼成前のものである。5は敲石で先端に敲打の跡がある。



第221図 ピット実測図(1)



第223回 ピット実測図 (3)



第224図 ビット実測図(4)

選抜名	出土位置	長径×短径×高さ	形 態	土 質	出土遺物	時代	留意関係
P1	ト-110	33×30×17	円形	黒褐色土 (10YR3/2) 小石多含	土師器平		
P2	*	32×26×21	*	*			
P3							柱列2に使用
P4	ト-106	37×34×18.5	円形	黒褐色土 (10YR2/3) 灰色ロームブロック含	土師器 (内底)		
P5	*	37×32×14	*	*	須恵器蓋・杯		
P6	ト-105	92×85×10.5	楕円形	1) 灰赤褐色土 (10YR4/3) ローム粒子多含 2) 黒褐色土 (10YR2/3) ローム・ブロック多含 3) 灰赤褐色土 (10YR4/3) ローム・ブロック多含 4) 黒褐色土 (10YR2/2) ローム・ブロック多含	須恵器杯、須恵器蓋、土師器杯(内底)・壺		
P7	*	40×32×14	円形	黒褐色土 (10YR3/3) ローム粒子多含			
P8	*	33×32×18	*	*	須恵器蓋		
P9							柱列2に使用
P10							*
P11	ト-104	(72)×71×39 (テラス24)	長方形?	黒褐色土 (10YR3/2) 褐色土ブロック多含	土師器蓋、須恵器蓋		
P12	ト-105	70×70×29 (テラス22)	円形	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子多含			II2に切られる
P13	*	40×38×40	*	灰色土 (10YR2/1) ローム粉り少含	土師器蓋		
P14	*	60×60×13.5	*	*	土師器平・壺、須恵器蓋(口縁)		
P15	ニ-104	33×33×7	*	黒褐色土 (10YR3/3) 褐色土ブロック・ローム粒子多含	土師器平、須恵器蓋、須恵器杯・壺(内底)		
P16	ト-104-105	38×(24)×20	円形?	黒褐色土 (10YR3/3) 砂少含	土師器(内底)、須恵器平		
P17	ト-104	28×22×20	円形	黒褐色土 (10YR3/3) ローム粒子多含			
P18	*	70×(37)×30	-	*			
P19	*	55×47×15.5	円形	黒褐色土 (10YR3/3) 砂少含	須恵器杯、土師器平		
P20	*	25×23×7	*	*	須恵器杯		
P21	ト-103-104	34×31×8.5	*	黒褐色土 (10YR3/1) ローム粉り多含	土師器平(内底)、須恵器蓋、土師器(内底)・壺(内底)、須恵器杯・壺(口縁)		
P22	ト-103	7×17×33	円形?	1) 黒色土 (10YR2/1) 砂・ローム粒子少含 2) 黒褐色土 (10YR3/1) 砂少含	須恵器杯・壺(内底)、須恵器蓋、壺(口縁)		
P23	ト-104	56×39×23	楕円形	黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子多含	土師器平(内底)・壺		
P24							柱列1に使用
P25	ナ-104	94×73×19 (テラス28)	*	1) 黒褐色土 (10YR2/3) 砂・ローム粒子少含 2) 黒色土 (10YR2/1) の積層	土師器平 (内底)・壺、須恵器蓋		
P26	ナ-104-105	72×50×34 (テラス41)	*	*	土師器杯 (内底)		
P27	ナ-ニ-104	102×66×37	*	1) 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子少含 2) 黒色土 (10YR2/1) 砂積層	須恵器蓋、土師器蓋		
P28	ニ-104	(67) × (26) × 10	-	黒褐色土 (10YR3/2) 褐色土ブロック多含			
P29	テ-108	48×43×13	楕円形		土師器平 (内底)		
P30	ホ-91	32×35×26	円形	黒褐色土 しまりあり			
P31	ホ-88	46×(26)×21	-	黒褐色土 しまりあり			
P32	ホ-87	61×43×50 (テラス34)	楕円形	*			
P33	ホ-85-86	36×33×20.3	*	*			
P34							
P35							
P36							
P37	ナ-103	88×50×43 (テラス17)	楕円形	黒褐色土 (10YR3/3) 褐色ローム・ブロック少含	須恵器蓋・杯		
P38	ナ-102	(92) × (85) × 32	*	1) 黒褐色土(10YR3/1)灰色ローム粒子多含 2) 黒褐色土(10YR2/2)褐色ローム・ブロック・ローム粒子多含	須恵器杯、土師器杯(内底)・壺		II2に切られる
P39	*	(47) × (29) × 18	-	黒褐色土 (10YR2/2) 砂・褐色ローム粒子少含			
P40	ヌ-99	25×22×34	円形	褐色土	土師器平 (内底)	中世	
P41	*	19×16×20.3	*	*	土師器平 (内底)	*	
P42	ヌ-99-100	53×34×23	楕円形	黒褐色土	須恵器杯	古代	
P43	ヌ-99	47×32×24.5	*	*	土師器蓋(須恵器蓋)		

第130表 ビット計測表 (1)

通称名	出土位置	長径×短径×深さ	形 態	覆 土	出土遺物	時代	重要関係
F44	N-99	38×32×14	楕円形	灰褐色土			
F45	*	48×36×20	*	*			
F46	*	19×19×27	円形	黒褐色土		中世	
F47	*	24×21×26	*	*		*	
F48	N-99	14×14×19.5	*	*		*	
F49	*	26×21×31.5	楕円形	*		*	
F50	N-98	30×23×27	*	*		*	
F51	N-99	28N (19) ×11	—	*		*	
F52	N-104	50×48×23 (テラス10)	円形		土師器片(古墳)、 須恵器		
F53	ト-105	23×(20)×23	円形?	黒褐色土	須恵器片・埴、 土師器式土器	中世	
F54	*	58×40×19	楕円形	*		*	
F55	*	(47) ×44×17	楕円形?	*		*	P14に切られる
F56	*	52×31×24 (テラス17)	楕円形	*	須恵器片	*	
F57	ト-106	31×30×11	円形	*	土師器片	*	
F58	*	(36) × (25) × 9	楕円形	*			柱列2に切られる
F59	ト-105	(33) ×36×17	楕円形	*			P 6に切られる
F60	N-57	50×48×31	円形	*			
F61	N-56	32×28×40	*	褐色土 しまり強い		不明	
F62	A-55	90×64×22	不整形	黒褐色土 しまり・粘性あり	土師器式土器片・埴、 須恵器	古代	
F63	L-32	44×34×12	楕円形	*		*	
F64	*	33×32×12	円形	黒褐色土	土師器式土器		
F65	*	25×25×12	*	*			
F66	*	49×36×20	楕円形	*	土師器式土器 (断面)		
F67	L-31-32	22×22×11	円形	*	土師器片 (内側)		
F68	N-29	24×24×13.5	*	*			
F69	N-29-30	30×28×30	*	*			
F70	N-30	35×21×5	長方形	*			
F71	*	24×24×14.5	方形	黒褐色土 焼十乾子付			
F72	M-31	66×58×34	楕円形	1) 黒褐色土(10YR3/3)しまり・粘性あり 2) 暗褐色土(10YR2/3)しまり・粘性あり 砂化している			
F73							F5に変更
F74	N-30	88×64×47 (テラス39)	楕円形	1) 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱く粘性あり 2) 暗褐色土 (10YR6/8) しまり・粘性あり	土師器式土器		F87に切られる
F75							F5に変更
F76	O-29	48×(28)×24		黒褐色土			F5に変更
F77							*
F78							*
F79	N-29	20×20×11	円形	黒褐色土	土師器式土器片・埴		
F80	*	18×18×7	*	*	土師器片 (古墳)		
F81	M-29	64×60×24	*	1) 黒褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性あり、黄色シルトブロック含 2) 黄褐色土 (10YR5/6) しまり・粘性あり、黄色シルトブロック含			
F82	M-30	47×43×41	*	1) 黒褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性あり、黄色シルトブロック含 2) 黄褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性あり			
F83	N-29	(46) × (20) × 21	—	黒褐色土			H19に切られる
F84	N-100	56×41×38 (テラス28)	不整形	黒褐色土 黄色シルトブロック含			
F85	*	70×68×41	円形	褐色土	土師器	中世	
F86	M-N-30	48×42×23	*	黒褐色土	土師器片	古代	F74に切られる
F87	N-30	32×20×43 (テラス28)	不整形	*		*	
F88	ト-105	91×(64)×39	—	1) 赤い黄褐色土(10YR5/8)しまり・粘性あり 2) 黄褐色土(10YR5/6)しまり・粘性あり、砂化している 3) 黒褐色土(10YR3/1)しまり・粘性あり、2層より厚味強い	須恵器、 土師器式土器		H14・P13に切られる

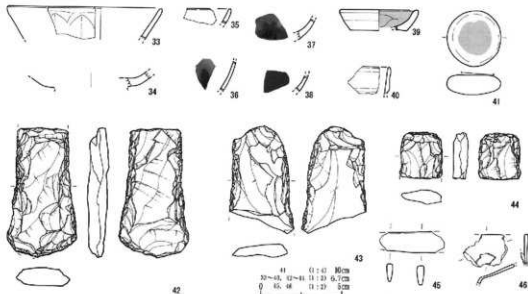
第131表 ビット計測表 (2)

遺構名	出土位置	長さ×幅×高さ	形態	産土	出土遺物	時代	備考関係
P89	N-28	50×30×41	円形?	黒褐色土	土師器		H16に写られる
P90	Q-24	45×30×29 (テラス29)	方盤形	*			
P91	*	15×15×7	円形	*			
P92	Q-23	30×27×42	方盤	*			
P93	*	22×20×14	円形	*			
P94	R-25	28×18×10	*	*			
P95	N-28	60×34×36	楕円形	*	土師器	古代	P96に写られる
P96	*	45×40×36	円形	*	土師器	*	
P97	O-26	26×25×37	方盤	黒灰色土			
P98	P-24	18×18×24	円形	黒褐色土			
P99	Q-24	32×32×7	*	*			
P100	Q-23	31×18×19	方盤	黒褐色土		中期	
P101	P-23	38×36×35	楕円形	黒色土	土師器	*	
P102	P+Q-33	34×31×22	円形	*		*	
P103	Q-22	28×25×16	*	黒褐色土 焼土粒子含	土師器		
P104	*	24×24×12	*	*	土師器		
P105	P-23	19×19×26	*	黒褐色土			
P106	T-105	290×(17)×21	-	-			P10-P89に写られる

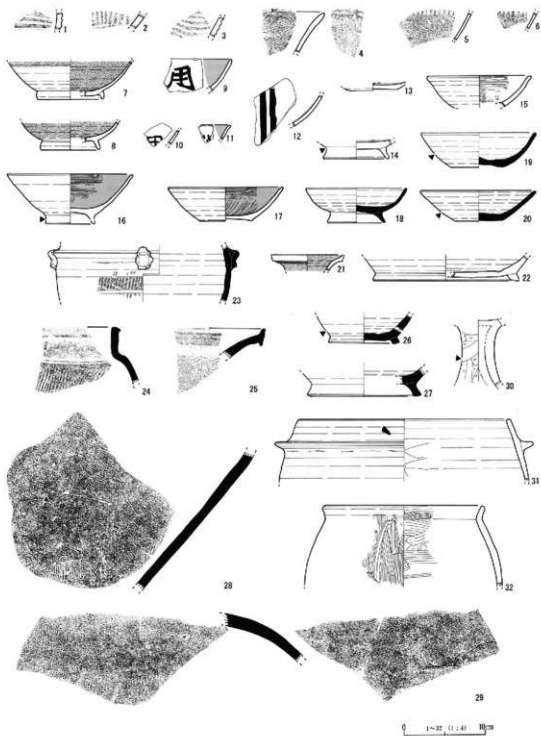
第132表 ビット計測表 (3)

第7節 遺構外出土遺物 (第225・226図)

本遺跡からは多くの遺構に伴わない遺物も出土した。特に1~3の縄文土器や、4~6の弥生土器でも中期以前の資料も検出された。7と8は灰軸陶器碗で、内外面に軸を施している。9~11は土師器坏でいずれも墨書が確認できる。9は「用」判読できる。10は「田」とも考えられるが本遺跡は「用」が2点出土していることから、「用」の可能性がある。11と12は判読不明である。13と15は土師器坏である。17は土師器坏で、内面黒色処理されている。19と20は須恵器坏であり、いずれも底部回転糸切り離してある。18は須恵器の高台付き坏である。24は須恵器の広口甕の口縁部と考えられる。23は須恵器の四耳壺の胴部破片で耳部とそれをつなぐ隆帯が残存する。21と22は灰軸陶器でありいずれも壺の口縁部と底部と考えられる。31は土師器の羽釜で、不確定であるが一部に墨痕が確認できる。33と34は青磁碗である。39はカワラケで内面黒色処理されている。42~44は打製石斧の欠損品であり、調査区B区中央からいずれも出土した。



第225図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第226图 淮阴外出土遗物实例图(2)

No.	種別	器種	法象			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口縁底	底面	縁部	内面	外面		
1	焼文	漆鉢	-	-	-			北本 前期?	子-111
2	焼文	漆鉢	-	-	-			北本	A-54
3	焼文	漆鉢	-	-	-			北本	R-23
4	焼文	壺	-	-	-			北本 前期	A-55
5	焼文	壺	-	-	-			北本 栗林	A-55
6	焼文	壺	-	-	-			北本	A-54
7	灰輪陶器	甗	-	7.8	(4.7)	ロクロナデ 黒釉	ロクロナデ 黒釉 底面凹転系切り(方向不明)→付高台	凹転実測	セ-115
8	灰輪陶器	甗	-	7.2	(3.5)	ロクロナデ 黒釉	ロクロナデ 黒釉切り履し→付高台 黒釉	凹転実測	セ-115
9	土師器	甗	-	-	-	ミガキ→黒色処理		破片実測 墨道(用)	Z
10	土師器	甗	-	-	-	ミガキ→黒色処理		破片実測 墨道有り	テ-108
11	土師器	甗	-	-	-	ミガキ→黒色処理		破片実測 墨道(字体不明)	B-53
12	土師器	甗	-	-	-	ミガキ→黒色処理		破片実測 墨道(字体不明)	テ-108
13	土師器	甗	-	5.8	(0.9)	ミガキ→黒色処理	底面右凹転系切り	完全実測 二次利用? 塚院	テ-105
14	土師器	甗	-	8.1	(2.4)	ミガキ→黒色処理	底面左凹転系切り→付高台	完全実測	テ-102
15	土師器	甗	12.8	-	(3.8)	ミガキ	ロクロナデ	凹転実測	子-114
16	土師器	甗	15.4	6.1	6.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	凹転実測	テ-108
17	土師器	甗	14.2	6.4	4.1	ミガキ→黒色処理	底面凹転系切り(方向不明)→付高台	凹転実測	テ-108
18	須恵器	高台杯	12.4	7.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	凹転実測	テ-108
19	須恵器	杯	13.7	6.8	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右凹転系切り	完全実測	テ-113
20	須恵器	杯	14.3	5.8	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底面右凹転系切り	完全実測	テ-108
21	灰輪陶器	長頸壺	9.0	-	(2.0)	黒釉	ロクロナデ 口縁に3本の浅線跡を施す→黒釉	凹転実測	テ-108
22	灰輪陶器	壺	-	17.8	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ 裾部ナデ→付高台	凹転実測	子-113
23	須恵器	四耳壺	-	-	(6.9)	ロクロナデ	ロクロナデ タタキ→コゴナデ→ 裾部貼付→耳貼付 自然釉付着	凹転実測	テ-108
24	須恵器	壺	-	-	-	ナデ	口縁コゴナデ 裾部タタキ	北本	C-51
25	須恵器	壺	-	-	-	コゴナデ 自然釉付着	裾部底状文(2本1組) 自然釉付着	北本	子-113
26	須恵器	壺	-	8.8	(3.4)	ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ 自然釉付着 底面凹転系切り(方向不明)→付高台	凹転実測	C-50
27	須恵器	壺	-	14.0	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ 付高台 自然釉付着 深溝(?)付着	凹転実測	B-52
28	須恵器	壺	-	-	-	当兵處→ナデ	タタキ→ナデ	北本 二次利用か?	子-105
29	須恵器	壺	-	-	-	ヘラケナデ	ヘラケナデ	北本	B-50
30	土師器	高杯	-	-	(8.2)	ナツ(籠ナデ)	ヘラケナデ	完全実測 産地	A-33
31	土師器	茶釜	20.2	-	(7.7)	ロクロナデ→ハケナデ	ロクロナデ 頸貼付	凹転実測 墨道有り	シ-86
32	土師器	壺	30.0	-	(9.9)	ヘラケナデ	ヘラケナデ	凹転実測	テ-108
33	青磁	甗	14.2	-	(3.0)	ロクロナデ 黒釉	ロクロナデ 黒釉 蓮弁文	凹転実測 蓮葉	シ-101
34	青磁	甗	-	-	(1.4)	ロクロナデ 黒釉	ロクロナデ 黒釉	凹転実測 蓮葉	Z
35	陶器	丸甗?	-	-	(1.5)	ロクロナデ 黒釉	ロクロナデ 黒釉	破片実測 古瓶戸 大塚2期 器底 16C中	A-34
36	陶器	染付甗	-	-	(2.8)			破片実測 伊万里 4期後半~6期 18C後半	A-54
37	陶器	染付甗	-	-	(2.2)			破片実測 伊万里 4期後半~5期 18C後半	A-34
38	陶器	灰輪丸甗?	-	-	(1.0)	ロクロナデ 黒釉	ロクロナデ 黒釉	破片実測 産地 岩野	ヒ-94
39	土師器	かわらけ	7.2	5.2	1.9	ミガキ→黒色処理	底面系切り→ナデ	凹転実測 平安	シ-80
40	陶器	こじまびね	-	-	(2.5)	ロクロナデ 黒釉	ロクロナデ 黒釉	破片実測 瀬戸・美濃 18C後半戸	子-105
41	器種	素材	現行産	最大長	最大厚	重量	所見		出土位置
41	磨石	輝石安山岩		6.8	6.5	2.5	162.00	正面に磨り面	A-52
42	打製石片	砂岩		(11.7)	6.3	(1.8)	(156.00)	基部と方面の 破が欠損	A-54
43	打製石片	砂岩		(9.8)	5.9	1.4	(81.53)	下部欠損	A-53
44	打製石片	砂質砂岩		(4.2)	(3.8)	(1.3)	(30.28)	下部欠損	A-54
45	刀子	鉄		(4.0)	(1.3)	(0.6)		下部欠損	A-35
46	不明	鉄		(2.7)	(2.0)	(0.2)			子-114

第133表 遺構外出土遺物観察表



磯田遺跡Ⅱ航空写真（上が南）



儘田遺跡Ⅱ調査A区



儘田遺跡Ⅱ調査B区



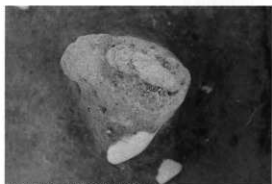
儘田遺跡Ⅱ調査C区



H1号住居址全景



H1号住居址掘り方全景



H1号住居址遺物出土状況



H2号住居址全景



H2号住居址掘り方全景



H3号住居址全景



H5号住居址全景



H5号住居址掘り方全景



H7号住居址全景



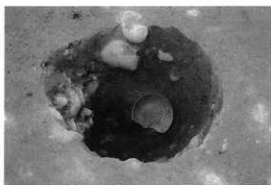
H7号住居址掘り方全景



H6号住居址全景



H6号住居址掘り方全景



H6号住居址遺物出土状況



H6号住居址カマド全景



H6号住居址カマド掘り方全景



H8号住居址全景



H8号住居址掘り方全景



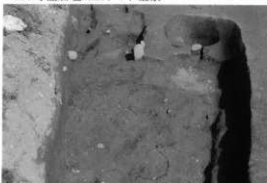
H9号住居址No.1カマド全景



H9号住居址No.2カマド全景



H9号住居址カマド掘り方



H9号住居址床検出状況



H9号住居址全景



H9号住居址掘り方全景



H11号住居址全景



H11号住居址掘り方全景



H11号住居址遺物出土状況



H10号住居址全景



H12号住居址全景



H12号住居址掘り方全景



H12号住居址遺物出土状況



H12号住居址カマド全景



H12号住居址カマド掘り方全景



H13号住居址全景



H13号住居址掘り方全景



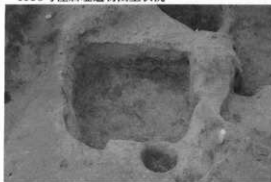
H13号住居址遺物出土状況



H13号住居址遺物出土状況



H13号住居址遺物出土状況



H13号住居址内土坑



H13号住居址壁ビット検出状況



H14号住居址全景



H14号住居址掘り方全景



H14号住居址遺物出土状況



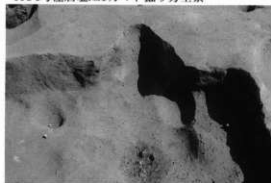
H14号住居址№1カマド全景



H14号住居址№1カマド掘り方全景



H14号住居址№2カマド全景



H14号住居址№2カマド掘り方全景



H15号住居址全景



H15号住居址掘り方全景



H16号住居址全景



H16号住居址カマド全景



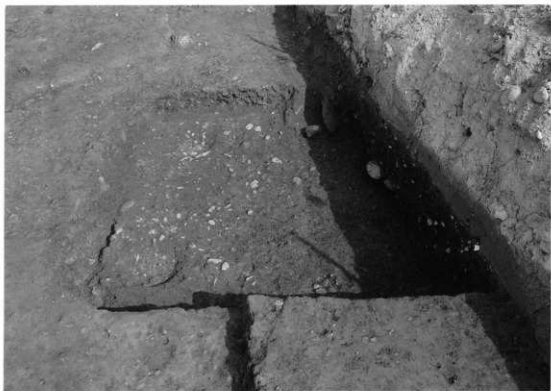
H16号住居址カマド掘り方全景



H16号住居址掘り方全景



備田遺跡Ⅱ調査風景



H17号住居址全景



H17号住居址覆土堆積状況



H17号住居址掘り方全景



H17号住居址カマド全景



H17号住居址カマド全景



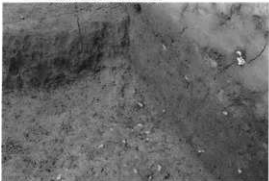
H20号住居址全景



H20号住居址覆土堆積状況



H20号住居址掘り方全景



H20号住居址カマド全景



H20号住居址遺物出土状況



H18号住居址全景



H18号住居址掘り方全景



H18号住居址カマド全景



H18号住居址焼上検出状況



H19号住居址カマド全景



H19号住居址全景



H19号住居址掘り方全景



F1号掘立柱建物址全景



F3号掘立柱建物址全景



F4号掘立柱建物址全景



F6号掘立柱建物址全景



F7号掘立柱建物址全景



F8号掘立柱建物址全景



徳田遺跡Ⅱより野沢中学校方面を望む



D1号土坑



D2号土坑



D4号土坑



D5号土坑



D6号土坑



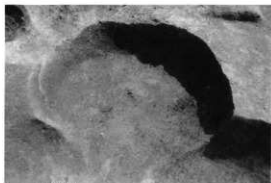
D6号土坑遺物出土状況



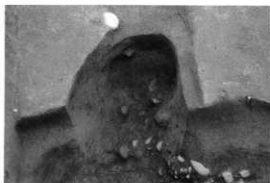
D8号土坑



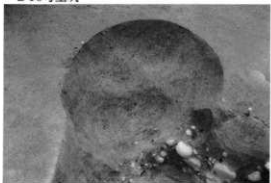
D9号土坑



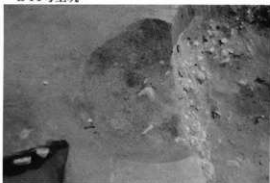
D10号土坑



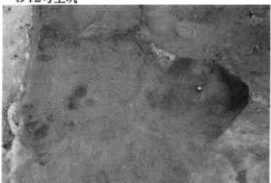
D11号土坑



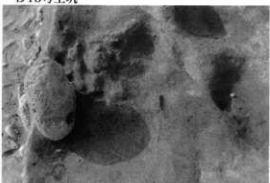
D12号土坑



D13号土坑



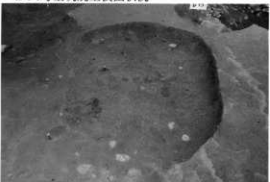
D14号土坑



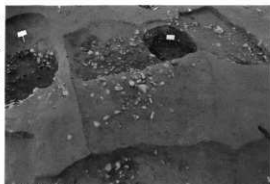
D14号土坑填土檢出狀況



D15号土坑



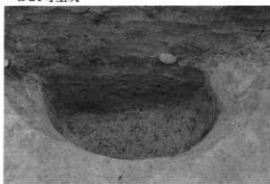
D17号土坑



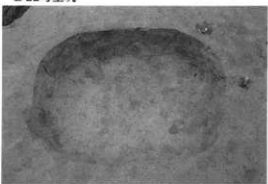
D21号土坑



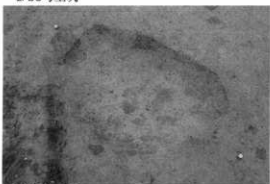
D22号土坑



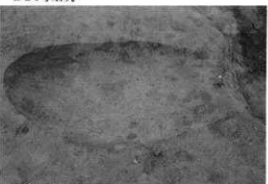
D23号土坑



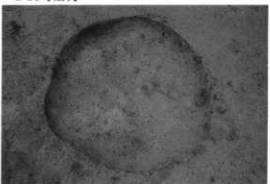
D24号土坑



D25号土坑



D26号土坑



D28号土坑



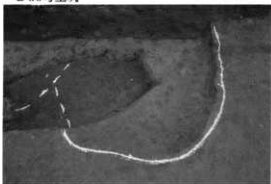
D29号土坑



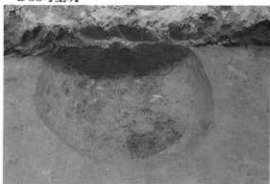
D30号土坑



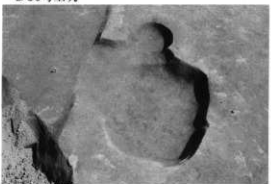
D33号土坑



D36号土坑



D39号土坑



D42号土坑



D44号土坑



D45号土坑



D46号土坑



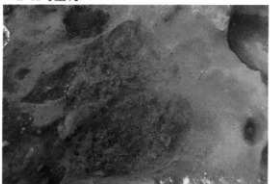
D47号土坑



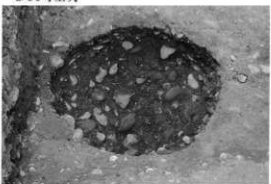
D48号土坑



D50号土坑



D51号土坑



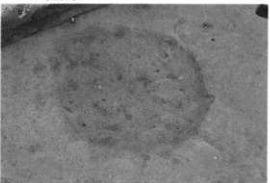
D52号土坑



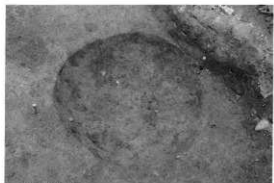
D53号土坑



D54号土坑



D55号土坑



D56号土坑



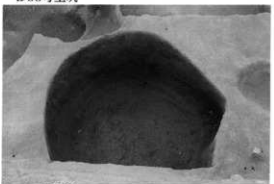
D57号土坑



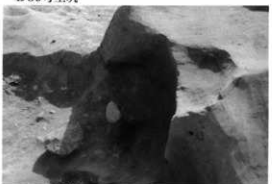
D58号土坑



D59号土坑



D60号土坑



D61号土坑



D62号土坑



D63号土坑



M1号溝状遺構



M4号溝状遺構



M6号溝状遺構



M5号溝状遺構



M5号溝状遺構遺物出土状況



M7号溝状遺構



M8号溝状遺構



T1号特殊遺構



T1号特殊遺構焼土検出状況



T1号特殊遺構

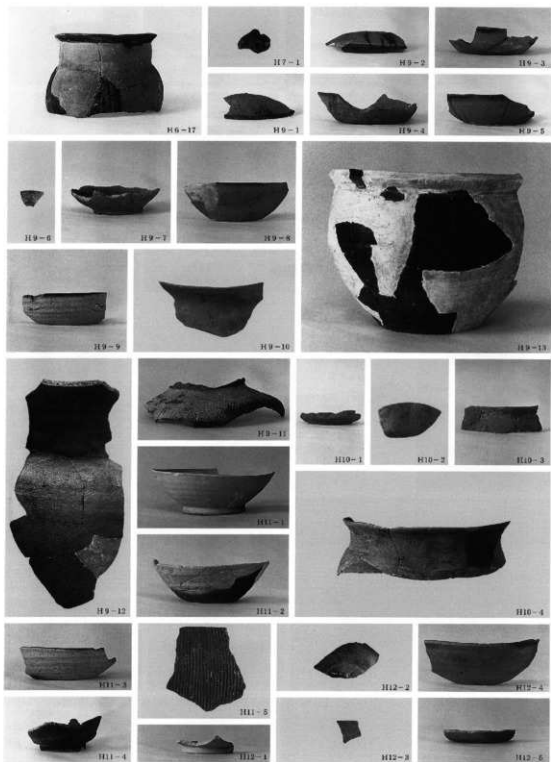


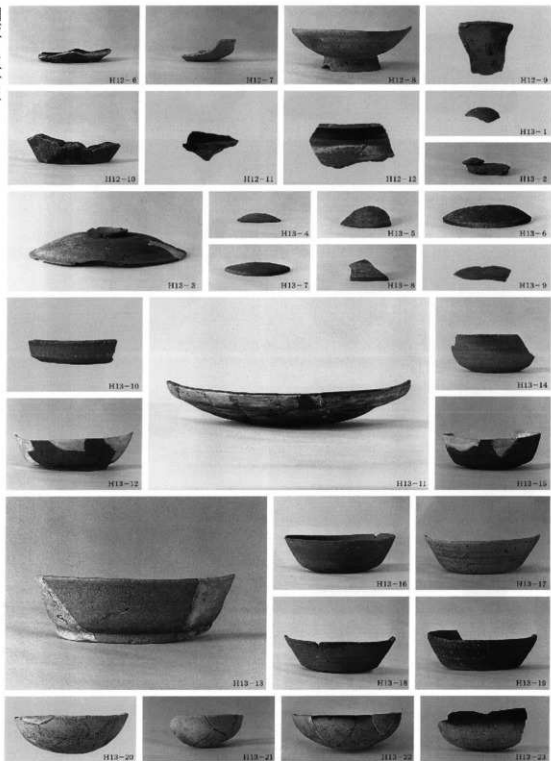
埴田遺跡Ⅱ調査状況

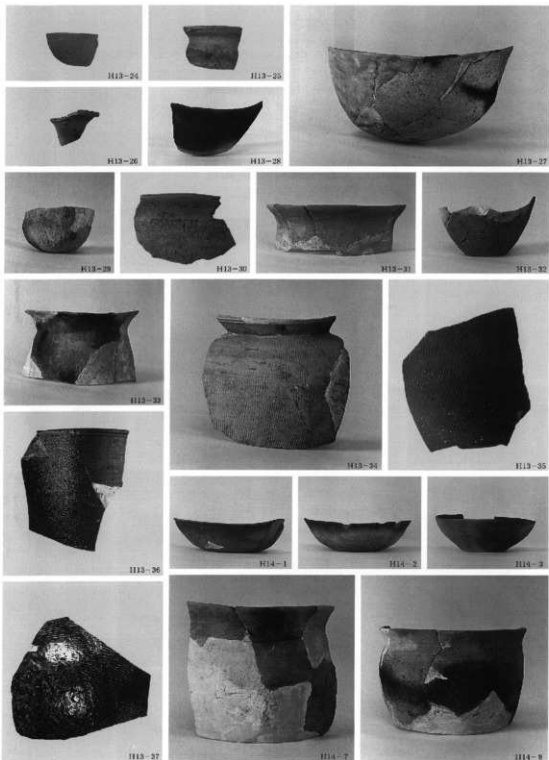


H13号住居址壁柱穴検出状況













H17-6



H20-4



H20-3



H20-5



F1-1



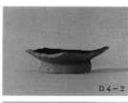
F4-4



F4-5



D4-1



D4-2



D5-3



D5-4



H11-6



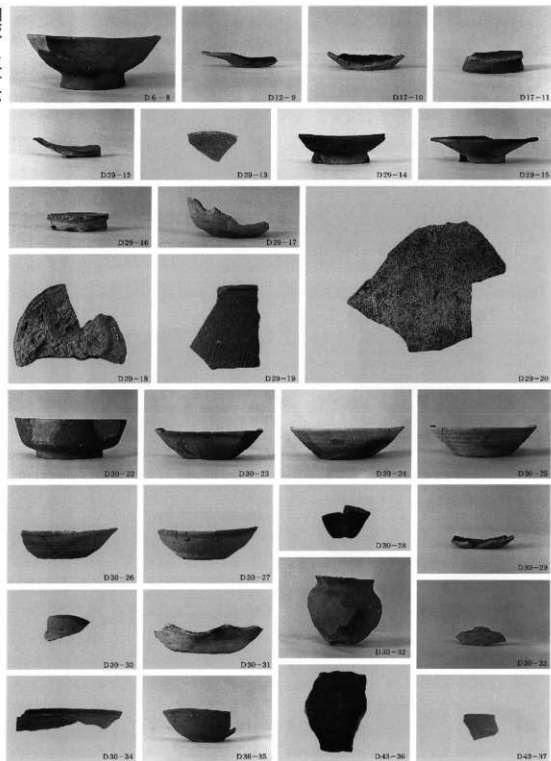
H12-7

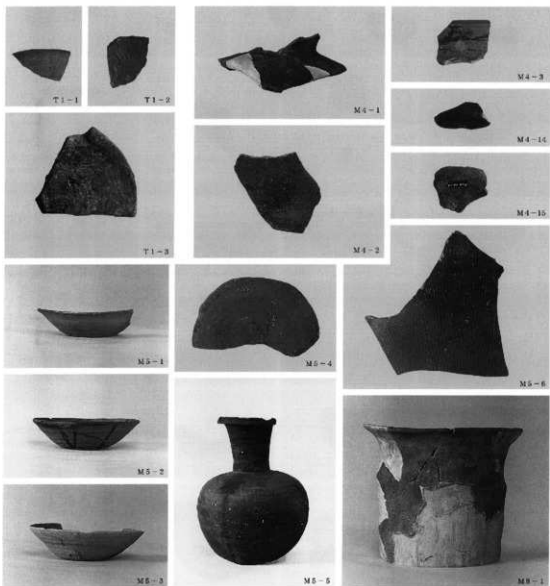
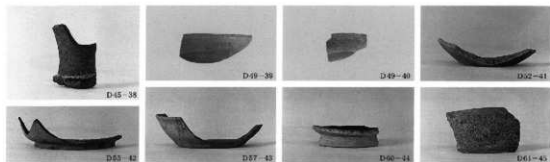


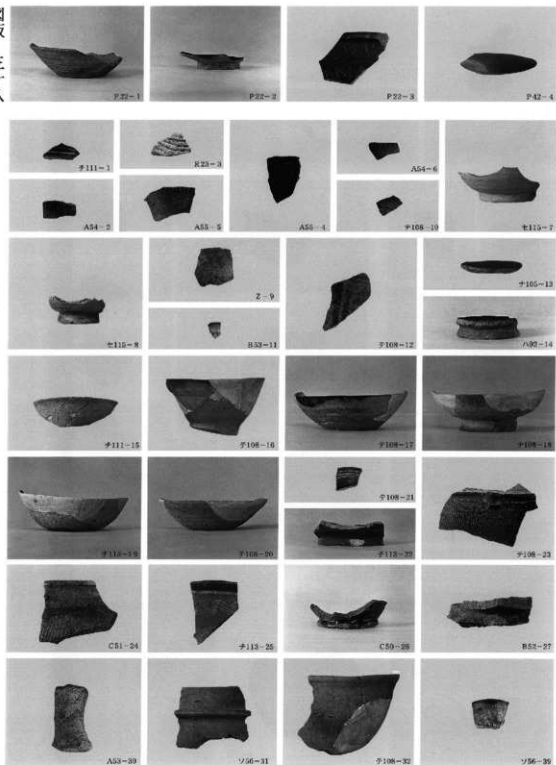
D5-5

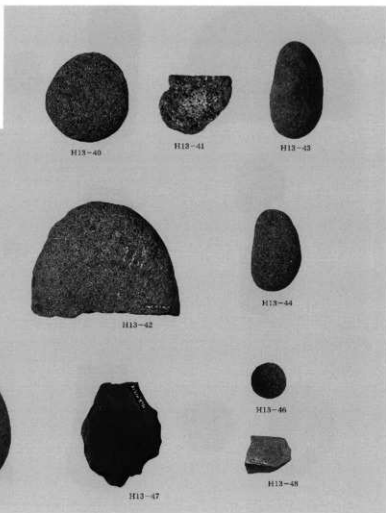
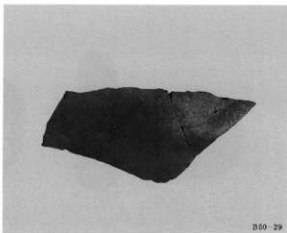
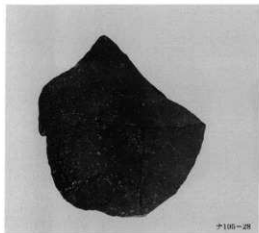


D6-7











H16-19



H15-20



H9-16



H12-13



H14-11



H11-5



H14-12



H16-7



H16-8



H16-9



H17-7



F3-2



F3-3



H20-6



D20-21



P98-5



A52-41



A54-42



A54-43



A54-44



H1-6



H1-7



H6-23



H6-22



H6-21



H9-15



H9-14



H12-14



H14-12



M4-16



H19-5



H13-49



H14-14



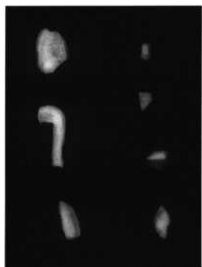
A55-45



M4-17



9114-46



H 6 No.21 丸納



H 9 No.15 鞘金具



H 9 No.14 鉄斧



H 9 No.5 鉄斧

西裏遺跡

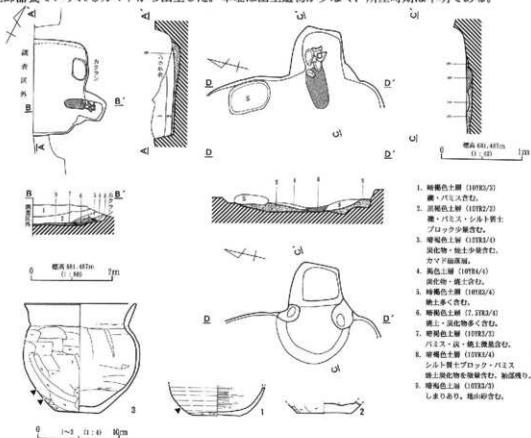
第VI章 西裏遺跡

第1節 竪穴住居址

(1) 1号住居址 (第227図, 写真図版一・二)

本住居址は、調査地点A区であるq-162.163Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.26m(検出)・南壁0.86m(検出)・東壁2.02mで、壁高さは南壁で最大25cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は2.66㎡を測る。床は全体に軟質で貼床が2~18cmの厚さで貼られていた。カマドは東壁南よりに造られており、燃焼部が住居址壁より飛び出すタイプである。煙道部長さは60cmを測る。火床部は楕円形で良く焼けており、焼土の厚みは7cmを測る。

出土遺物は覆土とカマドから出土した。1は土師器坏であり、内面ミガキが施されている。2と3は土師器甕でいずれもカマドから出土した。本址は出土遺物が少なく、所産時期は不明である。



第227図 H1号住居址及び出土遺物実測図

1. 暗褐色土師 (109B/3)
甕・パミス含む。
2. 赤褐色土師 (109B/2)
甕・パミス・シルト質土
ブロック少量含む。
3. 暗褐色土師 (109B/4)
炭化物・焼土少量含む。
カマド附属部。
4. 褐色土師 (109B/4)
炭化物・焼土含む。
5. 暗褐色土師 (109B/4)
焼土多く含む。
6. 暗褐色土師 (7. 109B/4)
焼土・炭化物多く含む。
7. 暗褐色土師 (109B/2)
パミス・炭・焼土微量含む。
8. 暗褐色土師 (109B/4)
シルト質土ブロック・パミス
土質炭化物を微量含む。断面残存。
9. 暗褐色土師 (109B/3)
しまりあり。地山砂含む。

No.	種別	器種	位置	形状・測量・尺標		備考	出土位置	
				内面	外面			
1	土師器	坏	-	5.9 (3.6)	ミガキ	口縁コナデー底部非回転部切り 底面外周子持ちヘラケズリ	完全実測	1区
2	土師器	甕	-	6.7 (1.5)	ナデ	胴部ヘラケズリ 底面ヘラケズリ	完全実測	カマド
3	土師器	小型甕	13.6	5.5 13.3	口縁コナデ・胴部から底面ヘラナデ	口縁コナデー胴部ヘラケズリ 底面ヘラケズリ	完全実測 断面	カマド

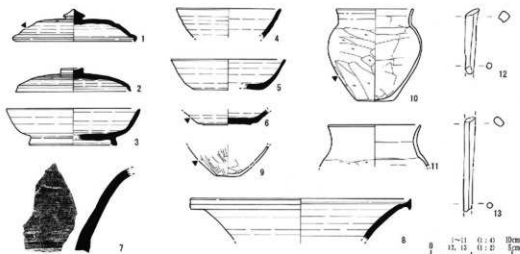
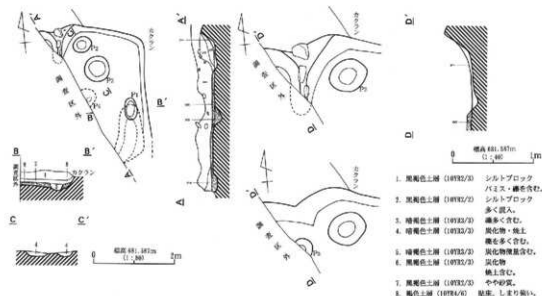
第134表 H1号住居址出土遺物観察表

(2) 2号住居址 (第228図, 写真図版二・三)

本住居址は、調査地点A区である r-159.160、s-159.160Grに位置する。残存状態は住居址西側が調査区域外となる。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁2.55m (検出)・東壁2.98mで、壁高さは北壁で最大28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.26㎡を測る。覆土は単層でおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に2~12cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認され、規模はP1が径53cm・深さ17cm、P2が径46cm・深さ11cm、P3が径62cm・深さ11cm、P4が径47cm・深さ21cm、P5が径26cm・深さ9cmを測る。

カマドは北壁に造られており、右袖のみ検出された。袖は暗褐色土により構築されており、高さは25cm残存していた。



第228図 H2号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は覆土中から比較的多く出土した。1と2は須恵器蓋であり、つまみ部が1は宝珠、2はリング状を呈する。3は須恵器高台付の付きである。4～6は須恵器坏であり、5と6は底部回転糸切り離してある。7と8は須恵器甕でありいずれも口縁部である。9～11は土師器甕である。12と13は鉄製品で釘と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			口径	底径	高さ	内面	外面		
1	須恵器	蓋	15.2	つまみ 3.7	3.9	ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ・底部回転輪ヘラケズリ・ つまみ部付 火傷	完全実測	I・II区
2	須恵器	蓋	14.2	つまみ 2.3	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ・大舟部回転輪ヘラケズリ・ つまみ部付	完全実測	
3	須恵器	高台付	10.4	10.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ・底面回転糸切り(方向不明)・ 回転輪ヘラケズリ・付高台	回転実測	I区ホリ方
4	須恵器	坏	12.8	-	(3.6)	ロクロナデ 火傷	ロクロナデ 火傷	回転実測	I区
5	須恵器	坏	14.1	8.2	3.7	ロクロナデ 火傷	ロクロナデ 底面糸切り	回転実測	I区
6	須恵器	坏	-	5.6	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ・底面右回転糸切り	完全実測	
7	須恵器	甕	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	断面	
8	須恵器	甕	27.2	-	(5.1)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然釉付着	回転実測	P2
9	土師器	甕	-	3.2	(3.7)	ヘラナデ	製法ヘラケズリ・一線とゴキ・ 底面ヘラケズリ	完全実測	
10	土師器	小甕	9.6	4.8	11.3	口縁コナデ・胴部から底面ヘラナデ	口縁コナデ 底面ヘラケズリ・ 胴部ヘラケズリ	完全実測	
11	土師器	小甕	11.4	-	(5.1)	口縁コナデ・胴部ヘラナデ	口縁コナデ・胴部ヘラケズリ	回転実測 断面	I区
No.	器種	素材	残存率	最大径	最大径	最大厚	重量	測定	出土位置
12	角釘	鉄		(4.0)	0.6				
13	角釘	鉄		(5.8)	0.4				I区

第135表 H2号住居址出土遺物観察表

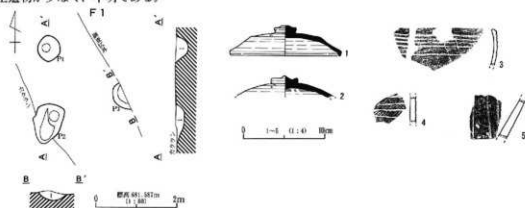
第2節 掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址 (第229図, 写真図版3)

本址は、調査地点A区であるq-160.161、r-160.161Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。規模は桁行1.80m (P2～P3)・梁行1.70m (P1～P2)を測る。

ピットの形態は円形もしくは楕円形である。ピットの規模はP1が径63cm・深さ33cm、P2が径98cm・深さ40cm、P3が径70cm・深さ22cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものは無い。

本址からの出土遺物は、図示した1と2の須恵器蓋と3～5の縄文土器がある。本址の所産時期は出土遺物が少なく、不明である。



1. 黄褐色土層 (0.073/0) バミス・シルト質ブロック含む。

第229図 F1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

No.	種別	層相	法 量		成 形・調 整・文 様		備 考	出土位置
			口内径	口外径	内 面	外 面		
1	須磨器	遺	13.5 つまみ 2.6	3.7	口クロナデ 火焼	口クロナデ→天洋彦田坂ヘラクズリ →つまみ取付 火焼	完全実型	
2	須磨器	遺	— つまみ 2.6	(2.6)	口クロナデ	口クロナデ→天洋彦田坂ヘラクズリ →つまみ取付	完全実型	P2
3	焼文	跡?	—	—			拓本	
4	焼文	跡?	—	—			拓本	
5	焼文	跡	—	—			拓本	

第136表 F1号掘立柱建物出土遺物観察表

第3節 土 坑

(1) D1号土坑 (第230図, 写真図版四)

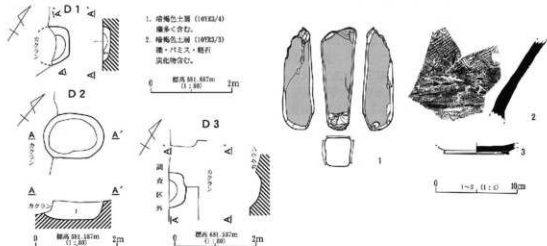
本址は、調査地点A区のp-164Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。規模は長軸0.96m(残存)・短軸0.34m(残存)・深さ24cmを測る。本址より出土遺物は無かった。

(2) D2号土坑 (第230図, 写真図版四)

本址は、調査地点A区のq-162Grに位置する。残存状態は西側をカクランによって削平されている。形態は楕円形である。規模は長軸1.48m・短軸1.10m・深さ50cmを測る。本址からの出土遺物は図示した砥石があった。

(3) D3号土坑 (第230図)

本址は、調査地点A区のr-160.161Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。規模は長軸0.86m(残存)・短軸0.43m(検出)・深さ38cmを測る。本址より出土遺物は無かった。



1. 暗褐色土層 (D1E2/D) 小塵を含む。

第230図 土坑及び遺構外出土遺物実測図

No.	種別	層相	法 量		成 形・調 整・文 様		備 考	出土位置	
			口内径	口外径	内 面	外 面			
2	須磨器	遺	—	—	口クロナデ	口クロナデ→タキメ→底状文	拓本	Z	
3	須磨器	高台坪	—	8.0	(1.3)	口クロナデ	口クロナデ→底層田坂ヘラクズリ→高台 回転光輝		Z
3c	部 類	素材	残存跡	焼文跡	焼文跡	焼文跡	部 類		出土位置
1	砥石	鎌行鉄山形	12.6	4.3	3.5				D2

第137表 土坑及び遺構外出土遺物観察表



西裏遺跡遺構検出状況



西裏遺跡全景



H1号住居址覆土堆積状況



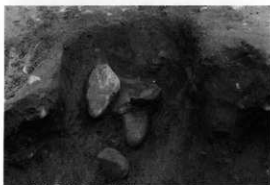
西裏遺跡調査風景



H1号住居址全景



H1号住居址掘り方全景



H1号住居址カマド全景



H2号住居址カマド全景



H2号住居址カマド掘り方全景



H2号住居址全景



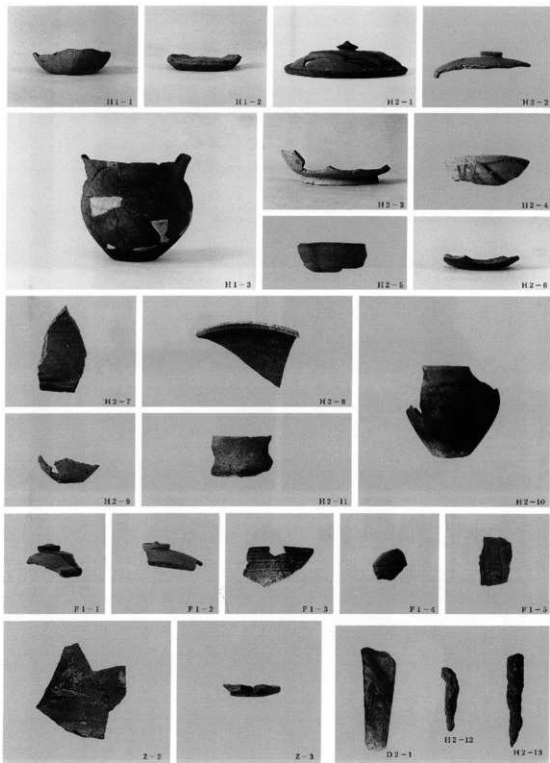
F1号掘立柱建物址全景



D1号土坑



D2号土坑





4車線化工事が完了した国道141号（南佐久郡方面を望む）



整理作業風景

化学分析

第Ⅶ章 化学分析及び調査成果

土器内面付着物の材質分析

藤根 久 (バレオ・ラボ)

1. はじめに

市道遺跡Ⅲの調査では、内面に付着物が付着した土器が出上した。ここでは、これら付着物の材質を検討するために顕微鏡型赤外分光分析 (FT-IR分析) および蛍光X線分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、古墳時代の住居跡 (H54、第86図-5) から出土した土器内面付着物である。

付着物は、光沢のある暗褐色 (10YR 3/3) の厚さ約400 μ m前後の付着物である。

分析は、この付着物を同定するために顕微鏡型の赤外分光分析を行った。また、この付着物の無機成分を調べるために蛍光X線分析を行った。各分析の試料採取と分析方法は以下の通りである。

赤外分光分析の測定試料は、付着物表面において手術用メスなどを用いて0.2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微鏡赤外分光光度計 (日本分光製FT/IR-410、IRT-30-16) を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

蛍光X線分析は、各付着物の典型的な部分について直接X線を照射して点分析した。測定は、X線分析顕微鏡 (堀場製作所製XGT-5000Type II) を用いた。測定条件は、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。なお、定量計算は、標準試料を用いないFP法 (フアンダメンタルパラメータ法) で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

図1の上段に、生漆とともに、各試料の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は吸光度 (Abs)、横軸が波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー) である。なお、スペクトルは、ノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。表1には、生漆の吸収位置とその強度を示す。

測定の結果、生漆のピークとほぼ一致したことから、漆と同定される。なお、採取片は、多少厚さにバラツキが見られることから、縮みしわなどは見られないものの漆容器であった可能性が考えられる。

表1 生漆の位置とその強度

吸収No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
位置 (cm ⁻¹)	2925	2854	1711	1631	1452	1354	1271	1219	1084	984
強度	0.5446	0.4411	0.3764	0.3115	0.3256	0.2942	0.3341	0.3230	0.2686	0.2203

なお、付着物の蛍光X線分析による無機成分を表2に示すように、鉄Feを4%程度しか含まないことから、ベンガラなどの赤色顔料などは含まれていない (図1の下段)。

表2 土器内面付着物の化学組成 (FP法による半定量分析結果)

測定試料	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	Total
土器内面の付着物(H54,Na13)	21.36	38.45	5.43	1.39	27.84	1.22	4.31	100.00

4. おわりに

古墳時代の住居跡 (II54、第86図-5) から出土した土器内面付着物について、顕微鏡赤外分光分析 (FT-IR分析) および蛍光X線分析を行い、材質分析を検討した。その結果、漆と同定され、容器として利用された土器と予想された。なお、鉄含有量が低いことから、ベンガラとしての赤色顔料は混和されていないことが分かった。

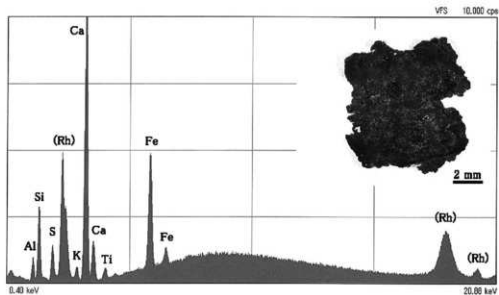
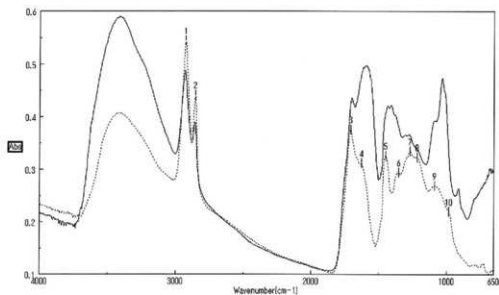


図1 赤外吸収スペクトル図（上段）および蛍光X線スペクトル図（下段）
 上段：縦軸が吸光度（Abs）、横軸が波数（Wavenumber (cm-1)）：カイザー
 下段：縦軸が強度（cps）、横軸がエネルギー（KeV）

市道遺跡Ⅲから出土した炭化種実

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. 試料と方法

炭化種実の検討は、抽出済みで袋に乾燥保存された合計3試料について行った。試料が出土した遺構名/区・層は、H8/床面(Na.7)、H55/V区、H51/Ⅲ区である。

2. 出土した炭化種実および形態記載

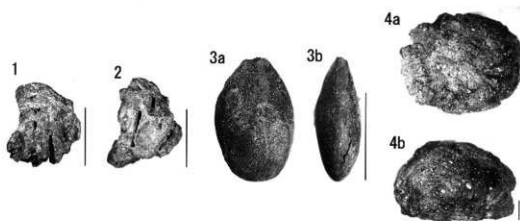
H8/床面(Na.7)：不明炭化物が1個である。上面観は長径6.1mm、短径5.1mm程度の楕円形。側面観は概ね半円形。内部は炭化物のようであるが、表面には砂礫などが付着しており、状態は悪い。種実の可能性を否定はできないが、その判別は困難である。

H55/V区：カキノキ?炭化種子が1個である。カキノキは、炭化状態が良いと光沢があり、カキノキ独特の指紋状の紋様が認められる。試料は、表面の状態が悪く、そのような特徴は見られない。長さ14.1mm、幅9.2mm程度の扁平な楕円形であり、大きさ・外形からカキノキの可能性が考えられた。

H51/Ⅲ区：モモ炭化核の破片が2片であるが、完形1個分に満たない(1/2個分位か)。表面に不規則な溝状の穴が認められる。

3. 考察

同定されたのは、H51/Ⅲ区から出土したモモのみであった。モモは栽培植物であり、明らかな利用植物と考えられる。H55/V区から出土した種実は、カキノキ炭化種子の可能性が考えられたが、カキノキであるとするれば栽培植物である。H8/床面(Na.7)から出土した炭化物は、種実か否か判別し兼ねた。



図版1 出土した炭化種実 (スケールは1,2が1cm, 3が1mm)

1.2.モモ、炭化核、H51/Ⅲ区

3.カキノキ?、炭化種子、H55/V区

4.不明、炭化物、H8/床面(Na.7)

市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体同定

黒澤 一男 (バレオ・ラボ)

1.対象試料および方法

長野県佐久市にある市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体について同定をおこなった。同定は現生標本との比較によりおこなった。

2.同定結果および考察

市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体について同定した結果を以下に述べる。なお詳しい出土内容および歯の計測値については、表1・2に示す。

表1 市道遺跡Ⅲ検出動物遺体

遺標	出土位置	種名	部位	状態	備考
H19	カマド	大型陸獣	四肢骨?	破片	
H27	カマド	大型陸獣	四肢骨?	破片	
H27	Ⅱ区	不明	不明	破片	
H37	カマド	大型陸獣	不明	骨幹部破片	
H43	Ⅳ区	不明	不明	破片	
H43		大型陸獣	四肢骨	破片	
H45	Ⅳ区	大型陸獣	肋骨?	破片	
H54	カマド	不明	不明	破片	
H57	Ⅱ区	大型陸獣	不明	骨幹部破片	
H57	Ⅴ区	大型陸獣	不明	骨幹部破片	
Ta25	Ⅳ区	不明	不明	破片	
D25		ウマ	遊離歯		左上顎第1切歯～第3切歯, 第2前臼歯～第3後臼歯 右上顎第1切歯～第3切歯, 第2前臼歯～第3後臼歯 左下顎第1切歯～第3切歯, 第2前臼歯～第3後臼歯 右下顎第1切歯～第3切歯, 第2前臼歯～第3後臼歯

※「大型陸獣」としているものには、家畜(ウマ、ウシ)の可能性も考えられる。

[D25]

D25からはウマの遊離歯(No.631)が出土している。この遊離歯には一部、顎骨片が付着しており、その状態は風化し、脆弱になっている。そのような状態ではあるが、下顎上顎の切歯と臼歯すべてが検出されている。臼歯の全歯高(歯根中心部と咬合面中心部の直接距離;久保和士・松井章,1999)の計測をおこなった結果(表2)、およそ4~5才程度の若い成獣個体と推定される。また犬歯が検出されていないが、付着している骨の残存状況から考えると、犬歯が残らなかった可能性も考えられるので雌雄の判別は困難である。

表2 市道遺跡Ⅲ検出ウマの全歯高計測値

		第2前臼歯 P2	第3前臼歯 P3	第4前臼歯 P4	第1後臼歯 M1	第2後臼歯 M2	第3後臼歯 M3
上顎	左	49.2	計測不可	61.0	61.0	(70.3)	(64.8)
	右	49.9	70.4	63.2	63.0	70.5	(63.7)
下顎	左	41.7	(66.3)	(74.5)	(68.1)	(70.7)	(66.4)
	右	41.5	(66.5)	(73.2)	(66.9)	72.4	(64.5)

※()付きの計測値は、歯根部が破損しているため、周囲の形状より中心部を推定しての計測値である。

【そのほか】

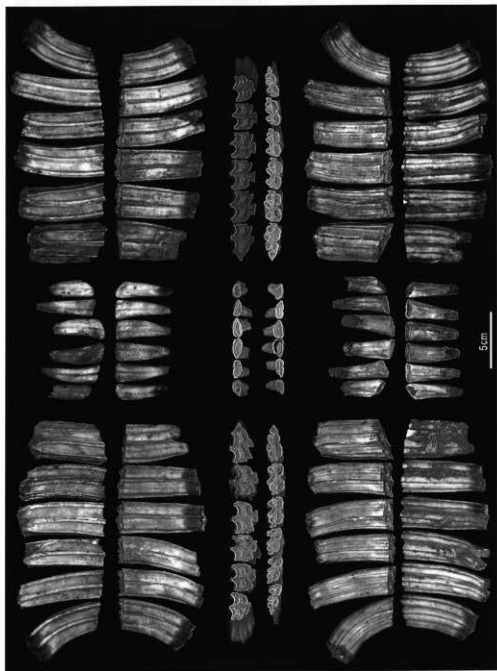
そのほか8遺構より11試料の骨片が検出されている。I19カマド、H27カマド、H37カマド、H57Ⅱ区とⅤ区より検出されている骨片は、骨幹の緻密質部分で、その厚さが厚いことからウシやウマの家畜も含めた大型陸獣のものと考えられる。いずれにおいても破片化しており、動物種や部位の同定にはいたらない。

3.まとめ

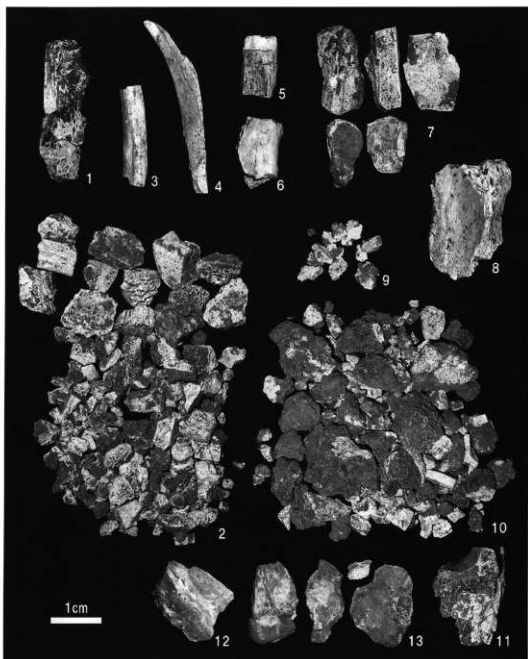
市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体を同定した結果、ウマが1個体いたことは明らかになった。またそれらは4～5才程度の成獣であった。そのほかのものは、残存状態が悪く、破片化していることから同定にはいたらず、詳細な検討は不可能である。

引用文献

久保和士・松井章(1999)第9章家畜(その2-ウマ・ウシ)、西木豊弘・松井章編「考古学と動物学」、169-208。



図版1 市道遺跡ⅢD25出土ウマ
 (上段：外側面，中段：咬合面，下段：内側面)



図版2 市道遺跡Ⅲ出土骨片

- | | | |
|------------|-------------|----------|
| 1-2J19 カマド | 3J57 Ⅱ区 | 4J37 カマド |
| 5J57 V区 | 6J45 Ⅳ区 | 7J43 Ⅳ区 |
| 8J54 カマド | 9・10J27 カマド | |
| 11J27 Ⅱ区 | 12.Ta25 Ⅳ区 | |

市道遺跡Ⅲから出土した炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

ここでは、古墳時代中期から平安時代後期の焼失竪穴住居跡4軒から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

当遺跡は、野沢平の沖積微高地に立地し、古墳時代中期から平安時代後期および中世の集落址が検出されている。このような立地環境の集落地では、古墳時代中期から平安時代後期にどのような建築材を利用していたのかを知る目的で、焼失竪穴住居跡の炭化材樹種調査が実施された。

2. 試料と方法

同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、横断面の特徴で分類群を特定できる試料はこの段階で同定を決定した。それ以外の試料は、材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、材組織を走査電子顕微鏡で拡大して観察を行ない同定した。

走査電子顕微鏡用の試料は、横断面は手で割り、接線断面と放射断面は各方向に沿って片刃の剃刀を当て軽く強くように割り、この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、佐久市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧を表1に示し、表2では住居跡ごとの検出樹種を集計した。

H19の4点からは、コナラ節(2点)とクヌギ節(2点)が検出された。

H27の15点は、コナラ節14点と微破片のためにコナラ節またはクリとした1点が検出された。樹種同定用試料は出土した炭化材の一部であるが、20年輪以上を含む破片が多かった。また試料16は、加工痕が見られ、試料17・18・21は柎甲板状の破片であった。

H51の13点はコナラ節10点、保存が悪く広葉樹としか判らなかつたものが1点、保存が悪く同定不可が1点、ススキ属の集積した試料が1点であった。

H47の4点は、すべてクヌギ節であった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版1 1a-1c(H47-7) 2a(H19-30)

年輪の始めに大型の管孔が主に1層配列し、その後は孔口が円形で厚壁の小型管孔が単独で放射状に配列し、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、チロースがある。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状のものがある。

クヌギ節は落葉広葉樹で、クヌギとアバマキが属する。いずれの種も暖帯～温帯の山野や人里に普通で、二次林にも多い。

(2)コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 3a(H27-16) 4a(H51-14)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、急または除々に径を減じ、晩材部では孔口が多角形で薄壁の小型管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。接線断面と放射断面は、前述のクヌギ節と同様である。

コナラ節は落葉広葉樹で暖帯～温帯の山地や人里に生育し、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

(3)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 5a(H19-29)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に分布する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。横断面の管孔配列はコナラ節と類似しているが、クリは広放射組織が出現しない。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

(4)コナラ属 *Quercus*

やや小型の管孔と広放射組織があることが観察されたが、小破片で保存も悪いため、1年輪の管孔配列などは不明である。従って、広放射組織を持つコナラ節・クヌギ節・アカガシ亜属を含めるコナラ属の同定に留まった。

(5)コナラ節またはクリ *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* or *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

晩材部は小型管孔が火炎状に配列する環孔材で、放射組織は単列である。非常に小さな破片であるため、広放射組織の有無は確認できなかった。従って、広放射組織を含むコナラ節の可能性もあるので、クリまたはコナラ節の同定に留めた。

(6)広葉樹 *broad-leaved tree*

保存が悪いために、管孔が有ることしか確認できなかった試料である。

(7)ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版1 6a(H51-12)

直径約5mmの草本性の稈が、同一方向に多数集積した塊状のものであった。保存の良い一本の稈の横断面を観察した結果、個々の維管束が散在する不整中心柱で、稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた小さな維管束が1～2層並んでいる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ（茅）と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られるススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。

4. 考察

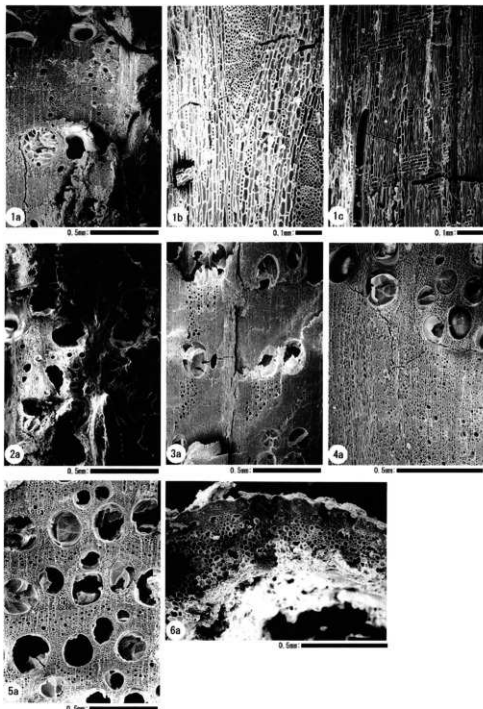
古墳時代中期～平安時代後期の焼失竪穴住居跡4軒から出土した炭化材の樹種は、コナラ節が多く、次にクヌギ節が多かった(表2)。コナラ節は3軒から共通して検出された。またH27のコナラ節は、放射方向の径(放射径)が3cmほどの破片に、年輪数が20～40年輪あるものが多く見られ、加工痕のある炭化材や、板状の破片もあることから、比較的樹齢が多い原木を加工して利用していたと想定される。コナラ節の樹種が豊富に生育しており、入手が容易であったのではないだろうか。

表1 市道遺跡Ⅲの竪穴住居跡(古墳中期～平安後期)出土炭化材樹種同定結果一覧

出土遺構	試料	樹種	備考(横断面形状・年輪数など)	
H19	29	コナラ節	笹目状の破片 ぬか目材 放射径2.6cmで36年輪あり	
	30	クスギ節	板目状の破片 放射径1.2cmで9年輪あり	
	31	クスギ節	分割材? 放射径3.0cmで15年輪あり	
	32	コナラ節	推定φ4cmの 芯持ち丸木破片	
H27	16	コナラ節	笹目状の破片 片端に加工痕?あり 放射径3.2cmで37年輪あり	
	17	コナラ節	笹目板状の破片 放射径3.1cmで34年輪あり	
	18	コナラ節	笹目板状の破片 放射径2.0cmで21年輪あり	
	19	コナラ節orクリ	微破片	
	20	コナラ属	小破片で保存悪い	
	21	コナラ節	笹目板状の破片 放射径1.3cmで17年輪あり	
	22	コナラ節	放射径0.8cmで9年輪あり	
	23	コナラ節	放射径1.9cmで17年輪あり	
	24	コナラ節	放射径3.5cmで26年輪あり	
	25	コナラ節	放射径2.0cmで23年輪あり	
	26	コナラ節	放射径1.4cmで19年輪あり	
	27	コナラ節	板目板状の破片 放射径0.7cmで10年輪あり	
	28	コナラ節	放射径3.5cmで22年輪あり	
29	コナラ節	放射径2.5cmで31年輪あり		
30	コナラ節	放射径3.4cmで40年輪あり		
H51	3	コナラ節	分枝部を含む破片 放射径3.5cmで12年輪あり	
	4	コナラ節	節部を含む芯持ち破片	
	5	コナラ節	放射径1.2cmで9年輪あり	
	6	コナラ節	板目状破片	
	7	コナラ節	放射径3.5cmで25年輪あり	
	8	コナラ節	放射径2.5cmで9年輪あり	
	9	コナラ節	放射径1.2cmで15年輪あり	
	10	コナラ節	φ4cm芯持ち丸木 13年輪あり	
	11	同定不可	保存悪いため	
	12	スキ属	φ0.5cmの稈(茎)が同一方向に多数集積。その下位に樹皮らしきものあり	
	13	コナラ節	薄破片	
	14	コナラ節	分割材? 放射径1.8cmで6年輪あり	
	15	広葉樹	保存悪いため	
	H47	5	クスギ節	放射3.0cmで10年輪あり
		6	クスギ節	放射径4.0cmで17年輪あり
7		クスギ節	放射径3.5cmで18年輪あり	
8		クスギ節	放射径3.0cmで15年輪あり	

表2 住居跡ごとの検出樹種集計

検出樹種	占墳中期～平安後期の住居跡				合計
	H19	H27	H51	H47	
クヌギ節	2			4	6
コナラ節	2	13	10		25
コナラ節orクリ		1			1
コナラ属		1			1
広葉樹			1		
ススキ属			1		1
同定不可			1		1
合計	4	15	13	4	36



図版1 市道遺跡Ⅲの竪穴住居跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真
 1a-1c:クヌギ節(H47-7) 2a:クヌギ節(H19-30) 3a:コナラ節(H27-16)
 4a:コナラ節(H51-14) 5a:クリ(H19-29) 6a:ススキ属(H51-12)
 a:横断面 b:接線断面 c:放射断面

市道遺跡Ⅲの放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
 小林 紘一・丹生 越子・伊藤 茂・山形 秀樹・
 Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・藤根 久

1. はじめに

長野県佐久市の市道遺跡Ⅲと辻遺跡より検出された土器付着物について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5697	市道遺跡Ⅲ 遺構：D41 遺物：第117図-24	試料の種類：土器付着物・内面（おこり） 状態：dry カビ：有	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N、水酸化ナトリウム 0.1N、塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH*
PLD-5698	辻遺跡 遺構：H12 遺物No：第131図-10	試料の種類：土器付着物・外面（煤着） 状態：dry カビ：有	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N、水酸化ナトリウム 0.1N、塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH1

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲

であり、同様に2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代校正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年代校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代範囲		暦年代校正用年代 (yrBP ± 1σ)
			1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
PLD 5697	-29.26 ± 0.15	1100 ± 20	895AD(26.4%)920AD 945AD(41.8%)985AD	890AD(95.4%)990AD	1099 ± 21
PLD-5698	-27.65 ± 0.16	1260 ± 20	690AD(59.5%)750AD 760AD(8.7%)775AD	670AD(93.1%)780AD 790AD(2.3%)810AD	1262 ± 22

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年代校正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

遺構D41から出土した土師器内黒杯の内面付着物(PLD-5697)は、古代の遺物であるが、暦年代校正の結果、1σ 暦年代範囲において945-985 cal AD(41.8%)、2σ 暦年代範囲において890-990 cal AD(95.4%)であり、2σ 暦年代範囲において9世紀末～10世紀末であった。

一方、辻遺跡の遺構H2から出土した土師器壺外面付着物(煤類:PLD-5698)は、古墳時代であるが、暦年代校正の結果、1σ 暦年代範囲において690-750 cal AD(59.5%)、2σ 暦年代範囲において670-780 cal AD(93.1%)であり、2σ 暦年代範囲において7世紀末～8世紀末であった。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

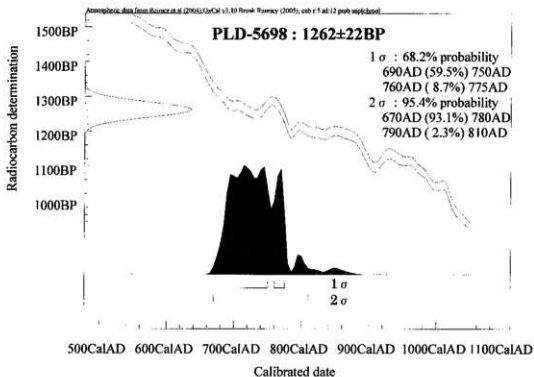
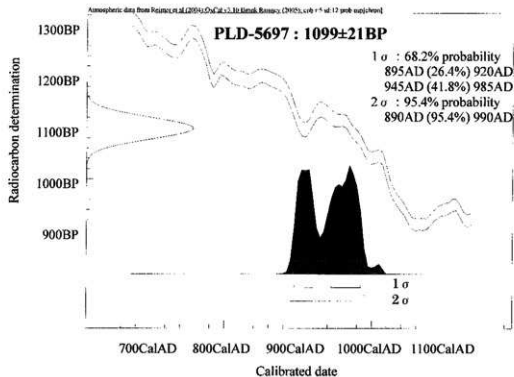
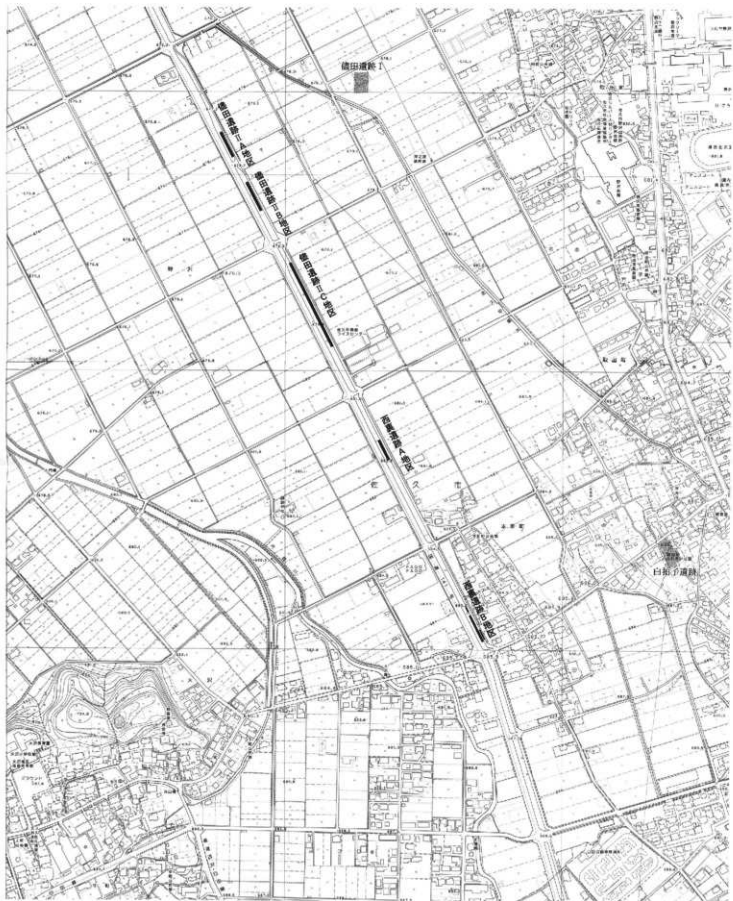
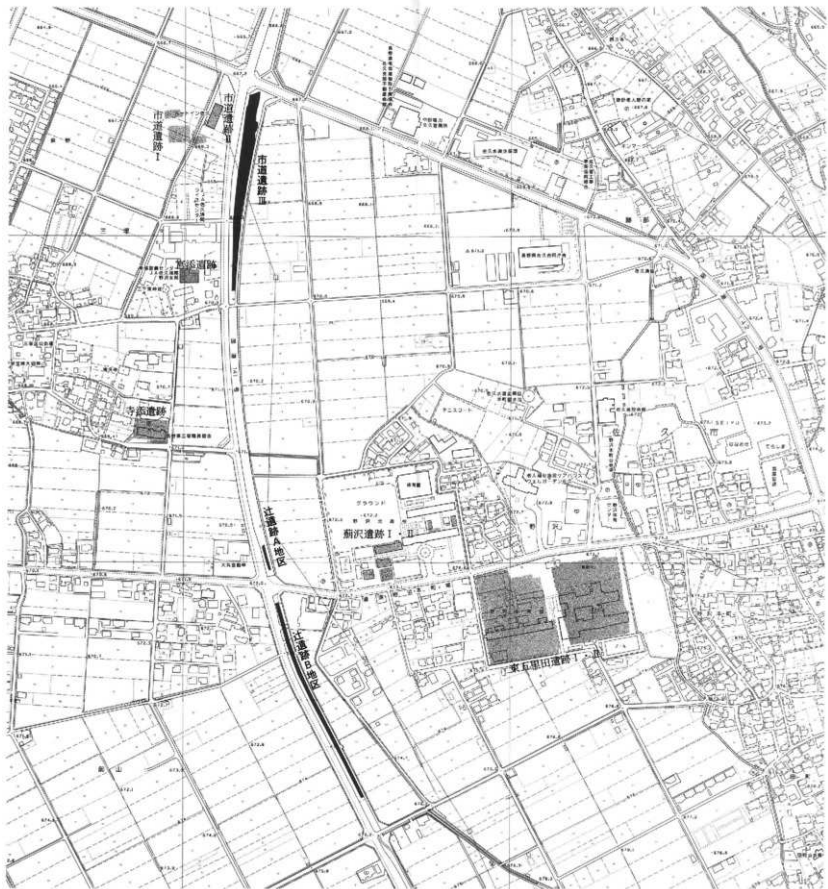


圖1 曆年校正結果

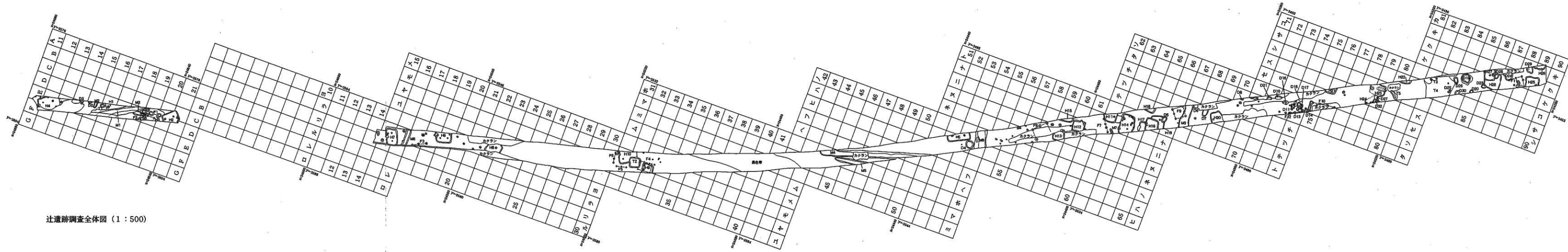


儲田遺跡Ⅱ・西裏遺跡調査位置図 (1:5,000)

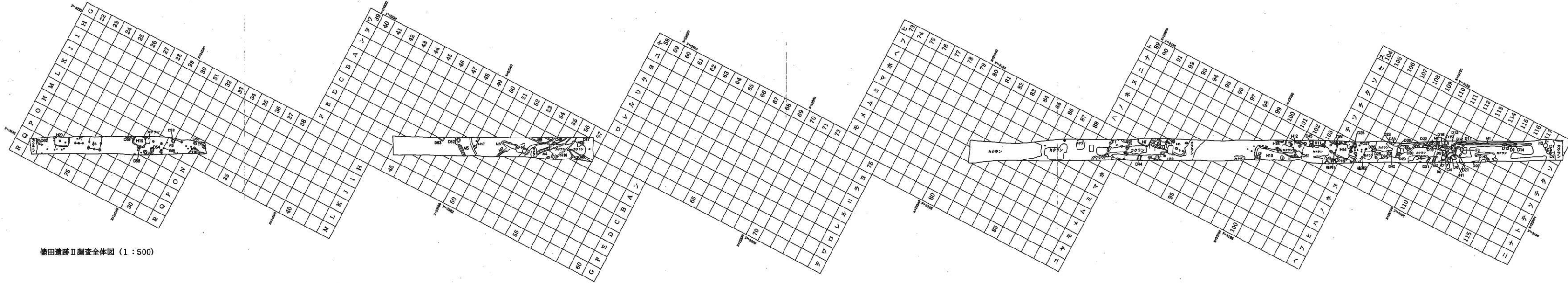


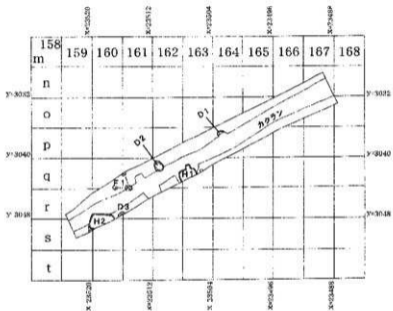
市道遺跡Ⅲ・社遺跡調査位置図 (1 : 5,000)

辻遺跡調査全体図 (1:500)



徳田遺跡Ⅱ調査全体図 (1:500)





西浦遺跡調査全体図 (1 : 500)

報告書抄録

書名	市道遺跡Ⅲ 辻遺跡 徳田遺跡Ⅱ 西裏遺跡
ふりがな	いちみちいせき つじいせき ままだいせき にしうらいせき
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第148集
編者名	宮沢一明
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2008. 3. 19
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	佐久市 ^{さく} 長野塚 ^{ながのりんぞく} 佐久市志賀5953
遺跡名	三千束遺跡群 市道遺跡Ⅲ (ⅠMⅢ) 中道遺跡群 辻遺跡 (NTJ) 徳田遺跡Ⅱ (MaⅡ) 西裏遺跡群 西裏遺跡 (HNU)
遺跡所在地	佐久市跡部・三塚・野沢・本新町
遺跡番号	417 412 424 491
経度	市道遺跡Ⅲ 138° 27' 34." 辻遺跡 138° 27' 37." 徳田遺跡Ⅱ 138° 27' 53."
緯度	市道遺跡Ⅲ 36° 13' 37." 辻遺跡 36° 13' 17." 徳田遺跡Ⅱ 36° 12' 50."
調査期間	2005.9.9～2006.12.1 (現場) 2006.12.2～2008.3.19 (整理)
調査面積	市道遺跡Ⅲ 5195㎡ 辻遺跡 2911㎡ 徳田遺跡Ⅱ 2319㎡ 西裏遺跡 656㎡
調査原因	国道141号改良工事
種別	集落址・散布地
主な時代	古墳時代～中世
遺跡概要	遺構 竪穴住居址・竪穴状遺構116軒(古墳～中世) 竪立柱建物址47棟 土坑137基 溝状遺構20本 特殊遺構6基 遺物 縄文土器(加賀川IV) 弥生土器(箱清水) 土師器 須恵器 石製品 鉄製品 石製模造品(白玉・剣・有孔) 灰釉陶器 緑釉陶器 円面硯 風字硯 青銅製品(靴釦・丸鞆) 青磁 白磁 古瀬戸 東濃系山崎 近世陶磁器類 馬骨
特記事項	本発掘調査は佐久市域の南側に広がる沖積低地「野沢平」において南北3kmに及ぶトレンチ調査を行ったような状況となり、今まで不明瞭であった沖積地の遺跡範囲についておぼろげながら状況が把握できた。結果4遺跡において古墳時代から中世に及ぶ集落が輸出され、佐久平では初めての川土となる「風字硯」等の特殊資料も出土した。

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第148集

市道遺跡Ⅲ 辻遺跡
儘田遺跡Ⅱ 西裏遺跡

2008年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハライントウ
